

高知空港拡張整備事業に伴う  
埋蔵文化財発掘調査報告書

田 村 遺 跡 群

第2分冊

1986

高知県教育委員会

# 田村遺跡群

第2分冊

本文II

## 例　　言

1. 本書は、高知空港拡張整備事業に伴う埋蔵文化財—田村遺跡群一の発掘調査報告書15分冊の内、第2分冊である。
2. 調査は、運輸省第三港湾建設局の委託を受け、高知県教育委員会が実施した。調査期間は、昭和54～58年度に発掘調査、昭和58～60年度に整理作業及び報告書作成を行い、7年間にわたった。
3. 遺跡の名称としては、調査対象地の大部分から各時代の遺構、遺物を検出しており、調査区も多いため、これを一括して田村遺跡群と呼ぶこととした。また、各調査区は Loc. 1～48と呼称した。
4. 本書の作成にあたっては、本文執筆、図版作成、写真撮影等の作業を各調査区を担当した調査員が行い、各時期、時代についても担当者を決め、これをまとめた。編集は高知県教育委員会である。
5. 発掘調査、整理作業及び報告書作成を通じて、顧問岡本健児教授（高知女子大学）には、御指導、御助言をいただいた。記して感謝する次第である。
6. 図中の方位はすべて磁北であり、標高は海拔高である。遺構図の縮尺は、竪穴住居址、掘立柱建物址、棚列を $\frac{1}{100}$ 、その他の遺構、断面図及びセクション図を $\frac{1}{50}$ とした。遺物実測図の縮尺は、原則として土器については、縦文・弥生時代を $\frac{1}{20}$ 、古墳時代以降を $\frac{1}{10}$ 、石器、金属器を $\frac{1}{5}$ 、木器を $\frac{1}{3}$ とした。写真図版は約 $\frac{1}{2}$ ～ $\frac{1}{3}$ であるが縮尺不同である。
7. 遺構の略号は、竪穴住居址—S T、掘立柱建物址—S B、土塀—S K、溝—S D、井戸—S E、棚列—S A、水溜り状遺構—S P、性格不明遺構—S X、ピット—P、自然流路—S Rとした。
8. 調査期間を通じて多くの方々、諸機関に御協力、御援助をいただいた。各々の名称はあげないが、記して感謝する次第である。
9. 出土遺物その他の資料については、高知県教育委員会が保管の任にあたっている。

## 本文目次

### 第V章 弥生時代（前期1）

1.	Loc.16 .....	1
2.	Loc.25 .....	159
3.	Loc.15 .....	253
4.	Loc.17 .....	279
5.	Loc.18 .....	357
6.	Loc.12 .....	383

## 挿図目次

1. Loc. 16		第32図 第VII層出土遺物
第1図 調査区設定図		第33図 "
第2図 調査区セクション		第34図 "
第3図 "		第35図 "
第4図 S T 1		第36図 "
第5図 S B 1		第37図 "
第6図 S B 2 ~ 3		第38図 "
第7図 S B 4 ~ 5		第39図 "
第8図 S B 6 ~ 7		第40図 "
第9図 S B 8 ~ 9		第41図 "
第10図 S K 1 ~ 4		第42図 "
第11図 S K 5 ~ 8		第43図 "
第12図 S K 9		第44図 "
第13図 S X 1		第45図 "
第14図 S X 2		第46図 "
第15図 S X 3		第47図 "
第16図 S X 4		第48図 S T 1 出土遺物
第17図 第VII層出土遺物		第49図 "
第18図 "		第50図 "
第19図 "		第51図 S K 1 ~ 2 出土遺物
第20図 "		第52図 S K 3 ~ 5 出土遺物
第21図 "		第53図 S K 4 ~ 6 出土遺物
第22図 "		第54図 S K 6 ~ 9 出土遺物
第23図 "		第55図 S X 1 出土遺物
第24図 "		第56図 "
第25図 "		第57図 "
第26図 "		第58図 S X 1 ~ 2 出土遺物
第27図 "		第59図 S X 2 出土遺物
第28図 "		第60図 "
第29図 "		第61図 S X 2 ~ 3 出土遺物
第30図 "		第62図 S X 3 出土遺物
第31図 "		第63図 S X 4 出土遺物

第64図	S X 4 出土遺物	第95図	S T 3 出土遺物
第65図	"	第96図	S T 3・4 出土遺物
第66図	"	第97図	S T 4~6 出土遺物
第67図	"	第98図	S T 1・7、S K 1~6 出土遺物
第68図	S T 1、P 1~3 出土遺物	第99図	S K 8~17 出土遺物
第69図	S T 1、S X 2~4 出土遺物	第100図	S K 17・18、S D 1、S X 1 出土遺物
第70図	S T 1、S X 3 出土遺物	第101図	S X 1・2 出土遺物
第71図	S T 1、S X 4 出土遺物	第102図	S X 2 出土遺物
第72図	S T 1、S K 9 出土遺物	第103図	"
第73図	S T 1、S K 6、S X 1・2・4 出土遺物	第104図	"
第74図	S T 1、S K 6、S X 1~4 出土遺物	第105図	"
第75図	S T 1、S K 6、S X 2・4 出土遺物	第106図	"
2.Loc.25		第107図	S X 2・3 出土遺物
第76図	調査区設定図	第108図	S B 2、S X 2・3 出土遺物
第77図	調査区セクション	第109図	第IV層出土遺物
第78図	S T 1~3	第110図	S T 3・5、S K 10、S X 2 出土遺物
第79図	S T 5・7	第111図	S T 3・4 出土遺物
第80図	S T 4・6	第112図	S X 2、P 7 出土遺物
第81図	S B 1・2	第113図	S T 3、S K 5、S X 2 出土遺物
第82図	S B 3、S K 1~6	第114図	S K 5、S X 2 出土遺物
第83図	S K 7~9・12	第115図	S X 2、P 1・5 出土遺物
第84図	S K 10・11・13~18	第116図	S T 3、S K 5、S D 1、P 3・17 出土遺物
第85図	S K 19・20、S A 1	第117図	S T 6、S K 6・7、P 20 出土遺物
第86図	S X 1	第118図	S T 1・3・4、S K 5 出土遺物
第87図	S X 2・3	第119図	S T 2、S K 5、S X 2、P 10 出土遺物
第88図	S X 2 集石	第120図	S T 2・5・7、P 4 出土遺物
第89図	S T 1-P 2・3・5、S T 3-P 10, S K 5-P 2、S K 7-P 1	第121図	S K 2・7・12・17、P 3 出土遺物
第90図	P 1~4	第122図	S T 3~5、S K 10、S D 1、 S X 1 出土遺物
第91図	P 5~11	第123図	S T 5、S K 5・17 出土遺物
第92図	P 12~17		
第93図	P 18~21		
第94図	第IV層、S T 2・3 出土遺物		

3. Loc. 15		
第124図 調査区設定図		第156図 第V層出土遺物
第125図 調査区セクション		第157図 第III～V層出土遺物
第126図 SK1、SD1セクション		第158図 第V層出土遺物
第127図 SD2・3、SX1		第159図 ST1、SB2、SK1・2・4 出土遺物
第128図 SD1出土遺物		第160図 SK4・6出土遺物
第129図 //		第161図 SK6・7出土遺物
第130図 //		第162図 SK8・11・12出土遺物
第131図 //		第163図 SK12出土遺物
第132図 //		第164図 SK16・17・20・22～24・26・28 出土遺物
第133図 SD1、SX1出土遺物		第165図 SK30・31、SD2・4出土遺物
4. Loc. 17		第166図 SD4出土遺物
第134図 調査区設定図		第167図 SD4、P1～4、SK7・12 出土遺物
第135図 調査区セクション		第168図 SK12・26・31、SD3・4 出土遺物
第136図 ST1		第169図 ST1、SK7・11・23・31、 SD4出土遺物
第137図 SB1・2		5. Loc. 18
第138図 SB3・4		第170図 調査区設定図
第139図 SB5、SA1		第171図 試掘トレンチ設定図
第140図 SK1～6		第172図 調査区セクション
第141図 SK7		第173図 ST1
第142図 SK8～10		第174図 ST2、SK1
第143図 SK11・12		第175図 第III層出土遺物
第144図 SK13～21		第176図 //
第145図 SK22～25		第177図 第III層、ST1出土遺物
第146図 SK26～29		第178図 ST1出土遺物
第147図 SK30・31、SD1～5		第179図 ST1・2出土遺物
第148図 第III・IV層出土遺物		第180図 ST1出土遺物
第149図 第IV層出土遺物		第181図 ST1・2出土遺物
第150図 //		第182図 //
第151図 //		
第152図 第IV・V層出土遺物		
第153図 第V層出土遺物		
第154図 //		
第155図 //		

## 6.Loc.12

- 第13図 調査区設定図  
 第14図 調査区セクション  
 第15図 " "  
 第16図 S T 1  
 第17図 第VI・VII層出土遺物  
 第18図 " "  
 第19図 " "  
 第20図 " "  
 第21図 " "  
 第22図 " "  
 第23図 " "  
 第24図 " "  
 第25図 " "  
 第26図 " "  
 第27図 " "  
 第28図 S T 1出土遺物  
 第29図 " "  
 第30図 " "  
 第31図 " "  
 第32図 " "

## 第18図 第VI・VII層出土遺物

- 第19図 " "  
 第20図 " "  
 第21図 " "  
 第22図 " "  
 第23図 " "  
 第24図 " "  
 第25図 " "  
 第26図 " "  
 第27図 " "  
 第28図 S T 1出土遺物  
 第29図 " "  
 第30図 " "  
 第31図 " "  
 第32図 " "

## 表 目 次

### 1. Loc. 16

- 第1表 S T 1 ピット計測表
- 第2表 S B 1 ピット計測表
- 第3表 S B 2 ピット計測表
- 第4表 S B 3 ピット計測表
- 第5表 S B 4 ピット計測表
- 第6表 S B 5 ピット計測表
- 第7表 S B 6 ピット計測表
- 第8表 S B 7 ピット計測表
- 第9表 S B 8 ピット計測表
- 第10表 S B 9 ピット計測表
- 第11表 竪穴住居址計測表
- 第12表 掘立柱建物址計測表
- 第13表 土塙計測表
- 第14表 包含層出土土器観察表
- 第15表 包含層出土石器観察表
- 第16表 遺構出土土器観察表
- 第17表 遺構出土石器観察表

### 2. Loc. 25

- 第18表 S T 1 ピット計測表
- 第19表 S T 2 ピット計測表
- 第20表 S T 3 ピット計測表
- 第21表 S T 4 ピット計測表
- 第22表 S T 5 ピット計測表
- 第23表 S T 6 ピット計測表
- 第24表 S T 7 ピット計測表
- 第25表 S B 1 ピット計測表
- 第26表 S B 3 ピット計測表
- 第27表 竪穴住居址計測表
- 第28表 掘立柱建物址計測表
- 第29表 土塙計測表
- 第30表 包含層出土土器観察表

### 3. Loc. 15

- 第31表 遺構出土土器観察表
- 第32表 遺構出土石器観察表
- 第33表 土塙計測表
- 第34表 遺構出土土器観察表
- 第35表 遺構出土石器観察表

### 4. Loc. 17

- 第36表 竪穴住居址計測表
- 第37表 掘立柱建物址計測表
- 第38表 土塙計測表
- 第39表 包含層出土土器観察表
- 第40表 包含層出土石器観察表
- 第41表 遺構出土土器観察表
- 第42表 遺構出土石器観察表

### 5. Loc. 18

- 第43表 竪穴住居址計測表
- 第44表 土塙計測表
- 第45表 包含層出土土器観察表
- 第46表 包含層出土石器観察表
- 第47表 遺構出土土器観察表
- 第48表 遺構出土石器観察表
- 第49表 竪穴住居址計測表
- 第50表 包含層出土土器観察表
- 第51表 包含層出土石器観察表
- 第52表 遺構出土土器観察表

### 6. Loc. 12

**1. Loc. 16**

## Loc. 16

### 1. 位置と調査経過

Loc. 16は、田村遺跡群の南半部、県道の西方に位置する調査区であり、字名は東松木と呼ばれている。調査前は全面水田であり、休耕後に行った事前の表面採集では、遺物はほとんど発見されなかつたが、先に調査を行つた、東に隣接するLoc. 12・13では中世の遺構群が検出され、北に隣接するLoc. 17・18では弥生時代前期の包含層と遺構群及び中世の遺構群が検出されており、弥生時代前期と中世の遺跡の広がりが考えられた。また、同時期に調査を行つた、西に隣接するLoc. 25においても、弥生時代前期と中世の遺構群が検出されている。

調査は昭和56年8月に開始され、まず遺物、遺構の検出範囲および遺構面の深さを知るために約60×100mの調査範囲に、幅4mのトレンチにより試掘調査を行つた。試掘トレンチは20mの中をグリッドラインに合わせて南北方向にA～Cの3本、東西方向にD～Iの6本、合計9本を設定し、北より順次調査を行つた。その結果、中央部から北にかけて、中世のピットが検出され、弥生時代前期と中世の遺物が出土した。北半部は、遺構検出面までが浅く、北端部では基盤となる礫層が耕作土下からみられる部分もあった。南半部は、礫層も深くなり、南端部では、粘質土が厚く堆積しており礫層はみられない。遺構は非常に少なく、遺物も少數の出土であったが、弥生時代前期の遺物が大半を占めていたので、調査区全体を全面発掘することとした。

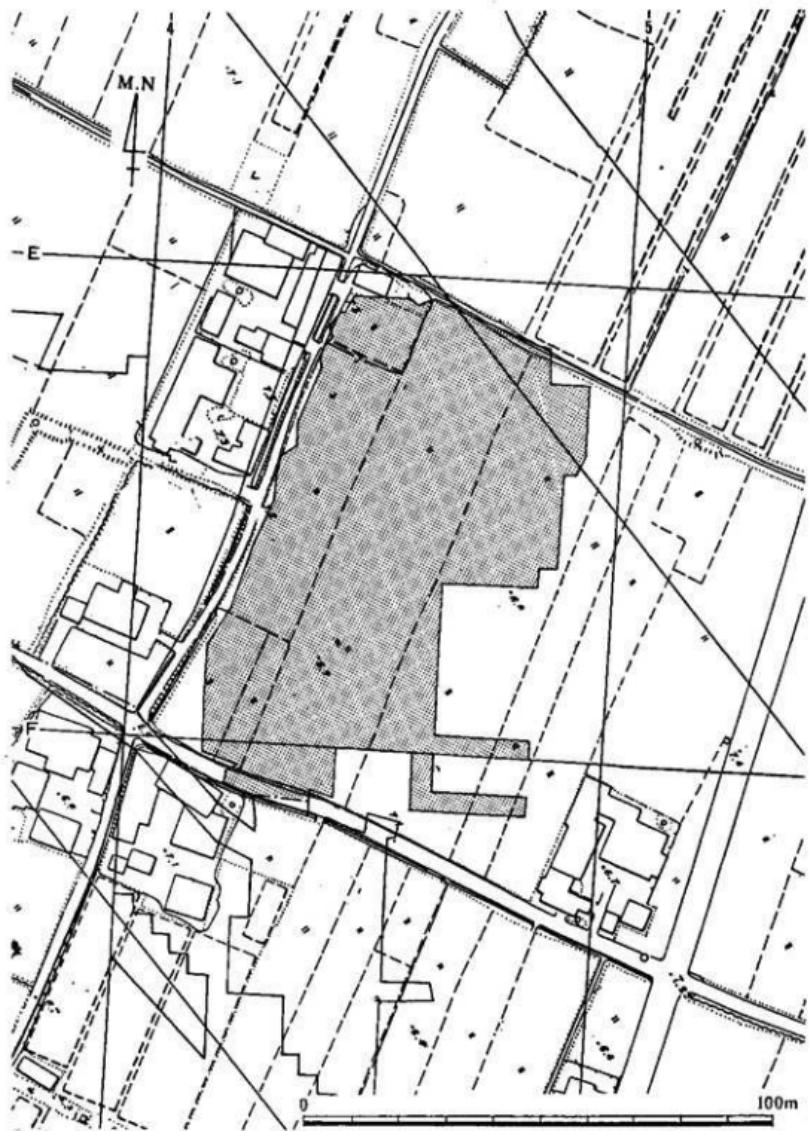
全面調査は、試掘調査に引き続き11月まで中世の遺構面を行い、他の調査区との関連により昭和57年1月～6月にかけて、弥生の遺構面の調査を行い完了した。調査面積は、弥生時代前期と中世の面を合せて7,815m<sup>2</sup>である。

### 2. 調査概要

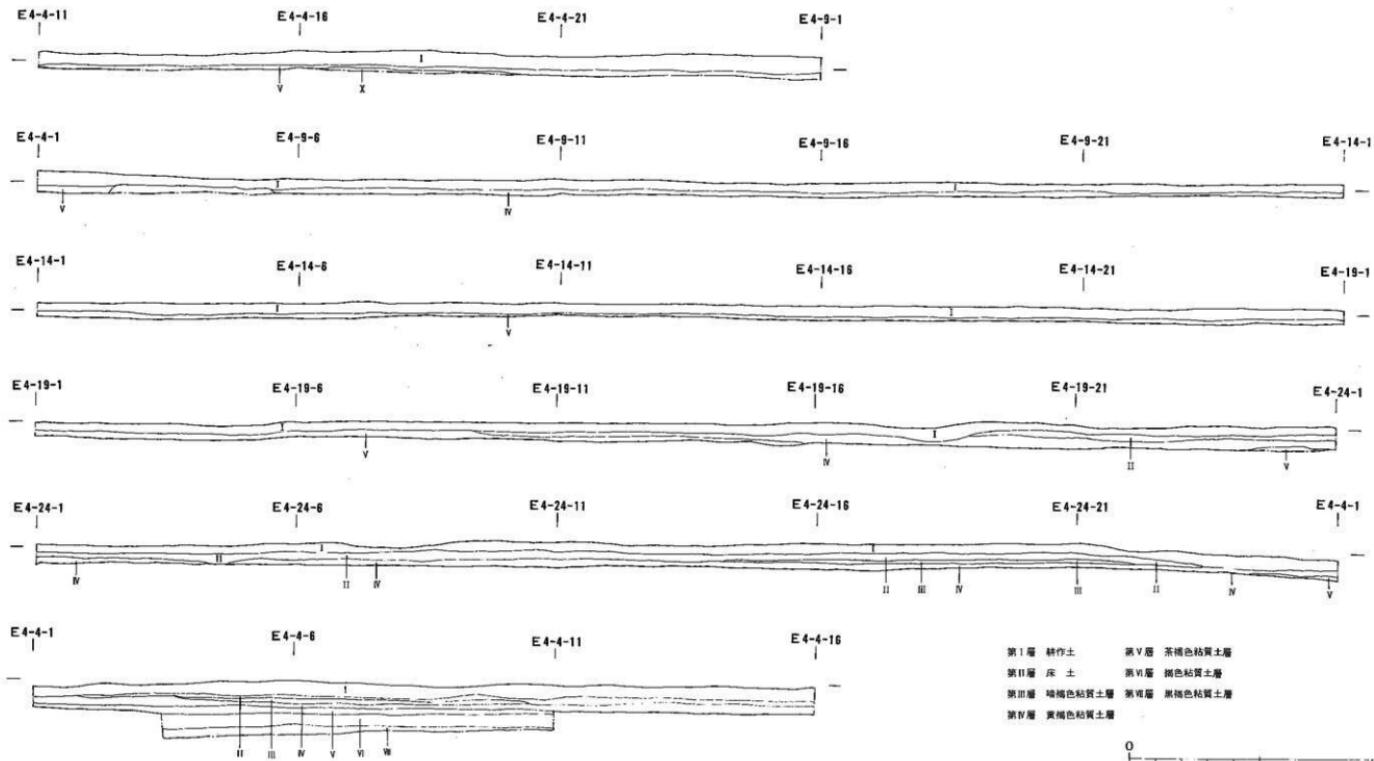
Loc. 16については、全面発掘を行つたが、南東の一部については遺構、遺物が検出されなかつたので排土置場とした。

検出された遺構は、弥生時代前期と中世一室町時代の2時期のものであり、同一面で重複する部分のある複合遺跡である。弥生時代前期の遺構としては竪穴住居址1棟、掘立柱建物址9棟、土塙9基の他にピットが検出され、中世の遺構としては掘立柱建物址、土塙、井戸、溝などが検出されている。遺構の分布は、弥生時代前期では南半部にその中心があり、北部には掘立柱建物址と土塙のみが検出された。中世の遺構については、中央部に井戸が検出され、これを中心として北半部に遺構が多く、南半部では少ない。中央部から北では、弥生時代前期と中世の遺構検出面は、同一面であり浅い。

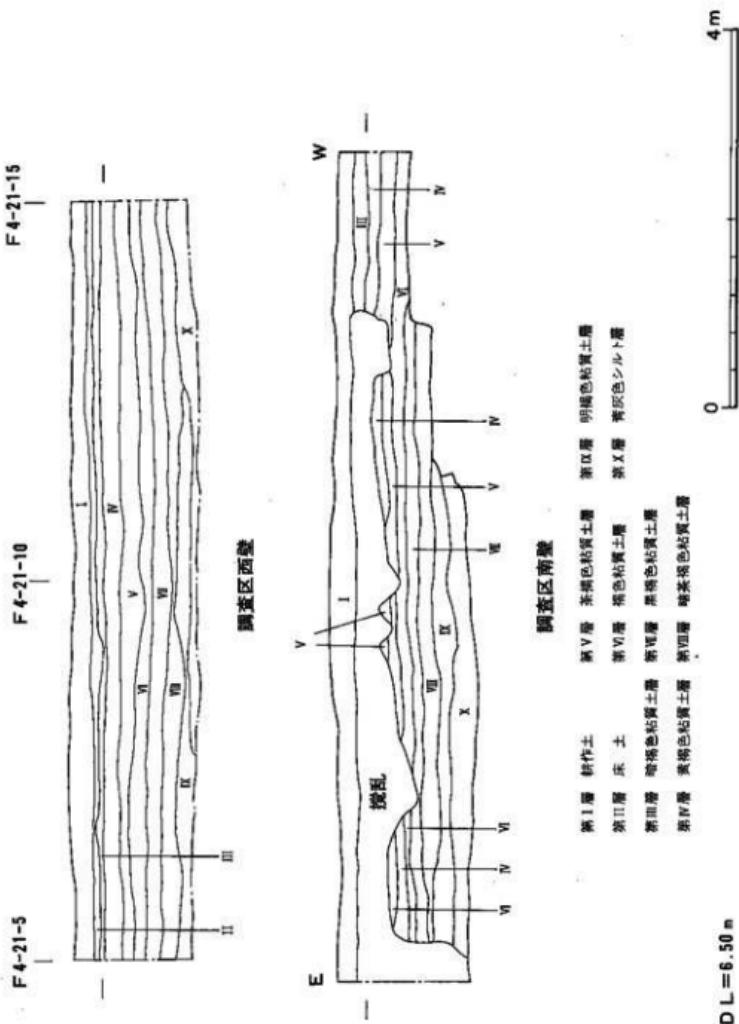
弥生時代前期の遺構の中で竪穴住居址は、調査区の南端部、南壁に半分ほどかかり検出された。北半分の調査終了後、残された南半分については、市道部分にあたるため、昭和57年度の



第1図 調査区設定図



第2図 調査区セクション



第3図 調査区セクション

終わりに Loc. 15を調査する時点で同時に調査を行い完了した。据立柱建物址は、重複関係にある S B 1・2が調査区の北西コーナーで検出されており、溝状土塙の S K 1・2を伴っている。S B 3~9は、中央部から南に集中しており、棟方向はいずれもやや東に振っており、同じ方向性をもっている。S B 3は、調査区の中央部西壁にかかり検出されており、全体の規模は不明である。また S B 5は、調査区の南西よりに検出されており、西に隣接し S K 6・7が位置している。S B 8は、S T 1の北に隣接し検出されており、S K 9と重複関係にある。

土塙は全体で9基とやや少なく、S B 1に伴う S K 1・2以外は中央部から南に位置している。形態、出土遺物からみれば S K 4は壺棺、S K 6・7は土塙墓と考えられる。性格不明造構である S Xは、4基検出されており、S X 1・2は調査の北東部に隣接し、S X 3・4は中央部に隣接し発見された。S X 1は不整形であるが、S X 2~4は橢円形に近く、小豎穴状の造構と言える。

ピットは、調査区の南半部に散在し、検出されているが少數である。また調査区の中央部から南東方向にかけて、大きく窪む地形がみられたが、埋土の違いなどもなく、自然地形であると考えられる。

### 3. 層序と出土遺物

Loc. 16の基本層序は、次のとおりである。

- 第I層 耕作土
- 第II層 床土
- 第III層 暗褐色粘質土層
- 第IV層 黄褐色粘質土層
- 第V層 茶褐色粘質土層
- 第VI層 褐色粘質土層
- 第VII層 黒褐色粘質土層
- 第VIII層 暗茶褐色粘質土層
- 第IX層 明褐色粘質土層
- 第X層 青灰色シルト層
- 第XI層 砂礫層

北半部から中央部にかけては、層位が薄く、第I層耕作土の直下に第VII層黒褐色粘質土層がみられ、部分的には基盤である第XI層砂礫層上面の礫が面をなしてみられる。南半部では、第II層から第V層間の層序がみられ、特に第V層は緩やかに低くなり、南端部では、地表下約1.5mを測る。第XI層砂礫層もさらに傾斜を強め、第V層との間に第V層明褐色粘質土層、第X層青灰色シルト層が堆積する。

弥生時代前期の遺物包含層は、第VII層黒褐色粘質土層であり、北半部の一部を除き全面にみ

られる。遺構は、第Ⅸ層明褐色粘質土層で検出されているが、北半部では、第Ⅹ層砂疊層上面で検出されている。

包含層中からの遺物出土状況は、北半部ではSX1・2の検出されたE4-9とE4-10に集中しており、遺構の上面では特に集中して発見された。壺、甕ともに集中しているのはE4-10-16であり、次いでE4-10-17・21・22、E4-15-2に分布密度が高く、それに続いてE4-9の中央部がある。これ以外は、散発的に出土する。中央部では、各グリッドとともに平均的に出土しているが、なかでもやはりSX3の検出面上面にかなりの集中がみられた。またSX4からやや南の自然地形の落ち込みにかけては、南北方向に遺物が集中し出土しており、地形にそった2次堆積と考えられる。南半部では、獨立柱建物址の周辺部から散発的に出土しているが、南端部の堅穴住居址付近では、ほとんど遺物の出土はみられなかった。

包含層の出土遺物は、弥生時代前期前半、前期Iを中心として前期IIを含むものであり、北半部の中世の遺物を除けばほとんど他の時期の遺物は混在せず、良好な単純包含層である。出土した遺物の器種は、壺、甕、高杯、鉢、小型土器、紡錘車の他に、石器としては石斧、叩石、礫石、石鎚がみられる。出土量は、非常に多く、コンテナケース50箱ほどである。なかでも壺、甕は、多量に出土している。

壺は、口縁下に有段部をもたず口縁の外反もやや小さなもの（1～8）と有段部をもつもの（9～68）があり、この中には段部が強く突帯状を呈するもの（60、63～65）、沈線を施すもの（59）がみられる。また、（34、35、37、41、42、44、58）は小破片であり、段部が残されていない。また、大型壺の口縁部は（37、39、41～43、53～57、60、62、64、66～68）があり、（60、62、64）には口縁部または有段部に刻目がみられる。胴部は、（69～84）であるが、すべて有段部をもち、ヘラ描直線文、重弧文、八字文、斜行直線文が上胴部にみられる。（69）の小型壺は、茶褐色を呈し、細砂粒を多く含む胎土をもち、他の土器の胎土との違いは明瞭であり、他地域からの搬入品である。

甕には、口縁下に有段部をもつもの（127～143）、口縁下に貼付突帯をもち刻目を施すもの（144～179、309～311）、口縁部外面を拡張し刻目を施すもの（180～206、312～316）、口縁部下端に刻目を施すもの（207～259、317～319）、口縁部全面に刻目を施すもの（260～308、320、321）、口縁部に刻目をもたないもの（322～340）の6種類がみられる。有段部をもつ甕には、如意形に外反する口縁部をもつものの他に、大きく外反する口縁部、直立気味の口縁部をもつものがあり、口縁下に突帯を貼付するものは1点みられる。刻目は口唇部外面に施されるが、口唇部の上下端および有段部にも刻目を施すものが存在する。また、口縁部と有段部ともに刻目をもたないものが3点存在する。口縁下に突帯を貼付するものは、口縁部よりやや下に突帯を貼付するものと、口縁直下に突帯を貼付するものの2種類に分けられる。前者は、口縁部と貼付突帯に刻目が施され、やや外反するか、直立する口縁部をもつものが多い。後者は、口縁部直下に突帯を貼付しており、口唇部とつながり口縁部を形成するものがあり、口縁部外面を

拡張し刻目を施すものとほとんど判別がつかない。口縁部の形態は、やや外反するもの、直立もしくは僅かに内湾し終るものである。口縁部を拡張し刻目を施すものは、口唇部がナデによりやや凹む面をなし、上端部はやや上方へなで上げる。口縁部は、小さく外反するか、直立気味のものが多く、刻目は細い傾向がみられる。口縁部の下端部に刻目を施すものは、これまでのものに比べ如意形に外反する口縁部が多いが、小さく外反及び直立気味の口縁部もみられる。刻目はやや細いものが多い。口縁部全面に刻目を施すものは、口唇部が丸味をおび如意形に外反するが、小さく強く外反するものも多くみられる。刻目をもたない口縁部は、如意形に外反するものが大半を占め、直立するものは、わずかに2点みられる。

甕の底部と思われるものは、(341~526)であり、多量に出土している。なかでも(520、521)の2点は、強い上げ底を呈しており特徴的である。また、(522~526)は、底部に穿孔がみられ、瓶と考えられる。

高杯は、3点(527~529)出土しているが、いずれも杯部と脚部の接合部である。

鉢は、19点(530~548)出土しており、小型の鉢は、口縁部が内湾するものと外反するものの2種類みられる。大型の鉢では、口縁部は緩やかに外反し有段部をもつもの、さらに段部に刻目をもつものがみられる。

蓋は、5点(549~553)出土しているが、すべて口縁部の破片であり、緩やかに外反し終っている。

小型土器(554)は、1点のみ出土しており、底部に小さな棒状の刺突がみられる。

紡錘車は、6点(555~560)出土しているが、4点は土器片を転用しており、やはり小形である。

石器の出土量は少なく、全部で15点である。出土状況は土器の分布に同じであり、集中地点はみられない。器種は石斧、叩石、石錐、削器がみられる。石斧は、刃部のみを研磨し作出した小型石斧2点(561、562)のみであり、太型蛤刃石斧は出土していないが、1点(563)が緑色岩の石斧未成品である。叩石は、砂岩(565)とチャート(566)の扁平礫を使用したものであり、端部および側辺部に敲打痕がみられる。砥石は(567)1点であり、砂岩製の表面のみを使用したものである。石包丁も1点(568)のみで、直刃をもち、頁岩を使用する。削器は、チャート(569)とサヌカイト(570)の2点であり、刃部は入念に調整されている。石錐は、5点(571~575)出土し、2点の磨製石錐は頁岩を使用しており、他の3点はサヌカイトを使用する凹基式の石錐である。

#### 4. 遺構と遺物

竪穴住居

ST 1

S T 1 は、調査区の南壁にかかる、北半分を昭和56年度に調査し、市道部分にかかる南半分については昭和57年度に調査を行い、完掘された。住居址の検出面は、第Ⅳ層明褐色粘質土層であるが、第Ⅶ層暗茶褐色粘質土中において若干の違いがみられ、不整形のプランが認められた。南半部は、市道の下であり搅乱を受けているのではないかと思われたが、完全に残されており、水路の影響により青灰色をおびていた。しかし、住居址の中心部は、幅2.5mの現代の搅乱塗が東より重複しており、一部破壊されていた。

平面形は、円形を呈し、直径は9.7~10.2mを測り、平均すれば10.02mである。深さは、北半部がやや深く、南半部は浅くなっている。最新部は中央部で約21cmを測り、壁高は北で18cm、南で最も低い部分では6cmである。床面は、中央部が僅かに低くなるがほぼ平坦であり、南北の壁高の差は、検出面が南へと低くなっているためである。壁は床面より直立し、非常にしっかりとされている。

埋土は、第Ⅶ層と同じ黒褐色粘質土であり、上部に比べ下部がやや薄く分層することができたが、その差は僅かなものであり、埋没状態の違いを示すとは考えられず、時間的差違も存在しない。埋土の中面から床面にかけて炭化物の細片が散在し、床面のやや上面では、北東部に50cmほどの範囲が2ヶ所、西南部では60×70cmの範囲に炭化物が面をなして検出された。これらの炭化物は、細片の集中であり、炭化材などのように形をもつものではない。床面直上の埋土中には、部分的に明褐色粘質土の小さなブロックの混在がみられた。

柱穴は、壁の内側、約1.4mの位置に中央ピットを取り囲み、8個が検出された。柱穴は重複関係もなく、床面上のピットは中央ピット及び壁のピットを除けば、柱穴の8個だけである。柱間距離は、1.54~1.98mを測り、平均1.81mであり、きわめて整然と位置している。柱穴の平面形は、円形を呈するP 3・4・6・8と不定形で中に平場をもち、柱痕を残すP 1・2・5・7があり、円形の柱穴は直径21~24cmを測り、柱痕の直径も18~22cmを測るところから、使用された柱は直径20cm前後と考えられる。深さは、50cm前後が3個あり、他は20~30cmを測る。

住居址の中央部には中央ピット（P 20）が検出されているが、現代の搅乱塗に切られており、全体の形態は不明である。しかし、残された部分からみれば、径は86×84cm、深さ48cmの中心部をもち、その北と東に、深さ12cmほどの浅い掘込みの一部が搅乱塗の北壁と南壁に残っている。中央ピットの底は横円形を呈し平坦面であり、残されている南壁は緩やかにしっかりと立ち上がる。

柱穴と中央ピット以外には、住居址の壁上に11個のピット（P 9~19）が検出されている。これらの壁ピットは、10cm前後と浅く、中にはP 17のように深さではなく、半円状に壁から張り出すものがある。また、壁ピットは北から東の壁にかけて存在し、隣接し2個1組となるものが4組みられる。壁ピットの間隔は、1.2mから2.4mを測り、位置的には内部の柱穴と対応しているが、その性格は不明である。

第1表 ST 1 ピット計測表

No.	径(cm)	深さ(cm)	備考	No.	径(cm)	深さ(cm)	備考
P 1	72×37	28.0	柱底あり。	P 5	58×39	22.7	柱底あり。
P 2	60×36	50.8	"	P 6	22×22	53.0	
P 3	38×23	24.2		P 7	58×28	51.7	柱底あり。
P 4	24×24	24.1		P 8	26×21	18.9	

柱穴、中央ピット、壁ピットのいずれの埋土も黒褐色粘質土であり、住居址自体の埋土と同様であるが、若干色調が薄く、セクションでは分離された。住居址内の遺構は以上であり、壁溝その他特殊な施設は発見されなかった。

出土遺物は、埋土中及び床面上でもあまり多くなかった。特に、北半部の出土量は、南半部の約2分の1ほどであり非常に少ない。埋土中からは壺、甕片(576、577、580、584、588、590、597)が出土しており、床面上からも(578、581~583、585、587、589、591、594~596)の壺と甕が出されている。出土遺物の中で多量に出土し注目されるのは、紡錘車である。ほとんど大半が土器片を転用した小型のもので、半分以上に欠損するものが多い。また穿孔の痕跡を残す未成品も多く13点を数える。石器は、太形蛤刃石斧(908)、扁平両刃石斧(909)、局部磨製石斧(910)、打製石斧(911)、叩石2点(914、917)、砥石4点(919、920、922、924)、磨製石鏡(929)とその未成品(931)、管玉(935、936)、調整のある剝片(948)の合計15点が出土している。

出土状況は、床面上にP 1とP 8の間に砥石(920)1点が出土しており、中央ピットからは、壁の立ち上がりに砥石2点(922、924)と石斧1点(910)、紡錘車3点(598、620、624)が出土している。中央ピットの南1mの範囲には、紡錘車が15点集中して出土した。また、太形蛤刃石斧(908)は、住居址の南西部の検出時にプラン上にかかり発見されており、管玉は2点(935、936)西部の床面上に1.8mほど離れ出土している。

住居址は、現代の擾乱に切られるだけであり、他の重複関係もなく、柱穴も8個以外に検出されていないので、建て替えもなく、時期的には前期Ⅰに限定される。

#### 掘立柱建物址

##### S B 1

S B 1は、調査区の北西コーナーにおいて、第II層下の第III層暗茶褐色粘質土層を検出面として発見された。検出面は、地表下約20cmと浅く、北半部は柱穴と付属する土塙が浅く、上面を若干削平されていると思われる。

規模は、3×6間の南北棟であり、3.5×7.5mを測り、柱穴は整然と並んでいる。柱間距離は、最短で1.10m、最長では1.52mを測り、平均1.25mとやや短い。棟方向は、N-46°-Eと大きく東へ振っている。柱穴は、円形もしくはやや椭円形をなし、最大で直径50cm、最小では直径27cmを測り、平均は35~40cmである。深さは最も深い柱穴で5cmであるが、平均的には15

~20cmであり、最も深いものは29.4cmを測る。柱穴の中でP 9・12・13には柱痕がみられ、直徑10~20cmを測る。埋土はすべて第Ⅶ層黒褐色粘質土と同じ單一層である。

S B 1の北半部は、S B 2と重複しており、P 1・6では柱穴に切り合がみられたが、検出状態及び埋土中における明確な新旧関係はつかめず、同一の黒褐色粘質土が入っていた。他にP 7・15に切り合がみられるが、S B 2の柱穴ではなく、S B 1の部分的な柱穴の建て替えと考えられる。

付属施設としては、建物の南北に平行して溝状土塙が2基検出されている。溝状土塙は、幅0.5m前後、長さ3~4m前後を測り、柱穴から0.5~0.6mほど離れている。

柱穴からの出土遺物は少なく細片であり、図示できるものはなかったが、口縁下に突帯を貼付し刻目を施すもののが存在し、時期的には前期Iと考えられる。

第2表 S B 1ピット計測表

No	径(cm)	深さ(cm)	備考	No	径(cm)	深さ(cm)	備考
P 1	50×38	11.5	重複関係あり	P 10	54×50	28.1	
P 2	28×28	11.9		P 11	34×30	18.0	
P 3	33×28	5.7		P 12	34×32	29.4	
P 4	43×34	14.2		P 13	45×35	17.0	
P 5	27×27	7.7		P 14	48×38	18.9	
P 6	46×30	6.2	重複関係あり	P 15	35×31	22.7	
P 7	35×33	20.5		P 16	43×43	24.2	
P 8	48×40	20.9		P 17	39×37	22.9	
P 9	50×40	18.2		P 18	43×37	15.5	

## S B 2

S B 2は、S B 1と重複関係にあり、位置、検出面はS B 1と同じである。規模は、3×6間と考えられる東西棟であり、4.0×7.2mを測る。棟方向はN-40°-Wである。柱穴は、S B 1との重複部分ではほとんど検出されず、S B 1の北半部より西へ3×3間の張り出しのようにみえる。この点については、S B 1とS B 2の新旧関係は不明であるが、重複部分の柱穴については2つの建物で共有したものがあると考えられる。柱間距離は、0.98~1.14mと短くS B 1と同様であるが、P 11~12間のみは1.82mと長くなっている。他の2m以上の柱間距離を測るものについては、S B 1の柱穴の存在を考えなければならない。なお、P 7については東西方向でややすがみられるが、南北方向ではよく柱穴方向に並びS B 2の柱穴としてよいであろう。

柱穴は、円形もしくは楕円形を呈し、直徑27~48cmを測り、平均的には35~45cmである。深さは、5.5~25.2cmを測り、10cm前後の浅いものが多い。柱穴の重複はP 4・9にS B 1との切り合がみられるだけである。柱痕を残す柱穴はなく、付属施設もみられない。

出土遺物は、S B 1と同様に非常に少なく、図示できるものはなかったが、時期的には前期Iと考えられる。

第3表 SB 2 ピット計測表

No.	径(cm)	深さ(cm)	備考	No.	径(cm)	深さ(cm)	備考
P 1	35×33	12.6		P 8	40×32	14.4	
P 2	42×34	16.9		P 9	41×38	10.5	重複関係あり
P 3	48×36	16.3		P 10	40×34	9.8	
P 4	47×37	21.9	重複関係あり	P 11	32×32	16.0	
P 5	40×36	8.2		P 12	37×33	7.0	
P 6	30×27	5.5		P 13	42×34	25.2	
P 7	26×24	7.8					

## SB 3

SB 3は、調査区の中央部、西壁にかかり検出されており、西へ広がるものである。検出面は第VII層暗茶褐色粘質土層に第XI層砂礫層が混じる面であり、検出状況は不明瞭であった。

規模は、全体が検出されていないので不明であるが、南北または東西棟としても4×4間以上の規模をもっており、P 4～9間は8.32mを測る。棟方向は、南北棟と考えるならばN-36°-Eを測り、東へ振っている。柱間距離は、P 1～4の間では1.2m前後を測り、非常によく揃っているが、P 4～6とP 8～9間はそれぞれ2.60mと3.16mを測り広くなっている。全体では不規則である。柱穴は、円形であり直径25～52cmを測り、深さは、10cmから20cm前後を測るものが多く、P 8のみが32.6cmと深い。埋土は、第VII層と同じ黒褐色粘質土の単一層である。また、柱穴の重複、付属施設などは存在しない。

出土遺物は、やはり少なく図示できるものはなかった。時期的には、若干の出土遺物、埋土、遺構検出面からみれば、前期Iと考えられる。

第4表 SB 3 ピット計測表

No.	径(cm)	深さ(cm)	備考	No.	径(cm)	深さ(cm)	備考
P 1	25×25	10.1		P 6	42×36	21.9	
P 2	35×26	10.6		P 7	52×42	23.0	
P 3	42×37	12.6		P 8	50×42	32.6	
P 4	45×45	27.3		P 9	38×33	12.6	
P 5	38×26	19.7		P 10	33×33	21.4	

## SB 4

SB 4は、SB 3のやや南4.5mに位置しており、SB 3と5の中間である。検出面は、SB 3と同じく第XI層砂礫層の混在する第VII層暗茶褐色粘質土層上面である。

規模は、1×1間であり、P 1～2の3.92mに比べP 2～3、P 1～4間はそれぞれ2.30mと2.22mを測り短く、長方形を呈するがP 3～

第5表 SB 4 ピット計測表

No.	径(cm)	深さ(cm)	備考
P 1	34×29	15.2	
P 2	23×23	16.7	
P 3	29×21	10.5	
P 4	35×28	11.5	

4間は4.24mと長い。東西棟と考えるならば、棟方向はN-67°-Eを示す。柱穴は、円形であり、21~35cmを測り、深さは、10~16cm前後と浅い。埋土は、第VII層と同じ黒褐色粘質土の單一層である。

出土遺物は、ほとんどなかったが、埋土、遺構検出面からみれば、時期的には前期Iと考えられる。

#### SB 5

SB 5は、調査区の南半中央部、やや西よりに位置している。検出面は、第IV層明褐色粘質土層であるが、柱穴は、北半部では上層の第VII層暗茶褐色粘質土層中において検出されたが、南半部では不明であり、第IV層上面まで下がたところで検出された。第XI層砂砾層は、やや北より傾斜を強めており、すでにみられない。

規模は、2×5間の南北棟であり、3.28×6.40mを測る。棟方向は、N-21°-Eと東へ振っており、柱穴は極めて整然としている。柱間距離は、1.2m前後を測り、1.5~1.7mとやや長い部分もみられる。P 1~5の間には、P 2・4の2個の柱穴がそれぞれP 1・3とP 3・5の間に存在しており、柱間にさらに柱を建てている。また、P 10~12の間には棟柱がみられないが、P 9~13の間に存在しており、P 10~12による1間分は張り出しと考えられる。柱穴はほぼ円形であるが、不定形のものも混じる。直径30~40cmを測り、深さは20cm前後が多いが、10cm未満の柱穴も6個と多い。重複関係をもつ柱穴はP 6のみであり、柱の建て替えと考えられる。また、柱痕を残すものはP 6とP 11であり、直径8~15cmを測る。埋土は、第IV層と同じ單一の黒褐色粘質土である。付属施設はみられないが、西にSK 6・7の2基の土塙が隣接している。

出土遺物は少なく、図示できるものはなかった。僅かに刻目をもつ口縁部が存在するのみであり、時期的には埋土、検出面からみても前期Iと考えられる。

第6表 SB 5ピット計測表

No.	径(cm)	深さ(cm)	備考	No.	径(cm)	深さ(cm)	備考
P 1	67×40	19.2		P 9	35×31	14.5	
P 2	33×30	18.5		P 10	40×35	8.0	
P 3	42×30	22.5		P 11	35×33	9.1	
P 4	27×22	7.9		P 12	21×21	8.3	
P 5	40×40	13.4		P 13	34×28	17.0	
P 6	37×33	22.3		P 14	38×33	9.8	
P 7	33×30	13.0		P 15	36×32	11.3	
P 8	33×33	9.0		P 16	34×30	10.6	

#### SB 6

SB 6は、SB 5の東、約14mに位置する。検出面は、第IV層明褐色粘質土層であるが、基盤の第IV層砂砾層が部分的にみられる。

規模は、1×3間の南北棟と考えられ、2.45×4.96mを測る。棟方向は、N-22°-Eと東に

振れており、北東と南東のコーナーの柱穴を欠いている。柱間距離は1.37m～1.99mと不規則であるが、柱穴の並びはよく通っている。柱穴は円形であり、直径22～45cmと不揃いである。重複関係がみられるのはP 3のみであり、柱痕は、いずれの柱穴にも存在しない。埋土はやはり第Ⅸ層と同じ単一の黒褐色粘質土層である。

出土土器は細片であり、少なく、図示できるものはなかった。時期的には埋土、検出面、棟方向などからみて、前期Iと考えられる。

第7表 SB 6 ピット計測表

No.	径(cm)	深さ(cm)	備考	No.	径(cm)	深さ(cm)	備考
P 1	25×25	9.3		P 4	36×32	21.7	
P 2	45×43	23.8		P 5	30×30	14.0	
P 3	44×40	24.8		P 6	22×22	6.4	

### SB 7

SB 7は、SB 5の南東約5mに位置しており、南にSK 9、東にSB 8が隣接している。検出面は、第IX層明褐色粘質土層であり、SB 5検出面に比べやや低くなっている。

規模は、1×5間と考えられ、3.9×6.4mを測る南北棟であり、棟方向は、N-21°-Eと東へ振っている。柱間距離は0.98～1.76mと差をもち、妻側のP 1～2間は3.9mを測り、棟柱が検出されなかった。柱穴は非常に不揃いであり、円形または不定形を呈し、直径は27～55cmを測る。深さも8.9～36.9cmと不規則である。特に、P 5はP 2～4の方向から大きく内側にずれており、SB 7の柱穴と考えるには疑問が残る。埋土は、第VII層と同じ単一の黒褐色粘質土である。付属施設および重複関係はみられない。

出土遺物はほとんどなかったが、時期的には、埋土、検出面から前期Iと考えられる。

第8表 SB 7 ピット計測表

No.	径(cm)	深さ(cm)	備考	No.	径(cm)	深さ(cm)	備考
P 1	30×30	11.9		P 6	55×48	36.9	
P 2	48×45	17.0		P 7	40×31	8.9	
P 3	42×38	15.7		P 8	31×27	24.2	
P 4	52×21	10.3		P 9	27×24	15.0	
P 5	60×55	11.2		P 10	36×36	10.0	

### SB 8

SB 8は、調査区の南端部に近く位置し、南にST 1が隣接し、東のSK 9と一部重複している。検出面は、第IX層明褐色粘質土層であり、SB 7と同一面である。

規模は、3×5間の南北棟であり、4.16×7.92mを測る。棟方向は、N-33°-Eと東に振っており、極めて整然としている。柱間距離は、1.16～1.58mを測るが、P 7～8間とP 13～14間は2.52m、1.92mと広い。P 9～10間は2.46mと広いが、間に柱穴は検出されなかった。柱穴は円形が多いが、やや方形に近いものが少数みられる。直径は、30～50cmの範囲に納まり、

よく擴っている。深さは20~30cmが多く、20cm未満のやや浅い柱穴も存在する。重複関係をもつ柱穴は、P12・13の2個があり、いずれもSK9と切り合っている。P13は、SK9の北壁にあたっており、検出時には埋土の違いによる新旧関係は認めることができなかった。しかし、P12はSK9の検出面には認められず、完掘後底面に発見されたことから、SK9がSB8を切っており、SB8が古いことが判明した。埋土は第VII層と同じ單一の黒褐色粘質土であり、付属施設はみられない。

出土遺物は、やはり少なく図示できるものはなかった。時期的には、埋土、検出面、棟方向からみても、前期Iであるが、SK9との重複関係によれば古く、若干の時間差をもつと考えられる。

第9表 SB8ピット計測表

No.	径(cm)	深さ(cm)	備考	No.	径(cm)	深さ(cm)	備考
P 1	45×38	14.4		P 9	42×42	24.2	
P 2	38×30	21.4		P 10	30×28	22.7	
P 3	41×38	22.3		P 11	34×40	18.7	
P 4	49×44	30.0		P 12	30×30	8.0	
P 5	40×32	23.4		P 13	35×35	13.6	
P 6	58×48	23.5		P 14	41×41	16.4	
P 7	48×43	32.9		P 15	37×37	12.4	
P 8	38×31	22.4					

### SB9

SB9は、調査区南部の東壁に近い位置で検出されている。検出面は、第IX層明褐色粘質土層であるが、基盤の第XI層砂礫層の礫が多くみられる。標高は、他の遺構に比べやや高く6.3mを測る。

規模は、1×1間であり、やや台形を呈し、棟方向は不明である。柱間距離は、1.71~2.22mと広く、柱穴は円形であり、直径23~37cm、深さは6.9~21.5cmを測る。埋土は第VII層と同じ單一の黒褐色粘質土であり、重複関係、付属施設はみられない。

出土遺物はなかったが、埋土、検出面から、時期的には前期Iと考えられる。

### 土塙

#### SK1

SK1は、SK2と同じくSB1の北側に付属する土塙であり、検出面は、SB1と同じく第VII層暗茶褐色粘質土層である。

平面形は、長い溝状であり、長さ3.28m、幅0.48mを測り、長軸方向はN-40°-Wである。深さは、全体的に浅く、最も深い東南端部で15cmを測り、北西部へと次第に浅くなり、約5cm

第10表 SB9ピット計測表

No.	径(cm)	深さ(cm)	備考
P 1	37×24	16.5	
P 2	32×28	21.5	
P 3	27×23	6.9	
P 4	28×28	13.8	

を測る。北西端部は丸く終るが、東南端部は方形である。底面はほぼ平坦であるが、僅かに東南へ深くなっている。壁はしっかりと立ち上がり、断面形は浅い逆台形を呈す。埋土は、第Ⅶ層と同じ黒褐色粘質土であり、細分はできなかった。

遺物の出土状態は、検出面すでに大半の遺物が出土しており、床面の遺物は少なく、東南端部には自然礫が集中して出土した。出土遺物は、礫のみであり、口縁部（637～642）と底部（643～646）である。石器は出土しなかった。時期的には、出土した礫の口縁部から前期Ⅰに含まれるが、（641）はやや新しい様相をもっている。

#### S K 2

S K 1と同じ S B 1 の南側に付属する土塙である。第Ⅶ層暗茶褐色粘質土層として明確なプランが確認された。検出面では遺物の出土ではなく、S K 1 に比べ削平もなくよく残されている。

平面形は、長い溝状であり、中央部が僅かに広くなり、北西端部へ狭くなっている。長さは 3.89m、幅は 0.56m を測り、北西端部は丸く終り、東南端部は方形を呈し終っている。長軸方向は N-44°-W であり、深さは 28cm を測り、底面はほぼ平坦であるが中央部がやや深い。東南端部には、長さ 30cm の平場をもっており、深さ 20cm を測り底面に比べ 13cm ほど高い。断面形は箱形を呈し、壁は垂直に立ち上がる。中央部の北、やや狭くなる部分では、礫が内渕し袋状の断面形となる。埋土は第Ⅶ層黒褐色粘質土の單一層である。

遺物の出土状態は、南半部の底面に集中しており、埋土中からの出土はあまり多くなかった。また、北西端部と南半部から平場にかけて自然礫が集中し出土している。出土遺物は、S K 1 と同様に礫のみであり、口縁部（647～652）と底部（653～656）が存在する。時期的には、出土遺物も S K 1 と類似しており、同じく前期Ⅰと考えられるが、如意形に外反する（649）はやや新しい様相をもっており、前期Ⅱに近いと思われる。

#### S K 3

S K 3 は、調査区の中央部、S X 4 のやや南において検出された。検出面は、第Ⅺ層明褐色粘質土層に第Ⅹ層砂礫層の礫が混在しており、プランの確認はやや不明瞭であった。

平面形は、長軸 1.12m、短軸 0.54m を測る楕円形であり、長軸方向は N-81°-E である。深さは 0.10m と非常に浅く、特に南半部は浅く南壁はほとんどみられない。底面は、平坦であり、付属施設はなく、重複関係もみられない。

出土遺物はほとんどなく、礫底部（657）が 1 点図示できたのみであり、埋土、検出面を考えれば、時期的には前期Ⅰと思われる。

#### S K 4

S K 4 は、調査区の中央部の西壁に近く、S B 3 の北西 3.6m の位置に検出された。検出面

は、第Ⅸ層明褐色粘質土層であり、第Ⅺ層砂礫層の礫がかなりみられる。

平面形は、長軸1.41m、短軸1.01mを測る橢円形を呈し、東へやや細くなっている。長軸方向はN-81°-Eとほぼ東西方向にある。深さは35cmを測り、東端部には地表面から8cmと浅い小さな段部をもっている。底面は丸く、壁は緩やかに立ち上がり、断面形はゆるいU字形をなす。埋土は第Ⅶ層と同じ單一の黒褐色粘質土である。

大型壺(661)は、下胴部を底面にへばりつけ、上胴部と口縁部を内部に崩れ落とした状況で出土している。この他に、壺(660、662)、底部(663-666)、土器片転用の紡錘車(667)も出土している。大型壺の出土状態からして、SK4は、壺棺埋葬の土塚ではないかと考えられる。時期的には、前期Iと考えられるが、より新しい様相をもっている。

#### SK5

SK5は、中央部のやや東南より、SB3の東7.2mの位置に検出された。検出面は第Ⅸ層明褐色粘質土層であり、やはり第Ⅺ層砂礫層の礫がみられる。

平面形は、ほぼ円形であり、長軸0.96m、短軸0.79mを測る。長軸方向はN-2°-Eを測る。深さは35cmを測り、周辺部に深さ8cmほどの小段をもち、断面形は逆台形を呈する。埋土は第Ⅶ層と同じ黒褐色粘質土の單一層である。

出土遺物は少なく、壺底部(659)、甕口縁部(658)の2点に若干の細片である。時期的には、出土遺物、埋土などからやはり前期Iと考えられる。

#### SK6

SK6は、SB5の西に隣接して検出された。検出面は第Ⅶ層暗茶褐色粘質土層であり、プランはやや不明瞭であった。

平面形は、やや乱れた長方形であり、長軸3.19m、短軸0.92mを測る。長軸方向はN-43°-Eと東へ振っている。深さは、最深部で0.35mを測り、ほぼ平坦な底面をもつ。北西端部には直径35cmほどの小さな落ち込みがみられ、深さは38cmを測る。断面形は丸味をおびた底面に、逆台形を呈する。埋土は、第Ⅶ層黒褐色粘質土をベースとしており、僅かな色調の違いにより3層に分層された。遺物の出土状況は、床面よりやや浮いた状態でかなり出土しており、南半部に集中していた。

出土遺物としては、壺(668-670)、甕(671-688)、鉢(689)、紡錘車(690)があり、石器は、石包丁(927、928)、管玉(937)が出土しており、他に軽石(950-953)も出土している。石包丁は、石材として四国では産出しない流紋岩質岩が使用されており、搬入品であることが判明している。また、管玉は大きく欠損している。

SK6の性格としては、その形態、出土遺物などから土塚墓ではないかと考えられる。隣接する同形態のSK7の焼分析の結果、土塚内の埋土から多量の焼が検出されている点からみれ

ば、SK6も土塙墓としての可能性が強い。時期的には、出土遺物から、他の遺構と同じく前期Iと考えられる。

#### SK7

SK7は、SK6の南に隣接して検出されている。検出面は、SK6を検出した第VII層暗茶褐色粘質土層では検出できず、下層の第IX層明褐色粘質土層上面において検出する事ができた。

平面形は、長方形を呈し、長軸2.17m、短軸1.12mを測り、SK6に比べやや短く、北壁がやや張り出している。長軸方向はN-4°-Eとほとんど磁北を向いている。床面は若干の起伏をもつがほぼ平坦であり、壁は強く急角度で立ち上がる。特に、北壁は直立気味である。断面形はしっかりとした箱形を呈し、深さは0.27mを測る。埋土は、第VII層と同じ黒褐色粘質土をベースとし、色調の違いにより3層に分層された。

出土遺物は少なく、床面上では南西コーナー付近に数点の細片が出土したのみであり、埋土中からはほとんど出土しなかった。土塙の性格としては、その形態から、SK6と同じく土塙墓と推定され、調査にあわせ実施した構分析でも埋土中に多量の構が含まれており、これを裏付ける結果であった。時期的には、埋土、検出面からSK6と同時期として前期Iと考えたい。

#### SK8

SK8は、SB8の柱穴の内側において検出された。検出面は、SB8と同じく第IX層明褐色粘質土層である。

平面形は、楕円形を呈し、長軸1.46m、短軸1.03mを測り、長軸方向はN-72°-Wである。深さは0.11mと浅く、底面は平坦であるが、東半部に深さ0.19mの落ち込みがみられる。壁の立ち上がりはしっかりとしており、断面形は浅い逆台形である。埋土は、第VII層黒褐色粘質土と同じであるが、西半部では底面から上、5cmほどに炭化物が集中してみられた。しかし、焼土は検出されなかった。

出土遺物は少なく、斐片が数点出土したが細片であり図示できなかった。時期的には、遺物、埋土、検出面などから前期Iと考えられるが、SB8との関係については不明である。

#### SK9

SK9は、ST1の北に隣接しており、SB8と重複関係にある。北にはSB7が隣接している。検出面は、第IX層明褐色粘質土層であるが、上層の第VII層暗茶褐色粘質土中において不明瞭なプランとして認められたが、判別しがたい点が多く、第IX層まで下げて確認した。

平面形は、西へ広くなる長方形を呈し、長軸8.94m、短軸2.76mを測る大形の土塙である。長軸方向はN-62°-Wと東西方向である。深さは0.23mと浅く、底面は平坦である。壁は垂直に近く立ち上がり、断面形は浅い逆台形をなす。埋土は、第VII層と同じ黒褐色粘質土をベース

とし、黄褐色粘質土の小ブロックを含む層と、やや色調の薄い層の3層に分層された。

遺物はやはり少なく、床面よりやや浮いた状態で、壺(691~693)、甕(694~698)、砥石(923)が出土している。時期的には前期Iであるが、SB8との切り合い関係により、SK9がより新しいことが判明している。

#### 性格不明遺構

##### S X 1

S X 1は、調査区の北東部に位置し、S X 2と隣接して検出された。検出面は、第Ⅸ層明褐色粘質土層であるが薄く、第Ⅹ層砂礫層の礫が多量に混在している。また、検出面上においても多量の遺物を出土している。

平面形は染状を呈する不定形であり、長軸は5.65m、短軸は3.68mを測る。長軸方向はN-83°-Wである。深さは約10cmと浅く、床面はほぼ平坦である。床面には9個のビットが検出されており、直径20~30cmを測るが、深さは10cmと浅くその性格は不明である。埋土は黒褐色粘質土であり、ビットの埋土は黒茶褐色粘質土である。

遺物は、埋土中から床面にかけて多量に出土しており、壺(699~710)、甕(711~751)、高杯(752)、鉢(753~755)、蓋(756)がみられる。石器としては磨製石鎌(930)、打製石鎌(932)、削器(938、942)が出土している。時期的には、やや新しい様相も含むが前期Iと考えられる。

##### S X 2

S X 2は、S X 1の東に隣接して検出されており、検出面も同様に第Ⅸ層明褐色粘質土層である。

平面形は、やや扁平な橢円形を呈し、長軸4.27m、短軸2.79mを測る。長軸方向はN-24°-Wであり、深さは0.2m前後を測り、床面は小さな起伏をもつ平坦面をなす。断面形は、浅い皿状を呈し、南壁より小さな張り出しがみられる。床面上には中央部と南部に2個のビットが検出されており、直径は30cmと60cm、深さは10cmと18cmであり浅い。埋土は第Ⅶ層と同じ黒褐色粘質土であり、ビットの埋土は黒茶褐色粘質土である。

遺物の出土状態は、埋土中より多量の出土をみたが、床面上では少なくなってしまい、壺(757~766)、甕(767~793)、高杯(794)、蓋(795)、鉢(796)、紡錘車(797)が出土している。石器では叩石(916)、チャート製の投弾(934)、削器(939)、軽石(954)がみられる。時期的には、前期IIとされる遺物が大半を占め、前期Iの遺物も存在するが、前期IIと考えられる。

##### S X 3

S X 3は、調査区の北半部やや西の位置に検出された。検出面は、第Ⅸ層明褐色粘質土層であり、第Ⅹ層砂礫層の礫が多くみられる。検出状態は、黒い染状であり、プランはあまり明確

ではなかった。

平面形は、不整な橢円形を呈し、長軸3.28m、短軸2.62mを測る。長軸方向はN-28°-Wとやや西へ振っており、深さは0.18mである。床面は平坦であり、北東コーナーに細長く、深さ8cmを測る小さな段をもつ。壁の立ち上がりは南北壁では緩やかであり、断面形は浅い皿状をなす。埋土は、第VII層と同じ黒褐色粘質土の單一層である。

遺物は、埋土中及び床面上からも自然礫とともにかなり多量に出土しており、壺(798-806)、甕(807-820)、蓋(821-823)、小型土器(824)がみられる。石器は、磨製石斧の未成品と思われる(913)、叩石(918)、削器(941)が出土している。時期的には、前期Iの遺物もみられるが、混入であり、前期IIと考えられる。

#### S X 4

S X 4は、S X 3の南東4mに位置し、検出面は第IX層明褐色粘質土層であり、中世と同じ検出面である。

平面形は、やはり不整な橢円形を呈し、長軸3.88m、短軸2.68mを測る。長軸方向はN-48°-Eとなり、深さは28cmを測る。床面は平坦であり、北東コーナーに小さな段部がみられ、深さは9cmである。断面形は浅い逆台形をもち、壁はしっかりと立ち上がる。埋土は、第VII層と同じ黒褐色粘質土層であり、床面上にかけて多量の遺物を出土し、礫も多くみられた。

出土遺物は、壺(825-842)、甕(843-899)、鉢(900、901)、纺錘車(902、903)がみられ、石器では小型石斧(912)、叩石(915)、砥石(921、925、926)、石鎚(933)、削器(940、943、944)、剥片(945-947、949)が出土した。時期的には、前期IIの遺物が主体となっているので前期IIと考えられ、前期Iの遺物もみられるが混入と思われる。

#### ピット

#### P 1

P 1は、E 4-18-1に検出されており、直径36cmと大形である。深さも23cmと深く、埋土は、黒褐色粘質土であり、壺(904)を出土している。

#### P 2

P 2は、E 4-17-24に検出されており、直径21cm、深さ16cmを測る。埋土は、黒褐色粘質土であり、甕(905)を出土している。

#### P 3

P 3は、E 4-22-13に検出されており、直径21cm、深さ12cmを測る。埋土は、やや明るい黒褐色粘質土であり、甕(906)と高杯(907)を出土している。

## 5.まとめ

Loc.16の調査では、竪穴住居址1棟、掘立柱建物址9棟、土塙9基とピットを検出したが、包含層出土遺物、遺構検出面、埋土及び出土遺物などからみて、すべて弥生時代前期前半、すなわち、前期I段階を主体とし一部前期II段階の遺構がみられる。また、これらの遺構は、西のLoc.25、南のLoc.15で検出されている遺構群に続き、高知県内において発見されている弥生集落では、現段階においては最古のものである。Loc.16の遺構の中心は、9棟ほど検出された掘立柱建物址であるが、規模不明のSB3と1×1間のSB4・5、さらにSB1と重複する東西棟のSB2を除けばすべて南北棟であり、東に振る同一の棟方向をもっている。方向性の面をみれば、SB1・3も同じ方向性をもっているといえる。そしてその性格は、SB1は3×6間、SB5は2×5間、SB8は3×5間とはほぼ類似した規模、形態をもち、建物の占める面積もそれぞれ33.9m<sup>2</sup>、19.9m<sup>2</sup>、38.0m<sup>2</sup>であり、あわせて柱穴の大きさ、柱間距離等から観察してみてもこれを平地式の住居と考えざるを得ない。SB2・3・7についても同様に考えられるが、SB6については規模も小さくその内容は不明である。ただ1×1間のSB4・9は、その規模から倉庫と考えざるを得ないところであるが、高床式とするには柱穴が細く、柱間距離も不揃いなどの疑問点があり、問題を残す。

ST1は、直径10mと規模が大きく、多量の土器片転用による小型筋轆車の出土から、特殊な用としての場所を考えさせる。また、中央ピットと床面上から出土している石斧は、きわめて繩文的なものであり、田村遺跡群における弥生文化成立の中に、繩文文化の残影をみることができること。

土塙では、SK4・6・7が壇棺と土塙墓と考えられ、前期前半においては集落内に墓域をも含んでいることが判明した。

これらの遺構群の配置をみた時に、ST1とSB8はきわめて接近しており、また、ST1と性格不明の土塙SK9も同じく接近しており、同時に共存したとは考えられない。SB8とSK9においては、SK9が新しく、SB8が古いという重複関係があり、少なくとも前期Iの時期に2~3段階の時間差が存在する。また、SB5と、土塙墓と考えられるSK6・7の配置もきわめて接近しており、共存は考えがたく、やはり前期I段階における時間差を表わしている。しかしながら現段階では、前期Iの時間差の中における遺構の共存関係を明確にすることはできないが、出土遺物、遺構の配置からみれば、住居址、土塙墓群に比べ、掘立柱建物址は新しい傾向を示していると考えられるが、その細分については今後の検討課題である。

第11表 穫穴住居址計測表

押団番号	遺構番号	平面形	規模(m)	主軸方向	柱穴	面積(m <sup>2</sup> )	施設	備考
第4図	S T 1	円形	10.02	—	8	78.8	中央ピットおよび壁ピット	

第12表 据立柱建物址計測表

押団番号	遺構番号	規 模			棟方向	面積(m <sup>2</sup> )	備考
		梁(間)×桁(間)	梁×桁(m)	柱間距離(m)			
第5図	S B 1	3×6	3.50×7.50	1.10~1.52(1.25)	N-46°-E	26.3	
第6図	S B 2	3×6	4.00×7.20	0.98~1.14	N-40°-W	28.8	
#	S B 3	—	—	1.06~3.16	N-36°-E	—	
第7図	S B 4	1×1	2.30×4.24	2.22~4.24	N-67°-E	9.8	
#	S B 5	2×5	3.28×6.40	0.72~1.50	N-21°-E	21.0	
第8図	S B 6	1×3	2.45×4.96	1.37~1.99	N-22°-E	12.2	
#	S B 7	1×5	3.90×6.40	0.98~1.76	N-21°-E	25.0	
第9図	S B 8	3×5	4.16×7.92	1.16~1.58	N-33°-E	33.0	
#	S B 9	1×1	2.00×2.22	1.71~2.22	—	4.4	

第13表 土 塚 計 測 表

押団番号	遺構番号	平面形	規 模(m)			長軸方向	断面形	備考
			長径	短径	深さ			
第10図	S K 1	不整長方形	3.28	0.48	0.15	N-40°-W	逆台形	
#	S K 2	#	3.89	0.55	0.28	N-44°-W	箱形	
#	S K 3	楕円形	1.12	0.54	0.10	N-81°-E	逆台形	
#	S K 4	#	1.41	1.01	0.35	N-81°-E	U字形	
第11図	S K 5	円形	0.96	0.79	0.35	N-2°-E	逆台形	
#	S K 6	長方形	3.19	0.92	0.35	N-43°-E	#	
#	S K 7	#	2.17	1.12	0.27	N-4°-E	椭形	
#	S K 8	楕円形	1.46	1.03	0.11	N-72°-W	逆台形	
第12図	S K 9	長方形	8.94	2.75	0.23	N-62°-W	#	

第14表 包含層出土土器観察表

標図番号	層位	器種	法長 (cm) 口徑 最高 最低 直径	形態・文様	手 法	備 考
1	新宿層	壺	10.4 (5.0) — —	小さく外反し、口縁端部はやや面をなす。頸部よりやや開き有段はみられない。	外面はへラ磨きであるが単位は不明。内面は磨耗のため不明。指頭圧痕をわずかに残す。	全体にやや磨耗する。
2	H	壺	10.9 (4.4) — —	短く外反し、口縁端部を丸くおさめる。頸部より直線的に開き、有段はみられない。	内外面とともにへラ磨きであるが、単位は不明。	
3	H	壺	14.2 (3.0) — —	短く、やや強く外反し、口縁端部は丸くおさめる。頸部は直立気味であり、有段はみられない。	内外面とともに磨耗のため不明。	内外面ともに器面が剥落する。
4	H	壺	17.5 (3.7) — —	緩やかに短く外反し、口縁端部は丸くおさめる。有段部はみられない。	内外面とともにへラ磨きであるが、単位は不明。内面はやや磨耗する。	胎土はやや粗く、焼成も不良。
5	H	壺	15.1 (6.6) — —	短く、やや外反し、口縁端部は丸くおさめる。頸部は直立気味に開き、有段部はみられない。	内外面とともにへラ磨きであるが、単位は不明。	1~2mmの砂粒を多く含む。
6	H	壺	14.6 (7.5) — —	やや直線的に外反し、口縁端部は丸くおさめる。頸部は直立気味に開き、有段部はみられない。	内外面とともに横方向のへラ磨きであり、横方向の単位がみられる。	内面は大きく剥落する。
7	H	壺	13.2 (12.5) — —	直線的に開く頸部に小さく外反し、上側部に4条、頸部中央に2条のへラ磨き溝がみられ、その間に6~7条の鉛行文、その上に5本半段の横縞を配す。	内外面とともに横方向のへラ磨きがみられる。	全体に磨耗が激しく表面が小さく剥落する。
8	H	壺	15.7 (10.0) — —	緩やかに外反し、口縁端部は面をなす。上側部に小さな有段部をもつ。	内外面とともに横方向のへラ磨きがなされ、内面は口縁部、外面は頸部に磨きの単位がみられる。	内面の下部は磨耗が激しい。
9	H	壺	10.8 (3.8) — —	小さく外反し、口縁端部は丸くおさめる。口縁部にへラ押えによる不明瞭な段部がみられる。	内外面とともにへラ磨きであるが、単位は不明。	1~2mmの砂粒を多く含む。
10	H	壺	13.8 (4.8) — —	やや直線的に立ち上がり強く外反し、口縁端部は丸くおさめる。口縁部にややならかな段部がみられる。	*	外面はやや磨耗する。
11	H	壺	11.4 (5.2) — —	やや外反気味に立ち上がる頸部より、口縁部は傾く外方へ屈曲する。口縁端部は丸くおさめ頭間に有段部をもつ。	口縁部は内外面とともに若干の指頭圧痕を残しあコナデ。	
12	H	壺	9.0 (10.7) — —	最大径を半火炎や下方にもち、よく傾いた頸部から直線的に浅く内傾し立ち上がり、口縁部は短く外反する。口縁間に有段部をもつ。	外面はへラ磨きであるが、単位は不明。内面は磨耗する。頭部最高直径は2条のへラ磨き溝、上側部には3~4条1組の直弦文を配す。	胎土は焼造され度も良好、1mm以下の砂粒をやや含み、1mm前後の砂粒も含む。
13	H	壺	14.8 (2.2) — —	やや小さく外反し、口縁端部は丸くおさめる。口縁間に有段部をもつ。	内外面とともに磨耗し、部分的に剥離する。内面にはへラ磨きの痕跡がみられる。	
14	H	壺	16.0 (3.0) — —	直立気味の頸部より緩やかに外反する。口縁端部は丸くおさめ、口縁間に有段部をもつ。	内外面とともにタコナデ。	1~2mmの砂粒を少量含む。
15	H	壺	15.7 (3.5) — —	直立気味の頸部より緩やかに外反する。口縁端部は丸くおさめ、口縁間に有段部をもつ。	内外面とともにタコナデ。外面にはへラ磨きの痕跡がみられる。	有段部下に接合痕がみとめられる。

検査番号	部位	器種	法量 (cm) 口唇 最高 最低 差	形態・文様	手法	備考
16	第Ⅳ唇	雌	14.7 ( 5.8 ) — —	やや外反する頬部より直立し強く外方に膨張する口縁部。端部は丸くおびただす。口脣間に有段部をもつ。	口縁部はヨコナデ。他は不明。	有段部下に接合部がみとめられる。
17	#	#	14.9 ( 5.3 ) — —	頬部から口縁部にかけて緩やかに外反する。端部は丸くおさめ、口脣間に有段部をもつ。	外間にへラ磨きの痕跡がみられるが、内面は磨耗のため不明。	全体にやや磨耗する。
18	#	#	14.2 ( 4.8 ) — —	直立気味の頬部より、口縁部は強く外方に膨張する。端部は丸くおさめ、口脣間に有段部をもつ。	外間に全周へラ磨きだが、口縫下にのみ横向方向の痕跡がみられる。内面は磨耗のため不明。	
19	#	#	17.6 ( 3.8 ) — —	直線的に小さく屈曲する口縁部。端部は丸くおさめ口脣間に有段部をもつ。	外間に横方向のやや粗いへラ磨きがなされるが、内面は磨耗のため不明。	有段部に接合部がみられ、粘子の接合により有段部を形成する。
20	#	#	17.1 ( 4.0 ) — —	直立する頬部より、口縁部は強く外方に屈曲する。端部は面をなし、口脣間に有段部をもつ。	外表面とともにナデ調整の他は不明。	やや磨耗が強い。
21	#	#	16.8 ( 3.1 ) — —	短く外反する口縁部。端部は丸くおさめ、口脣間に有段部をもつ。	外表面は鴨の広いへラ磨きがみられる。内面は磨耗により不明。	有段部より欠損する。
22	#	#	17.8 ( 5.1 ) — —	口唇に比して、やや長い口縁部であり、緩やかに外反する。端部は丸くおさめ、口脣間に有段部をもつ。	外表面とともにヨコナデに、指頭圧感を若干残す。	唇厚が厚くしっかりしている。有段部で欠損する。
23	#	#	16.8 ( 2.8 ) — —	短く直立し、強く外方に膨張する。端部は丸くおさめ、低い有段部をもつ。	外表面にへラ磨きの痕跡が若干みられる。	有段部から欠損する。
24	#	#	15.6 ( 3.7 ) — —	直立し、若干内側気味に開く。端部は丸くおさめ、口脣間に有段部をもつ。	外表面に横方向のへラ磨きがなされる。	
25	#	#	13.9 ( 3.5 ) — —	直線的に開く。口縫端部は更になす。口脣間にしっかりと有段部をもつ。	外表面とともにへラ磨きであるが、方向・単位は不明。有段部はやや厚壁が厚く粘付により段部を形成する。	1mm以下の細砂粒を多く含む。
26	#	#	13.3 ( 3.4 ) — —	やや外反しつつ直線的に開く。口縫端部は丸くおさめ、面をなす。口脣間に有段部をもつ。	口縫部はヨコナデ。他は不明。有段部はやや厚壁が厚く粘付により段部を形成する。	1~3mmの砂粒を多く含む。
27	#	#	18.8 ( 2.6 ) — —	短くやや外反し開く。口縫端部は面をなし、口脣間に有段部をもつ。	外表面に横方向のへラ磨きがみられるが、外表面は磨耗のため不明。	
28	#	#	14.0 ( 3.0 ) — —	緩やかに外反し開く。口縫端部は丸くおさめ、口脣間に有段部をもつ。	外表面とともにナデ調整。	有段部より欠損する。
29	#	#	18.3 ( 3.2 ) — —	直立気味の頬部より弱く、直線的に開く。端部は丸くおさめ、口脣間に有段部をもつ。	口縫部外回は横方向、裏面は縱方向のへラ磨きがなされるが、単位は不明。内面はナデ調整。	口縫部附近により肥厚し、有段部を形成する。
30	#	#	17.5 ( 7.0 ) — —	直線的に開く頬部より、やや外反し大きく開く口縫部をもつ。端部は丸くおさめ、口脣間に低い段部をもつ。	口縫部はヨコナデ。以下は内外面ともに縱方向にナデ調整。有段部はへラ押圧により形成する。	焼成良好。

辨認番号	層位	器種	法長 (cm.)	口端部 側面 側面	形態・文様	手 法	備 考
31	第Ⅷ層	漆	17.8 ( 3.5 ) —	直立する頭部より小さく外反する 口縫部。端部は丸味をおびた面を なし、低い段部をもつ。	内外面ともにヨコナデ。有段部も 低いナデにより低く形成される。	有段部にて欠 損。	
32	#	#	16.6 ( 3.8 ) —	頭部から強く外反する口縫部。 端部はやや歯をなし、口縫間に低 い段部をもつ。	口縫部内面に横方向のやや広い ヘラ巻き。外面もヘラ巻きがなさ れるが方向は不明。有段部は沈線 により、形成される。		
33	#	#	14.0 ( 8.7 ) —	直線的に開く頭部より、なだらか に外反する口縫部。端部は丸くお さめに頭間に低い段部をもつ。	内外面ともに丁寧なナデ調整。 有段部はヘラ押圧により形成する。	成良好。胎 土も堅致であ り、胎壁は厚 い。	
34	#	#	22.0 ( 3.0 ) —	緩やかに外反する口縫部。端部は 丸味をおびた面をなす。	内外面ともにヘラ巻きであるが、 方向・部位は不明。		
35	#	#	22.0 ( 2.2 ) —	大きく直線的に開く。口縫端部は 面をなす。	内外面ともにナデ調整。内面には 横方向のハケ目を残す。		
36	#	#	19.0 ( 4.4 ) —	直線的に開く頭部より、やや外反 し開く口縫部。端部は丸くおさめ、 口縫間に段部をもつ。	内外面ともにナデ調整と思われる。	全体に磨耗す る。	
37	#	#	26.6 ( 3.0 ) —	やや外反し、大きく開く口縫部。 端部は丸くおさめる。	内面に一部横方向ヘラ巻きがみ られるが、外面は不明。		
38	#	#	22.4 ( 5.4 ) —	直立気体の頭部より、直線的に開 く口縫部。端部は面をなし、口縫 間に強い段部をもつ。	内外面に横方向の不明瞭なヘラ巻 きがみられる。口縫部の胎壁は厚 く、輪付により有段部を形成する。 有段部下に低いヨコナデ。	全体にかなり 磨耗する。	
39	#	#	29.8 ( 2.6 ) —	大きく直線的に開く口縫部であり、 端部は面をなす。外面に右下か りの斜行する一本の沈線が一部み られる。	内外面ともに磨耗のため不明。		
40	#	#	19.6 ( 6.4 ) —	直線的に開く頭部より若干外反 し開く口縫部。端部は丸くおさめ、 口縫間に低い段部をもつ。	外面にヨコナデ、内面は磨耗のた め不明。右段部はヘラ压痕とヨコ ナデにより形成。		
41	#	#	25.4 ( 3.3 ) —	やや外反し、開く口縫部。端部は 丸味をおびた面をなす。	内外面に強いヨコナデ。		
42	#	#	25.0 ( 2.5 ) —	直線的に開く口縫部であり、端部 は輪付によりやや肥厚し、丸味を おびた面をなす。	内外面ともに不明。	胎壁が激しく 表面が剥落す る。	
43	#	#	(29.5) (10.2) —	直線的に開く頭部。口縫間に段部 をもつ。右段部のやや上から強烈 に壓曲し縮く。	外面に若干のナデ調整がなされる 以外は不明。口縫部は胎壁が厚く、 輪付により有段部を形成する。	口縫端部も大 幅に剥落して いる。	
44	#	#	16.0 ( 3.0 ) —	緩やかに外反し、口縫端部は丸味 をおびた面をなす。	外端はナデ調整。内面は不明。	やや磨耗が激 しい。	
45	#	#	15.6 ( 4.5 ) —	強く外反し、開く。口縫部はやや狭 く外見ナデ、上端はやや狭をな す。	内外面ともに不明。	磨耗が激しい。	

神田番号	層位	器種	法量 (cm)	口縫部 開閉 膜厚	形態・文様	手法	備考
46	第Ⅳ層	透	19.0 (6.0) — —	縫部より度立し、短く外反し屈曲する口縫部。縫部は丸味をおびた面をなす。口縫間に有段をもつ。	内外面ともにナデ調整にヘラ磨き。ヘラ磨きは磨耗により不明顯。	1~2mmの砂紙を多量に含む。	
47	#	#	18.4 (3.7) — —	縫やかに外反する口縫部。縫部はナデによりやや凸面をなし。口縫間に有段をもつ。	口縫部ヨコナデ。		
48	#	#	20.4 (3.9) — —	直線的に開き、さらにやや屈曲して閉く。口縫部は面をなし。口縫間に有段をもつ。	内外面ともにナデ調整。口縫部は貼付により肥厚し、有段部を形成する。	前面に複合紙がみられる。	
49	#	#	20.8 (8.7) — —	縫やかに外反する限界より縫やかに繰り返す口縫部。口縫部は丸味をおびた張をなし。口縫間に有段をもつ。	口縫部内外面は横方向へのヘラ磨き。口縫部外側はテハケの後、他の方向へのヘラ磨きがなされ。有段部はヘラ押圧および押出しにより形成する。	施成良好。1~2mmの砂紙を多く含む。	
50	#	#	22.4 (3.8) — —	直立気味に立ち上がり、やや屈曲して閉く。口縫部は丸味をおびた面をなし。口縫間に有段をもつ。	口縫部内外面は横方向のヘラ磨きであるが、内面は単位不明。		
51	#	#	26.4 (4.3) — —	直立気味に立ち上がり、屈曲し開く。口縫部は丸味をおびた面をなし。口縫間に強い有段をもつ。	内外面ともにヘラ磨きがなされるが単位は不明。有段部にテハケが一部みられる。口縫部外側に貼付により段部を形成する。	前面に複合紙がみられる。	
52	#	#	18.0 (13.5) — —	縫やかに外反し立ち上がる限界より。口縫部は小さく外反し閉く。口縫間に有段をもつ。無縫には5本一组の斜行するヘラ捺沈線を配す。	外側はテハケの後に幅広の横方向へのヘラ磨きがなされ、内面も同じく横方向のヘラ磨きがなされる。	よく磨かれているが、内面は磨耗する。	
53	#	#	27.6 (4.1) — —	縫やかに外反し、開く口縫部。縫部は面をなし。口縫間に有段をもつ。	内外面ともに背面が剥落し不明。外側に一部ヘラ磨きの跡がみられる。	磨耗が激しい。	
54	#	#	29.8 (5.5) — —	直線的に外傾し立ち上がった後に強く屈曲し閉く口縫部。縫部は丸味をおびた張をなし。口縫間に有段をもつ。	内外面ともに横方向のヘラ磨きがなされる。		
55	#	#	19.6 (11.5) — —	縫やかに外反する縫部より、直立した後に小さく外反する口縫部。縫部は丸くおさめ、口縫間に有段をもつ。	内外面ともに肥厚しており不明。口縫部は貼付により器壁が厚く、段部を形成する。	粘土がもろく、焼成不良。	
56	#	#	27.8 (11.4) — —	直立気味に立ち上がる限界から短く屈曲し閉く口縫部。 口縫部は丸味をおびた張をなし。口縫間に有段をもつ。	内外面ともに丁寧なヘラ磨きがなされるが、単位は不明。有段部は縫合により形成され、ヘラによるナデで調整する。	断面に2ヶ所の接着部がみられる。器壁がかなり厚い。	
57	#	#	24.6 (10.3) — —	縫やかに外反し立ち上がり、口縫部の口縫部にかけて、強く外反し開く。口縫下はナデにより浅い辺縁状になる。	口縫部は強いヨコナデ。以下はナデ調整をヘラ磨き。	口縫部内面に丸味あり。口縫部軸面に複合紙がみられる。	
58	#	#	23.8 (3.8) — —	直線的に開く口縫部。縫部は丸くおさめる。	口縫部ナデ調整。	器壁をきわめて厚い。	
59	#	#	16.5 (3.2) — —	直立する限界より強く屈曲し、開く。口縫部は丸くおさめ、口縫間に2条のヘラ捺沈線を残す。	内外面ともに丁寧なヘラ磨き。	施成は良好。粘土は堅硬である。	
60	#	#	29.5 (5.5) — —	直立する限界から直線的に開く。口縫部は丸味をおびた張をなし。口縫間に突唇を貼付し、割目を残す。	内外面ともに丁寧なナデ調整。	粘土、焼成とともに良好。	

特因番号	肩位	種類	法量 (cm)	口徑 最高 開度 底径	形態・支撑	手 法	備考
61	暴 雷 層	壹	17.3 ( 4.1 ) — —	直立する頭部より、緩やかに外反し、口縫部は丸くおさめる。口輪間にナゲにより低い突起状の有段を形成する。	口縫部はナゲ調整。		
62	#	#	26.9 ( 3.9 ) — —	なめらかに外反し、聞く。口縫部上には丸味をおびた面をなし、下部に小さな割目を施す。口輪間に割目を施す突起を貼付し、直上にヘラ縫合線を配す。	内外面とともに磨耗する。	脇壁は厚い。	
63	#	#	12.8 ( 5.0 ) — —	直線的に立ち上がる頭部より強く屈曲し、口縫部は丸くおさめる。口縫部に突起状の有段をもつ。	外面はヘラ磨きがなされるが、部位は不明。	#	
64	#	#	27.8 ( 5.1 ) — —	直線的に聞き、やや外反する。口縫部には丸味をおびた面をなし、小さな割目を施す。口縫部にナゲにより突起状の有段をもつ。	口縫部内面に横方向のヘラ磨きが一部みられる。外面はナゲ調整。	造成良好、堅致である。脇壁も厚い。	
65	#	#	13.9 ( 7.0 ) — —	直線的に立ち上がる頭部より強く外反する。口縫部はナゲにより凹む面をなし、口縫部にナゲにより突起状の有段をもつ。	口縫部内外面はヨコナデ。脇壁外側は縱方向のヘラ磨きを施す。		
66	#	#	32.2 ( 4.8 ) — —	直立する頭部から強く外反する。口縫部は面をなし、有段をもつ。	内外面とともに横方向のヘラ磨きを施す。	脇壁は厚い。	
67	#	#	38.8 ( 4.3 ) — —	やや直線的に聞き、口縫部はナゲにより凹む面をなし。口輪間に口縫部外面貼付によるなだらかな有段がみられる。	外面はヨコナデ。内面はヨコハケをナゲ調整。		
68	#	#	38.4 ( 22.3 ) — —	直立立体的に立ち上がる頭部より、直線的に強く聞く。口縫部は小さな面をなし、口輪間に水平な段面をもつ。	内外面とともに横方向のヘラ磨きが施される。口縫部は外縫合筋により、やや肥厚し、有段部を形成する。	内面は厚井が重しく、口縫部に黒斑がみられる。	
69	#	#	— ( 7.1 ) 9.6 —	球形の頭部であり、最大径を若干上部にもつ。上頭部に4条、最大径に2条を施し、その間に5本1組の重縫合線を配す。	内外面とともに丁寧なナゲ調整。	1 mm以下の砂粒を含み、茶褐色を呈する。在地の土器で見られる入糞である。	
70	#	#	— ( 5.0 ) 15.7 —	よく開いた頭部をもち、胸頭間に強くナゲられる有段部。その下に2条、最大径に3条のヘラ縫合線を施す。その間に5本1組の斜行縫合を配す。	内外面とともにナゲ調整。有段以下の沈縫には後縫合部がみられる。	1~2 mmの砂粒を多く含み、磨耗する。	
71	#	#	— ( 14.6 ) 19.8 8.1	しつかりした円板状の頭部より最も大径を中心にもつ明瞭な立上る。上頭部には有段部をもち、後縫合部と最大径に2条のヘラ縫合線を施す。その間に3本1組の斜行縫合を配す。	内外面とともにナゲ調整であるが、かなり磨耗する。	1~2 mmの砂粒を多く含み、軟致である。	
72	#	#	— ( 3.3 ) — —	上頭部片であり、胸頭間に有段部がみられる。段部の上に1条の浅いヘラ縫合線を配す。	内外面とともにナゲ調整。		
73	#	#	— ( 1.8 ) — —	有段部をもつ上頭部であり、頭部の下に3条のヘラ縫合線を配す。	調整は不明。		
74	#	#	— ( 4.1 ) — —	不明瞭な有段をもつ上頭部であり、頭部の上に1条、下に2条のヘラ縫合線をもち、以下に2本以上の沈縫による重縫合を配す。	内外面とともにナゲ調整。		
75	#	#	— ( 12.4 ) 30.9 —	なだらかに張った頭部であり、胸頭間に4条、最大径に、やや歪められたヘラ縫合線をもつ。	頭部外側に右下がりの横方向のヘラ磨きが部分的にみられる。内面はナゲ調整。	内面に黒斑がみられる。	

持田番号	層位	器種	法量 (cm)	口徑 脛高 胸徑 底径	形態・文様	手法	備考
76	系縁層	壺	— (8.1) 28.9 —	よく張った胴部であり、わずかに段部を残す。	内外面ともに磨耗のため不明。	有段部の下に黒斑がみられる。	
77	〃	〃	— (8.0) — —	有段部をもつし胴部である。	頭部外側に横方向のヘラ磨きがなされる。		
78	〃	〃	— (20.0) 25.1 —	最大径をやや上部にもつ、よく張った胴部である。胴腹間になどらかな有段をもつ。	内外面ともに横方向のヘラ磨きがなされるが、内腹下部は磨耗する。段部はヘラ押圧をナデにより形成される。	下脇部に大きな黒斑がみられる。	
79	〃	〃	— (12.5) 26.1 —	張りの弱い、やや偏平な胴部。胴腹間に無り出しによる有段をもつ。	外面はヘラ磨きを施すが、方向不明。内面は剥落しており不明。	磨耗が激しい。	
80	〃	〃	— (10.9) 34.6 —	頸部より強く張った胴部。胴腹間に有段をもつ。	頭部外側、有段部の下に横方向のヘラ磨きを施す。内面はナデ調査、指頭压痕を残す。		
81	〃	〃	— (7.7) — —	などらかに張りをみせる胴部。浅い比較をナデにより有段部を作出し、下に2条のヘラ横沈線と2本1組の4cm幅の直線文を配す。	内外面ともに磨耗するが、ナデ調査。	東洋文と下部に小さく斜角をもつ部分がみられる。	
82	〃	〃	— (13.0) —	直線的に内傾し、立ち上がる上胴部。胴腹間に有段をもつ。	内外面とともにヘラ磨きがなされるが、内面の一部を剥離磨耗する。	頭部に黒斑がみられる。	
83	〃	〃	— (11.0) — —	直線的に内傾し、立ち上がる上胴部。胴腹間にしっかりと有段をもつ。	外面は不均整なヘラ磨きがなされるが、内面は磨耗のため不明。		
84	〃	〃	— (8.8) 48.0 —	などらかに張りをもつし胴部。胴腹間に無い有段部をもち、下に1条のヘラ横沈線を施す。	内外面ともに磨耗し不明。		
85	〃	〃	— (2.2) — 7.7	円板状の平底である。	外面にヘラ圧痕、内面にも、ヘラで削った痕跡がみられる。	2~3mmの砂粒が多く含む。	
86	〃	〃	— (2.0) — 7.2	平底から大きく開き立ち上がる。	外面は一部ヘラ磨きがみられ、指頭压痕を残す。内面は剥落が激しい。		
87	〃	〃	— (2.8) — 9.1	平底から、ややしゃくれをもち、大きく開く。	外面は横方向のヘラ磨きがみられるが、内面は磨耗のため不明。		
88	〃	〃	— (2.8) — 7.9	平底から、などらかに開き、立ち上がる。	内外面ともにナデ調査。		
89	〃	〃	— (2.9) — 8.8	円板状の平底から、などらかに立ち上がる。	内外面ともに横方向のヘラ磨きがなされる。	断面に複合模がみられる。	
90	〃	〃	— (3.4) — 7.6	円板状の平底から、内面丸味に立ち上がる。	内外面ともに磨耗のため不明。		

神戸番号	層位	器種	法量 (cm)	口径 基部 底径	形態・文様	手法	備考
91	第Ⅳ層	瓶	— (4.2) — 8.8	全體にやや凹む円板状の底盤より大きく開きながら立ち上がる。	外面ともナテ調整。	断面に複合模がみられる。	
92	II	II	— (3.8) — 7.9	やや丸味を帯び、しゃくれる平底である。	外縁は、斜めのヘラ磨きがみられ、内面はナテ調整。	外縁に黒斑がみられる。	
93	II	II	— (3.5) — 8.1	しっかりとした厚い円板状の平底から、大きく開き、立ち上がる。	外面ともに磨耗しており不明。	断面に複合模がみられる。	
94	II	II	— (4.2) — 8.4	平底から、ややしゃくれ、内湾気味に立ち上がる。	外面はタテハケの後、下部は横方向、上部は縱方向のヘラ磨きがなされ、内面はタテハケ調整。	外面に黒斑がみられる。	
95	II	II	— (2.6) — 9.7	厚い円板状の平底である。	外面に、やや斜めのタテハケ調整の痕跡がみられる。		
96	II	II	— (2.4) — 10.0	全體にやや凹む平底から、丸味を帯びしゃくれをもつ。	外面ともにナテ調整。		
97	II	II	— (2.9) — 10.0	内部が、なだらかに凸曲し、中央部がやや薄くなる円板状の平底。内湾気味に立ち上がる。	外面ともに磨耗しており不明。		
98	II	II	— (3.3) — 10.2	平底から、丸くしゃくれをもち、立ち上がる。	II		
99	II	II	— (4.9) — 10.2	しっかりした平底から小さくしゃくれ、立ち上がる。	外面は横方向のヘラ磨きがなされるが、内面は磨耗のため不明。		
100	II	II	— (4.3) — 7.3	やや小さな平底から丸くしゃくれ、大きく開き、立ち上がる。	外面に横方向のヘラ磨きがなされ、内面はナテ調整。		
101	II	II	— (3.8) — 8.1	平底からなだらかに開き、立ち上がる。	外面下端にタテハケ目を残し、左上がりのヘラ磨きを施す。内面もヘラ磨きを施す。		
102	II	II	— (4.2) — 9.1	中央部がやや凹む、しっかりした底盤よりなだらかに立ち上がる。	外面はナテ調整。内面には指痕压痕を残す。		
103	II	II	— (3.7) — 8.5	平底からなだらかに開き、立ち上がる。	外面ともにナテ調整。	断面に黒斑がみられる。	
104	II	II	— (4.5) — 9.0	中央部がやや凹むと思われ、なだらかに立ち上がる。	外面にヘラ磨きの痕跡がみられる。		
105	II	II	— (4.5) — 8.0	やや円板状の厚い平底から内湾気味に立ち上がる。	外面ともにナテ調整。指痕压痕を残す。		

持田番号	層位	器種	法量 (cm) 頭高 胸徑 底径	形態・文様	手法	備考
106	第Ⅳ層	壺	— ( 4.7) — 9.9	中央部がやや凹む円板状の平底から内溝しつ立ち上がる。頸部の器壁は薄い。	内外面とともにナテ調整。	1~2mmの砂粒を多く含む。
107	#	#	— ( 3.9) — 8.6	平底から大きく開き立ち上がる。	内外面とともに磨耗のため不明。 底部脇の幾何面が剥離しており、ハケ目がみとめられる。	断面に接合痕がみられる。
108	#	#	— ( 4.1) — 10.4	非常に厚い円板状の平底から緩やかに内溝気孔に立ち上がる。	外面はヘラ磨きが施され、内面はナテ調整。	器壁が厚い。
109	#	#	— ( 5.1) — 8.2	中央部がやや凹む平底から小さくしゃくれ、真縦的に開く。	外面にタテハケが若干みられる。 内面はナテ調整。	
110	#	#	— ( 6.3) — 9.2	しっかりとした平底から内溝気孔に立ち上がる。	内外面ともに磨耗のため不明。	
111	#	#	— ( 5.8) — 10.1	小さくしゃくれる平底から、なだらかに開く。	内外面ともにヘラ磨きがなされるが単位は不明。	断面に接合痕がみられ、外側には黒斑がみられる。
112	#	#	— ( 3.7) — 12.2	円板状の平底から大きく開き、立ち上がる。	外面に若干のタテハケがみられ、内面はナテ調整。	断面に一部、黒斑がみられる。
113	#	#	— ( 4.3) — 11.0	平底から内溝気孔に立ち上がり、開く。	外面はタテハケの後、斜めのヘラ磨きが施され、下端にはヘラ压痕がみられる。内面は器面が剥落する。	断面に接合痕が1ヶ所みられる。
114	#	#	— ( 3.9) — 12.5	平底から、しゃくれをもち、立ち上がる。	外面はやや右上がりと左上がりのヘラ磨きを施され、下端にタテハケが若干残す。内面はナテ調整。	断面に接合痕がみられる。
115	#	#	— ( 4.2) — 10.7	かなり厚い平底から丸味をもち、なだらかに立ち上がる。	外面は横方向のヘラ磨きがなされるが、内面は器面が剥落する。	
116	#	#	— ( 4.4) — 11.1	平底から、なだらかに開き、立ち上がる。	外面に右下がりのヘラ磨きが施されるが、やや磨耗する。内面は器面の剥離が激しい。	外面に黒斑がみられる。
117	#	#	— ( 4.7) — 9.4	平底から直線的に開き、立ち上がる。	外面は磨耗し、若干のヘラ磨き痕を残す。下端にはタテハケが残される。内面は器面が剥落する。	
118	#	#	— ( 5.4) — 10.3	中央部がやや凹む、非常に厚い平底から大きく開き、立ち上がる。	内外面ともに磨耗のため不明。	
119	#	#	— ( 5.0) — 12.7	非常に厚い円板状の平底から、なだらかに立ち上がる。	内外面に、若干のヘラ磨き痕を残す。	全体にかなり磨耗する。断面に黒斑がみられる。
120	#	#	— ( 4.7) — 10.2	中央部がやや凹む平底から、なだらかに内溝し開く。	内外面ともに器面が剥落する。	磨耗が激しい。

神田番号	層位	器種	法量 (cm)	口括 脛高 脛底	形態・文様	手法	備考
121	第四層	壺	- (6.1) - 13.6	中央部がやや凹む非常に厚い底部から直線的に開く。	外側は下端部にタテハケを残し、横方向のヘラ磨きがなされる。内面は磨耗し、表面が剥落する。	新面に接合部がみられる。	
122	#	#	- (5.3) - 11.0	非常に厚い底から内湾気味に大きく開き立ち上がる。	外周、下部に横方向のヘラ磨きが施され、内面はナナ調整。		
123	#	#	- (9.0) - 9.7	円板状の平底から直線的に開き、立ち上がる。	外側は横方向のヘラ磨きがなされ、内面は磨耗のため器底が崩落する。	外周下部に黒斑がみられる。	
124	#	#	- (5.8) - 15.5	中央部が若干凹む円板状の平底から内湾気味に立ち上がる。	内外面ともにナナ調整。		
125	#	#	- (9.5) - 15.3	周辺部が、やや凹む平底から、なだらかに立ち上がる。	外側は部分的に横方向のヘラ磨きがみられる。内面はナナ調整。		
126	#	#	- (3.5) - 12.0	中央部が、やや凹む非常に厚い平底である。	外側はナナ調整され、底面はヘラ磨きが施される。	外面上部に黒斑あり。	
127	#	盤	18.0 (2.9) -	直立し、やや開く口括部。端部はナナ調で横張り有段部をなし、刻目を施す。口括下部に有段部をもつ。	口括部と段部はヨコナナ。		
128	#	#	20.4 (4.6) -	直線的に開き、小さく外反する。通常は外傾する面をなし、やや拡張され下邊に刻目を施す。口括下部に小さな段部をもち、下邊に刻目を施す。	口括部はヨコナナによるが、下部は磨耗により不明。		
129	#	#	25.2 (5.3) -	直立し、端部はやや強く外反する。通常下邊に突起を貼付。ナナ調により外傾する面をなし、刻目を施す。口括下5cmに有段部をもつ。	口括部の突起上に指痕底痕を残す。有段部の間はタテハケを施す。有段部は接合により形成する。		
130	#	#	27.0 (5.0) -	やや外反し直立する口括部。端部は外傾する面をなし、刻目を施す。口括下5cmに有段部をもつ。	口括部はヨコナナ。有段部の間は外側タテハケ、内面は水平と右上がりのヨコハケが施される。		
131	#	#	24.6 (12.9) -	直立する端部から、やや外反する口括部。直下に突起を貼付。端部を内傾し、下邊に刻目を施す。口括下9cmになだらかな段部をもつ。	外側は突起と有段部の下に粗目のタテハケ。有段部の上部と内面はナナ調整。	有段部には、7mmと長い刻目をやや斜めに施す。	
132	#	#	21.9 (7.2) -	直立する口括部。端部はやや同じく外傾する面をなし、外端に小さな刻目を施す。口括下3cmに低い縦屈折状の有段部をもつ。	口括部および、有段部上はヨコナナにより仕上げ。他はタテハケを施す。内面はナナ調整。		
133	#	#	29.2 (5.6) -	やや外反し直立的に開く。口括端部は丸くおさめ、刻目を施す。上部に弱い有段部をもつ。	口括部と有段部はヨコナナにより仕上げ。外側はタテハケ、内面はヨコハケである。		
134	#	#	19.9 (8.4) -	丸形に外反し、強く屈曲する。端部は丸くおさめ、刻目を施す。上部に弱い有段部をもつ。	外側に右下がりのタテハケを施し、口括部内面はヨコハケで仕上げる。	全体に磨耗する。	
135	#	#	28.4 (5.2) -	大きめ横やかに外反する。口括端部は丸くおさめ、大きめの刻目を施す。口括下5cmに有段部をもつ。	外側はタテハケを施し、内面はナナ調整。	口括部外側に黒斑がみられる。	

神田番号	肩位	筋種	法量 (cm)	口縫 筋部 側性 底性	形態・文様	手 法	備考
136	第Ⅳ層	横	27.0 (3.8) —	如彎形に強く外反する口縫部。端部は丸くおさめ、下端に刻目を施す。口縫下部に沈線により若干の段階がみられる。	内面はヨコハケの後ヨコナデ。外面もヨコナデを施す。	繰出する。	
137	II	II	23.4 (11.5) —	上端部に有段部をもち直立し、如彎形に強く外反する口縫部。端部は丸くおさめ、上面に刻目を施す。	外面は全面に右下がりのタテハケが施され、内面はナデ調整。		
138	II	II	22.1 28.4 — 8.4	直立気味に立ち、じかる筋部に短く如彎形に外反する口縫部をもつ。端部は丸くおさめ刻目を施す。上端部にしっかりした有段部をもつ。	口縫部はヨコナデにより、外面は右下がりのタテハケが部分的にナデ施される。内面はナデ調整。	底部から上縫までのほぼ半個体。筋部おより底面に無理充がみられる。	
139	II	II	22.4 (12.5) — —	大きく如彎形に外反する口縫部。端部は丸くおさめ、上下端に刻目を施す。口縫下4cmにしっかりした有段部をもち、刻目を施す。	口縫部はヨコナデ、外面はタテハケの後ナデ調整。内面もナデ調整。有段部は接合により形成される。	口縫部から筋部にかけて無理充がみられる。	
140	II	II	15.5 (5.1) — —	直立し口縫部は短く外反する。端部は丸くおさめ外反し、端部はナデにより突出させ刻目を施す。口縫下4cmに有段部をもつ。	口縫部はヨコナデ。外面はタテハケの後ナデ調整。内面もナデ調整。有段部は接合により形成される。	筋間に堆合筋がみられる。	
141	II	II	17.9 (4.8) —	直立し口縫部は短く外反する。端部は丸くおさめ、内面に凹む箇所をもとし、口縫下4cmに有段部をもつ。	口縫部と有段部はヨコナデ。外面はタテハケの後ナデ調整。内面は筋耗により不明。	口縫部、有段部とともに刻目はみられない。	
142	II	II	18.5 (10.3) —	直立し、口縫部は短く外反する。端部は丸くおさめ、内面には凹む箇所をもとし、口縫下4cmに有段部をもつ。	口縫部と有段部はヨコナデ。外面はタテハケを施し、内面はナデ調整。	II	
143	II	II	21.0 (7.4) —	直立し、口縫端部外間に突帯を貼付する。筋部の回をなす。内面には丸くおさめ、口縫下4cmに有段部をもつ。	口縫部と有段部はヨコナデ。外面はタテハケの後ナデ調整。内面もナデ調整。	口縫部、有段部ともに刻目はみられない。筋部に風呂がみられる。	
144	II	II	35.8 (4.1) —	大きく外反する口縫部下に断面三角形の突帯を貼付する。口縫端部は丸くおさめし、外側と突帯で強い筋間に施す。	口縫部はヨコナデ。外面タテハケ、内面ヨコハケの後にナデ調整。		
145	II	II	19.3 (3.8) —	やや外反気味に直立する口縫下に動かす二角形のしっかりした突帯を貼付する。口縫端部外側と突帯の両端間に刻目を施す。	口縫部と突帯の上下は強くヨコナダされ、外側はタテハケ、内面はナデ調整である。	口縫部と突帯の筋目は底面に回転して施されたものである。	
146	II	II	24.8 (6.2) —	直立する口縫部である。端部は丸く外反し、丸くおさめら。口縫下に断面三角形のしっかりした突帯を貼付する。突帯と同位置に刻目を施す。	口縫部と突帯はヨコナデ。外側は筋と右下がりの前めのハケ調整。内面はナデ調整。	II	
147	II	II	25.2 (4.1) —	大きく外反する口縫部下に、断面三角形のしっかりした突帯を貼付する。口縫端部は丸くおさめ、突帯と同位置に刻目を施す。	口縫部と突帯は強いヨコナデ。外側は強いタテハケ。内面はナデ調整。	II	
148	II	II	24.8 (5.9) — —	直立し終る口縫部の底下に断面三角形のやや幅広い突帯を貼付する。端部は丸くおさめ、突帯とほほ同位置に刻目を施す。	口縫部はヨコナデにより突帯の下部を凹む。外側は右下がり、内面は後方側のハケ調整であるが、筋耗する。	II	
149	II	II	22.1 (5.3) — —	直立した筋部より直線的に開く口縫部。端部片頭に突帯を貼付し、筋耗する。上端と突帯下端に刻目を施す。	口縫部はヨコナデ。外面はナデ調整であるが、内面は筋耗のため不明。		
150	II	II	28.9 (5.0) — —	直立する筋部より直線的開く口縫部。端部片頭に突帯を貼付し、口縫部上端と突帯に刻目を施す。	口縫部はヨコナデがみられるが、以下は筋耗により不明。		

検査番号	部位	器種	口縫部 法基 (cm)	口縫部 深径 (mm)	形態・文様	手 法	備 考
151	第Ⅳ層	裏	19.5 (7.0) —	直立し、端部は丸くおさめる口縫部の下に薄い突帯を貼付する。口縫部上端および突帯に小さな刺目を施す。	口縫部はヨコナデ。突帯以下にタチハケが若干みられるが、磨耗する。内面はナゲ調査。	表面に接合痕がみられる。	
152	〃	〃	24.3 (3.8) —	やや内湾気味に閉く口縫部に断面三角形の突帯を貼付し、外側する突帯をなす。口縫部上端および突帯に刺目を施す。	口縫部はヨコナデ。内外面ともにナゲ調査。	口縫部上端の刺目は小さい。	
153	〃	〃	23.1 (8.4) —	やや内湾する胸筋から深く、近く外反する。口縫部下に幅広の突帯を貼付し、刺目を施す。	口縫部はヨコナデ。外表面はタチハケの後に粗いナゲ調査。内面もナゲ調査である。	端部に黒斑がみられる。	
154	〃	〃	19.3 (3.3) —	やや外反する口縫部の外縁を突帯状につまみ出し、刺目を施す。上端部は端部をなし、刺目を施す。	口縫部はヨコナデ。以下不明。	全体に磨耗する。	
155	〃	〃	18.9 (6.0) —	直立する胸筋から深く、近く外反する口縫部直下に太い断面三角形の突帯を貼付し、刺目を施す。端部から突帯にかけて、丸くおさめる。	口縫部はヨコナデ。外表面は突帯下にタチハケが一部みられるが、磨耗する。内面はナゲ調査。		
156	〃	〃	21.0 (2.4) —	直線的に外反する口縫部直下に突帯を貼付し、下端に刺目を施す。端部から突帯にかけて、ナゲにより丸くおさめる。	口縫部はヨコナデ。外表面は突帯下に粗い斜めのハケをナゲ調査。内面もナゲ調査である。		
157	〃	〃	18.2 (2.4) —	直立する口縫部の外縁に突帯を貼付し、口唇部を拡張、刺目を施す。口縫部は外側する面をなし、丸くおさめる。	口縫部はヨコナデ。内外面ともにナゲ調査。		
158	〃	〃	19.3 (4.1) —	直線的にやや開く口縫部外縁に突帯を貼付し、口唇部を拡張、刺目を施す。	口縫部にヨコナデが施される以外は不明。	全体に磨耗する。	
159	〃	〃	17.0 (5.5) —	直立する口縫部のやや下に断面三角形の突帯を水平に貼付し、刺目を施す。口唇部は丸くおさめる。	口縫部はヨコナデ。外表面は次第下にタチハケ。内面は磨耗により不明。		
160	〃	〃	23.9 (6.5) —	直立する口縫部のやや下に断面三角形のないしっかりした突帯を貼付し、深い刺目を施す。口唇部は丸くおさめる。	口縫部はヨコナデ。以下は磨耗のため不明。	突帯下面に角的な貼付痕を残す。	
161	〃	〃	16.4 (2.5) —	直立する口縫部外縁に、断面三角形のしっかりした突帯を貼付し、深い刺目を施す。口唇部は丸くおさめる。	口縫部はヨコナデ。内外面ともにナゲ調査。刺目はヘラ状工具による。	突帯に黒斑がみられる。	
162	〃	〃	20.8 (4.6) —	やや内湾気味に直立する口縫部外縁に、太いしっかりした突帯を貼付する。	口縫部はヨコナデ。突帯の刺目はハケ状工具により施され、突帯下にはタチハケ。内面はナゲ調査である。		
163	〃	〃	19.3 (4.1) —	直立する口縫部外縁に、太いしっかりとした突帯を貼付する。口唇部を拡張。刺目を施す。口唇部から突帯上端はナゲにより凹凸面をなす。	口縫部はヨコナデ。内外面もナゲ調査。		
164	〃	〃	21.5 (4.2) —	直立する口縫部外縁に断面三角形の突帯を貼付し、口唇部を拡張。刺目を施す。	口縫部はヨコナデ。外表面はタチハケの後にナゲ調査。内面もナゲ調査である。		
165	〃	〃	20.4 (4.7) —	直立する口縫部外縁に、太いしっかりとした突帯を貼付し、刺目を施す。口唇部から突帯はナゲにより、やや外側する面をなす。	口縫部はヨコナデ。内外面もナゲ調査。	造成良好。	

辨認番号	層	部位	器種	重量 (g)	口縫部 器底 胸径 直徑	形態・大様	手法	備考
166	第Ⅳ層	腹		26.8 (4.2) — —	直立する口縫部外側に断面三角形の突起を貼付し、刻目を施す。口唇部から突起部へテア丸くおさめる。	口縫部はヨコナデ。外面は縱方向、内面は横方向のナデ調整。		
167	#	#		23.5 (5.0) — —	直立する口縫部の外縫部とナデにより突起部とし、深い刻目を施す。口唇部は低張し、凹む面をなす。	口縫部はヨコナデ。突起の下にヘラタテハケがみられ、内外面ともにナデ調整。	突起の成形については不明。	
168	#	#		23.9 (6.0) — —	直立し、やや外反する口縫部外側に突起部を貼付し、口唇部を低張し、深い刻目を施す。	口縫部はヨコナデ。突起の下にヘラタテハケ、内面は口縫部にヨコハケ。以下はナデ調整。		
169	#	#		20.3 (4.3) — —	直立し、やや外反する口縫部の外縫部とナデにより突起状とし、刻目を施す。	口縫部はヨコナデ。以下、内外面ともにナデ調整。	突起の成形については不明。	
170	#	#		26.0 (7.7) — —	直立し、無く若干聞く口縫部外側に丸味をおびた突起部を貼付し、深い刻目を施す。	口縫部はヨコナデ。外面はチヂハケが施されるが、磨耗する。内面は磨耗のため不明。		
171	#	#		20.5 (2.6) — —	直立する口縫部外側に突起部を貼付し、深い刻目を施す。口唇部は門牙面をなす。	口縫部はヨコナデ。内外面ともにナデ調整。		
172	#	#		17.7 (6.0) — —	直立し、やや外反する口縫部の外縫部とナデにより突起状とし、小さな刻目を施す。	口縫部はヨコナデ。内外面ともに磨耗のため不明。		
173	#	#		27.6 (4.3) — —	直立し、やや外反する口縫部外側に丸味をおびた突起部を貼付し、下方より刻目を施す。	口縫部はヨコナデ。内外面ともにナデ調整。		
174	#	#		17.8 (4.5) — —	直立する口縫部の外側に突起部を貼付し、口唇部を低張し、刻目を施す。端部は内傾し、小さな刻目を施す。	口縫部はヨコナデ。突起下に指痕压痕を残し、チヂハケを施す。内面はナデ調整。		
175	#	#		19.8 (7.1) — —	如意形に優やかに外反する口縫部。口唇部はナデにより強張し、端部に小さな刻目を施す。	口縫部はヨコナデ。外面は一部にチヂハケがみられるが、磨耗。内面は不明。	全体に磨耗する。	
176	#	#		21.4 (17.1) — —	内側に折る口縫部外側に突起部を貼付し、口唇部を低張する。端部に上方から刻目を削めに施す。	口縫部はヨコナデ。外面は突起の下にヨコハケ。脇部は下方よりの細いチヂハケを施す。内面はナデ調整。	約半体である。	
177	#	#		20.2 (4.3) — —	直立する口縫部端部を小さく外反し、刻目を施す。	口縫部はヨコナデ。外面はやや粗いチヂハケがみられ、内面はナデ調整。		
178	#	#		28.5 (4.1) — —	やや内湾気味に開き、小さく外反する口縫部に突起部を貼付し、上方よりヘラ状工具により刻目を施す。	口縫部はヨコナデ。内外面ともにナデ調整。突起下部に押圧による麻痺がみられ、さらに刻目のヘラ状工具の痕が残されている。		
179	#	#		33.7 (4.5) — —	直立する口縫部をナデにより内外面に低張し、内側は内側に、外側は下方より刻目を施す。	口縫部はヨコナデ。内面に指痕压痕を残し、ナデ調整。	内面に黒斑がみられる。	
180	#	#		20.5 (5.1) — —	直立する口縫部をナデにより突起状とし、丸味をおびた刻目を施す。内面はやや凹み、後をなす。	口縫部ヨコナデ。内外面ともにナデ調整。内面口縫下に指痕压痕を残す。		

標本番号	層位	器種	法量 (cm) 口器高 度 頭径 頭径	形態・文様	手 法	備考
181	第Ⅳ層	瘦	18.3 (4.7) — —	直立し、下部へ外反して開く口縫部。口唇部をナデにより拡張、突帯となし、刻目を施す。	口縫部はヨコナデ。他は不明。	全体に磨耗が激しい。
182	#	#	26.0 (4.0) — —	直立し、小さく外反し開く口縫部。口唇部はナデにより、やや内向し、上端は縦をなし、外端に刻目を施す。	口縫部内面および口唇部はヨコナデ。外面は刻目の下に指紋疣痕を残し、右上がりのタテハケ。内面も指紋疣痕を残し、ヨコハケ。	
183	#	#	22.9 (7.0) — —	直立し、やや外反する口縫部。端部は面をなし、下方より浅い刻目を施す。	口縫部はヨコナデ。外面は板と筋の方向のハケ目が交換してみられる。内面は磨耗する。	口縫部は制部に比して薄い。外面に黒斑がみられる。
184	#	#	18.4 (6.9) — —	如意形に小さく外反する口縫部。端部はナデにより、よくおさめ、刻目を施す。内面は若干凹む。	口縫部はヨコナデ。外面はタテハケを施されるが、磨耗する。内面は口縫部にヨコハケがみられ、制部はナデ調整。	
185	#	#	20.0 (7.7) — —	如意形に小さく外反する口縫部。端部はナデにより、わずかに内向し、刻目を施す。	口縫部はヨコナデ。外面は不明瞭なタテハケを施される。内面はナデ調整。	成虫良好。
186	#	#	18.8 (4.5) — —	直立し、小さく外反する口縫部。端部外間に虫帶を貼付し、口唇部を拡張、刻目を施す。	口縫部はヨコナデ。他は不明。	全体に磨耗している。
187	#	#	25.7 (4.7) — —	直立する胸部から後端部に外反する。端部はナデにより、わずかに内向し、丸くおさめ、刻目を施す。	口縫部および外面口縫下にヨコナデ。他は不明。	#
188	#	#	21.3 (6.3) — —	如意形に強く外反する口縫部。端部はナデにより、縦をなし、外側は丸くおさめ、浅い刻目を施す。	口縫部はヨコナデ。外面はタテハケ。内面はヨコハケが、一部みられるが、磨耗する。	胸部内面に黒斑がみられる。
189	#	#	24.1 (3.0) — —	直立する口縫部をナデにより突帯状となし、刻目を施す。上端部は丸味をおびた縦をなす。	口縫部および内外面ともにヨコナデを施す。	
190	#	#	16.4 (1.8) — —	外反する口縫部をナデにより拡張。口唇部は面をなし、下端部に下方より、小さな刻目を施す。	口縫部はヨコナデ。口縫下外面にタテハケが若干みられる。内面は醫面が軽微する。	全体に磨耗が激しい。口径が小さい。
191	#	#	21.8 (4.0) — —	如意形に小さく外反する口縫部。端部はナデにより拡張、突帯状をなし、小さな刻目を施す。	口縫部外面にヨコナデ。内面はヨコハケが施され、以下はナデ調整。	
192	#	#	15.4 (3.0) — —	直立する胸部より強く屈曲し、矧く外反する口縫部。端部はナデにより面をなし、浅い刻目を施す。	口縫部はヨコナデ。制部外面にタテハケがみられるが、磨耗する。内面も磨耗により不明。	口径が小さい。
193	#	#	27.5 (4.3) — —	直立し、小さく外反する口縫部。端部をナデにより細い突帯状となし、小さな刻目を施す。	口縫部はヨコナデ。口縫下外面にタテハケがみられるが、内面ともに磨耗する。	内面に黒斑がみられる。
194	#	#	15.9 (4.2) — —	如意形にやや強く外反する口縫部。端部は面をなし、小さな刻目を密に施す。	口縫部はヨコナデ。他は不明。	全体に磨耗が激しい。口径が小さい。
195	#	#	25.5 (4.0) — —	端ややかに外反する口縫部のやや下部に突起付し、端へ外方へとび出す。深い刻目を施す。		1~2mmの移動片を多く含む。蓋母片も若干みられる。

持回番号	番位	器種	法量(cm)	口徑部高さ 底径	形態・文様	手法	備考
196	第二層	甕	19.6 (4.6) — —	縦やかに外反する口縁部を、ナ ダによりやや抜張り、丸くおさめ、 強い刻目を施す。	口縁部はヨコナデ。内外面もナ ダ調整。		
197	#	#	25.4 (5.3) — —	直立する腹部より口縁部は、わ ずかに外反する。腹部をナダにより 突き出味に抜張し、肩部を施す。	口縁部はヨコナデ。外面は口縁下 に斜めのハケ調査。内面はヨコハ ケが一部みられるが、ともに磨耗 する。		
198	#	#	24.6 (5.0) — —	やや内湾気味に直立する腹部から、 やや外反する口縁部。腹部は外張 する面をなし、肩部を施す。	口縁部はヨコナデ。外面は磨耗の ため不明、内面に、斜めのハ ケ調査がみられる。		
199	#	#	18.9 (6.0) — —	縦く如意形に外反する口縁部。腹 部をなし、やや抜張り、浅く小 さな肩部を施す。	口縁部はヨコナデ。外面は口縁下 に強いタテハケがみられ、内面は ナダ調整。		
200	#	#	25.7 (8.2) — —	如意形に小さく外反する口縁部。 口縁部は内筋をなし、強い刻目 を施す。	口縁部はヨコナデ。内外面ともに ナダ調整。		腹部外間に筋 が付着し、筋 厚が薄い。
201	#	#	13.8 (4.5) — —	やや内湾気味に直立する口縁部。 口縁部はやや凹む面をなし、腹部 を小さく抜張り、丸くおさめ、刻目 を施す。	口縁部はヨコナデ。口縁下外面に 指紋压痕を残し、右下がりのハケ 目が一部みられる。内面は磨耗 のため不明。	口径が小さい。	
202	#	#	24.3 (6.3) — —	如意形にややかに外反する口縁部。 口縁部は外傾する面をなし、腹部 に上方から強い刻目を施す。	口縁部はヨコナデ。口縁下外面に 左下がりの深いつラハケをなし、 下部には右下がりの軽いタテハケ がみられる。内面は磨耗のため不 明。		
203	#	#	22.0 (2.8) — —	直立してなる口縁部。口唇部は凹 む面をなし、腹部にハケ状工具に より刻目を施す。	口縁部はヨコナデ。口縁下外面に 一部右下がりのタテ目がみられる。		
204	#	#	23.5 (7.4) — —	やや内湾気味に直立し、口縁部は 小さく外反する。口縁部はナダに より突き出味をなし、腹部を施す。 上端部は腰を施す。	口縁部はヨコナデ。口縁下外面に 右下がりの斜めのハケ目がみられ、 内面はナダ調整である。		
205	#	#	31.8 (6.0) — —	縦やかに外反する口縁部。口唇部 をナダによりやや抜張り、腹部は 丸くおさめ刻目を施す。	口縁部はヨコナデ。口縁下外面に タテハケ、内面にはヨコハケがみ られるが、磨耗している。		
206	#	#	23.3 (23.0) — —	底部近くより縦やかに立ち上り、腹 部はほとんど丸みをもたずして如意 形に外反する口縁部。口唇部は 小さな腰を施す肩部を施す。	口縁部はヨコナデにより丸くおさ める。口縁下外面もヨコナデされ、 腹部は内面に、やや軽いタテハケ が施される。内面はタテハケ調査。	底部を欠くが、 ほぼ完形であ る。	
207	#	#	25.4 (3.6) — —	縦やかに外反する口縁部。口唇部 は外傾する面をなし、両端部に刻 目を施す。	口縁部ヨコナデ。口縁下外面に斜 めのハケ目が交差する。内面は招 福圧痕を残し、ヨコハケ。		
208	#	#	36.1 (4.0) — —	縦やかに外反する口縁部。口唇部 は外傾する面をなし、両端部に刻 目を施す。端部内面はナダにより より、やや凹む。	口縁部はヨコナデ。内外面ともに ナダ調整。	全体に磨耗す る。	
209	#	#	28.4 (4.5) — —	直線的に小さく外反する口縁部。 口縁部はナダにより四重面をなし、 両端部に刻目を施す。	口縁部はヨコナデ。口縁下外面に は指紋压痕と、タテハケを一部現 す。内面は磨耗のため不明。		
210	#	#	20.7 (3.2) — —	強く外反する口縁部。口唇部は外 傾する面をなし、両端部に刻目を 施す。	内外面とも磨耗のため不明。		全体に磨耗が 激しい。

辨認番号	層位	器種	法量 (cm) 器高 前後 径	形態・文様	手 法	備 考
211	第Ⅳ層	甕	16.9 (3.4) —	小さく直線的に外反する口縁部。口唇部は外傾する曲をなし、端部に小さな刻目を施す。	口縁部はヨコナデ。他は不明。	全体に磨耗する。口径が小さい。
212	II	甕	26.8 (5.7) —	如意形に外反する口縁部。口唇部は外傾する曲をなし、端部に小さな刻目を施す。上部は縦をなし、内面がわずかに凹む。	口縁部はヨコナデ。以下、内外面ともにナナ調整。	
213	II	甕	18.2 (2.7) —	強く外反する口縁部。口唇部は全面に丸味をおびた曲をなし、端部にハケ状工具による刻目を施す。	口縁部はヨコナデ。	
214	II	甕	18.4 (4.0) —	緩やかに外反する口縁部。口唇部は外傾する曲をなし、丸くおさめた端部に刻目を施す。	口縁部はヨコナデ。内外面ともにナナ調整されるが、磨耗する。	
215	II	甕	25.2 (7.9) —	如意形に緩やかに外反する口縁部。口唇部はなだらかな丸味をおびた曲をなし、端部に刻目を施す。	口縁部はヨコナデ。口總下外面にタテハケ。内面はナナ調整。	
216	II	甕	16.8 (4.4) —	直立する胴部から、小さく直線的に外反する口縁部。口唇部は曲をなし、端部に刻目を施す。	内外面ともに磨耗する。	
217	II	甕	26.9 (4.9) —	緩やかに外反する口縁部。口唇部は曲をなし、丸味をおびた端部に刻目を施す。	口縁部はヨコナデ。口總下外面にわずかにハケ目があられる。	全体に磨耗する。
218	II	甕	20.8 (10.3) —	如意形に外反する口縁部。口唇部は曲をなし、やや丸味をおびた端部に刻目を施す。	口縁部はヨコナデ。口總下外面全面にタテハケが施され、内面はナナ調整。	
219	II	甕	28.9 (8.7) —	口縁部はなだらかに外反する。口唇部はわずかに凹む曲をなし、端部に刻目を施す。	口縁部はヨコナデ。口總下から胴部外面にかけて全面にタテハケが施され、口唇部内面は粗面状態にヨコハケが施される。	断面に複合痕がみられる。
220	II	甕	24.3 (9.7) —	如意形に外反する口縁部。口唇部は曲をなし、丸味をおびた端部に浅い刻目を施す。	口縁部はヨコナデ。胴部外面に右下がりのタテハケが、縦みられると縁部内面にはヨコハケが施される。	
221	II	甕	24.7 (4.7) —	緩やかに外反し、開く口縁部。口唇部は丸味をおび、下端部に小さく刻目を施す。	口縁部外間にヨコナデ。やや下方に、右下がりのタテハケが施され、内面はナナ調整。	
222	II	甕	28.9 (17.4) —	如意形の口縁部であり、緩やかに外反する。口唇部は曲をなし、端部に刻目を施す。肩部は張りが少ない。	口縁部はヨコナデ。口總下から胴部外面にかけて全面にタテハケが施され、内面は口唇部にヨコハケ、胴部には右下がりのハケ目が一部みられる。	外腹に大きな黒斑がみられる。
223	II	甕	21.4 (4.7) —	口縁部はわずかに内湾気味に窪く。口唇部は丸味をおびた曲をなし、下端に刻目を施す。	口縁部はヨコナデ。外間に一部ナナがみられるが、磨耗する。	内面は磨耗し、表面が剥落する。
224	II	甕	23.6 (4.4) —	緩やかに外反し、開く口縁部。口唇部はわずかに内湾し、口唇部は丸味をおびた曲をなし、下端に刻目を施す。	口唇部にヨコナデ。口總下外面にヘラ压痕がみられる。内外面ともにナナ調整。	口縁部外面に黒斑がみられる。
225	II	甕	23.5 (3.2) —	緩やかに直線的に開く口縁部。口唇部はわずかに凹む曲をなし、下端部に刻目を施す。	口唇部および口總内面をヨコナデ、外面上は粗い右下がりのハケ目がみられる。	

辨認番号	層位	器種	法量(cm)	口部高さ(頭頂底辺)	形態・文様	手法	備考
226	黒青層	旗	23.0 — —	(6.5) — —	直立し、やや聞く口縁部。口唇部はほぼ水平な面をなし、端部に小さな割目を施す。	口唇部はヨコナデを施されるが、下部は磨耗のため不明。	
227	〃	〃	19.0 — —	(6.1) — —	直立し、やや聞く口縁部。口唇部はやや傾斜する面をなし、端部に割目を施す。	内外面とともに磨耗のため不明。	
228	〃	〃	27.6 — —	(4.8) — —	直立し、やや聞く胸脚より、わずかに外反する口縁部。口唇部はやや厚く、丸くおさめ、浅い割目を施す。	口縫下外面は指痕压痕をナナ調整。下部には左下がりの粗いハケ目が一部みられる。内面はナナ調整。	口縫下外面に墨斑がみられる。
229	〃	〃	19.8 — —	(8.2) — —	如意形に強く外反する口縁部。口唇部は外縫する面をなし、わずかに肥厚、やや上方より割目を施す。	内外面ともに磨耗のため不明。	墨斑がかなり厚い。
230	〃	〃	29.0 — —	(3.3) — —	矧くわずかに外反する口縁部。口唇部はやや丸く、外縫する面をなし、端部に斜めの割目を施す。	口唇部はヨコナデ。口縫下外面は指痕压痕にタテハケを施し、内面も指痕压痕にヨコハケが施される。	
231	〃	〃	23.2 — —	(11.7) — —	如意形に外反する口縁部。口唇部はわずかに胸脚をおりた面をなし、下端に浅い割目を施す。	口唇部はヨコナデ。口縫下外面は左下がりの細かいテテハケ、胸脚には右下がりの粗いハケ目がみられ、口縫部内面はヨコハケが施される。	
232	〃	〃	25.4 — —	(4.8) — —	縦やかに外反し、夷鏡的に聞く口縁部。口唇部は面をなし、下端に割目を施す。	口縫部外面はヨコナデされ、以下に指痕压痕にタテハケ。口唇部および口縫内面に指痕压痕にヨコハケが施される。	
233	〃	〃	23.2 — —	(3.7) — —	縦やかに外反する口縁部。口唇部は面をなし、外縫に深い割目を施す。	内外面ともに磨耗のため不明。	
234	〃	〃	22.2 29.1 — — 8.8	— — — — —	しっかりとした平底から、なだらかに立ち上がり、縦やかに外反し聞く口縁部。口唇部は面をなし、上端は後をなし、外縫に割目を施す。	口唇部はヨコナデ。房部外面は縦および斜め方向のハケ調整。口縫内面はヨコハケ、胸脚はナナ調整。	ほぼ完形。頭部の張りは少く、外縫なく、内縫に墨斑がみられる。
235	〃	〃	23.9 — —	(3.0) — —	強く外反する口縁部。口唇部は面をなし、下端部に下方より深い割目を施す。	内外面ともにナナ調整。	
236	〃	〃	26.6 — —	(2.7) — —	強く外反し、水平にのびる口縁部。口唇部は垂直な面をなし、下端にハケ状工具により深い割目を施す。	口唇部はヨコナデ。口縫下外面にタテハケ、口縫内面にヨコハケが部分的にみられる。	やや磨耗する。
237	〃	〃	31.6 — —	(3.4) — —	夷鏡的に聞き短く外反する口縁部。口唇部は面をなし、やや弧形、下端部に下方より無目を施す。	口縫部ヨコナデ。口縫下外面にタテハケ、内面はヨコハケがみられるが磨耗する。	
238	〃	〃	32.3 — —	(3.0) — —	強く外反し、大きく聞く口縁部。口唇部は面をなし、下端に下方より大きな割目を施す。	内外面ともに磨耗のため不明。	
239	〃	〃	22.0 — —	(5.3) — —	直立し、やや聞く胸脚から強く外反する口縁部。口唇部は面をなし、下端に下方より小さな割目を施す。	口唇部はヨコナデ。以下、内外面ともにナナ調整。	口縫下外面に墨斑がみられる。
240	〃	〃	16.7 — —	(4.5) — —	夷鏡的に聞き、強く外反する口縁部。口唇部はやや薄く面をなし、下端に割目を施す。	外面に一部タテハケがみられるだけである。	全体に磨耗が厳しい。

掉因番号	層位	器種	法量(cm)	口唇部側注目	形態・文様	手法	備考
241	筋	著	21.8 ( 2.6 ) — —	やや強く外反し、聞く口縁部である。口唇部は丸くおさめ下端部に刻目を施す。	内外面ともにナデ調整。		
242	筋	著	18.7 ( 4.0 ) — —	緩やかに外反し聞く口縁部。口唇部は丸味をおび小顎をなし、下端部にヘラ状工具により刻目を施す。	口縁部ヨコナデ。脣部外面に右下がりのヨコハケと斜めのタテハケが交錯し、みられる。内面は不明。	全体に磨耗する。	
243	筋	著	18.4 ( 3.6 ) — —	如意形に小さく外反し、直線的に聞く口縁部。口唇部は面をなし、下端部に刻目を施す。	口縁部ヨコナデ。以下不明。		
244	筋	著	20.5 ( 2.5 ) — —	小さく外反する口縁部。口唇部はやや凹む底面をなし、斜めの刻目を施す。	口縁部ヨコナデ。		
245	筋	著	28.2 ( 3.1 ) — —	小さく直線的に外反する口縁部。口唇部はやや凹む面をなし、下端に刻目を施す。	口縁部ヨコナデ。口縫下外面にやや斜めのタテハケ。口縫部内面はヨコハケが施される。		
246	筋	著	19.8 ( 3.0 ) — —	やや外反気味に直立する口縁部。口唇部は丸くおさめ、外面に刻目を施す。	口唇部ヨコナデ。口縫下外面にタテハケが施され、内面はナデ調整。		
247	筋	著	21.9 ( 4.1 ) — —	緩やかに外反し、聞く口縁部。口唇部はやや凹む面をなし、外端部に浅い刻目を施す。	口唇部および口縫部外面はヨコナデ。		
248	筋	著	21.5 ( 2.2 ) — —	小さく外反する口縁部。口唇部は丸味をおび外面に刻目を施す。	外面は刻目下にタテハケ、内面はヨコハケが全面にみられる。		
249	筋	著	20.9 ( 5.8 ) — —	如意形に外反する口縁部。口唇部は面をなし、外端部に下方より刻目を施す。	口縫部ヨコナデ。脣部外面に細いタテハケが施され、内面はナデ調整。	脣部外面に黒斑がみられる。	
250	筋	著	21.1 ( 5.1 ) — —	如意形に外反する口縁部。口唇部はやや丸味をおびた面をなし、外端部に小さな刻目を施す。	口唇部から口縫下外面にヨコナデ。脣部にタテハケが施され、内面はナデ調整。		
251	筋	著	22.8 ( 2.6 ) — —	小さく外反する口縁部。口唇部は面に近い面をなし、下端部に小さな刻目を施す。	口唇部から口縫下外面にかけてヨコナデ。脣部外面には斜めのタテハケが部分的にみられ、口縫部内面はヨコハケ。		
252	筋	著	23.2 ( 3.9 ) — —	緩やかに外反し聞く口縁部。口唇部は丸味をおびた面をなし、下端部に下方より刻目を施す。	口縫下外面にヨコナデ。内面は脣面が剥落する。	全体に磨耗が激しい。	
253	筋	著	16.9 ( 4.6 ) — —	直立する脣部より強く外反する口縁部。口唇部は面をなし、下端部に刻目を施す。	口縫部はヨコナデ。脣部は内外面ともにハケを施した後、細いナデ調整。	脣部外面に若千、黒斑が付着する。	
254	筋	著	27.2 ( 5.2 ) — —	如意形にならかに外反する口縁部。口唇部は面をなし、下端部に刻目を施す。	口縫部はヨコナデ。脣部外面はハケを施した後にナデ調整。内面は脣面が剥落する。	全体に磨耗する。	
255	筋	著	20.6 ( 4.5 ) — —	緩やかに外反し、大きく聞く口縁部。口唇部は丸くおさめ、下端部に小さな刻目を施す。	内外面ともに磨耗のため不明。	刻目は部分的に残る。	

掉回番号	層位	器種	法量 (cm)	口縫高 前後 底径	形態・文様	手法	備考
256	第五層	鏡	26.9 ( 4.9) — —	緩やかに小さく外反する口縫部。口唇部は広くおさめなし、下端部に小さな筋目を施す。	口唇部および口縫下外面はヨコナデ。脇部外面はタテハケがみられ、内面はナデ調整。		
257	#	#	20.1 ( 3.4) — —	大きめ外反し開く口縫部。口唇部は丸味をおびた凹む面をなし、下端部に筋目を施す。	口縫部はヨコナデ。口縫下外面にタテハケが施される。		
258	#	#	35.2 ( 3.0) — —	緩やかに緩く外反する口縫部。口唇部はやや厚め、丸くおさめ、下端部に筋目を施す。	口唇部はヨコナデ。口縫下外面にタテハケが施される。		
259	#	#	17.2 ( 3.8) — —	緩やかに外反し開く口縫部。口唇部はやや丸味をおびた面をなし、下端部に筋目を施す。	内外面ともにナデ調整。	やや磨耗する。	
260	#	#	16.3 ( 5.8) — —	如意形に外反し、小さく開く口縫部。口唇部は丸味をおびた面をなし、下端部に筋目を施す。	口縫部はヨコナデ。前面に一部タテハケがみられるが、脇部が剥落する。内面はナデ調整。	全体に磨耗する。脇部外面に黒斑がみられる。	
261	#	#	16.3 ( 5.0) — —	直立する脇部より、やや強く外反する口縫部。口唇部は丸味をおびた面をなし、外端は丸味をおび、筋目を施す。	脇部外面に弱めのタテハケがみられるが、磨耗する。内面はナデ調整。		
262	#	#	15.4 ( 3.5) — —	緩やかに外反する口縫部。口唇部は丸くおさめ、外面に筋目を施す。	内外面ともにナデ調整。	全体に磨耗する。脇部が、やや薄い。	
263	#	#	18.3 ( 5.5) — —	直立する脇部より緩やかに外反する口縫部。口唇部は丸味をおびた面をなし、内面はわざわざして筋目を施す。脇部全面に強い筋目を施す。	口縫部はヨコナデ。口縫下外面はタテハケ、内面にはヨコハケが一部みられる。	脇部の磨耗が激しい。	
264	#	#	25.8 ( 3.9) — —	大きめなだらかに外反する口縫部。口唇部は丸味をおびた面をなし、内面はわざわざして筋目を施す。脇部全面に強い筋目を施す。	口縫部はヨコナデ。口縫下外面に数本のヘラ状筋がみられる。内外面ともにナデ調整。	變成良好。	
265	#	#	21.6 ( 4.0) — —	直立する脇部より強く外反する口縫部。口唇部は面をなし、上端部に小さな筋目を施す。	口縫部はヨコナデ。他は磨耗により不明。	前面に接合痕がみられる。	
266	#	#	21.6 ( 4.1) — —	小さく外反し開く口縫部。口唇部は丸くおさめ、上面部に筋目を施す。	口縫部はヨコナデ。脇部に一部タテハケがみられるが、磨耗する。内面もナデ調整されるが、磨耗が激しい。	口縫部外面に黒斑がみられる。	
267	#	#	23.5 ( 4.5) — —	直立する脇部より強く外反する口縫部。口唇部は丸くおさめ、脇部に筋目を施す。	内外面ともにナデ調整。	全体に磨耗する。	
268	#	#	21.9 ( 4.7) — —	如意形に小さく外反する口縫部。口唇部は面をなし、外端部にやや斜めの筋目を施す。	口縫部はヨコナデ。内外面ともにナデ調整。		
269	#	#	22.8 ( 3.6) — —	直立形の脇部から小さく外反する口縫部。口唇部は面をなし、外端部に強い筋目を施す。	口縫部はヨコナデ。口縫下外面にタテハケが施され、内面は不明。	内面の磨耗が激しい。	
270	#	#	19.2 ( 2.7) — —	直立する脇部より強く外反する口縫部。口唇部は丸くおさめ、脇部に筋目を施す。	口唇部および口縫下外面はヨコナデ。他は不明。	全体に磨耗する。脇部に比べ、口縫部は薄くなる。	

辨認番号	層位	基準	口徑器 法量 (cm) 鋼絆 底座	形態・文様	手 法	備 考
271	筋胃層	變	21.7 (1.8) — —	強く強く外反する口縫部。口唇部は丸くおさめ、やや上方より強い刺目を施す。	口唇部および内面はヨコナデ。口縫下外面にタテハケがみられる。	全体に磨耗が激しい。
272	#	#	18.7 (3.5) — —	立ち立てる脣部より、ほぼ水平に強く外反する口縫部。口唇部は丸くおさめ、端部全面に強い刺目を施す。	口唇部および口縫下外面は強いヨコナデ。内外面はナデ調整。	
273	#	#	18.6 (3.0) — —	強く外反し開く口縫部。口唇部は丸味をおびた面をなし、やや下端に刺目を施す。	口縫部はヨコナデ。口縫下外面にヘラ压痕がみられる。	新間に複合板がみられ、口縫部内面に黒斑あり。
274	#	#	19.4 (2.4) — —	緩やかに外反し、開く口縫部。口唇部は丸味をおびた面をなし、下端部に刺目を施す。	口縫部はヨコナデ。以下、内外面ともにナデ調整。	
275	#	#	18.3 (3.4) — —	などらかに外反し開く口縫部。口唇部は丸くおさめ、やや上方より刺目を施す。	口縫部はヨコナデ。以下不明。	全体に磨耗する。
276	#	#	21.3 (2.5) — —	強く外反する短い口縫部。口唇部は丸味をおびた面をなし、端部全面に強い刺目を施す。	口唇部はヨコハケの後、ヨコナデ。口縫下外面は、やや粗いタテハケ。内面は右下がりのヨコハケを施す。	#
277	#	#	20.6 (4.3) — —	直線的に開き、強く外反する口縫部。口唇部は丸味をおびた面をなし、端部全面に強い刺目を施す。	口唇部および口縫下外面に強いヨコナデ。以下は内外面ともにナデ調整。	
278	#	#	23.3 (5.3) — —	直線的に開く脣部より緩やかに外反する口縫部。口唇部は丸くおさめ、上方より刺目を施す。	口縫下外面から脣部に斜めのタテハケがみられる。内面は番面が剥落する。	内面は磨耗する。
279	#	#	24.6 (3.4) — —	緩やかに外反する口縫部。口唇部は丸くおさめ、外側に刺目を施す。	口縫部はヨコナデ。以下、内外面ともにナデ調整。	器壁は厚い。
280	#	#	24.7 (6.4) — —	やや内張気味に立ち上がる脣部から直線的に外反する口縫部。口唇部は丸味をおびた面をなし、端部全面に刺目を施す。	口縫下外面にヨコナデ。脣部外面に斜め、および横方向のハゲ状工具が施される、内面はヨコハケが施される。	
281	#	#	26.5 (2.8) — —	強く外反する短い口縫部。口唇部は丸味をおびた面をなし、端部全面に深い刺目を施す。	内外面ともに磨耗により不明。	
282	#	#	22.9 (7.6) — —	直立する脣部より如意形に外反する口縫部。口唇部は面をなし、下端部に刺目を施す。	口縫部はヨコナデ。以下、内外面ともにナデ調整。	全体に磨耗する。284と類似しており同一個体か?
283	#	#	19.9 (7.5) — —	緩やかに立ち上がる脣部より、如意形に立ちめらかに外反する口縫部。口唇部は丸味をおびた面をなし、下端部に刺目を施す。	#	口縫部外面に黒斑がみられる。
284	#	#	21.8 (10.5) — —	緩やかに立ち上がる脣部より、如意形に立ちめらかに外反する口縫部。口唇部は丸味をおびた面をなし、強い刺目を施す。	口縫下外面にヨコナデ。脣部外面は全面にタテハケ。内面は口縫部がヨコハケ、脣部はナデ調整。	刺目はハゲ状工具により施される。284に類似する。
285	#	#	18.9 (7.1) — —	上に強引をもつ脣部より、如意形に外反する口縫部。口唇部は丸味をおびた面をなし、端部全面に刺目を施す。	口縫部はヨコナデ。口縫下外面に一部タテハケがみられる。	

辨認番号	用 位	器 様	法量 (cm)	口唇 若高 胸低 脣低	形 独・文 様	手 法	備 考
286	馬 齧 唇	裏	21.2 ( 4.2 ) — —	如意形に強く外反する口縁部。口唇部は丸くおさめ、上方から端部全面に刻目を施す。	口縁部はヨコナダ。口縁下外面にタテハケの単位のみがみられる。	全体に磨耗する。	
287	—	—	16.1 ( 9.4 ) — —	よく張りをもつ胸部から、如意形に小さく、強く外反する口縁部。口唇部は丸くおさめ、端部全面に小さな刻目を施す。	口縁部ヨコナダ。口縁下外面にタテハケが施され、内面はナナ調整である。		
288	—	—	21.0 ( 8.4 ) — —	やや張りをもつ胸部から、如意形に外反する口縁部。口唇部は丸くおさめをねじり、上方より小さな刻目を施す。	口縁部はヨコナダ。口縁下外面にタテハケが施され、以下に斜めのタテハケ。内面はハケ調整。		
289	—	—	20.2 ( 5.6 ) — —	如意形に緩やかに外反する口縁部。口唇部は丸くおさめ、上方から刻目を施す。	口縁下外面にヨコナダ。以下、内外面とも不明。	全体に磨耗する。	
290	—	—	25.4 ( 7.9 ) — —	やや直立気味に立ち上がる胸部から緩やかに外反する口縁部。口唇部は面をなし、端部全面に刻目を施す。	口縁部はヨコナダ。胸部外面に細および斜め方向のハケ目がみられる。内面はナナ調整。		
291	—	—	19.2 (13.8) — —	なめらかに内湾する胸部から緩やかに外反する口縁部。口唇部は丸くおさめをねじり、上方より浅い刻目を施す。	外面は口縁下にタテハケ、胸部は右下がりのハケ目が全面にみられる。内面はヨコハケ、以下はナナ調整。		
292	—	—	22.3 (17.4) — —	強く張る上胸部から、如意形に強く外反する口縁部。口唇部は面をなし、端部全面に刻目を施す。	口縁部はヨコナダ。胸部外面にはタテハケを施し、内面は口縁下部に指腹圧痕を残し、ナナ調整。		
293	—	—	25.4 ( 5.5 ) — —	直線的にやや開く口縁部。口唇部は丸くおさめをねじり、端部全面に刻目を施す。	口縁下外面にヨコナダ。胸部外面にタテハケが一部みられる。内面は不明。	内面は磨耗が激しい。	
294	—	—	25.5 ( 6.4 ) — —	如意形に強く外反する口縁部。口唇部は丸くおさめ、外端面に浅い刻目を施す。	口縁部はヨコナダ。以下、内外面ともにナナ調整。	画面に複合痕がみられる。	
295	—	—	22.0 ( 9.0 ) — —	やや内湾気味に直立する胸部より、如意形に緩やかに外反する口縁部。口唇部は丸くおさめ、刻目を施す。	—		
296	—	—	22.8 (18.5) — —	緩やかに開く胸部より、なめらかに外反する口縁部。口唇部は丸くおさめ、刻目を施す。	口唇部および口縁下外面にヨコナダ。以下、内外面ともにナナ調整と思われる。	口縁部外面に黒斑がみられる。	
297	—	—	23.1 (10.2) — —	やや内湾気味に直立する胸部より如意形に強く外反する口縁部。口唇部は丸くおさめ、やや下端に強い刻目を施す。	口唇部および内面はヨコナダ。口縁下外面に斜めの安排するタテハケがみられる。内面は口縁下に右下がりのヨコハケ。		
298	—	—	26.7 ( 8.8 ) — —	直立する胸部より小さく如意形に外反する口縁部。口唇部は面をなし、端部全面に刻目を施す。	口縁下外面にヨコハケが一部みられる。他は不明。	全体に磨耗が激しい。	
299	—	—	24.0 (18.1) 23.4 — —	胸部はやや張り、如意形に強く外反する口縁部。口唇部は丸くおさめ。やや上方より刻目を施す。	口唇部および口縁下外面はヨコナダ。以下、胸部は全面タテハケが施される。口縁部内面はヨコハケ、以下はナナ調整。		
300	—	—	27.8 ( 9.5 ) — —	強く如意形に外反する口縁部。口唇部は丸くおさめ、斜めに刻目を施す。	口唇部および口縁下外面はヨコナダ。ヘラ压痕がみられる。胸部外面はナナ調整。内面は磨耗のため不明。	胸部から口縁部にかけて筋膜が厚くなる。	

押抜番号	層位	器種	口径 法量 (cm) 器部 周径 底径	形態・文様	手法	備考
301	第Ⅱ層	甕	24.0 (18.8) — —	下腹部は緩やかに開き、上腹部は直立する。口縁部は如意形に凹む。口唇部は丸くおさめられ、底部全面にやや上方より刻目を施す。	口唇部はヨコナデ。外面は口縁下から腹部全面にクサハケが施される。内面はナガ調査にて下腹部は指頭およびヘラ圧痕がみられる。	
302	#	#	23.9 (5.9) — —	直立する腹部より強く外反する口縁部。口唇部は丸くおさめられ、底部全面に上方より刻目を施す。内面はわずかに凹む。	口縁部はヨコナデ。以下、磨耗のため不明。	
303	#	#	26.4 (8.5) — —	よく張った腹部より強く如意形に外反する口縁部。口唇部は丸くおさめられ、底部全面に深い刻目を施す。	口唇部および口縁下外面はヨコナデ。以下、内外面ともにナガ調査、内面に指頭压痕を施す。	口縁部から腹部外面にかけて黒斑がみられる。
304	#	#	26.5 (18.4) — —	張りの小さい腹部より、如意形に大きく外反する口縁部。口唇部は丸くおさめられ、ハケ状工具により刻目を施す。	口縁部はヨコナデ。腹部外面は全面に一部凹めのクサハケを施す。内面は口縁下にヨコハケ、以下はナガ調査。	腹部外面に大きく黒斑がみられる。
305	#	#	24.9 (16.0) — —	よく張りをもつ腹部から如意形に強く外反する口縁部。口唇部は丸くおさめられ、底部全面に小さな刻目を施す。	全体に磨耗しており、口縁下外面に接合紋がみられるのみである。	断面にも接合痕がみられる。
306	#	#	23.0 (10.8) — —	緩やかに開く腹部より、なだらかに小さく外反する口縁部。口唇部は丸くおさめられ、上腹部に強く刻目を施す。	口唇部はヨコナデ。口縁下外面に指頭压痕を施し、腹部は斜めのクサハケ。内面はナガ調査。	刻目は丸棒状の原体により施される。
307	#	#	27.5 (20.5) — —	なだらかに張った腹部から如意形に外反する口縁部。口唇部は丸くおさめられ、底部全面に刻目を施す。	口縁部はヨコナデ。口縁下外面に斜めのクサハケを一部施し、内外面ともにナガ調査。	最大径を上腹部にもつ。
308	#	#	22.3 (14.9) — —	緩やかに内收する腹部より強く外反する口縁部。口唇部は丸くおさめられ、上腹部にハケ状工具により刻目を施す。	口唇部および口縁下外面にヨコナデ。以下、腹部外面は右下がりのクサハケ。内面は口縁部にヨコハケを施し、以下、ナガ調査。	
309	#	#	(2.6) — —	強く外反する口縁部。口唇部は丸くおさめられ、底部全面に新月三角形の突起を貼付する。口唇部、突起に刻目を施す。	口縁部ヨコナデ。	
310	#	#	(2.8) — —	底面的に強く外反する口縁部。口唇部は丸くおさめられ、下部に新月三角形の突起を貼付し、ともに刻目を施す。	#	
311	#	#	(4.0) — —	わずかに開く口縁部。口唇部は丸くおさめられ、外間に刻目。口縁下に新月三角形の突起を貼付し、刻目を施す。	#	
312	#	#	(3.6) — —	緩やかに外反する口縁部直下に突出した突起を貼付する。上端、および突起に刻目を施す。	#	
313	#	#	(2.5) — —	直立し、やや外反する口縁部。口唇部はナガにより凹む面をなし、圓面をなし、外端に刻目を施す。	口縁下外面に指頭压痕を施す。口唇部はヨコナデ。	
314	#	#	(4.3) — —	やや内湾気味に直立する口縁部。口唇部はナガにより凹む面をなし、突起状に強張。刻目を施す。	口縁下外面に右下がりの斜めのハケモナガ調査する。	
315	#	#	(6.6) — —	直立し、小さく外反する口縁部。口唇部はナガにより尖張りに強張し、凹む面をなし。刻目を施す。	口唇部ヨコナデ。口縁下外面にクサハケが部分的にみられる。	

特徴番号	層位	器種	法量 (cm)	口器部 別種 度	形態・文様	手法	備考
316	第Ⅳ層	爽	— ( 5.4 ) —	直立する胸部より小さく外反する口縁部。口唇部はほぼ水平な面をなし、やや広張し端部に刻目を施す。	口縁部ヨコナデ。口縫下外面はタテハケをナナ調整。内面もナナ調整。		
317	#	#	— ( 8.7 ) —	直立する胸部より、少しだけ外反する口縁部。口唇部は外傾する面をなし、端部に刻目を施す。	口縁部はヨコナデ。胸部外面はタテハケ。	胸部は黒斑がみられる。	
318	#	#	— ( 2.9 ) —	少しだけ外反する口縁部。口唇部は外傾する面をなし、端部に刻目を施す。	口縫部下に、タテハケ目が一部みられる。		
319	#	#	— ( 5.0 ) —	わずかに外反し、開く口縁部。口唇部は外傾する面をなし、外端部は端部に刻目を施す。	口縫下外面、粗いタテハケがみられる。		
320	#	#	— ( 2.8 ) —	強く外反する口縁部であり、口唇部は丸くおさめ、上方からハケ状工具により刻目を施す。	口縁部はヨコナデ。		
321	#	#	— ( 1.7 ) —	短く外反する口縁部であり、口唇部は丸くおさめ、外端に刻目を施す。	"		
322	#	#	18.1 ( 6.5 ) —	直立する胸部より、そのままなる口縁部。口唇部は水平面をなし、やや広張する。	口縫部はヨコナデ。以下、胸部は不明。	全体に消耗する。	
323	#	#	16.5 ( 2.5 ) —	直立する口縁部。口唇部は水平で、やや凹む面をなし、口縫下に穿孔がみられる。	口縫部はヨコナデ。以下、内外面ともにナナ調整。		
324	#	#	16.8 ( 2.0 ) —	少しだけ外反する口縁部。口唇部は小さな面をなす。	口縫部ヨコナデ。		
325	#	#	24.3 ( 7.5 ) —	如意形に強く外反する口縁部。口唇部は丸くおさめる。	内外面とともに磨耗のため不明。		
326	#	#	19.9 ( 6.1 ) —	如意形に外反する口縫部。胸部の張りは小さい。口唇部はナナにより垂直な面をなし、内面はわずかに内凹する。	口縫部ヨコナデ。口縫下、胸部外面にタテハケが一部みられる。		
327	#	#	24.6 ( 4.7 ) —	直立する胸部より強く外反する口縫部。口唇部はナナにより、やや凹む垂直な面をなす。	口唇部はヨコナデ。口縫下外面に弱めのハケ目がみられる。	内面は磨耗し、基部が剥落する。	
328	#	#	22.1 ( 6.5 ) —	緩やかに如意形を呈し、外反する口縫部。口唇部は丸くおさめる。	口縫部はヨコナデ。口縫下外面は特に強くナダる。内面には一部、ヘラ磨きがみられる。	口縫部の基部は強く胸部に黒斑がみられる。他の可能性あり。	
329	#	#	24.6 ( 5.2 ) —	大きく外反し開く口縫部。口唇部は丸くおさめる。	口縫部はヨコナデ。以下、内外面ともにナナ調整。	胸部外面に黒斑がみられる。	
330	#	#	19.3 ( 5.0 ) —	如意形に強く外反する口縫部。口唇部は丸くおさめる。	口縫部はヨコナデ。口縫下外面は特に強くナダる。	胸壁が、やや厚い。	

特因番号	場 位	基 標	法 量 (cm)	口唇 筋基 底径	形 狽・文 様	手 法	備 考
331	第 四 層	裏	25.2 ( 4.2 ) — —	大きき外反し開く口縁部。口唇部は丸くおさめる。	器面が消耗し剥離する。	砂粒を多く含み、軟質、発成不良。	
332	#	#	21.1 ( 6.3 ) — —	如茎形に強く外反する口縁部。筋部の張りは強い。口唇部は丸くおさめる。	歯耗により不明。	砂粒を多く含む。	
333	#	#	26.0 ( 4.5 ) — —	緩やかに開き外反する。口縁部は丸味をおびた面をなす。	#	接合部にて欠損。	
334	#	#	21.0 ( 3.7 ) — —	如茎形に外反する口縁部。口唇部はわずかに内済し、外傾する面をなす。	#		
335	#	#	29.3 ( 3.0 ) — —	大きく外反し開く口縁部。口唇部は小さな面をなす。	内外面ともにナデ調整されるが、歯耗する。		
336	#	#	23.4 ( 6.4 ) — —	如茎形に大きく外反する口縁部。口唇部は丸味をおびた面をなす。	口縁下外面に強いヨコナデ。		
337	#	#	35.0 ( 2.8 ) — —	大きく外反し開く口縁部。口唇部は、やや丸味をおびた面をなす。	口唇部はヨコナデ。	全体に磨耗が進しく器面が剥離する。	
338	#	#	17.8 ( 4.9 ) — —	如茎形に緩やかに外反する口縁部。口唇部は丸くおさめる。	口唇部および口縁下外面はヨコナデ。脣部外面は右下がりのハケ目がみられ、口縁部内面はヨコハケが焼けられる。		
339	#	#	31.2 ( 6.3 ) — —	短く、強く凹曲する口縁部。口唇部は、わずかに凹む垂直に近い面をなす。	口唇部はヨコナデ。以下、歯耗により不明。	器壁が薄い、筋の可動性あり。	
340	#	#	18.0 ( 3.8 ) — —	如茎形に小さく外反する口縁部。口唇部は丸くおさめる。	内外面ともにナデ調整。		
341	#	#	— ( 3.4 ) — 6.4	平底から丸味をおびて立ち上がる。	外面にタテハケを施す。	外面に黒斑がみられる。	
342	#	#	— ( 2.9 ) — 6.3	中央部が、やや凹む平底から開き立ち上がる。	内外面に指擦圧痕がみられる。		
343	#	#	— ( 2.9 ) — 6.3	平底から丸味をおび、ならかに立ち上がる。	内外面ともにナデ調整。	底部はきわめて厚い。	
344	#	#	— ( 3.2 ) — 7.8	わずかに凹む平底から、やや開き立ち上がる。	外面にタテハケを施す。		
345	#	#	— ( 2.3 ) — 7.4	わずかに凹む平底から丸味をおび、立ち上がる。	内面に指擦圧痕がみられる。		

神田番号	層位	器種	法量 (cm)	口徑 器高 底径 底径	形態・文様	手法	備考
346	第Ⅵ層	旗	— (4.0) — 8.9	平底から内湾気味に立ち上がる。	外面はタテハケの後ナデ、内面もナデ調整。	施成良好。	
347	#	#	— (3.2) — 7.6	平底から丸味をおび、開きながら立ち上がる。	外面は器面が剥落するが、タテハケがみられる。内面はナデ調整。		
348	#	#	— (3.8) — 8.4	平底から丸味をおびて立ち上がり、直線的に開く。	外間にタテハケを施し、内面はナデ調整。		
349	#	#	— (3.3) — 8.0	わずかに凹む平底から、直線的に開き立ち上がる。	内外面ともにナデ調整。外面上にはタテハケがみられる。		
350	#	#	— (4.4) — 6.6	平底から、わずかにしゃくれ、直線的に開き立ち上がる。	内外面ともに不明。	唐耗が著しく器面が剥落する。	
351	#	#	— (4.1) — 7.8	平底から内湾気味に立ち上がる。	外面上はナデ調整。内面は唐耗により不明。		
352	#	#	— (3.8) — 7.5	平底から、やや丸味をおび、立ち上がる。	外面上はタテハケが施されるが、唐耗する。内面は唐耗する。		
353	#	#	— (3.8) — 6.6	中央部が、わずかに凹む平底から開きながら立ち上がる。	外面上は粗いタテハケをナデ調整。内面もナデ調整。		
354	#	#	— (4.0) — 7.7	平底から直線的に開き立ち上がる。	内外面ともに唐耗により不明。		
355	#	#	— (3.6) — 9.2	中央部が、やや凹む平底から直線的に立ち上がる。	内外面ともにナデ調整。		
356	#	#	— (4.1) — 7.8	平底から丸味をおびて立ち上がり直線的に開く。	外面上はタテハケを施す。内面には指腹圧痕を残す。		
357	#	#	— (3.9) — 7.2	中央部が、わずかに凹む平底から直立し、立ち上がる。	内外面ともにナデ調整。		
358	#	#	— (3.9) — 7.0	平底から、やや内湾気味に立ち上がる。	外面上はわずかに、タテハケ目がみられる。内面はナデ調整。		
359	#	#	— (3.7) — 7.8	平底から直線的に開き立ち上がる。	内外面ともに唐耗により不明。		
360	#	#	— (3.8) — 7.2	平底より丸味をもじ立ち上がる。	外面上は粗いタテハケが施されるが、唐耗する。		

採集番号	層位	器種	法量 (cm) 頭高 頭径 底径	形態・文様	手法	備考
361	基盤層	蝶	— (4.0) — 7.4	平底から小さくしゃくれ、立ち上がる。	外面はタテハケがみられるが磨耗する。内面はナデ調整。	
362	#	#	— (3.2) — 7.9	中央部がやや凹む平底から、小さくしゃくれ、立ち上がる。	外面はタテハケが一部にみられる。内面はナデ調整。	
363	#	#	— (2.4) — 8.4	上げ底気味に全体が、やや凹む平底。	外面にタテハケがみられる。	
364	#	#	— (4.0) — 6.9	円錐状の平底から直立気味に立ち上がる。	"	外間に黒度がみられる。
365	#	#	— (2.8) — 7.2	わずかに中央部が凹む平底から、直立気味に立ち上がる。	外面全面にタテハケがみられる。	
366	#	#	— (4.0) — 7.6	平底から丸味をおび立ち上がる。	内外面ともに磨耗のため不明。	
367	#	#	— (4.6) — 7.8	平底から直線的に大きく開く。	"	
368	#	#	— (4.2) — 7.9	わずかに中央部が凹む平底から、なだらかに開き立ち上がる。	外面にタテハケがみられる。	
369	#	#	— (3.1) — 8.4	平底から、やや丸味をおび小さくしゃくれ、立ち上がる。	外面は全面にタテハケがみられる。	
370	#	#	— (4.9) — 8.2	中央部がやや凹む平底から、なだらかに立ち上がる。	内外面ともに磨耗している。	
371	#	#	— (3.7) — 8.4	平底から直線的に開く。	"	
372	#	#	— (3.5) — 8.4	底面に一握凹みをもつ平底から、やや内湾気味に立ち上がる。	外面にタテハケがみられるが、磨耗する。	
373	#	#	— (4.7) — 7.4	平底から丸味をおびて立ち上がる。	外面はタテハケの後、ナデ調整。内面もナデ調整。	
374	#	#	— (3.6) — 9.0	上げ底気味に中央部が凹む平底。	外面は全面に細いタテハケがみられる。内面もナデ調整。	
375	#	#	— (4.9) — 8.1	平底から直線的に開き立ち上がる。	外面はタテハケの後ナデ調整。内面もナデ調整。	

検査番号	部位	器種	法量 (cm)	口徑 器高 底径	形態・文様	手 法	備 考
376	第五胸	瓶	— (5.2) — 6.7	中央部がやや凹む平底から直線的に開く。	外面はタテハケの後にナテ調整。 内面はナテ調整。		
377	#	#	— (4.1) — 7.9	中央部がやや凹む平底から、わずかにしゃくれ、立ち上がる。	内外面ともに磨耗のため不明。		
378	#	#	— (4.0) — 8.0	中央部がわずかに凹む平底から丸味を含めて、ややしゃくれ立ち上がる。	外面にタテハケがみられる。		
379	#	#	— (3.2) — 8.6	平底から丸味を含め、立ち上がる。	内外面ともに磨耗のため不明。		
380	#	#	— (3.6) — 8.4	平底から直線的に開き立ち上がる。	外面にタテハケがみられる。	底面に鉛板が みられる。	
381	#	#	— (3.5) — 7.3	底面全体に凹み、上げ底状を呈する。下部に5条、上部に鋸に2条のヘラ振沈縫を施す。	内外面ともにナテ調整。		
382	#	#	— (4.0) — 6.0	上げ底状に全面が凹む平底から、やや内湾気味に立ち上がる。	外面はナテ調整。内面に指跡圧痕を残す。		
383	#	#	— (3.5) — 10.3	全体に凹む平底から、やや丸味を含め立ち上がる。	内外面ともにナテ調整。	底面に黒斑が みられる。	
384	#	#	— (4.6) — 8.5	上げ底状に全面が凹む平底から、直線的に開き立ち上がる。	外面にわずかにタテハケがみられる。	断面に接合部 あり。	
385	#	#	— (4.0) — 7.8	中央部がやや凹む平底から、内湾気味に立ち上がる。	外面はタテハケがみられる。	外面に黒斑が みられる。	
386	#	#	— (3.5) — 8.1	中央部がやや凹む平底から外反しつつ、立ち上がる。	内外面ともに磨耗により不明。		
387	#	#	— (4.5) — 8.0	平底から丸味を含め、立ち上がり開く。	#	外面に黒斑が みられる。	
388	#	#	— (4.5) — 8.4	平底から丸味を含め、内湾気味に立ち上がる。	外面にタテハケがみられる。		
389	#	#	— (4.2) — 7.9	中央部がやや凹む平底から、小さく丸味を含め、しゃくれ、立ち上がる。	外面に一部タテハケがみられるが磨耗する。	外面に黒斑が みられる。	
390	#	#	— (3.9) — 8.2	中央部がやや凹む平底から丸味を含め、立ち上がる。	#		

押抜番号	層位	器種	口群 器高 法盤 (cm) 副底 直径	形態・文様	手法	備考
391	第Ⅱ層	底	— (3.6) — 9.4	中央部がやや凹む平底から、ややしゃくれをもち内湾気味に立ち上がる。	内外面ともに磨耗する。	底面外縁に擦痕がみられる。
392	"	"	— (4.8) — 9.0	中央部がやや凹む平底から、内湾気味に立ち上がる。	内外面に指捺压痕あり。	底面に接合痕あり。
393	"	"	— (3.7) — 9.1	平底から丸味をおび、しゃくれ立ち上がる。	内外面ともに磨耗のため不明。	
394	"	"	— (4.3) — 8.1	平底より、ややしゃくれ内湾気味に立ち上がる。	外面にタテハケがみられ、内面に指捺压痕を残す。	
395	"	"	— (4.5) — 8.7	わずかに中央部が凹み、内湾気味に立ち上がる。	外面はタテハケを施した後にナデ調整。	
396	"	"	— (5.0) — 8.1	平底から内湾気味に立ち上がる。	外面に粗いタテハケがみられる。	
397	"	"	— (5.9) — 6.8	平底から、なだらかに立ち上がる。	外面はタテハケを施した後にナデ調整。	外面に擦痕がみられる。
398	"	"	— (5.0) — 7.9	平底から、ややしゃくれ立ち上がる。	内外面ともに磨耗のため不明。	底面に擦痕がみられる。
399	"	"	— (5.0) — 7.9	平底から直線的に開き立ち上がる。	外面にタテハケがみられる。	
400	"	"	— (6.5) — 7.9	中央部がわずかに凹む平底から、直立気味に開き立ち上がる。	"	
401	"	"	— (4.0) — 8.3	中央部がわずかに凹む平底から丸味をおび、立ち上がる。	内外面ともに磨耗のため不明。	
402	"	"	— (4.3) — 9.3	平底から丸味をおび、わずかにしゃくれ立ち上がる。	外面に、わずかにタテハケがみられる。	
403	"	"	— (5.9) — 7.1	平底から縁部に丸味をもつて、わずかにしゃくれ、立ち上がる。	外面はタテハケを施した後にナデ調整。	内面に擦痕がみられる。
404	"	"	— (3.7) — 8.7	中央部がやや凹む平底から縁部に丸味をもち、しゃくれ、立ち上がる。	内外面ともに磨耗のため不明。	
405	"	"	— (3.4) — 10.7	わずかに中央部が凹む平底から縁部に丸味をもち、立ち上がる。	外面に、わずかなタテハケがみられる。	

持因番号	層位	器種	法量 (cm)	口徑 器高 鋼径 底径	形態・文様	手法	備考
406	第Ⅳ層	甌	— ( 3.6) — 9.3	中央部が、わずかに凹む平底。	外面に細いタテハケがみられる。		
407	#	#	— ( 4.1) — 9.4	平底から、なだらかに立ち上がる。	外面にタテハケがみられる。		断面に接合痕 がみられる。
408	#	#	— ( 4.2) — 9.3	平底から直立し立ち上がり、開く。	#		
409	#	#	— ( 3.3) — 8.8	平底から丸味をおびて、ややしゃくれ、立ち上がる。	内外面ともにナナ調整。		
410	#	#	— ( 5.8) — 8.5	平底から丸味をおび、立ち上がり直線的に開く。	外面全面にタテハケが施される。		
411	#	#	— ( 5.2) — 8.3	平底から直線的に開き、立ち上がる。	内外面ともに磨耗のため不明。		
412	#	#	— ( 2.8) — 9.9	平底から丸味をおび、立ち上がる。	内外面ともにナナ調整。		
413	#	#	— ( 3.7) — 9.2	中央部が、わずかに凹む平底から外反し立ち上がる。	外面全面にタテハケを強く施す。		
414	#	#	— ( 6.3) — 8.5	平底から直線的に開き、立ち上がる。	外面にタテハケが一部みられる。		
415	#	#	— ( 4.7) — 11.6	平底から小さくしゃくれ、立ち上がる。	外面は斜めと縱方向のハケ目が交錯している。内面は磨耗し、器面が剥落する。		
416	#	#	— ( 3.0) — 6.7	平底から縁部に丸味をもち、立ち上がる。	外面にはタテハケがみられる。		
417	#	#	— ( 5.2) — 7.0	平底から丸味をおび、直線的に開く。	外面全面にタテハケを施す。		
418	#	#	— ( 4.5) — 7.0	平底から縁部に丸味をおび、立ち上がる。	外面は一部にタテハケがみられるが、磨耗している。		
419	#	#	— ( 4.2) — 7.0	中央部が、わずかに凹む平底から小さくしゃくれ、立ち上がる。	外面全面に細いタテハケがみられる。		
420	#	#	— ( 3.5) — 6.8	平底から、なだらかなくびれをもち、立ち上がる。	外面はタテハケを施した後にナナ調整。		

検査番号	部位	器種	口徑 器底 開口部 底径 (cm)	形態・文様	手法	備考
421	第Ⅳ周	腹	— (3.4) — 9.2	中央部が、わずかに凹む平底から、しゃくれをもち、立ち上がる。	内外面ともに磨耗するが、内面に指頭圧痕がみられる。	断面に複合輪がみられる。
422	#	#	— (3.2) — 8.9	中央部が、わずかに凹む平底から、しゃくれをもち、立ち上がる。	外表面に細かいタテハケがみられる。	外面に黒斑あり。
423	#	#	— (3.6) — 8.2	中央部がわずかに凹む平底から、しゃくれをもち、内面気味に立ち上がる。	外表面にヘラ压痕を残し、タテハケが施される。	
424	#	#	— (2.9) — 8.0	中央部が、やや凹む平底から、しゃくれをもち、立ち上がる。	内外面に指頭圧痕がみられる。	
425	#	#	— (2.8) — 8.3	中央部が、やや凹む平底から外反気味に立ち上がる。	内外面ともに磨耗のため不明。	
426	#	#	— (4.2) — 8.8	中央部が、やや凹む平底から直立し立ち上がり、内面気味に開く。	外表面はタテハケを施した後、ナデ調整。	
427	#	#	— (3.8) — 8.9	中央部がわずかに凹む平底から、外反気味に立ち上がる。	外表面にわずかにタテハケがみられる。	かなり磨耗が激しい。
428	#	#	— (2.8) — 7.6	中央部が、やや凹む平底から丸味を帯び、立ち上がる。	内外面ともに磨耗のため不明。	
429	#	#	— (3.0) — 8.2	中央部が広く凹む平底から直立し立ち上がり、外反気味に開く。	外表面にわずかにタテハケがみられる。	磨耗が激しい。
430	#	#	— (3.7) — 7.7	中央部が、やや凹む平底から内面気味に立ち上がる。	内外面ともに磨耗する。	
431	#	#	— (5.5) — 9.2	平底から直線的に立ち上がり開く。	外表面にわずかにタテハケがみられる。	外表面下部に傷が付着する。
432	#	#	— (2.5) — 7.0	中央部がわずかに凹む平底から、強くくびれ、開く。	#	外表面に黒斑あり。
433	#	#	— (2.7) — 7.2	中央部が強く凹み、上げ底となる。	外表面にタテハケがみられる。	#
434	#	#	— (3.3) — 8.8	平底から外反気味に立ち上がる。	内外面ともに磨耗のため不明。	
435	#	#	— (4.3) — 8.9	平底から丸味を帯び、しゃくれ、内面気味に立ち上がる。	外表面に、わずかにタテハケがみられる。	

持回番号	層位	基種	法量 (cm)	口徑 凹高 底径	形態・文様	手法	備考
436	第Ⅳ層	變	— ( 4.4) — 6.5	平底から、やや丸味をもち、しゃくれ立ち上がる。	外面に一掛タテハケがみられ、内面には指摘圧痕を残す。		
437	#	#	— ( 3.4) — 9.5	平底から、やや丸味をもち、しゃくれ、内湾気味に立ち上がる。	外面は粗いタテハケを施した後にナデ調整。		
438	#	#	— ( 3.7) — 9.3	底面が全面にやや凹む平底から、ややしゃくれをもち、立ち上がる。	外面にタテハケがみられる。	底面の外周地 部分に傷が 付着する。	
439	#	#	— ( 3.5) — 8.6	わずかに中央部が凹む平底から、ややくびれをもち、立ち上がる。	外面はタテハケを施した後にナデ調整。内面は指摘圧痕を残す。	断面に接合痕 がみられる。	
440	#	#	— ( 3.2) — 7.6	平底から丸味をおび、しゃくれ、立ち上がる。	内外面ともに磨耗により不明。		
441	#	#	— ( 3.6) — 6.9	中央部がやや凹む平底から小さくしゃくれ、立ち上がる。	外面にタテハケがみられる。		
442	#	#	— ( 4.7) — 7.7	中央部が凹み、外周部にしっかりととした底地面をもつ平底から、なだらかに立ち上がる。	内外面とともにナデ調整。	断面に接合痕 あり。	
443	#	#	— ( 5.8) — 7.2	平底から直線的に開き、立ち上がる。	内外面とともに指摘圧痕を残し、外 面には粗いタテハケが施される。		
444	#	#	— ( 3.5) — 7.4	平底から丸味をおび、立ち上がる。	外面に指摘圧痕を残し、粗いタテ ハケが施される。	全体に磨耗す る。	
445	#	#	— ( 3.9) — 8.8	平底から直線的に開き、立ち上がる。	内外面とともに磨耗する。		
446	#	#	— ( 3.7) — 10.0	中央部が小さくわずかに凹む平底 から、内湾気味に立ち上がる。	外面に一部タテハケがみられる。		
447	#	#	— ( 5.6) — 8.8	中央部がわずかに凹む平底から直 立し、内湾気味に開く。	外側全面にタテハケがみられる。	内面に黒斑あ り。	
448	#	#	— ( 4.6) — 8.0	平底から丸味をおび、ややしゃく れをもち、立ち上がる。	外面に一部タテハケがみられるが 磨耗する。		
449	#	#	— ( 3.5) — 8.0	中央部が凹む平底から直立気味に 立ち上がる。	内外面とともに磨耗する。		
450	#	#	— ( 4.0) — 7.5	わずかに中央部が凹む平底から丸 味をおび、立ち上がる。	外面は部面が剥落する。		

押抜番号	層位	基種	法量 (cm)	はび はび 底径 底径	形態・文様	手法	備考
451	第Ⅷ層	梗	— ( 2.7 ) — 8.5	表面全面が、やや凹む平底から、しゃくれをもち、立ち上がる。	内外面ともにナデ調整。	外面に黒斑あり。	
462	#	#	— ( 4.3 ) — 9.8	平底から直立し、立ち上がり聞く。	外面にわずかにタテハケがみられる。	磨耗が激しい。	
453	#	#	— ( 5.0 ) — 9.2	平底から丸味をおび、直線的に開く。	内外面ともにナデ調整。		
454	#	#	— ( 4.2 ) — 7.0	円板状の平底から、やや内湾気味に立ち上がる。	内外面ともに磨耗のため不明。		
455	#	#	— ( 3.3 ) — 7.2	平底から丸味をもち、しゃくれ、立ち上がる。	外面に指頭圧痕を残す。		
456	#	#	— ( 4.3 ) — 7.7	中央部が強く凹み、上底となり、大きく開き立ち上がる。	内外面ともにナデ調整。外面にはヘラ圧痕がみられる。	表面に接合痕あり。	
457	#	#	— ( 3.2 ) — 7.0	わずかに中央部が凹む平底から丸味をおび、聞く。	内外面ともに磨耗のため不明。		
458	#	#	— ( 2.0 ) — 9.8	平底から丸味をもち、しゃくれ、立ち上がる。	外面にタテハケがみられるが、磨耗する。		
459	#	#	— ( 3.2 ) — 6.8	平底から丸味をおび、立ち上がる部分と直線的に立ち上がる部分がみられる。	内外面ともにナデ調整。		
460	#	#	— ( 3.2 ) — 6.6	平底から強くしゃくれ、立ち上がる。	内外面ともに磨耗のため不明。		
461	#	#	— ( 3.6 ) — 7.4	平底から緩やかにしゃくれ、立ち上がる。	外面はナデ調整。内面に指頭圧痕を残す。		
462	#	#	— ( 3.0 ) — 9.2	中央部がやや凹む平底から外反気味に立ち上がる。	外面全面にタテハケを残す。		
463	#	#	— ( 4.1 ) — 8.2	底面全体が、わずかに凹む平底から内湾気味に立ち上がる。	外面全面に細いタテハケが施され、下部にナデ調整を加える。		
464	#	#	— ( 2.8 ) — 7.8	平底から丸味をおび、直立気味に立ち上がる。	外面に一部タテハケがみられる。		
465	#	#	— ( 3.4 ) — 6.8	底面全体が凹み、上げ底になり丸味をおび、強くしゃくれをもら立ち上がる。	内外面にヘラ圧痕がみられる。	表面に接合痕あり。	

辨認番号	層位	器種	法量 (cm)	口径 器高 網径 底径	形態・文様	手法	備考
466	第4層	甌	— ( 3.8) — 7.6	平底より丸味をおび、立ち上がり開く。	内外面ともに磨耗のため不明。		
467	#	#	— ( 4.6) — 7.6	平底から、ややしゃくれをもち、立ち上がる。	外面に背錐状痕を残し、ヘラ压痕がみられる。		
468	#	#	— ( 2.3) — 8.9	平底から強くしゃくれ、立ち上がる。	内外面ともに磨耗のため不明。		
469	#	#	— ( 3.1) — 6.7	中央部がやや開む平底より丸味をおび、内湾気味に立ち上がる。	外面に一部タテハケがみられる。		
470	#	#	— ( 4.5) — 8.8	平底から丸味をおび、しゃくれ、直線的に開く。	#	底面に黒斑あり。	
471	#	#	— ( 3.5) — 8.2	底面全体が、わずかに凹む平底から丸味をおび、強くしゃくれ、立ち上がる。	#		
472	#	#	— ( 2.6) — 9.6	平底から、ややしゃくれをもち、立ち上がる。	#	外面に黒斑あり。	
473	#	#	— ( 3.2) — 8.2	平底から強くしゃくれ、外反気味に立ち上がる。	外面にタテハケがみられ、内面は丁寧なナガ調整。	#	
474	#	#	— ( 3.0) — 8.0	平底から直線的に立ち上がり、開く。	内外面ともにナガ調整。		
475	#	#	— ( 2.8) — 9.6	平底から丸味をおび、強くしゃくれをもち、立ち上がる。	内外面ともに磨耗のため不明。		
476	#	#	— ( 2.6) — 8.6	中央部が、わずかに凹む平底から丸味をおびて立ち上がる。	#		
477	#	#	— ( 3.1) — 9.0	平底から小さくしゃくれ、立ち上がる。	内外面ともにナガ調整。		
478	#	#	— ( 5.0) — 6.6	平底から丸味をおび、小さくしゃくれ、直線的に開く。	外面にタテハケがみられるが、磨耗する。	網部の器壁が薄い。	
479	#	#	— ( 5.3) — 7.4	中央部が、わずかに凹む平底から、なだらかに外反し開く。	#		
480	#	#	— ( 3.0) — 7.7	平底から丸味をもち、ややしゃくれ、立ち上がる。	内外面ともにナガ調整。		

神田番号	層位	器種	口径 器高 側径 (cm)	形態・文様	手法	備考
496	第Ⅳ層	廣	— (4.9) — 5.6	平底から丸味をおび、緩やかにしゃくれ、立ち上がる。	外面にタテハケがみられるが、磨耗する。	底径が小さく厚い。底底部かもしだれ。
497	#	#	— (4.2) — 7.9	平底から丸味をおび、しゃくれ、直立気味に立ち上がる。	外面に斜めと縱方向のハケ目がみられる。	
498	#	#	— (4.0) — 5.6	平底から丸味をおび、小さくしゃくれ、立ち上がる。	外面に一部タテハケがみられる。	
499	#	#	— (4.2) — 6.9	中央部が、わずかに凹む平底から小さくしゃくれ、内湾気味に立ち上がる。	外面全面に細かいタテハケが施される。	
500	#	#	— (4.1) — 10.3	中央部が、凹む平底から強くしゃくれ、内湾気味に立ち上がる。	内外面とともに磨耗のため不明。	
501	#	#	— (4.7) — 9.8	平底から強くしゃくれをもち、立ち上がる。	外面はタテハケがみられるが、磨耗する。	表面に接合痕あり。
502	#	#	— (3.3) — 8.8	わずかに中央部が凹む平底から小さくしゃくれ。外反気味に立ち上がる。	内外面とともに磨耗のため不明。	
503	#	#	— (2.7) — 10.0	中央部が、わずかに凸む平底から小さくしゃくれ。立ち上がる。	内外面とともにナデ調整。内面に指痕圧痕を残す。	
504	#	#	— (4.6) — 7.6	底面全体に凹み、大きく外反しつつ、立ち上がる。	外面に粗いタテハケを施す。	外面に黒斑、底面に接合痕あり。
505	#	#	— (4.8) — 9.9	平底から小さくしゃくれ、直線的に開く。	外面に、わずかにタテハケがみられる。	
506	#	#	— (4.8) — 8.2	底面は、外縁部を残し、凸む上げ底。	内外面とともに磨耗のため不明。	
507	#	#	— (5.2) — 10.5	平底から、わずかにしゃくれ、立ち上がる。	外面はタテハケを施した後、ナデ調整。	表面に接合痕あり。
508	#	#	— (6.8) — 7.1	中央部が、わずかに凹む平底から強くしゃくれ、直線的に立ち上がる。	内外面とともに磨耗のため不明。	
509	#	#	— (6.8) — 8.0	円錐状の平底から、なだらかに立ち上がる。	内外面に指痕圧痕を残す。	
510	#	#	— (4.4) — 9.6	平底から内湾気味に緩やかに立ち上がる。	外面にタテハケがみられる。	

辨認番号	層位	器種	法量 (cm)	口仔 鰐高 胸径 底径	形態・文様	手法	備考
481	第三層	甕	— ( 2.6) — 9.6	平底から強くしゃくれをもち、立ち上がる。	内外面ともにナテ調整。		
482	#	#	— ( 2.7) — 9.3	平底から丸味をおび、強くしゃくれ、立ち上がる。	外面に一部タテハケがみられる。	断面に接合痕あり。	
483	#	#	— ( 4.3) — 8.0	中央部がわずかに凹む平底から小さくしゃくれ、立ち上がる。	外面に細いタテハケがみられる。		
484	#	#	— ( 2.9) — 8.0	円板状の平底から丸味をおび、直立し、開く。	外面に一部タテハケがみられる。	外腹から底面にかけて黒斑あり。	
485	#	#	— ( 3.1) — 15.4	中央部がわずかに凹む平底から強くしゃくれをもち、立ち上がる。	#		
486	#	#	— ( 4.1) — 9.3	平底から丸味をおびたしゃくれをもち、直徑的に開く。	外面に粗いタテハケの後、ナテ調整。		
487	#	#	— ( 4.2) — 8.2	平底から小さくしゃくれ、立ち上がる。	内外面ともに磨耗のため不明。	底部が厚い。	
488	#	#	— ( 3.1) — 6.6	底面全体が凹む円板状の上げ底である。	#		
489	#	#	— ( 3.1) — 8.5	中央部が凹む平底から、緩やかにしゃくれ、外反し立ち上がる。	#	底部が厚い。	
490	#	#	— ( 3.8) — 9.0	平底から強くしゃくれ、立ち上がる。	外面に指頭圧痕を残し、一部にタテハケがみられる。	断面に接合痕あり。	
491	#	#	— ( 3.9) — 9.9	中央部が凹む平底から、緩やかにしゃくれ、外反し立ち上がる。	内外面ともにナテ調整。		
492	#	#	— ( 4.0) — 6.0	平底から丸くしゃくれ、内湾気味に立ち上がる。	内外面ともに磨耗が激しい。		
493	#	#	— ( 4.2) — 7.4	中央部が、わずかに凹む平底から小さくしゃくれ、立ち上がる。	内外面ともに磨耗するが、内面に一部ハケ目がみられる。		
494	#	#	— ( 5.1) — 9.0	中央部が、やや凹む平底から緩やかにしゃくれ、外反気味に開く。	外面全面にタテハケが施される。	断面に接合痕あり。	
495	#	#	— ( 5.1) — 9.1	中央部が、やや凹む平底から緩やかにしゃくれ、立ち上がる。	外面はタテハケの後にナテ調整。		

種別番号	層	位	器種	重量 (g)	口徑 深さ 周長 底径	形態・文様	手 法	備 考
511	第	帶	袋	— ( 8.2 )	底面全体が、やや凹む平底から内 湾気味に立ち上がる。	外面はタテハケを施した後に、ナ ナ子開き。		
				6.6				
512	#	#	#	— ( 6.1 )	#	外面はタテハケを施し、内面には 指頭圧痕を残す。底面にはヘラ崩 きが施される。		
				8.0				
513	#	#	#	— ( 8.7 )	平底から、なだらかに立ち上がり 直線的に聞く。	外面はタテハケがみられる。		
				7.8				
514	#	#	#	— ( 5.8 )	円板状の平底から緩やかに立ち上 がる。	内外面ともにハケ調査。		
				9.1				
515	#	#	#	— ( 5.7 )	平底から、やや丸味をおび、なだ らかに立ち上がる。	#		断面に接合痕 あり。
				8.8				
516	#	#	#	— ( 5.3 )	中央部が、やや凹む平底から強く しゃくれをもち、内湾気味に立 ち上がる。	外面全面にタテハケを施す。		
				9.0				
517	#	#	#	— ( 6.6 )	中央部が、かなり凹む上げ底から、 しゃくれをもち、大きく述べく。	外面下部に無いタテハケがみられ る。		
				6.5				
518	#	#	#	— ( 12.7 )	平底から丸味をおび、立ち上がり なだらかに聞く。	内外面ともに磨耗のため不明。		断面が剥落す る。
				8.8				
519	#	#	#	— ( 13.3 )	平底から、なだらかに立ち上がり 内湾し小さく聞く。	外面はタテハケを施した後にナ ナ子開き。内面に指頭圧痕を残す。		
				8.5				
520	#	#	#	— ( 5.0 )	外方に強く傾けた脚部をもつ 成形。脚部は圓をなす。	外面はタテハケを施した後に、ナ ナ子開き。内面には指頭圧痕を残す。		
				9.1				
521	#	#	#	— ( 4.8 )	やや内湾気味に張り出す脚部をもつ 成形。脚部は丸味を帯びた圓をなす。	内外面ともに、やや磨耗する。圓 脚の内面は右方向のヘラ崩れが施 される。		
				7.6				
522	#	#	#	— ( 8.1 )	平底から小さくしゃくれをもち、 なだらかに聞く。中央部に焼成痕、 穿孔される。	外面は全面にタテハケが施され、 内面はナナ子開き。		孔径は 1.2 cm である。
				8.3				
523	#	#	#	— ( 4.1 )	やや凹む平底から小さくしゃくれ 立ち上がる。中央部に焼成痕、穿 孔される。穿孔は下方へ偏く。	外面全面にタテハケが施される。		孔径は 1.3 cm である。
				8.0				
524	#	#	#	— ( 3.1 )	平底から、やや強くしゃくれ、立 ち上がる。中央部に焼成痕、穿 孔される。穿孔は小さく上下に大き く聞く。	内外面ともに指頭圧痕を残し、ナ ナ子開き。		孔径は 0.6 cm であり、底面 に黒斑がみら れる。
				8.2				
525	#	#	#	— ( 4.5 )	底面全体に凹む平底から強くしゃ くれ、立ち上がる。中央部に焼成 痕、穿孔される。	内外面ともに、わずかにハケ目を 残し、ナナ子開き。		孔径は 1.4 cm である。
				8.0				

辨認番号	居位	器種	法量 (cm)	口経 筋高 筋径 底径	形態・文様	手法	備考
526	第Ⅷ層	痕	— (4.4) — 7.6	半底から、なだらかに立ち上がる。中央部に施成後、穿孔される。	内外面ともにナデ調整。	孔径は1.4cmである。	
527	#	高杯	— (4.3) —	上下になだらかに開く。	内外面ともにナデ調整されるが、磨耗する。		
528	#	#	— (5.0) —	"	内外面ともにナデ調整。	一部、黒斑がみられる。	
529	#	#	— (6.4) —	軸部へ、なだらかに開く。	杯縁内面にヘラ磨きがみられ、外面は全面ナデ調整。		
530	#	鉢	16.3 (4.5) —	やや内湾気味に直立する口縁部。口唇部は丸味をおびた面をなす。	内外面ともにナデ調整。内面下部が一部剥落する。		
531	#	#	29.0 (4.4) —	内湾しめる口縁部。口唇部は丸くおさめる。	内外面に横方向のヘラ磨きを施す。		
532	#	#	19.0 (3.0) —	やや開き直立する口縁部。口唇部は丸くおさめる。	内面はナデ調整。外面は磨耗のため不明。		
533	#	#	23.8 (9.5) —	やや内湾し、開く口縁部。口唇部は丸くおさめる。	外面は斜めのハケ目が施され、内面は丁寧なナデ調整。口縁部はヨコナデ。	口縁下内面に黒斑あり。	
534	#	#	30.1 (4.2) —	わずかに内湾気味に直立する口縁部。口唇部は丸味をおびた面をなす。	内外面ともにナデ調整。		
535	#	#	25.2 (3.3) —	内湾気味に直立する口縁部。口唇部は丸くおさめる。	"		
536	#	#	31.1 (5.9) —	わずかに外反する口縁部。口唇部は面をなす。	外面はタテハケを施した後に横方向のヘラ磨き。内面も横方向のヘラ磨きがみられる。	完成良好。	
537	#	#	30.0 (8.5) —	内湾気味に大きく開く体部より口縁部は緩やかに外反し開く。口唇部は丸味をおびた面をなし、口縫下には有段部をもつ。	内外面ともに横方向のヘラ磨きが施される。有段部は凹凸がやや厚く、接合により形成されている。		
538	#	#	33.2 (14.4) —	丸く張りをもつ体部から、強く外反する口縁部。口唇部は面をなし、体部中位に有段部をもつ。	口縁部はヨコナデ。体部は内外面ともに横方向のヘラ磨きが施される。有段部は接合により形成される。	断面、有段部に接合痕あり。	
539	#	#	19.0 (10.3) —	なだらかに開く体部より、強く内湾しめる口縁部。口唇部は丸くおさめる。	外面は右下がりのヘラ磨きが施され、内面は口縁部に横方向のヘラ磨き、以下はナデ調整。	体部外間に大きな黒斑がみられる。	
540	#	#	17.8 9.9 — 7.8	平底の底部より直線に開き、口縁部はわざかに外反する。口唇部は丸くおさめる。	口縁お上げ底部にヨコナデ。体部はヘラ磨きが施されるが、磨耗する。	底部に黒斑がみられる。	

持因番号	層位	器種	法蓋 (cm)	口径 基部 底径	形態・文様	手法	備考
541	筋瘤層	鉢	17.8 11.7 — 7.1	円板状の平底から、わずかに内凹気味に開き終る。口唇部は丸くおさめる。	口縁下外側にヘラ磨き。以下、体部はタテハケを施した後にナダ調整。内面はナダ調整。	全体に磨耗する。体部内外面に黒斑あり。	
542	#	#	30.2 (17.7) — —	緩やかに開く体部より大きく外反する口縁部。口唇部は丸くおさめる。体部や上位に強い棱をもつ。	内外面ともに全面に横方向のヘラ磨きが施される。内面下部は磨耗する。	体部外面、下方に黒斑あり。	
543	#	#	— (15.0) 30.0 —	緩やかに内凹する頭部。中央部に最大径をもち、有段部がみられる。	頭部外周全面にハケ目がみられるが、磨耗する。内外面ともに指頭圧痕を残す。		
544	#	#	— (20.2) — —	緩やかに開き、突帯気味の有段部から、やや外反し直立する頭部。	内面に指頭圧痕を残す。有段部は接合部を強くナダ形成する。		
545	#	#	— (8.0) — —	有段部から外反気味に直立する頭部。	内外面ともにナダ調整。		
546	#	#	— (3.3) — —	やや内凹気味に立ち上がると思われる体部。2条の突帯に刻目を施す。	突帯は貼付により強くヨコナダを施される。	外面に黒斑あり。	
547	#	#	— (4.1) — —	有段部をもち、直立する体部。段部の上に2条のヘラ縁化線を施す。	外面にタテハケが、わずかにみられる。	外面に黒斑がみられ、磨耗する。	
548	#	#	— (9.7) — —	内凹気味に立ち上がる体部。1条のヘラ縁化線を施し、下にハケ状工具による斜めの刻目を施す。	外面には指頭圧痕を残し、内外面ともにナダ調整。		
549	#	瓶	20.6 (2.5) — —	外反し開く。瓶頸部は面をなす。	瓶頸部はヨコナダ。		
550	#	#	19.8 (2.5) — —	外反し開く。瓶頸部は丸くおさめる。	#		
551	#	#	23.6 (3.0) — —	直線的に開く。瓶頸部は丸くおさめる。	内外面ともに磨耗する。内面には指頭圧痕を残す。		
552	#	#	27.9 (4.3) — —	大きく外反し、開く。瓶頸部は丸くおさめる。	内外面ともにタテハケを施した後にナダ調整。		
553	#	#	11.8 (3.9) — —	直線的に小さく開く。瓶頸部はわずかに外反し、面をなす。	外面は磨耗のため不明。内面はナダ調整。		
554	#	小剣 土器	5.4 4.2 — 3.4	平底から直立し、やや開く。口唇部は丸くおさめ、底面に直径4mmの刻印による穴がみられる。	内外面ともに悪いハケ目をわずかに残し、ナダ調整。		
555	#	劫難車	直徑 3.7 厚さ 0.7 重量(g) 9.6	縫の破片を転用し、中央部に穿孔する。		孔径は4mm。	

博団番号	層位	器種	法量 (cm) 口径 幅高 底径	形態・文様	手法	備考
556	第Ⅲ層	紡錘車	直径3.8×3.3 厚さ0.5 重量(g)7.5	土器片を転用し、輪円形を呈す。 中央部に穿孔あり。		孔径は3.5mm。
557	〃	〃	〃3.2 〃0.6 〃7.5	甕の破片を転用し、穿孔あり。		孔径は3.0mm。
558	〃	〃	〃5.3 〃1.3 〃36.5	円形を呈し、施成前に穿孔している。		孔径は7.0mm。
559	〃	〃	〃5.5 〃1.0 〃20.2	甕の破片を転用し、不整形。有段形がみられる。中央部に穿孔あり。		孔径は3.0mm。
560	〃	〃	〃3.8 〃0.6 〃9.4	土器片を転用し、精円形を呈す。 中央部に穿孔あり。		孔径は5.0mm。

第15表 包含層出土石器観察表

博団番号	層位	器種	計測値 (cm, g) 最大長 最大幅 最大厚 重	材質	特徴	備考
561	第Ⅲ層	石斧	4.3 1.3 0.6 4.8	緑色岩	緑色岩の小片を素材とし、端辺部を粗く高騰。端部を両面から研磨し、小さな両刃の刃部を形成。刃部には擦痕がみられる。	
562	〃	〃	5.0 2.2 1.3 20.0	泥岩	小型の柱状片刃石斧。刃部の表面には横と縱方向の擦痕がみられ、右側面および基部もよく磨かれている。	
563	〃	〃	12.1 6.6 4.4 563.0	緑色岩	太形始刃石斧の未完成品である。全面を形成のために粗く敲打する。大きく欠損している。	
564	〃	叩石	10.5 9.5 4.7 647.0	砂岩	自然の円礫を使用する。端辺部に小さく打抜を残す。	
565	〃	〃	9.4 7.2 3.0 290.0	〃	長楕円形の自然礫を使用する。端部に敲打痕が集中している。大きく欠損する。	
566	〃	〃	8.9 8.0 3.5 372.0	チャート	やや偏平な自然の円礫を使用する。右側辺部には表面間に低い斜面がみられる。	
567	〃	砥石	11.0 6.5 2.9 260.0	砂岩	端辺部が欠損する。端面は表面1面であり、小さく凸む。	
568	〃	石包丁	4.2 6.1 0.7 21.6	頁岩	直刃をもち、極穴が1個みられる。大きく欠損する。	

辨認番号	層位	器種	計測値 (cm, g) 最大長 最大幅 最大厚 重量	材質	特徴	備考
569	基部層	削器	6.5 4.2 1.6 56.5	チャート	表裏面ともに小刻みにより調整され、打製石斧状をなす。	
570	#	#	6.6 4.1 0.7 22.8	サヌカイト	横性の不定形の洞穴を素材とし、刃部に小刻みを施し、刃部を形成する。	
571	#	石錐	3.8 0.7 0.3 1.0	真岩	柳葉形を呈し、中央部、基部両辺に擦痕がみられる。	光形
572	#	#	3.8 0.7 0.5 1.5	#	有茎石錐であり、先端部は欠損する。断面は三角形に近い変形をなし、茎部から先端部にかけて、枝をもつ。表裏面ともに、よく擦痕がみられる。	
573	#	#	3.2 1.4 0.4 1.4	サヌカイト	平底式の基部をもち、やや大型の石錐。基部部は、わずかに張り出す。	光形
574	#	#	2.0 1.7 0.3 0.8	#	やや四む平底式の基部をもち、先端部および基部部を欠損する。	
575	#	#	1.4 1.5 3.0 0.4	#	圓底式の基部をもち、やや不規則をなす石錐である。全体の調整は、やや粗い。	

第16表 造構出土土器観察表

辨認番号	遺物番号	器種	法量 (cm) 口徑 最高 側径 厚度	形態・文様	手法	備考
576	S T 1	盤	18.3 ( 2.3 ) — —	環く外反する口縁部。口唇部は丸くおさめる。	内外面とともに、横方向のヘラ磨きがみられる。	
577	#	#	— ( 3.8 ) — —	有段部をもつ上腹部。段部下に4条のヘラ彫沈線を施す。	外面はヘラ磨き。内面はナナ調節。	
578	#	#	( 3.4 ) — —	1.肩部であり、2条のヘラ彫沈線を施し、上部に直溝文と思われる3本の沈線がみられる。	内外面ともに磨耗する。	
579	#	#	( 2.4 ) — —	有段部をもつ上腹部。段部下に2条のヘラ彫沈線を施す。	内外面とも、ヘラ磨きされるが、磨耗する。	
580	#	#	( 5.9 ) — —	有段部をもつ上腹部である。	内外面ともに磨耗し、基面が剥落している。	
581	#	#	— ( 5.5 ) 9.8	平底から、やや外反気味に開き、立ち上がる。	外側に横方向のヘラ磨きがみられるが、磨耗する。内面はナナ調節。	

博団番号	造機番号	器種	法量 (cm)	口縫 部高 度	形態・文様	手 法	備 考
582	S T 1	鏡	— (2.5) — —	— (2.1) — —	わずかに外反し、直立する口縫部。口縫部はナデにより張り出し、水平な面をなし、端部に刻目を施す。	口縫下外縁にタテハケ。内面にはヨコハケが施される。	
583	#	#	— (2.1) —	— (2.1) —	やや外反する口縫部。口縫部は丸くおさめ、外縁に刻目を施す。	口縫部はヨコナデ。	
584	#	#	27.0 (4.4) — —	— (4.4) — —	直立する外反する口縫部直下と、やや下部に突起の突唇を貼付し、刻目を施す。	口縫部はヨコナデ。以下、内外面ともにナデ調整。	
585	#	#	25.2 (4.4) — —	— (4.4) — —	直立する口縫部のやや下に断面V形の突唇を貼付し、端部と同位置に刻目を施す。		
586	#	#	21.2 (5.2) — —	— (5.2) — —	内湾気味に直立する口縫部下に突唇を貼付し、刻目を施す。口縫部は丸くおさめる。	口縫部はヨコナデ。外縁は突唇下部にタテハケ。内面はナデ調整。	
587	#	#	21.4 (7.3) —	— (7.3) —	内湾気味に直立する口縫部直下に突唇を貼付し、刻目を施す。	口縫部はヨコナデ。外縁は突唇下部にヘラ压痕が残されており、以下にタテハケ。内面は磨耗のため不明。	
588	#	#	18.8 (7.6) —	— (7.6) —	細意形に外反する口縫部。口縫部はナデによりむし面をなし、内縁はわずかに内凹し、外縁に刻目を施す。	口縫部はヨコナデ。以下、外縁は細いタテハケ。内面はナデ調整。	
589	#	#	28.0 (7.5) — —	— (7.5) — —	大きく外反する口縫部。口縫部は丸くおさめ、刻目を施す。	口縫部はヨコナデ。以下、内外面ともにナデ調整。	頭部から口縫部にかけて厚くなる。
590	#	#	19.5 (1.8) — —	— (1.8) — —	直立する口縫部であり、口縫部はわずかに外傾する面をなし、外縁に小さな刻目を施す。	口縫部および口縫部下外縁はヨコナデ。口縫部内面はヨコハケ。	
591	#	#	— (6.9) — —	— (6.9) — —	弱い段部をもつ体部。有絞部には刻目を施す。	外縁全面にタテハケが施されるが磨耗する。内面は磨耗のため不明。	外縁に黒斑あり。
592	#	#	— (4.1) — —	— (4.1) — —	弱い段部をもつ体部。有絞部にはやや乱れた刻目を施す。	外縁は斜めのハケ調整の後にナデ調整。内面もナデ調整。	
593	#	#	— (2.5) — 8.2	— (2.5) — 8.2	円板状の平底である。	外縁にタテハケが施される。	
594	#	#	— (4.0) — 9.2	— (4.0) — 9.2	平底から丸くしゃくれ、内湾し立ち上がる。	外縁は磨耗のため不明。内面はナデ調整。	
595	#	#	— (15.9) — 9.3	— (15.9) — 9.3	平底から丸くしゃくれ、立ち上がり、開く。	外縁全面にタテハケが施されるが磨耗する。内面はナデ調整。	底部附近に傷が付着する。
596	#	#	— (11.0) — 9.8	— (11.0) — 9.8	平底から丸くしゃくれ、なだらかに立ち上がり、開く。		頭部外縁に黒斑あり。

井戸番号	遺構番号	器種	法量 (cm)	口径 基盤 側壁 底盤	形態・文様	手法	備考
597	S.T.1	甌	— (5.6) — 5.6	平底から強くしゃくれ、立ち上がる。	外面はクテハケが施されるが、断続する。内面は器皿が剥落する。		
598	#	桔梗甌	直径 3.1 厚さ 0.6 重量(g) 5.7	土器片を転用し、中央部に穿孔する。			孔径は2mm。
599	#	#	# 2.9 # 0.6 # 4.1	器の破片を転用する。有段部とハケ目がみられ、中央部を穿孔する。			孔径は3mm。
600	#	#	# 2.9 # 0.7 # 5.3	土器片を転用し、中央部に穿孔する。			孔径は4mm。
601	#	#	# 3.1 # 0.6 # 7.5	#			孔径は5mm。
602	#	#	# 4.5 # 0.8 # 11.9	土器片を転用し、中央部に穿孔する。 表面にクテハケがみられ、一部欠損する。			孔径は4mm。
603	#	#	# 4.9 # 0.8 # 15.5	土器片を転用し、中央部に穿孔する。	周辺部は丸くよく調整される。		孔径は6mm。
604	#	#	# 4.0 # 0.9 # 10.7	#			孔径は6mm。
605	#	#	# 4.0 # 0.8 # 12.9	土器片を転用し、中央部に穿孔する。 一部欠損する。			孔径は4mm。
606	#	#	# 4.3 # 0.7 # 9.0	土器片を転用し、中央部に穿孔する。 半分欠損する。			
607	#	#	# 3.6 # 0.9 # 5.6	土器片を転用し、中央部に穿孔する。 半分欠損し、表面にハケ目がみられる。			
608	#	#	# 2.8 # 0.7 # 3.2	土器片を転用し、中央部に穿孔する。 半分欠損する。			
609	#	#	# 4.2 # 0.8 # 6.5	#			
610	#	#	# 3.2 # 0.8 # 5.7	土器片を転用し、中央部に穿孔する。 半分欠損し、表面に一部ハケ目がみられる。			
611	#	#	# 2.4 # 0.9 # 2.4	#			

排番号	造構番号	器種	法量 (cm) 口徑 基部 周径 底径	形態・文様	手法	備考
612	S T 1	劫錐車	直径 4.4 厚さ 0.8 重歎(g) 7.7	土器片を転用し、中央部に穿孔する。 半分欠損し、表面にハケ目がみられる。		
613			# 3.5 # 1.0 # 5.1	土器片を転用し、中央部に穿孔する。 半分欠損する。		
614	#	#	# 2.9 # 0.9 # 3.9	#		
615	#	#	# 4.8 # 0.7 # 7.2	#		
616	#	#	# 3.7 # 0.8 # 5.2	#		
617	#	#	# 2.2 # 0.5 # 2.0	#		
618	#	#	# 3.1 # 0.7 # 4.1	土器片を転用し、中央部に穿孔する。 約半分欠損し、表面にハケ目がみられる。		
619	#	#	# 2.8 # 0.8 # 3.9	土器片を転用し、中央部に穿孔する。 約半分に欠損する。		
620	#	#	# 3.3 # 0.8 # 4.1	#		
621	#	#	# 2.3 # 0.6 # 2.9	#		
622	#	#	# 3.0 # 0.8 # 3.2	#		
623	#	#	# 3.7 # 0.7 # 4.8	土器片を転用し、中央部に穿孔する。 表面に溝目をもつ有段部とハケ目がみられる。		
624	#	#	# 3.2 # 0.6 # 4.9	土器片を転用し、表面にはハケ目と小さな穿孔が、裏面には大きな穿孔が見られる。		
625	#	#	# 3.7 # 0.9 # 6.7	土器片を転用する。 表面には小さく、裏面には大きな穿孔がみられる。		
626	#	#	# 2.6 # 0.7 # 4.1	土器片を転用する。 裏面に穿孔がみられるが、位置がずれる。		

辨認番号	遺構番号	器種	法量 (cm)	口径 高径 周径 底径	形態・文様	手 法	備考
627	S T 1	縦摺車	直径 厚さ 重量(g)	2.6 0.8 3.1	土器片を転用する。 表面に穿孔がみられるが、貫通しない。		
628	#	#	#	2.9 0.7 3.8	#		
629	#	#	#	3.1 0.6 5.2	土器片を転用する。 表面に穿孔と粗いハケ目がみられる。		
630	#	#	#	2.5 0.8 3.6	土器片を転用する。 表面に小さな穿孔がみられる。		
631	#	#	#	4.3 0.8 9.6	土器片を転用する。 表面にはハケ目、表面に穿孔がみられる。		
632	#	#	#	3.4 0.7 6.0	土器片を転用する。 表面に穿孔がみられる。		
633	#	#	#	3.8 1.0 10.5	土器片を転用する。 表面に穿孔がみられるが、位置がずれる。		
634	#	#	#	5.3 1.0 9.1	土器片を転用する。 表面に穿孔がみられる。		
635	#	#	#	5.1 0.9 8.9	土器片を転用する。 表面に穿孔がみられる。		
636	#	#	#	3.2 0.7 6.6	#		
637	S K 1	裏	—	21.6 ( 3.6 ) — —	大きく外反する口縁部のやや下に突唇を貼付し、丸味をおびた口唇部と突唇間に刻目を施す。	口縁部ヨコナデ。	
638	#	#	—	23.4 ( 3.3 ) — —	直立する口縁部のやや下に突唇を貼付し、大きくおさめた口唇部上面に刻目を施す。	内外面ともに磨耗のため不明。	
639	#	#	—	22.2 ( 2.7 ) — —	強く外反する口縁部。口唇部は丸くおさめ、刻目を施す。	#	
640	#	#	—	19.4 ( 2.4 ) — —	直立する口縁部。口縁下に突唇を貼付する。口唇部は丸くおさめる。	#	
641	#	#	—	21.0 ( 7.5 ) — —	直立し、優しく外反する口縁部。口縁下に突唇を貼付する。口唇部は丸くおさめ頭目を施す。口縁下5 cmに有段部をもつ。	口縁部はヨコナデ。以下、内外面ともに磨耗のため不明。	

持因番号	造模番号	基 標	法量 (cm) 器高 調整 底径	形 狽・文 様	手 法	備 考
642	S K 1	旗	30.8 ( 9.7 ) — —	直立する頭部より緩やかに外反する口縁部。口唇部はナデにより拡張、外傾する面をなし胡日を地す。	口縁部はヨコナデ。脣部外面はタテハケを施す。内面はナデ調整。	
643	#	#	— ( 3.5 ) — 8.5	平底から、なだらかに立ち上がる。	内外面ともにナデ調整。	底面にワラ状の圧痕あり。
644	#	#	— ( 10.4 ) — 8.9	円板状の平底から直線的に立ち上がる。	内外面ともに磨耗のため不明。	#
645	#	#	— ( 4.6 ) — 7.1	中央部がやや凹む平底から、しゃくれをもち、立ち上がる。	外面にタテハケ。内面はナデ調整。	
646	#	#	— ( 4.3 ) — 7.3	平底から丸味をおび、立ち上がる。	内外面ともにナデ調整が施されるが、擦耗する。	外面に黒斑あり。
647	S K 2	#	27.2 ( 4.0 ) — —	わずかに外反し、直立する口縁部。口唇部は外傾する面をなし、外端部に小さな斜めを地す。	外面は口縁下に斜めのハケ目がみられ、内面はヨコハケが施される。	
648	#	#	24.0 ( 3.1 ) — —	内肉気味の頭部より、ナデによりわざかに外反し、口唇部を拡張、水平にのびる。端部に胡日を地す。	口縁下外面に指紋圧痕を残す。内面はナデ調整。	
649	#	#	23.0 22.6 — 8.3	中央部がやや凹む平底から緩やかに開く。口縁部は強く前傾し、わざかに内側を折る。口唇部は丸くおさめ、胡日を地す。	口縁部はヨコナデ。脣部外面は全面に斜めのタテハケを施す。内面は口縁下にヨコハケがみられ、以下はナデ調整。	外曲下頭部に削耗あり。削耗部はワラ状工具による。
650	#	#	— ( 5.3 ) — —	直立する口縁部。口唇部はナデにより拡張、やや外傾する面をなし、突き出の端部に胡日を地す。	口縁下外面に斜めタテハケが施される。	外面に黒斑あり。
651	#	#	19.6 ( 1.8 ) — —	外反する口縁部。口唇部はナデにより拡張、突き出の端部にやや上方より胡日を地す。上端部は段をなす。	口縁部はヨコナデ。	
652	#	#	20.5 ( 1.1 ) — —	強く屈曲し外反する口縁部。口唇部は丸くおさめ、胡日を地す。	#	
653	#	#	— ( 4.2 ) — 9.0	平底から直線的に聞く。	内外面ともに磨耗のため不明。	
654	#	#	— ( 4.3 ) — 7.0	平底から丸味をおび、小さくしゃくれ、立ち上がる。	外面はタテハケが一部みられ、内面は指紋圧痕を残す。	
655	#	#	— ( 2.0 ) — 6.4	中央部がやや凹む平底から、丸味をおびて立ち上がる。	内外面ともに磨耗のため不明。	
656	#	#	— ( 3.8 ) — 6.4	底面全面が、やや凹む平底から、小さくしゃくれ、立ち上がる。	#	

辨認番号	連構番号	器種	法量 (cc)	口径 最高脚径 底径	形態・文様	手法	備考
657	S K 3	甕	— ( 3.0 ) 8.8	平底から丸味をおび、立ち上がる。	内外面ともに磨耗のため不明。		
658	S K 5	口	23.5 ( 7.0 ) — —	直立する脚部より、やや外反する口縁部。口唇部はナデにより加強、やや凹む形をなし。突唇状の縁部に刻目を施す。	口縁部はヨコナデ。外面上脚部にわずかにタテハケがみられる。内面は磨耗により不明。		
659	"	甕	— (11.0) — 10.0	平底から、やや丸味をおび、大きく開き立ち上がる。	内外面ともに右下りのヘラ磨きが施される。	外面に黒斑あり。	
660	S K 4	口	15.0 (17.8) — —	よく張った脚部から上脚部に有段をもち、なめらかに外反する。口縁間に2条、底盤の上下に1条と2条、上脚部に3条の沈線を施す。	内外面ともに横方向のヘラ磨きが施されるが、外面は単位不明。	脚部の沈線間に2本の重弦文と3本の細弦文、下に6本の山形文がみられる。	
661	"	口	22.3 34.4 34.4 12.1	最大径を中心にもつ、よく張った脚部に有段部をもち、口縁部は強く外反する。口縁間に貼付突密をもち、口唇部とともに刻目を施す。	内外面ともにヘラ磨き。口縁部は横方向、脚部外面は左上がり、内面は右上がりであり、脚部は単位不明。	大型甕、表面として使用される。刮目はハケ状工具による。	
662	"	口	— (12.0) 45.1 —	よく張りをもつ脚部であり、弱い段部がみられる。	外面は横方向のヘラ磨きがみられるが、磨耗している。内面もヘラ磨きされるが、磨耗する。	外面に黒斑あり。	
663	"	口	— ( 2.8 ) — 7.9	円板状の平底から大きく開き立ち上がる。	内外面ともに磨耗のため不明。		
664	"	甕	— ( 3.4 ) — 8.3	平底から丸味をもち、立ち上がる。	外面はタテハケが施される。		
665	"	甕	— ( 4.1 ) — 7.5	中央部が凹む平底から丸味をおび、しゃくれ、立ち上がる。	内外面ともにナデ調整。		
666	"	口	— ( 3.8 ) — 12.5	平底から丸味をもち、緩やかに立ち上がる。	"		
667	"	切妻甕	直径(4.0) 厚さ 0.9 重量(38.2	土器を転用する。表面に穿孔がみられる未成品。			
668	S K 5	甕	— (11.4) 23.1 —	最大径を中心にもつ、よく張った脚部。上脚部に有段部をもつ。	外面に横方向のヘラ磨きが施される。内面はナデ調整。		
669	"	口	— ( 4.0 ) — 8.5	平底から、なだらかに立ち上がる。	外面に、わずかにタテハケを残し磨耗する。		
670	"	口	— ( 4.8 ) — 7.4	中央部が、わずかに凹む平底から直線的に開く。	内面に指輪压痕を残す。		
671	"	甕	— ( 3.2 ) — —	直立する口縁部。口唇部をナデにより加強。突唇状をなし。口縁部に刻目を施し、口唇部とともに刻目を施す。	内面は裂傷が剥落する。		

標因番号	造構番号	静 機	法量 (cm)	口唇部 基部 銅径 底径	形態・文様	手 法	備 考
672	S K 6	廣	— ( 4.0 ) — —	直立する口縫部。口唇部は丸くおさめ、下部に突舌を黏付し、剝目を施す。	口縫部はヨコナデ。外側はタチハケが一部みられる。		
673	#	#	— ( 4.4 ) — —	直立し、わずかに外反する。口唇部は曲をなし、外端に剝目を施す。	口縫部下外側はヨコナデ。以下にタチハケが一部みられる。		
674	#	#	18.1 ( 4.5 ) — —	直立する口縫部。口唇部は丸くおさめ、下部に突舌を黏付し、剝目を施す。	口縫部はヨコナデ。以下に細いタチハケがみられる。		
675	#	#	20.6 ( 9.6 ) — —	直立する口縫部下に突舌を黏付し、剝目を施す。口唇部は丸くおさめる。	口縫部はヨコナデ。脇部外側全面にタチハケを施す。		
676	#	#	23.0 ( 6.8 ) — —	今や開き直立する口縫部下に突舌を黏付し、剝目を施す。口唇部は丸くおさめる。	口縫部はヨコナデ。以下、外側にタチハケがみられる。		
677	#	#	22.0 ( 11.2 ) — —	わずかに内済する脇部より直立する口縫部。口唇部は丸くおさめ、下部に突舌を黏付し、剝目を施す。	口縫部はヨコナデ。脇部外側全面にタチハケが施される。		
678	#	#	24.1 ( 7.6 ) — —	直立する脇部から、わずかに外反し開く口縫部。口唇部はナデにより膨張、凹む箇をなし、突舌状の脇部に剝目を施す。	口縫部はヨコナデ。口縫下外側に押付は削を施し、脇部はタチハケを施す。内側は口縫部に右下がりのヨコハケを施す。		
679	#	#	18.0 ( 3.6 ) — —	内済し終る口縫部。口唇部に突舌を黏付し、口唇部を拡張。剝目を施す。	口縫部はヨコナデ。口縫下内外側に指頭圧痕を残し、脇部外側はタチハケを施す。		
680	#	#	20.5 ( 4.1 ) — —	直立する口縫部に突舌を黏付し、口唇部を拡張。剝目を施す。	口唇部はヨコナデ。突舌下に指頭圧による爪跡がみられ、以下にタチハケを施す。		
681	#	#	21.4 ( 8.6 ) — —	内済し終る口縫部。口唇部はナデにより膨張、外傾する筋をなし、突舌状の脇部に剝目を施す。	口縫部はヨコナデ。脇部外側はタチハケを施した後にナデ調整。内側もナデ調整。		
682	#	#	18.0 ( 4.0 ) — —	大きく外反する口縫部。口唇部は曲をなし、外端に剝目を施す。	口縫部ヨコナデ。脇部外側は細いタチハケが施される。		
683	#	#	— ( 1.8 ) — 5.8	平底から丸棘をおび、立ち上がる。	内外面ともに磨耗のため不明。		
684	#	#	— ( 4.2 ) — 8.2	中央部が、やや凹む平底から、直立気味に立ち上がる。	外側はタチハケが施される。内側はナデ調整。		
685	#	#	— ( 4.0 ) — 8.2	平底から小さくしゃくれ、立ち上がる。	内外面ともに磨耗のため不明。		
686	#	#	— ( 4.8 ) — 9.0	—	—		

辨認番号	遺構番号	器種	法量 (cm)	口径 最高 最低 底径	形態・文様	手法	備考
687	SK 6	甕	— ( 5.2 ) — 7.6	半底から外反気味に立ち上がる。	内外面ともにナデ調整。		
688	#	#	— ( 6.0 ) — 8.8	中央部が、やや凹む平底から、外反気味に立ち上がる。	外面は全面にタテハケが施され、内面はナデ調整。	外腹に黒斑あり。	
689	#	钵	20.0 ( 4.0 ) —	口縁部は内斂し終る。口唇部は丸くおさめる。	外面に横方向のヘラ磨きがなされる。		
690	#	杓鍤車	直径 5.0 厚さ 1.0 重量(g) 31.0	円形で、しっかりした作りである。			孔径は 5mm。
691	SK 9	甕	— ( 11.9 ) — 12.5	しっかりした半底から大きく開き立ち上がる。	外面は横方向のヘラ磨きが施され、内面はナデ調整。		大型沿の底面、底面 5 分に程度がみられる。
692	#	#	— ( 2.8 ) — —	有段部をもつ瓶頸。段部の下に 2 条のヘラ磨沈線がみられる。	内外面ともに磨耗のため不明。		
693	#	#	— ( 2.6 ) — 8.7	半底から大きくしゃくれ、立ち上がる。	"		
694	#	甕	25.0 ( 5.8 ) — —	やや外反気味に直立する口縁部、口唇部に突起を貼付け、凹む箇をなし、刻目を施す。	口縁部はヨコナデ、穴垂下に指無気味がある。脇部はタテハケが施され、内面は口縁部にヨコハケ、以下ナデ調整。		
695	#	#	19.4 ( 13.3 ) — —	如虫形に外反する口縁部、口唇部は丸くおさめ、刻目を施す。	口縁部はヨコナデ。口縁下外面は強いヨコナデがなされ、以下全面にタテハケが施される。内面はナデ調整。		
696	#	#	— ( 3.9 ) — —	強く外反する口縁部。口唇部は丸味をおびた面をなし、刻目を施す。	口縁部はヨコナデ。脇部外面は細いタテハケが施される。		
697	#	#	— ( 3.0 ) — 5.4	中央部が、やや凹む平底から、強くしゃくれ立ち上がる。	外面はタテハケを施した後にナデ調整。		底面に黒斑あり。
698	#	#	— ( 2.8 ) — 7.2	半底から丸味をおび、小さくしゃくれ、立ち上がる。	外面はタテハケを施した後にナデ調整。内面は器底が剥落する。		
699	SX 1	甕	18.5 ( 9.2 ) — —	緩やかに外反する口縁部。口唇部は丸くおさめる。	圆形外面上にヘラ磨きがみられる。内面はナデ調整。		
700	#	#	21.4 ( 6.0 ) — —	緩やかに小さく外反する口縁部。口唇部は丸くおさめる。	口縁部はヨコナデ。以下、内外面ともに磨耗のため不明。		
701	#	#	14.1 ( 11.7 ) — —	有段部をもつ上側部から、などらかに立ち上がり、強く屈曲する口縁部。口唇部は面をなし、口縁間に有段部をもつ。	口縁部はヨコナデ。脇部外面は有段部の下に横方向、中央部は縱方向のヘラ磨きを施し、内面は横方向のヘラ磨きが施される。		上脇部の有段に風呂あり。

辨認番号	造構番号	器種	法量 (cm)	口器高 根筋 底径	形態・文様	手法	備考
702	S X 1	蟹	20.4 (4.2) — —	口頭部の有歯部より直立し、縦やかに外反する。口唇部は丸くおさめ、複合部に有段を形成する。	口縫部はヨコナデ。以下、ヘラ磨きが施されるが、方向は不明。		
703	#	#	25.4 (4.4) —	縦やかに外反し、口唇部は丸地をあげた面をなす。口頭部にナゲによる突厥状の紋様をもつ。	口縫部はヨコナデ。外面根部上にハケ目が、わずかにみられる。ヘラ磨きが施されるが、磨耗する。		
704	#	#	19.8 (2.8) — —	強く外反し、口唇部を丸くおさめる。	口縫部はヨコナデ。以下、消耗のため不明。		
705	#	#	26.8 (4.4) — —	口頭部の段階より直立し、縦やかに外反する。口唇部は丸くおさめ、複合により有段を形成する。	口縫部はヨコナデ。内外面ともに横方向のヘラ磨きが施される。		
706	#	#	— (2.6) — 8.3	平底から大きくなじくられ、立ち上がる。	内外面ともに消耗のため不明。	表面に擦痕あり。	
707	#	#	— (4.6) — 9.5	中央部が凹む平底から、縦やかに立ち上がる。	"		
708	#	#	— (5.2) — 6.9	底面全体が凹む平底。小さくなじくられ、内薄気味に立ち上がる。	"	外面に黒斑あり。	
709	#	#	— (7.8) — 9.5	平底から、だらかに立ち上がる。	"		
710	#	#	— (7.5) — 7.1	円板状の平底から大きく開き、立ち上がる。	外面脇部は横方向、底部は縦方向のヘラ磨き。内面は横方向のヘラ磨きがみられる。	脚部外面に黒斑あり。	
711	#	蟹	19.6 (2.0) — —	直立する口縫のやや下部に突帯を貼付し、刺目を施す。	口縫部はヨコナデ。		
712	#	#	— (2.2) — —	直立する口縫のやや下部に突帯を貼付する。口唇部は丸くおさめ、外縫と突帯に刺目を施す。	"		
713	#	#	— (2.8) — —	外反する口縫のやや下部に突帯を貼付し、刺目を施す。	"		
714	#	#	— (2.8) — —	外反する口縫のやや下部に突帯を貼付する。口唇部は丸くおさめ、外縫と突帯に刺目を施す。	"		
715	#	#	28.5 (14.6) — —	よく傷った頭部から如意形に外反する口縫部。口唇部はナゲにより扭張り、上下端に刺目を施す。	口縫部はヨコナデ。頭部に右下がりのハケ目がみられ、内面に縫线下にヨコハケがみられるが、磨耗する。		
716	#	#	22.5 (14.0) — —	直立気味の頭部から如意形に外反する口縫部。口唇部はナゲにより外縫する面をなし、縫部に刺目を施す。	口縫部はヨコナデ。口縫下外面にダテハケ。頭部には右下がりのハケ目がみられ、口縫部内面には、ヨコハケが施される。		

標図番号	遺納番号	器種	法量 (cm)	口器 器具 到達部 到達後	形態・文様	手 法	備考
717	S X 1	蟹	20.7 ( 4.3) — —	小さく外反する口縫部。口唇部はナデにより膨張し、外傾する面をなす。突帯状の端部に刻目を施す。	口縫部はヨコナデ。口縫下外面にタテハケが一部みられる。		
718	—	—	20.5 ( 4.2) — —	やや外反し、直立する口縫部。口唇部はナデにより外傾する面をなし試験。突帯状の端部に刻目を施す。	口唇部にヨコハケを施した後にヨコナデ。以下、内外面ともに磨耗により不明。		
719	—	—	20.4 ( 4.9) — —	やや外反気味に直立する口縫部。口唇部は丸味をおびた面をなし、外縫部に刻目を施す。	口縫下外面にタテハケを施す。		
720	—	—	20.0 ( 9.3) — —	如意形に小さく外反する口縫部。口唇部は丸味をおびた面をなし、外縫部に刻目を施す。	外面全面に、やや粗いタテハケを施す。内面は磨耗のため不明。		
721	—	—	24.2 ( 9.0) — —	如意形に外反し、口唇部は丸味をなす。外縫部に下方より刻目を施す。	口縫部はヨコナデ。脚部外面には右下がりの細いハケ目がみられ、内面は山縫下にヨコハケ。		
722	—	—	22.5 ( 7.4) — —	大きく緩やかに外反し、口唇部は丸味をおびた面をなし、外縫部に刻目を施す。	口縫内部にヨコハケ。外面は磨耗のため不明。		
723	—	—	18.4 (18.5) — —	幅の狭い脚部から如意形に外反し、口唇部は丸味をおびた面をなし、上下端部に刻目を施す。	脚部外面に細いタテハケ。内面はナデ調整。		
724	—	—	22.7 (18.5) — —	如意形に外反し、口唇部は外傾する面をなす。下縫部に刻目を施す。	口縫部はヨコナデ。外面は上脚部に右下がりのハケ目、下脚部にはタテハケがみられる。	脚部外面に黒斑あり。	
725	—	—	24.2 (24.0) — —	緩やかに立ち上がる脚部より大きく外反し、口唇部は丸くおさめ、刻目を施す。	口縫下外面にヨコナデ。以下、脚部外面全面にタテハケ。口縫内部にヨコハケが施される。		
726	—	—	25.5 (19.0) — —	如意形に強く外反し、口唇部は丸くおさめ、上方よりハケ状工具により刻目を施す。	外歯は口縫下から全面に、やや粗いタテハケが施された後に口縫下にヨコナデ。内面はナデ調整。		
727	—	—	27.2 ( 9.5) — —	如意形に外反し、口唇部は丸くおさめる。やや上方より端部全面に刻目を施す。	口縫部はヨコナデ。脚部全面にタテハケ。口縫内部にヨコハケが施される。		
728	—	—	21.7 (11.5) — —	如意形に緩やかに外反し、口唇部は丸くおさめ刻目を施す。	外面にはタテハケ、口縫内部には右下がりのヨコハケが施される。		
729	—	—	26.6 ( 9.0) — —	如意形に小さく外反し、口唇部は丸くおさめ、刻目を施す。	外面は右下がりのハケ目がみられるが、磨耗する。内面はナデ調整。		
730	—	—	24.1 ( 4.3) — —	直立気味に開き小さく外反する口縫部。口唇部は丸くおさめ刻目を施す。	口縫下外面に指頭圧痕を残し、右下がりのハケ目が一部みられるが、磨耗する。		
731	—	—	26.0 ( 4.1) — —	強く外反し、大きく開き口縫部。口唇部は丸くおさめ端部全面に刻目を施す。	口縫下外面にヨコナデ、以下に右下がりのハケ目がみられる。		

検査番号	渡辺番号	器種	法量 (cm)	口徑 幅 横径 底径	形態・文様	手法	備考
732	SX1	瓶	23.4 (2.3) — —	強く外反する口縁部。口唇部は丸くおさめ、眉目を隠す。	内外面ともに磨耗のため不明。	口縁下に黒斑あり。	
733	#	#	20.3 (17.5) — 8.8	中央部がやや凹む平底から、しゃくれをもち緩やかに開き、口縁部は菱形で外反し、口唇部は丸くおさめ眉目を隠す。	口縁部はヨコナデ、以下、脚部外因はダテハケ、口縁部内面は右下がりのヨコハケが施される。	外面口縁下と内面底部に黒斑あり。	
734	#	#	— (3.3) — —	外反する口縁部。口唇部は丸味をおびた面をなし、眉目を隠す。	口縁部内面にヨコハケ。		
735	#	#	— (3.4) — —	直立気味の口縁部。口唇部は丸味をおびた面をなし、外縁部に眉目を隠す。	口縁下外面にタテハケ。		
736	#	#	— (2.7) — —	小さく外反する口縁部。口唇部は丸くおさめ眉目を隠す。	内外面ともに磨耗のため不明。		
737	#	#	— (5.2) — 10.2	中央部がやや凹む平底から大きくなじみ、立ち上がる。	外面に一部ハケ目がみられるが、磨耗する。	新面に接合板あり。	
738	#	#	— (4.6) — 9.0	底面全体が、やや凹む平底から大きくなじみ、立ち上がる。	外面はタテハケ。内面は磨耗のため不明。		
739	#	#	— (7.1) — 8.4	中央部が凹む平底から、ややなじみ立ち上がる。	外面は指痕压痕を残し、タテハケ。内面はナデ調整。		
740	#	#	— (5.9) — 9.3	—	内外面ともに磨耗のため不明。		
741	#	#	— (7.4) — 7.5	底面全体が凹む平底から、内面気味に立ち上がり開く。	外縁は脚部にタテハケ。底部に指痕压痕を残す。		
742	#	#	— (4.6) — 7.8	中央部がやや凹む平底から、内面気味に立ち上がる。	外面に指痕压痕を残し、タテハケ。		
743	#	#	— (8.4) — 7.8	平底から緩やかに立ち上がる。	内外面ともに磨耗により不明。	外面に黒斑あり。	
744	#	#	— (3.5) — 8.4	平底から小さくなじみ立ち上がる。	内面に指痕压痕を残す。		
745	#	#	— (4.1) — 7.4	底面全体が、わずかに凹む平底から開かずに立ち上がる。	外面にタテハケが一部みられる。		
746	#	#	— (2.3) — 5.4	平底から、なだらかに立ち上がる。	内外面ともにナデ調整		



得失番号	構成番号	器 械	出量 (cm)	口唇 器高 厚径 底径	形態・文様	手 法	備 考
762	S X 2	臺	— ( 6.5 ) — —	有段部をもつ上唇部。段部の下に藍墨文がみられる。	内面に指頭圧痕を残す。		
763	#	#	— ( 3.5 ) — 7.1	平底から丸味をおび、しゃくれ立ち上がる。	内外面ともに磨耗のため不明。	内外面に黒斑あり。	
764	#	#	— ( 3.3 ) — 8.1	平底から丸味をおび、大きく開き立ち上がる。	外側に横方向のヘラ書きがみられる。		
765	#	#	— ( 2.7 ) — 9.7	中央部がやや凹む平底から立上り立あがり、大きく開く。	外側に一部ハケ目を残し、ナデ調整。内側はヘラ書きがみられる。	前面に黒斑あり。	
766	#	#	— ( 6.9 ) — 8.6	平底から丸く立ち上がり、内側気味に開く。	内外面ともに磨耗のため不明。		
767	#	表	22.9 ( 4.5 ) —	直立状態で開き、口唇部はナダに上り立あがり、口縁下は突起状をなし前歯を残す。	口縁下外側にタテハケ。内側はナダ調整。		
768	#	#	24.9 ( 7.1 ) —	如意形に小さく外反し、口唇部は外傾する面をなす。上下端部に刻目を施す。	口縁下外側にヨコナダ。端部は全面に下方よりのハケ目を施す。内側はナダ調整。		
769	#	#	14.0 ( 7.0 ) —	直立状態の前部から内側気味に開く。口唇部は外傾する面をなし、下方より刻目を施す。	外側は口縁下よりタテハケ。内側はヨコナダの下にヨコハケ。		
770	#	#	— ( 6.0 ) —	直立し、小さく外反する口唇部。口唇部は外傾する面をなし、下方より刻目を施す。	外側にタテハケがみられる。		
771	#	#	23.6 ( 10.7 ) —	如意形に外反し、口唇部は外傾する面をなす。端部に下方より刻目を施す。	口縁下外側にタテハケがみられる。		
772	#	#	22.0 ( 9.0 ) —	如意形に外反し、口唇部は外傾する面をなす。端部に刻目を施す。	口縁外側に細いタテハケ。口縁部内側にヨコハケがみられる。		
773	#	#	25.0 ( 4.5 ) —	緩やかに外反し、口唇部は丸くおさめ、上方より刻目を施す。	口縁下外側にヨコナダ。以下に指頭圧痕を残し、タテハケがみられる。		
774	#	#	22.5 ( 14.4 ) —	如意形に外反し、口唇部は外傾する面をなす。端部に小さな刻目を施す。	脚部外側に細いタテハケ。口縫部内側にヨコハケがみられる。		
775	#	#	23.5 ( 17.0 ) —	如意形に外反し、口唇部は丸味をおびた面をなし、刻目を施す。	口縫部はヨコナダ。脚部外側、全面にタテハケ。口縫部内側はヨコハケが施される。	内側に大きな黒斑あり。	
776	#	#	22.8 ( 10.1 ) —	如意形に小さく外反し、口唇部は面をなし、上方より刻目を施す。	脚部外側に細いハケ目がみられ、内側はナダ調整。		

辨認番号	造構番号	器種	口径 法量 (cm) 最高 最低	形態・文様	手 法	備 考
777	S X 2	甕	25.6 ( 3.7) — —	強く外反し、口唇部は面をなし、上方からハケ状工具により刻目を施す。	口縁下外面にヨコナデ。以下、タテハケがみられる。	内面に黒斑あり。
778	#	#	25.4 ( 7.6) — —	如意形に優やかに外反し、口唇部は丸くおさめ、下方より刻目を施す。	口縁下外面にハケ目を残し、ヨコナデ。内面はナデ調整。	
779	#	#	24.9 ( 7.5) — —	如意形に強く外反し、口唇部は面をなし、ハケ状工具により刻目を施す。	#	
780	#	#	25.4 (13.5) — —	如意形に外反し、口唇部は面をなし、端部全面に上方から刻目を施す。	口縁下外面にヨコナデ。以下、肩部全面に、やや病めのタテハケが施される。	肩部外面に黒斑あり。
781	#	#	25.8 (11.0) — —	如意形に強く外反し、口唇部は丸味をおびた曲をもち、刻目を施す。	口縁下外面にヨコナデ。以下、肩部にタテハケが施される。内面は磨耗のため不明。	
782	#	#	19.3 (14.6) — —	如意形に外反する口縁部。口唇部は丸くおさめ刻目を施す。	口縁下外面にヨコナデ。以下、肩部に斜めのハケ目がみられるが、磨耗する。	
783	#	#	30.3 (12.3) — —	如意形に強く外反する口縁部。口唇部は丸くおさめ刻目を施す。口縁の下部に太く4条の沈線を施し、斜めの刻目を施す。	口縁部はヨコナデ。以下、全面に右下がりのヨコハケが施される。内面は磨耗のため不明。	
784	#	#	— (18.9) — 8.8	平底から丸味をもち立ち上がり、あまり開かない。	外面にタテハケが施されるが、磨耗する。	外面に黒斑あり。
785	#	#	— ( 4.3) — 8.2	平底から丸味をおび、小さくしゃくれ、立ち上がる。	#	
786	#	#	— ( 2.5) — 5.9	平底から、なだらかに立ち上がる。	外面にハケ目がみられるが、磨耗し、内面に指印圧痕を残す。	
787	#	#	— ( 8.6) — 8.0	平底から内湾気味に立ち上がる。	外面にハケ目がみられるが、磨耗する。内面はナデ調整。	
788	#	#	— ( 4.3) — 7.7	平底から、小さくしゃくれ、立ち上がる。	外面に一部ハケ目を残す。	
789	#	#	— ( 4.6) — 9.6	平底から丸味をおび、立ち上がる。	外面は指印圧痕を残し、ハケ目がみられる。	
790	#	#	— ( 3.0) — 7.3	#	外面にハケ目がみられる。	前面に接合痕あり。
791	#	#	— ( 3.7) — 7.0	平底から外反気味に立ち上がる。	#	底面から外側に黒斑あり。

神田番号	通構番号	器種	口径 法量 (cm) 器高 底径	形態・文様	手法	備考
792	S X 2	甕	— ( 3.5 ) — 8.1	中央部がやや凹む平底から、なだらかに立ち上がる。	外面に指頭圧痕を残し、タテハケを施す。	
793	#	#	— ( 3.5 ) — 8.9	平底から丸味をもち、内湾し立ち上がる。	外面にタテハケがみられる。	
794	#	高杯	— ( 9.4 ) — —	杯部、脚部とともに、よく外反する。	外面にはハケ目が一部みられ、杯内部内面にヘラ磨きが施される。	
795	#	蓋	— ( 4.0 ) — 19.7	縁やかに外反し、端部は丸くおさめる。	外面にタテハケを施す。	
796	#	鉢	21.4 ( 9.2 ) — —	内湾し立ち上がり、口唇部は丸くおさめる。	内外面ともに磨耗する。 外面は黒斑あり。	
797	#	砧鋤車	底径 ( 5.5 ) 厚さ 1.8 重量 (g) 87.4	かなり厚く、半分に欠損する。縁部がみられる。		
798	S X 3	壺	19.8 ( 4.1 ) — —	縁やかに外反し、弱い有段部をもつ。口唇部は丸くおさめる。	外面は横方向のヘラ磨きが施される。内面は磨耗により不明。	
799	#	#	26.2 ( 3.9 ) — —	縁やかに大きく外反し、口唇部は圓をなす。	内外面ともに横方向のヘラ磨き。	
800	#	#	— ( 3.6 ) — —	有段部をもつ上脚部であり、頭部は外反気味に直立する。	外面はヘラ磨きが施されるが、部位は不明。内面は磨耗のため不明。	
801	#	#	— ( 3.5 ) — —	右段部をもつ上脚部であり、段部の上に 1 条、下に 3 条のヘラ描花線を施す。	外面はヘラ磨きが施され、内面は表面が剥落する。	
802	#	#	— ( 4.8 ) — —	有段部をもつ上脚部であり、段部の上に 3 条のヘラ描花線を施し、下に 3 条 1 組の底弦文を配す。	内外面ともに磨耗する。	
803	#	#	28.0 ( 27.8 ) — —	有段部をもつ上脚部から直線的に立ち上がり、大きく外反する。口唇部に有段をもち、口唇部は圓をなす。	外面はタテハケの後にヘラ磨きを施す。内面にもヘラ磨きが施されるが、部位は不明。	大型壺であり、前面に幾介板がみられる。
804	#	#	— ( 6.3 ) — 7.5	平底から直線的に聞く。	外面は磨耗のため不明。内面は全面にヘラ磨きが施される。	正面に黒斑あり。
805	#	#	— ( 5.6 ) — 7.5	平底から丸味をもび、小さくしゃくれ、立ち上がる。	内外面ともにナデ調整。	外面に黒斑あり。
806	#	#	— ( 3.7 ) — 12.0	中央部が凹む平底より丸味をもび聞く。	外面にヘラ磨きがみられる。	

神因番号	遺構番号	器種	法量 (cm) 口徑 器高 胸徑 底徑	形態・文様	手法	備考
807	S X 3	甕	17.4 ( 6.0 ) — —	やや開き直立する。口唇部は丸味をおび、口縁下に突起を助けし、肩部を施す。	口縁部ヨコナデ。突起部に指頭圧痕を残し、タテハケを施す。	
808	#	#	23.7 ( 6.1 ) — —	直立する肩部より口縁部は外反する。口唇部は、やや凹む面をなし、外端部に肩目を施す。	口縁部はヨコナデ。	
809	#	#	— ( 4.0 ) — —	直立する口縁部をわずかに外反させ、口唇部外端を丸くおさめ肩目を施す。	口縁部はヨコナデ。以下は底孔のため不明。	外面に黒斑あり。
810	#	#	22.8 ( 4.4 ) — —	緩やかに外反する口縁部。口唇部は外傾する面をなし、肩目を施す。	口縁部ヨコナデ。口縁下外面にタテハケを施し、内面はヨコハケを施す。	
811	#	#	30.1 ( 6.0 ) — —	緩やかに外反し、開く口縁部。口唇部はやや凹む面をなし、下方より肩目を施す。	口縁部はヨコナデ。口縁下外面にタテハケを施し、内面はヨコハケをヨコナデする。	
812	#	#	19.4 ( 3.7 ) — —	緩やかに外反し、口唇部は丸くおさめる、外端部に肩目を施す。	内外面ともヨコナデ。	
813	#	#	25.3 ( 10.4 ) — —	如意形に小さく外反する口縁部。口唇部は丸味をおびた面をなし、端部全周にへら状工具により肩目を施す。	口縁部はヨコナデ。肩部外面は下方がりのハケ目がみられる。	
814	#	#	30.0 ( 18.2 ) — —	よく張った肩部から、短く強く屈曲し、外反する口縁部。口唇部は丸くおさめ、ハケ状工具により肩目を施す。	口縁部および口縁下外面にヨコナデを施す。肩部には、機と机め方向のハケ目が交錯する。	肩部外面に黒斑あり。
815	#	#	— ( 3.5 ) — 6.5	中央部がやや凹む平底から、丸味をもち、立ち上がる。	内外面ともに磨耗のため不明。	
816	#	#	— ( 4.7 ) — 8.6	底面全体が凹む平底から、小さくしゃくれ、立ち上がる。	"	断面に複合痕がみられる。 底面外縁部に黒斑あり。
817	#	#	— ( 4.1 ) — 8.0	底面全体が凹む平底から丸味をおび、しゃくれ、立ち上がる。	外面はタテハケを施した後にナデ調整。	
818	#	#	— ( 4.2 ) — 8.9	わずかに凹む平底から直線的に聞く。	内外面ともにナデ調整。	
819	#	#	— ( 5.3 ) — 9.2	中央部が凹む平底から、外反気味に立ち上がる。	外面はタテハケを施した後にナデ調整。内面もナデ調整。	
820	#	#	— ( 5.5 ) — 9.5	中央部が凹む平底から、ややしゃくれ、立ち上がる。	外面はタテハケを施し、内面はナデ調整。	
821	#	甕	— ( 4.0 ) — 6.4	頂部は強くしゃくれ、やや凹む面をなす。	外面は頂部下にヨコナデ。	

神話番号	遺構番号	器種	口径 部直 角後 傾斜 度数 (cm)	形態・文様	手 法	備考
822	S X 3	蓋	— ( 5.6) — —	直線的に開く底部から腹部は、さ らに大きく開く。	外面に一部タテハケがみられるが、 内外面ともに磨耗する。	
823	#	#	28.2 ( 9.8) — —	内湾し廣く、腹部は丸くおさめ、 わずかに外反する。	内外面ともにナデ調整。	焼成良好。
824	#	小型 土器	— ( 4.0) — 3.0	中央部が凹む平底から直立し、立 ち上がる。	#	外面に黒斑あり。
825	S X 4	蓋	17.0 ( 5.0) — —	直立する腹部から、大きく外反す る。口部は丸くおさめる。	内外面ともに磨耗のため不明。	
826	#	#	18.2 ( 2.3) — —	大きく開き、外反する口部、口 部は丸くおさめ、口頭間に有段 部をもつ。	内外面ともにナデ調整。	
827	#	#	17.5 ( 5.8) — —	直線的に開き、やや外反する口部 部、口部は丸くおさめ、口頭間に 有段部をもつ。	外面は口部に右上がり、腹部に は横方向のヘラ磨きを施し、内面 は口部に横方向のヘラ磨きを施す。	830と同一個 体か。
828	#	#	26.1 (18.4) — —	縦やかに立ち上がる腹部より強く 屈曲し、外反する口部、口部は 丸くおさめ、口頭間に強い有段 部をもつ。	外面はタテハケの後にヘラ磨きを 施されるが、単位は不明。内面は 磨耗のため不明。	断面に接合痕 あり。
829	#	#	20.6 ( 5.6) — —	縦やかに外反する口部、口部は 丸くおさめ、口頭間に、複合に よる有段部をもつ。	内外面ともにナデ調整。	
830	#	#	17.6 ( 9.3) — —	直線的に開き、やや外反する口部 部、口部は丸くおさめ、口頭間に 複合により形成される有段部を もつ。	口部、内外面に横方向のヘラ磨 きを施す。	
831	#	#	17.8 (13.4) — —	縦やかに立ち上がる腹部より、口 部は、なめらかに大きく外反す る。腹部は丸め、引ひき深くな り、上脚部のみに有段部をもつ。	#	
832	#	#	— (10.4) — —	腹部は、やや外反気味に縦やかに 立ち上がる。上脚部に有段部をも つ。段階下に3条のヘラ磨き痕を 集し、3本1組の裏返文を配す。	外面はヘラ磨きを施すが、単位は 不明。内面は上脚部に横方向のヘ ラ磨きが施される。	
833	#	#	— ( 8.0) — —	よく張った脚部であり、上脚部に 有段部をもつ。	外面は全周に横方向のヘラ磨きが 施され、内面はナデ調整。	
834	#	#	— ( 5.6) — —	有段をもつ上脚部である。脚部の 下に3条のヘラ磨き痕を施し、さ らに3本1組の裏返文を配す。	内外面ともにヘラ磨きが施される が、単位は不明。	832と同一個 体であろう。
835	#	#	— ( 4.8) — —	#	#	832と同一個 体であろう。
836	#	#	— (15.7) 39.0 —	よく張った脚部であり、脚部に 有段部をもつ。	内外面ともに磨耗のため不明。	



特因番号	波構番号	輪 構	法量 〔cm〕	口唇 脣高 脣径 底径	形態・文様	手 法	備 考
852	S X 4	廣	23.0 (11.4)	直立する唇部から口唇部は短く、わずかに外反する。口唇部は面をなし、小さな前日を施す。	内外面ともにナデ調整。		
853	#	#	24.8 (12.3)	如意形にやや強く外反する口唇部。口唇部は外側すら面をなし、やや上方から刻目を施す。	口唇部はヨコナデ。内外面ともにナデ調整。		
854	#	#	24.5 (18.2)	如意形に強く外反する口唇部。口唇部は丸味をおびた面をなし、棒状の原体による前日を施す。	口唇下にヨコナデ。内外面ともにナデ調整。		唇部外側に黒斑あり。
855	#	#	23.0 (7.4)	如意形に小さく外反する口唇部。口唇部は丸味をおびた面をなし、下端に前日を施す。	口唇下にヨコナデ。唇部外側に、やや骨のハケ目を施す。内面はナデ調整。		
856	#	#	22.1 (4.1)	大きめ外反する口唇部。口唇部は外側すら面をなし、下端部に前日を施す。	口唇下外面にタテハケを施し、口唇部内面はヨコナデ。		
857	#	#	23.2 (3.3)	緩やかに外反する口唇部。口唇部は丸味をおび、端部に刻目を施す。	口唇部はヨコナデ。口唇下に指頬圧痕を残す。		
858	#	#	28.0 (4.5)	大きめ外反する口唇部。口唇部は丸くおさめ、ハケ状工具により前日を施す。	口唇部はヨコナデ。口唇下外面にタテハケを施す。		
859	#	#	23.7 (8.0)	如意形に強く外反する口唇部。口唇部は丸くおさめ、棒状の原体により前日を施す。	口唇部はヨコナデ。口唇部以下、内外面ともにナデ調整。		
860	#	#	30.3 (9.0)	如意形に大きく外反する口唇部。口唇部は丸くおさめ、やや下方より前日を施す。	口唇以下にタテハケを施した後にナデ調整。口唇部内面は指側压痕を残し、ヨコナデ。		
861	#	#	22.0 (3.2)	緩やかに外反する口唇部。口唇部は小さな面をなし、外端下面に前日を施す。	口唇部はヨコナデ。		
862	#	#	29.4 (3.6)	直線的に圓く唇部から強く外反する口唇部。口唇部は丸くおさめ、前日を施す。	#		
863	#	#	33.6 26.7 — 11.0	しっかりと直した平面から直線的に圓き、外反する口唇部。口唇部は丸味をおび、前日を施す。	口唇部はヨコナデ。外面全面にタテハケが施され、内面はナデ調整。		下唇部に僅の付着があり、認證が傳い。
864	#	#	20.6 (3.7)	直立気味の唇部より、わずかに内側し、開く。口唇部は丸味をおび、前日を施す。	口唇部ヨコナデ。口唇下外面にタテハケを施し、内面はヨコナデ。		
865	#	#	22.8 (1.8)	外反する口唇部。口唇部は丸くおさめ、前日を施す。	口唇下外面に指頬圧痕を残し、ナデ調整。		
866	#	#	26.0 (6.4)	如意形に外反する口唇部。口唇部は面をなし、端部全面に前日を施す。	外面は筋めのハケ目が交差し、ナデ調整を施す。内面はナデ調整。		

検査番号	選択番号	器種	法量 (cm)	口径 部高 度 断径	形態・文様	手 法	備考
867	S X 4	蝶	21.6 ( 2.0) —	小さく外反し、口唇部はナデにより丸くおきめ、ハケ状工具で刻目を施す。	口輪下外周に強いヨコナデ。内面にはヨコハケを施す。		
868	#	#	23.0 ( 7.2) —	緩やかに外反する口輪部。口唇部はナデにより丸味をおびた曲線をなし、下唇部に下方より、ハケ状工具で刻目を施す。	口輪下外周に指頭圧痕を残し、内外面ともにナデ調整。		
869	#	#	23.0 ( 6.1) —	直立する唇部から小さく外反し、口唇部上端は波を施す。外周は丸くおきめ刻目を施す。上側部に有段部をもち、斜めの刻目を施す。	口輪下外周にタテハケを残し、ナデ調整。内面もナデ調整。	施成は良好。	
870	#	#	25.7 (14.0) —	如庭形に大きく外反する口輪部。口唇部は波をなし、下方へ拉張。上側部には有段部をもち、口唇部下端ともに刻目を施す。	口輪部はヨコナデ。口輪下外周に指頭圧痕を残し、内外面ともにナデ調整。	刻目はハケ状工具による。有段部の断面に接合部あり。	
871	#	#	22.8 (13.5) —	上唇部で彎曲し、直線的に内側し、口唇部は丸だらかに外反し、口唇部は丸くおきめる。脣部には2束のヘラ状波紋を施す。	口輪下外周にヨコナデ。外周は脣部以下にタテハケを施し、内面はナデ調整。	口唇部はヨコナデ。外周は丸だらかに外反し、口唇部は丸くおきめる。脣部には2束のヘラ状波紋を施す。	
872	#	#	21.6 ( 8.8) —	直立し、やや開く口輪部に断面三角形の美差が貼付する。口唇部は逆S字状をなし、水平な面をもつ。	口輪部ヨコナデ。以下、制部外周は細いタテハケが施される。		
873	#	#	— ( 2.8) — 5.8	平底から、ややしゃくれ、立ち上がる。	外周はタテハケを残し、ナデ調整。内面は指頭圧痕を残す。		
874	#	#	— ( 3.7) — 8.8	平底から丸味をおび、直立気味に立ち上がる。	外周にタテハケが一部みられる。	底面から外周にかけ蒸籠があり。	
875	#	#	— ( 4.2) — 9.0	平底から、わずかに丸味をおび、立ち上がる。	外周は指頭圧痕を残し、タテハケが施される。内面ナデ調整。		
876	#	#	— ( 4.9) — 8.0	平底から丸味をおび、立ち上がる。	外周はタテハケを施した後にナデ調整。		
877	#	#	— ( 3.8) — 8.2	中央部が、わずかに凹む平底から丸味をおび、立ち上がる。	#	断面に接合部あり。	
878	#	#	— ( 4.1) — 8.0	中央部が、やや凹む平底から一部しゃくれをもち、立ち上がる。	外周にタテハケを施し、内面はナデ調整。	底面にミカ所の根拠あり。	
879	#	#	— ( 3.0) — 10.2	底面全体が大きく凹む上底から小さくしゃくれ、立ち上がる。	#		
880	#	#	— ( 4.5) — 7.6	底面が、わずかに凹む平底から、わずかにしゃくれをもち、立ち上がる。	外周には指頭圧痕、ハケ目を残し、磨耗する。内面はナデ調整。		
881	#	#	— ( 3.6) — 8.0	平底から、ややしゃくれ、立ち上がる。	外周はタテハケを施し、内面に指頭圧痕を残す。		

押出番号	造形番号	器種	法量 (cm)	口径 高さ 側径 底径	形態・文様	手 法	備 考
882	S X 4	甌	—	( 3.4 ) — 8.2	中央部がやや凹む平底から、小さくしゃくれ、立ち上がる。	外面は、わずかにハケ目を残し磨耗する。	底面、側面部に輕病あり。
883	#	#	—	( 5.2 ) — 7.8	平底から丸味をおび、立ち上がる。	外面は多方向のハケ目がみられる。	断面に接合痕あり。
884	#	#	—	( 3.8 ) — 10.3	平底から直線的に開き、立ち上がる。	外面に、わずかにハケ目を残し、磨耗する。	底面に黒斑あり。
885	#	#	—	( 4.5 ) — 8.4	底面が、わずかに凹む平底から、しゃくれをもち、立ち上がる。	外面にタテハケが施されるが、磨耗する。	底面に輕病がみられる。
886	#	#	—	( 3.8 ) — 8.6	底面が、わずかに凹む平底から立ち上がる。	#	断面に接合痕あり。
887	#	#	—	( 4.8 ) — 8.5	中央部が凹む平底から、しゃくれをもち、立ち上がる。	外面はタテハケを施し、内面は指頭圧痕を残す。	外面に黒斑あり。
888	#	#	—	( 4.1 ) — 8.2	底面全体にやや凹む平底から丸味をおび、小さくしゃくれ立ち上がる。	内外面ともに磨耗する。	
889	#	#	—	( 4.4 ) — 9.4	底面全体が、やや凹む平底から丸味をおび、直線的に開く。	外面に、わずかにハケ目を残し、磨耗する。	底面に輕病あり。
890	#	#	—	( 3.8 ) — —	底面が剥落し、大きく開きながら立ち上がる。	内外面ともに磨耗のため不明。	内面に輕病あり。
891	#	#	—	( 3.7 ) — 9.0	平底から強くしゃくれをもち、立ち上がる。	内外面ともに指頭圧痕を残し、外面上にはハケ目が、わずかにみられる。	磨耗する。
892	#	#	—	( 11.2 ) — 9.3	平底から、しゃくれをもち、なだらかに立ち上がる。	内外面ともに指頭圧痕を残す。	
893	#	#	—	( 14.3 ) — 8.4	底面が、わずかに凹む平底から、なだらかに立ち上がる。	外面にハケ目、内面に指頭圧痕を残し、磨耗する。	
894	#	#	—	( 12.4 ) — 8.4	平底から小さくしゃくれ、直線的に立ち上がる。	外面にタテハケを施すが、磨耗する。	底面に2ヶ所、側面部に黒斑あり。
895	#	#	—	( 11.7 ) — 8.3	平底から、なだらかに立ち上がる。	外面にタテハケを施すが、磨耗する。 内面底部に指頭圧痕を残す。	
896	#	#	—	( 7.8 ) — 9.1	平底から直線的に立ち上がる。	外面はタテハケを施した後にナデ調整。内面に指頭圧痕を残す。	

件番号	遺構番号	器種	法量 (cm)	口径 底面 側面 厚度 底径	形態・文様	手 法	備考
897	S X 4	甌	— ( 7.2 ) — 9.1	平底から丸味をおび、立ち上がる。	外表面はタテハケを施した後にナデ調整。		
898	#	#	— ( 5.3 ) — 8.0	平底から一部しゃくれ、立ち上がる。	外表面は指頭底を残し、タテハケを施し、内面も指頭底を残す。		
899	#	#	— ( 6.3 ) — 8.4	平底から丸味をおび、強くしゃくれ、立ち上がる。	外表面は指頭底を残し、タテハケを施し、しゃくれ部をナデ調整。		
900	#	鉢	— ( 14.4 ) — —	有段部をもち、直立する体部。有段部には、ハケ状工具による刻目を施す。	外表面、有段下にタテハケを残し、ナデ調整。内面もナデ調整。		
901	#	#	— ( 6.8 ) 27.0 —	有段部をもつ内湾気味の体部。	外表面にタテハケ、段部上にはヨコハケを施し、段部は強くヨコナデされる。		有段部断面に接合痕あり。
902	#	効能車	径 5.4 厚さ 1.2 重量(g)29.5	効能車として作成される。中央部に施成剣に穿孔する。			孔径は 6 mm.
903	#	#	径 ( 5.0 ) 厚さ 1.0 重量(g)29.7	土器片を転用し、施成剣に穿孔する。			孔径は 3 mm.
904	P 1	甌	— ( 10.3 ) — —	なだらかに立ち上がる上脚部。外表面に 4 条のヘラ模化線の斜行文を配す。	内外面ともにヘラ磨き。内面は横方向であるが、外表面は単位不明。		
905	P 2	甌	— ( 3.3 ) — —	外反する口縁部。口唇部は外傾する面をなし、上端は板となる。外縁部に刻目を施す。	外表面に一部タテハケがみられる。		
906	P 3	#	— ( 7.3 ) — —	直立する脚部から小さく外反する口縁部。口唇部は外傾する面をなし、刻目を施す。	口縁下外表面にタテハケを施す。		
907	#	高杯	— ( 4.9 ) — —	高杯の柱状部である。	脚部内面にヘラ圧痕がみられる。		

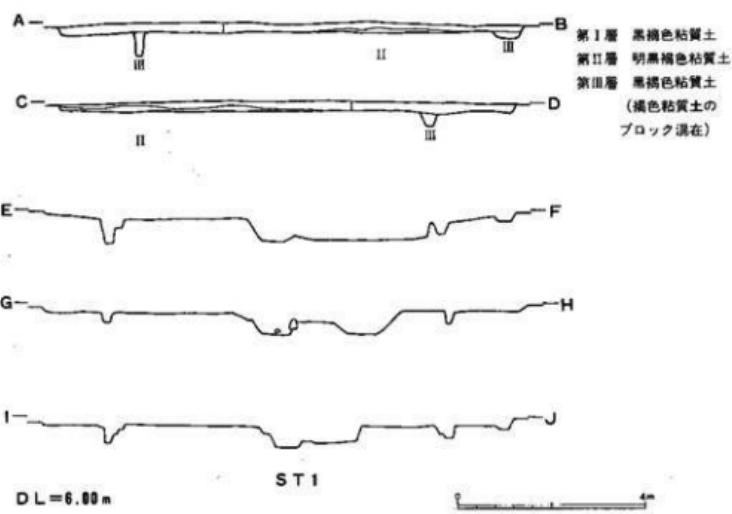
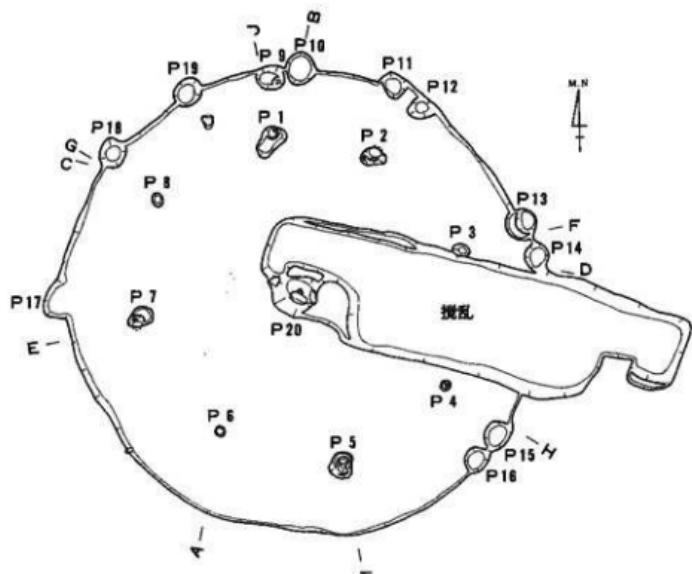
第17表 遺構出土石器観察表

件番号	遺構番号	器種	計測値 (cm, g)	最大長 最大幅 後大厚 度	材 質	特 性	備 考
908	S T 1	石斧	19.9 8.3 5.0 1350.0		緑色岩	全体を粗く敲打により成形し、刃部はよく研磨され、作出される。刃部に使用によると思われる欠損があり。	宏大的太形蛤刃石斧。
909	#	#	( 5.6 ) ( 6.8 ) 1.3 62.3		#	非常に側半を両刃の石斧である。側辺部は側面により調整し、全面を研磨し、擦痕を残す。刃部は外湾する。	複文的な形態をもつ。

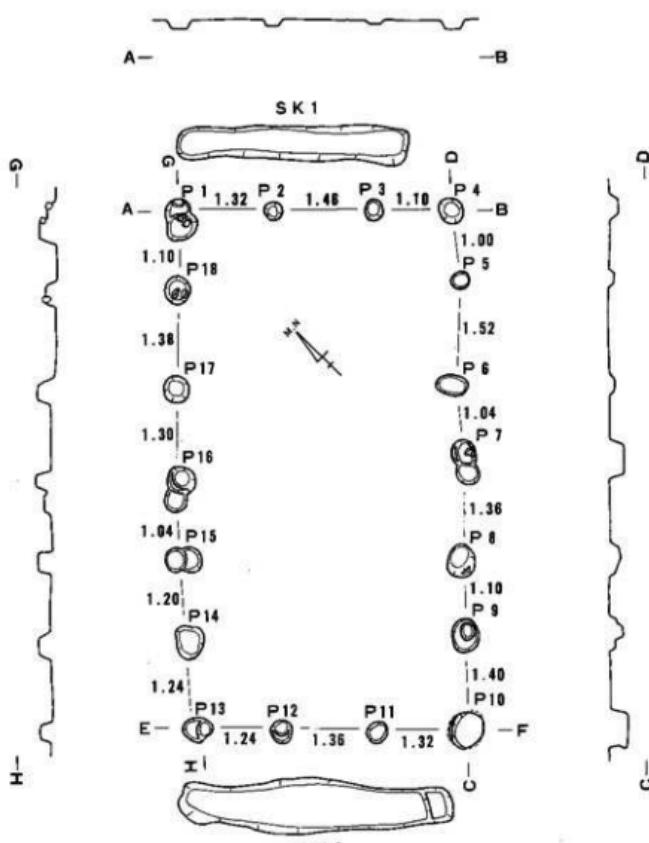
辨認番号	造構番号	種類	計測値 最大長 最大幅 最大厚 量(cm, g)	材質	特徴	備考
910	S T 1	石斧	7.6 4.1 1.4 47.3	頁岩	偏平な両刃の石斧である。刃部のみを小さく研磨し作成する。周辺部は小削離により調整される。	橢円的な石斧であり、刃部に擦痕を残す。
911	#	#	( 5.6 ) ( 4.8 ) ( 1.8 ) 55.9	#	打製石斧であり、基部を欠損する。周辺部は小削離により調整され、刃部は深い階段状の剥離により作出される。	橢円的な石斧である。
912	S X 4	#	4.2 1.7 0.7 6.3	泥岩	両刃をもつ小型石斧である。全体を粗く研磨し、刃部は縱方向によく研磨され、擦痕を残す。	小型石斧。
913	S X 3	#	( 5.5 ) ( 4.7 ) ( 1.0 ) 27.4	頁岩	刃部側を大きく欠損する大きな破片である。縦辺面には小削離がみられるが、中央部にはよく研磨され、擦痕をもつ面を残す。	
914	S T 1	叩石	14.2 4.9 2.9 302.0	砂岩	柱状の自然縫を使用する。端部に剥離をもち、小さな打ち落がられる。また、上部には表面が消耗によりなめらかな面をもつ。	
915	S X 4	#	10.7 6.4 1.5 115.8	#	表面に硬皮面をもつ偏平な剝片を使用する。周辺部から、表面に剥離を行う。	偏平叩石。
916	S X 2	#	11.9 7.7 1.9 188.0	#	表面に硬皮面をもつ偏平な剝片を使用する。下端部より表面に大きな剥離がみられる。	#
917	S T 1	#	8.3 4.8 3.4 170.3	#	一端部が広がる自然縫を使用する。端部に敲打により、小さな面をなす部分がみられる。	
918	S X 3	#	9.3 ( 6.8 ) ( 2.4 ) 166.0	#	表面に硬皮面をもつ偏平な剝片を使用する。周辺部に小さな剥離がみられる。	偏平叩石。
919	S T 1	砾石	( 18.6 ) ( 18.6 ) 8.3 3000.0	#	やや粗い砂岩を使用し、一部を欠損する。端部は表面のみで、わずかに凹み、断面は長方形を呈する。	
920	#	#	( 27.0 ) ( 37.2 ) ( 18.5 ) 17200.0	#	やや大形の砾石であり、不定形を呈する。断面は垂直のみであり、水平な面をなし、一部に敲打痕もみられる。	
921	S X 4	#	( 7.9 ) ( 7.3 ) 1.7 112.3	#	三角形をなす偏平な砾石である。委裏面ともに底面として使用され、やや凹んでいる。	
922	S T 1	#	42.0 20.1 10.6 13250.0	#	棱円形の自然縫を使用する大型の砾石。中央部が、やや磨耗しており、底面として使用される。	中央ピット出土。
923	S K 9	#	( 18.7 ) 13.0 6.3 1750.0	#	方形を呈し一部欠損する。断面は三角形をなし、底面はよく使用され、水平な面となる。	
924	S T 1	#	( 38.2 ) ( 20.2 ) 9.0 8300.0	#	棱円形の自然縫を使用する大型の砾石。中央部は、やや凹む面をなし、非常によく使われている。	中央ピット出土。

辨別番号	遺構番号	器種	計測値 (cm, g)	最大長 径大幅 最大厚 重量	材質	特徴	備考
925	S X 4	砾 G	( 9.1 ) 4.9 1.3 82.7	砂 岩	平行四辺形を呈する偏平な砾石。表面のみを紙面として使用し、中央部が、わずかに凹んでいる。		
926	#	#	(11.0) (10.6) 1.9 339.0	#	三角形を呈する偏平な砾石である。円辺部が欠損しており、表面のみを紙面として使用する。		
927	S K 6	石包丁	( 3.5 ) ( 4.4 ) ( 0.6 ) 7.5	流紋岩質岩	石包丁の施部であり、大きく外側する刃部をもつ。	石材からみて、外部からの輸入品である。	
928	#	#	( 6.6 ) ( 4.4 ) 0.6 24.5	#	大きく外側する刃部をもつ石包丁である。刃部は両刃であり、背面は欠損する。	石材からみて、外部からの輸入品である。 927と同一個体である。	
929	S T 1	石 鋸	( 5.4 ) ( 2.1 ) 0.5 7.4	頁 岩	幅の広い木彫形をなす。偏平な磨製石鋸である。基部は無茎であり、表面ともによく研磨され、滑度を残す。		
930	S X 1	#	( 6.8 ) 1.4 0.4 3.8	#	複数形の磨製石鋸である。基部は無茎であり、断面は菱形を呈し、表面ともによく研磨され、滑度を残す。		
931	S T 1	#	( 4.9 ) 1.3 0.5 3.5	#	磨製石鋸の未完成品と想われ、表面の左半分に擦痕がみられ、よく研磨されている。		
932	S X 1	#	3.9 2.8 0.4 3.8	サヌカイト	三角形を呈する大型の石鋸である。基部は平基であり、表面ともに粗い削離により成形される。		
933	S X 4	#	1.2 1.4 0.3 0.4	#	正三角形を呈する小型の石鋸である。基部は平基であり、小剝離により成形される。		
934	S X 2	核 鋸	6.4 6.6 — 349.0	チャート	球形の自然縫を利用する。		
935	S T 1	管 玉	最大長 1.2 直 径 0.5 重 量 0.4	碧 玉	墨珠をねじり、非常に細く、短い。	孔径 2 mm.	
936	#	#	# ( 1.2 ) # ( 0.5 ) # ( 0.4 )	#	やや灰色をおび、細く短い。一端は穿孔位置のずれがみられる。	#	
937	S K 6	#	# ( 1.7 ) # ( 1.1 ) # ( 1.7 )	#	やや太く欠損している。	孔径 4 mm.	
938	S X 1	崩 磨	8.7 2.3 0.7 17.7	頁 岩	長方形を呈し、一個面に表面から剝離を行い、刃部を作出する。		
939	S X 2	#	( 8.4 ) 2.1 0.7 10.2	#	長方形を呈し、一端を欠損する。側辺部に小さな剝離を残し、刃部とする。		

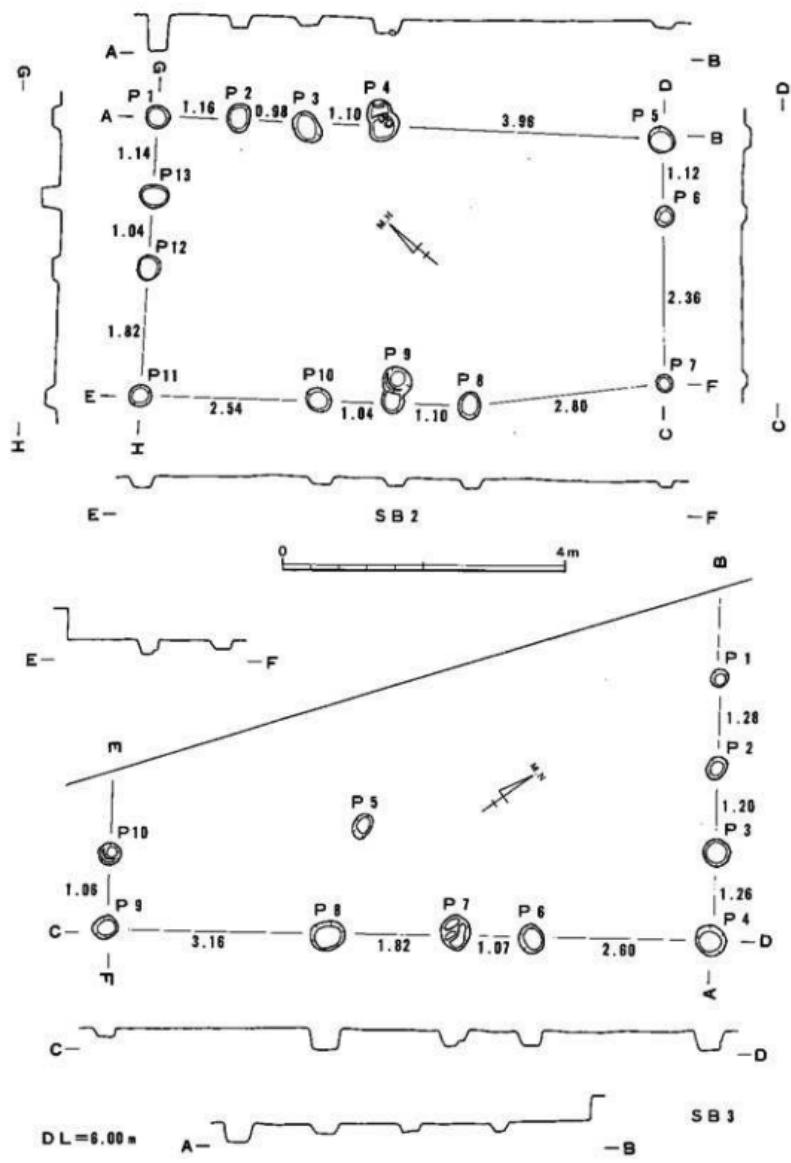
特許番号	登録番号	器種	計測値 最大長 (cm.) 最大幅 (cm.) 最大厚 度(g.)	材質	特徴	備考
940	S X 4	削器	( 9.3) 6.4 3.1 193.0	チャート	不定形の厚みのある削片の左側面に表面側のみに削離を行い、刃部を作出する。	
941	S X 3	#	( 3.3) ( 3.8) ( 0.4) 7.6	サスカイト	硬皮面を打撲とする方形の削片の下端に小削離を加え刃部とする。	
942	S X 1	#	4.2 2.2 0.5 5.2	真岩	横長削片の両側近部に基面より表面側への削離により、刃部を形成する。	
943	S X 4	#	( 4.3) ( 5.3) ( 1.0) 20.9	サスカイト	硬皮面を打撲とする削片の左側近部に粗い削離がみられる。下端は欠損する。	
944	#	#	( 3.6) ( 3.0) ( 0.7) 7.6	#	不定形の削片の周辺部に小削離を施し、刃部とする。	
945	#	削片	( 3.1) ( 3.8) 0.5 5.4	#	不定形の削片である。	
946	#	#	( 2.2) ( 4.7) ( 0.5) 4.6	#	横長の削片である。	
947	#	#	( 2.9) ( 2.9) ( 0.4) 1.7	#	方形に近い削片である。約半分欠損する。	
948	S T 1	#	( 3.0) ( 4.5) ( 0.5) 7.3	#	横長の削片であり下端部に、使用によると思われる小削離が、表裏面にみられる。	
949	S X 4	#	6.7 5.1 2.5 16.5	チャート		
950	S K 6	#	6.8 5.1 1.7 30.5	軽石	大形の軽石。	
951	#	#	3.2 3.0 1.4 3.3	#	小形の軽石。	
952	#	#	( 2.8) ( 2.4) ( 2.0) 3.1	#		
953	#	#	( 8.8) ( 4.9) ( 3.4) 20.5	#	大形の軽石。	
954	S X 2	#	9.0 ( 5.8) ( 2.9) 176.0	#		



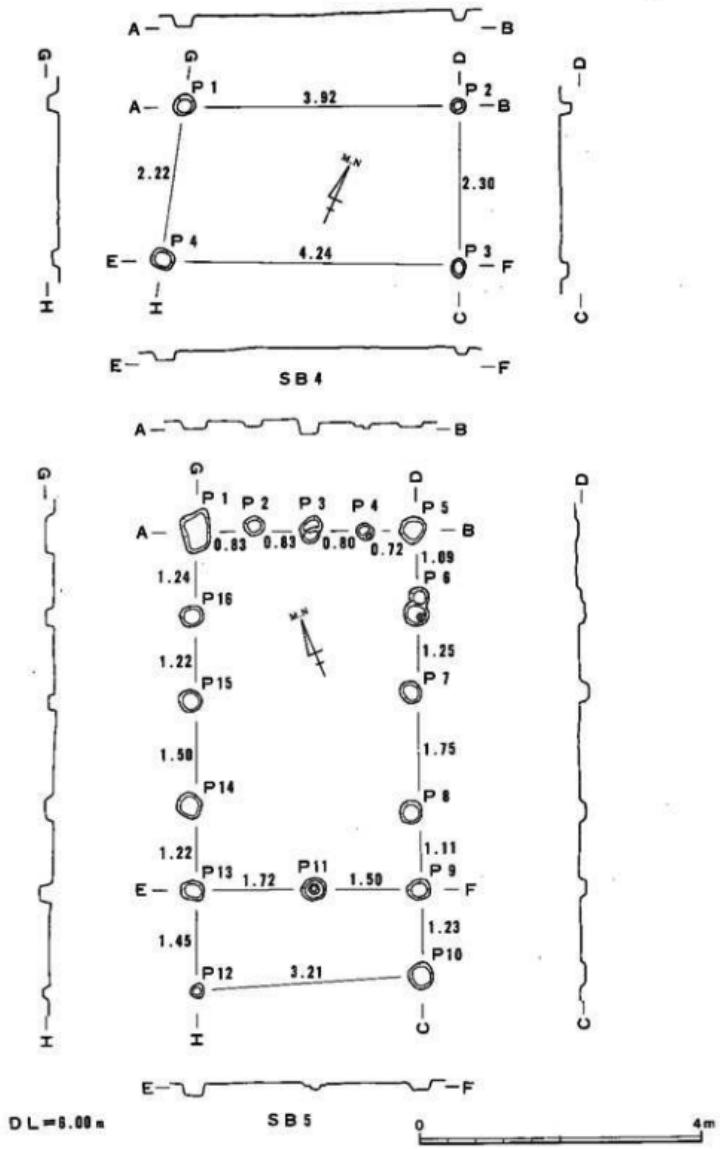
第4回 ST1



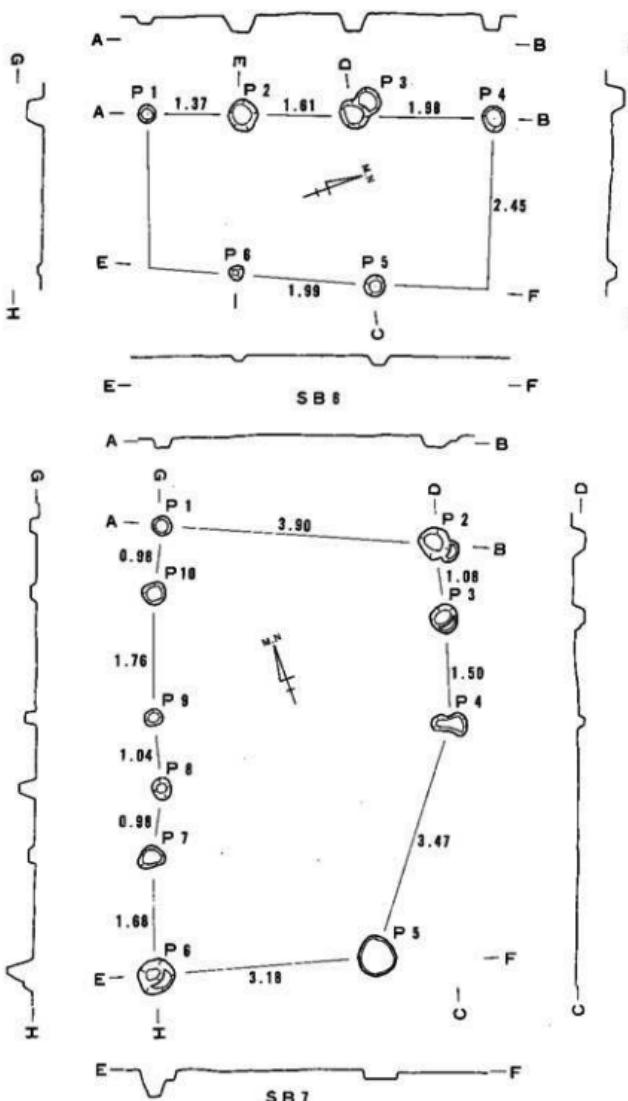
第5図 SB 1



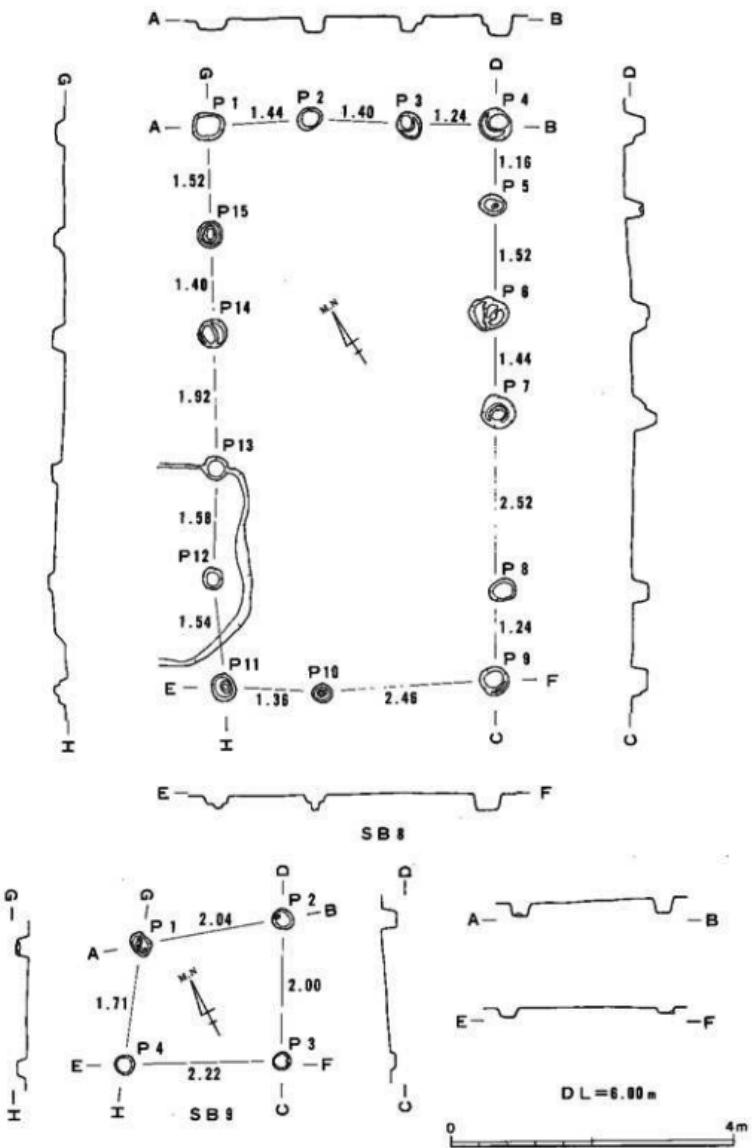
第6図 SB 2 + 3



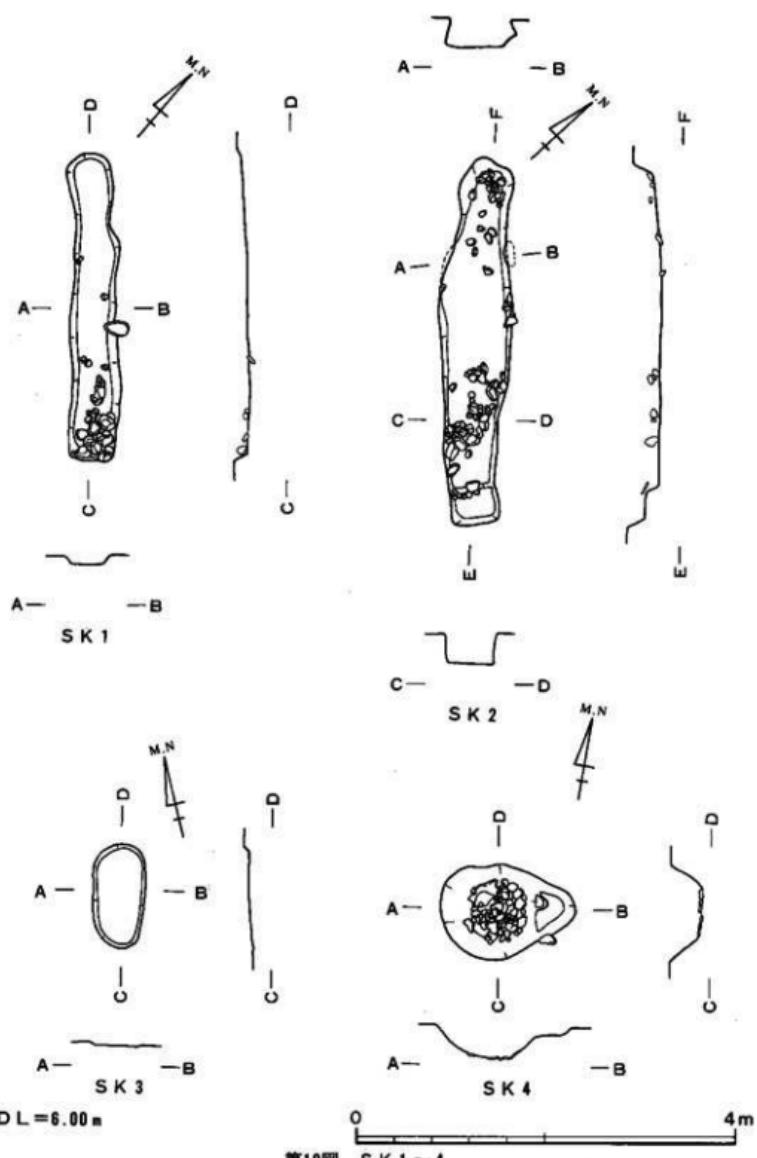
第7図 SB 4 + 5

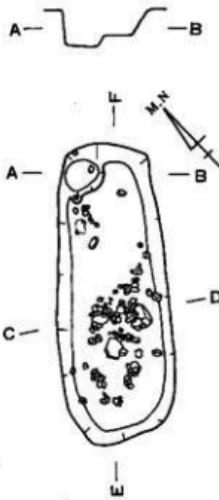
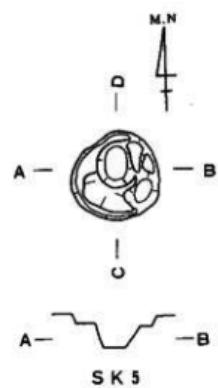


第8図 SB6・7

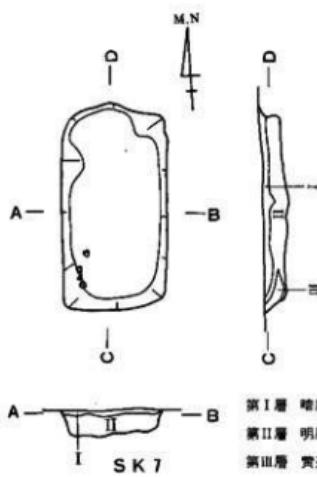


第9図 SB 8 + 9

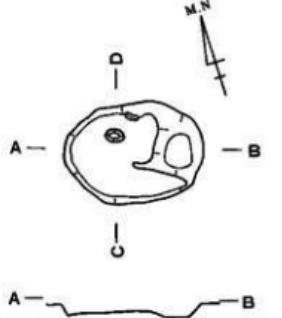




第Ⅰ層 喀灰褐色粘質土  
第Ⅱ層 明黑褐色粘質土  
第Ⅲ層 黑茶褐色粘質土



第Ⅰ層 喀灰褐色粘質土  
第Ⅱ層 明黑褐色粘質土  
第Ⅲ層 黑茶褐色粘質土

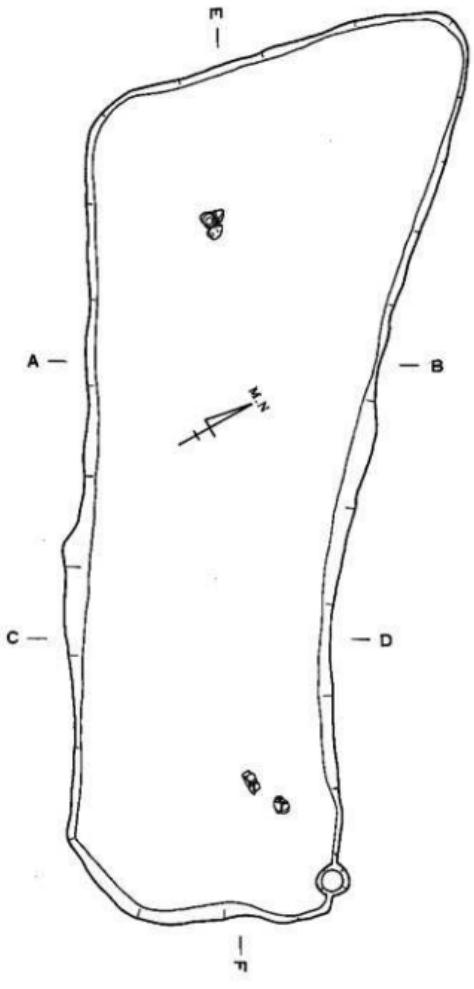
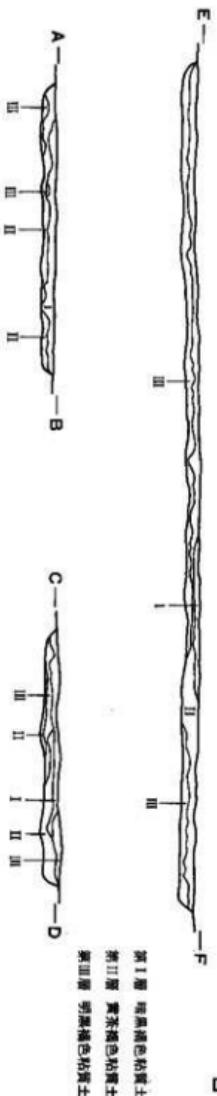


D L = 6.00 m

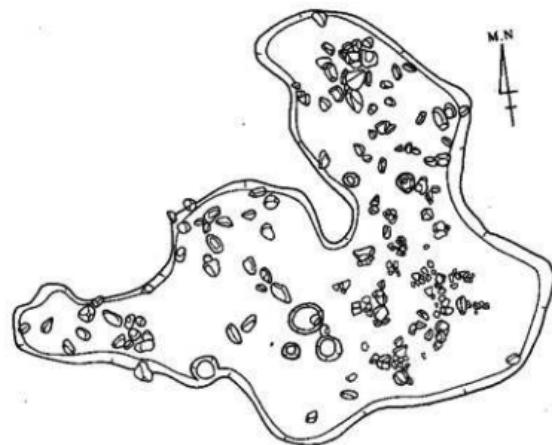
0

4m

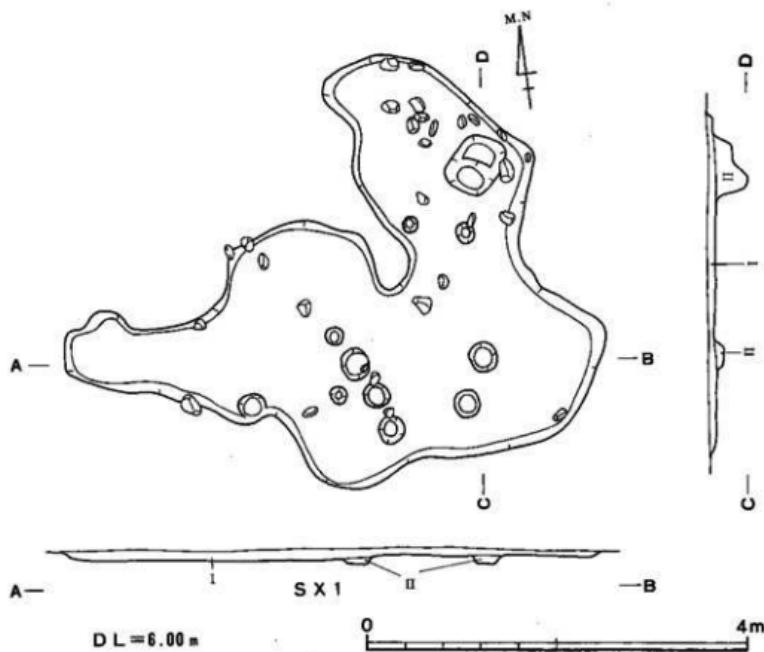
第11図 SK 5 ~ 8



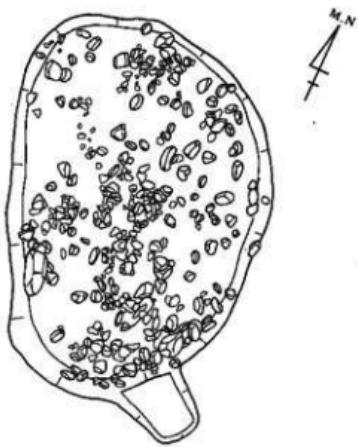
D L = 6.00 m      0      4m  
第12圖 SK 9



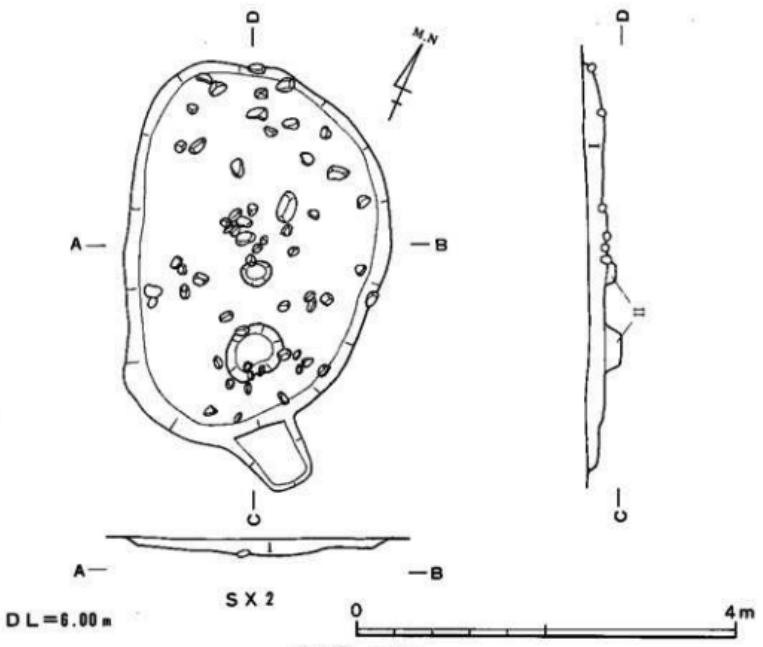
第Ⅰ層 黑褐色粘質土  
第Ⅱ層 黑茶褐色粘質土



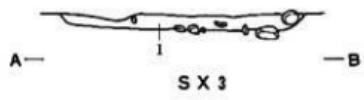
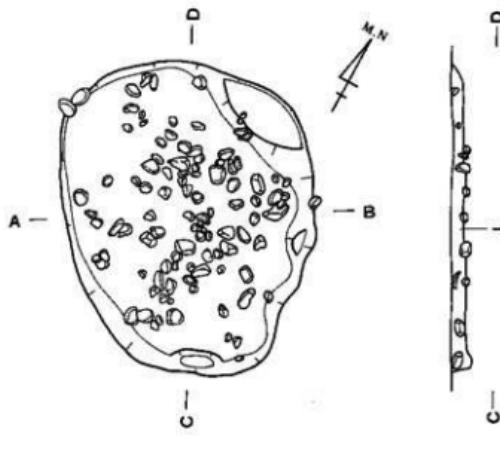
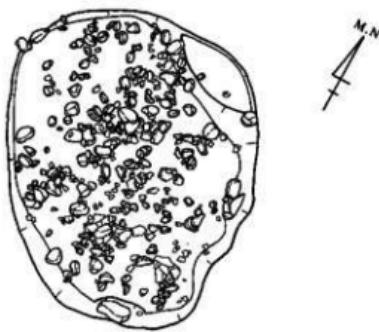
第13図 S X 1



第Ⅰ層 黑褐色粘質土  
第Ⅱ層 黑茶褐色粘質土



第14図 S X 2

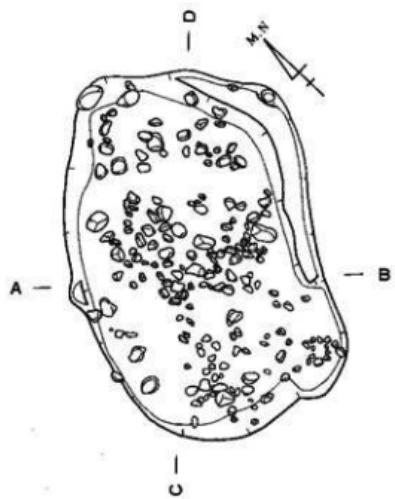
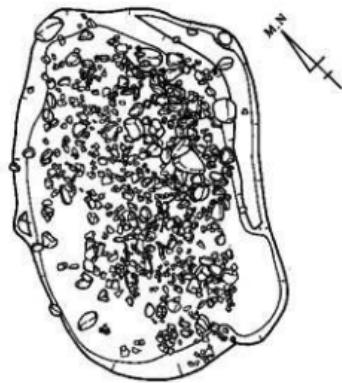


第1層 黑褐色粘質土層

D L = 6.00 m



第15圖 S X 3

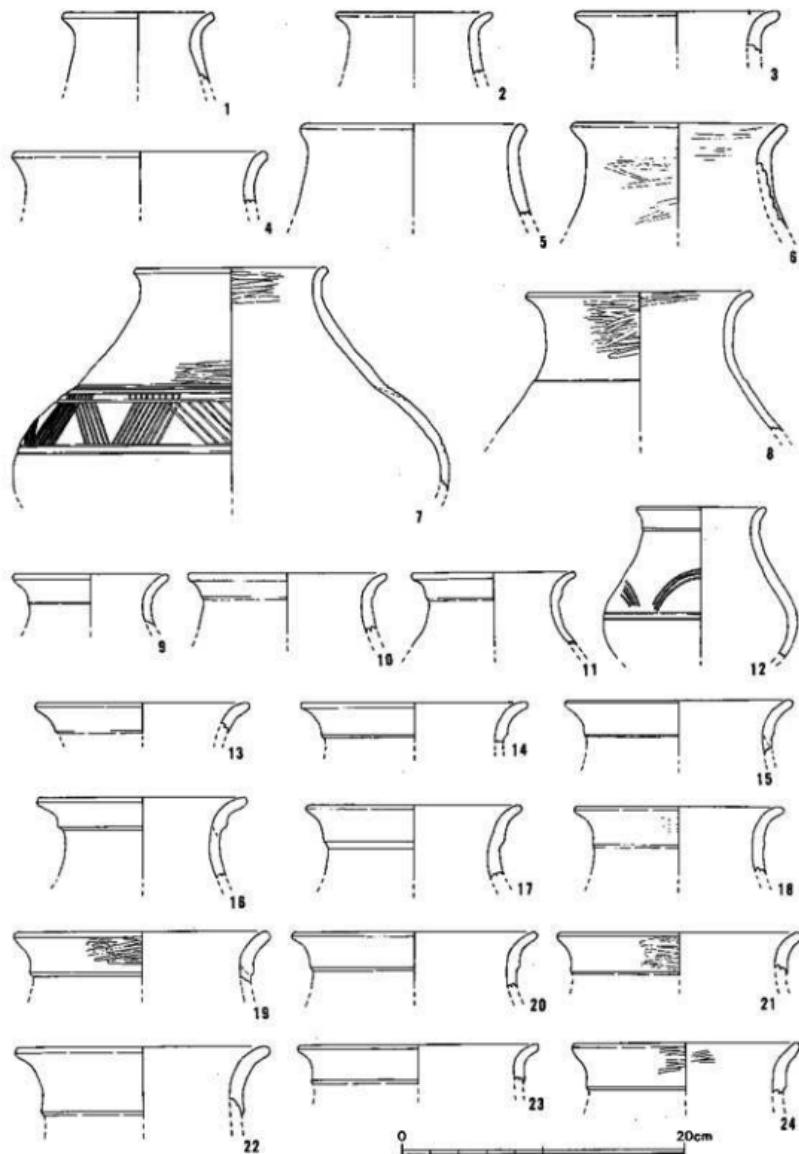


第1層 黑褐色粘質土

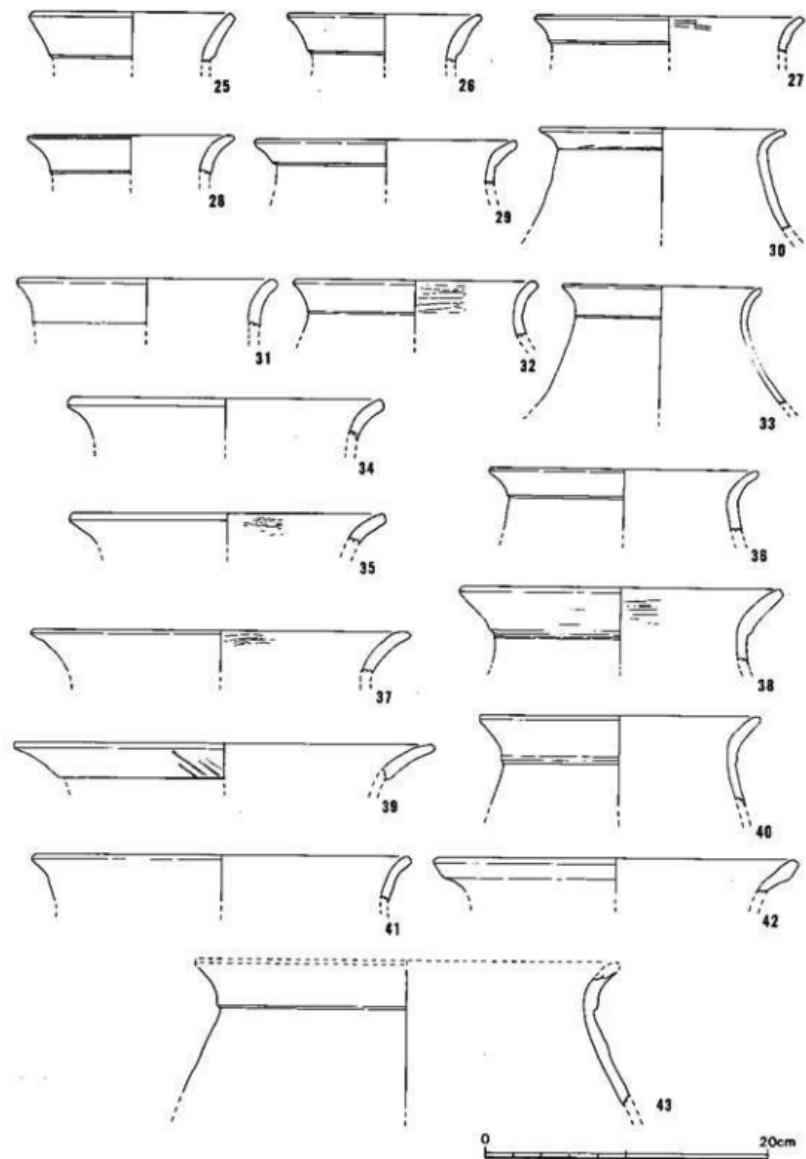
DL = 6.00 m

S X 4

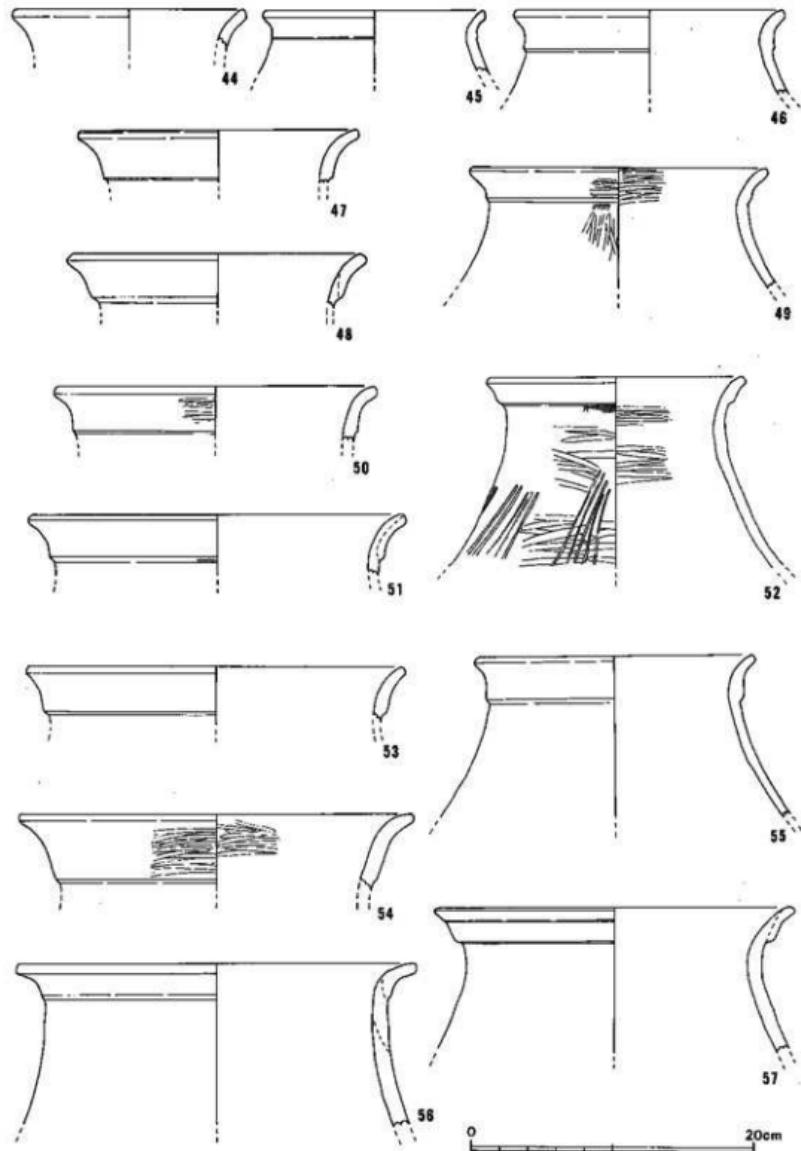
第16圖 S X 4



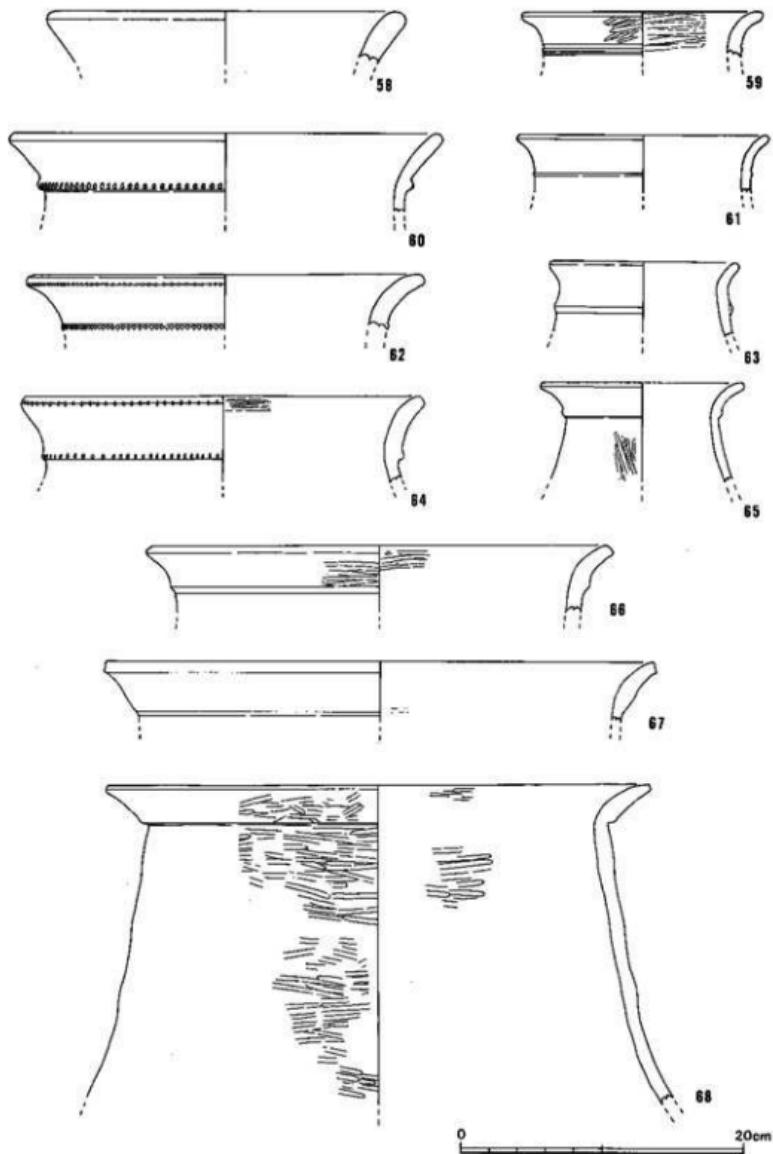
第17図 第VII層出土遺物



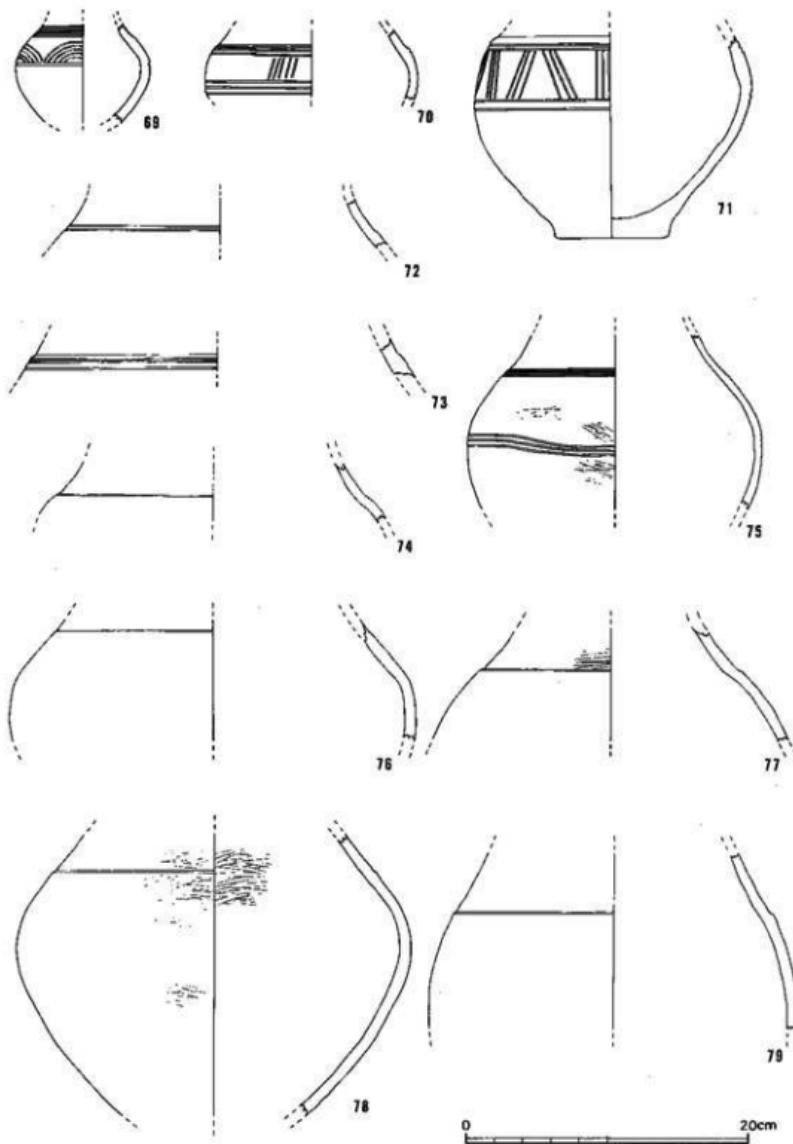
第18図 第VII層出土遺物



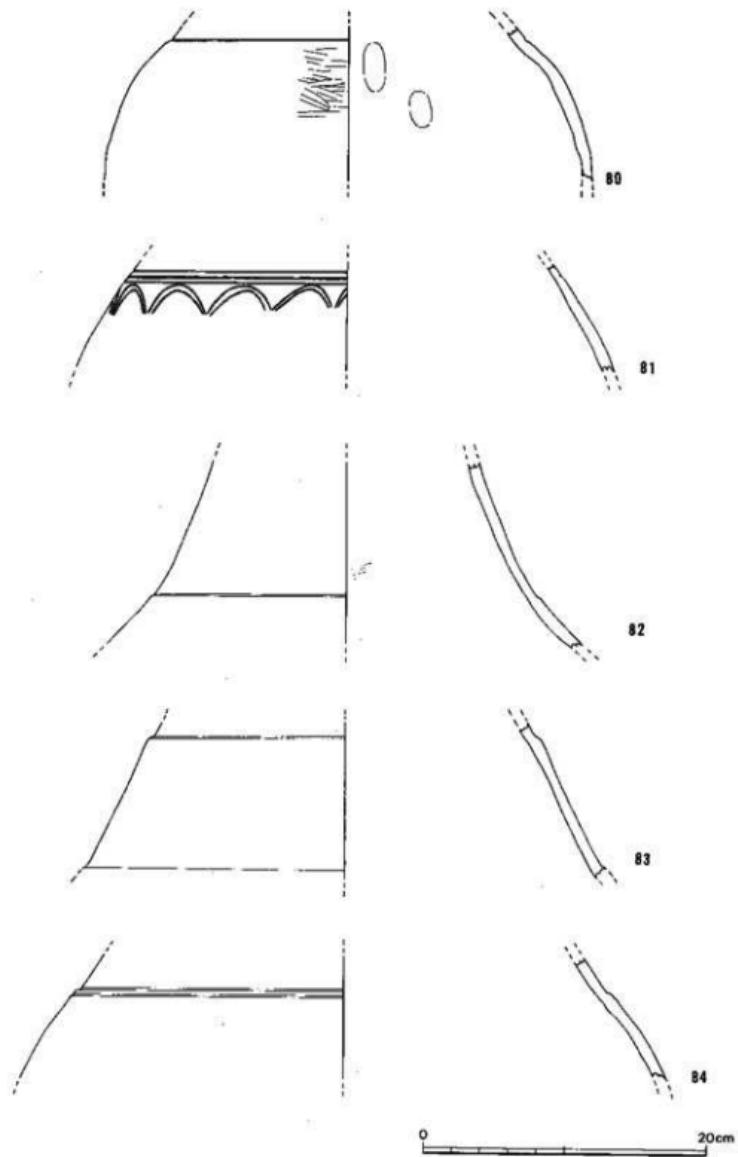
第19図 第VII層出土遺物



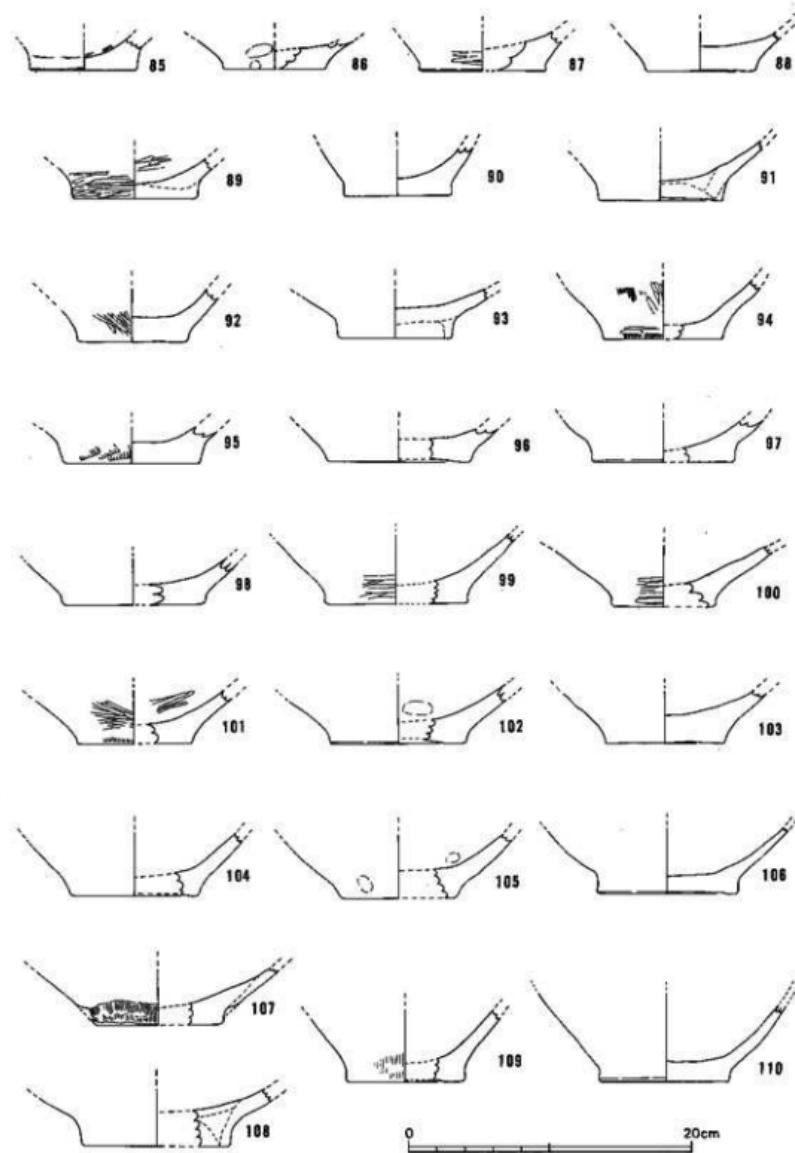
第20図 第VII層出土遺物



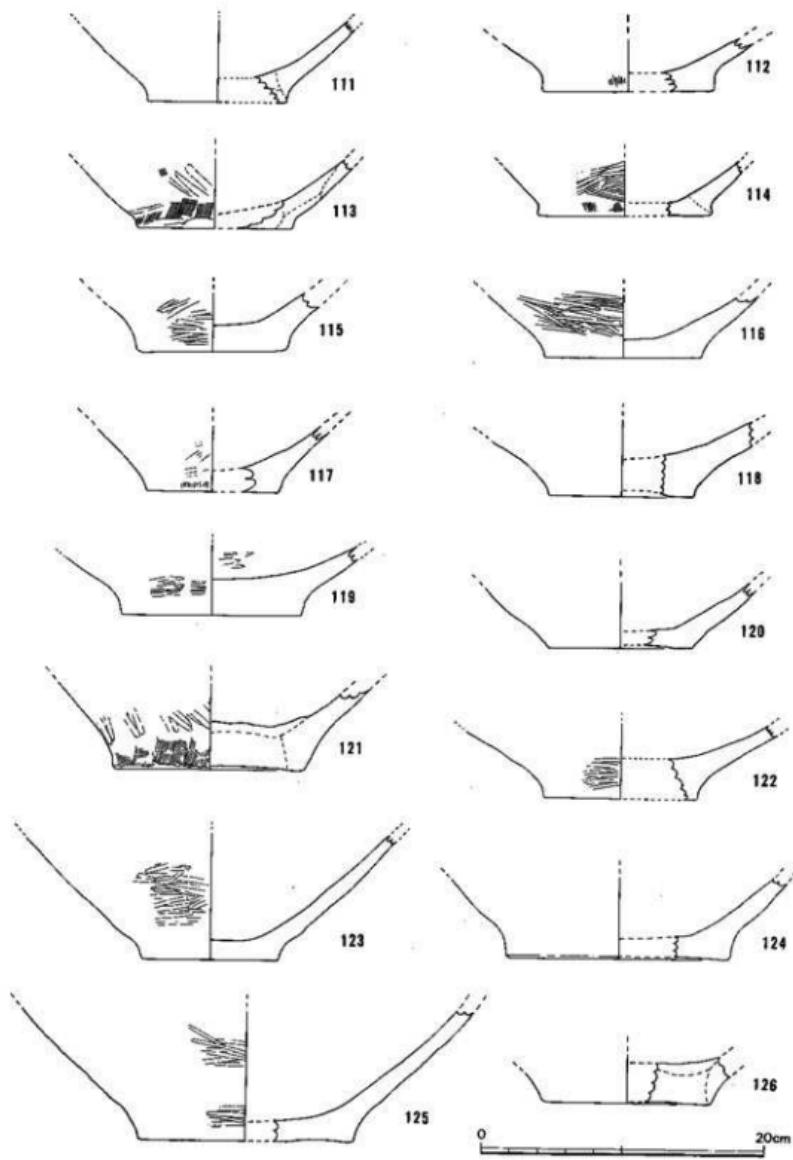
第21図 第VII層出土遺物



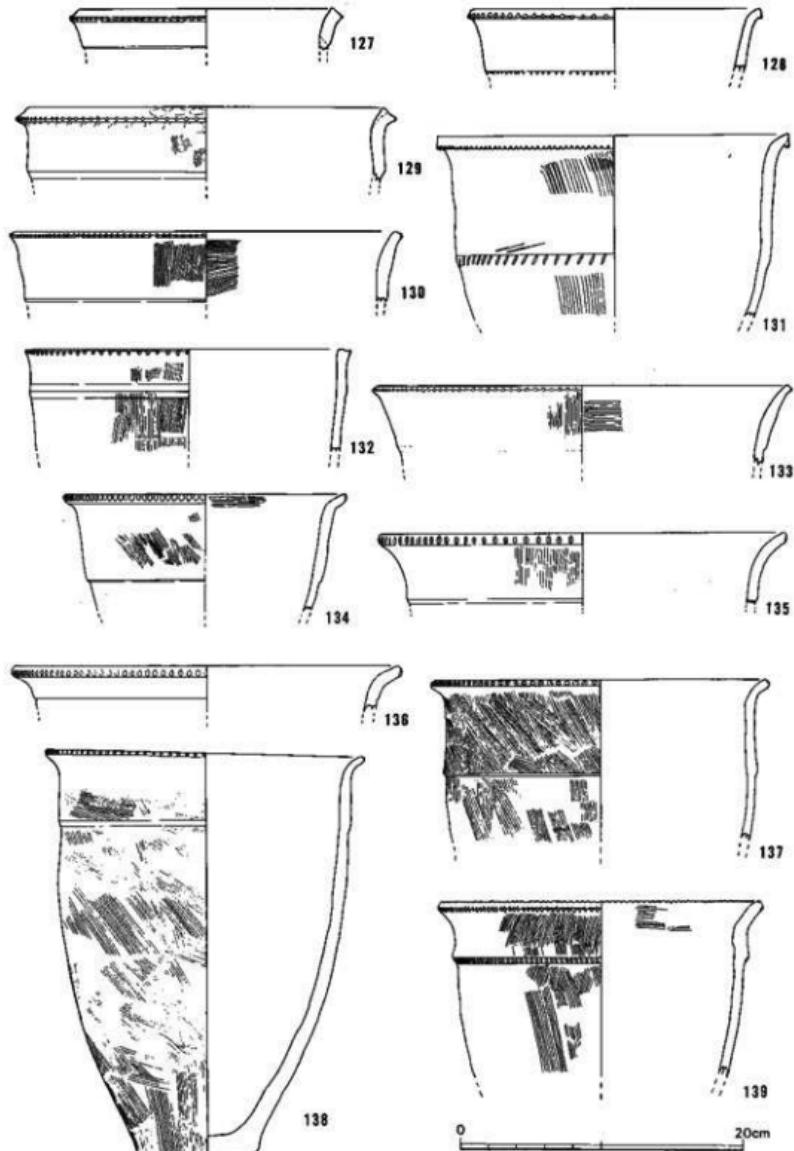
第22図 第VII層出土遺物



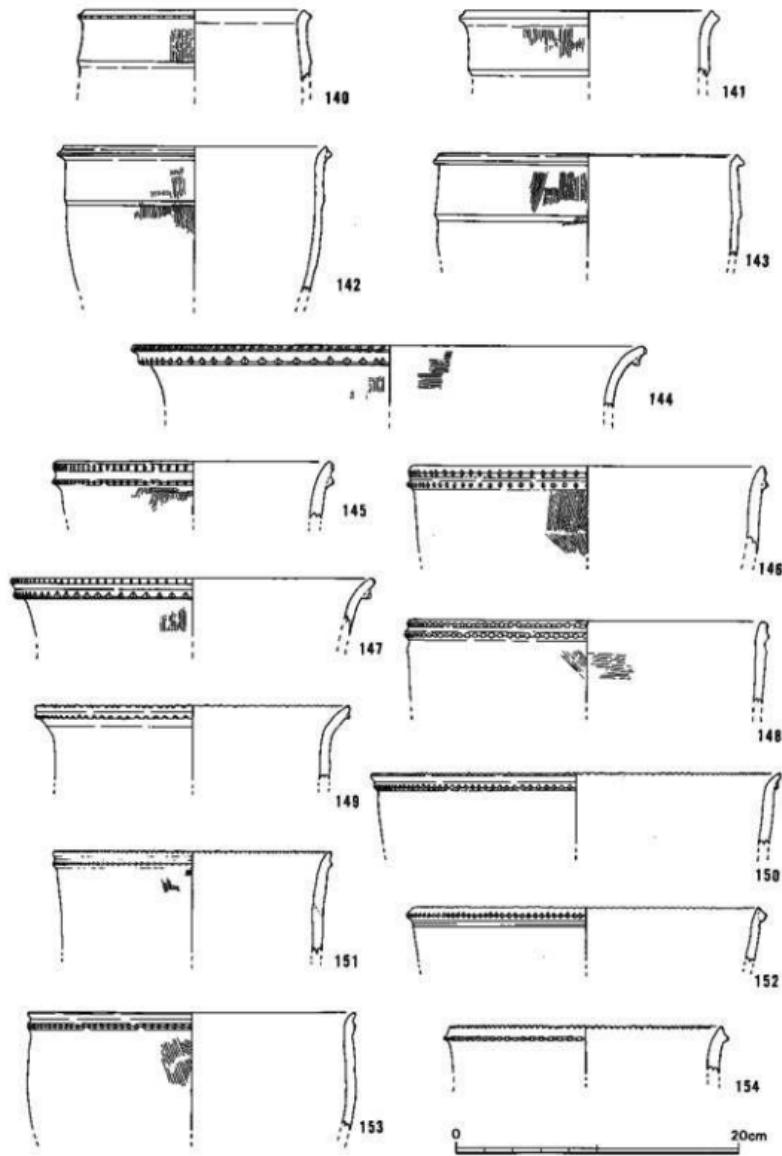
第23図 第VII層出土遺物



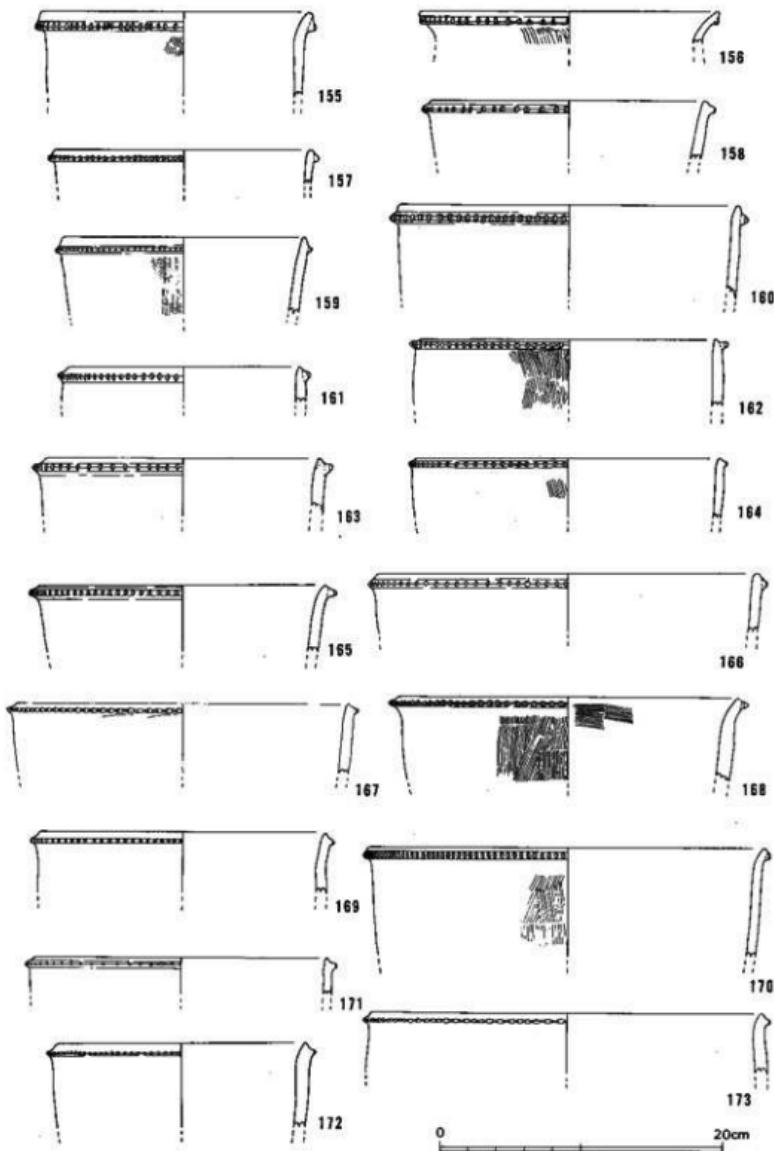
第24図 第VII層出土遺物



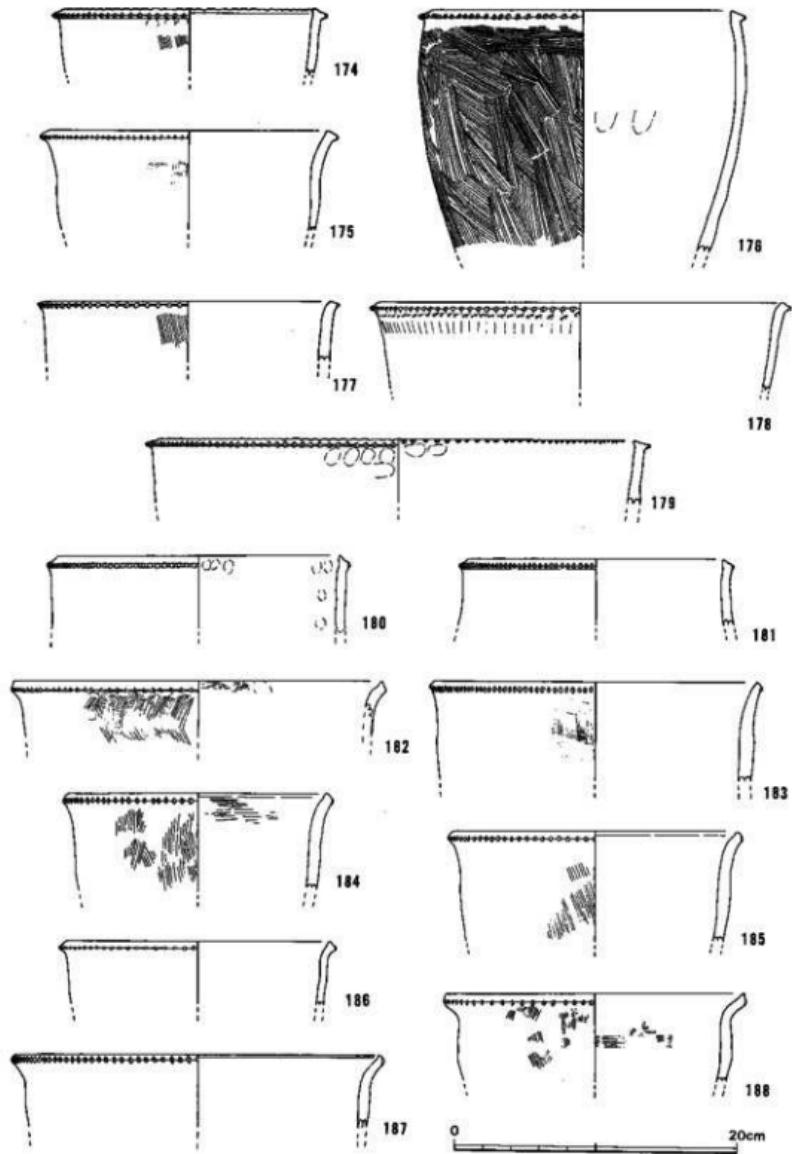
第25図 第VII層出土遺物



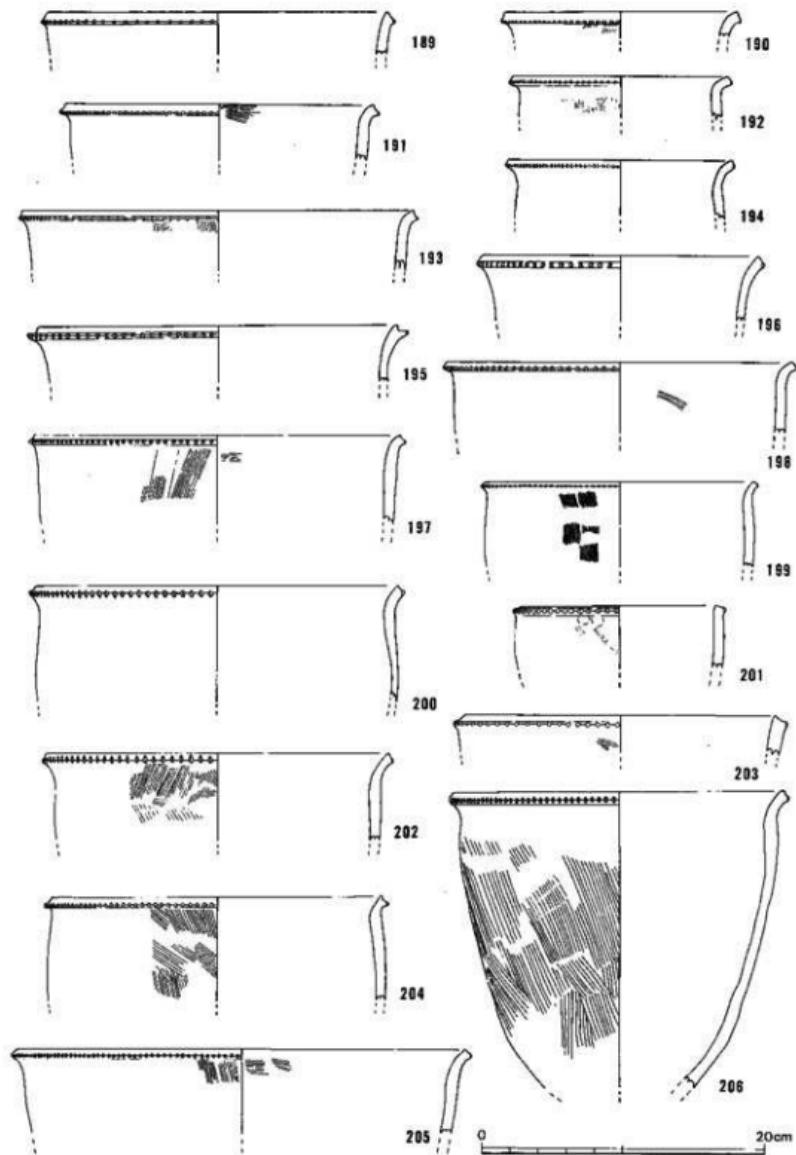
第26図 第VII層出土遺物



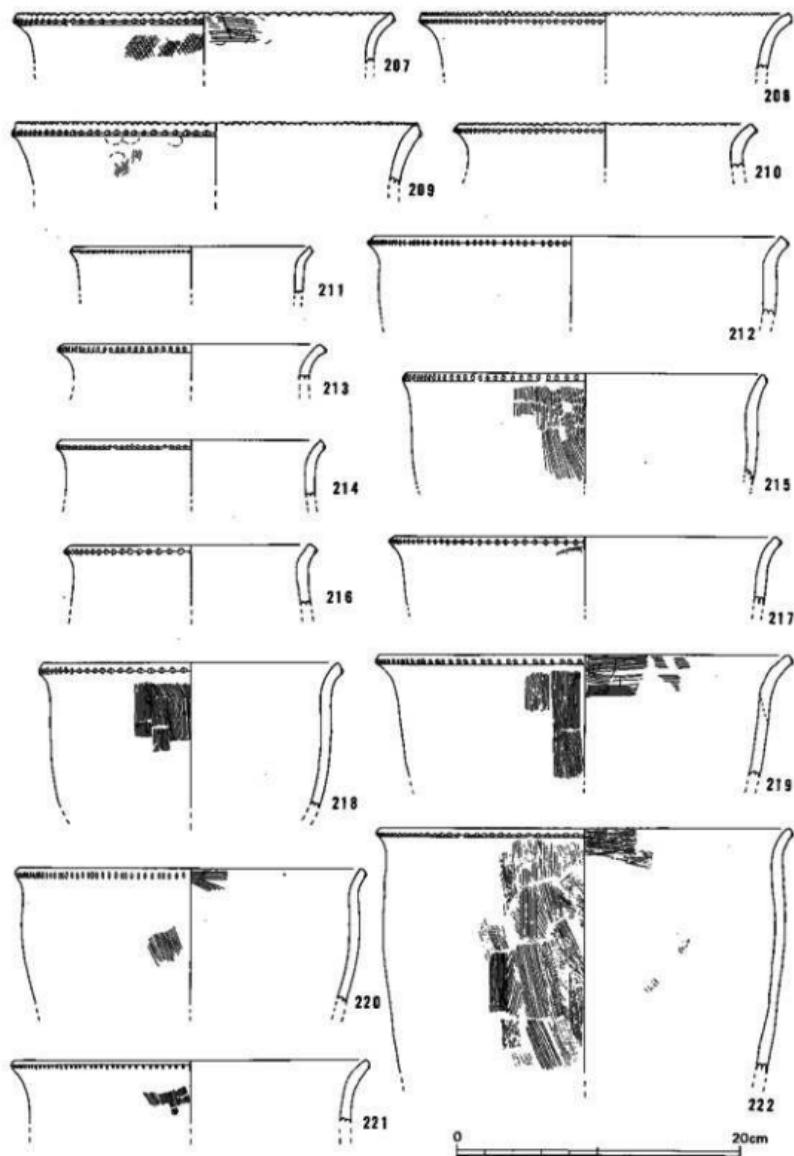
第27図 第VII層出土遺物



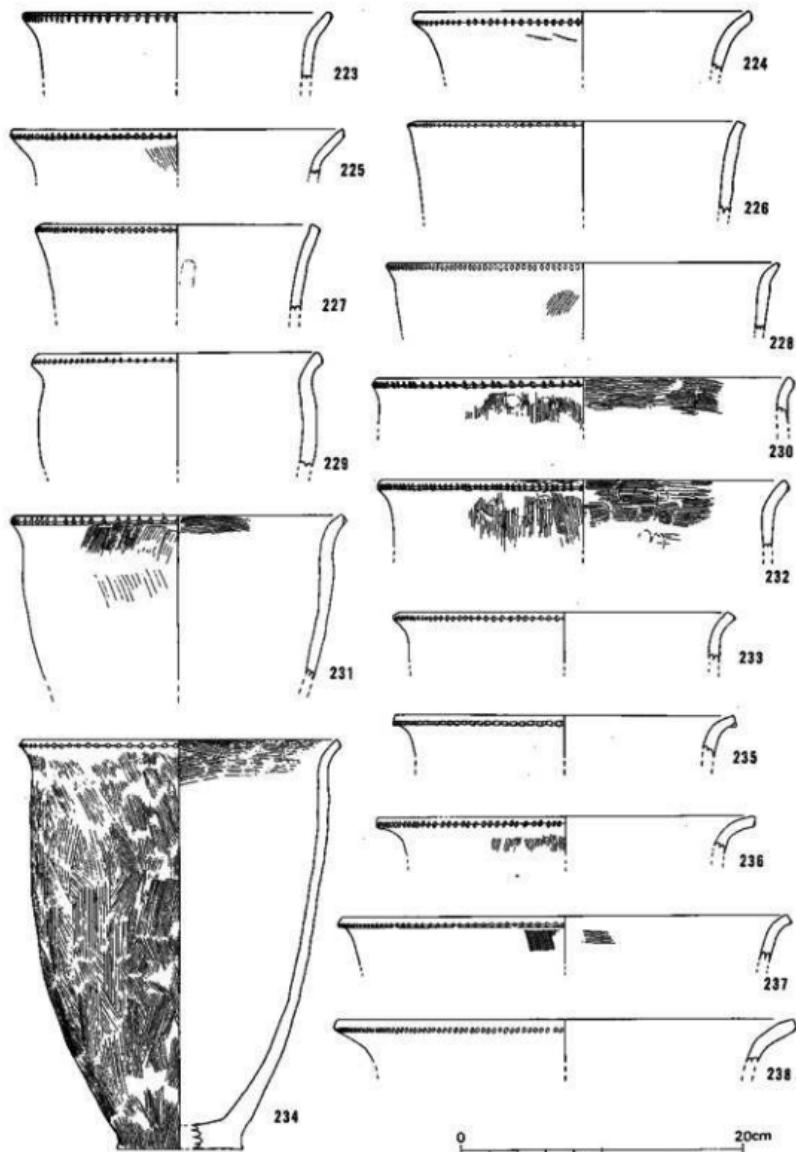
第28図 第VII層出土遺物



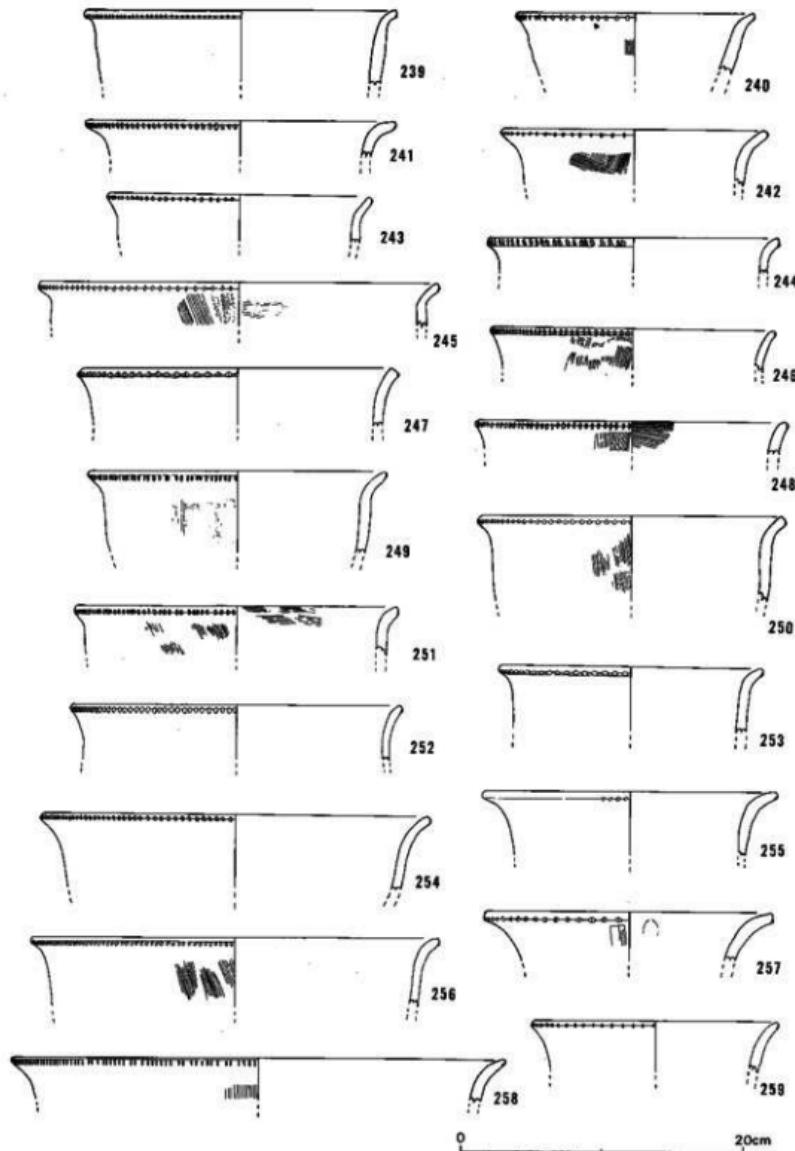
第29図 第VII層出土遺物



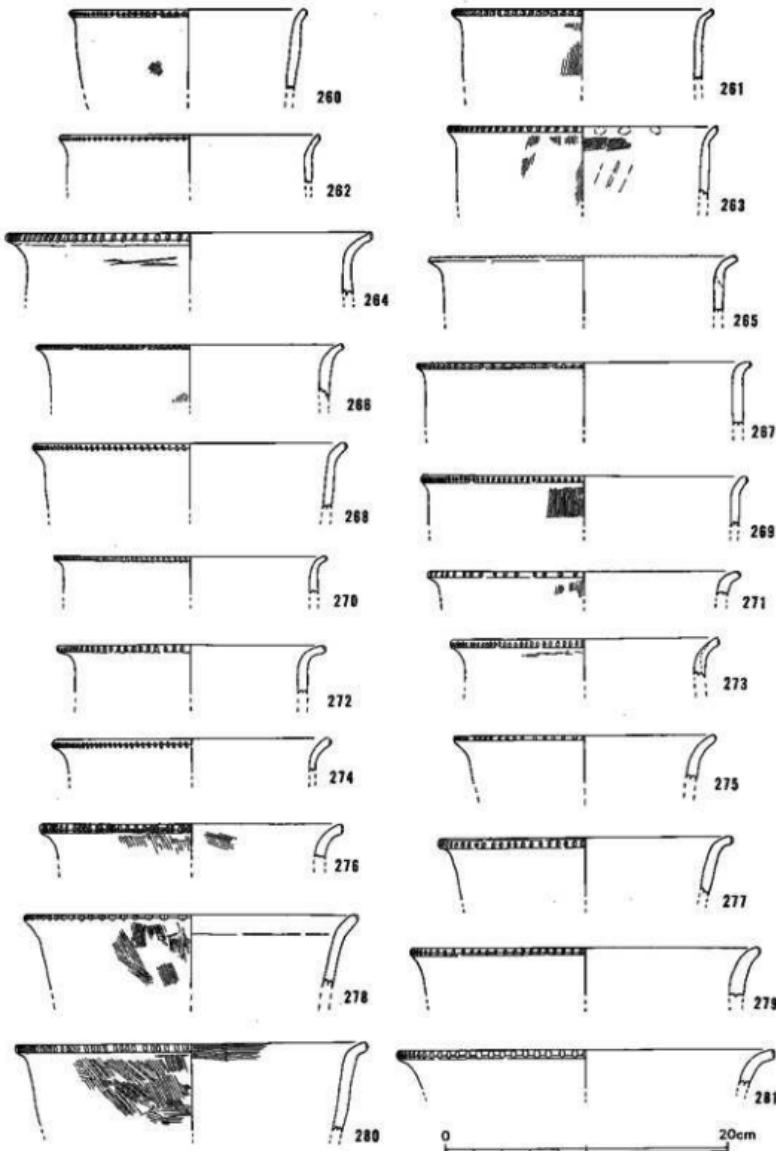
第30図 第VII層出土遺物



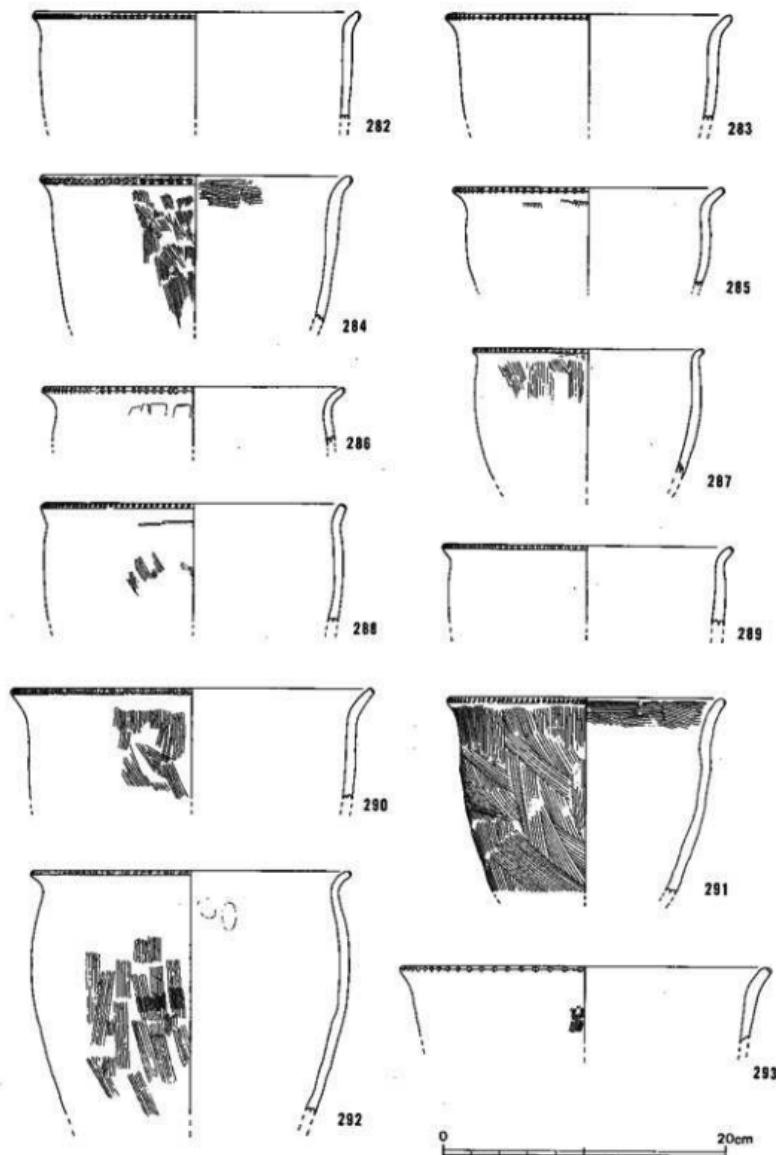
第31図 第VII層出土遺物



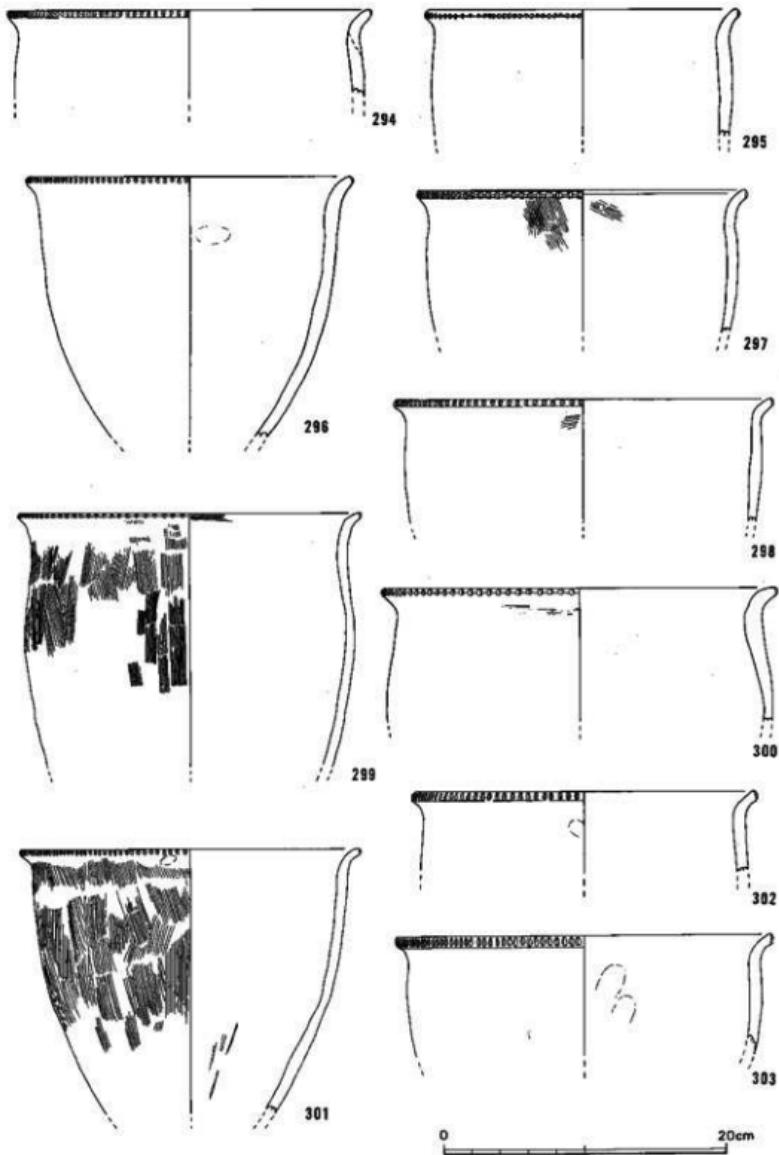
第32図 第VII層出土遺物



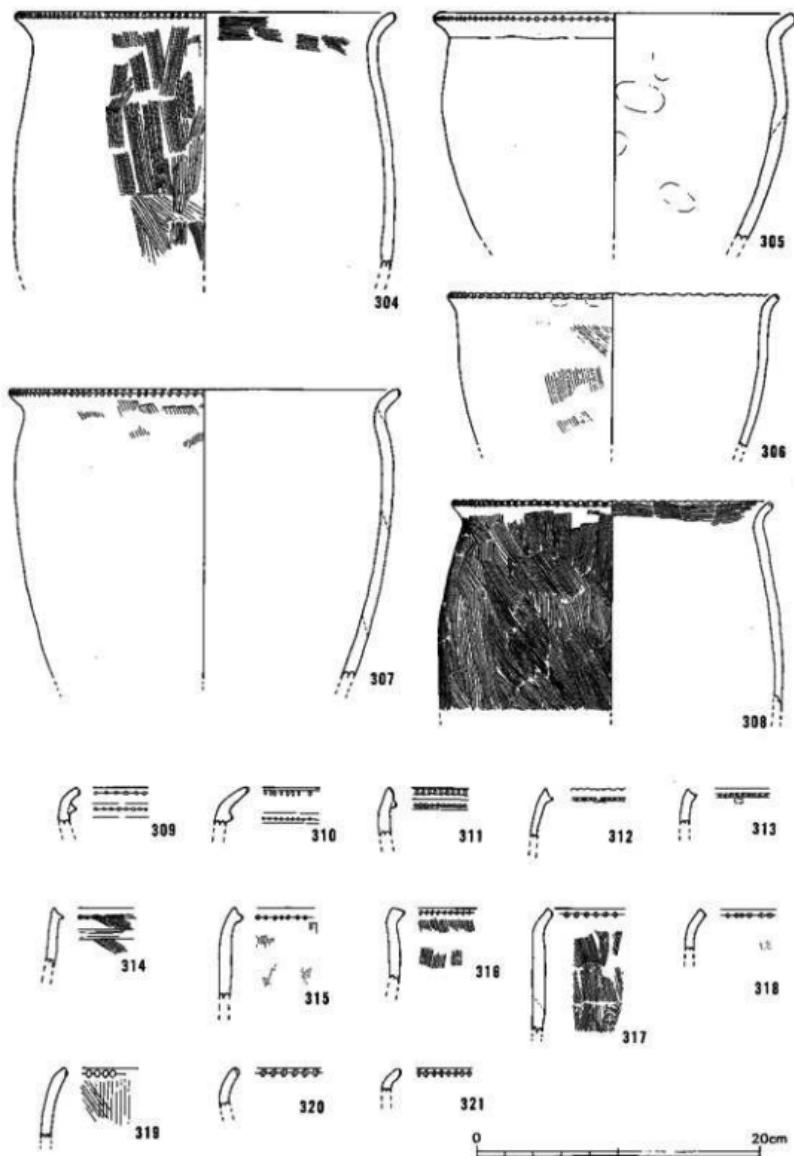
第33図 第VII層出土物



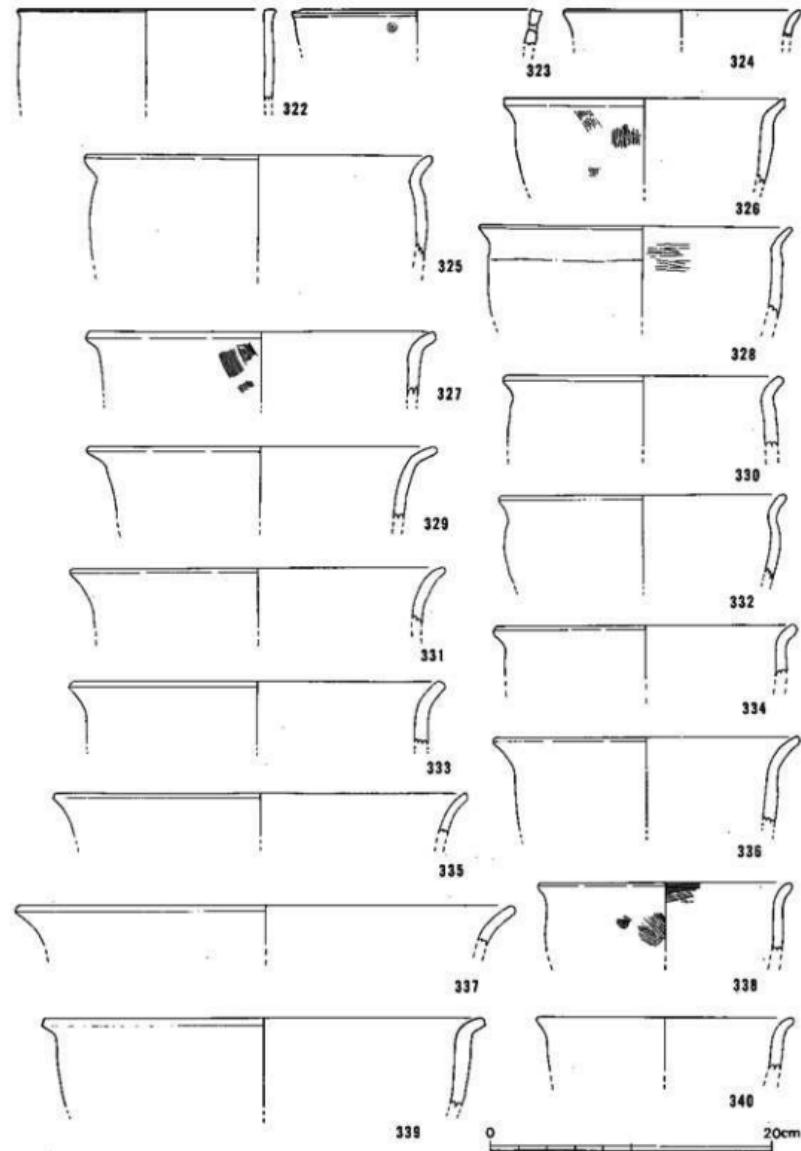
第34図 第VII層出土遺物



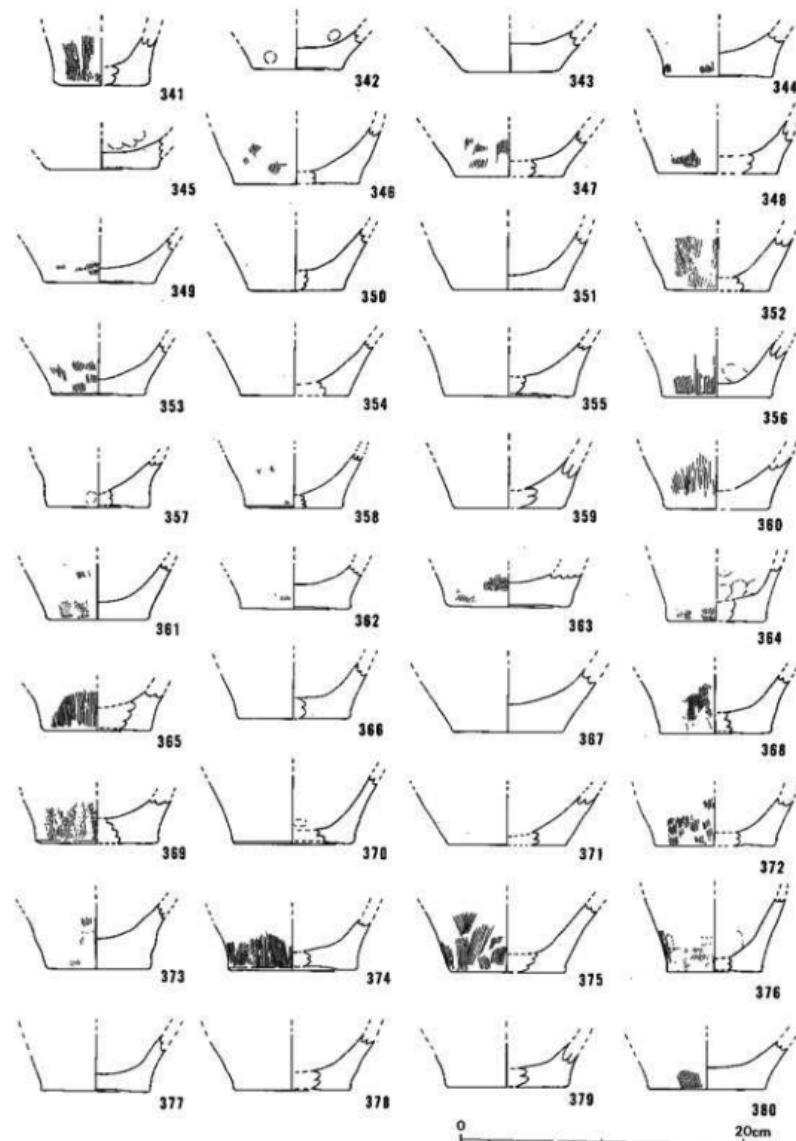
第35図 第VII層出土遺物



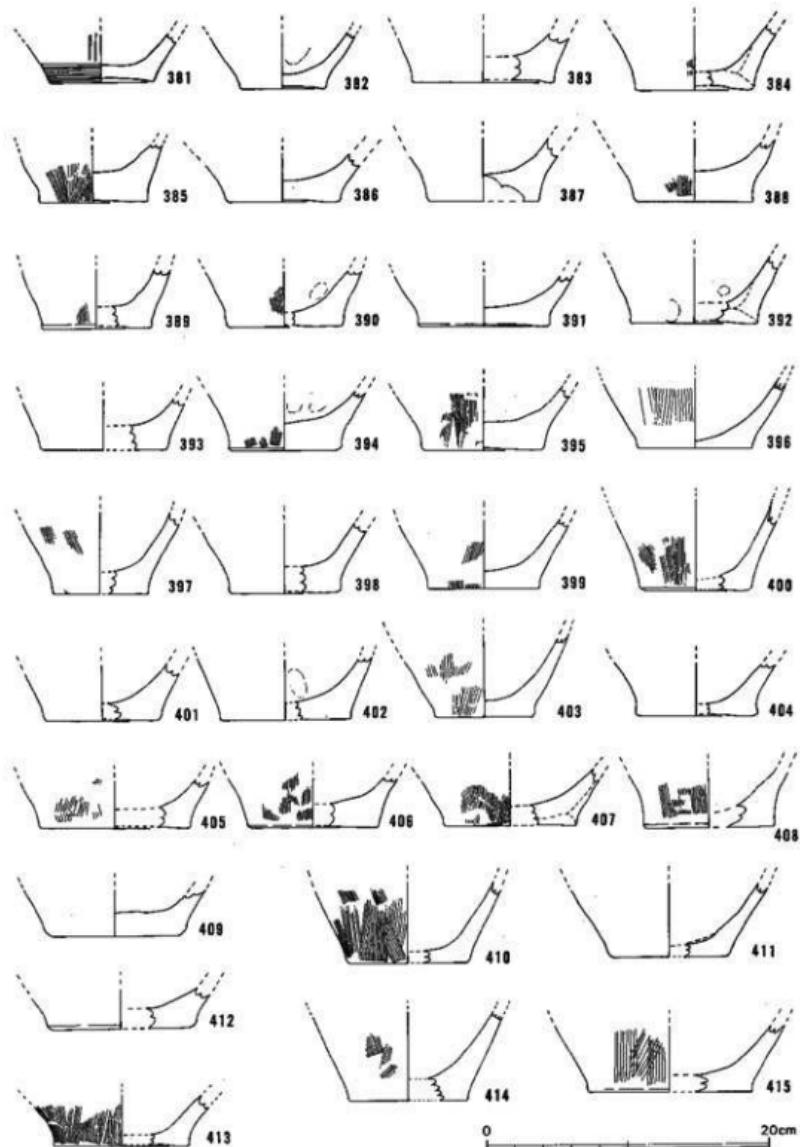
第36図 第VII層出土物



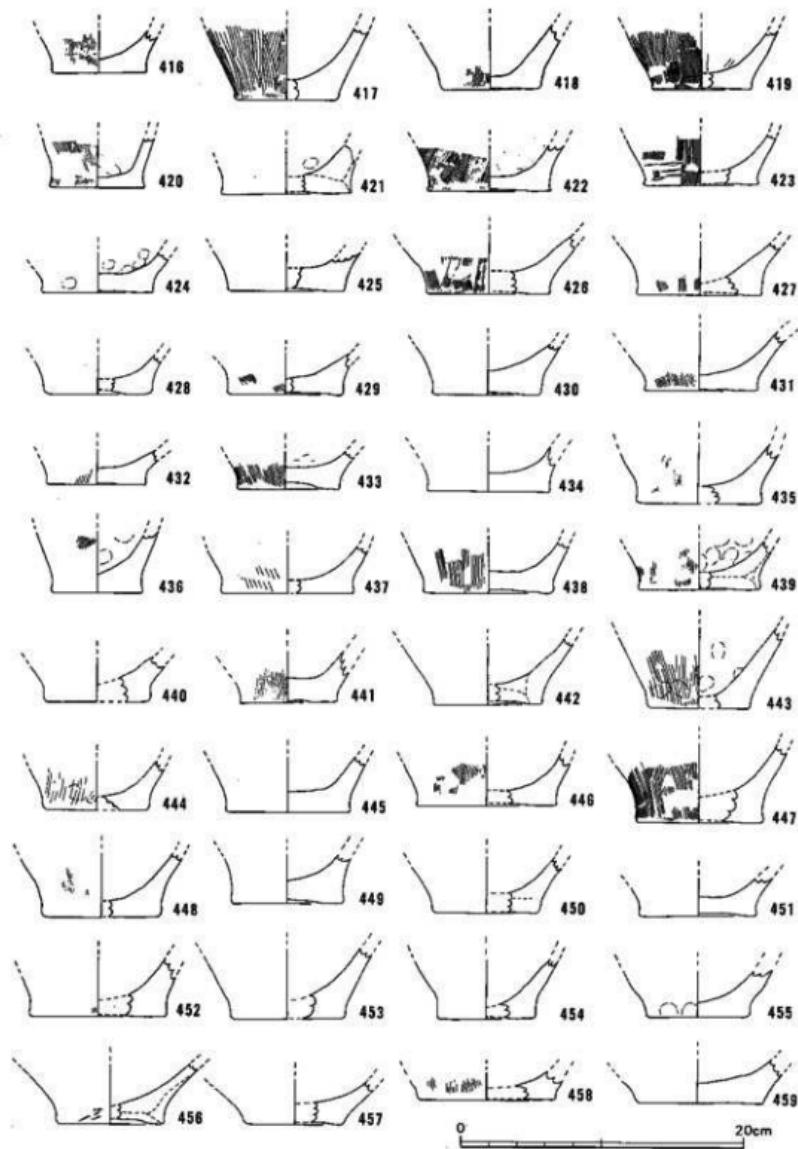
第37図 第VII層出土遺物



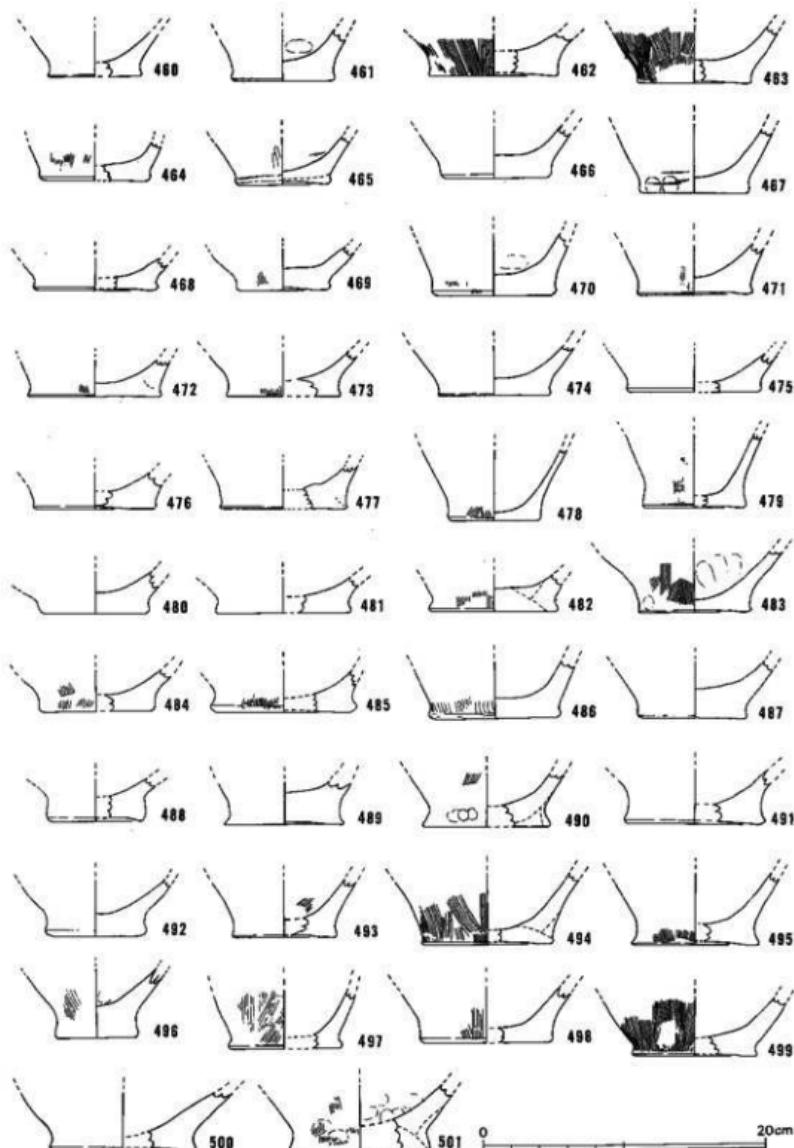
第38図 第VII層出土遺物



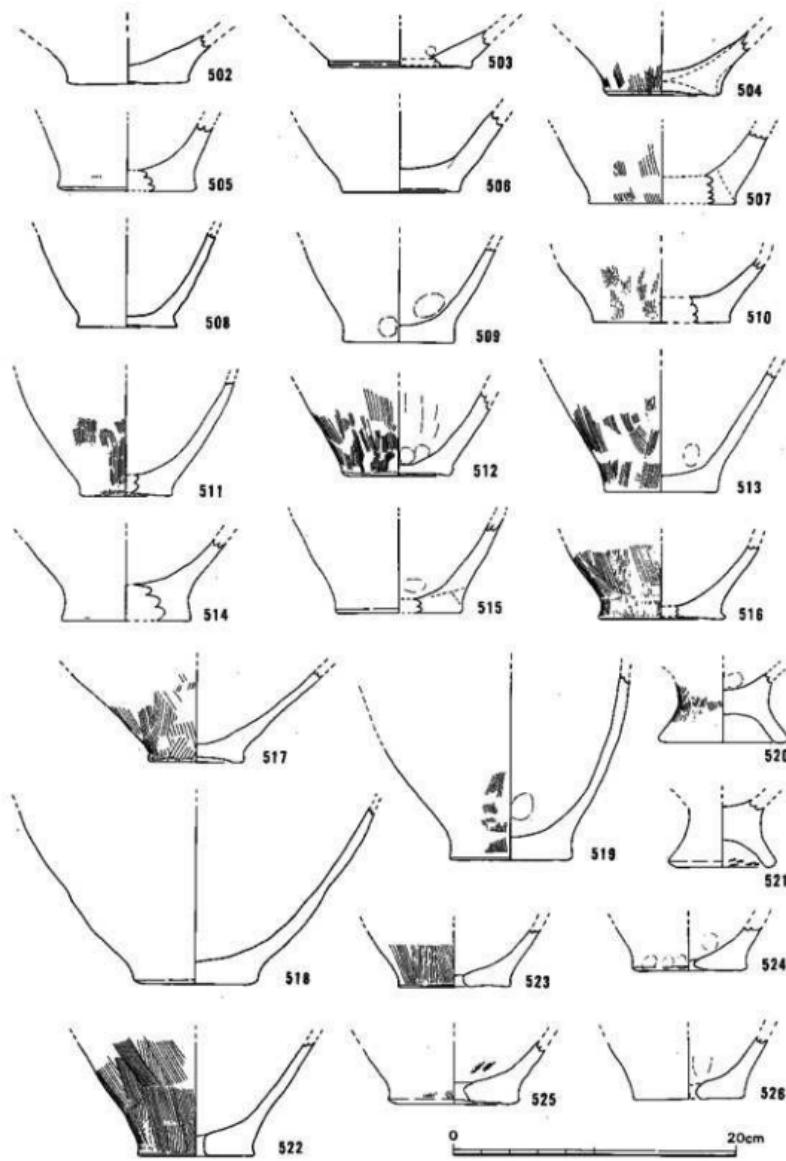
第39図 第VII層出土遺物



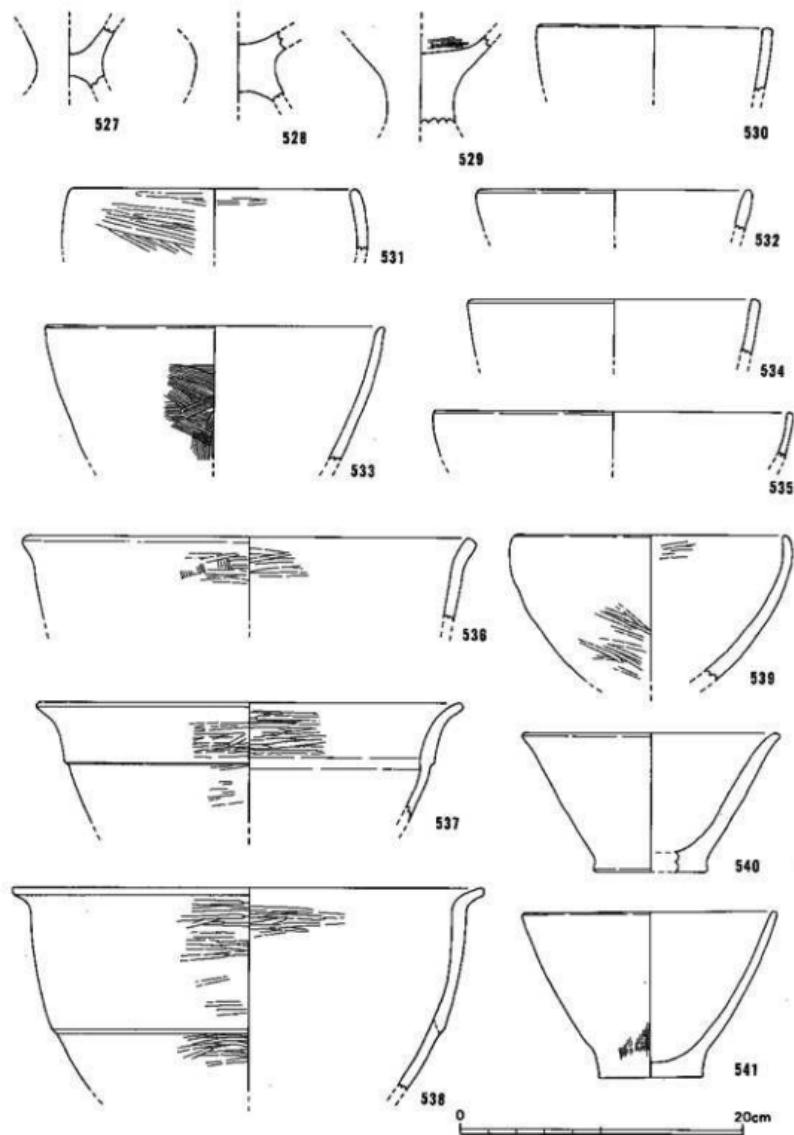
第40図 第VII層出土遺物



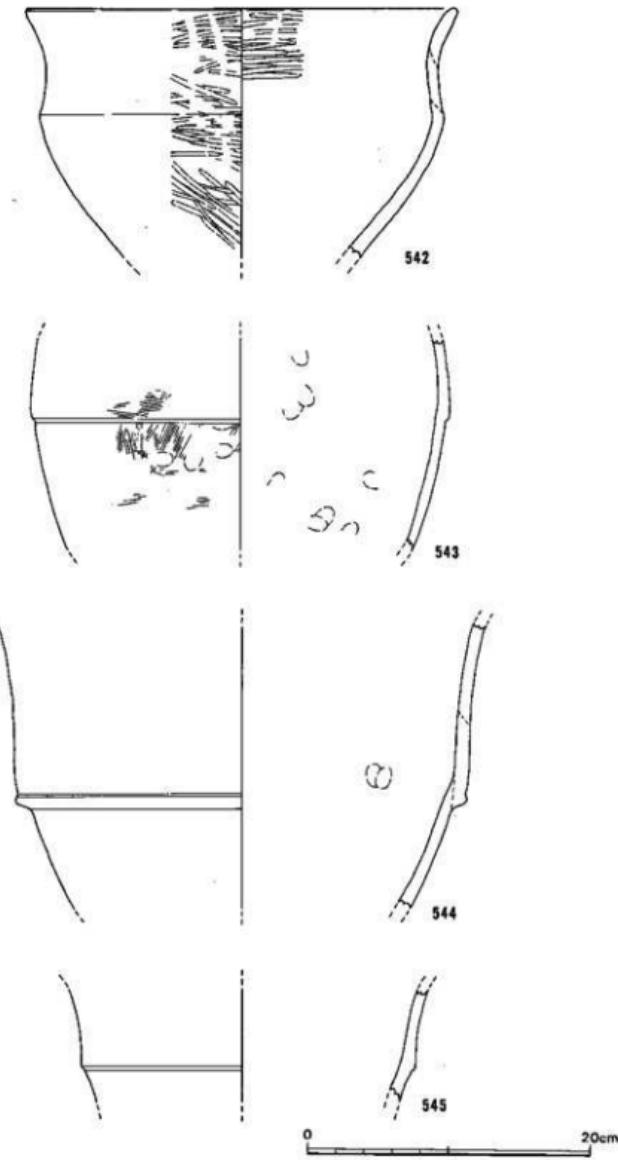
第41図 第VII層出土物



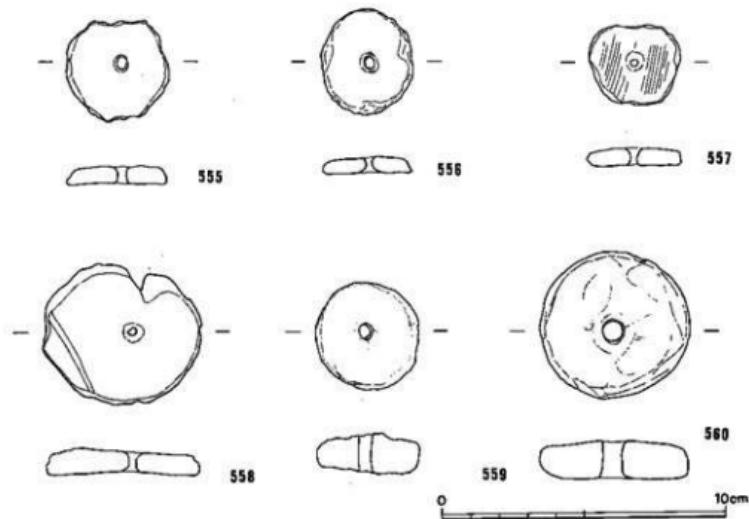
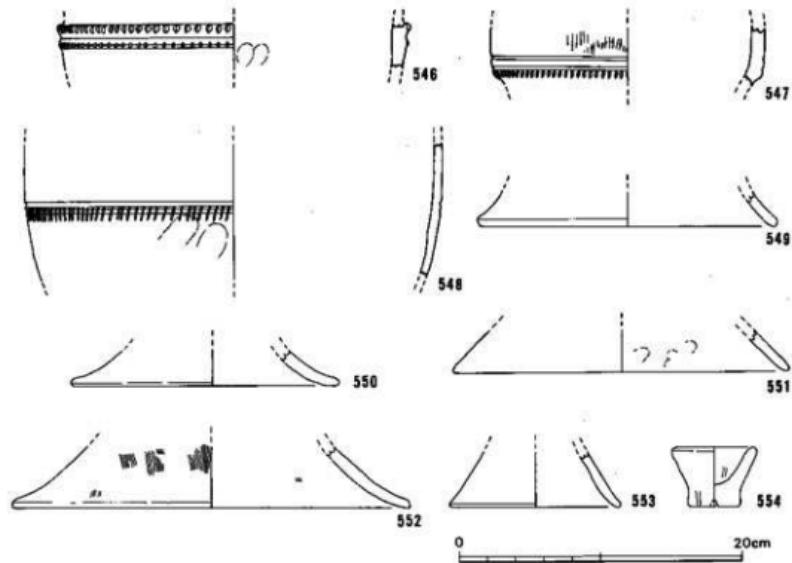
第42図 第VII層出土遺物



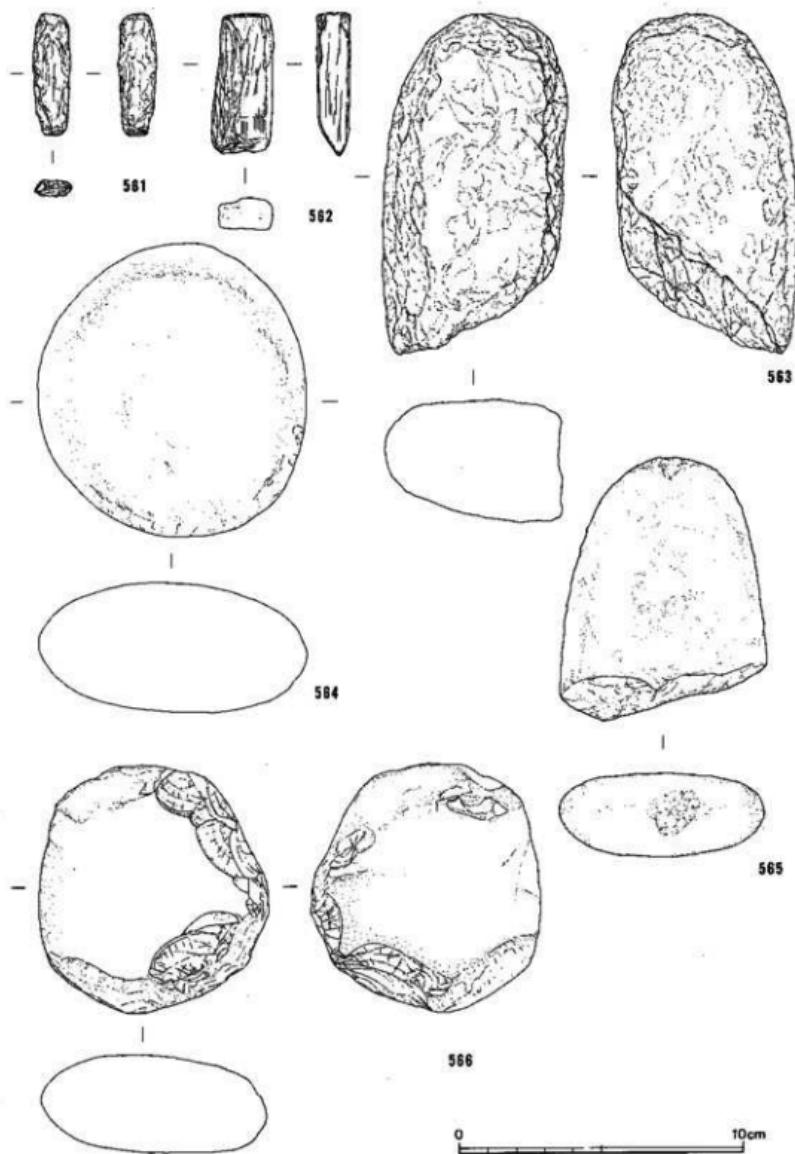
第43図 第VII層出土遺物



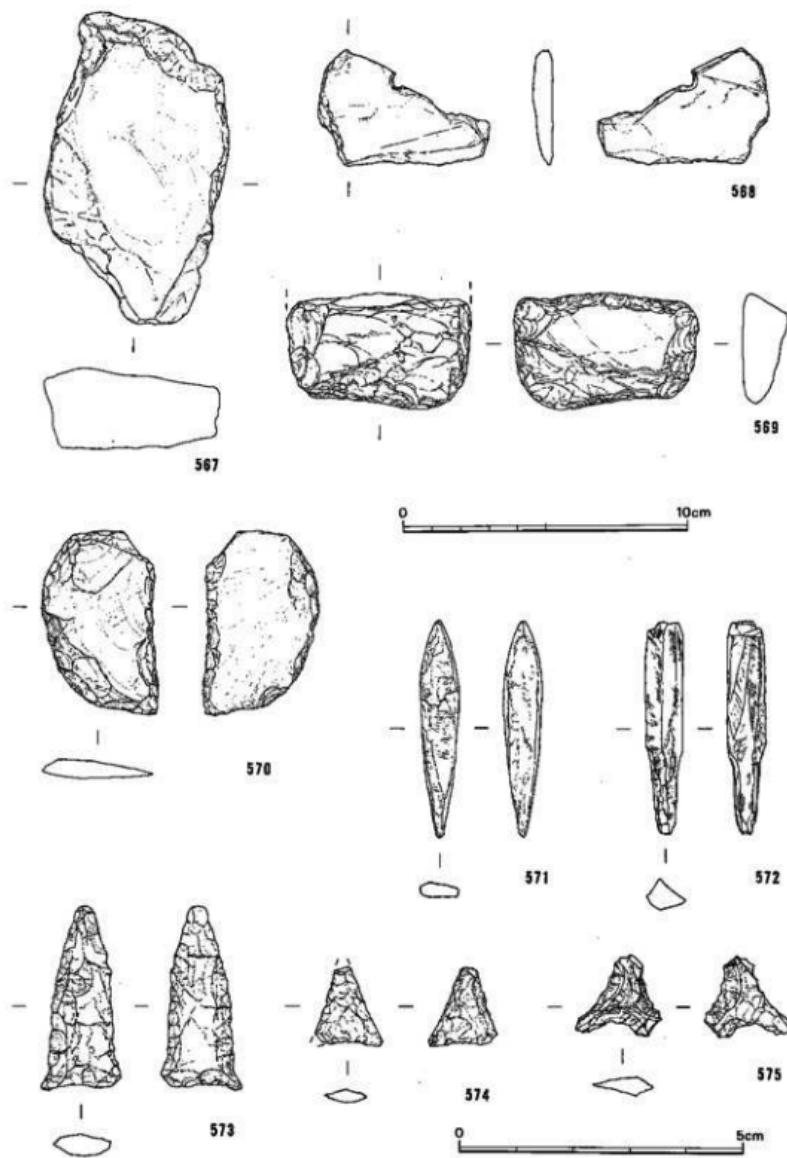
第44図 第VII層出土遺物



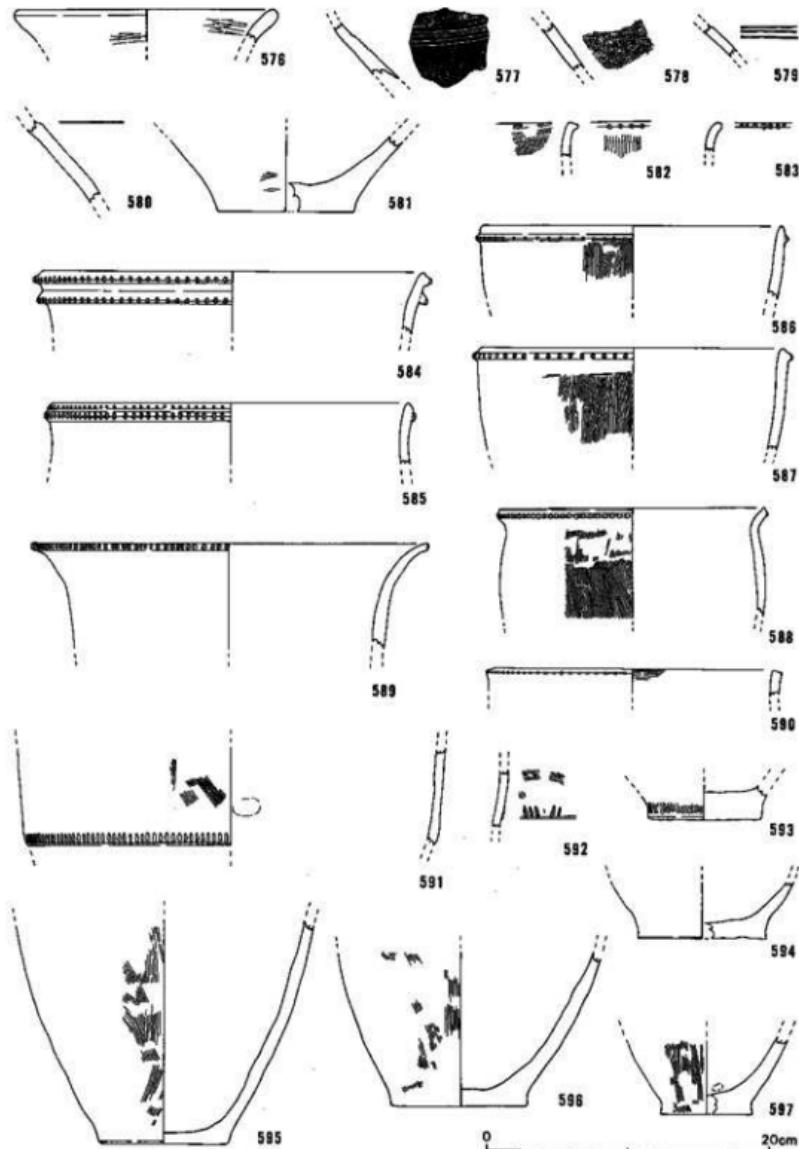
第45図 第VII層出土遺物



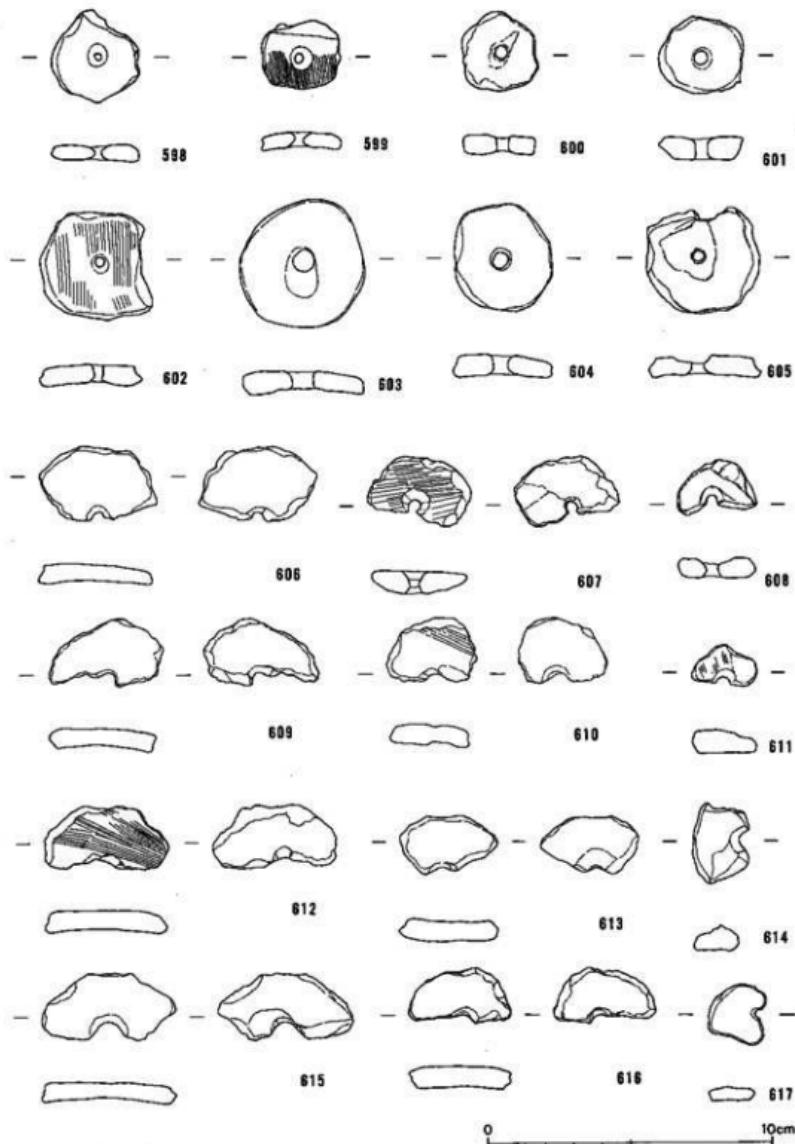
第46図 第VII層出土遺物



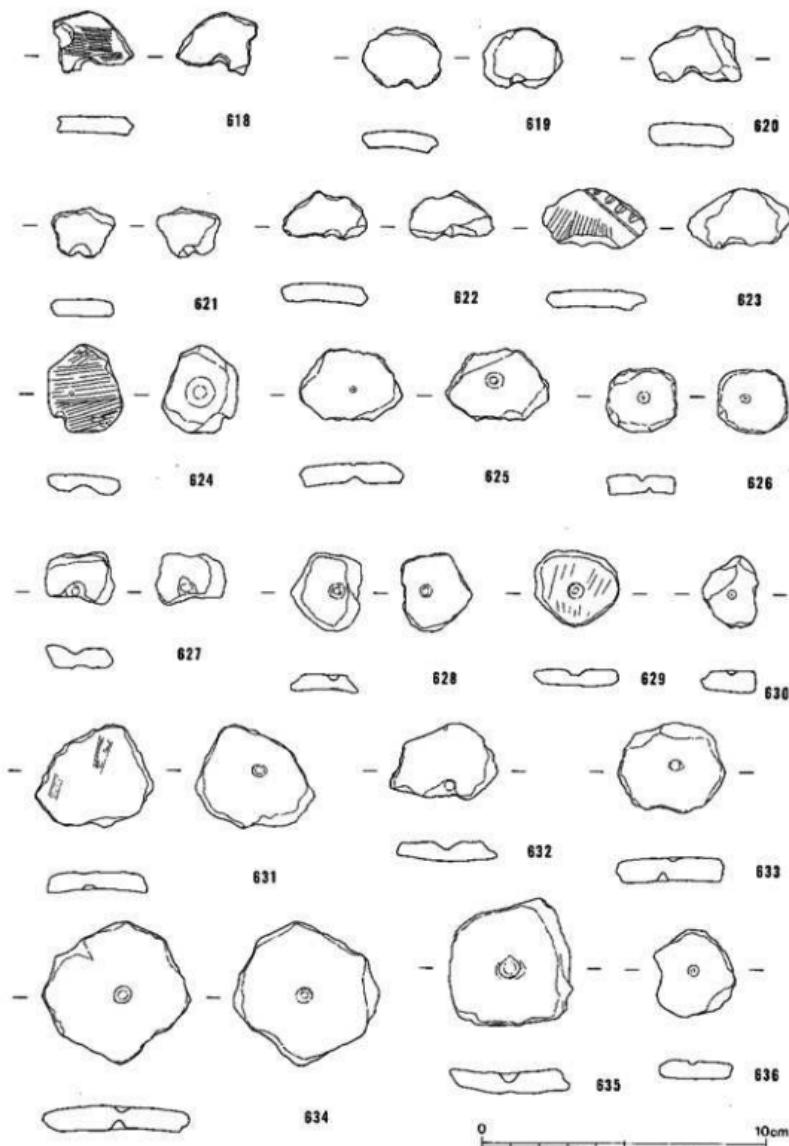
第47図 第VII層出土遺物



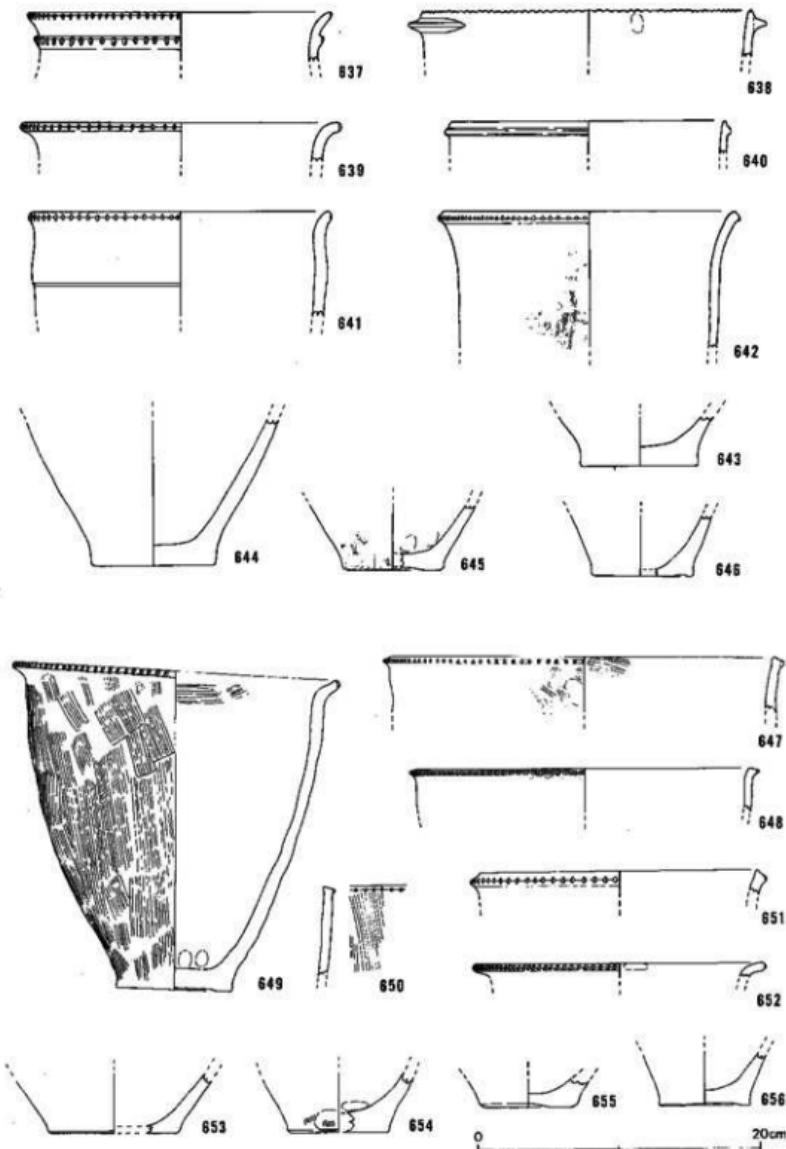
第48図 ST 1 出土遺物



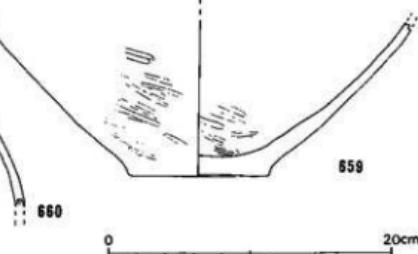
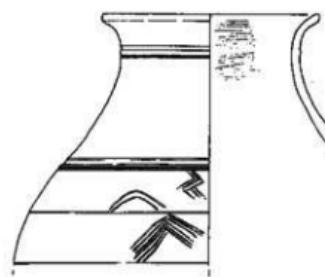
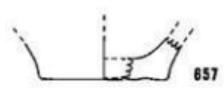
第49図 ST 1出土遺物



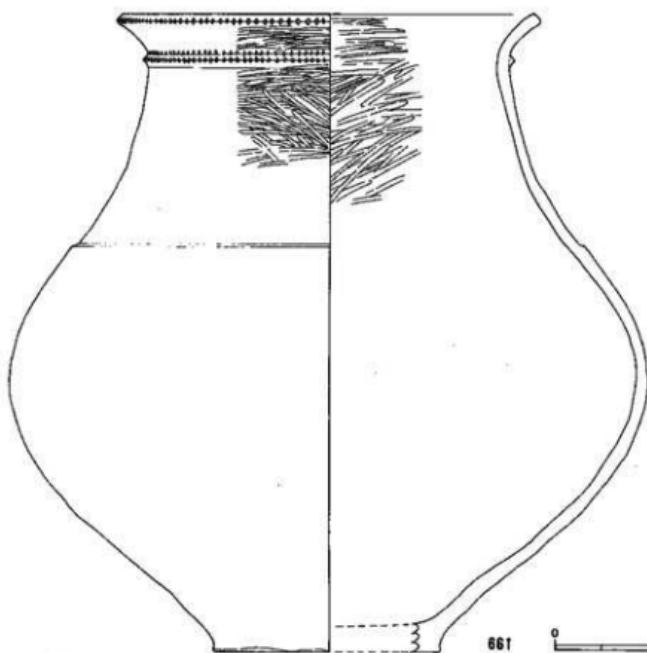
第50図 ST1 出土遺物



第51図 SK 1・2 出土遺物

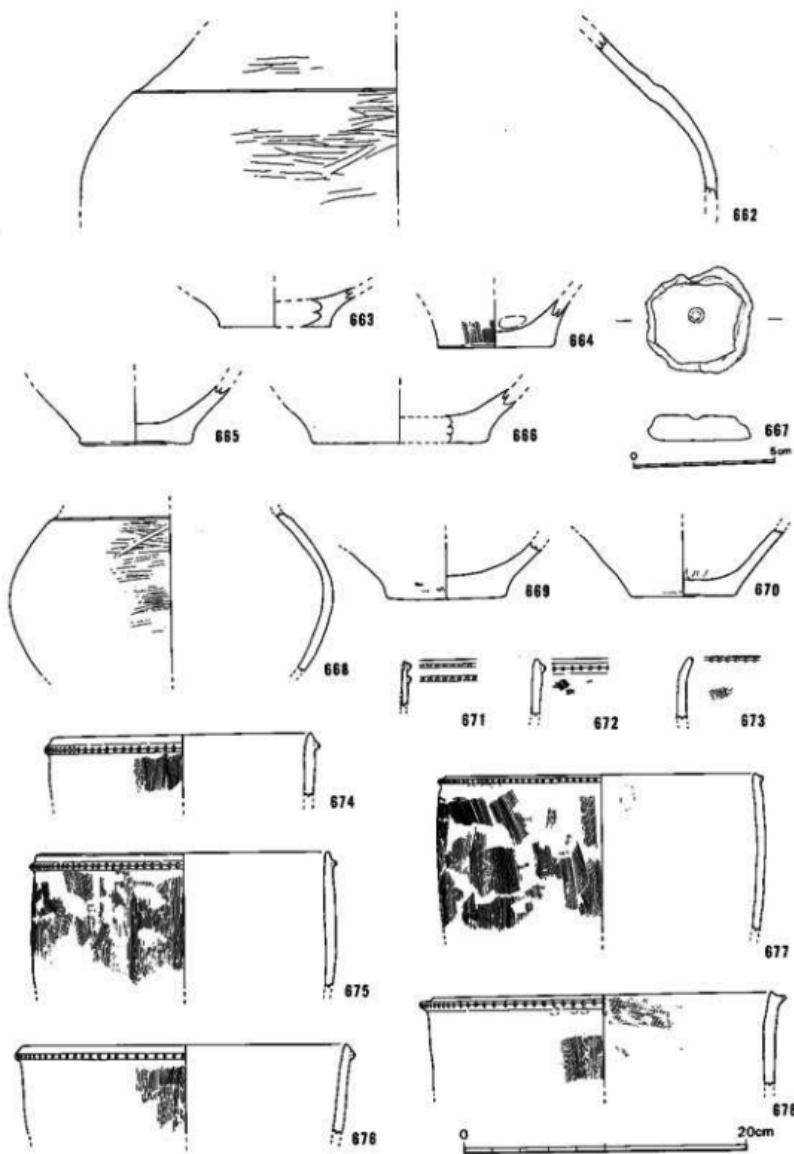


0 20cm

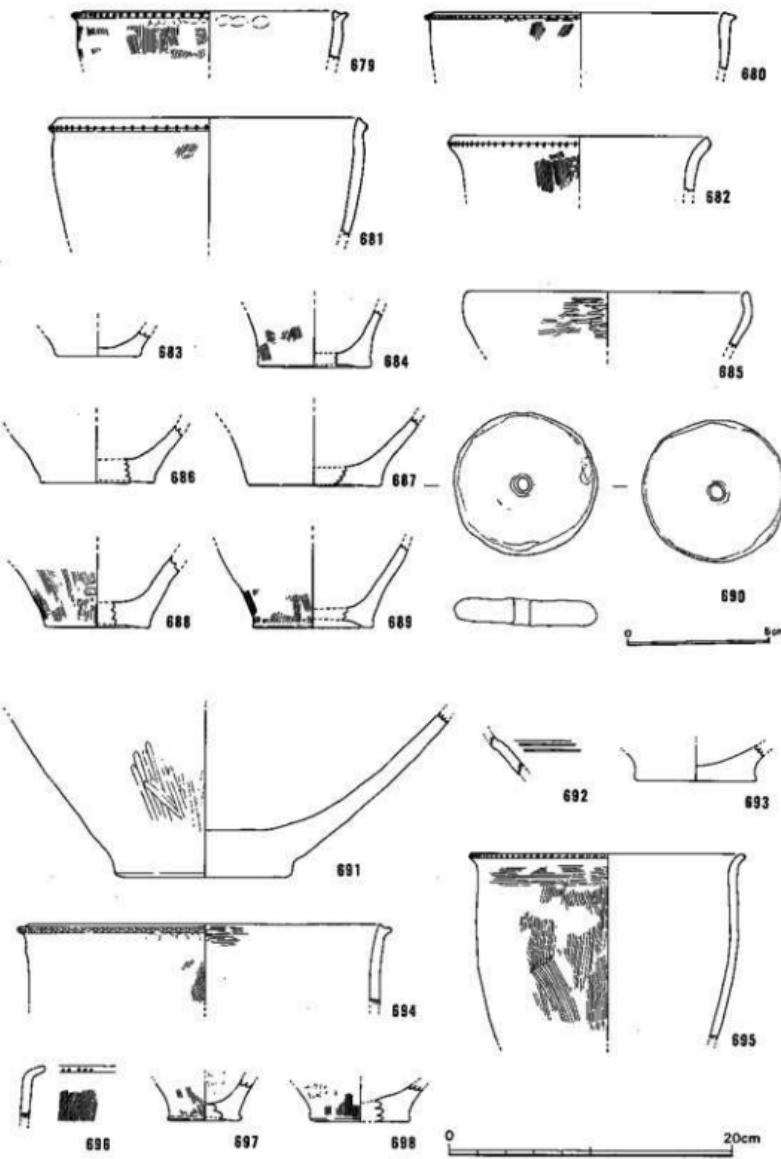


0 15cm

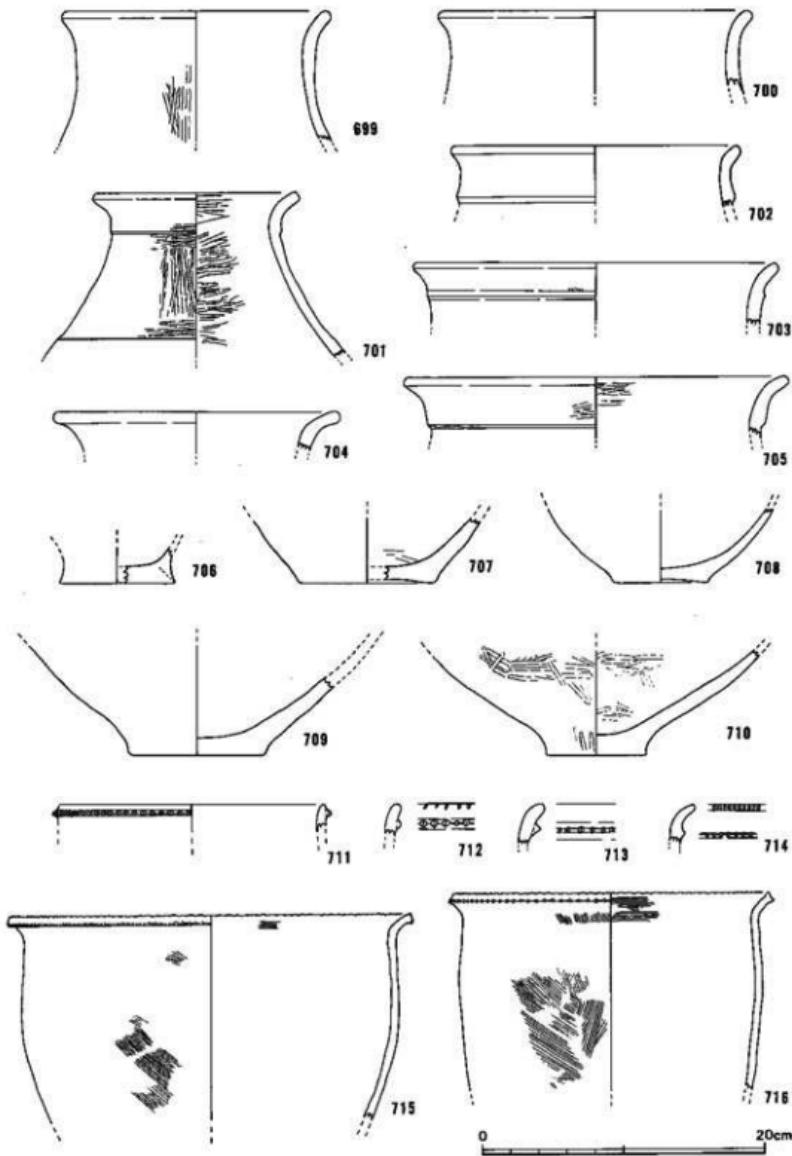
第52図 SK 3～5 出土遺物



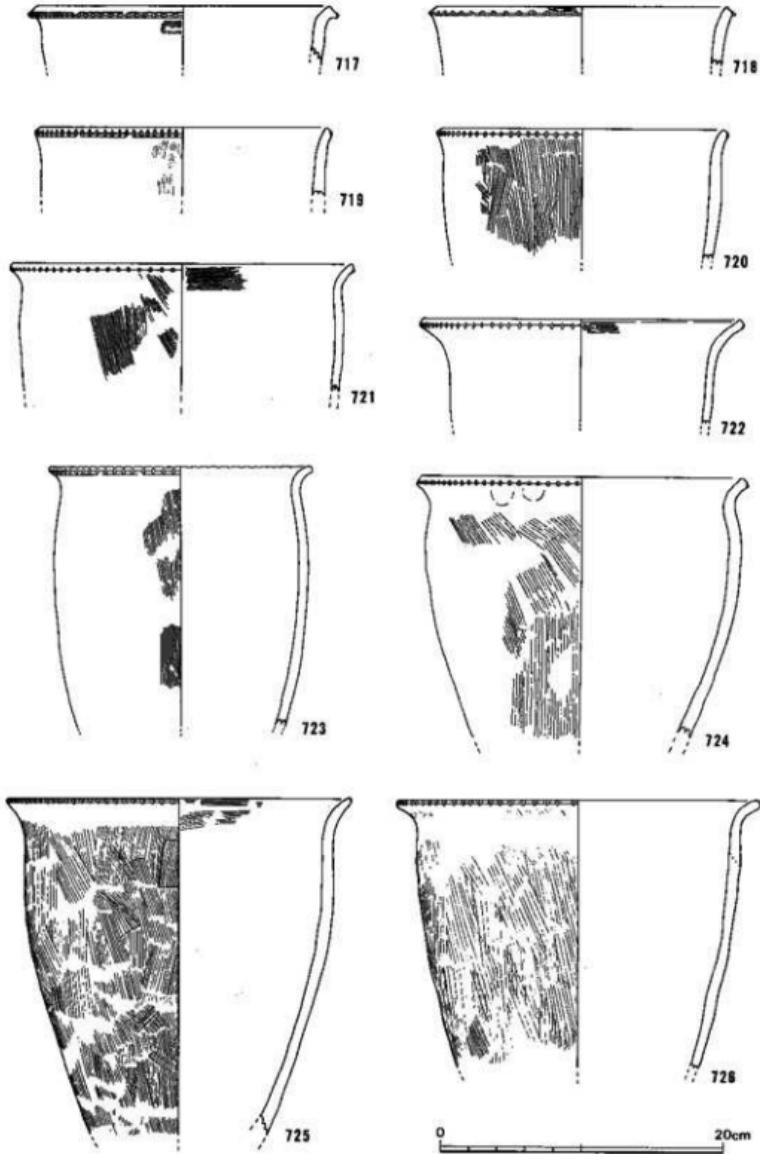
第53図 SK 4・6出土遺物



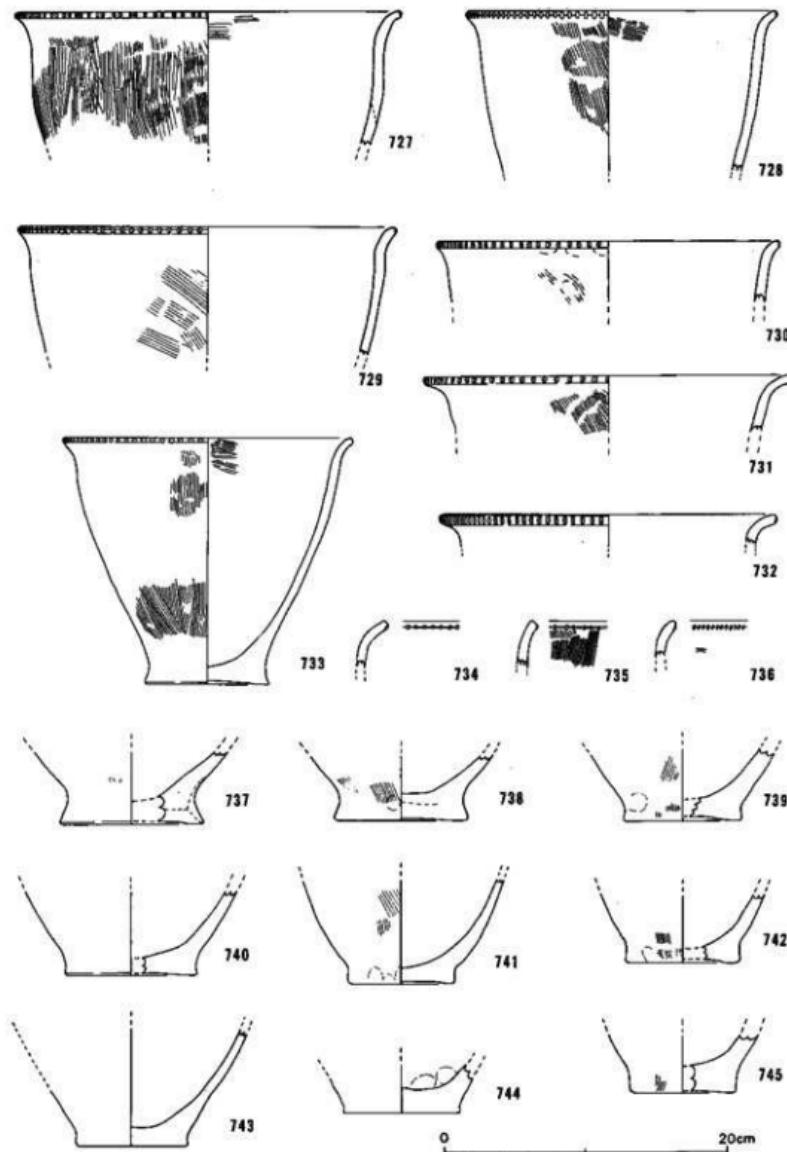
第54図 SK 8・9 出土遺物



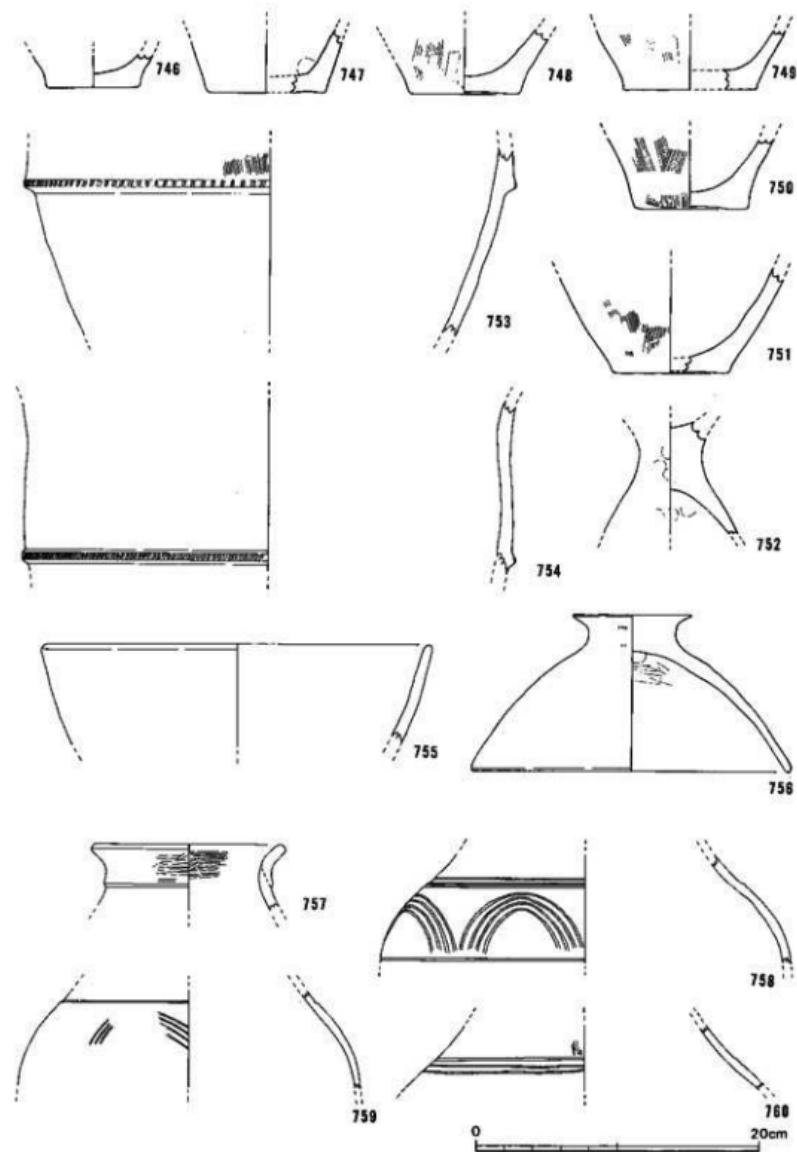
第55図 SX 1出土遺物



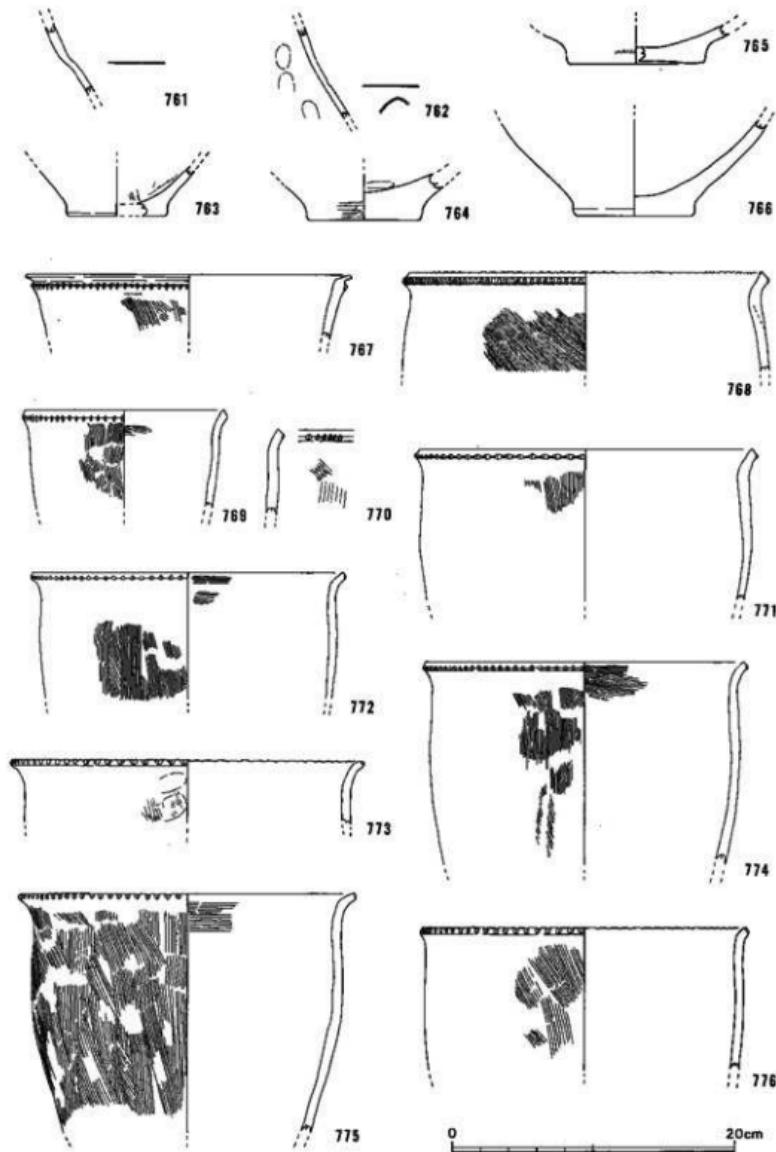
第56図 S X 1 出土遺物



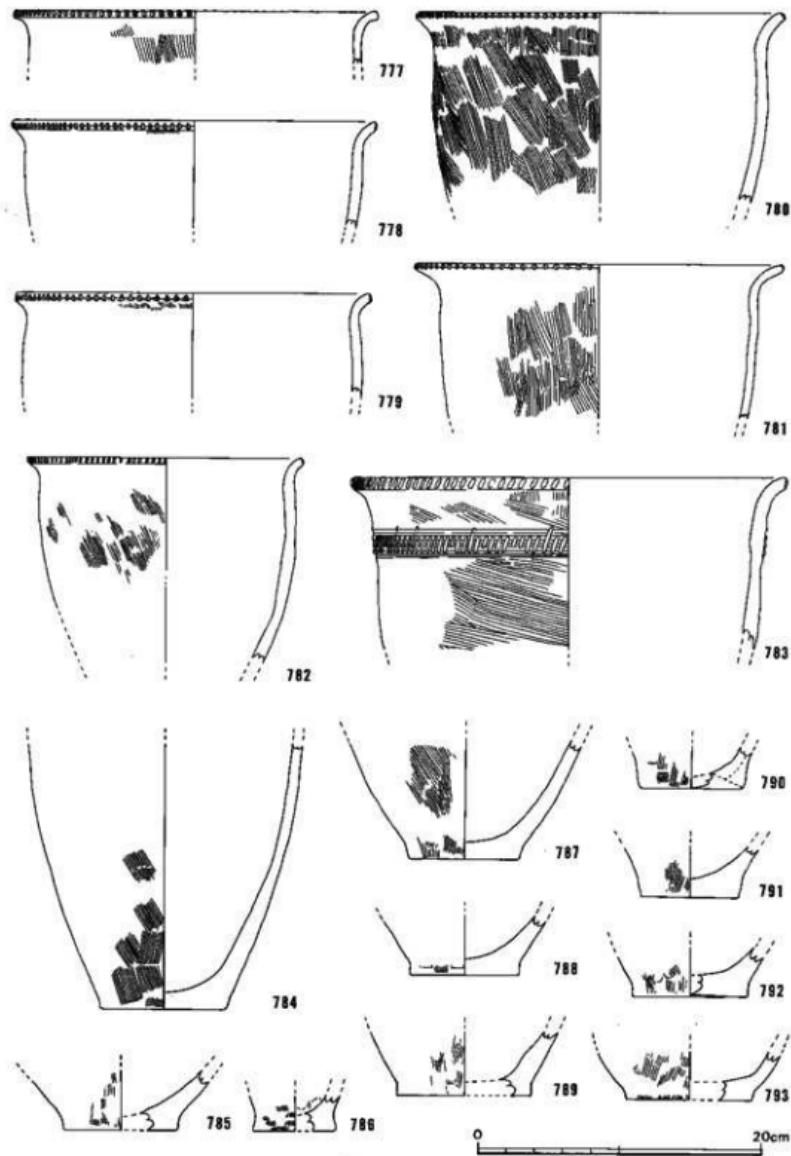
第57図 SX 1 出土遺物



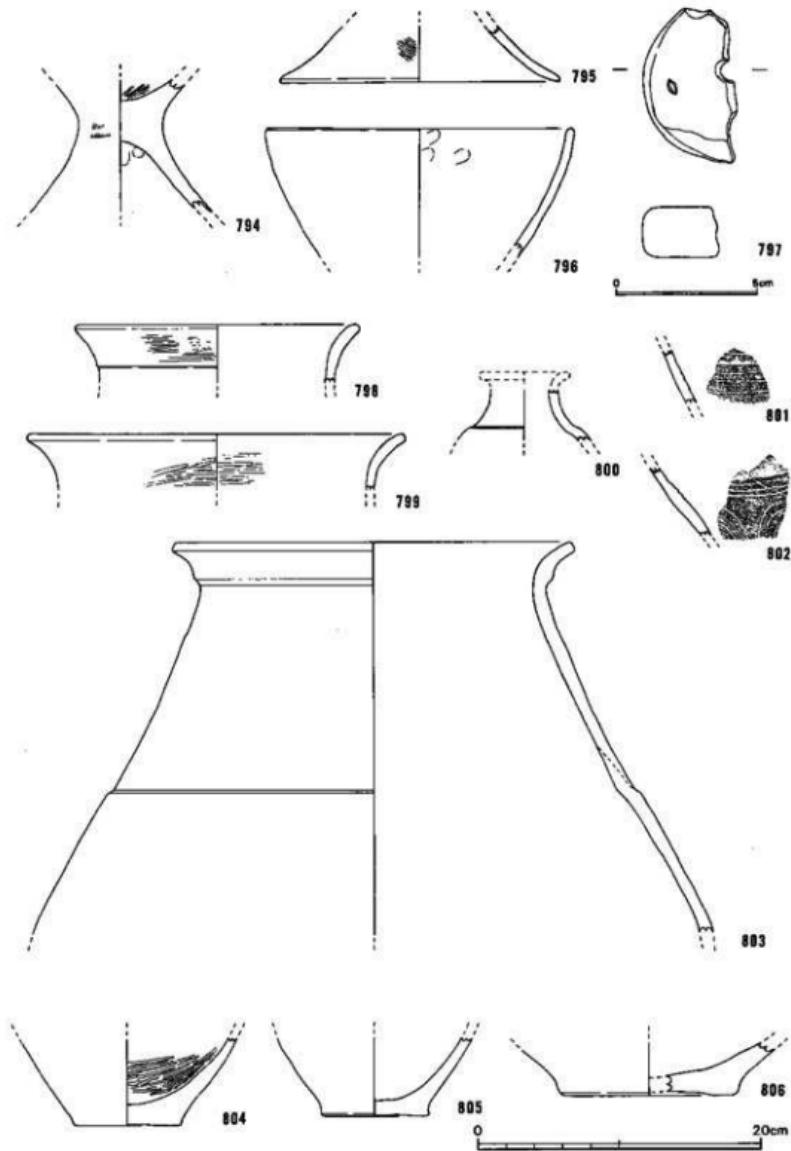
第58図 SX1・2出土遺物



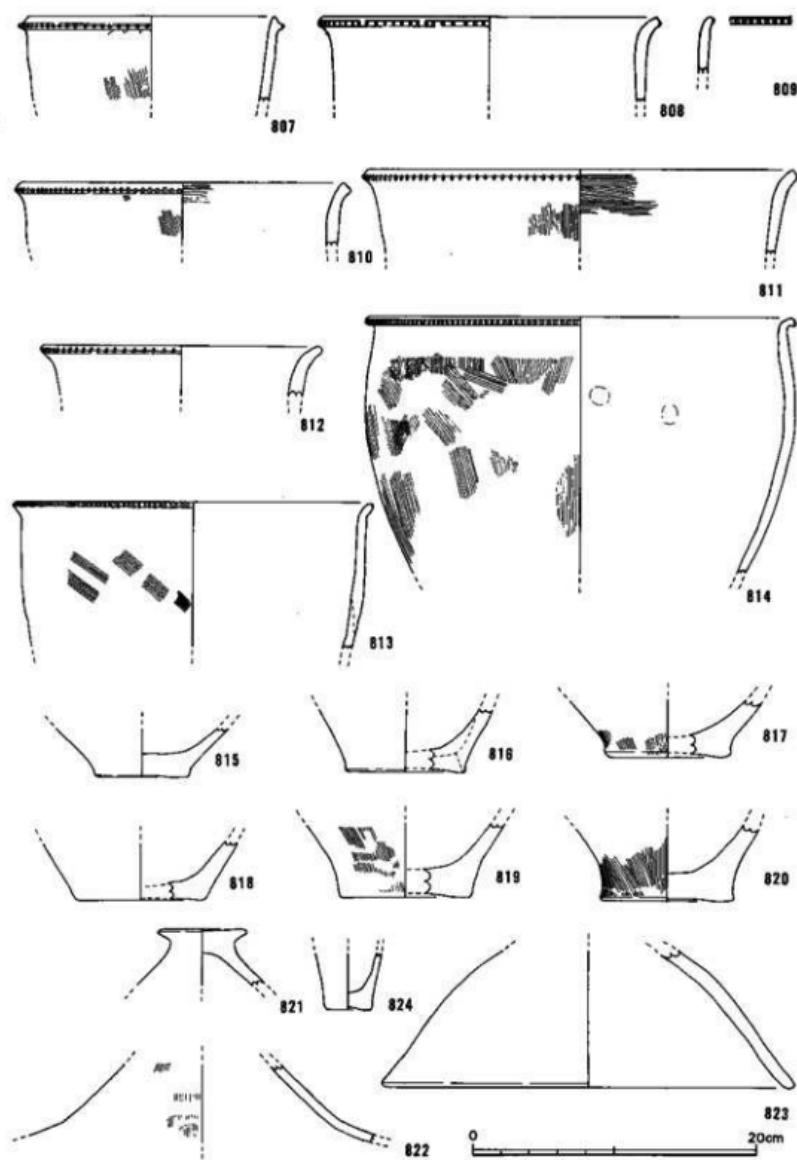
第59図 SX 2 出土物



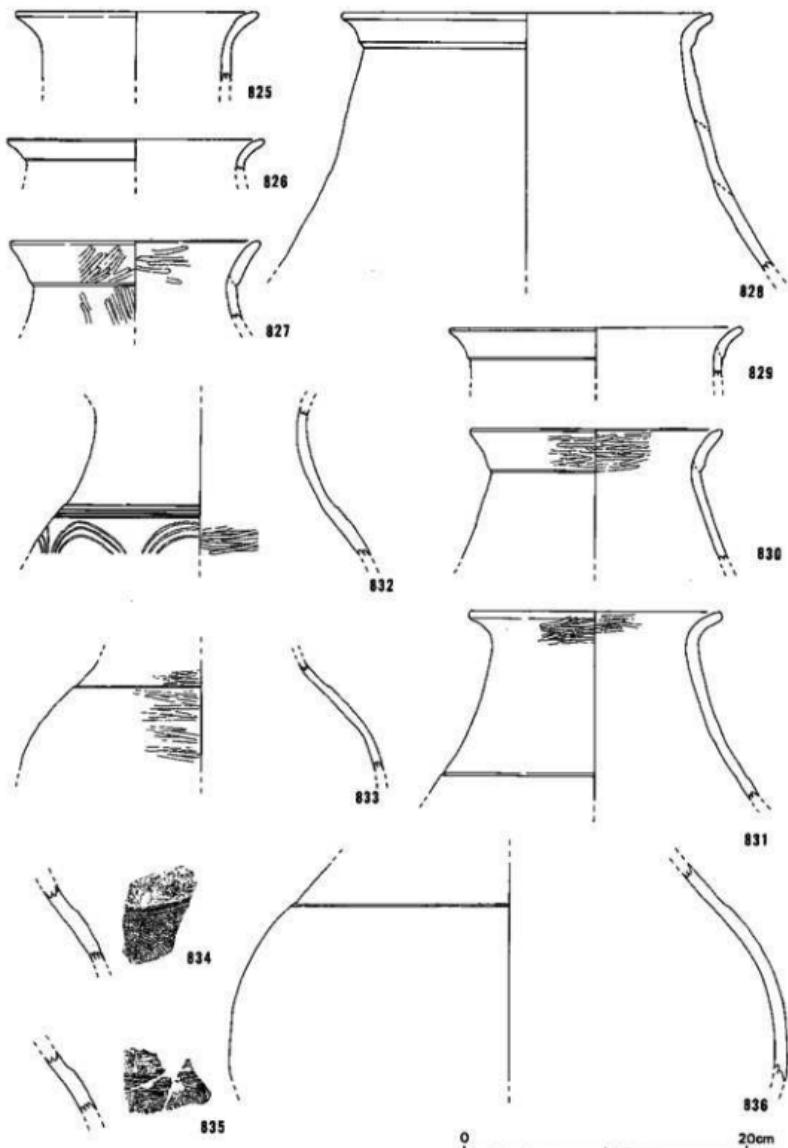
第60図 SX 2 出土遺物



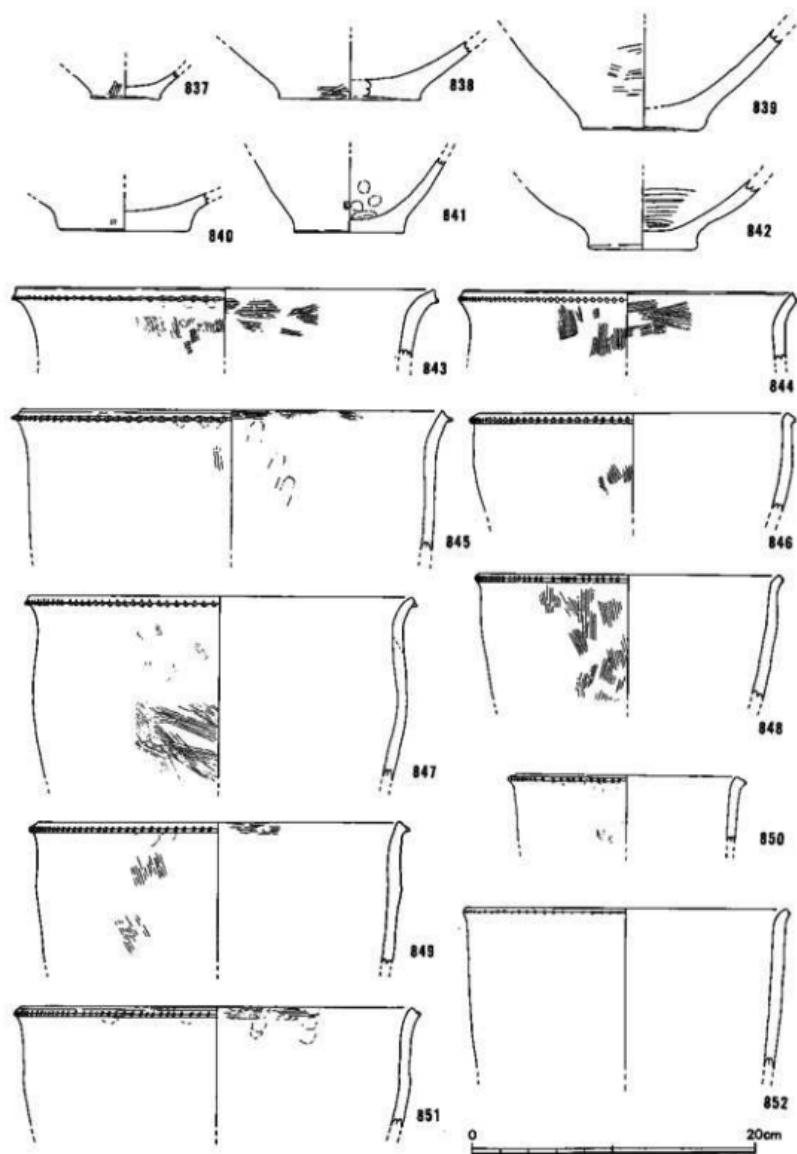
第61図 SX 2・3 出土遺物



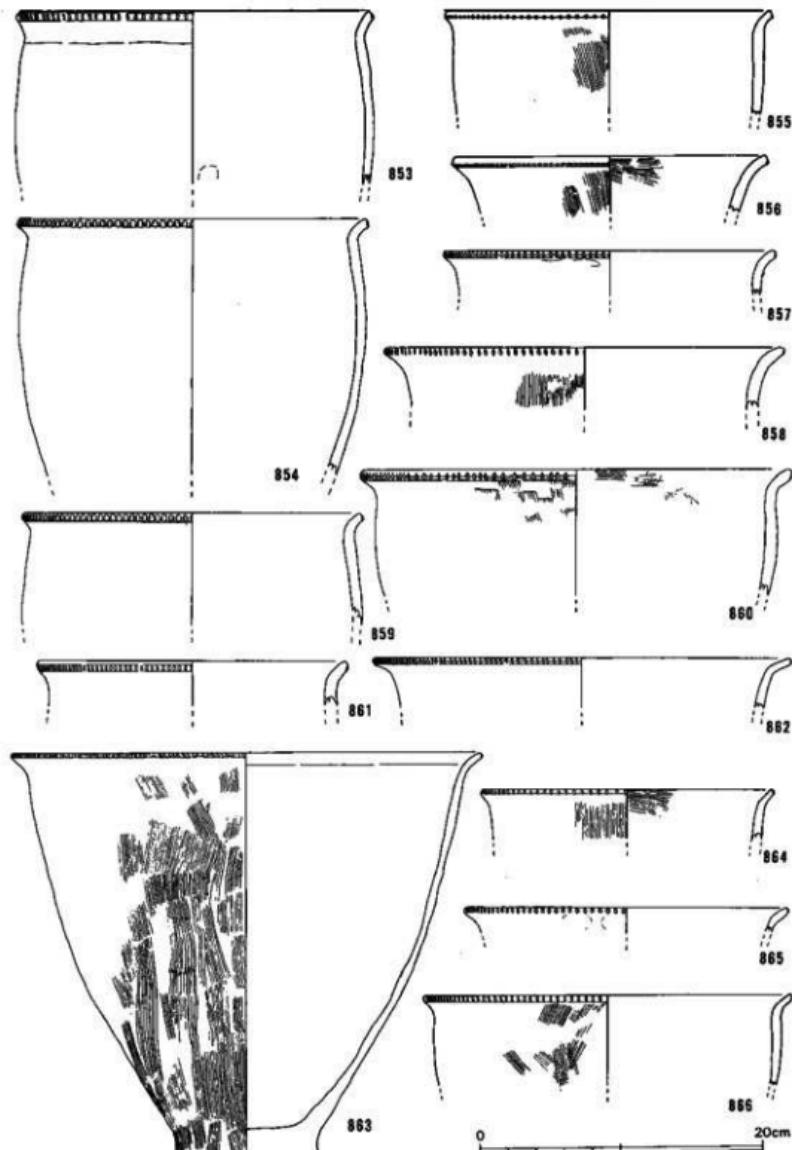
第62図 SX 3 出土遺物



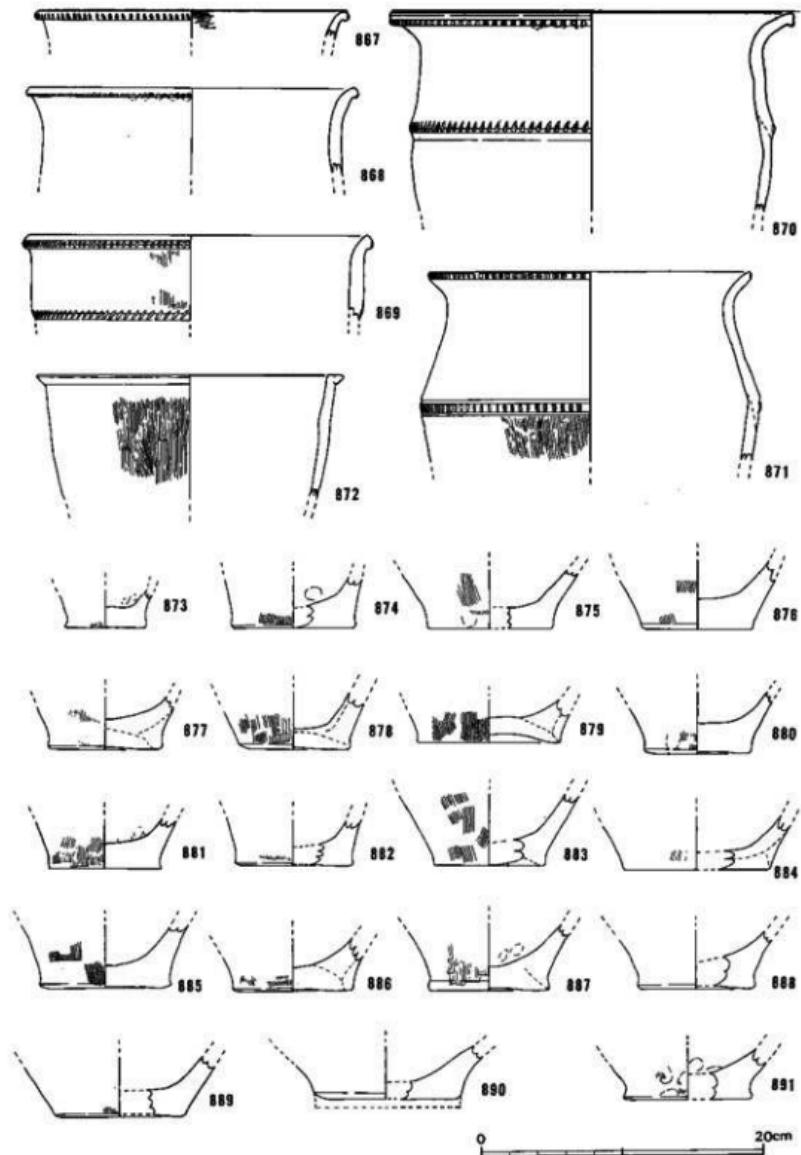
第63図 SX 4 出土遺物



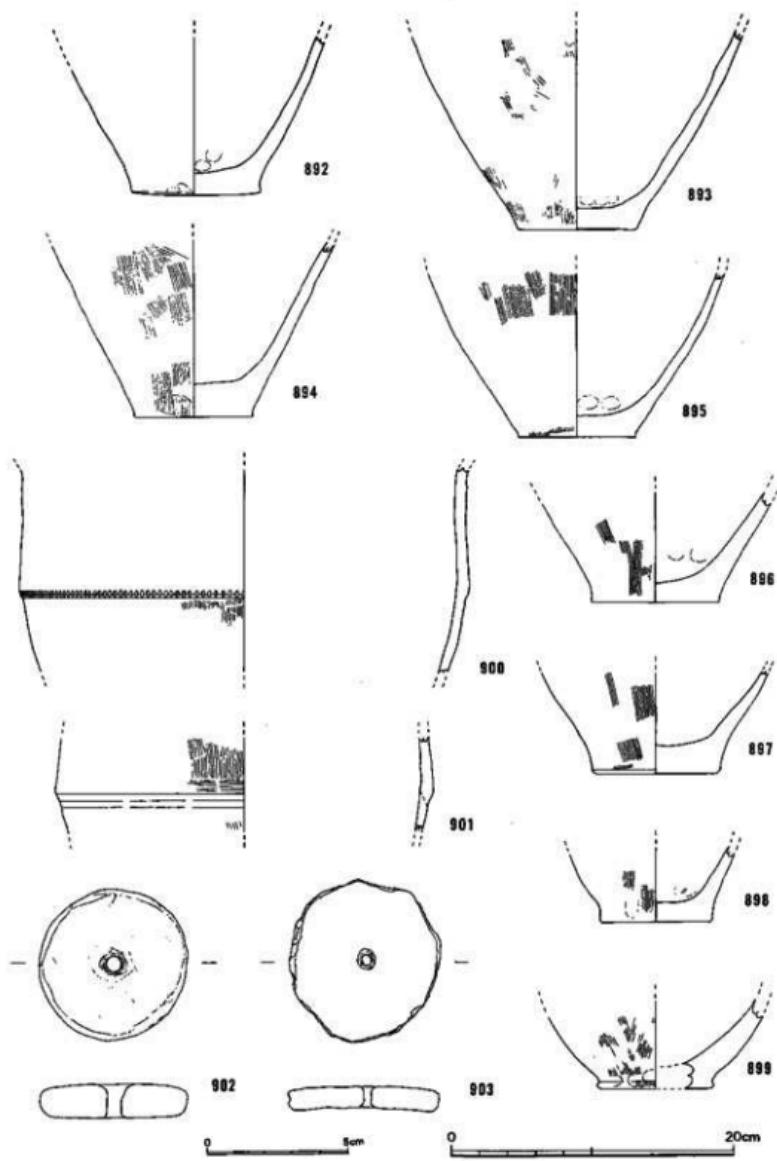
第84図 SX 4 出土遺物



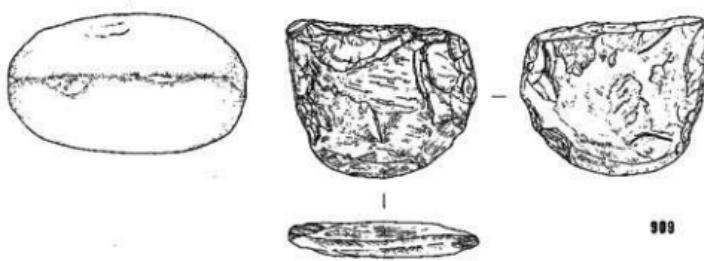
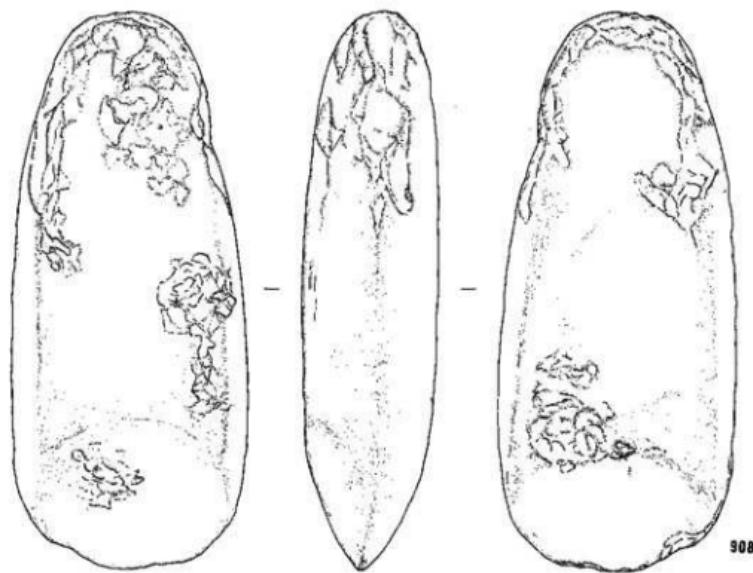
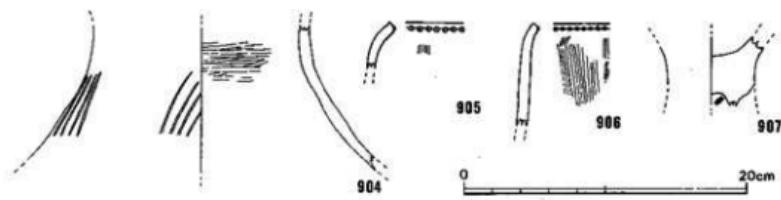
第65図 SX 4 出土遺物



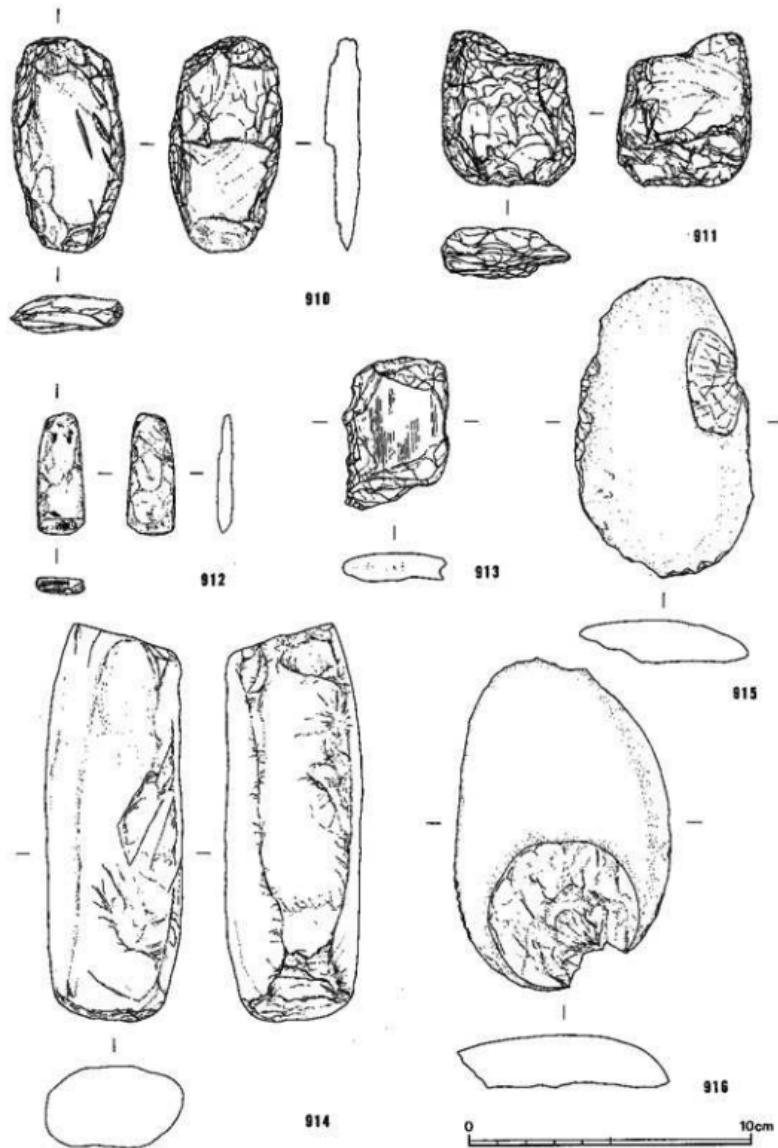
第66図 S X 4 出土遺物



第67図 SX 4 出土遺物



第68図 ST1、P1~3出土遺物



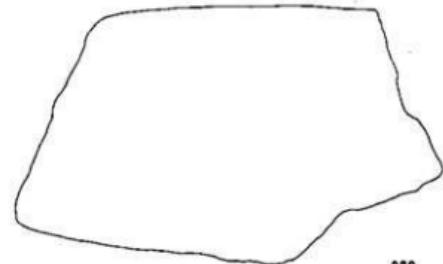
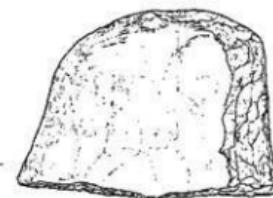
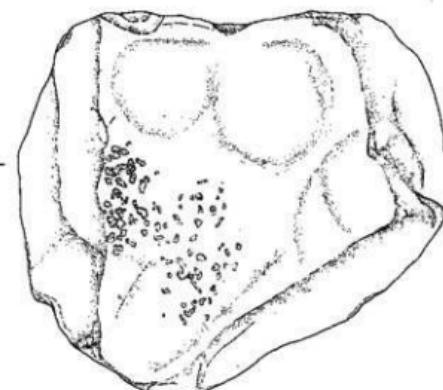
第69図 ST 1、SX 2~4 出土遺物



917



918

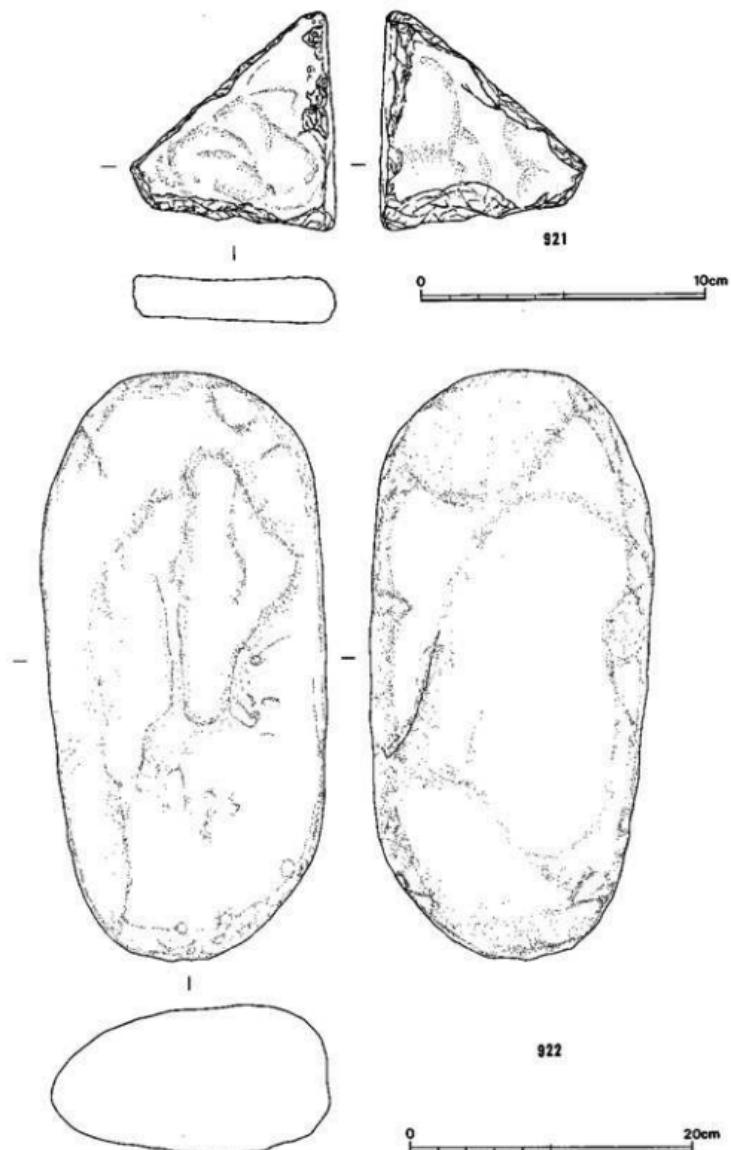


920

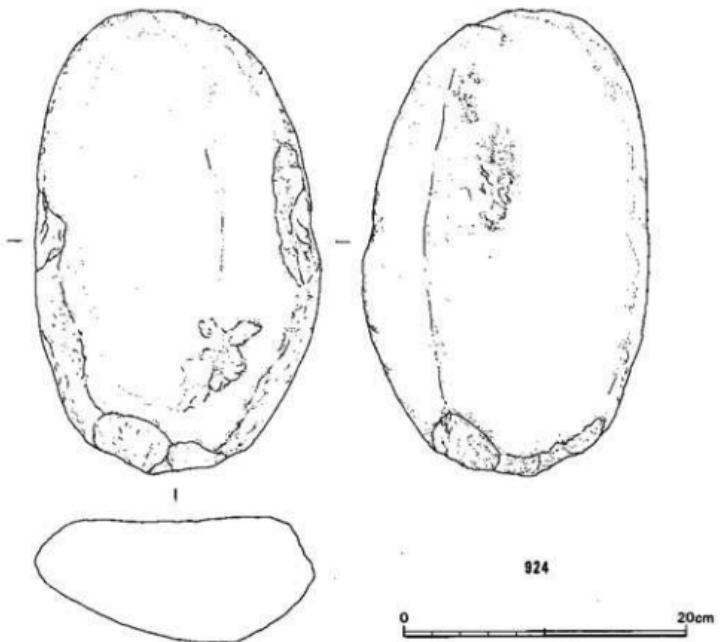
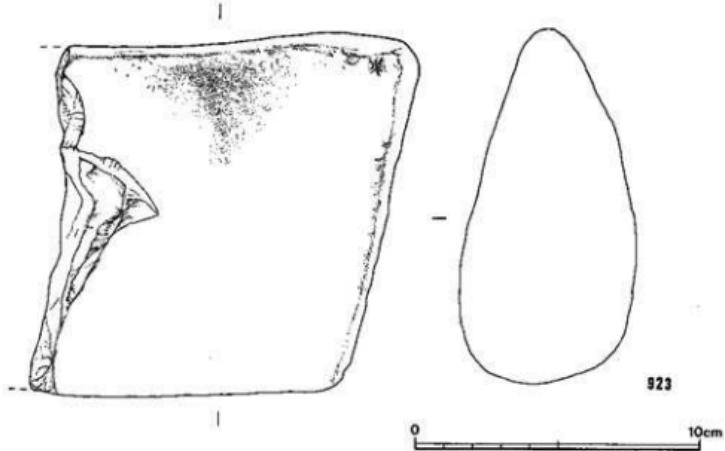
0 20cm

0 10cm

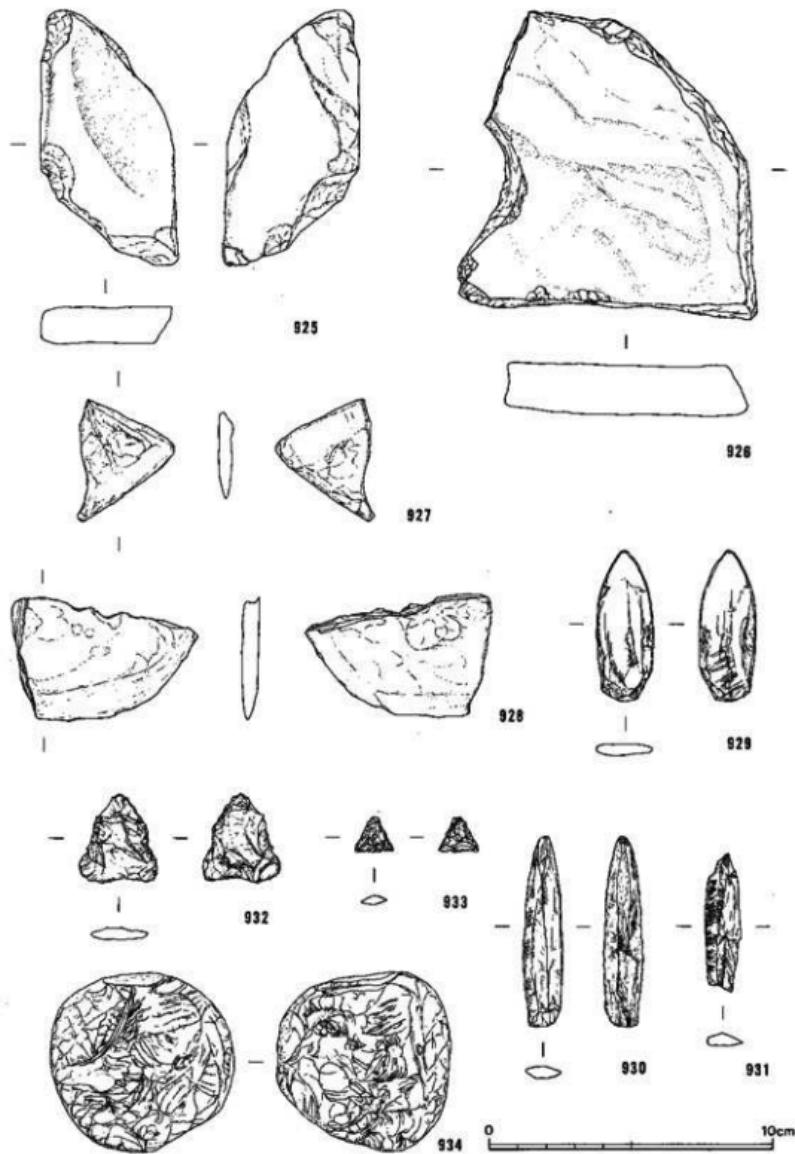
第70図 ST1、SX3出土遺物



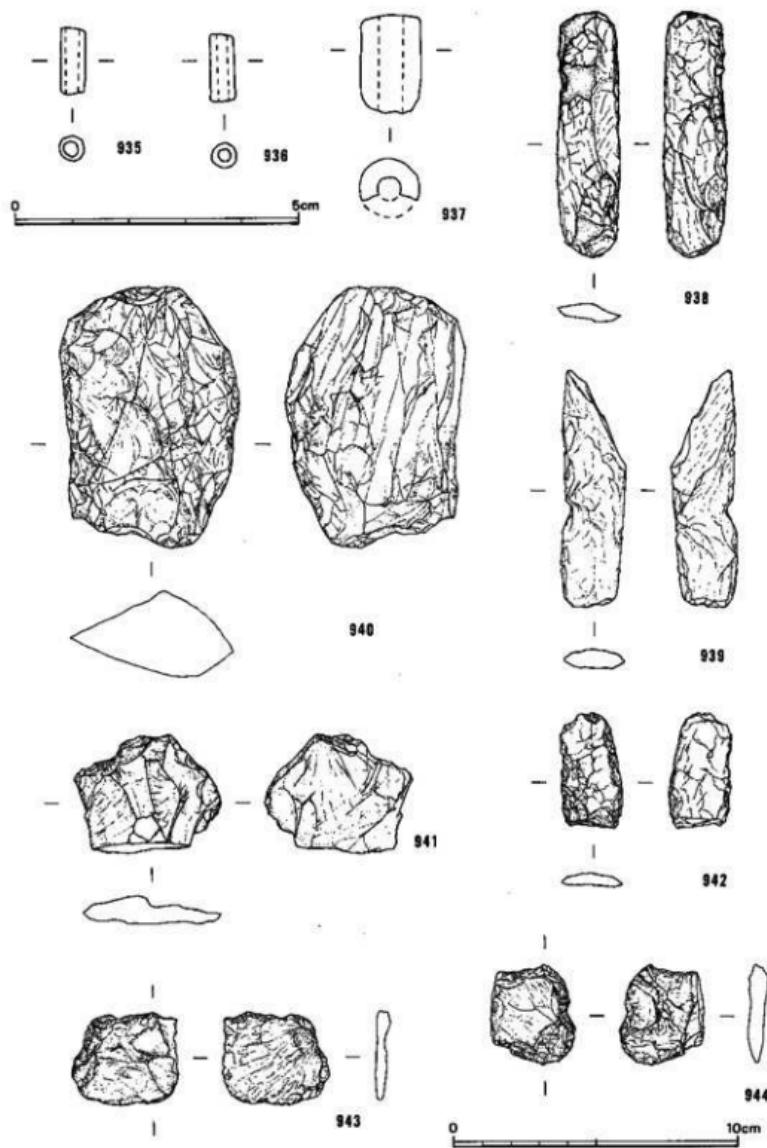
第71図 ST 1、SX 4 出土遺物



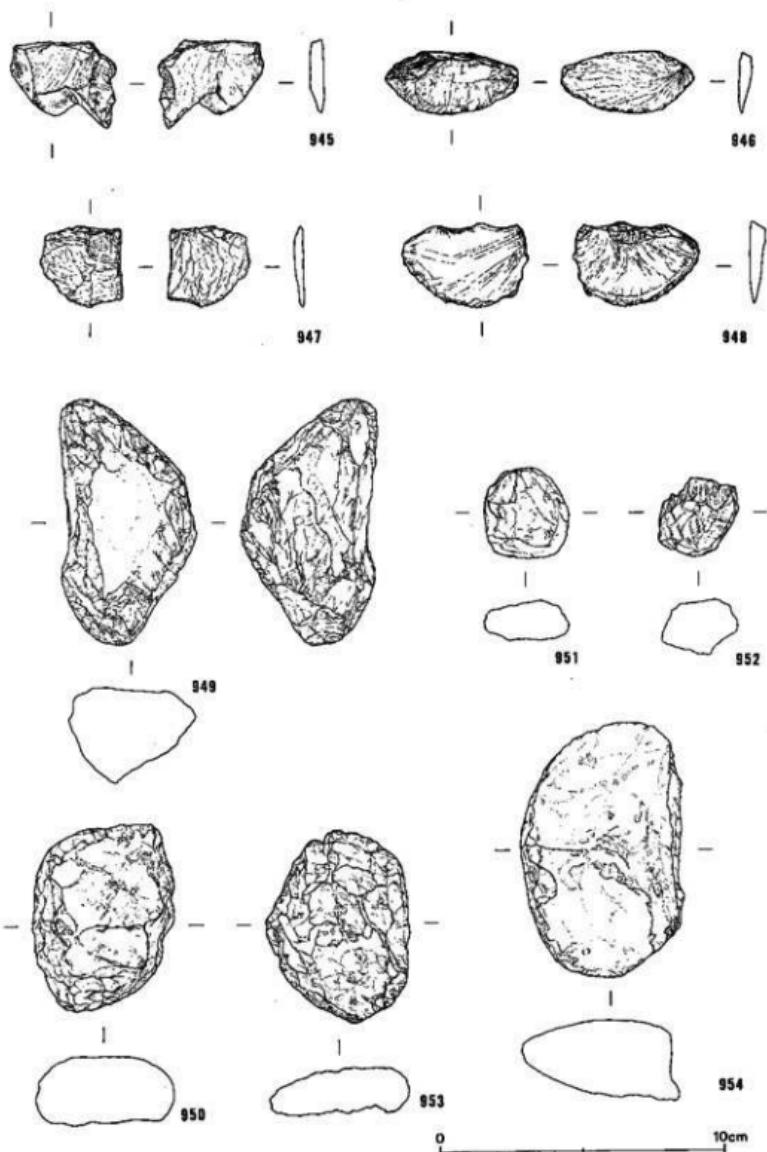
第72図 ST 1、SK 9出土遺物



第73図 ST 1、SK 6、SX 1・2・4 出土遺物



第74図 ST 1, SK 6, SX 1~4 出土遺物



第75図 ST 1、SK 6、SX 2・4 出土遺物

**2. Loc. 25**

## Loc. 25

### 1. 位置と調査経過

Loc.25は、田村遺跡群の南部に位置し、南側は市道に面している。西は田村川によってLoc.27と画し、東は水路によってLoc.16と、南は市道によってLoc.26と画している。東西、南北ともに約105m、面積は約11,025m<sup>2</sup>の調査区である。この調査区は南北方向に3本の畦畔が走っており、縦に細長く4つに区画されており、西から東に向けて1~4区を設定した。地目は4区が人家の跡地である以外は水田である。また字名はワカサカ内と呼ばれている。

調査は各区にトレンチを設定することから始めた。1区は南北方向に幅4m、長さ20mのTR1、TR1に直交する形で幅4m、長さ12mのTR2、さらに南北に幅4m、長さ25mのTR3を設定した。2・3区については南北に幅4m、長さ100mのTR4・5と、東西に幅4m、長さ44m、32m、36mのTR6~8を設定した。4区はE4のグリッドポイントより東西に幅4m、長さ32mのTR9、南北に幅4m、長さ24mのTR10を設け、その南に東西に幅4m、長さ20mのTR10・11及び南北に幅4m、長さ32mのTR12を設定した。調査期間は昭和56年5月から10月と昭和57年11月から昭和58年3月であり、合計11ヶ月間である。調査面積は弥生時代、中世の面積を合わせ9,403m<sup>2</sup>である。

### 2. 調査概要

1区はトレンチ調査の結果、表土層以下1m以上の深さにまで客土層がみられ、その下は砂礫層を形成しており遺構及び遺物包含層は全く認められない。

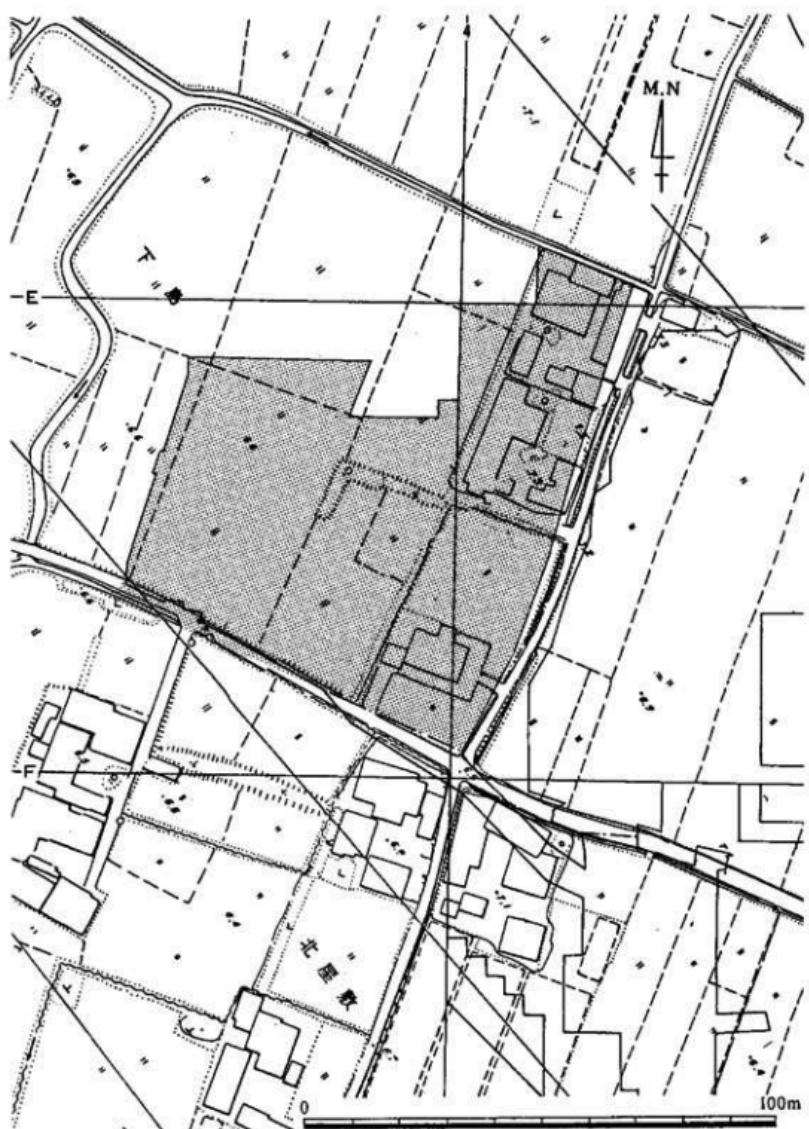
2・3区は耕作土、床土を除去すると、南側2%の範囲から中世の屋敷を閉む大溝、土塙、井戸、多数のピット群が検出された。また3区の南部3%の範囲では、中世遺構検出面の下層より弥生時代前期の住居址、土塙等が検出された。

4区は人家の跡地であるために現代の攪乱に遭遇しているが、3区から続く中世の大溝や、土塙、多数のピットを検出した。さらに下層では、ほぼ全面に弥生時代前期の竪穴住居址、掘立柱建物址、土塙、貯藏穴、ピットが確認されている。

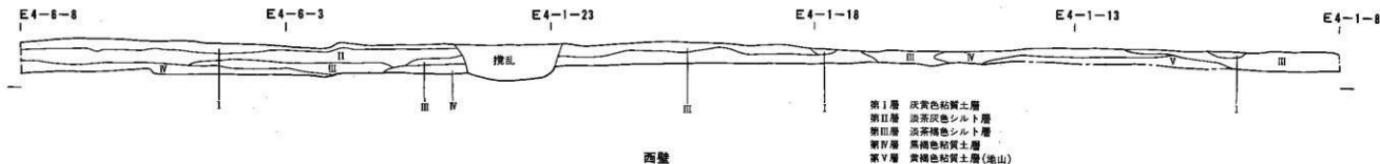
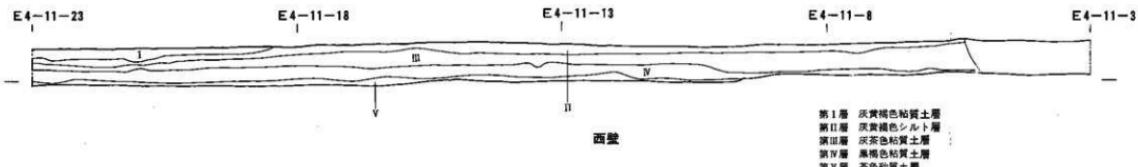
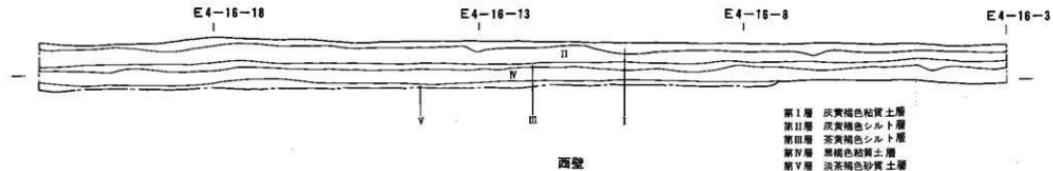
### 3. 層序と出土遺物（3・4区）

Loc.25の基本層序は以下のとおりである。

- 第Ⅰ層 灰黄褐色粘質土層
- 第Ⅱ層 灰黄灰色～淡茶灰色シルト層
- 第Ⅲ層 茶黄褐色～淡茶褐色シルト層
- 第Ⅳ層 淡茶褐色砂質土層
- 第Ⅴ層 黄褐色粘質土層



第76図 調査区設定図



第77回 調査区セクション

第77図は南北セクションベルトの西壁で表土を除去した後の基本層序であり、E 4-1-8が北端で、E 4-16-18が南端である。第II層及び第III層が中～近世の遺構検出面で、第IV層の黒褐色粘質土層が弥生時代前期の遺物包含層を形成しており、第V層の黄褐色粘質土層が弥生時代前期の遺構検出面で、地山を形成している。図を見ればわかるように、E 4-1-13付近では第V層が6.30m以上の高度を有しているが、南へ行くにしたがって徐々に標高を下げ、E 4-11-23以南では6.00m以下になり、さらにE 4-16-8以南では傾斜角度を増して淡茶褐色砂質土層の下に入り込んでしまう。東西方向の層序は図示していないが、全体図のS T 2、S K 13、S T 4・5を結ぶライン以西は第IV・V層が急傾斜で下降し、2区の中世検出面下層の砂礫層中に入り込んでいる。そしてこの砂礫層は深さ3m以上であり、その層中より流れ込みと考えられる弥生前期土器の出土がみられる。したがってLoc.25の遺構は、北東方向から南西方向に伸びる自然堤防上に立地していることを示している。またLoc.27のE 2-10-19付近、高度6.00mにおいて前期IIの段階の貯蔵穴を確認している。したがってLoc.25の3・4区からLoc.27までの約100mは大きな落ち込み（流路）であったことが判明した。

包含層の第IV層出土遺物は、多量の土器と石器（257、258等）である。土器は細片が多く、図示できたものは壺（1）、甕（2、3）、蓋（4）、鉢（5、6）、纺錘車（7、8）である。（257、258）の石斧は地山直上であり、ほぼ当時の生活面上からの出土である。

#### 4. 遺構と遺物

##### 豎穴住居址

###### S T 1

調査区の北寄りにあり、豎穴住居址の中で最も北に位置する。S T 1は、他の住居址の検出標高等からみれば削平とは考えられず、平地住居と考えたい。中央ピットと6個の主柱穴間距離がS T 3と近似することから、S T 3と同様の規模の円形住居址が考えられる。中央ピットの主軸方向はN-60°-Eを示し、隅丸

方形の平面形を有する。長径124cm、短径116cm、深さ26cmを測り、断面形は逆台形を呈する。中央ピットの両脇には径26cm、深さ24cmと、径20cm、深さ24cmの小ピットが付随する。埋土は第I層黄色シルト、第II層黒褐色粘質土で、第I層は無遺物層、遺物は第II層に集中している。土器は大型壺底部（85）、甕口縁部（86）の他細片が21点出土している。石器は砾石（297）の他に、床面及び壁よりチャートの石核1点、叩石4点、フレーク5点が出土している。主柱穴間の距離は、P 1-2が2.98m、P 2-3が2.40m、P 3-4が2.80m、P 4-5が2.24m、P

第18表 S T 1 ピット計測表

No.	径(cm)	深さ(cm)	備考
P 1	24×32	36	主柱穴
P 2	50×41	41	〃
P 3	52×47	37	〃
P 4	66×48	37	〃
P 5	26	47	〃
P 6	58×50	36	〃

5-6が2.64m、P 6-1が2.66mを測る。前期Iの住居址である。

### S T 2

調査区の北西で検出した隅丸方形の竪穴住居址である。北西壁2.88m、北東壁2.90m、南東壁2.80m、南西壁3.00mの長さを測り、床面積は8.7m<sup>2</sup>である。なお長軸方向はN-47°-Wである。

長軸にはほぼ直交する形でS D 1に切られている。

住居址の北東及び南東壁側にはテラス状の遺構がついている。壁高は0.14~0.15m程度で、各壁ともに斜めに立ち上っている。床面は平坦でなく部分的にゆるい凹凸がみられ、北西隅及び北東隅には20~30cm大の河原石が置かれていた。

埋土は第I~IV層からなり、第II層が最も厚く堆積している。ピットは住居址内に4個、テラス状部に2個の計6個である。壁溝は存在しない。

出土遺物は土器片35点、石器3点である。出土状況は第II層からの出土が最も多く、床面からは2点のみである。実測可能な土器は甕(53)1点である。石器は(300、308)の他、第II層中より河原石が10数個出土している。前期Iの住居址である。

### S T 3

S T 2の南東8.20mに位置し、直径7.20m、床面積40.7m<sup>2</sup>を測る円形住居址である。南部に2ヶ所の近代の攪乱が見られる他は、比較的の残存状況は良い。壁の高さは0.16~0.28mで斜めに立ち上っている。床はほぼ平坦面をなしている。埋土は第I~III層からなり、床面には大小60数個のピットが存在する。主柱穴はP 6-7・14・20・24・26のグループと、P 13・22・27・31のグループに分けることができる。前者の柱穴間距離はP 6-14及びP 14-24が2.52m、P 24-26が2.34m、P 26-20が2.72m、P 20-7が2.44m、P 7-6が2.36mで、平均すると2.48mを測る。後者のグループは、P 13-22及びP 13-31が2.00m、P 22-27が1.68mを測る。これらの主柱穴は中央ピットと壁とのほぼ中間に位置している。また主柱穴P 6-31・13・14・22に対応する形で壁を突出させたP 1-2-16-30が掘られている。これら突出型ピットは、主柱穴よりも浅く床にさえ達していないものもある。これらのうちP 30の底には、礎盤と考えられる20×10cmのやや扁平な河原石が置かれている。

10個の主柱穴中で柱根跡が確認できたものはP 13-24で、埋土の差から柱の大きさは18~20cmほどのものであると考えられる。

P 10は中央ピットで、長軸方向はN-46°-Eを測り、隅丸長方形に近い平面形を有し、両脇にP 1・

第19表 S T 2 ピット計測表

No.	径(cm)	深さ(cm)	備考
P 1	14	34	
P 2	44×28	6	
P 3	26×24	7	
P 4	14	13	
P 5	50	9	
P 6	36	20	

第20表 ST 3 ピット計測表

No	径(cm)	深さ(cm)	備考	No	径(cm)	深さ(cm)	備考
P 1	40×36	34		P 17	36×32	27	
P 2	60×44	20		P 18	32	30	
P 3	36×24	6		P 19	32×24	6	
P 4	52×32	6		P 20	20	28	主柱穴
P 5	32×16	6		P 21	32×24	16	
P 6	44×36	35	主柱穴	P 22	44	24	主柱穴
P 7	36×28	47	"	P 23	44×40	29	貯藏穴
P 8	52×32	14		P 24	40×32	53	主柱穴
P 9	44	6		P 25	52×36	4	
P 10	140×92	33	中央ピット	P 26	48	37	主柱穴
P 11	16	24		P 27	52×44	12	"
P 12	18	19		P 28	48	9	
P 13	50	26	主柱穴	P 29	40×36	8	
P 14	39	36	"	P 30	60	39	
P 15	42	6		P 31	30	28	主柱穴
P 16	52×48	33					

12の小ピットが付随している。中央ピットの東半分は段状になっているが、全体にまわっていて可能性もある。また、中央ピット周辺0.6~0.7mの範囲が堅く踏みしめられている。後述するように中央ピットからは多数のフレークや叩石が出土しており、壁は全く焼けていない。P 23からは完形の鉢(40)と石斧の未製品(263)が出土しており、屋内貯蔵穴と考えられる。P 20は隅丸長方形を呈する比較的浅いピットであるが、底の東半分に20cm大の河原石が2個並置してあった。

遺物は埋土各層より土器片345点、石器、フレーク等70数点が出土している。土器は第I層より129点(37.4%)、第II層182点(52.8%)、第III層13点(3.8%)、床面21点(6.1%)である。石器は第I層より29点(43%)、第II層30点(45%)、第III層2点(3%)、床面6点(9%)が出土しており、土器、石器とともに第II層が最も多い。中央ピットからは壺底部(47)の他に、底にへばりつく状態で砥石(295)、叩石、フレークが9点、埋土中より11点が出土している。P 23からは先述の鉢の他、甕(29)が出土している。P 21からは無軸羽状文を有する壺胴部(10)、甕(28、43)、P 27からは壺底部(21)、P 25からは大型甕(25)が出土している。また、住居址埋土出土のもので特に注目すべきものとして、黒色磨研の小型甕(18)と駒形鐵(317)をあげることができる。前者は第I層、後者は第II層出土である。

ST 3は主柱穴の数及び位置関係から、1回の建て替えが考えられる。埋土、切り合ひの関係より、先述した6穴(第1グループ)と4穴(第2グループ)には先後関係があることが窺える。第1グループが新しく、第2グループが古い。第2グループのP 13・22・27・31が河原石や地山の土で埋められた後、第1グループの6穴が掘られている。西側の2穴は新旧ともに利

用されたと考えられる。前期 I の住居址である。

なお、住居址の西側2.88mの地点で大型砥石（296）を検出した。これは S T 3 と関係があるものと考えられる。

#### S T 4

調査区の西端に位置し、方形の平面形を有する竪穴住居址である。西壁5.60m、北壁5.28m、東壁6.00m、南壁5.44mを測り、床面積は31.7m<sup>2</sup>である。長軸方向はN-25°-Wを示す。また、東壁側は近世墓に切られている。壁は0.10-0.15mの深さで斜めに立ち上がり、床面は平坦でなく緩い凹凸が見られる。柱穴が四隅に突出するようについており、主柱穴になるものと考えられる。主柱穴の間隔は P 1-2 が 6.00m、P 2-3 が 5.48m、P 3-4 が 5.64m、P 4-1 が 5.48m を測る。床面中央部に長軸と直交するかたちで長楕円形の中央ピットがあり、2段に掘り込まれ住居床面からの深さは 16.2cm と 26.2cm を測る。また中央ピットの両脇にはピットトが付随しており、各々 22-27cm の深さを測る。

遺物は埋土第II層より縄文晚期土器細片2点と、弥生前期土器（52-60）45点が出土している。縫口縁（53）は床面出土であり、土製円盤及び転用紡錘車20片（約13個体分）が集中出土したことは注目すべきであろう。

中央ピット第III・IV層からは30cm大の河原石1個、10-20cm大の河原石6個、他に叩石（266）、砥石（294）、ノミ状小型石器（324、326）の他に、フレークなど30数点が出土している。土器は細片のみ25点が出土している。中央ピット内には炭化物、焼土は全く認められない。前期 I の住居址である。

#### S T 5

S T 3 の南8.60mに位置し、ほぼ円形の平面形を有する竪穴住居址である。直径8.50m内外で床面積は56.7m<sup>2</sup>を測る。壁は0.20-0.38mの深さで斜めに立ち上がり、床面は平坦面をなす。主柱穴は6個で平面形にはかなり差違がある。主柱穴の間隔は P 6-14 が 2.50m、P 14-23 が 2.50m、P 23-25 が 2.44m、P 25-20 が 2.04m、P 20-8 が 2.12m、P 8-6 が 3.04m で平均2.44mを測る。なお、P 6・8・20は根縊めと思われる河原石を底に置いている。壁にはP 1・2・5・7・27・28が突出している。しかし、S T 3 のようにすべてが主柱穴と対応はしない。中央ピットは長楕円形の平面形を有し、2段に掘り込まれ、深さは28cmを測る。中央ピットの両端にのみ、小ピットが付随している。

遺物は埋土より縄文晚期土器細片2点を含む273点が出土しており、底部（62、67）は床面

第21表 S T 4 ピット計測表

No.	径(cm)	深さ(cm)	備考
P 1	44	17	主柱穴
P 2	44	18	#
P 3	52	19	#
P 4	52×40	17	#
P 5	100×80	26	中央ピット
P 6	48	16	
P 7	44	22	

第22表 ST 5 ピット計測表

No	径(cm)	深さ(cm)	備考	No	径(cm)	深さ(cm)	
P 1	80×56	11		P 16	76×60	20	中央ピット
P 2	60×44	9		P 17	32×22	8	
P 3	20×14	8		P 18	16	14	
P 4	16×10	6		P 19	32×28	5	
P 5	60×14	32		P 20	56	32	主柱穴
P 6	30×24	35	主柱穴	P 21	14	3	
P 7	70×60	11		P 22	12	1	
P 8	72×54	20	主柱穴	P 23	56×54	13	主柱穴
P 9	50×48	9		P 24	48×32	36	
P 10	52×40	8		P 25	44×30	51	主柱穴
P 11	40×32	4		P 26	24×20	38	
P 12	14×12	8		P 27	60×44	3	
P 13	24	4		P 28	52×48	6	
P 14	93×52	24	主柱穴	P 29	26×24	3	
P 15	22	6					

より出土している。石器は、床面より投弾(306)、石製紡錘車(328)をはじめ、小型ノミ状石器(259~262、325、327、329、331、335)、磨製石器未製品(319、320、322、323)、抉入柱状片刃石斧の小破片(336)、刀器(334)など多数の出土がみうけられる。前期Iの住居址である。

## ST 6

ST 4の東8.20mに位置し、隅丸方形の平面形を有する竪穴住居址である。西側を中世の溝に切られ、北東隅は削平されている。また南東隅も、2.00×1.20mの規模の現代の攤乱によって抉られている。規模は4.40×4.80mで床面積は21.1m<sup>2</sup>を測り、長軸方向はN-27°-Eである。壁の残存状況は悪く、南壁の最も深いところでも0.12m程度である。なお、北壁側に長軸1.80mを測る不定形の浅い土塗があるが、ST 6との関係は不明であり、独立させてSK 14として扱う。埋土はおおむね黒褐色粘質土である。主柱穴はP 1・2・8・12・13であり、P 3も掘り方と柱痕跡があるので柱穴であろう。中央ピットは隅丸方形の平面形を有し、断面形は逆台形を呈する。長軸方向をN-39°-Eにとり同様に小ピットを付随させる。中央ピット埋土は第I~III層で、第II~III層には大小の河原石が多く入っている。

遺物は、底部に織物の圧痕がついた甕底部(71)の他30数点が出土し、石器は叩石(292)が中央ピット第II層より出土している。前期Iの住居址である。

第23表 ST 6 ピット計測表

No	径(cm)	深さ(cm)	備考
P 1	56×52	13	主柱穴
P 2	44×40	20	"
P 3	52×40	30	
P 4	36×32	8	
P 5	94×92	34	中央ピット
P 6	52×48	16	
P 7	60	28	
P 8	40	6	主柱穴
P 9	32×28	31	
P 10	28×24	6	
P 11	36×30	16	
P 12	44×40	18	主柱穴
P 13	52×44	11	"
P 14	26×20	7	
P 15	36	10	

### ST 7

ST 6 の南東 8.00m に位置し、方形の平面形を有する竪穴住居址である。西壁 3.76m、北壁 3.76m、東壁 3.92m、南壁 3.36m、床面積は 13.2m<sup>2</sup> を測り、長軸方向は N-52°-W を示す。壁は 0.08~0.12m の深さで斜めに立ち上がっている。埋土は第 I ~ III 層で、中央ピット南部を中世のピットに一部切られている。

主柱穴は壁側の P 2・4・6・12・13 の 5 個である。中央ピットは床面中央部よりやや東に寄っており、不整長方形の平面形を有し、深さ 21cm を測る。床面はほぼ平坦であるが、P 12 の西にはわずかの高まりがみられる。

遺物は土器片が第 I 層より 3 点、第 II 層より 18 点、第 III 層より 21 点の計 42 点が出土しているが図示可能なものはない。また、第 III 層には 5~20cm 大の河原石が多数含まれる。中央ピット内からは他例と同様に多くの河原石叩石 (307) が出土している。前期 I の住居址である。

### 掘立柱建物址

#### SB 1

調査区の北東端で検出した掘立柱建物址である。梁間 3 間、桁行 5 間の規模を持ち、棟方向は N-53°-E を示す。北東隅を現代の搅乱によって切られている。SK 2 が並行して走っているが、SB 1 に付随するものであろう。桁行 1 間あたりの間隔は 1.40~2.00m で、平均 1.64m を測る。各々の柱穴は ST 3 等の竪穴住居の主柱穴と同程度の大きさである。

遺物は P 6 より壺細片 1 点、P 11 よりチャートの石核 1 点と壺細片 1 点、P 18 よりチャートのフレーク 6 点が出土している。前期 I に属する。

第 24 表 ST 7 ピット計測表

No.	径(cm)	深さ(cm)	備考
P 1	20	6	
P 2	34	19	主柱穴
P 3	24×12	3	
P 4	44	12	主柱穴
P 5	44×32	2	
P 6	48	6	主柱穴
P 7	24×30	5	
P 8	28×24	6	
P 9	32×22	7	
P 10	36×30	10	
P 11	84×60	40	中央ピット
P 12	60×44	32	主柱穴
P 13	40×34	7	#
P 14	36×30	8	

第 25 表 SB 1 ピット計測表

No.	径(cm)	深さ(cm)	備考
P 1	40×33	15	
P 2	40×27	18	
P 3	44×19	15	
P 4	31×24	23	柱底(径 12cm)
P 5	46×35	14	
P 6	26×32	7	前期の壺片 1 点(壺)
P 7	34×40	25	
P 8	52×40	20	柱底(30×19cm)
P 9	50×42	19	
P 10	36	20	
P 11	39	15	チャート石核(1 点、 壺細片 1 点)
P 12	28	18	
P 13	35×31	16	
P 14	52	18	
P 15	40×34	8	
P 16	45×32	33	柱底(18×15cm)
P 17	54×39	27	
P 18	62×52	18	チャートフレーク 6 点

## SB 2

SB 1の15.00m南に位置し、SB 1をそのまま南へ平行移動したような配置である。大部分が調査区外であるため規模を明らかにすることはできないが、柱穴規模、間隔などからSB 1と同様の掘立柱建物を推定することが可能であろう。桁行1間あたりの間隔はP 1-2が1.84m、P 2-3が1.36m、梁間はP 1-4が1.00mを測る。P 2の底には、礎盤と考えられる14cm大の河原石が置かれている。P 4より甕口縁(243)が出土している。前期Iに属する。

## SB 3

調査区の南端に位置する。1×1間の掘立柱建物址で、柱間距離はP 1-2が1.80m、P 2-3が2.56m、P 3-4が1.80m、P 4-1が2.44mを測り、棟方向はN-65°-Wである。各柱穴及び間隔はSB 1・2よりも大きい。高床式倉庫と考えられる。前期Iに属する。

### 土塙

第28表 SB 3 ピット計測表

#### SK 1

不整橢円形の平面形を有する土塙で、長軸方向はN-45°-Eを示す。長径0.94m、短径0.80m、深さ3~10cmを測る。埋土はII層からなり、遺物は壺底部(76)の他6点の弥生前期土器片、チャートのフレーク1点が出土している。

No.	径(cm)	深さ(cm)	備考
P 1	40×60	22	
P 2	76×58	17	
P 3	64×60	9	
P 4	72×60	16	

#### SK 2

SB 1に並行する溝状の土塙で、SB 1に伴う可能性がある。長軸方向はN-50°-Eを示し、長径3.80m、短径0.44m、深さ0.24mを測る。埋土は第I層が茶褐色砂礫、第II層は黒褐色粘質土である。遺物は甕胴部(77)の他、細片が数点出土している。

#### SK 3

SB 1の南西に位置し、不定形の平面形を有する。長軸方向はN-40°-Eを示し、長径1.51m、短径0.89m、深さ3~7cmを測る。上部はかなり削平されているものと考えられる。埋土は黒褐色粘質土単純一層で、遺物は壺(78、79)、甕(80~84)の他73点の土器細片が出土している。ほとんどが底面出土である。前期Iの土塙である。

#### SK 4

隅丸方形の平面形を有し、反軸方向はN-30°-Eを示し、長径0.62m、短径0.52m、深さ0.30mを測り、断面形は逆台形をなす。埋土は黒褐色粘質土単純一層で、遺物は甕口縁部(87)の他細片が7点出土している。前期Iの土塙である。

#### SK 5

不整方形の平面形を有し、SK 6を切っている。長径2.48m、短径は約1.64m、深さ0.10~0.15mを測る。西壁にP 1とP 2が突出したかたちで付随している。P 2は53×44cm、深さ22cmを測り、底面及び壁にへばりついた状態で砥石(298、301)、叩石(276、277、289)が出土している。SK 5埋土第II層からも数点の石器、土器細片が出土している。

#### SK 6

西側をSK 5に切られ、東は現代の擾乱によって深く抉り取られている。隅丸長方形の平面形を有するものと考えられ、長軸方向はN-60°-Eを示す。推定長軸3.00m、短軸1.88m、深さは最も深いところで0.32mを測り、両端から段状に掘り込まれている。埋土は黒褐色単純一層で遺物は壺口部(88)、大型壺底部(89)、窓口縁部(90、91)が出土している。また西壁に接してP 1・2があり、ともに40×30cm、深さ30cmを測る。P 1の底面及び壁には、根縊とを考えられる15~20cm大の河原石が6個置かれており、その中の1つに叩石(291)が入っていた。

#### SK 7

西側が現代の擾乱によって大きく切られているが、隅丸長方形の平面形を有する土塙であろう。長軸方向はN-60°-Wを示す。規模は現存長径2.90m、短径1.64m、深さ0.15mを測り、西側がわずかに張り出している。底面には凹凸が多く見られ、埋土は第I~III層からなる。遺物は第III層より石包丁(315)が出土している。またSK 7にはP 1・2が付隨している。P 2は40×30cm、深さ30cmを測り、底面から3cm程上部に大型砥石(290)が出土している。ピット内では砥石本来の機能が果たせたとは考えられず、2次の機能として柱の礎盤に利用されたものであろう。

#### SK 8

調査区の東端に位置し、長軸を東西方向に有する不定形の土塙である。長径2.20m、短径1.70m、深さ6~9cmで、壁は斜めに立ち上がる。かなり削平されているものと考えられる。埋土は黒褐色粘質土単純一層で、遺物は壺口縁(92)、壺底部(93、94)、窓(95)の他200点近い土器細片が出土した。また、これらの土器とともに2~20cm大の河原石が多量に出土している。前期Iの土塙である。

#### SK 9

SK 8の南に位置し、SB 2の桁方向に並行する構造の土塙である。長軸方向はN-60°-Eを示し、長径3.24m、短径0.52m、深さ0.32mを測る。両端は段状を呈する。埋土は第I・II層からなり、遺物は窓(97~101)が出土している。SK 2同様、SB 2に関係する遺構と考えられる。

#### S K10

S T 3 の西に接しており、平面形は直径1.20mの円形を呈する土塹である。断面形は逆台形状をなしているが、底面中央部に直径10cmの小穴が2個並んでいる。また壁上端の一部が段状をなしている。埋土は第I・II層からなり、第I層の黄色シルトは無遺物層で、第II層の淡黒褐色粘質土からは多量の土器、石器、炭化物が出土している。土器は底部(102)の他は全て細片である。石器は打製石鎌(318)、大型蛤刃石斧(264)の他、砥石5点、フレーク26点、叩石5点、河原石7点が出土している。また、S K10の両脇にはP 1・2の小ピットが付随している。P 1は40×26cm、深さ7.1cmを測り、直径10cm内外の柱痕を確認することができる。P 2は36×18cm、深さ11.6cmを測る。S K10は、住居址内の中央ピットを大型にしてそのまま屋外に取り出したようなもので、出土遺物も酷似している。

#### S K11

S T 3 の南西0.80mに位置し、東側の大部分は現代の擾乱によって切られている。隅丸方形の平面形を有し、長軸方向はN-65°-Wを示す。長径1.00m、短径0.60m、深さ2~3cmを測る。埋土は黒褐色粘質土單純一層で、出土遺物は見られない。

#### S K12

調査区の西寄りに位置する。南は中世の溝に切られ、西は氾濫原に削り取られている。さらに中央をS D 1によって切られている。全形を推定することは困難であるが、現存長径4.12m、短径3.34m、深さは平均0.10m内外を測り、底面には大小7つのピットがある。埋土は第I~IV層からなり、第IV層はピット内や底面のわずかな窪みに堆積し、第III層は黒褐色粘質土で最も厚く堆積している。第II層は焼土、第I層は西の氾濫原から流れ込んだと思われる黄色シルトである。

遺物は石包丁(314)が第I層から、第III層からは砥石が出土している。また第II・III層からはチャートのフレークが3点、P 4からはチャートとサヌカイトのフレークが5点と、河原石2点が出土している。

#### S K13

北側を中世の溝によって切られており、西では壁が削平されている。南に扇状に7.90mの壁の立ち上がりを認めるのみである。壁の残存状況も4cm以下と極めて浅い。また周縁部に4ヶ所大小のピットが存在している。なお、S K13とS K12は、同一の遺構とみられる可能性が強い。

#### S K14

調査区の東端に位置する。平行四辺形の平面形を有し、長軸方向はN-20°-Eを示す。長径1.80

m、短径1.16mで、深さは東壁側で0.10m、西壁側では1~2cmを測る。埋土は黒褐色粘質土單純一層で、遺物は甕(103; 104)の他50数点の土器細片と、20cm大の河原石5個が出土している。

#### S K15

S T 6の床面で検出した。S T 6に切られたものか、付隨するものか不明であるが、独立して扱う。不定形の平面形で、長径1.80m、短径1.52m、深さは東部で0.10m、西側は2~3cm程度しか残っていない。埋土はS T 6とほぼ同様の黒褐色粘質土で、遺物は大型壺の胴部片(105)が出土している。

#### S K16

S T 6の東3.70mに位置する。長軸は南北方向を示し、南半が大きくなっている。平面形にかなりの凹凸が見られ、底面は段状に掘り込まれている。規模は長径2.48m、短径1.20m、深さは最も幅の広い部分が最も深く0.28mを測る。埋土は第I・II層からなり、黒褐色粘質土が厚く堆積し、その上に黄色シルトが薄く堆積している。遺物は全く見られないが、中央部のやや南よりに20cm大の河原石が底面より7cm上部に残存していた。

#### S K17

S T 5の東5.70mに位置する。橢円形の平面形を有し、長軸方向はN-40°-Wを示す。長径1.66m、短径1.00m、深さ0.33mを測り、底面中央部は幅0.56mにわたって0.11m掘り込まれている。北東壁はほぼ垂直に立ち上がるが、他の壁は斜めに立ち上がっている。埋土は第I層黒褐色粘質土、第II層淡黒褐色粘質土、第III層茶褐色砂であり、土塙埋土に砂が堆積する例は本例以外にはない。

遺物は第II・III層から多量に出土している。壺(106、107)、甕(108~114)、鉢(115)、紡錘車(116)、大小粘土塊102個(524g)の他400点以上の土器片が出土している。石器は石包丁(312)、サヌカイトフレーク(332、337)、頁岩フレーク(339)が出土している。他に、底面南東部に40cm大の河原石が置かれていた。さらに炭化物や焼土塊も出土している。注目すべきことは出土土器片のほとんど全てが半焼成品であることと、上記の粘土塊には植物繊維が含まれていることである。

#### S K18

調査区南端のS B 3の北4.00mに位置する。橢円形の平面形を有し、長軸は東西方向を示す。長径1.68m、短径1.28m、深さ0.30mを測り、断面形は舟底状を呈する。埋土は第I層青灰色粘質土、第II層黒褐色粘質土で、遺物は第II層から甕(117~122)、鉢(123)が出土している。

### S K19

調査区の南に位置し、S T 5 の南5.00mに位置する。扇形状の平面形を有し、長軸方向はN-35°-Wを示す。長径3.40m、短径1.56m、深さは南端で0.20m、北端で4cmを測る。南端に直径60cm、深さ60cmのビットが掘り込まれている。埋土は黒褐色粘質土單一層で、出土遺物はみられない。

### S K20

調査区南端に位置する。中央部が狭くなる細長い平面形を有し、長軸方向はN-60°-Wを示す。長径1.52m、短径0.64m、深さ0.22mを測る。底面は中央より北西が二段に窪んでいる。現水路下で検出したため、全体に還元土壤であり、埋土は黝黑色を呈する。出土遺物は見られない。

### 溝

### S D 1

調査区の西端部を北東から南西に向って延びる遺構である。延長約60.00m、幅0.28-0.40mを測る。S X 1 の南部で一度消滅し、再びP 1 の付近に出現し、直線的に延びる。しかし、S K13付近で氾濫原に削られている。埋土は、第I層茶褐色粘質土と第II層茶褐色砂質土からなっている。遺物は石鉄(316)など弥生時代前期のものに混在して、後期の甕(124)なども出土している。弥生時代後期の溝である。

### 柵列

### S A 1

S T 3 の西7.00mに位置する。P 1-4 がN-46°-W、P 4-7 がN-45°-Eで、P 1-4 とP 4-7 とは直角に近く89°で交わっている。各ビットの大きさは径20-28cmで平均23.7cm、深さ5-14cmで平均11.4cmを測る。各ビット間の間隔はP 1-2 が1.16m、P 2-3 が1.56m、P 3-4 が0.92m、P 4-5 が1.20m、P 5-6 が1.04m、P 6-7 が1.48mで平均1.20mを測る。またP 4-7 とP 4-1 の距離は前者が3.76m、後者が3.72mで、わずか4cm差しか認められない。埋土は全て黒褐色粘質土であり、遺物は見られないが、検出面、埋土等から前期Iのものとみられる。

### 性格不明遺構

### S X 1

調査区北端に位置する。北側は調査区外に出ており西側は氾濫原及びS D 1 によって切られているため、全形を推定することは困難である。扇形状に埋土の広がりが見られるが、残りは最も深いところで0.24mを測る。埋土の堆積はやや複雑で、Loc.25の遺構の標準的埋土である黒褐色粘質土は壁の立ち上がり際の部分のみに見られ、他は砂質土及びシルトが堆積している。

また一部に炭化物、焼土が薄く堆積している。このようなシルト、砂質土の堆積は、西の氾濫原との関係で2次堆積によるものと考えられる。

遺物は甕(125~139、141)、壺(140)、鉢(142)が、砂層及びシルト層から出土している。磨製石鋸(321)、紡錘車(256)は、第Ⅲ層の黒褐色粘質土から出土している。

## S X 2

調査区のはば中央部に位置し、S X 3と接しているが切り合い関係はみられない。また北及び南を現代の搅乱によって大きく切られている。隅丸五角形の平面形を有し、長軸方向はN-88°-Wを示す。長軸8.00m、短軸6.80m、深さ0.68~0.72mを測り、底面は中央部が低くなっている他は、柱穴等は全く認められない。埋土は第V層の黒褐色粘質土が堆積した後、第II~IV層のシルトが堆積している。第I層は黒褐色粘質土に黄色シルトがブロックで入っており、ある時期の搅乱の可能性がある。

遺物は多量の弥生土器(143~229)が多量に出土しており、その多くは第V層上面にへばり付いた状態で出土している。またこの遺構の特徴として、多量の河原石が投げ込まれた状態で出土していることがあげられる。北半分には比較的大きな石が、南半分には小さな石が堆積しており一部は掘り方より外にはみ出ている。これらの河原石は第V層が堆積した後に多量の土器片とともに東側から一度に投げ込まれた可能性が強い。S X 2から出土した土器片はほとんどが細片であることから、最初から破片を投げ込んだものであると思われる。甕と壺が量的に多数を占める。口縁部の破片で各土器形式の出土割合をみると、壺56点(50.9%)、甕48点(43.6%)、鉢3点(2.7%)、高杯3点(2.7%)であり、底部と合わせるとその総計は約62個体分となる。

## S X 3

S X 2をやや小型にしたような五角形の平面形を有し、長軸方向はN-41°-Eを示す。西側は中世の溝に切られ、東側は現代の搅乱によって大きく切られている。長軸0.68m、短軸6.00m、深さは0.50~0.60mを測り、中央部がやや深くなっている。埋土は、基本的には第V層の黒褐色粘質土とその上層にシルトが堆積しているという点ではS X 2に類似するが、北隅の最下層に第VI層の暗灰黄色砂が堆積し、その上に焼土、炭化物が薄く存し、その後に第V層が堆積しているという点で異なっている。また、第V層中にも北端には焼土、炭化物が薄く堆積している。

遺物の出土状況もS X 2とは異なっている。すなわちS X 2が第V層にはほとんど遺物が見られなかつたのに対して、S X 3は床面及びV層から多くの弥生土器が出土しており、その土器は大型のものが多い。また先述の焼土、炭化物も流れ込んだものではなく、この層において焼かれたものと考えられ、この付近から出土した河原石は煤けている。遺物の量はS X 2に比べると極端に少ない。口縁部破片数で器種組成をみれば、壺2点、甕4点、鉢1点である。しか

し土器底部は、16個体分が発見されている。またSX2に見られたような河原石の大量投棄は見られない。層位的な土器出土状況を見れば、SX3がSX2に先行すると思われる。

#### 炉址

P21の南西1.30mに位置し、直径0.80mの範囲が赤く焼け変色している。何等の施設も伴っていないが、屋外炉であるとみるべきであろう。

#### ピット

##### P1

円形の平面形を有し、直径52cm、断面形は逆台形状を呈する。埋土は第I層黄灰色シルト、第II層黒褐色粘質土、第III層淡茶灰色粘質土で、各層より弥生土器細片及び石器が出土している。石器は第III層より叩石(283)の他、10cm大のチャート石核1個、第II層より25cm大の河原石が西側の壁に寄着した状態で出土し、底面よりは10cm大の河原石が3個出土している。

P1の両脇には径30cm前後的小ピットが付隨している。竪穴住居址内の中央ピット、SK8と同様の機能を有していたものと考えられる。

##### P2

椭円形の平面形を有し、長径90cm、短径72cm、深さ54cmを測る。床は段状をなし、壁は垂直に近く立ち上がり、埋土は黒褐色粘質土単純一層である。遺物は、壺底部1点、口縁部細片1点、その他段部に28cm大の河原石があり、さらにその上に14cm大の河原石が載っている。また検出面の南東壁上には30cm大の河原石が置かれている。P2は柱穴と考えることができ、これらの石は柱の根締めとして利用されたものである。

##### P3

椭円形の平面形を有し、長径68cm、短径60cm、深さ38cmを測る。埋土は茶褐色砂質土に黒褐色粘質土、灰色シルトがブロックで入っている。底面は階段状をなしている。遺物は検出面上より叩石(285、288)、埋土より弥生前期土器片1点、底面直上より炭化物が少量出土している。また検出面に近接して「槌の子」と考えられる磨石(309~311)が出土している。

##### P4

円形の平面形を有し、直径25cm、深さ14cmを測る。埋土は黒褐色粘質土単純一層で、遺物は壺底部(240)と叩石(305)が出土している。

P 5

隅丸長方形の平面形を有し、長径47cm、短径38cm、深さ6～8cmを測る。埋土は黒褐色粘質土単純一層で、遺物は埋土中より紡錘車輪製品（255）、検出面から叩石（282）、底面からは15cm大の河原石と砥石が出土している。

P 6

楕円形の平面形を有し、長径60cm、短径46cm、深さ8cmを測る。底面中央部に径10cm前後の窪みがある。埋土は黒褐色粘質土単純一層である。遺物は17cm大の河原石と砥石が出土している。

P 7

楕円形の平面形を有し、P 8を切っている。長径60cm、短径36cm、深さ10cmを測り、底面中央部はわずかに凹状をなす。埋土は第I～III層よりなり、遺物は検出面で叩石（270）が出土している。

P 8

円形の平面形を有し、径40cm、深さ34cmを測る。埋土は第I・II層で、第I層は柱痕跡と考えられる。底面は一部が段状をなし、中央部に径10cmの窪みがある。遺物は掘り方より弥生土器甕（248）が出土している。

P 9

楕円形の平面形を有し、長径70cm、短径64cm、深さ38cmを測る。埋土は第I～III層で、各層より弥生土器細片が出土している。

P 10

直径60cmの円形の平面形を有し、深さ14cmを測り、南西部が瘤状に突出している。底面は平坦で、壁は斜めに立ち上がる。埋土は黒褐色粘質土単純一層で、遺物は底面より砥石（303）が1点出土している。

P 11

楕円形の平面形を有し、長径82cm、短径70cm、深さ22cmを測る。底面中央部に径20cm、深さ14cmの窪みがある。壁は斜めに立ち上がっている。埋土は黄褐色シルト単純一層で、弥生土器細片が数点出土している。

P12

円形の平面形を有し、径68cm、深さ20cmを測る。底は平坦面をなし、断面形は逆台形で、埋土は黄褐色シルト単純一層である。

P13

楕円形の平面形を有し、長径60cm、短径54cm、深さ18cmを測る。底面の東壁側には径10cm、深さ13cmの窪みがある。壁は斜めに立ち上がり、断面形は逆台形をなす。

P14

楕円形の平面形を有し、長径98cm、短径68cm、深さ43cmを測る。断面形は箱形をなすが、上部を段状に掘り込んでいる。埋土は第I～VI層が堆積しており、遺物は第VI層より土製円錐(253)が1個出土している。

P15

円形の平面形を有し、直径90cm、深さ60cmを測る。馬蹄形状の段を作り掘り込んでいる。埋土は第I～III層よりなる。出土遺物はない。

P16

楕円形の平面形を有し、長径64cm、短径60cm、深さ50cmを測る。南西壁は階段状に掘り込まれ、北東壁側は袋状をなす。埋土は第I～IV層からなり、第IV層より15点の弥生土器細片が出土している。うち1つに、棒状工具で横方向に数本の沈線を引き、条痕状を呈するものが含まれている。

P17

楕円形の平面形を有し、長径60cm、短径56cm、深さ46cmを測る。上部の一部は段状に掘り込まれており、西側は袋状をなす。埋土は黒褐色粘質土単純一層で、遺物は弥生土器細片5点、叩石(286)、チャートのフレークが各1点出土している。

P18

楕円形の平面形を有し、長径60cm、短径42cm、深さ12cmを測る。埋土は第I・II層からなり出土遺物はない。

P19

隅丸方形の平面形を有し、長径56cm、短径42cm、深さ7cmを測る。埋土は黒褐色粘質土単純

一層で、底面に7~10cm大の河原石が5個置かれていた。

## P20

円形の平面形を有し、直径80cm、深さ50cmを測る。埋土は第I・II層からなり、遺物は第I層より弥生土器片12点、第II層より8点、石器は叩石(293)、砥石1点、チャートのフレーク2点が出土している。

## P21

円形の平面形を有し、直径70cm、深さ12cmを測る。底面西に径22cmの窪みがある。埋土は黒褐色粘質土單純一層で、弥生甕口縁部1点、チャートのフレーク1点が出土している。

### 5.まとめ

以上、各遺構について詳細に述べた。Loc.25は竪穴住居址7棟、掘立柱建物3棟及び大小の土塙、ビットよりなる弥生時代前期の集落で、隣接するLoc.15・16、及びその北に位置するLoc.17・18で確認された前期の遺構とは一連の関係を有するものであり、同一集落を構成すると考えられる。すなわちLoc.25は弥生時代前期集落の南西部に位置する。

各遺構の時期は、SD1が弥生時代後期である以外は全て前期前半に属するものであるが、出土遺物等により2時期に分けることができる。7棟の竪穴住居址及び全ての土塙、ビット及びSB3は前期Iに属する。SB1・2は決め手となる遺物の出土量が少ないので、Loc.16との関係から考えると、前期Iに位置づけなければならない。SK10、SX2・3、P1・11・12・14・15は埋土の堆積状態が竪穴住居址等とは若干異なる。前期Iとみられる遺構のほとんど全ての埋土が黒褐色粘質土であり、上層の一部に灰黄色シルトが堆積するのを原則とするのに対し、これらの遺構は埋土の上層半分以上がシルトであり黒褐色粘質土の堆積が薄い。その点で、これらは住居址などよりも時期的にやや遅れて堆積し始めたものであり、前期Iでも後出的要素を持つものである。なお、このことはSX2・3での遺物の堆積状況でも明確であるし、出土遺物もやや新しい要素がある。しかし、窓において突帯文のみられる時期であることには変わりなく、その点で一応前期I段階としておくべきであろう。

以上のことから、Loc.25は前期Iの時期に6棟の竪穴住居、1棟の円形平地住居、3棟の掘立柱建物、20基の土塙、多数のビットを擁する集落が営まれたが、すべて前期Iの時期のみで終っている。そして、後期になってSD1が掘られるまでは生活址は全く認められない。結局、Loc.25は前期前半という短期間に営まれた集落ということができよう。この集落が廃絶された理由の1つとして、水害による原因が考えられる。前期Iの中やや新しく位置づけられる遺構に堆積するシルト層は上流から流されてきたものと推定されるし、Loc.16の東部はそのまま氾濫原になっていることからこれを考えることができる。当地点より北方約500m、

比高差約2mの地点に前期IIから始まる集落址である西見当遺跡（Loc.44）が存在するが、これなどは当地よりの移動をも考慮し得るものである。

次に各遺構の配置と関係、及び個々の遺構についての分析を試みる。竪穴住居址は集落の立地する自然堤防上の縁辺部に並列し、Loc.16のST1もこの延長線上に位置し、いわゆる、馬蹄形状の配置をなす。これらの6棟の竪穴住居址と円形平地住居は平面形、床面積から各々2つのグループに分けることができる。ST1・3・5は円形で、各床面積は、ST3が40.7m<sup>2</sup>、ST5が56.7m<sup>2</sup>、ST1は不明であるが残存施設から推定してST3と同規模のものが考えられる。これら3棟は、前期のものとしては大型の部類に属すると言えよう。次に方形を呈するものは、ST2・4・6・7で、面積は、ST2が8.7m<sup>2</sup>、ST4が31.7m<sup>2</sup>、ST6が21.1m<sup>2</sup>、ST7が13.2m<sup>2</sup>を測り、大型のST4と小型のST2・6・7に分かれる。すなわち、円形住居址は大型のものであり、方形住居址は大型と小型とからなっている。個々の構造上の特徴については後に詳しく述べるが、今1度住居址の配置について見ると、各大型住居址には各小型住居址が対応する形で位置していることに気付く。すなわち、ST3に対しては北西方向に約8.2mの地点にST2があり、ST4に対しては東南東約8.2mの地点にST6があり、ST5に対しては南東方向約8.0mの地点にST7が存在している。またLoc.16のST1には4.3m南にLoc.15のSX1が対応している。これらの住居址は全く同時期に属するものであり、大型住居址と小型住居址とは有機的に結合する一対の関係として把握することが可能であろう。住居址が集落における1つの生活単位であるという前提に立つ時、大型住居址と小型住居址とに見られるような一対関係は、弥生文化成立期の経済単位及び社会構成を復元していく上で極めて重要な鍵を握っている。

土塙及びピットは、多くが北半部分に集中している。この現象は、北部の標高が高いという地形に規定された可能性が強い。

土塙については、從来西見当遺跡で確認された前期II及び前期IIIに多く見られる定形化した橢円形、隅丸長方形を呈する貯蔵用土塙は見られないが、SK6・7はその先駆的なものとなる可能性がある。共に擾乱を大きくうけているので全形を復元することはできないが、残存部分から推定するとかなり大型の土塙であり、平面形から言えば前期IIで見られる土塙に近い形態をなしていると言えよう。これらの土塙は底面にて2個ずつピットを擁しており、各々1方のピットには根締め、あるいは礎盤と考えられる石が置かれている。これらの小ピットは柱穴と考えるべきで、これらの土塙は屋根のあったことを窺わせており、貯蔵用土塙と同じ役割を果たしていたことも考えられる。

この他に貯蔵用に使われたと考えられるものとして、極めて小規模であるが北西端に比較的集中しているP14～17・20を挙げることができる。これらの形態は、P16・17の一部が袋状になっている以外は逆台形あるいは筒形を呈する。またP14・15・17は上部が段をなして掘り込まれており、この施設は何らかの蓋を受ける機能を有するものと考えられる。

これらの貯蔵用ピットは竪穴住居址とほぼ同時期に機能していたものであるが、竪穴住居址に対する貯蔵穴あるいは貯蔵用ピットの数はあまりにも少なすぎる。「集落の中にあって住居のそばに貯蔵穴を設けるということはない」という考え方もあり、地域差等も考慮に入れて今後追求していかなければならない。<sup>註1</sup>

土塹、ピットの中では石器製作にかかる遺物の出土も目立っている。まずSK10からは多量のフレーク、叩石、砥石等が出土している。そして両脇に小ピットを付随させるという構造上の特徴は、住居址内の中央ピットの構造に類似しており、屋外にあって住居址内の中央ピットと同様の機能を果たしていたものと考えられる。やや小規模であるが、P1についても同様のことが考えられる。

SK5は西壁にP2を擁しており、叩石、砥石が出土している。これと同様の出土状況を示すものとしてP4~7・10を挙げることができる。これらのピットは平面形はおむね橢円形を呈し、掘り込みが浅く、貯蔵穴として先述したピット群とはきわだつ差異を示している。

今1つ石器の出土状況として注目すべきことは、P3検出面に近接して「椎の子」と考えられる磨石(309~311)が3個並んで出土していることである。

SK17は、土塹中で最も多くの遺物が出土している。注目すべき事項が2つみられる。1つは土器のほとんど全てが半焼成であること、他の1つは植物纖維の混ざった大小粘土塊102個(524g)が出土していることの2点である。同様の例は西見当遺跡の調査においてしばしば見られ、他県では綾羅木遺跡E-L地区L4906を挙げることができる。半焼成土器、炭化物、植物纖維の混入した粘土塊などは綾羅木例と酷似しているが、綾羅木例が円形の平面形であること、「塙壁は紅く焼け」しまっているのに対して、本例及び西見当例は橢円形の平面形であること、壁の焼けた痕跡が全く見られないことが異なる。半焼成土器の大量出土は、SK17が焼成土塙に直結しなくとも、またこれら粘土塊が土器胎土と全く異質であっても、SK17の近くで土器の焼成が行われた可能性を窺わせるものである。

次に掘立柱建物址について検討してみよう。SB1・2は、前期Iの段階に営まれたものであり、桁に平行してSK2・9が付隨している。Loc.16の同様の土塙からは多量の土器が出土しているが、本例は出土遺物が極めて少ない。これは棟に平行するものと梁に平行するものとの機能差に帰因するものであろう。

SB2は4個の柱穴しか確認し得なかったが、柱穴の規模、方向性から考えて、SB1と同様な規模を有するものと考えられる。

これら掘立柱建物址の柱穴は、柱底をとどめるものがないので柱の大きさを知ることができないが、ST3の主柱穴掘り方と比較するとほぼ同様の規模である。ST3の主柱穴の1つであるP13の柱底は直径約20cmであることから、SB1・2は直径20cm前後の柱をもつ建物であったことがわかる。次に1×1間のSB3の柱穴を見ると、SB1・2のどの柱穴よりもひと回り大きく、SB3がSB1・2よりも大きな柱を使用していたと考えられる。柱間距離

をみると、SB 1 の桁側の平均は1.64m、梁側のそれは1.26mを測るのに対して、SB 3は2.44m、1.80mであり、桁側で0.80m、梁側で0.56m SB 3が広くなっている。この差は柱材の大きさに帰因するものであろう。SB 3は高床式倉庫と考えたが、重量物を貯蔵するにふさわしい建物と考えられる。この結果からSB 1・2は倉庫とは考えられず、掘立柱の住居と考えられる。SB 1の面積は34.6m<sup>2</sup>で、大型の竪穴住居の床面積の範疇に入る。SB 1・2をこのように住居跡と考えた場合、大型の竪穴住居に匹敵する居住空間が考えられる。なお、掘立柱建物の分析についても、Loc.16・17等も含めて後述するつもりである。

註1 福岡県教育委員会『冷水バイパス関係埋蔵文化財調査報告』1982年。

第27表 堅穴住居址計測表

辨図番号	造構番号	平面形	規模(m)	主軸方向	柱穴(個)	面積(m <sup>2</sup> )	施設	備考
第78図	S T 1	円形	1.24×1.16	N-60°-E	6	—		
#	S T 2	隅丸方形	2.90×3.00	N-47°-W	—	8.7		
#	S T 3	円形	7.20	—	6	40.7		
第80図	S T 4	方形	5.60×6.00	N-25°-W	4	31.7		
第79図	S T 5	円形	8.50	—	6	56.7		
第80図	S T 6	隅丸方形	4.40×4.80	N-27°-E	5	21.1		
第79図	S T 7	方形	3.75×3.92	N-52°-W	5	13.2		

第28表 掘立柱建物址計測表

辨図番号	造構番号	規 模			柱方向	面積(m <sup>2</sup> )	備考
		梁(間)×桁(間)	梁×桁(間)	柱間距離(m)			
第81図	S B 1	3 × 5	4.10×8.20	1.40~2.00	N-53°-E	33.6	
#	S B 2	—	—	1.00~1.84	—	—	
第82図	S B 3	1 × 1	1.80×2.56	1.80~2.56	N-65°-W	4.6	

第29表 土塁計測表

辨図番号	造構番号	平面形	規 模(m)			長軸方向	断面形	備考
			長径	短径	深さ			
第82図	S K 1	不整縁円形	0.94	0.80	0.10	N-45°-E	逆舟形	
#	S K 2	長縁円形	3.80	0.44	0.24	N-50°-E	#	
#	S K 3	不定形	1.51	0.89	0.07	N-40°-E	#	
#	S K 4	隅丸方形	0.62	0.52	0.30	N-30°-E	#	
#	S K 5	不整方形	2.48	1.64	0.15	—	#	
#	S K 6	隅丸長方形	(3.00)	1.88	0.32	N-60°-E	#	
第83図	S K 7	"	(2.90)	1.64	0.15	N-60°-W	#	
#	S K 8	不定形	2.20	1.70	0.09	—	#	
#	S K 9	長縁円形	3.24	0.52	0.32	N-60°-E	#	
第84図	S K 10	円形	1.20	1.20	0.40	—	#	
#	S K 11	隅丸方形	1.00	0.60	0.03	N-65°-W	#	

排岡番号	遺跡番号	平面形	観 横 (m)			長軸方向	断面形	備考
			長 径	短 径	深 さ			
第 83 団	S K 12	—	4.12	3.34	0.10	—	逆台形	
第 84 団	S K 13	—	—	—	0.04	—	〃	
〃	S K 14	平行四辺形	1.80	1.16	0.10	N-20°-E	〃	
〃	S K 15	不定形	1.80	1.52	0.10	—	〃	
〃	S K 16	〃	2.48	1.20	0.28	N	〃	
〃	S K 17	橢円形	1.66	1.00	0.33	N-40°-W	〃	
〃	S K 18	〃	1.68	1.28	0.30	N-90°-W	舟底状	
第 85 団	S K 19	扇形状	3.40	1.56	0.05	N-35°-W	逆台形	
〃	S K 20	—	1.52	0.64	0.22	N-60°-W	〃	

第30表 包含層出土土器観察表

探査番号	層位	器種	法量 (cm)	口径 器高 削除 底径	形態・文様	手 法	備考
1	第IV層	盤	21.5 (3.8) — —	口縁間に段部を有し、口縁部はわずかに外反する。口唇部は面をなす。	内外面ナナ子調整。口縁部外面に指彫痕あり。		
2	#	甌	27.2 (11.6) — —	上腹部で内側に若干屈曲。口縁部外面に2条の刻目突起を貼付。	上腹部周辺部に外輪接合痕を認める。上腹部横方向、中位以下腰及び右下のハケ調整。口縁部内面横方向のハケ調整。		
3	#	#	20.2 (19.0) — —	内面気味に立ち上がる。口唇部は丸くおさめる。口縁部より下にしっかりとした刻目突起を貼付。	上腹部外面下り、中位以下は横方向のハケ調整を施す。刻目はハケ状施文全体により右上に施す。		
4	#	甌	23.8 8.9 — 7.1	円盤状の頂部から、直線的に伸びて縁部に至る。縁部は丸くおさめる。	内面横方向のナナ子調整。		
5	#	鉢	8.6 5.0 — 4.7	底部から直線的に外方に立ち上がり、口縁部は丸くおさめる。上げ底状の底部。	口縁部内外面は板状工具による横方向の強いナナ子。	外底の一端に風痕あり。	
6	#	#	38.6 (8.7) — —	内面気味に立ち上がる。腹部から口縁部はなめらかに外反する。腹部に断面三角のしっかりした刻目突起を貼付する。	外面横方向のヘラ磨きを施す。内面ナナ子調整。		
7	#	紡錘車	直徑(6.0) 厚さ 0.9 重量(g)14.0				大型である。
8	#	#	直徑 4.2 厚さ 0.7 重量(g)10.1				転用紡錘車

第31表 造構出土土器観察表

探査番号	造構番号	器種	法量 (cm)	口径 器高 削除 底径	形態・文様	手 法	備考
9	ST 2	甌	— (4.0) —	直線的に外方に立ち上がり、縁部は凹状をなし。口唇部下端に刻目を配する。	断面に外輪接合痕を認める。刻目はハケ状施文全体による。		
10	ST 3	甌	— (5.0) — —	ヘラによる2条の凸起の下に羽状文を配し、更にその下に1条の凸起を配する。	外面横方向のヘラ磨き。		
11	#	#	— (5.0) — —	3条のヘラ培沈痕を配する。内面の粘土培接合部にわずかな凹部を認める。			
12	#	#	— (5.0) — —	2条のヘラ培沈痕を配する。			
13	#	#	15.6 (6.2) — —	底部からなめらかに外反する口縁部を有し、端部は丸くおさめる。	内外面共に調査の観察不能。		

博団番号	遺構番号	器種	法量 (cm)	口径 部高径 底径	形態・文様	手 法	備 考
14	S T 3	壺	11.8 ( 2.2 ) — —	口周間に弱い段部を有し、口縁部はなめらかに外反する。肩部は丸くおさめる。	外面横方向のヘラ磨きを施す。		
15	#	#	15.7 ( 3.1 ) — —	口周間に一見尖底状のしっかりした段部を有し、段部に弱い刻目を施す。口縁部はなめらかに外反する。			
16	#	#	14.2 ( 3.0 ) — —	口縁部は「く」字状に屈曲し、直線的に外方に伸びる。肩部は丸くおさめる。	外面横方向のヘラ磨きがわずかに観察できる。		
17	#	#	— ( 3.0 ) — 6.5	上げ底。	底部外周に粘土を貼付し、補強している。(一度横方向にナタ調整を施した後に貼付している)		
18	#	#	— ( 4.2 ) — 3.6	比較的薄いつくりの底部である。	底部と肩部の接合部を観察することができる。外面横方向のヘラ磨き。	疎期縄文の色磨研磨形土器の系統である。	
19	#	#	— ( 2.8 ) — 8.0	わずかに上げ底状を呈する。			
20	#	#	— ( 3.0 ) — 12.2	台形状の底部である。			
21	#	#	— ( 6.4 ) — 7.4	わずかに上げ底状の底部である。	外面横方向のヘラ磨きを施す。	S T 2 内の P 27 出土である。	
22	#	#	— ( 6.0 ) — 8.0	平底の底部。	外面は縱方向のハケ調整。方面はヘラ磨きを施す。	外底の外縁に約 1cm 間にススが付着する。	
23	#	#	— ( 3.6 ) — 7.0	#	内外面縱方向のヘラ磨きを施す。		
24	#	#	— ( 4.0 ) — 11.4	比較的薄いつくりの底部である。	内外面の調整範域不規。		
25	#	#	— ( 16.5 ) 42.4 —	頭部間に段部を有する。	段部より上は右下り、段部より下は横方向のヘラ磨きを施す。		
26	#	罐	20.6 ( 4.5 ) — —	直線的に立ち上がり、口縁部は圓をなす。底部より下に断面三角形のしっかりした刻目突帯を貼付する。	外面横及び右下リのハケ調整を施す。刻目はヘラ状固体による。		
27	#	#	19.2 ( 5.0 ) 21.5 —	内湾気味に立ち上がり、口縁部は圓をなす。底部より下に断面三角形の刻目突帯を貼付する。	次第の上下は横方向の強いナタ調整。尖部より下は腹及び右下リのハケ調整を施す。	外間にススが付着。	
28	#	#	34.4 ( 17.5 ) 25.4 —	直線的に立ち上がり、口縁部は丸くおさめる。口縁部よりやや下へたところにしっかりした刻目突帯を貼付する。	口縁部及び尖部より下は横方向の強いナタ調整を施す。外側は縱方向のハケ調整。刻目はハケ状固体による。尖部下に指痕圧痕がある。	#	

検査番号	造査番号	器種	法量 (cm)	口径 脣部後 弧性	形態・文様	手 法	備考
29	S T 3	鏡	26.0 ( 4.5) — —	直線的に立ち上がりが、内面は、わずかに外に屈曲弧味である。口唇部は直面をなす。口唇部より下に前頭三角筋のくびきりした刻目突起を貼付する。	口唇部及び突起の上下は横方向の強いナナメ調整。刻目はヘラ状原体で深く削る。脣部外面右下のハケ調整。		
30	#	#	21.0 ( 2.7) — —	口縁部は外方に強く屈曲する。口唇部は丸くおさめ、下端に刻目を施す。			
31	#	#	21.7 ( 5.8) — —	如意形口縁で、口唇部は丸くおさめ、下端に刻目を施す。	口縁部内外面横方向の強いナナメ調整を施す。		
32	#	#	26.2 ( 5.2) — —	如意形口縁で口唇部は丸くおさめ、口唇部全面に刻目を施す。	外縁複合部を調整することができる。外面横方向のハケ調整。刻目はハケ状原体による。		
33	#	#	17.6 ( 3.0) — —	如意形口縁で口唇部は丸くおさめる。	内面に指側圧痕がある。		
34	#	#	31.8 ( 3.0) — —	直線的に立ち上がり、口唇部は凹状をなす。口唇部下端に刻目を配する。	口唇部は横方向の強いナナメ調整、端脚はつまみ出しにより突起状を呈している。		
35	#	#	— ( 3.5) — —	上斜部に段を有し、段部に刻目を配する。			
36	#	#	— ( 7.5) — —	如意形口縁で口唇部は丸くおさめ、下端に刻目を配する。	口縁部外面横方向の強いナナメ調整。口縁部内面は横方向のハケ調整。刻目はヘラ状原体による。		
37	#	#	22.3 ( 5.5) — —	如意形口縁で、口唇部は外側する面をなし、口唇部全面に刻目を配し、部分的にヘラ捺波線を施す。	口縁部内外面横方向の強いナナメ調整。外面右下のハケ調整。刻目はヘラ状原体による。		
38	#	#	19.2 ( 3.5) — —	如意形口縁を有する。	口縁部外面横方向のナナメ調整。脣部外面は右下のハケ調整。		
39	#	#	13.0 ( 8.2) 11.5 —	如意形口縁を有し、口唇部は外側する面をなし、下端に刻目を配する。	口縁部内部横方向のハケ調整。外面は縱方向のハケ調整。刻目はヘラ状原体による。	外縁全面がスッキリしている。外面脣部下半は火を吹けて厚みを削除している。	
40	#	鉢	15.5 16.2 17.5 6.7	脣部中位に最大膨を有し、口縁部はなめらかに外反する。口唇部は丸くおさめる。	口縁部外面横方向の強いナナメ調整。脣部外面縱方向のハケ調整。脣部外面横方向のヘラ磨き。	外縁全面がスッキリしている。外面脣部中位以下は火を吹けて厚みを削除している。	
41	#	鏡	— ( 3.9) — 7.3	平底。	外面横方向のハケ調整。		
42	#	#	— ( 3.4) — 8.2	#	#	外面がスッキリしている。外縁外縫部が約1mmほど火を吹けて厚みを削除している。	
43	#	#	— ( 5.0) — 10.2	#			

検査番号	登録番号	器 様	法 量 (cm)	口 径 基 準 底 径	形 無・文 標	手 法	備 考
44	S T 3	痰	— ( 4.6 ) — 7.9	平底。	外周方向のハケ調整。	外底外縁部が約1cm幅でススけている。	
45	#	#	— ( 4.5 ) — 7.5	わずかに上げ底で、舌形状の底部である。	#		
46	#	#	— ( 5.5 ) — 8.0	わずかに上げ底の底部である。	#	外底全面がススけている。	
47	#	#	— ( 4.5 ) — 6.7	平底。	#		
48	#	#	— ( 3.6 ) — 7.8	#	#	外周及び外底外縁が約1cm幅でススけている。	
49	#	筋鉗車	直径 4.3 厚さ 0.6 重量(g)11.2	調転用筋鉗車。			
50	#	#	直径 3.2 厚さ 0.7 重量(g)7.7	調転用筋鉗車。 両端より穿孔している。			
51	#	#	直径 4.5 厚さ 0.6 重量(g)7.8	調転用筋鉗車。 両端より穿孔しようとしているが貫通していない。		未製品である。	
52	S T 4	蓋	— ( 3.2 ) —	脣部外面に3条のヘラ彫沈線を配する。			
53	#	痰	32.4 ( 4.0 ) — —	外反気味に立ち上がり、底部は丸くおきめ、口唇部より下垂するようすに割目突起がつく。	突唇下に指頭圧痕がつく。 突唇の割目はヘラ状原体による。		
54	#	土製円盤	直径 4.0 厚さ 0.8 重量(g)17.7	便を転用している。			
55	#	#	直径 3.0 厚さ 0.8 重量(g)7.0	#			
56	#	#	直径 3.2 厚さ 0.7 重量(g)9.0	唇の口唇部を転用しており、口唇間の段階が残っている。			
57	#	#	直径 4.9 厚さ 0.7 重量(g)19.5	便を転用している。			
58	#	筋鉗車	直径 3.6 厚さ 0.9 重量(g)11.3	#		未製品である。	

検査番号	造構番号	器種	口径 法量 (cm) 器高 鋼後 底径	形態・文様	手 法	備考
59	S T 4	輪鉢車	直径 3.3 厚さ 0.7 重量(g) 7.7	縫を軸用している。		未製品である。
60	#	#	直径 3.7 厚さ 0.7 重量(g) 7.0	縫を軸用している。		#
61	S T 5	壺	— 5.0 — —	頭部に段部を有する。段部下に2条のヘラ模様を配する。	外側横方向のヘラ磨き。	外面にススが付着。
62	#	#	(3.2) — 9.8	断面台形状の厚い底部である。	外側横方向のナデ調整。	
63	#	甕	— (5.0) — —	如意紋口縁で、口唇部は外傾する 面をなし、下端にハケ状鋸文底体 による筋目を有す。	口唇部は横方向の強いナデ調整。 外底ハケ調整。	
64	#	#	— (6.2) — —	直線的に立ち上がり、口唇部は丸くおさめる。口唇部からわざかに 下ったところに筋目突起を貼付する。	外側縦方向のハケ調整。	外面はススけている。
65	#	#	— (2.6) — —	直線的に立ち上がり、口唇部は丸くおさめる。口唇部からわざかに 下ったところに筋目突起を貼付する。	突壁上面及び口縁部内外側横方向 のナデ調整。	
66	#	#	— (4.0) — 9.0	平底。	外側縦方向のハケ調整。	外面、外底が全面ススけている。
67	#	#	— (3.7) — 6.7	—	外側右下りの木理の粗いハケ調整。	
68	#	輪鉢車	直径 3.7 厚さ 0.8 重量(g) 10.9	縫を軸用している。		外面にススが付着している。 未製品である。
69	S T 6	壺	18.8 (2.0) — —	頭部間に段部を有せず、丸く外に カーブする口縁部で、口唇部は丸くおさめる。	口縁部内外側横方向のヘラ磨き。	
70	#	甕	— (3.5) — —	直線的に立ち上がり、口唇部は丸くおさめる。口唇部からわざかに 下ったところに筋目突起を貼付する。口唇部にも筋目を施す。	突壁上面及び口縁部内外側横方向 のナデ調整。	
71	#	#	— (5.0) — 7.7	平底。	外側左下りのハケ調整。 外底に変形をなした筋目の圧痕が付く。	
72	S T 7	#	21.0 (5.5) — —	直線的に立ち上がり、口唇部は内 面に根をなして強く屈曲する。口 唇部は外傾する縦の広い面をなす。	外側口縁部直下は、横方向の強い ナデ調整。胴部外側右下り及び縦 方向のハケ調整。	外面はススけている。
73	#	壺	— (3.2) — 6.6	平底。		

辨認番号	遺構番号	器種	法量 (cm)	口徑 器高 脚径 底径	形態・文様	手 法	備考
74	S T 7	壺	— ( 3.2) — 6.6	平底。	底部外側は横方向のナテ調整。		
75	#	#	— ( 2.3) — 9.0	わずかに上げ底。	外面縦方向のハケ調整。		
76	S K 1	#	— ( 4.1) — 8.0	逆台形状の厚い底部を有し、底部外側に断面カマボコ状の粘土帯を2条貼付している。			
77	S K 2	甕	— ( 8.7) — —	上腹部でゆるやかに屈曲し、内湾気味に立ち上がる。屈曲部外側に割目を施す。	断面に外傾接合痕を観察することができる。外面縦方向のハケ調整。割目はハケ抜地文原体による。		
78	S K 3	甕	19.3 ( 3.2) — —	口輪間にしっかりした段部を有し、口縁部は直角的に外反し、口唇部は面をなす。	内外面横方向のヘラ磨き。		
79	#	#	— ( 4.0) — 8.5	平底。			
80	#	甕	— ( 1.8) — —	如意形の口縁で、口唇部は丸くおさめ、全面に左上りの前刃を施す。	口縁部内外面横方向のナテ調整。		
81	#	#	— ( 4.5) — —	口唇端部が、わずかに外方に屈曲する。口唇部は外傾する面をなす。		割目の有無は、鑿跡が著しく不明。	
82	#	#	— ( 5.5) — 7.5	平底。		底部の接合部で削離している。	
83	#	#	27.0 ( 12.4) — —	上腹部から直線的に立ち上がり、口縁部は直角で斜をなして屈曲。口唇部は丸くおさめ、下端に割目。口唇部外側に断面三角形の割目突唇を貼付。	突唇下に指壓压痕。外側右下りのハケ調整。突唇上面及び口縁部内外面横方向のナテ調整。断面に外傾接合を観察できる。		
84	#	#	37.6 ( 8.0) — —	なめらかに外反する口縁部で、口唇部は丸くおさめ、口唇部の強いナテによって凹をなし、下端に前刃を施す。	口縁部内外面横方向。外面縦方向のハケ調整。		
85	S T 1	壺	— ( 5.5) — 12.5	上げ底の底部である。	外側縦方向のハケ調整後、横方向のヘラ磨き。		
86	#	甕	— ( 3.9) — 4.0	直線的に立ち上がり、口唇部は凹状をなし、下端に前刃を施す。	口唇部は横方向の強いナテ消痕。下端はつまみ出しによって、交差状を呈する。内面横方向。外面縦方向のハケ調整。		
87	S K 4	#	— ( 2.8) — —	直線的に立ち上がり、口唇部は丸くおさめ、口唇部より下に断面三角形の前刃突唇を貼付。	口縁部内外面及び突唇上面を横方向に強くナシする。		
88	S K 6	甕	— ( 5.0) — —	開部外側に3角のヘラ縫合縫を配する。上から2条目と3条目の沈縫間にには前刃を施す。	前刃はヘラ状原体による。		

押出番号	造形番号	器種	法量 (cm)	口唇 器高 屈筋 底径	形態・文様	手 法	備 考
89	S K 6	壺	— ( 4.3) — 9.3	— ( 4.5) — —	平底。	外面横方向のヘラ磨き。	
90	#	瓶	— ( 4.5) — —	直線的に立ち上がり、口唇部は凹状を呈し、下端にヘラ状原体による割目を施す。	口唇端部をつまみ出し、横方向に強くナメる。 外側右下りのハケ調整。		
91	#	#	— ( 4.5) — —	直線的に立ち上がり、口唇端部に割目を施す。	口唇端部をつまみ出し横方向に強くナメる。		
92	S K 8	壺	13.7 ( 8.2) — —	U型間に段部を有し、口唇部はなめらかに外反する。口唇部は丸くおさめる。	段部は粘土帯の粘付によって生じたものである。外面横方向のヘラ磨き。		
93	#	#	— ( 3.8) — 9.5	円盤状のしっかりした底部。	外面全面へラ磨き。		
94	#	#	— ( 2.0) — 8.4	わずかに上げ底状の底部である。	外側左下りのハケ調整。		
95	#	瓶	26.2 ( 6.0) — —	如意形の口縁で口唇部は丸くおさめ、左上りの割目を全面に施す。	口唇部内外面横方向の強いナメ調整。 外側縦方向のハケ調整。		
96	#	#	23.5 ( 8.3) — —	他と比較して底部が異なる。如意形の口縁で、口唇部は丸くおさめ、全面に割目を施す。	外面横方向のハケ調整。		
97	S K 9	#	18.5 ( 4.3) — —	上側然にしっかりした段部を有し、段部以下が欠損している。如意形の口縁で口唇部は丸くおさめ、全面に左上りの割目を施す。	段部は粘土帯複合の際に生じたものである。割目はヘラ状原体による。		
98	#	#	18.2 ( 6.6) — —	口唇部はゆるく外反する。口唇部は凹状をなし、下端に割目を施す。	口唇端部をつまみ出した際付いた指壓痕が、口唇部下端の上に残る。口唇部及び口唇部外側横方向の強いナメ調整。		
99	#	#	28.0 ( 6.2) — —	直線的に立ち上がり、口唇部は丸くおさめる。口唇部にはは接して断面三角形の突帯を貼付。	断面に外側端部を観察することができます。突帯下に貼付の際についた指圧痕が残る。口唇部内外面及び突帯上下を横方向に強くナメする。		
100	#	#	— ( 1.3) — 2.7	平底。	底部内面に指壓痕を認める。		
101	#	#	6.2 ( 3.0) — —	口唇部はわずかに外反し、口唇部は丸くおさめる。	内外面ナメ調整。		
102	S K 10	#	— ( 2.0) — 4.5	平底。			
103	S K 14	#	— ( 5.0) — —	直線的に立ち上がりの口唇部で、口唇部は丸くおさめる。口唇部よりわずかに下ったところに断面三角形の割目突帯を貼付。	突帯の上下を横方向に強くナメ調整。		

押抜番号	連機番号	器 枠	法 番 (cm)	口径 規格 耐候性 属性	形態・文様	手 法	備 考
104	S K14	要	— ( 2.9 ) — —	上脣部に段を有し、如意形の口縁部を有するものである。 咬部に斜目を施す。	粘土密接合によって生じた段部である。		
106	S K15	要	— ( 22.0 ) 42.8 —	緩やかな盛りをもつ。	外面横方向へのハケ廻き。		
106	S K17	#	25.0 ( 10.0 ) — —	口脣間に段部を有し、口縁部はなめらかに外反、口唇部は面をなす。			施成がきわめて悪い。
107	#	#	11.2 ( 7.0 ) — —	直線的に立ち上がり、口唇部は丸くおさめる。		#	
108	#	要	18.0 ( 8.5 ) — —	直線的に立ち上がり、口唇部は外傾する面をなす。	口縁部を外方につまみ出し横方向にナード。		
109	#	#	18.3 ( 5.4 ) — —	直線的に立ち「」がり、口唇部は凹状をなす。口唇部下端に斜目を施す。	#		
110	#	#	— ( 4.8 ) — —	口縁部はわずかに外反し、口唇部は凹状をなす。口唇部下端に斜目を施す。	口縁部内外面横方向のナード調整、 外面横方向、内面横方向のハケ調整。		
111	#	#	— ( 5.8 ) — —	口縁部は如意形に外反し、口唇部は丸くおさめる。	口縁部外面及び脣部内面に指圧圧痕あり。		
112	#	#	— ( 4.0 ) — —	上脣部に段部を有する。	外面横い横方向のハケ調整。		
113	#	#	18.5 ( 5.0 ) — —	口縁部はわずかに外反し、口唇部は凹状をなす。	口縁部下端を外方につまみ出して おり、その際の指圧圧痕が口縁外 面に残っている。		
114	#	#	22.6 ( 3.0 ) — —	口縁部は如意形に外反し、口唇部は丸くおさめ、全面に斜目を施す。			
115	#	体	27.0 6.5 — —	段部を有し、なめらかに外反する口縁部である。口唇部は面をなす。			
116	#	紡錘車	直径 4.0 厚さ 0.6 重量(g) 10.4		転用紡錘車で、外側にハケ目が残る。		
117	S K18	要	19.5 ( 5.6 ) 15.8 — —	口縁部は如意形に外反する。口唇部は面をなし、全面に斜目を施す。	表面に外板接合部を観察すること ができる。 背面右下りのハケ調整。		
118	#	#	— ( 7.8 ) — —	上脣部でわずかに屈曲し、直線的に立ち上がる。外面の凸面部に断面三角形の細い突起を貼付。	背面右下りのハケ調整。		

押因番号	造構番号	器種	法量 (cm)	口縫 器高 器脚 底径	形態・文様	手法	備考
119	S K 18	唐	— ( 2.5 ) — —	直線的に立ち上がり、口唇部は丸くおさめる。口唇部に接して断面三角形の突部を貼付する。	突部の上下を横方向に強くナヂる。		
120	#	#	— ( 3.9 ) — —	口縫部はわずかに外反し、口縫部は四次状を呈する。下端は突部状をなし、刻目を施す。	口縫部は横方向の強いナヂ調整。下端はつまみ出し、外面後方向、内面側方向のハケ調整。		
121	#	#	— ( 4.5 ) — 8.0	平底。	外側縫方向のハケ調整。	外面の外縫が約1cm軸で調査にスライドしている。	
122	#	#	— ( 3.5 ) — 9.0	上げ底状を呈する。		蓋の可能性あり。	
123	#	鉢	11.8 ( 2.5 ) — —	口縫部は直線的に外方に立ち上がり、端部は丸くおさめる。			
124	S D 1	唐	— ( 5.0 ) — 9.0	平底。			
125	S X 1	#	27.0 ( 10.5 ) 23.8	直線的に立ち上がる脚部から口縫部は、突出状の段を有して外反する。口唇部は丸くおさめ、口縫部以下に刻目を施す。	口縫部の突部は脚部欠巻より大きく、前部はヘラ状原体で「D型」に施している。段部にも刻目を施す。	口縫部は上方部外縫は右下り及び横方向の刻目を施す。	口縫部は上方部外縫は右下り及び横方向の刻目を施す。
126	#	#	18.1 ( 7.0 ) — —	口縫部は如意形に外反し、口縫部は丸くおさめ、全面に刻目を施す。	前部はヘラ状原体による。外側縫方向のハケ調整。		
127	#	#	22.5 ( 7.0 ) — —	口縫部は如意形に外反し、口縫部は丸くおさめ。口縫部下端に強い刻目を施す。	口縫部内外側縫方向のナヂ調整。前部は棒状工具で右上りに施す。		
128	#	#	20.7 ( 6.0 ) 19.8 —	直線的に立ち上がる脚部から口縫部は丸く外反し、口縫部上面は面をなし、縫部に深く深い刻目を施す。	口縫部内外側縫方向のナヂ調整。所縫に内縫接合部を認める。外側縫工具による縫方向のナヂ調整。		
129	#	#	— ( 3.5 ) — —	口縫部は直線的に立ち上がり、口縫部は四次状をなし、下端は突部状をなし。	口縫部及び口縫部内部は横方向の強いナヂ調整。口縫部下端はつまみ出している。外面縫方向のハケ調整。		
130	#	#	22.6 ( 6.8 ) 20.6 —	口縫部はゆるやかに外反し、口縫部は外側する面をなし、下端に刻目を施す。	口縫部及び口縫部内部は横方向のナヂ調整。		
131	#	#	21.6 ( 5.6 ) — —	上脚部にしっかりとした段部を有し、口縫部は如意形に外反する。口縫部は外側する面をなし、下端に刻目、脚部にも刻目を施す。	口縫部は横方向の強いナヂ調整。前部はヘラ状原体による。		
132	#	#	— ( 4.0 ) — —	上脚部に段部を有し、如意形に外反する。口縫部は外側する面をなし、下端に刻目を施す。	外面は右下りのハケ調整。段部の上端はナヂによりハケ目を消している。断面に外縫接合部を認める。		
133	#	#	22.0 ( 4.5 ) — —	直線的に立ち上がり、口縫部は四次状を呈し、口縫部から下垂するよう刻目欠巻を施す。	突部をつまんで横方向に強くナヂる。内面に指頭压痕あり。(右手競指と思われる)。	口縫部内部に筋膜みり。	

排卵番号	遺傳番号	器種	法量 (cm)	口径 脛高 脛径	形態・文様	手 法	備 考
134	SX1	蟹	24.0 ( 4.5 ) — —	口縫部は直線的に立ち上がり、口唇部は丸くおさめる。口唇部からわざかに下に、刺目突帯を貼付する。	外兩右下りのハケ調整。刺目はヘラ状原体による。	外面はススけている。	
135	#	#	32.0 ( 8.0 ) 31.4 —	口縫部は如意形に外反し、口唇部は丸くおさめる。口唇部下半に強い刺目を施す。	口縫部外面に指頭压痕。口縫部内外側は鉛板工具で横方向に強くナゲる。刺目は「D」字でヘラ原体による。	#	
136	#	#	38.8 ( 4.8 ) —	口縫部は直線的に立ち上がり、口唇部は面をなす。口唇部より下にしつりとした刺目突帯を貼付する。	突帯上面及び口縫部内外脛横方向の強いナゲ調整。刺目はヘラ状工具による。外面縦方向のハケ調整。	外側のハケ調整は突帯貼付後に行う。	
137	#	#	29.8 ( 14.5 ) 28.4 —	直線的に外方に立ち上がる脚部から、口縫部は段を有し、直立する。口唇部は面をなし、口唇部上半にわざかにしりとした刺目突帯を貼付。	段部は粘土膏の外側接合部に発生したものである。刺目はヘラ状原体による。外面は縦及び斜め方向の軽いハケ調整。	口縫部外面のハケ調整は突帯貼付前に行う。	
138	#	#	21.8 ( 7.5 ) 21.0 —	口縫部は直線的に立ち上がり、口唇部は尖り気味。口唇部には「突帯」はつまみ出しか、貼付が不明。	口縫部内外脛横方向のナゲ調整。	突帯には刺目が施されていないと考えられるが、磨耗が著しい。	
139	#	#	— ( 4.0 ) — 8.4	わざかに上げ底状の底部。断面台形状を呈する。	外面ハケ調整。		
140	#	蟹	— ( 4.0 ) — 10.4	上げ底状の底部。			
141	#	蟹	— ( 6.2 ) — 9.2	わざかに上げ底状を呈する。	外面ハケ調整。	外面はススけている。	
142	#	鉢	31.2 ( 6.6 ) — —	口縫部は段を有し、なめらかに外反する。口唇部は外傾する面をなす。	段部は粘土膏接着によって生じたもの。外面縦方向のヘラ感。		
143	SX2	蟹	— ( 8.5 ) — —	頭胸部に弱い段を有し、段の下に2条以上に1条のヘラ振込線。脚部は1条のヘラ振込線を複数に入れ区画し、その中に4条単位の下弦の重強文を配する。	外面ヘラ感。		
144	#	#	— ( 5.0 ) — —	ヘラ振込5条単位の上弦の重強文が見られる。			
145	#	#	— ( 6.5 ) 24.8 —	頭胸部に2条のヘラ振込線を配し、それより上に4条からなる複数山形文と、下に5~7条単位の上弦の重強文を配する。			
146	#	#	6.1 ( 5.4 ) 13.0 —	口縫部はなめらかに外反し、口唇部は丸くおさめる。頭胸部にヘラ振込線を配する。内面の頭胸間に段部あり。			
147	#	#	9.2 ( 7.9 ) 13.0 —	口縫部は比較的強く外反し、口唇部は丸くおさめる。頭胸部にヘラ振込線を配する。最大強度は脚部下半にあり。	口縫部内外側に指頭压痕あり。		
148	#	#	15.0 ( 7.0 ) — —	口縫部に段部を有し、口縫部はゆるく外反する。口唇部は面をなす。段部下に1条のヘラ振込線。	外面縦方向のヘラ感。		

神田番号	造構番号	器種	法量 (cm) 頭高 頭径 底径	形態・文様	手法	備考
149	S X 2	表	16.6 ( 3.0 ) — —	口頭間にしっかりした段部を有し、口輪部はなめらかに外反する。口唇部は丸くおさめる。口縁部内面に3条のヘラ模沈線。	口縁部内外面へヘラ磨き。	
150	#	#	11.8 ( 3.5 ) — —	口頭間にしっかりした段部を有する。口輪部は一品直線的に立ち上がり強く外反する。口唇部は丸くおさめる。		
151	#	#	23.0 ( 7.5 ) — —	口頭間にしっかりした段部を有し、口輪部は直線的に伸び、脣部近くで外反度を減める。口唇部は丸くおさめる。	口縁部外面横方向、脣部外面横方向のヘラ磨き。	
152	#	#	29.2 ( 5.0 ) — —	口頭間に弱い段部を有する。口輪部は直線をなし、1条の沈線を配する。	ハケ調整の下地の上をヘラ磨き。	
153	#	#	16.0 ( 4.5 ) — —	口輪部は比較的短く直線的に外反する。口輪部はわずかに丸味をおびた面をなす。		
154	#	#	17.2 ( 3.0 ) — —	口頭間に段部を有する。口縁部は一品直線的に立ち上がり強く外反する。口唇部は丸くおさめる。	外表面よりのハケ調整の下地の上をヘラ磨きする。	
155	#	#	24.8 ( 2.5 ) — —	口輪部はなめらかに外反し口唇部は外相する面をなし、部分的にヘラ状液体による沈線が入る。		
156	#	#	26.0 ( 4.5 ) — —	口頭間に段部を有する。口縁部はなめらかに外反し、口唇部は面をなす。		
157	#	#	13.5 ( 3.3 ) — —	口頭間にしっかりした段部を有し、口輪部はなめらかに外反する。口唇部は丸くおさめる。	段部は粘土帯接合の際に生じたもの。	
158	#	#	28.0 ( 3.5 ) — —	口頭間にしっかりした段部を有する。口輪部はなめらかに外反する。口唇部は丸くおさめ。下端がわずかに下垂気味。	外表面横方向のヘラ磨き。口唇部下をつまんで横方向にナデる。	
159	#	#	29.8 ( 4.0 ) — —	口頭間にしっかりした段部を有する。口輪部はなめらかに外反する。やや丸くおさめる口唇部はやや肥厚気味である。	段部は粘土帯接合の際に生じたもの。外表面横方向のヘラ磨き。	
160	#	#	32.0 ( 4.0 ) — —	口頭間にしっかりした段部を有する。口輪部はなめらかに外反し、丸くおさめる口唇部はやや肥厚気味である。		
161	#	#	32.0 ( 3.5 ) — —	口頭間に段部を有し、口輪部はなめらかに外反。口唇部は面をなす。	口縁部内外面横方向のヘラ磨き。	口縁外側中位がわずかに肥厚する。
162	#	#	23.4 ( 3.2 ) — —	口頭間に段部を有する。口輪部は強く外反する。口唇部は尖り気味。		
163	#	#	33.6 ( 4.5 ) — —	口頭間に段部を有する。口輪部はなめらかに外反する。口唇部は丸くおさめる。	段部は粘土帯接合の際に生じたもの。	

沖田番号	遺構番号	器種	法量 (cm)	口添 最高 肩径 底径	形態・文様	手 法	備 考
164	S X 2	並	35.0 ( 5.5 ) — —	口頭間にしっかりした段部を有する。口縁部はなめらかに外反し、口唇部は丸くおさめる。	段部は粘土帯を口縁部に貼付する。内外面ナダ調整。		
165	#	#	36.4 ( 6.3 ) — —	口頭間に一見突帯風の段部を有する。口縁部はなめらかに外反し、口唇部は圓をなす。	口縁部内面横方向のヘラ磨き。外側指紋土痕が観察。		
166	#	#	27.0 ( 5.0 ) — —	口頭間にしっかりした段部を有する。口縁部はなめらかに外反する。口縁部は圓で強く外反。口唇部は外傾する圓をなす。	外側は横方向のヘラ磨き。口縁部を強く押つける。		
167	#	#	33.0 ( 3.5 ) — —	口頭間にしっかりした段部を有する。口縁部はなめらかに外反し、口唇部は外傾する圓をなす。	内外面横方向のヘラ磨き。		
168	#	#	32.4 ( 6.0 ) — —	口頭間にしっかりした段部を有する。口縁部はなめらかに外反する。口唇部はやや丸味をおびた圓をなす。	頸部外側横方向のハケ調整。		
169	#	#	31.4 ( 7.0 ) — —	口頭間にしっかりした段部を有する。口縁部はなめらかに外反し、口唇部は丸くおさめる。	内面横方向のヘラ磨き。		
170	#	#	34.4 ( 4.2 ) — —	口頭間に段部を有する。段部以下欠損している。	段部は粘土帯接合時に生じたもの。		
171	#	#	38.0 ( 5.4 ) — —	口頭間に段部を有する。口縁部は比較的に直線的に外反する。縫部は著しく外傾している。口唇部は圓をなす。	#		
172	#	#	39.0 ( 5.0 ) — —	口頭間に弱い段部を有する。口縁部はなめらかに外反する。口唇部は丸くおさめる。	内外面横方向のハケ調整を施す。段部は粘土帯接合時に生じたもの。		
173	#	#	36.0 ( 4.4 ) — —	口頭間に弱い段部を有する。口縁部は直線的に外反する。口唇部は丸味をおびた圓をなす。			
174	#	#	28.8 ( 10.3 ) — —	口頭間に段部を有する。口縁部はなめらかに外反し、口唇部は丸くおさめる。	口縁部外側横方向、頭部外側右下りのヘラ磨き。		
175	#	#	28.8 ( 16.0 ) — —	口頭間に段部を有し、口縁部はなめらかに外反する。口唇部は丸くおさめる。	頭部外側横方向のハケ調整。		
176	#	#	( 16.0 ) 51.0 — —	頭部間に段部を有する。	段より上は右下り、段より下は横方向のヘラ磨き。 断面に外傾接合部を観察できる。		
177	#	#	( 18.5 ) 52.0 — —	#	段より上は横及び右下りのヘラ磨き。		
178	#	#	52.0 ( 3.7 ) — —	口頭間に弱い段部を有する。口縁部はなめらかに外反し、丸味をおびた口唇部にはヘラ幅沈線を入れる。	内外面ヘラ磨き。		

神田番号	造構番号	器 構	法量 (cm)	口径 器管 底径	形態・文様	手 法	備 考
179	S X 2	盤	— ( 3.6) — 6.4	— ( 4.5) — 12.3	上げ底で断面凸形をなす底部。 平底。	外側右下りのハケ調整。内面へラ磨き。	
180	#	#	( 6.0) — 8.3	( 3.5) — 11.7	#	外面横方向及び右下りのヘラ磨き。	
181	#	#	— ( 4.0) — 20.3	— — —	わずかに上げ底状の底部。 口縁部は直線的に立ち上がる。口 唇部は凸状をなし、口唇部に接し て前日突起がつく。	内側の上下及び口唇部は横方向の 強いナダ調整。	
182	#	#	— ( 4.0) — —	— — —	口縁部は直線的に立ち上がる。口 唇部は凹状をなし、口唇部に接し て前日突起がつく。	内側の上下及び口唇部は横方向の 強いナダ調整。	
183	#	裏	17.2 ( 3.5) — —	— — —	口縁部は直線的に立ち上がり、端 部は尖る。口唇部は凹状をなし、 下邊に前日突起を貼付。	内側の上下及び口唇部は横方向の 強いナダ調整。 外面縦方向のハケ調整。	外面にスヌが付着。
184	#	#	25.0 ( 7.0) —	— — —	口縁部は直線的に立ち上がり、口 唇部は尖り気味。口唇部より下に 突起を貼付している模様がある。	口縁部及み内側横方向のハケ調整。 外 面 突 起 帶 下 板 状 工 具 によ る 模 方 向 の ナ ダ 調 整	
185	#	#	22.0 ( 3.0) — —	— — —	口縁部は直線的に立ち上がり、口 唇部は丸くおさめる。口唇部に接 してしっかりと尖った突起を貼付。	口唇部及び突起の上下は横方向に 強くナダる。突起の初目はハケ状 模様による。外面ハケ調整。	外面スヌけて いる。
186	#	#	22.5 ( 3.5) — —	— — —	口縁部は外反し、端部は尖る。端 部に接して前日突起がつく。	突起及び口縁部をつまんで横方 向に強くナダる。突起下に指捺痕 がつく。	
187	#	#	25.0 ( 2.8) — —	— — —	口縁部は外反して立ち上がり、口 唇部は丸くおさめる。口唇部より上 に断面三角形の前日突起を貼付す る。	突起の上下及び口縁部内外横方 向の強いナダ調整。	
188	#	#	— ( 5.6) — —	— — —	口縁部はわずかに内側気味に立ち 上がり、端部は丸くおさめる。 口縁部に 2 条の前日突起を有する。	下段の突起が上段の突起よりも太 い。前日は共にヘラ状原体による。 外面ハケ調整。口縁部内側横方 向のハケ調整。	
189	#	#	21.3 ( 6.2) — —	— — —	口縁部は直線的に立ち上がり、口 唇部は丸くおさめる。端部より少 し下に前日突起を貼付。	突起の上下を横方向に強くナダる。 外 面 右 下 り の ハ ケ 調 整	外面がスヌけ ている。
190	#	#	20.0 ( 4.0) — —	— — —	口縁部は如意形に外反し、口唇部 は外側する形をなす。口唇部下端 に前日。	口唇部及び口縁部内外横方 向の強いナダ調整。外 面 木 理 の 細 かい ハ ケ 調 整	
191	#	#	18.8 ( 2.5) — —	— — —	口縁部は直線的に立ち上がり、口 唇部は丸くおさめる。端部よりお ずかに下ったところに前日突起を 貼付する。		
192	#	#	28.4 ( 3.2) — —	— — —	口縁部は如意形に外反し、口唇部 は外側する形をなし、下端に前日 を貼す。	前日はハケ状原体により強く擦く 模様。口唇部及び口縁部内側は横 方向の強いナダ調整。	口縁部外面に スヌが付着。
193	#	#	— — —	— — —			

辨認番号	選択番号	器種	法量 (cm)	口唇部 脣径 脣径 脣径	形態・文様	手 法	備 考
194	S X 2	斐	18.0 ( 3.4 ) — —	口縁部はわずかに外反して立ち上がり、口唇部は四状をなす。	口唇部及び口縁部外周横方向の強いナゲ調整。外周前方内面右下がりのハケ調整を施す。		
195	#	#	23.6 ( 2.0 ) — —	口縁部は如意形に外反し、口唇部は四状をなす。口唇部の上下端に刻目をほどこす。	口唇部及び口縁部外周横方向の強いナゲ調整。		
196	#	#	20.0 ( 3.0 ) — —	口縁部はわずかに外反して立ち上がり、口唇部は外傾する面をなす。口唇部下端に刻目。	内面右下り、外周横方向のハケ調整。	外周はススけている。	
197	#	#	24.0 ( 5.3 ) — —	口縁部はわずかに外反する。口唇部下端をつまみ出し、下端に刻目を施す。上胸部に段部を有する。	口唇部下端をつまみで横方向に強くナゲする。口縁部内面横方向外周横方向のハケ調整。	上胸部の段部は枯木帯接合時に生じたもの。	
198	#	#	20.4 ( 5.4 ) — —	上胸部に段部を有し、口縁部はなめらかに外反する。口唇部は外傾する面をなし、わずかに下垂する。	口唇部及び口縁部内面横方向の強いナゲ調整。内面右下り、外周横方向のハケ調整。		
199	#	#	24.4 ( 4.0 ) — —	口縁部はわずかに外反して立ち上がり、口唇部は外傾する面をなし、下端に刻目を施す。	口唇部は横方向の強いナゲ試り。	上胸部で「く」の字状に屈曲する形態の可動性あり。	
200	#	#	21.5 ( 3.5 ) — —	口縁部は如意形に外反。口唇部は丸くおさめ、下端に刻目を施す。	口唇部内面の屈曲部は弱い後をなす。	外周がススけている。	
201	#	#	25.0 ( 4.0 ) — —	口縁部は如意形に外反する。口唇部は丸くおさめ、全面に刻目を施す。	刻目はハケ状論文原本による。口縁部外周横方向のナゲ調整、制部外周横方向のハケ調整。	外周は火を受けて赤く変色し、ススけている。	
202	#	#	19.5 ( 2.5 ) — —	口縁部はわずかに外反する。口唇部は丸くおさめ、下端に刻目を施す。	刻目は棒状工具による。	外周はススけている。	
203	#	#	19.1 ( 5.4 ) — —	口縁部は如意形に外反し、口唇部は外傾する面をなし、下端に刻目を施す。	口唇部下端をつまみ出すように横方向に強くなれる。		
204	#	#	25.0 ( 6.0 ) — —	口縁部は如意形に外反する。口唇部は外傾する面をなし、下端に刻目を施す。	刻目はラバ状原本による。口縁上端をつまみ上げるようにして横方向にナゲる。	外周はススけている。	
205	#	#	16.0 ( 3.3 ) — —	制部は張り出ず。口縁部はなめらかに外反する。口唇部は面をなし、下端に刻目を施す。			
206	#	#	17.5 ( 3.5 ) — —	口縁部はなめらかに外反する。口唇部はわざかに四状をなし、下端に刻目を施す。	口唇部は横方向の強いナゲ調整。		
207	#	#	32.0 ( 4.0 ) — —	口縁部は如意形に外反し、口唇部は丸くおさめ、下端に刻目を施す。	口縁部外周横方向のナゲ調整。		
208	#	#	18.8 ( 5.5 ) — —	口縁部は如意形に外反し、口唇部はわずかに四状をなし、下端に刻目を施す。	口唇部及び口縁部外周横方向のナゲ調整。刻目はハケ状論文原本による。制部外周横方向のハケ調整。		

神岡番号	造構番号	部種	法量 (cm)	口唇部高 胸径 底径	形態・文様	手 法	備 考
209	S X 2	廣	23.0 ( 3.5 ) — —	口唇部はわざかに外反し、口唇部は丸くおさめ、割目を施す。	口唇部内外面横方向のナデ調整。		
210	#	#	19.4 ( 1.5 ) — —	口唇部は強く折り上げられており、上部は水平をなす。口唇部は丸くおさめ、全面に両目。	口唇部内外面横方向の強いナデ調整。 割目はヘラ状原体による。		
211	#	#	22.0 ( 6.0 ) 20.8 —	口唇部は如意形に外反し、口唇部は丸くおさめ、下部に割目を施す。	顎部外面は縱方向、内面は右下りのハケ調整。		
212	#	#	19.5 ( 6.4 ) 20.6 —	盛大唇を制節部に有する。口唇部は如意形に外反し、口唇部は丸くおさめ、下端に割目を施す。	口唇部及び口唇部内面横方向の強いナデ調整。		
213	#	#	22.0 ( 7.0 ) 19.6 —	口唇部は如意形に外反する。口唇部は丸くおさめ、下部に強く割目を施す。	口唇部内外面に指根上筋が痕跡。 外面右下りのハケ調整。割目はハケ状施文原体による。		
214	#	#	24.4 ( 7.0 ) 22.6 —	口唇部は如意形に外反する。口唇部はわざかに凹状をなす。	口唇部上端をつまみ出し横方向に屈曲する。口唇部内外面横方向、外面右下りのハケ調整。割目はヘラ状原体による。		
215	#	#	— ( 4.6 ) 26.2 —	上制節にしっかりした段部を有し、下端に割目。	段部は粘土器の場合によって生じたもの。割目はハケ状施文原体による。		
216	#	#	22.3 ( 5.0 ) —	口唇部はなめらかに外反する。口唇部は丸くおさめ、下端に割目を施す。	口唇部内外面横方向のナデ調整。 外面右下りのハケ調査。	外側がスズけている。	
217	#	#	26.6 ( 3.5 ) — —	口唇部は如意形に外反し、口唇部は丸くおさめ、全面に割目を施す。 上制節にしっかりした段部を有する。	口唇部内外面横方向のハケ調整の後、横方向のナデ調整。		
218	#	#	22.3 ( 4.0 ) — —	口唇部は大きく外反する。口唇部は丸くおさめ、下端に割目を施す。	割目はヘラ状原体による。		
219	#	#	24.4 ( 7.4 ) 11.3 —	口唇部は如意形に外反し、口唇部は丸くおさめる。	外面縦方向のハケ調整。		
220	#	#	22.0 ( 1.8 ) — —	口唇部はなめらかに外反し、口唇部は凹状をなす。			
221	#	#	— ( 2.5 ) — 6.4	上げ底の底部。			
222	#	#	16.4 ( 4.5 ) 16.0 —	口唇部は強く屈曲し下垂する。	外縫接合痕を認める。		
223	#	#	— ( 7.3 ) — 7.5	平底。	内板状工具による横方向の擦痕あり。		

押抜番号	造営番号	器種	法量 (cm)	口縁 最高 最低 底径	形態・文様	手 法	備 考
224	S X 2	甕	— ( 5.2 ) — 7.4	上げ底であるが、極めて厚くつくりられ、縁部は高台状に外方に張り出す。	外面底方向のハケ調整。		
225	#	高杯	24.2 ( 3.5 ) — —	杯部は直線的に外方へ立ち上がり、口縁部はわずかに外反する。口縁部内面に波部あり。	外周へラ磨き。		
226	#	#	— ( 2.0 ) — 22.8	脚縁部は粘土帯貼付による段部を有する。表面はわずかに凹状をなす。	内外面へラ磨き。		
227	#	#	— ( 3.0 ) — 14.5	直線的に立ち上がる脚部である。端部は丸くおさめる。	外面はハケ調整後にヘラ磨き、内面横方向のナデ調整。		
228	#	钵	21.0 ( 5.0 ) — —	口縁部はなめらかに外反し、口唇部は丸くおさめる。			
229	#	#	24.8 ( 11.5 ) 22.6 —	口縁部は外方に彎曲。口縁部は尖り気味。	内面へラ磨き。		
230	S X 3	盃	— ( 6.5 ) — —	口縁間に断面三角形の突帯を有する。	突帯の上下を横方向に強くナデする。 外面右下りのヘラ磨き。		
231	#	#	— ( 10.0 ) 10.0 5.4	較大径を脚部中央に有する。脚縫間に弱い段部を有する。	上脚部内面に指壓痕がみられる。		
232	#	#	16.4 ( 12.0 ) — —	口縫間にしっかりした段部を有する。口縁部はなめらかに外反し、口唇部は直角をなす。	段部は口縁部外側に粘土帯を貼付したものである。口縁部内外面横方向のハケ調整の後ヘラ磨き。		
233	#	#	16.2 ( 3.0 ) — —	口縁部はなめらかに外反し、口唇部は垂直を直角をなす。	内外面へラ磨き。		
234	#	#	— ( 14.0 ) 35.0 —	継やかな張りをもつ。	外面へラ磨き。内面は部分的に横方向のハケ調整。		
235	#	#	— ( 3.5 ) — 6.9	円柱状の底部である。	脚部外面へラ磨き。底部外周ナデ調整。		
236	#	#	— ( 4.5 ) — 8.2	—	脚部外周縦方向のハケ調整。		
237	#	#	— ( 4.5 ) — 8.1	平底。	—		
238	#	#	— ( 3.4 ) — 8.0	—			

辨別番号	遺構番号	器種	法量 (cm)	口径 深幅 底径 底径	形態・文様	手法	備考
239	S X 3	壺	— ( 5.6) — 8.7	— ( 4.0) — 12.9	わずかに上げ底状の底部。 平底。	外面部付近は木理の無い縱方向のハケ調整。	
240	P 4	#	— ( 3.5) — 11.2	— ( 4.0) — —	底部が外方にわずかに張り出る。	底部外間に削りの痕跡を認める。	
241	#	#	20.0 ( 4.0) — —	上部部はわずかに内側にカーブし、 口唇部は立ち立ち。口唇部は丸く おさめ。口唇部よりわずかに下に 周目突起を配行。	外面部ハケ調整。	外面部の3ヶ所に擦圧痕あり。	
242	#	甕	26.0 ( 5.5) — —	上部部にしっかりとした段部を有す る。口唇部は丸くおさめ、全面に 周目を施す。	外面部の下に擦圧痕が認められる。 口縁部内面及び文様の上下に擦圧 方向の強いナテ調整。外面部ハケ調整。	外面部はススけ ている。	
243	S B 2	#	17.1 ( 4.5) — —	口唇部は直線的に外反する。口唇 部は外傾する面をなし、下端に刻 目を配する。	口縁部外表面に横方向のナテ調整。	P 4 出土。	
244	S X 3	#	18.2 ( 4.0) — —	口唇部は如意形に外反し、口唇部 は丸くおさめ、全面に周目を施す。	口縁部外表面横方向の強いナテ調整。 外面部は右下がりのハケ調整。		
245	#	#	31.0 ( 3.0) — —	口唇部は如意形に外反する。口唇 部は面をなし、下端に周目を施す。	口縁部外表面横方向のナテ調整。外 面部右下がりのハケ調整。		
246	#	#	33.5 ( 7.0) — —	口縁部はわずかに外反する。 口唇部は丸くおさめる。	口縁部外表面横方向のヘラ磨き。 側面部左下がりのヘラ磨き。		
248	P 8	甕	22.0 (14.6) 21.9 —	口縁部は如意形に外反する。 口唇部は外傾する面をなし、下端 に周目を施す。	口縁部内外表面横方向のナテ調整。 外面部及び横方向の木理の粗いハ ケ調整。		
249	P 21	#	— ( 3.5) — 7.2	上げ底の底部。			
250	S B 2	#	— ( 4.0) — —	上部部に段部あり。	ハケ調整後ヘラ磨き。	P 2 出土。	
251	#	#	— ( 4.0) — 7.9	平底。	外面部横方向のハケ調整。	#	
252	#	#	— ( 7.0) — 7.9	わずかに上げ底で、断面台形を呈 する。		内面がススけ ている。 P 2 出土。	
253	P 14	土製円盤	直径 3.3 厚さ 0.6 重さ(g)7.0	裏剥離を軽用。			

標因番号	遺構番号	器種	法量 (cm) 口径 器高 側径 底径	形態・文様	手 法	備考
254	S X 3	紡錘車	直徑 5.8 厚さ 1.0 重量(g)16.4	軸用紡錘車で外側から穿孔痕あり。		
255	P 5	#	直徑 5.9 厚さ 1.0 重量(g)14.5	軸用紡錘車で内側から穿孔痕あり。		
256	S X 1	#	直徑 2.4 厚さ 1.3 重量(g) 4.0	輪子型紡錘車である。 孔は4mm内外を有する。		

第32表 造構出土石器観察表

標因番号	遺構番号	器種	計測値 (cm.g) 最大長 度・最大 厚さ	材質	特 徴	備考
257	—	石 刃	10.7 4.6 1.4 100.0	蛇紋岩	基端部は尖形をなし、刃部に向かって幅を広めていく。 全面に研磨痕が見られる。	基層出土。
258	—	#	19.4 8.5 1.6 320.0	粘板岩	基端部の一部が欠損しているが、ほぼ原形を保つ。裏半面長方形で両側縁は両面から調整している。刃側両面に研磨の擦痕が走っている。	#
259	S T 5	/ミ粒石刃	(2.8) (2.1) (0.4) 3.3	頁岩	刮片を利用したもので、片面に刃部をつくり出す。刃部に横方向の擦痕がわずかに認められる。	
260	#	#	3.1 1.8 0.7 5.0	砂岩	自然礫をそのまま利用している。刃部であり刃部に横方向の擦痕が認められる。	
261	#	#	5.4 (2.1) (1.1) 18.8	結晶片岩	殆どが既に欠損している。自然礫をそのまま利用し、更に片面から刃部をつくり出している。未製品であり刃部は完成していない。	
262	#	#	5.4 3.1 1.4 32.4	頁岩	自然の礫を部分的に削離し形成している。片刃であり、前面刃部に右下がりの擦痕がわずかに残る。	
263	S X 2	#	(9.0) (4.0) (1.2) 66.0	綠色岩	大型始刃石刃の基部の一部である。外面は丁寧に研磨されている。	
264	S K 10	#	12.6 4.5 4.7 304.0	#	大型始刃石刃の刃部と基部の一部である。刃部は丁寧に研磨されているが、基部はまったく研磨されていない。未製品の段階で欠損したものである。	
265	S T 3	#	20.9 8.9 5.3 1521.0	#	大型始刃石刃の未製品で、研磨前の段階で欠損したもの。	
266	S T 4	叩石	8.1 8.4 5.9 546.0	チャート	外面全面に擦痕あり。	

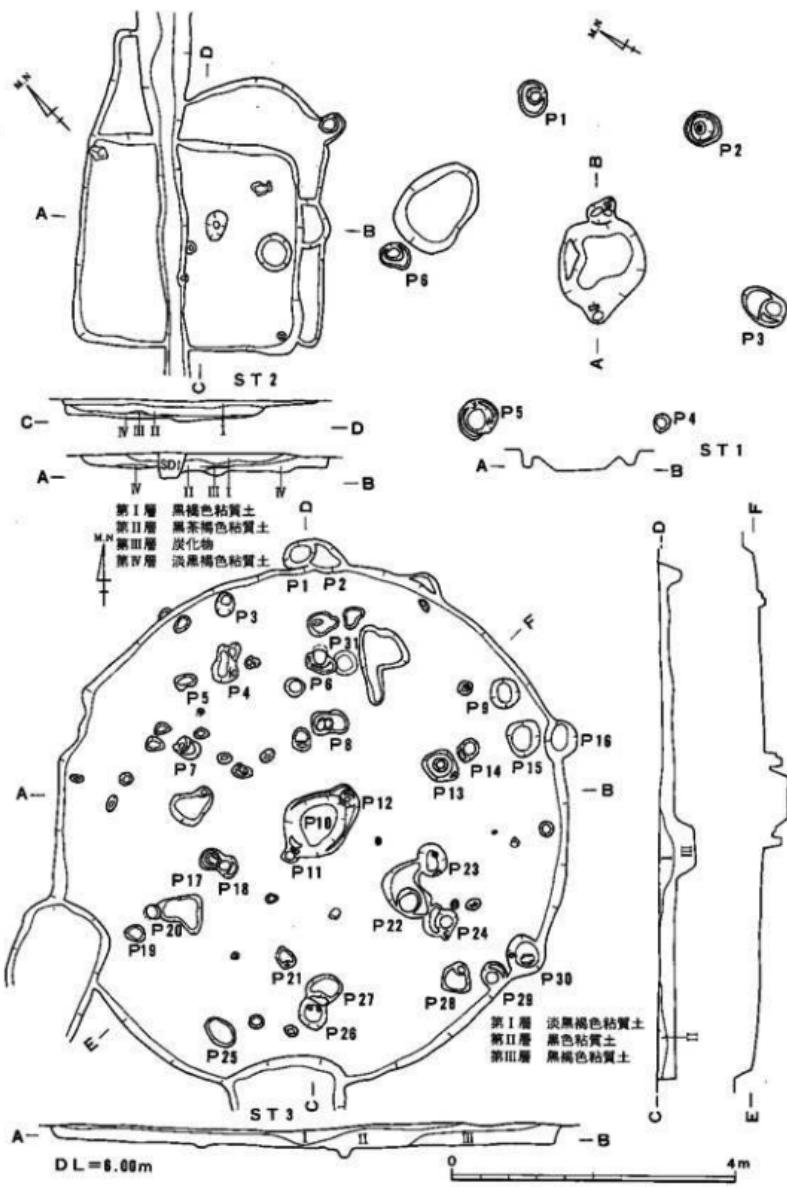
持田番号	遺構番号	跡種	計測値 (cm.-%)	最大長 最大幅 最大厚 度	材質	特徴	備考
267	S T 4	印石		( 3.8) 5.9 1.7 85.0	砂岩	自然の河原石を利用したもの。 縁部に済痕がある。	
268	S T 4	#		11.6 10.2 7.3 935.0	#	河原石をそのまま利用したものである。 両面の中央部が棒打によってくぼみ、縁部も全周に済痕がある。	
269	S X 2	#		9.6 9.2 4.6 566.0	#	河原石をそのまま利用したものである。 全縁部に著しい済痕がみられる。	
270	P 7	#		12.5 11.0 4.8 895.0	#	河原石をそのまま利用したものである。 縁部の一部に済痕がみられる。	
271	S T 3	#		6.8 7.7 3.6 249.0	#	河原石の二面面を階段状削離によって成形し、その面を使用しており、著しい済痕がみられる。	
272	S K 5	#		( 5.5) ( 8.5) 2.8 185.0	#	河原石をそのまま利用している。半分以上欠損しているが、縁部に済痕がみられる。	
273	S X 2	#		11.0 7.8 3.9 417.0	#	河原石をそのまま利用している。両面と全縁部に済痕がみられる。	
274	#	#		( 5.9) ( 7.3) 2.3 183.0	#	河原石をそのまま利用している。半分以上が欠損しているが、縁部の一部に済痕がみられる。	
275	#	#		7.1 4.9 1.0 56.5	#	扁平な河原石で縁部が研磨されたように磨耗している。	
276	S K 5	#		9.5 6.9 4.2 397.0	#	河原石をそのまま利用している。縫割縫に済痕あり。また両面側縫の中央部が擦耗し、わずかにほんでいる。	ワチコのよ うな利刃の仕 方とした可 能性ある。 P 2出土。
277	#	#		12.1 6.6 2.2 245.0	緑色岩	自然面と剝離面とからなる。 縁部に済痕がみられる。	
278	S X 2	#		9.0 7.0 2.0 121.0	砂岩	河原石を縦に削ったもので自然面と剝離面とからなる。 全縁部に済痕がみられる。	
279	#	#		8.2 5.4 1.5 92.0	#	河原石を縦に削ったもので自然面と剝離面とからなる。 縁部に済痕がみられる。 両面側縫中央部がほんでいる。	
280	#	#		7.4 6.4 1.9 125.0	チャート	両面に剝離面がみられるが、片面には自然面が残る。 縁部の一部に済痕がみられる。	
281	#	#		8.0 7.0 1.5 110.0	砂岩	自然面と剝離面とからなる。 縁部全体に済痕がみられる。	

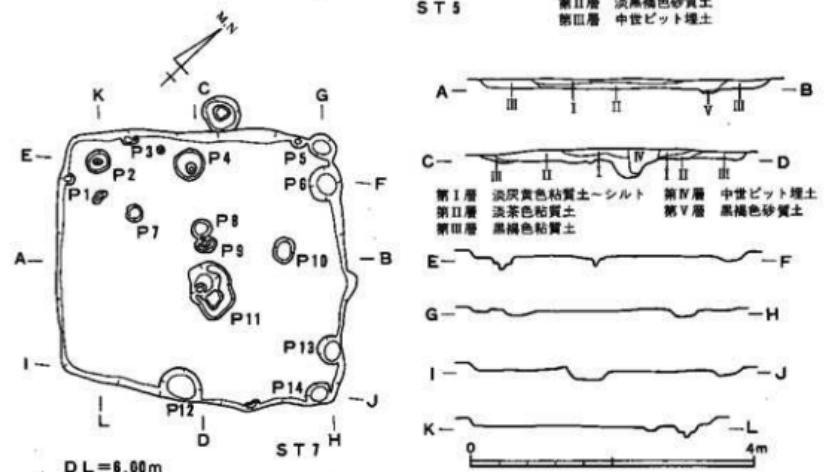
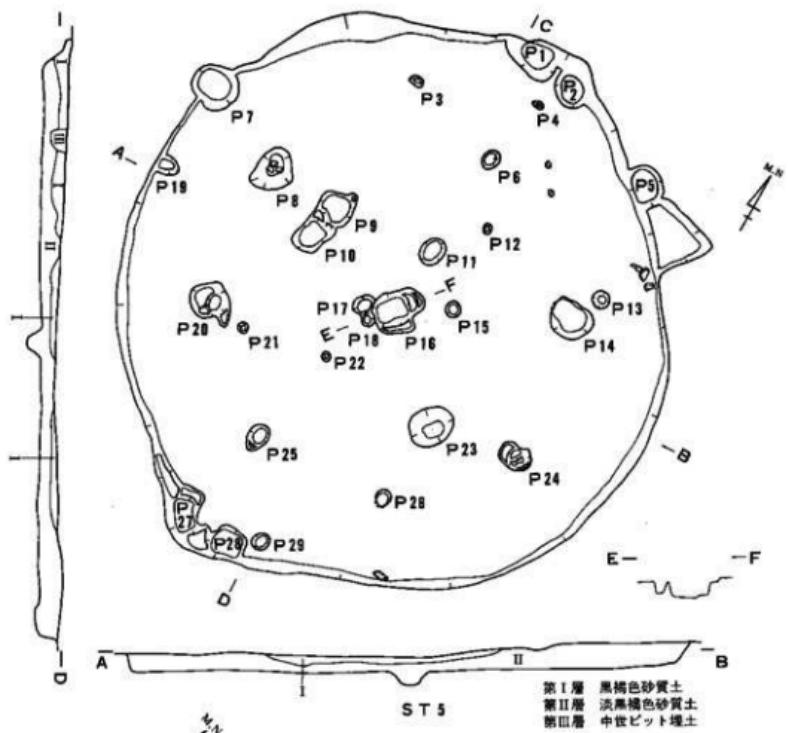
埠岡番号	遺構番号	跡種	計測値 (cm.g)	最大長 最大幅 最大厚 度	材質	特徴	備考
262	P 5	甲石		8.5 6.5 1.5 113.0	緑色岩	自然面と剥離面とからなる。 縫部全体に痕痕がみられる。	
263	P 1	*		7.0 4.4 1.0 110.0	砂岩	*	
264	S D 1	*		8.3 7.0 2.4 162.0	*	*	
265	P 3	*		6.3 5.3 1.2 90.0	緑色岩	*	
266	P 17	*		5.7 5.6 2.2 80.0	チャート	全縫部に痕痕がみられる。	
267	S T 3	*		5.2 4.7 1.8 75.0	緑色岩	平行する二割面に痕痕がみられる。	
268	P 3	*		8.3 4.2 1.6 100.0	チャート	自然面と剥離面とからなる。 縫部に痕痕がある。	
269	S K 5	*		7.0 5.9 2.2 95.0	サヌカイト	両面に粗い剥離面がみられ、縫部の一部に 使用による痕痕がみられる。	
270	S K 7	砥石		34.5 26.0 11.1 8500.0	砂岩	大型の河原石を利用している。使用面は 1面で、使用痕がも柔滑状に走っている。	P 1 出土。
271	S K 6	甲石		15.2 8.5 4.5 770.0	結晶片岩	河原石をそのまま利用したもので、36ほ どが欠損している。短側縫は磨耗してお り、長側縫の一面に痕痕がみられる。	P 1 出土。
272	S T 6	*		7.9 11.4 2.9 260.0	砂岩	河原石を長側縫の面から一筆で打削して いる。背面と鋸歯面とからなり、全縫 部に使用による痕痕がみられる。	P 5 出土。
273	P 20	*		25.5 22.0 5.7 4000.0	*	河原石を利用したもので、一面は使用に よって凹面をなす。他面は台石に利用し たもので、2ヶ所の盛みがある。	
274	S T 4	砥石		(12.0) (10.0) 5.0 885.0	緑色岩	2面を使用している。	
275	S T 3	*		17.6 9.7 7.6 1187.0	砂岩	4面を使用している。	
276	—	*		42.5 24.0 8.0 12(kg)	*	大型の砥石で中央部が使用によってへこ んでいる。大型研磨石作用のものと考え られる。	S T 3 に近接 して出土。S T 3との関連 が考えられる。

神田番号	造形番号	基 础	計測値 (cm.g)	最 大 長 度 大 幅 度 厚 度 重 量	材 量	特 徴	備 考
297	S T 1	砾 石	(11.4) ( 6.9) ( 6.0) 532.0	砂 岩		3面を使用している。	
298	S K 5	#	( 6.3) ( 8.3) ( 5.5) 310.0	#		大部分が欠損している。1面を使用している。	
299	S X 2.	#	13.8 12.6 3.8 745.0	#		河原石を利用したもので、自然面と剥離面ととなる。全体に漬痕がみられる。	
300	S T 2.	#	16.9 7.6 4.2 948.0	綠色岩		棒状をなすものであり、両端側面に漬痕がみられる。	
301	S K 5	#	20.0 12.3 4.0 1073.0	砂 岩		4面を使用している。	P 2 出土。
302	S X 2	砾 石	19.5 11.1 5.0 1845.0	#		河原石を利用したもので、両端側面に漬痕がみられる。	
303	P 10	砾 石	10.5 7.0 5.1 547.0	#		3面を使用している。	
304	S T 2	砾 石	18.8 7.0 3.3 790.0	#		棒状をなすものである。河原石をそのまま利用したもので、両端側面に漬痕がみられる。	
305	P 4	#	9.4 8.1 2.6 237.0	#		河原石を利用したもので、自然面と剥離面ととなる。全体に漬痕がみられる。	
306	S T 5	块 体	直径 11.1 重量 1630.0	チャート		完全な球形ではないが、全面に漬痕がみられ、形を整えている。	
307	S T 7	砾 石	6.3 5.6 1.4 46.4	#		全面に漬痕がみられる。	
308	S T 2	#	6.2 4.7 1.4 45.1	#		表面に粗い剥離面が残る。縁部の一部に漬痕がみられる。	
309	P 3	砾 石	10.4 6.4 2.9 280.0	#		河原石を利用して両端側面がわずかにがらくばんでいる。	ツチノコとして利用されたものか。
310	#	#	11.0 6.9 2.4 300.0	#		#	#
311	#	#	10.0 5.7 2.1 210.0	#		#	#

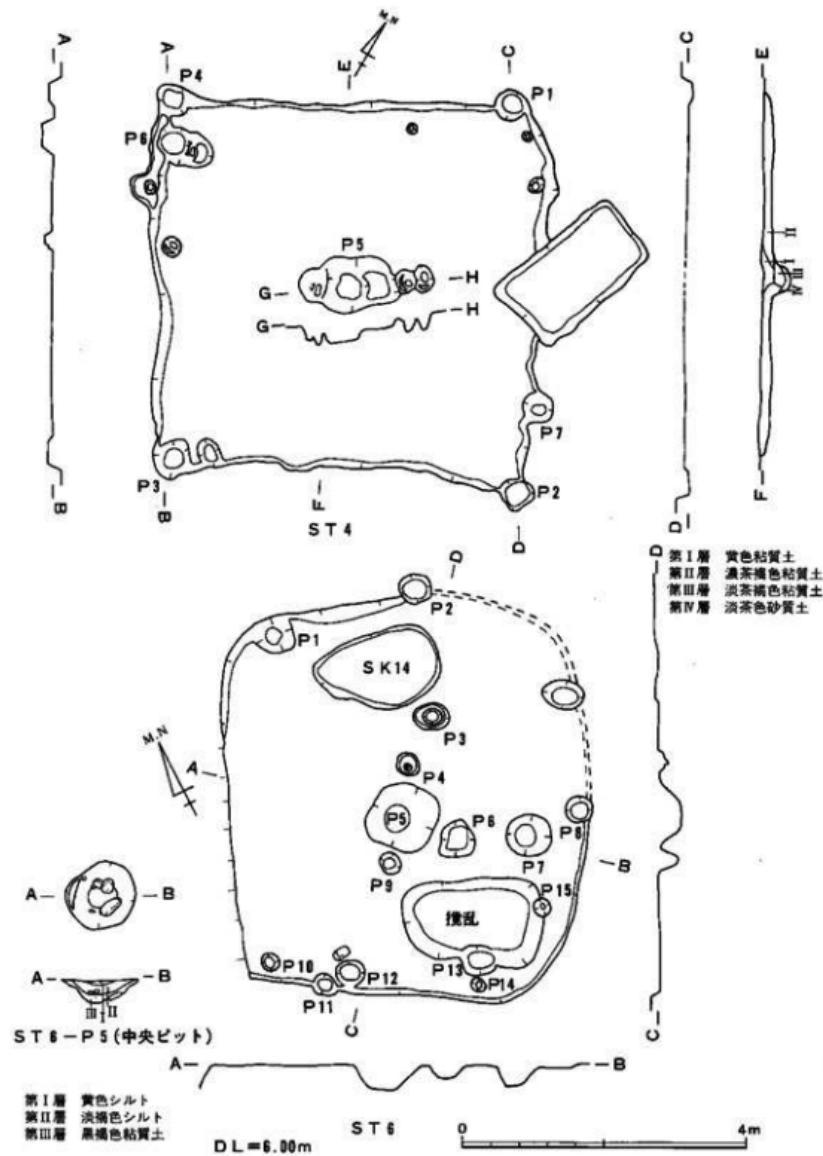
辨認番号	遺構番号	器種	計測値 (cm-g)	最大長 最大幅 最大厚 重量	材質	特徴	備考
312	S K17	石包丁		( 5.1) ( 5.0) ( 0.8) 30.0	泥岩	刃先端の破片である。刃部の形状は不明であるが、背部は波をなして屈曲している。	
313	S K2	#		6.9 3.2 0.5 15.0	千枚岩	小頭の石包丁である。一面に自然面が残るが、丁寧に研磨している。刃部は小さくつくり出しており、片刃である。	
314	S K12	#		( 8.4) ( 3.3) 0.6 17.0	泥紋岩質岩	外湾刃片刃である。全体の刃はどこが破損しているが、1箇所の円孔を確認することができる。両側より穿孔している。	
315	S K7	#		( 9.5) ( 4.6) 0.5 31.1	#	外湾刃向刀である。全体の刃はどこが破損しているが、1箇所の円孔を確認することができる。両側より穿孔している。	
316	S D1	石鎧		1.5 1.4 0.2 0.5	サヌカイト	平筋式打製石鎧。平面形は二角形で、簡單な石鎧である。刃部は両面から研磨している。	
317	S T3	#		2.8 1.5 0.4 1.2	#	いわゆる駒形鑿である。片面に主鉋雕面を残す。断面は平行四辺形で、両面から研磨している。	
318	S K10	#		2.6 1.2 0.5 2.9	#	円基式の打製石鎧である。断面は六角形で、両面から押圧削離をして、刃部をつくり出している。	
319	S T5	#		( 4.5) 0.7 0.5 1.7	頁岩	磨製石鎧の未製品である。断面は方形をなし、研磨の擦痕が顕著にみられる。	
320	#	#		( 3.6) 0.9 0.4 1.8	千枚岩	磨製石鎧で、基部と先端部が欠損している。両面とも丁寧に研磨されている。	
321	S X1	#		5.7 1.3 0.4 3.7	頁岩	刃部は鋭く研ぎ出されている。両面にシノギがあり、断面は菱形である。基部は圓から圓錐形に出ており、断面は六角形で長さ1.3cmを測る。	全面に斜めの擦痕がみられる。
322	S T5	#		7.3 1.6 0.6 12.0	#	磨製石鎧の未製品と考えられる。刃部が鋭く研ぎ出されていない。基部が欠損している。	
323	#	#		( 3.5) ( 0.7) 0.3 0.9	千枚岩	磨製石鎧の一部である。全体の形状は不明である。擦痕がみられる。	
324	S T4	ノミ状石器		3.9 1.0 0.7 5.0	頁岩	平面形は長方形、断面は方形をなす。片刃の刃部が、両端につくり出されている。	
325	S T5	#		1.9 0.8 0.5 0.8	#	片刃の刃部で、鋭く研ぎ出されている。	
326	S T4	#		8.6 1.4 0.6 4.4	チャート	河原石の端部を研ぎ出して片刃をつくっている。	

辨認番号	遺構番号	器種	計測値 最大径 最大幅 最大厚	材質	特質	備考
327	S T 5	/1枚石器	2.5 0.9 0.3 0.9	千枚岩	先端部を一部加工して刃部をつくっている。	
328	#	筋縫甲	直径 6.0  厚さ 0.5  重量 16.0	#	半分が欠損している。全周丁寧に研磨されており、0.5cmの円孔を穿っている。	
329	#	/ミ粒石器	( 6.0 ) 1.6 0.7 9.0	頁岩	先端部を両面から研ぎ出してわずかに刃部をつくり出している。	
330	#	石斧	10.0 ( 2.9 ) 0.8 36.0	#	端に欠損をしている。先端部を両側から研ぎ出して刃部をつくっている。研磨による擦痕がみられる。	
331	#	/ミ粒石器	5.2 2.8 0.6 15.0	緑色岩	薄平な削り心を利用して先端部を研磨して刃部をつくり出している。	
332	S K 17	フレーク	4.8 3.1 0.8 13.0	サヌカイト	断面のフレークで、表面に両方向の剥離面がみられる。	
333	S K 5	#	4.3 3.2 0.7 10.0	#	#	
334	S T 5	石刀	( 7.5 ) 4.6 0.8 30.2	#	台形状の剥片を利増しており、刃部は両面から押圧剥離をくわえている。	
335	#	/ミ粒石器	7.0 3.2 1.2 18.5	頁岩	石材を縦に割っており、一方の先端部にわずかに研磨擦痕がみられる。刃部をつくり出したものか。	
336	#	#	4.5 3.0 0.5 7.5	鷺岩	磨製石器の断片である。原形を推定することは難しいが刃部があらとうから、挿入柱状片刃石斧である可能性がある。	
337	S K 17	#	5.0 3.0 1.7 31.4	サヌカイト	縁部の一部に痕跡あり。	
338	S T 5	#	7.6 1.8 0.7 8.3	頁岩	粗面の段階で磨薙された未製品である。	
339	S K 17	#	7.0 2.1 0.7 15.2	#	#	

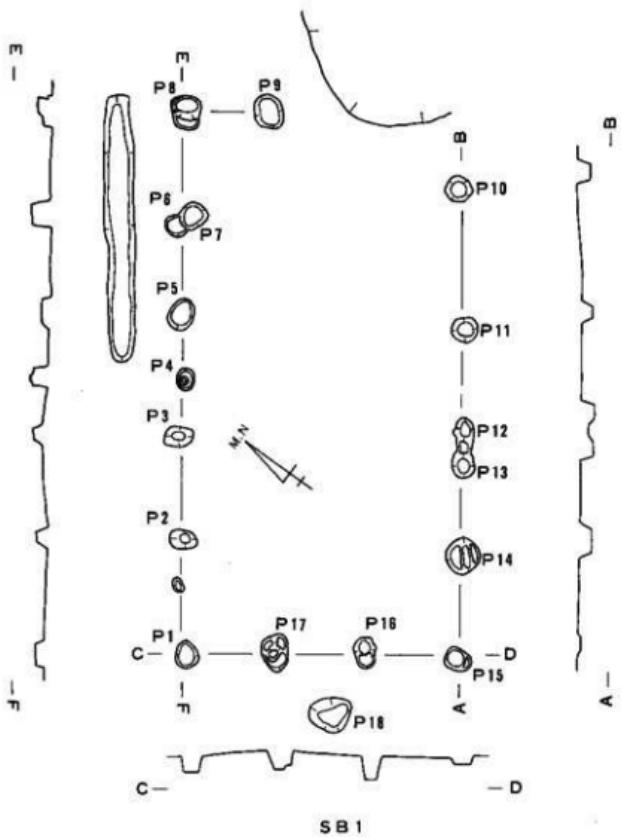




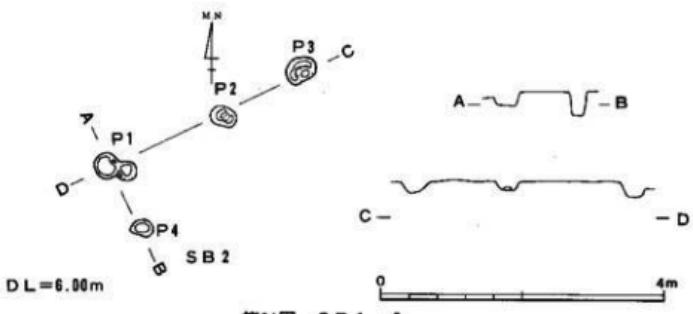
第79図 ST 5 + 7



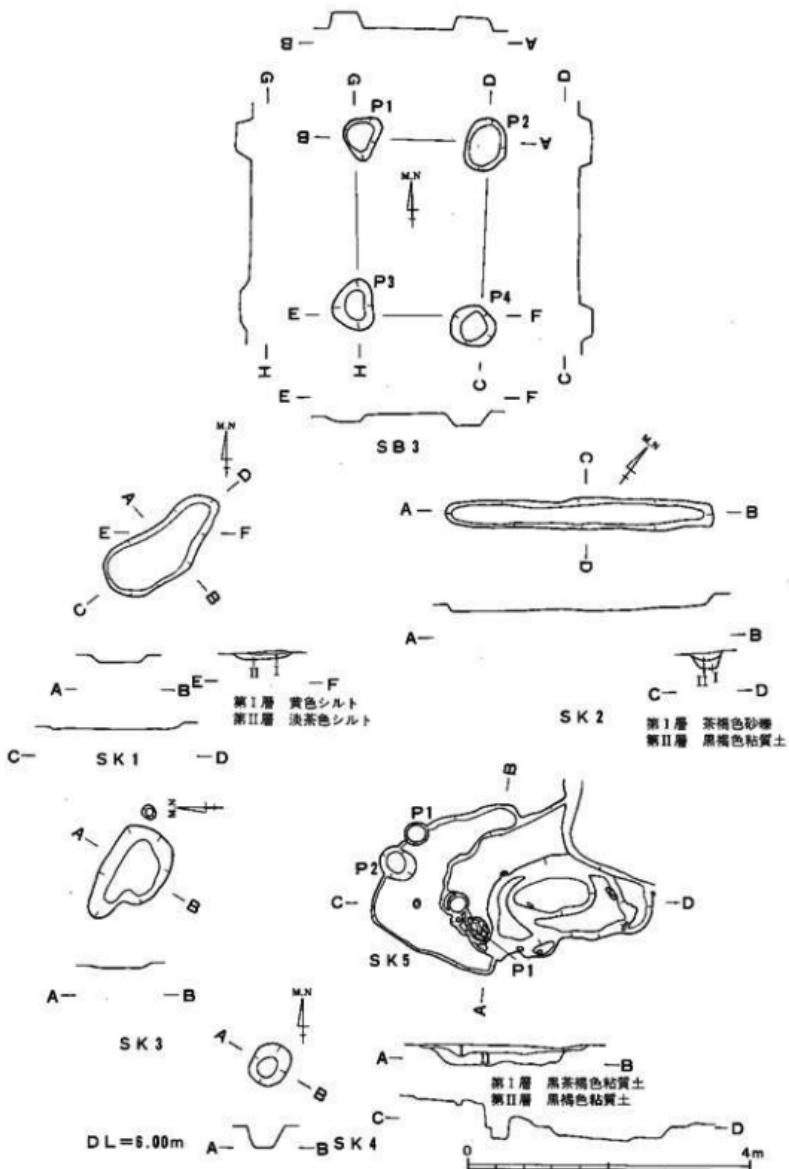
第80図 ST 4 + 6



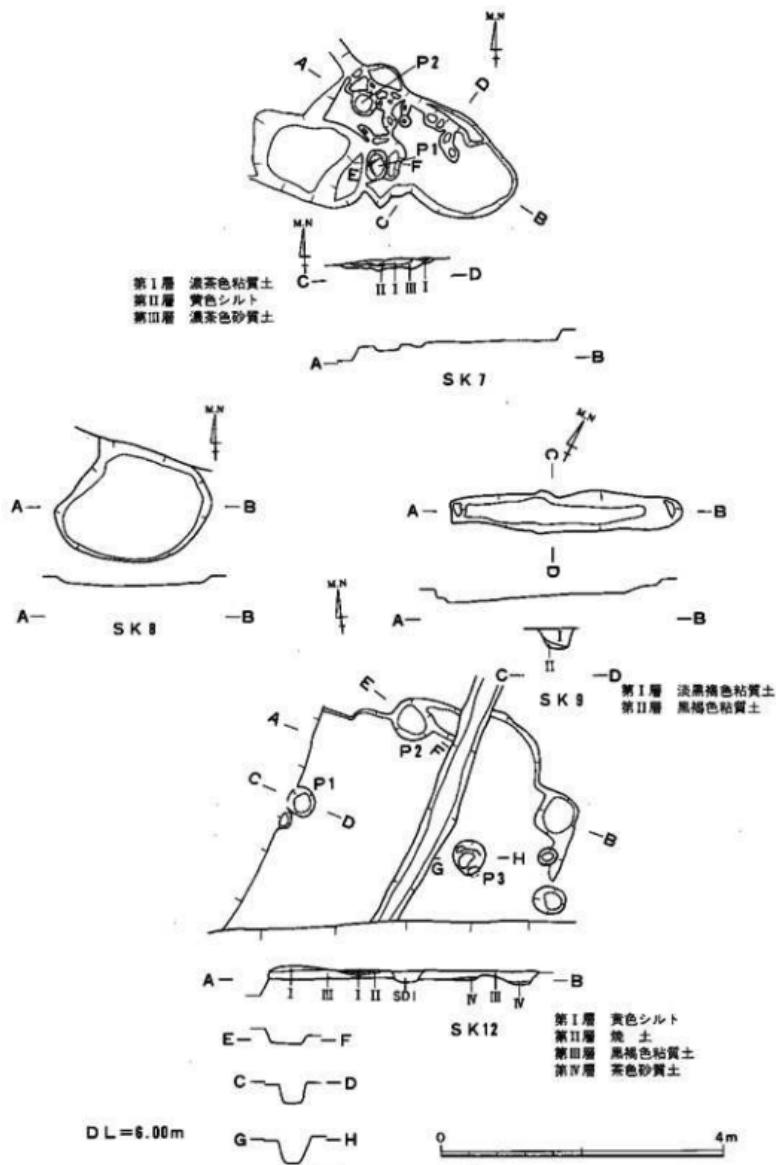
SB 1



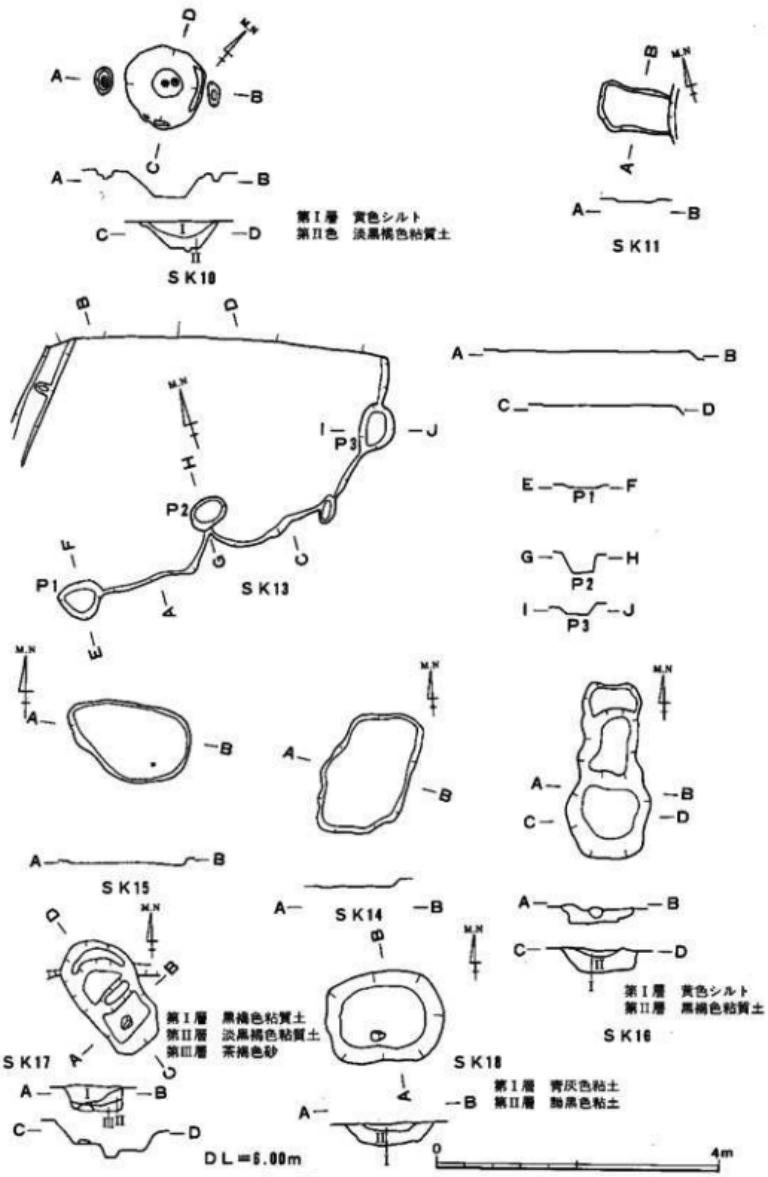
第81図 SB 1 + 2

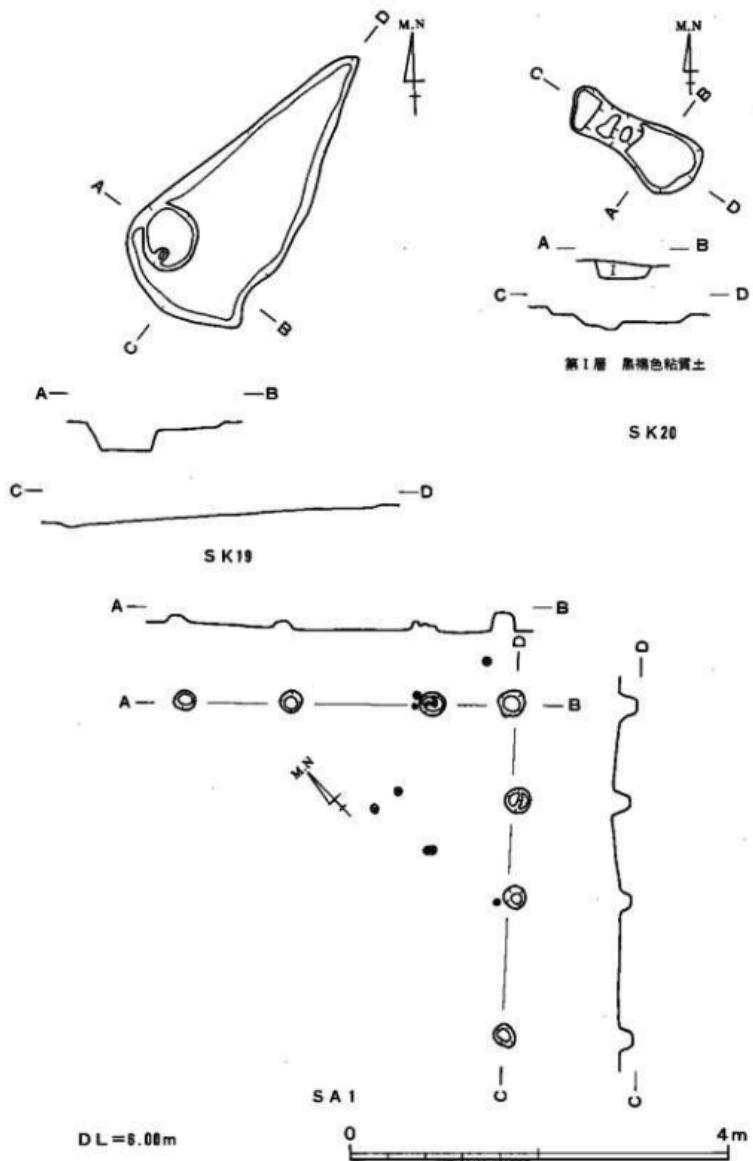


第82図 SB3、SK1~5

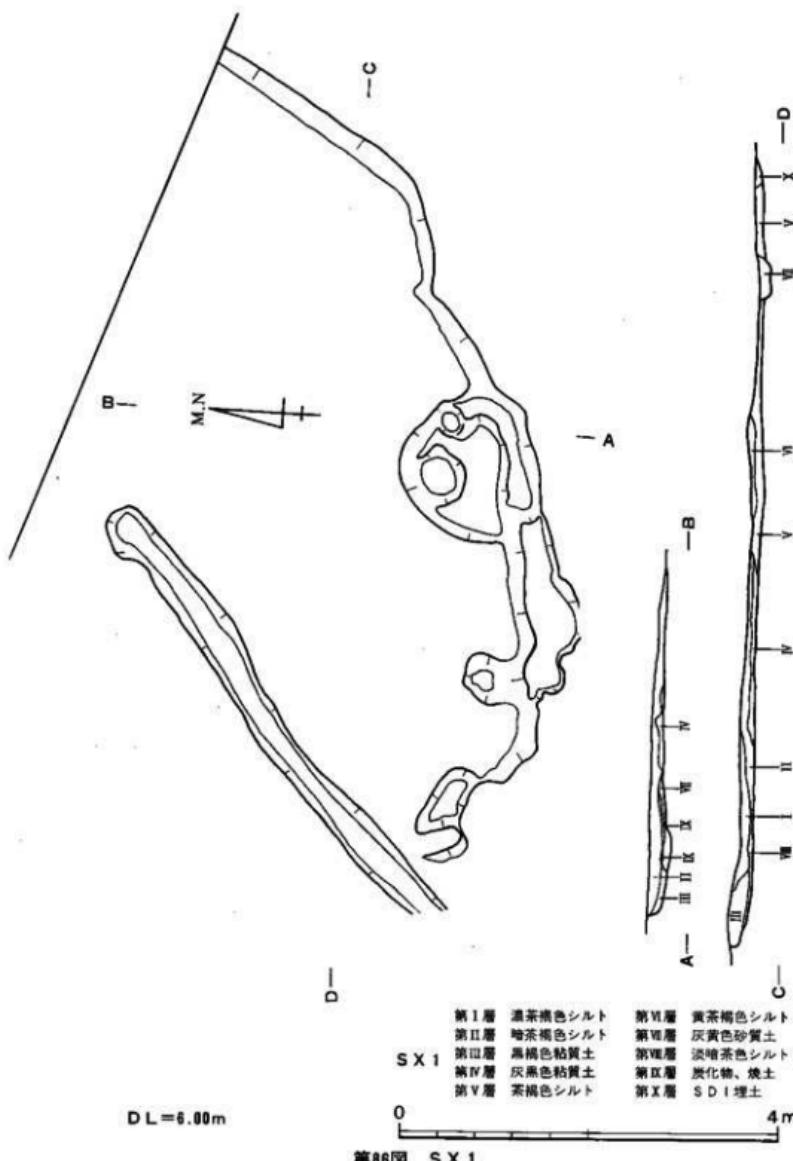


第83図 SK7~9・12

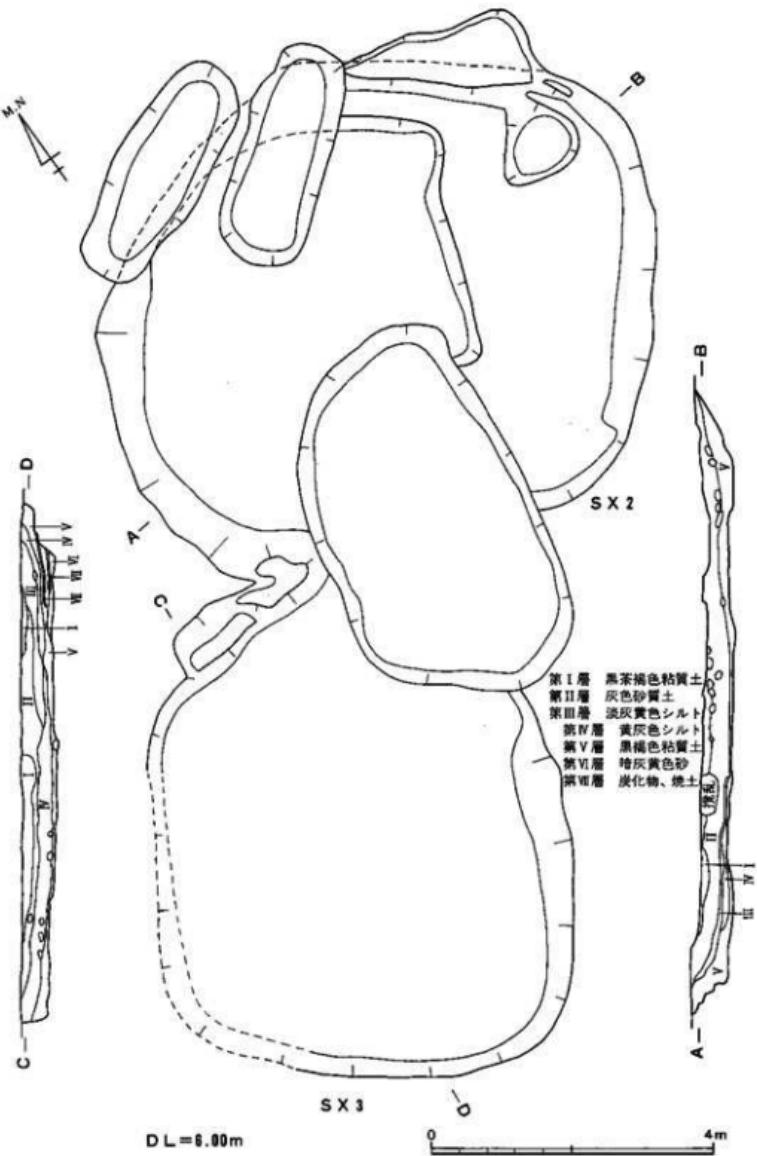




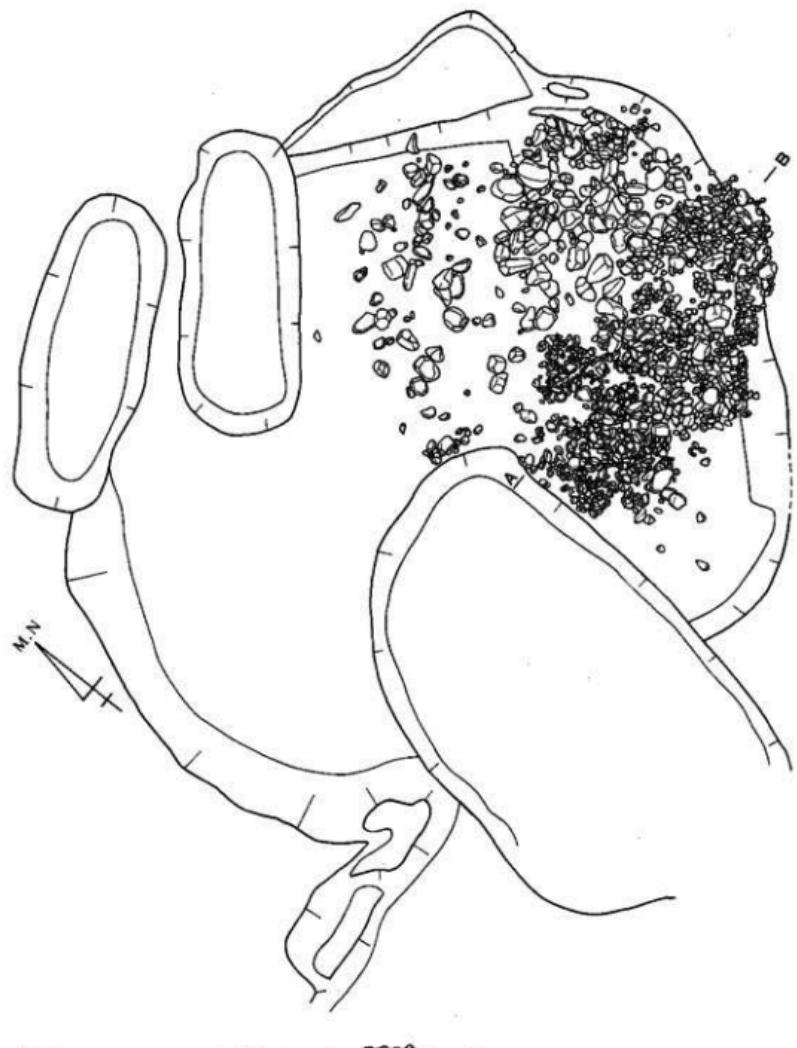
第85図 SK19・20、SA1

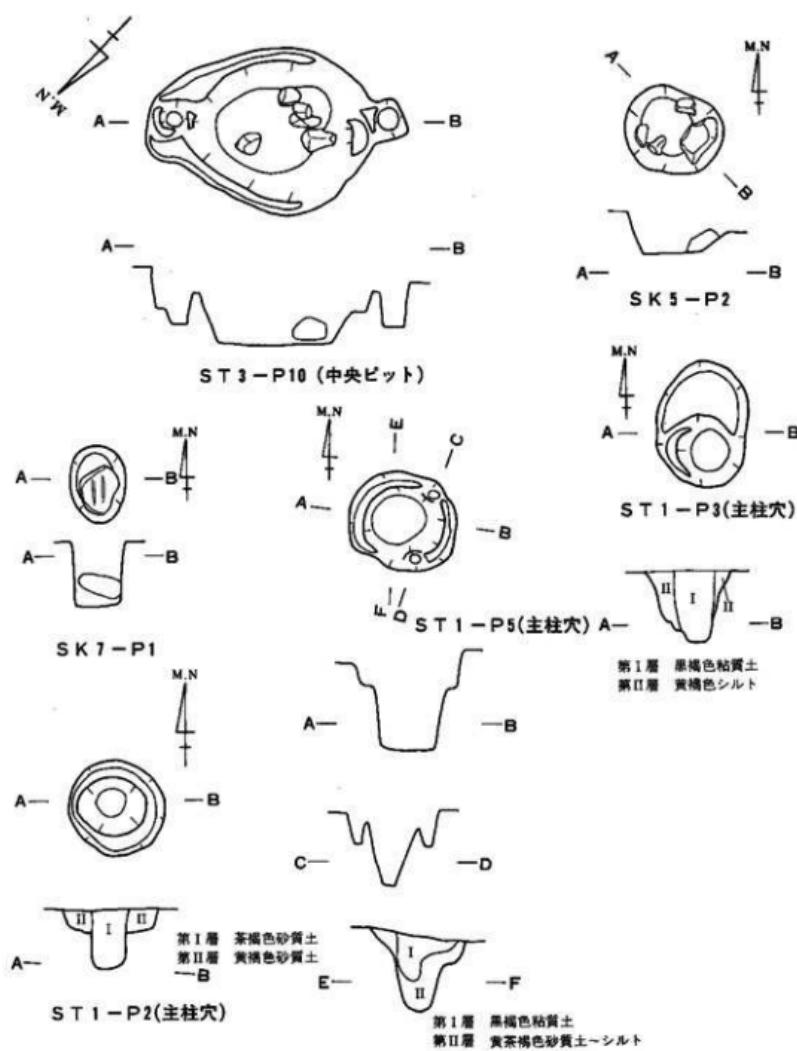


第86図 SX 1



第87図 SX 2 + 3

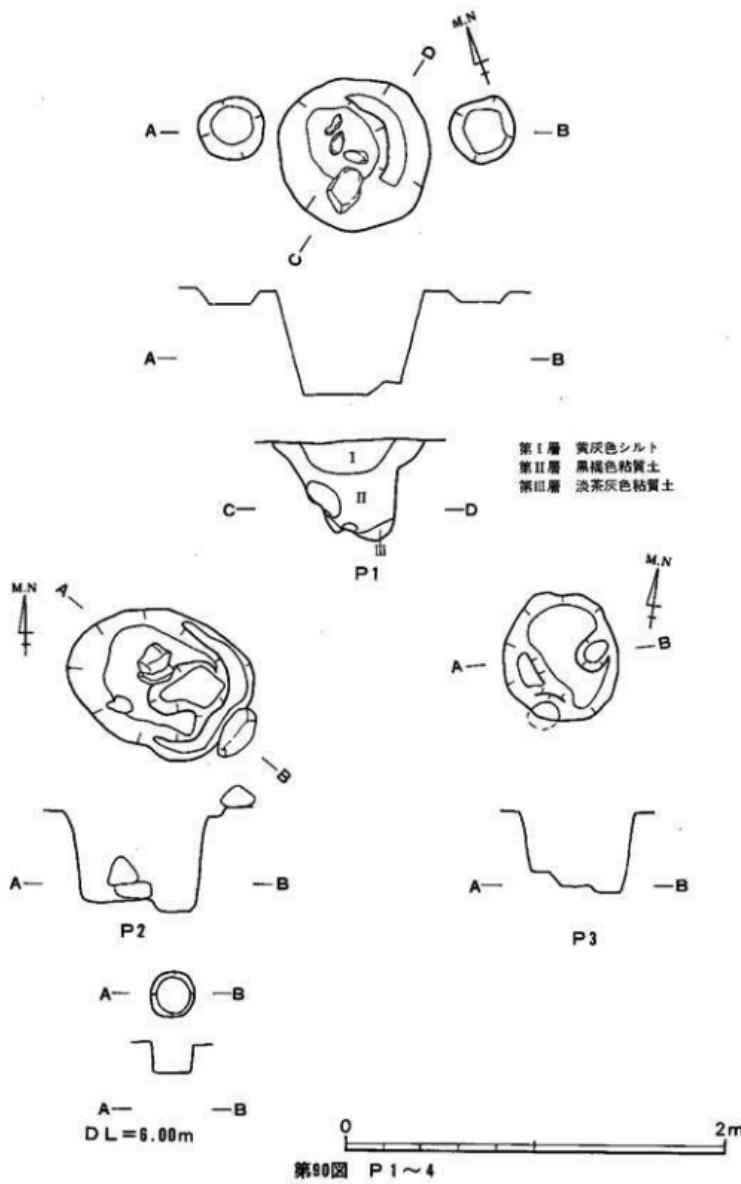


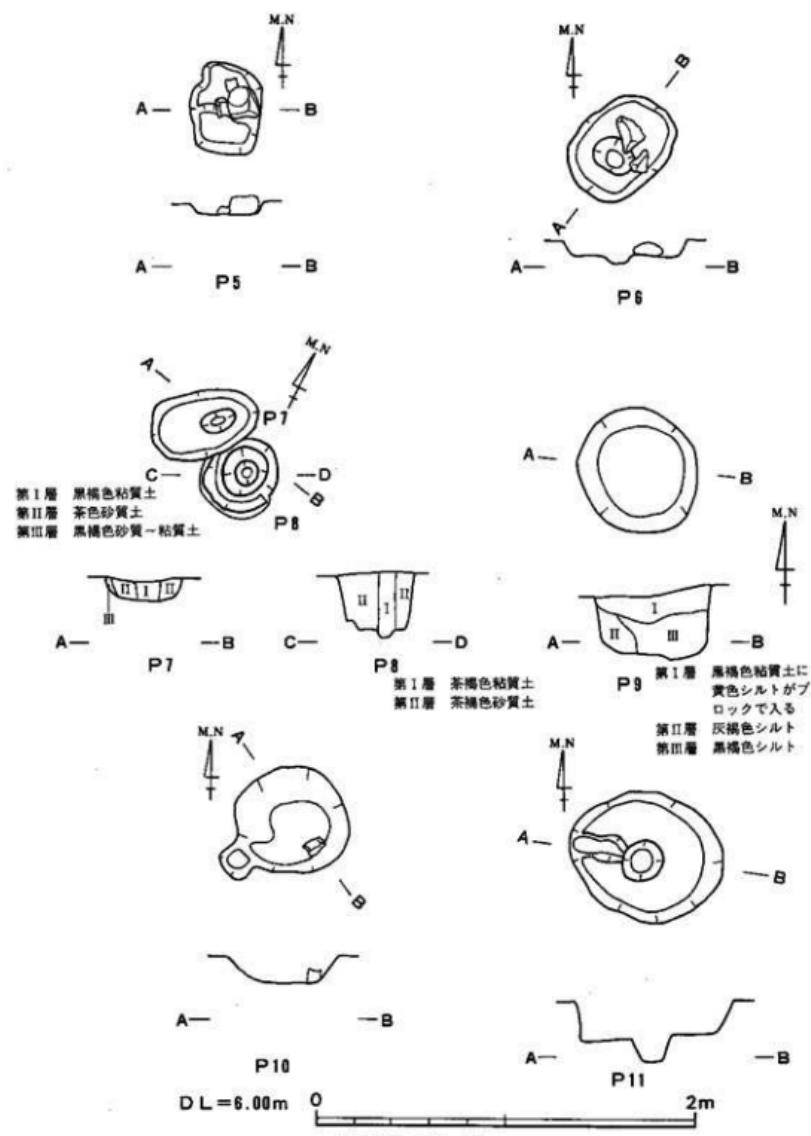


D L = 6.00m

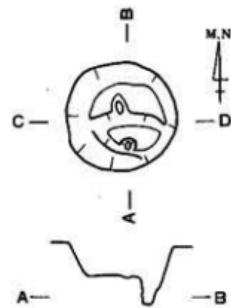
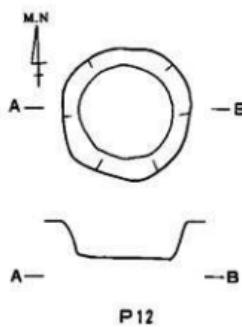
0 2m

第89図 ST1-P2・3・5, ST3-P10, SK5-P2, SK7-P1

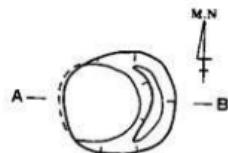
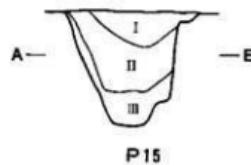




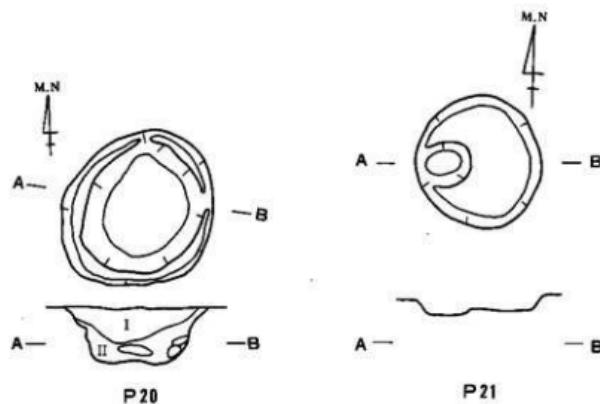
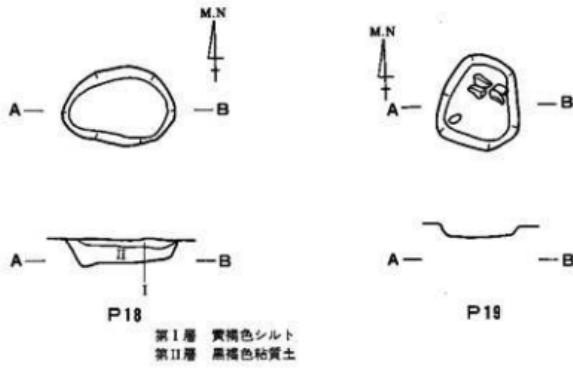
第91図 P 5~11



第I層 黄色シルト  
第II層 茶灰色砂質土  
第III層 黑褐色粘質土



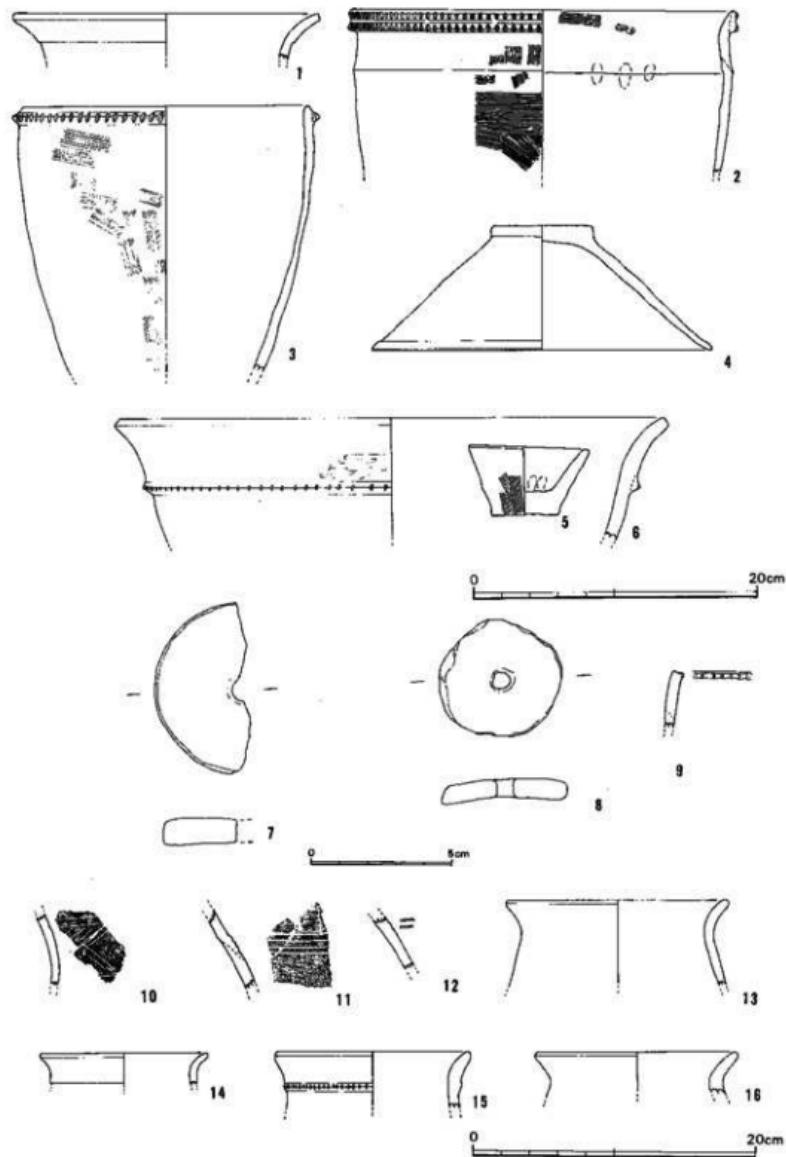
第92図 P12~17



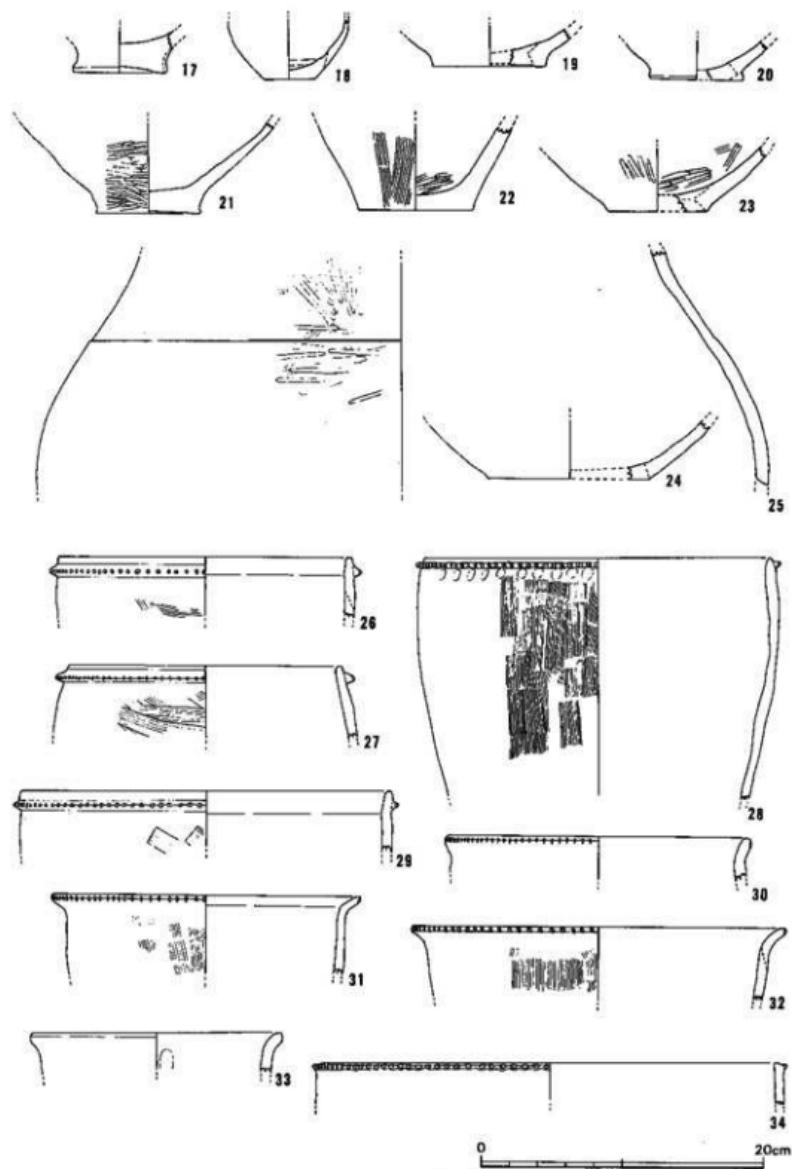
D L = 6.00m



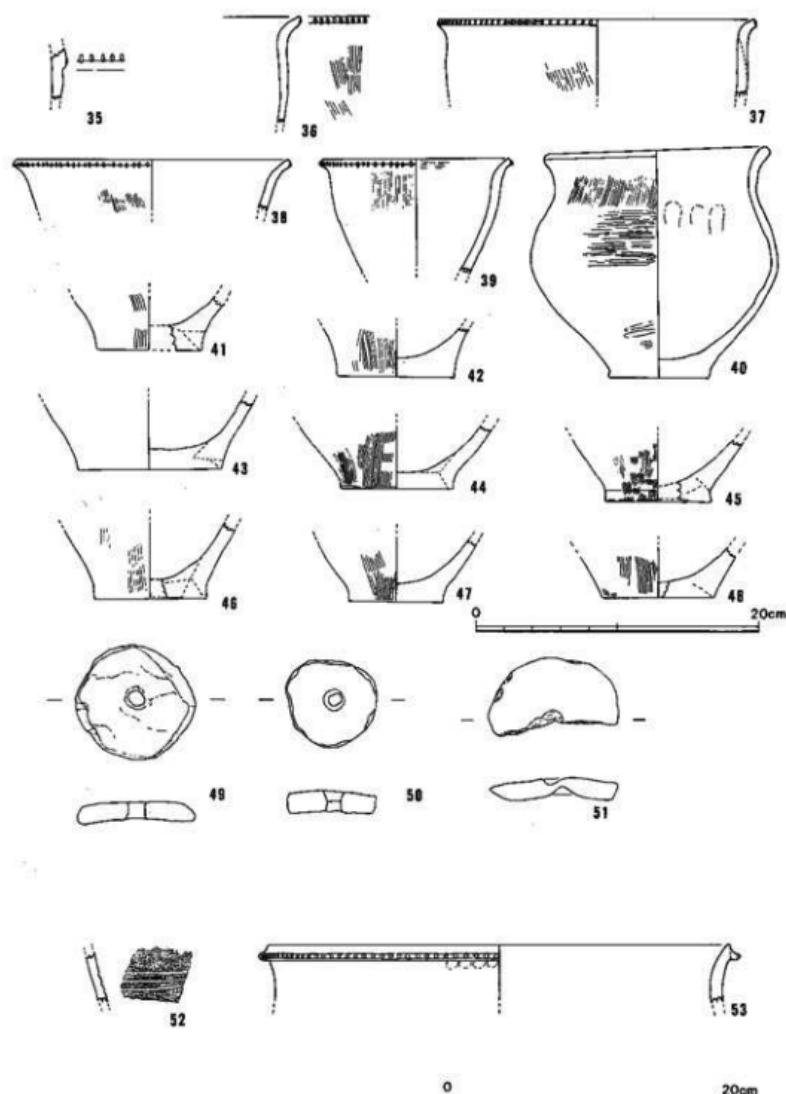
第93図 P18~21



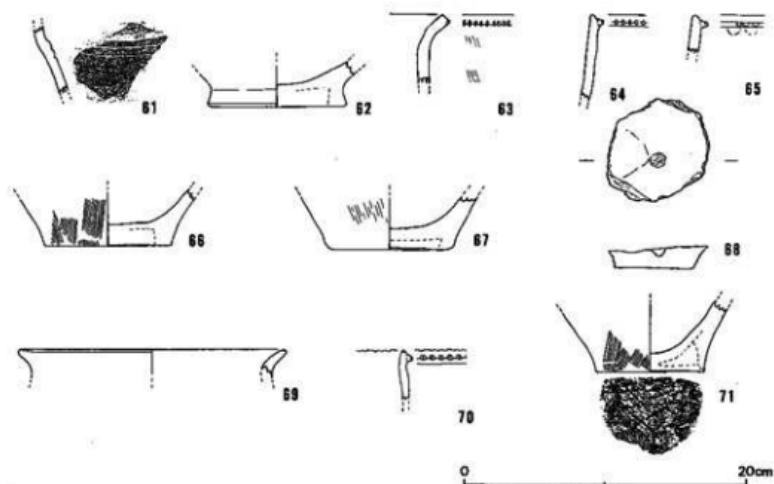
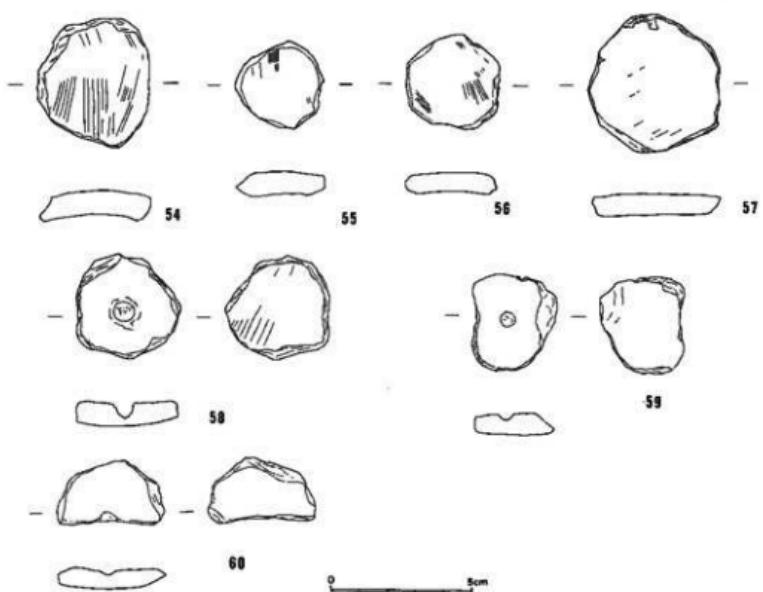
第94図 第IV層、ST 2・3 出土遺物



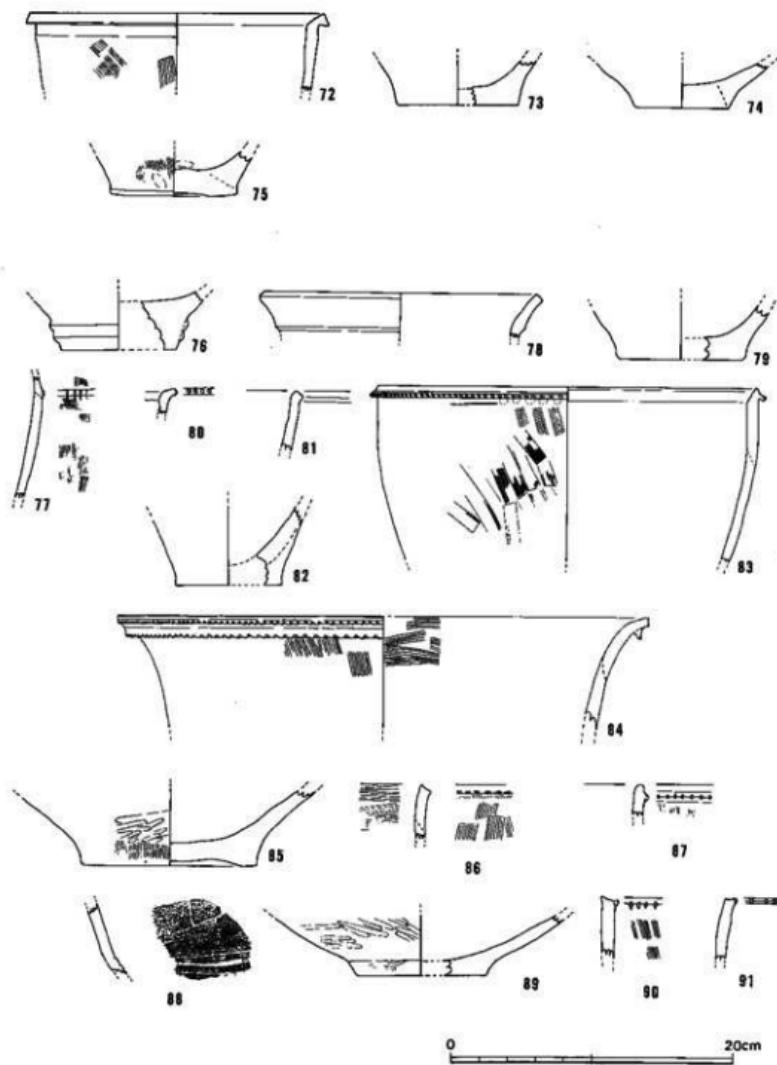
第95図 ST 3 出土遺物



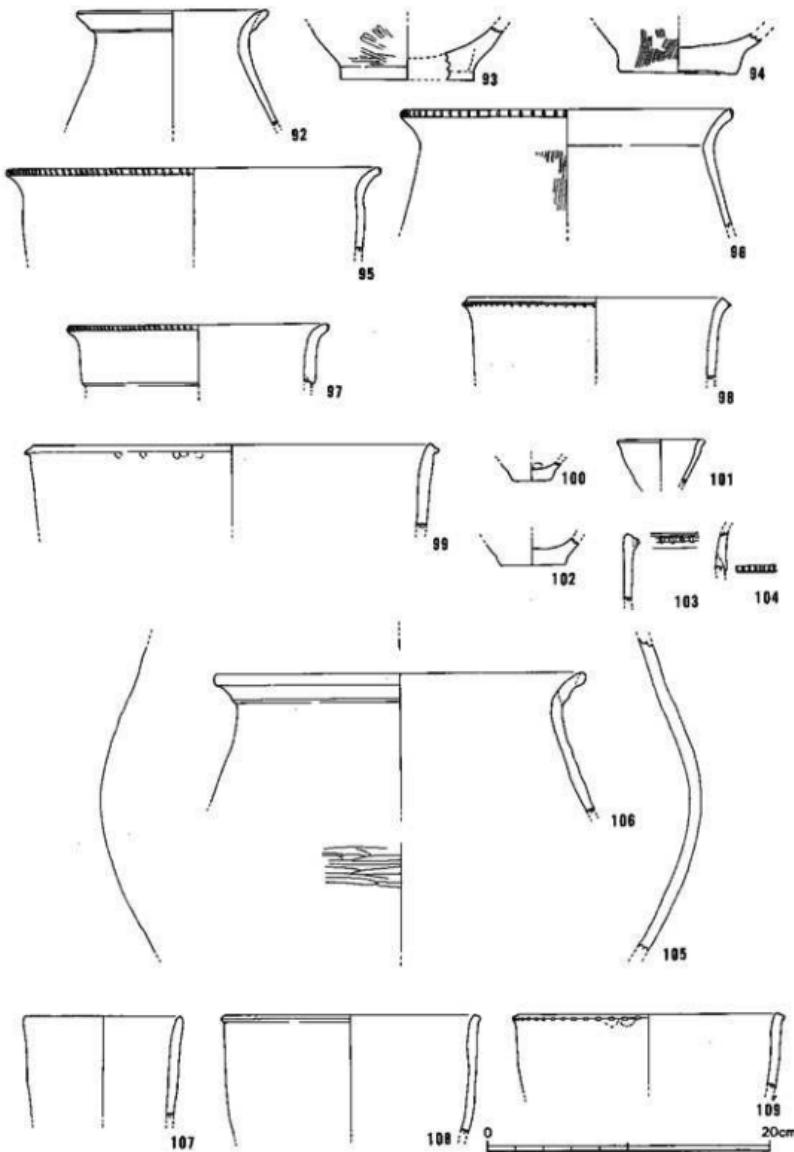
第96図 ST 3・4 出土遺物



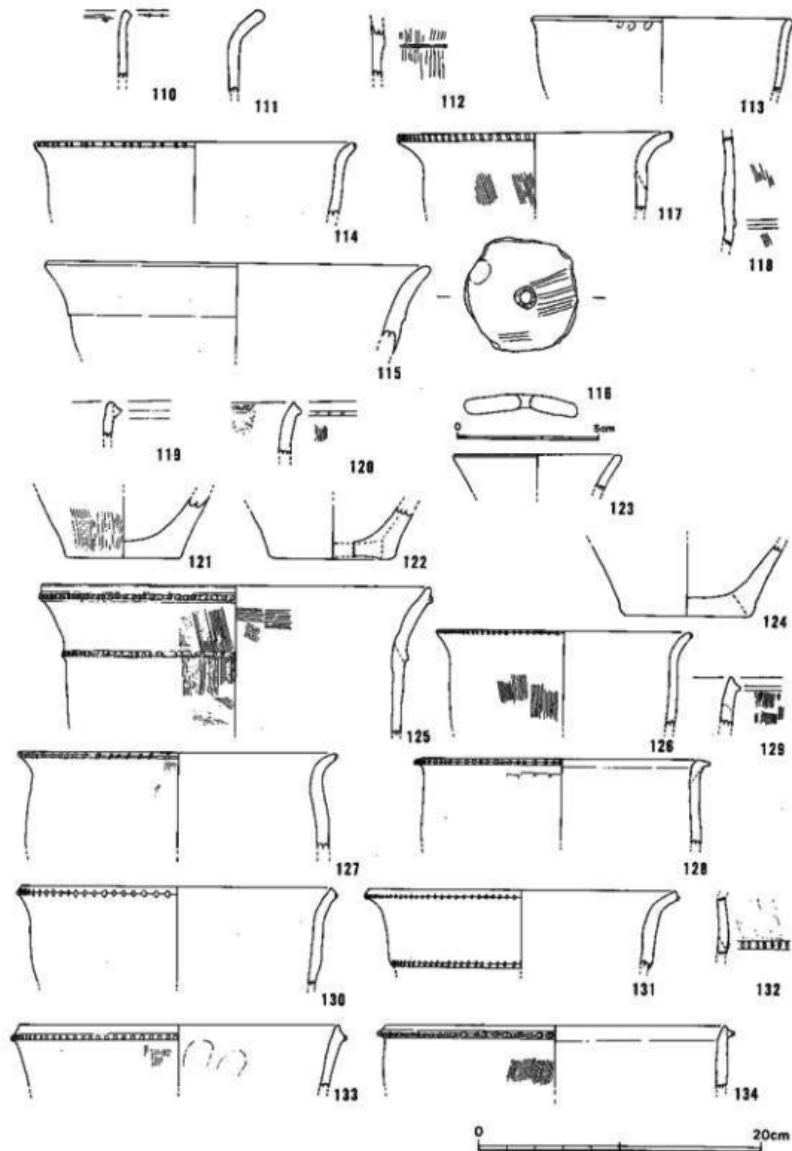
第97図 ST 4~6 出土遺物



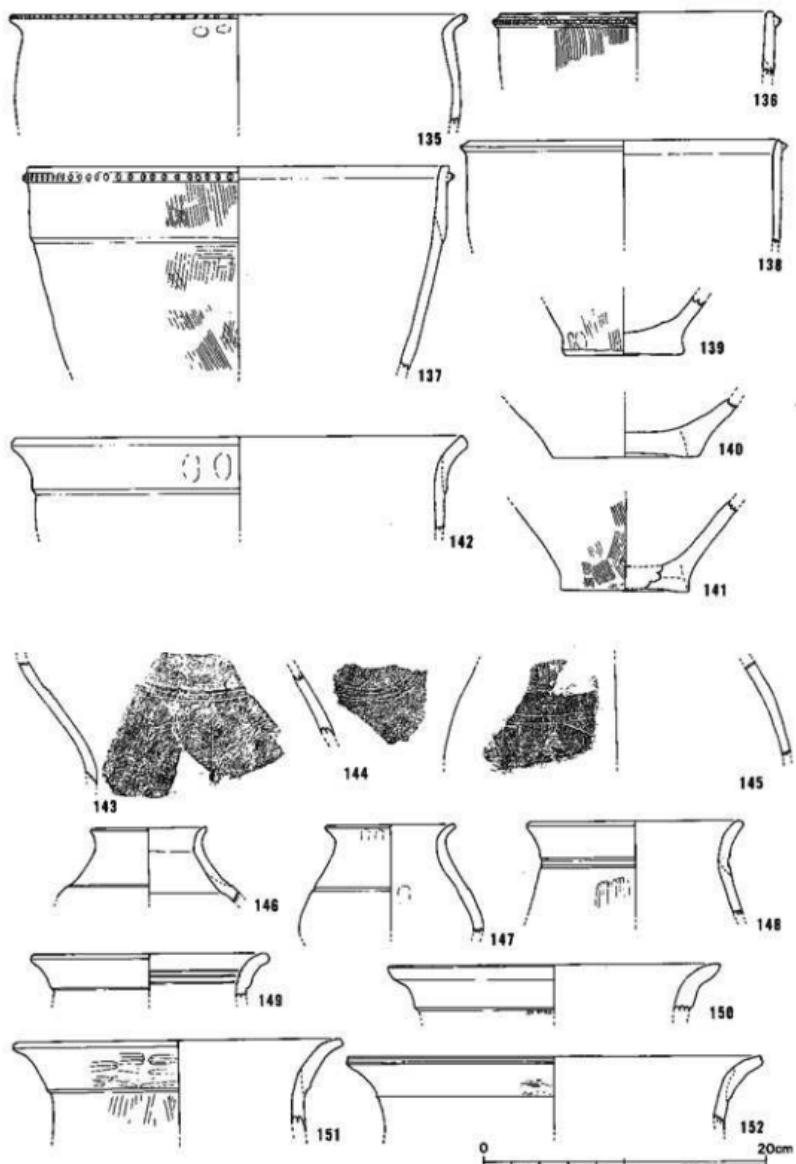
第98図 ST1・7、SK1~6出土遺物



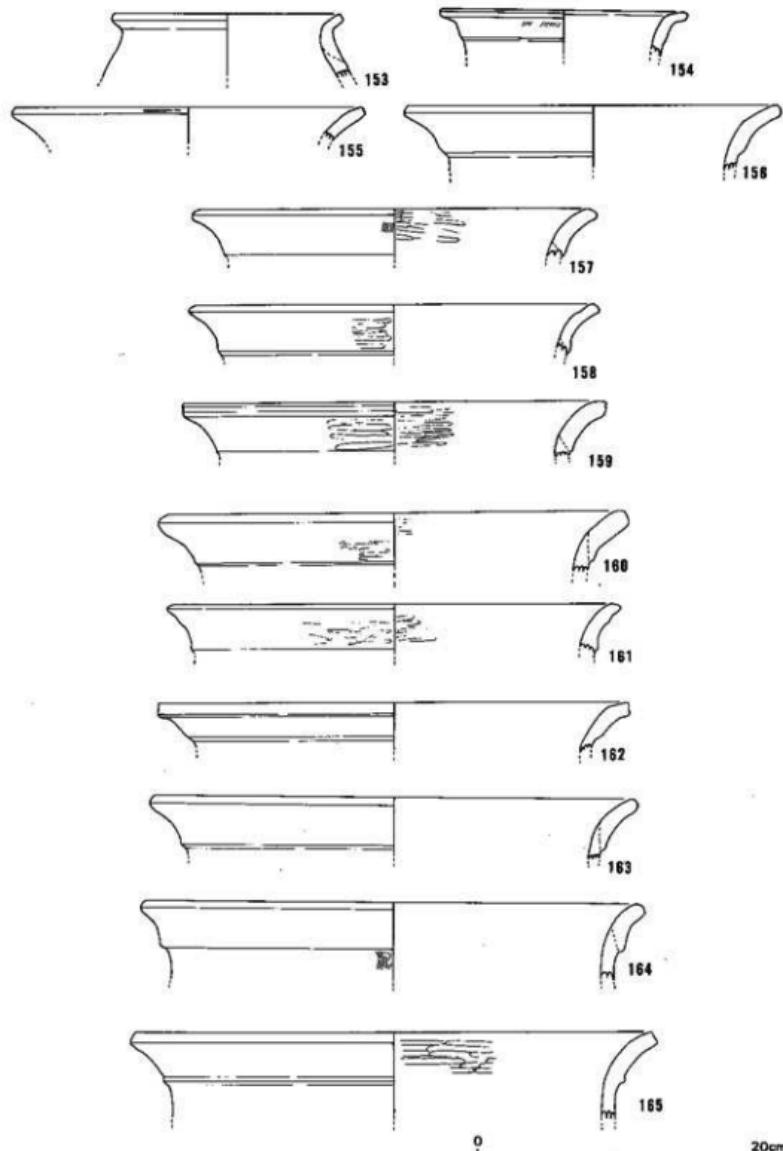
第99図 SK 8~17出土遺物



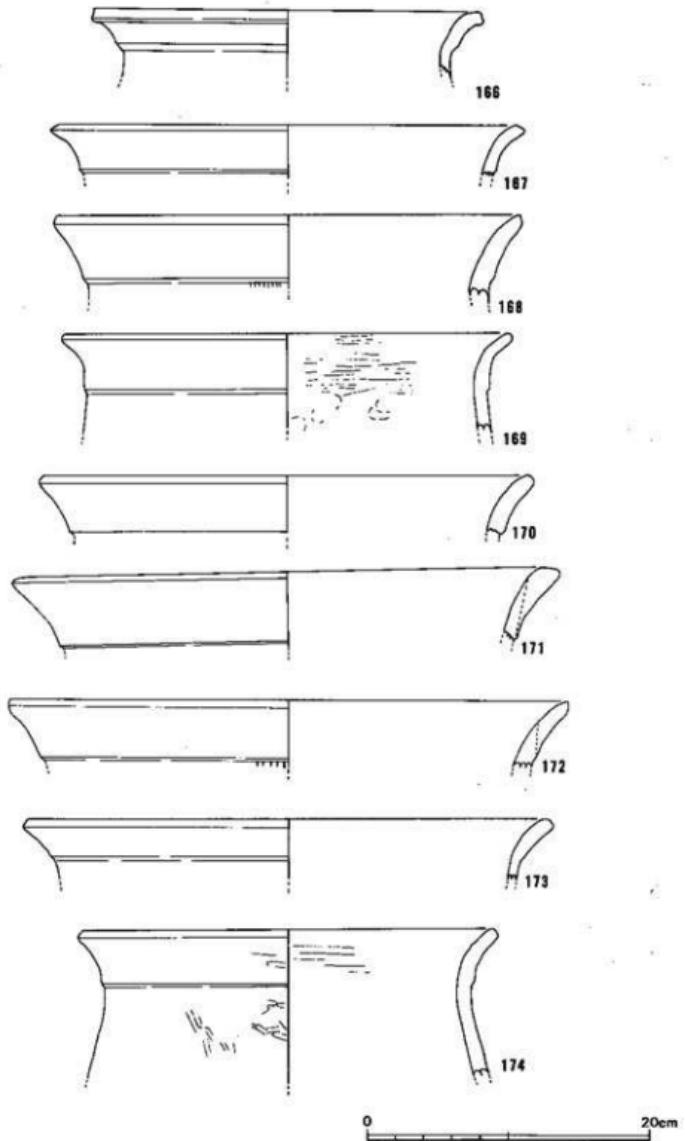
第180図 SK17+18、SD1、SX1出土遺物



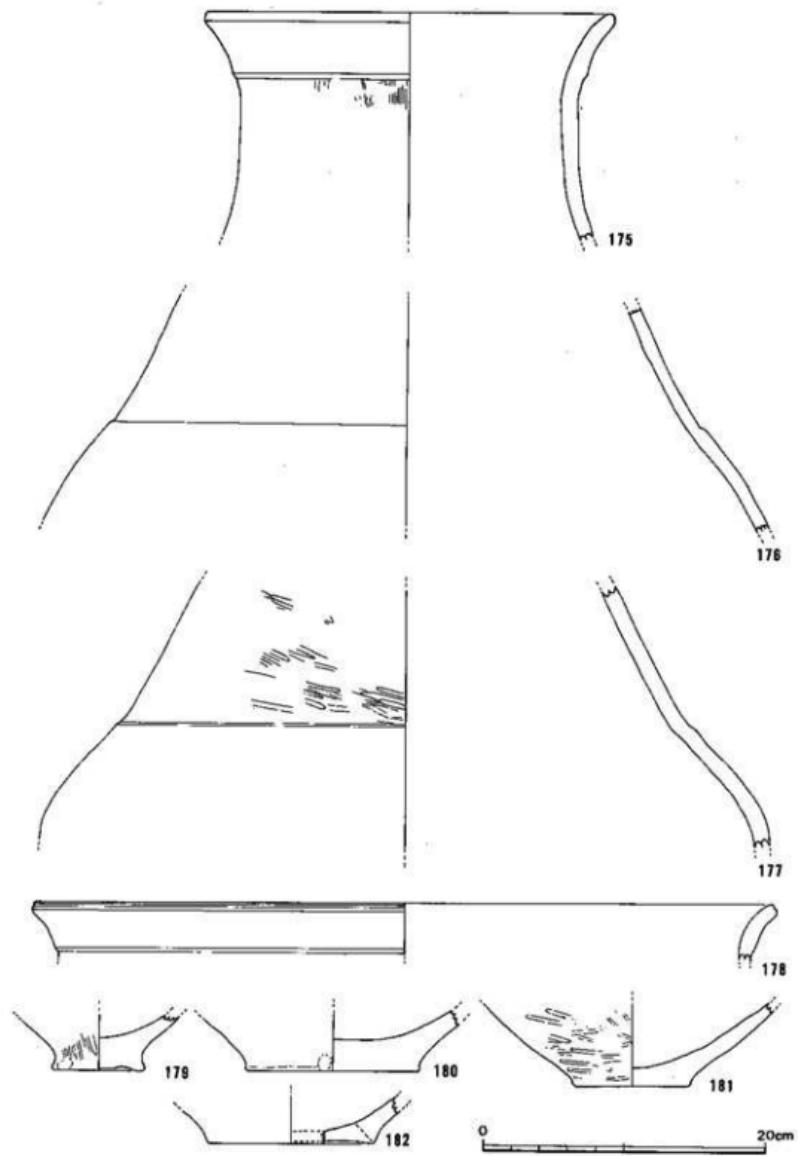
第101図 SX 1・2 出土遺物



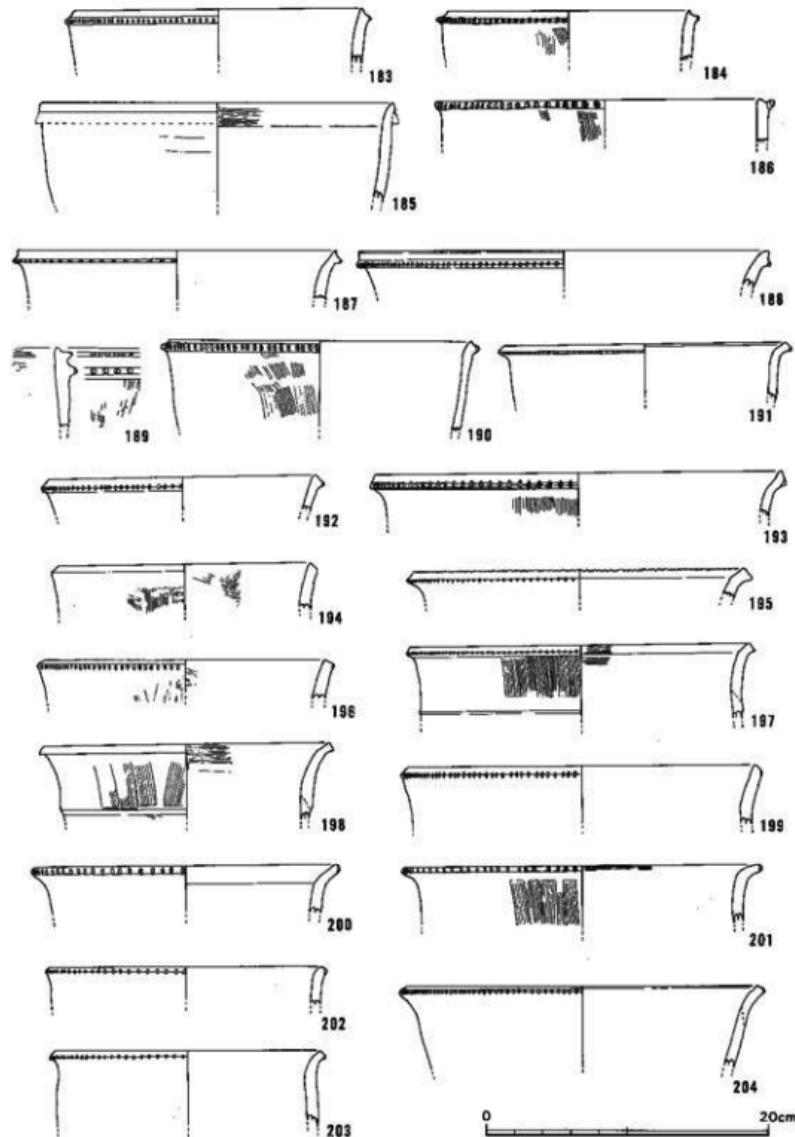
第102図 SX2出土遺物



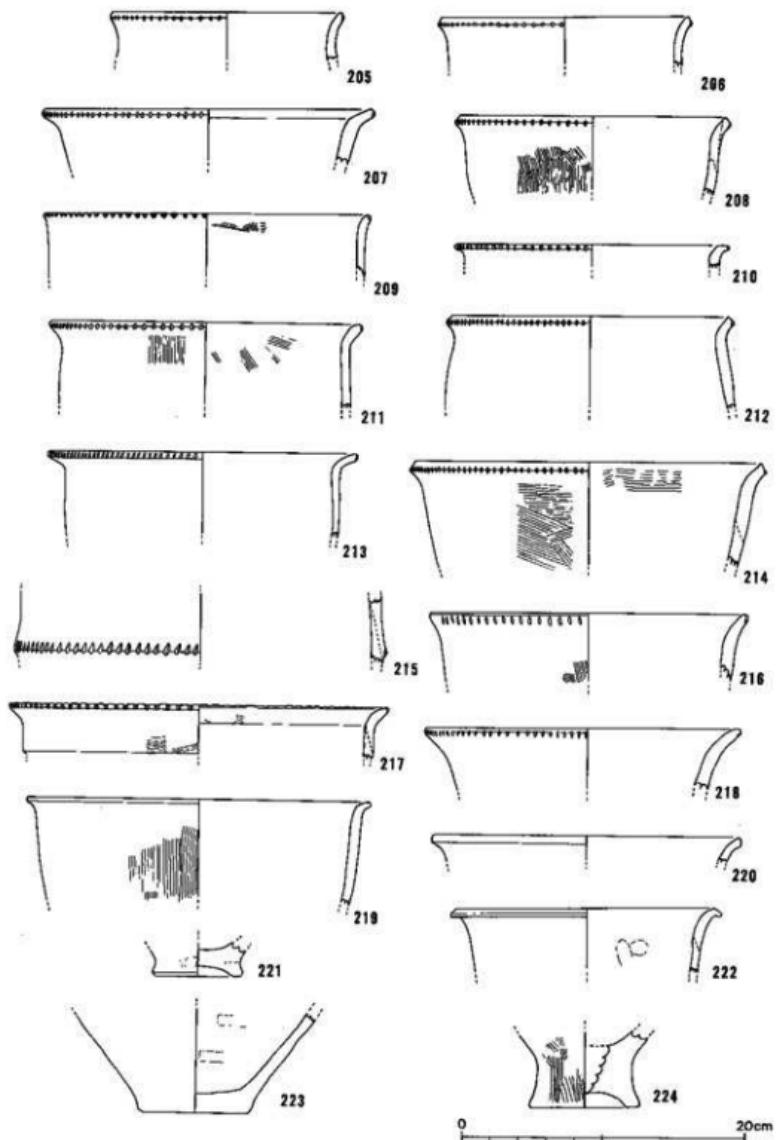
第103図 SX 2 出土遺物



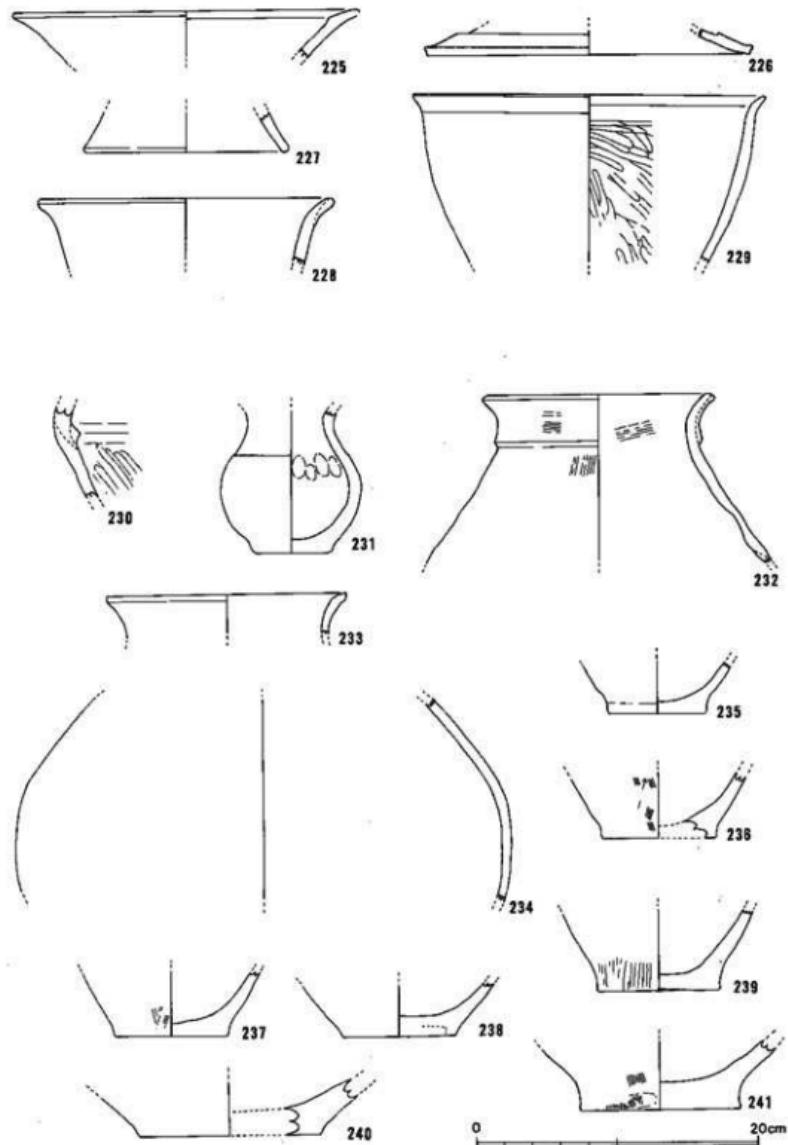
第104図 S X 2出土物



第105図 SX2出土遺物



第106図 SX 2 出土遺物

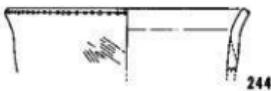


第107図 SX2・3出土遺物

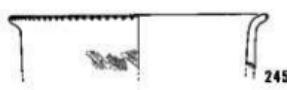


242

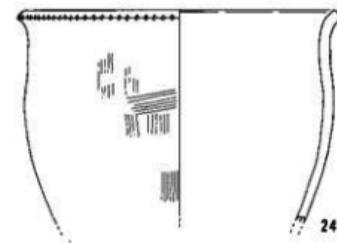
243



244

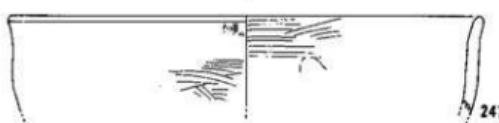


245



248

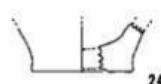
246



247



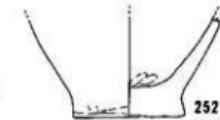
250



249



251

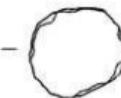


252

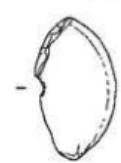
0 20cm



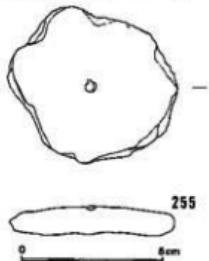
253



255



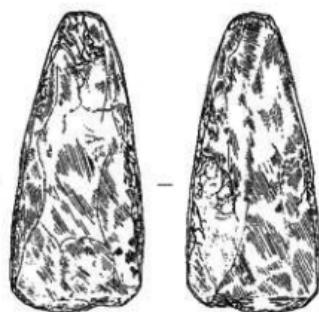
256



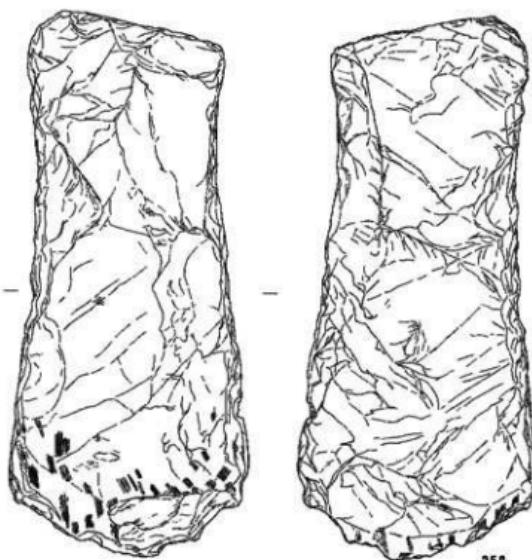
257

0 8cm

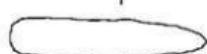
第108図 SB 2、SX 2・3 出土遺物



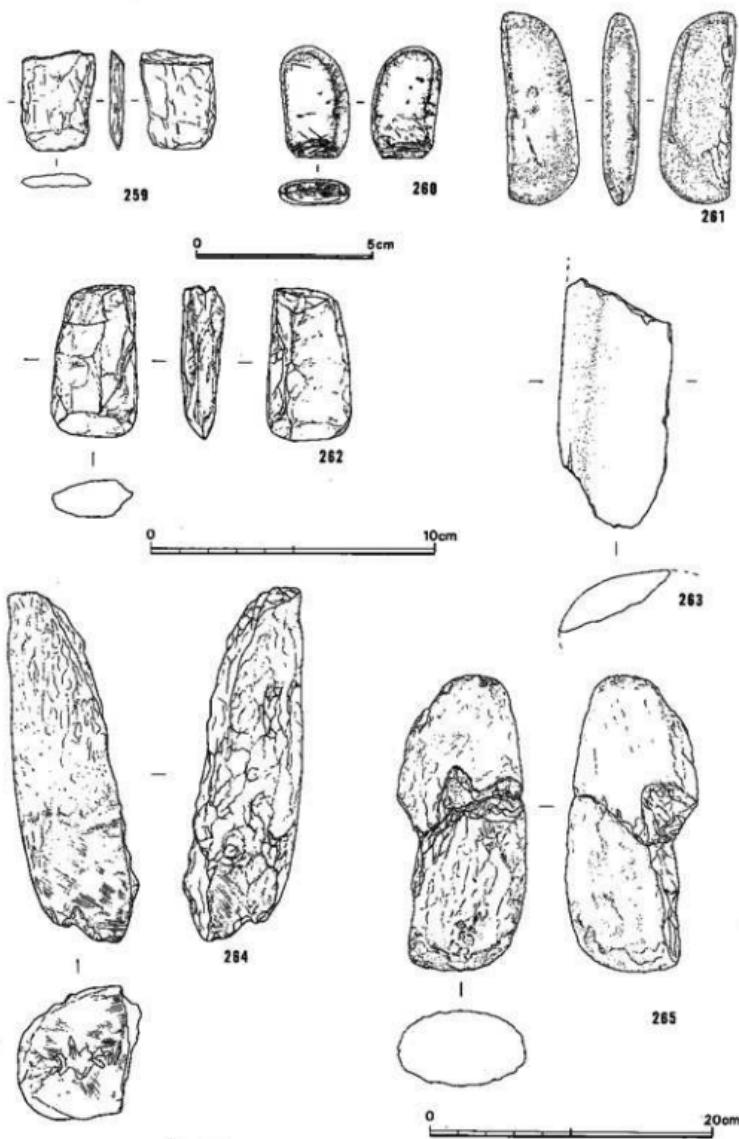
257



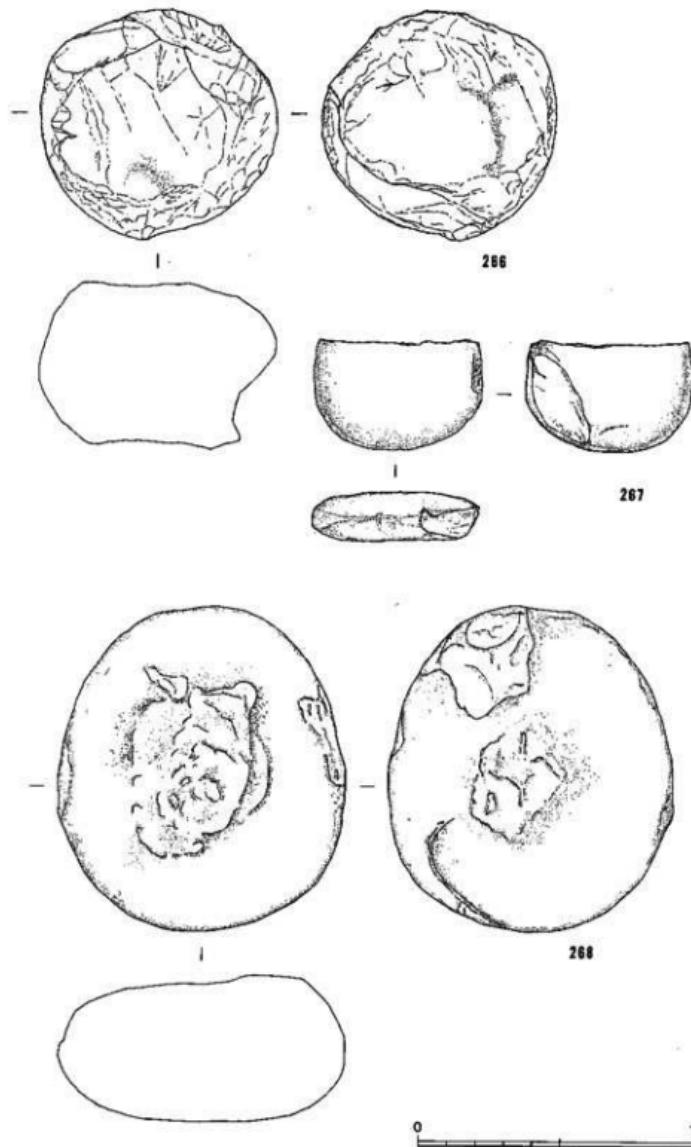
258



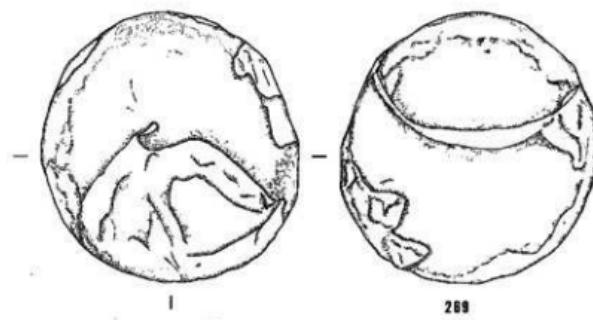
第109図 第IV層出土遺物



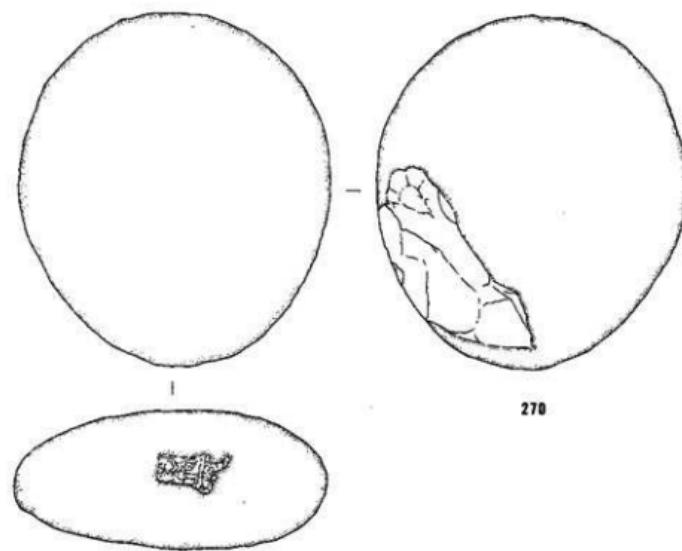
第110図 ST 3+5、SK 10、SX 2出土遺物



第111図 ST 3・4 出土遺物



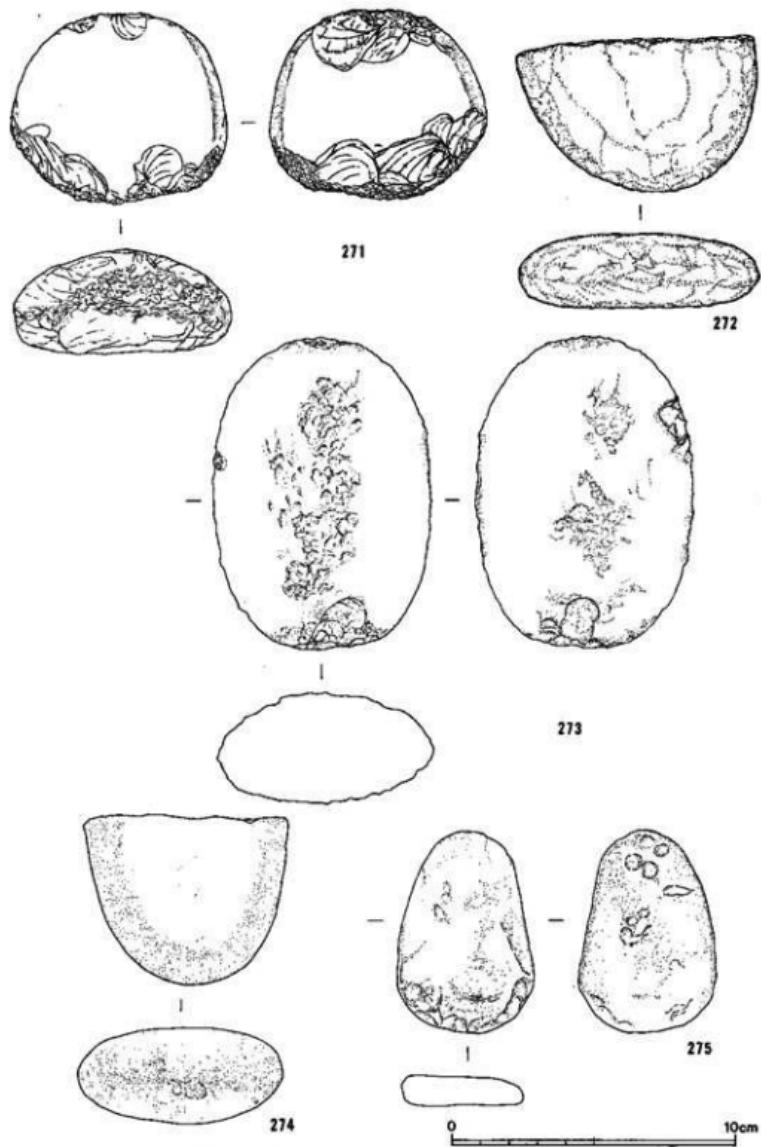
269



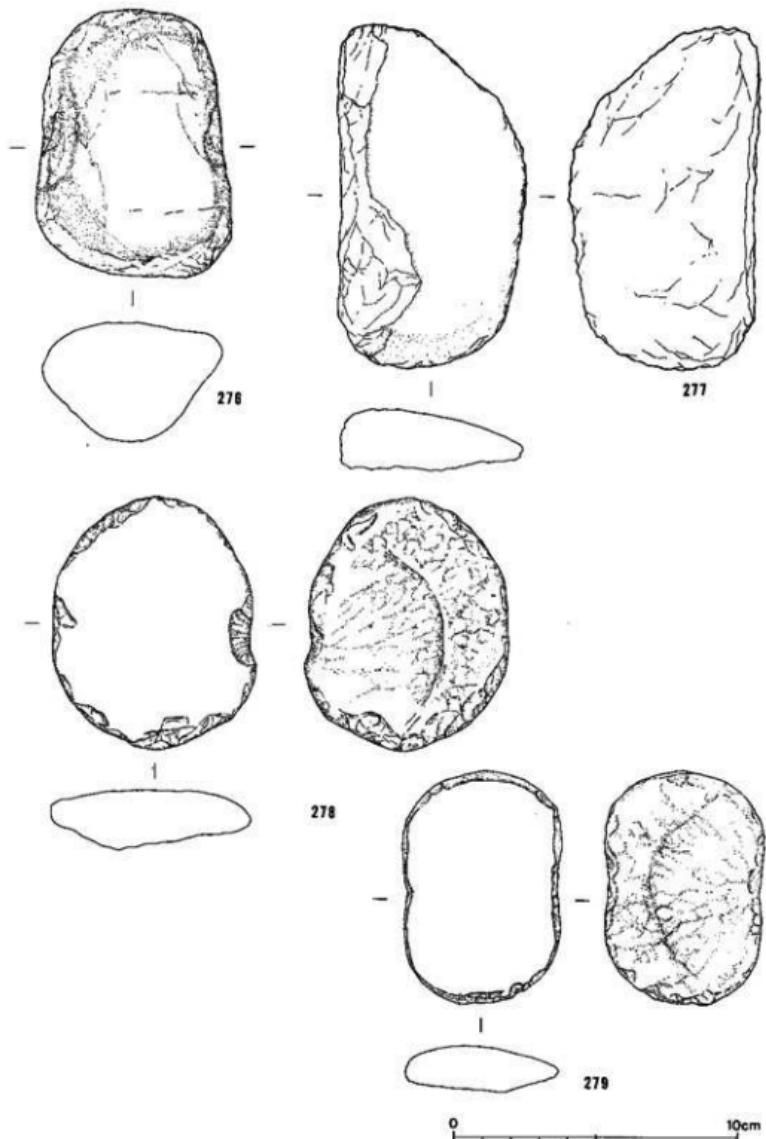
270



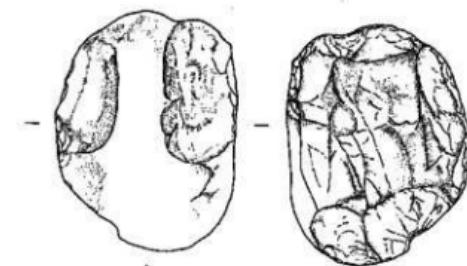
第112図 SX 2、P 7 出土遺物



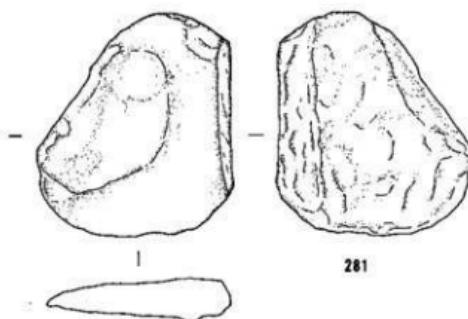
第113図 ST 3、SK 5、SX 2出土遺物



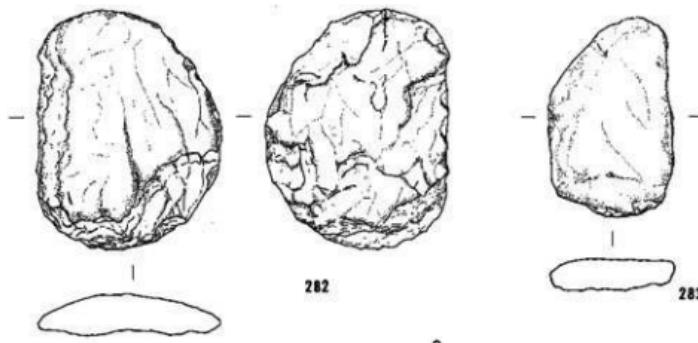
第114図 SK 5、SX 2出土遺物



280



281

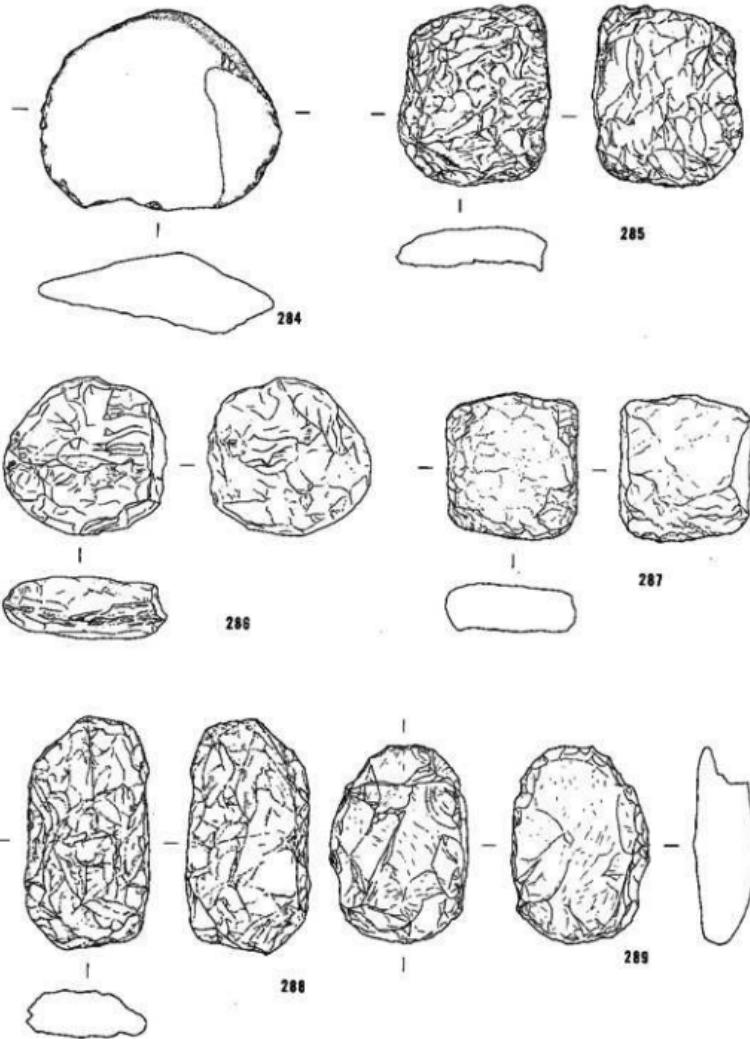


282

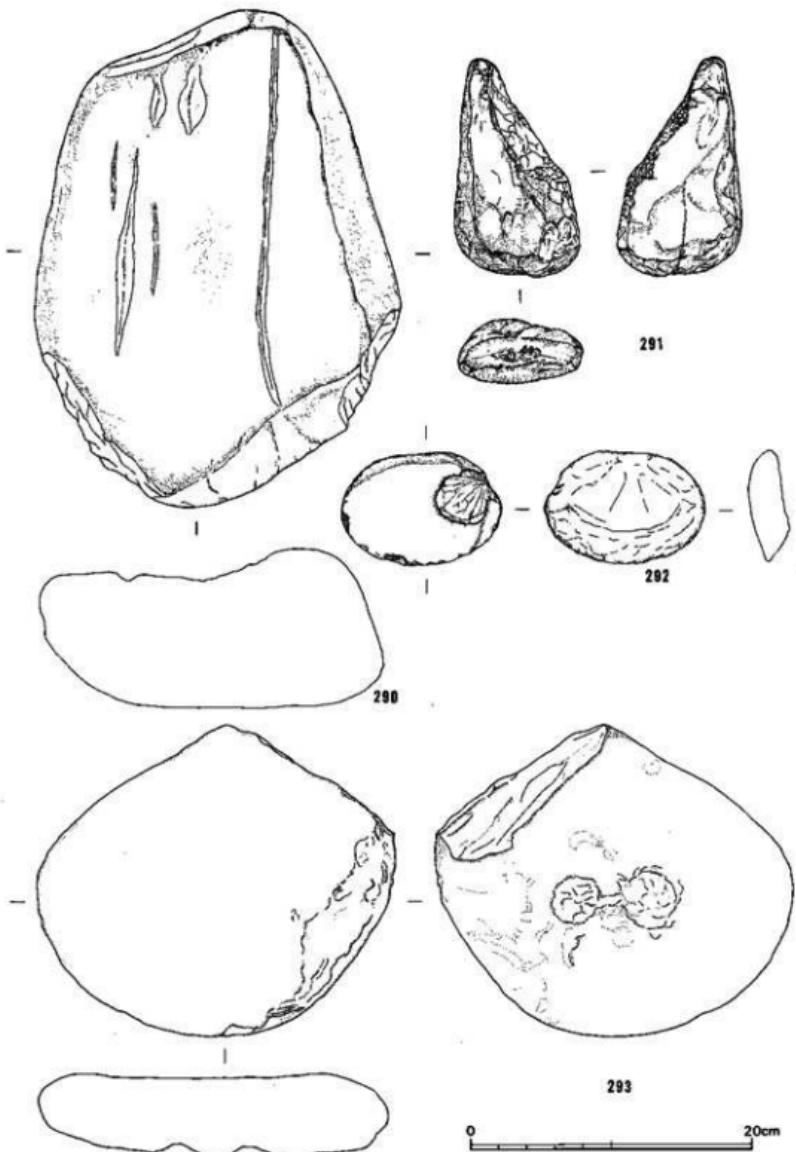
283



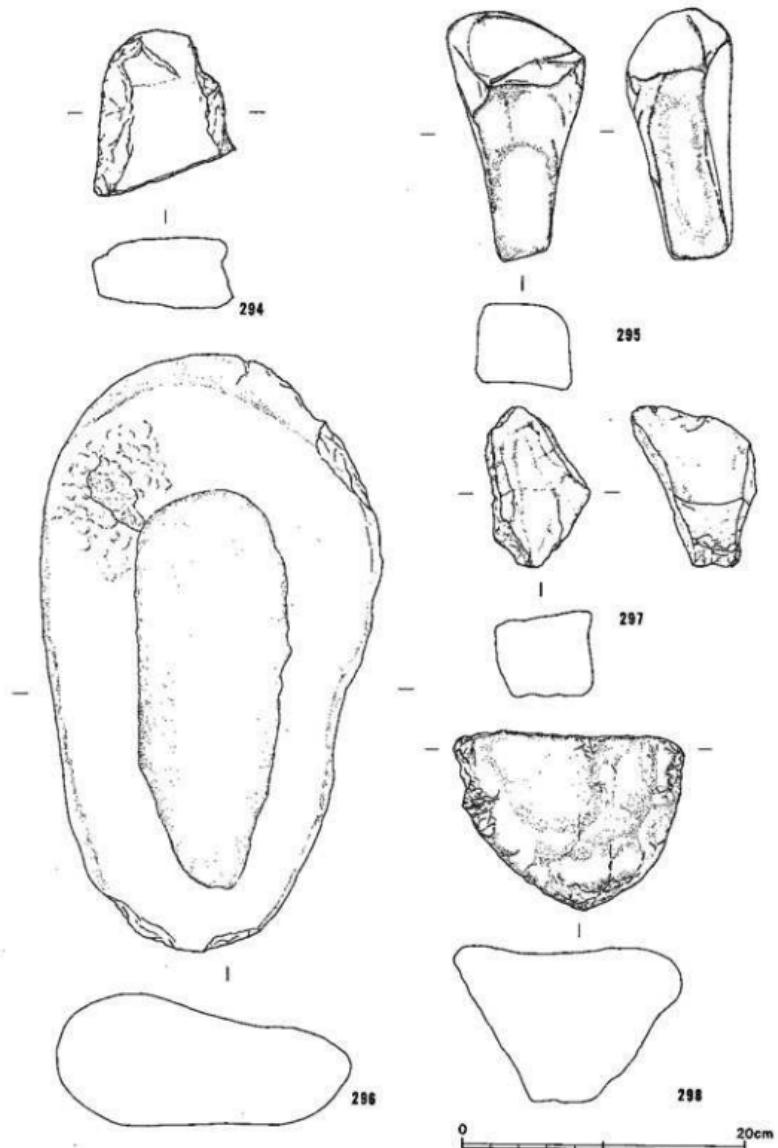
第115図 SX2、P1+5出土遺物



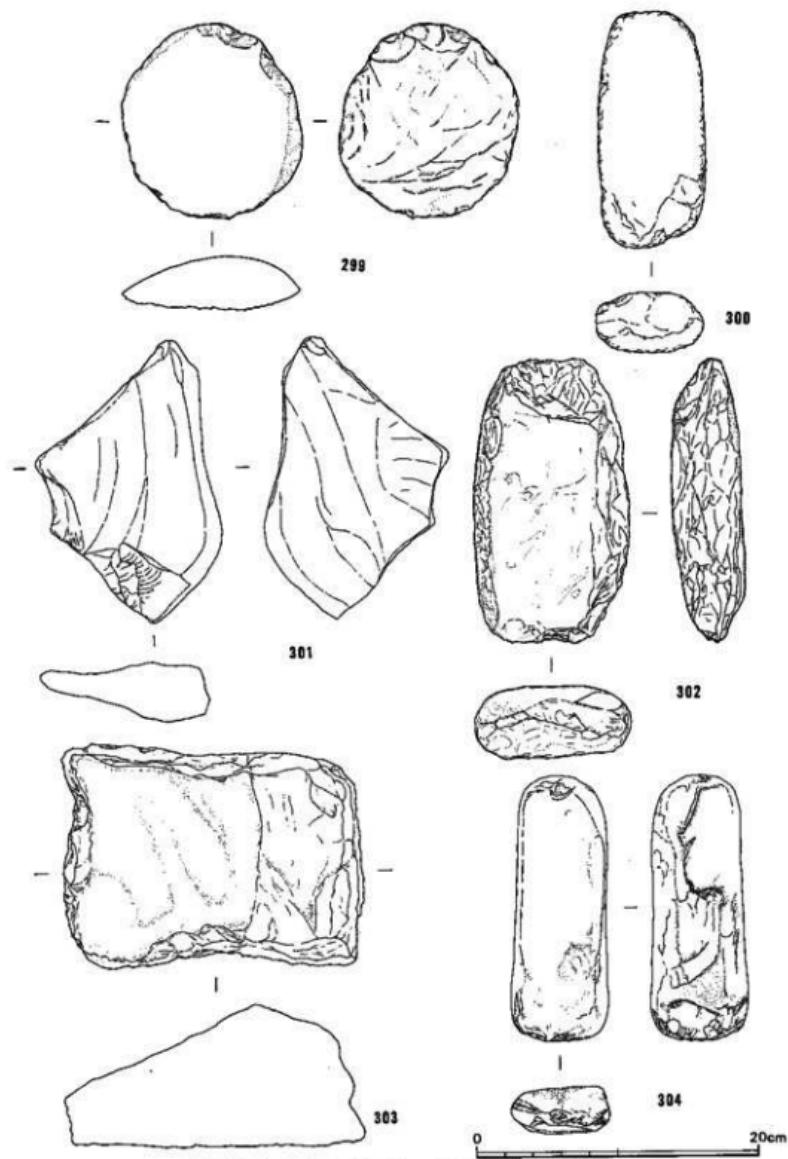
第116図 ST 3、SK 5、SD 1、P 3・17出土遺物



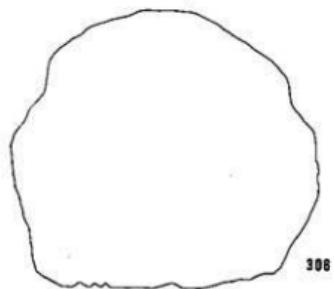
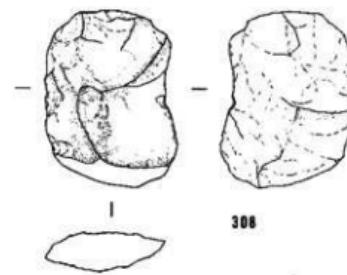
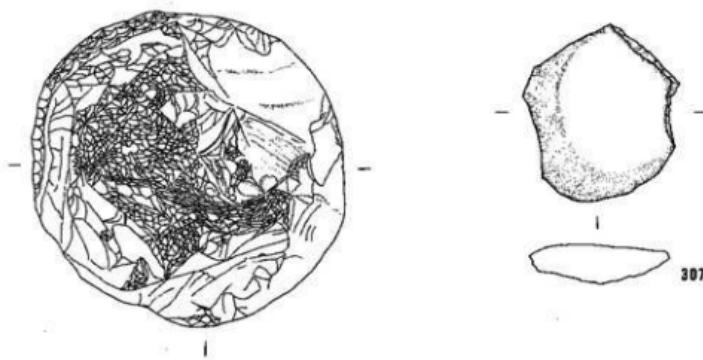
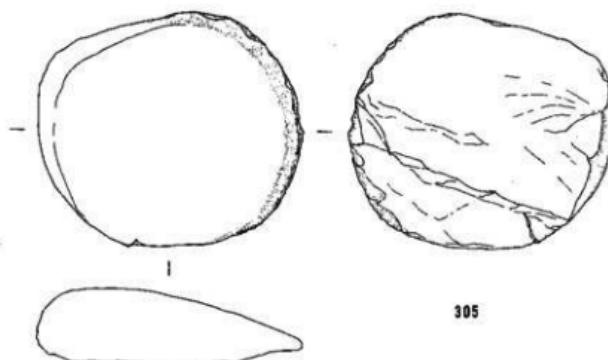
第117図 ST 6、SK 6+7、P20出土遺物



第118図 ST1・3・4、SK5出土遺物

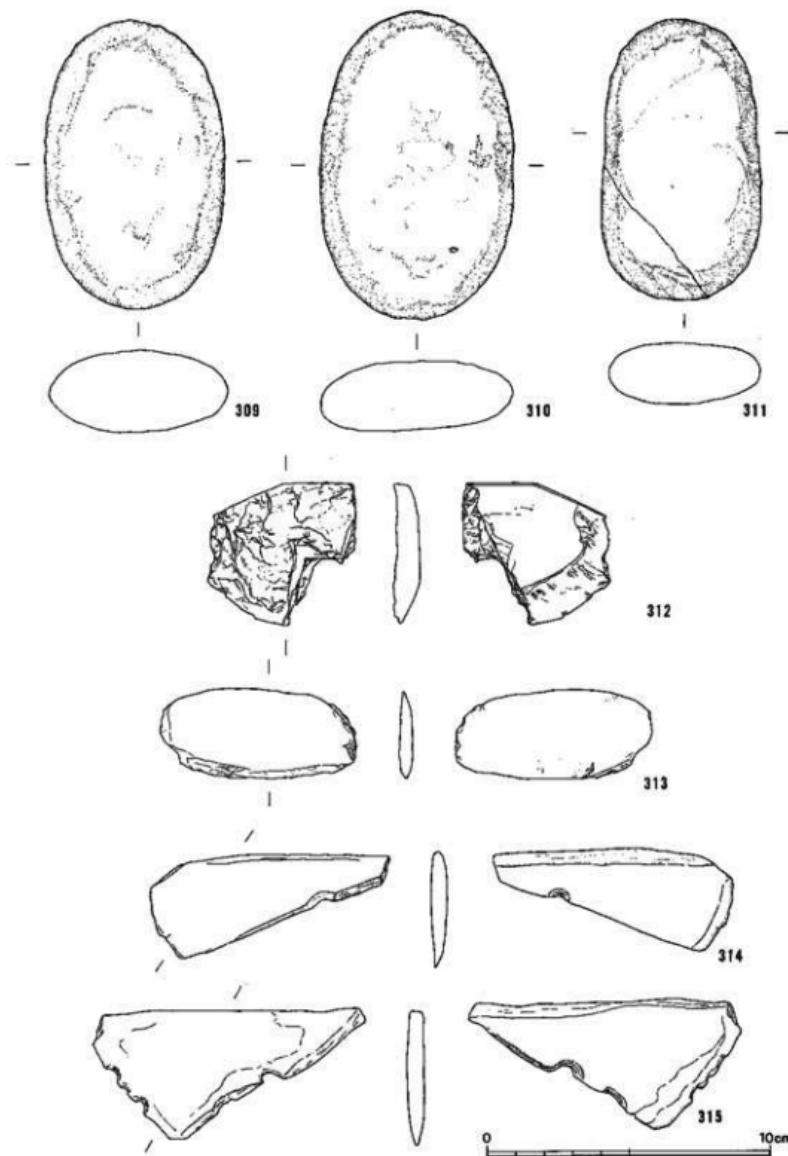


第119図 ST 2、SK 5、SX 2、P10出土遺物

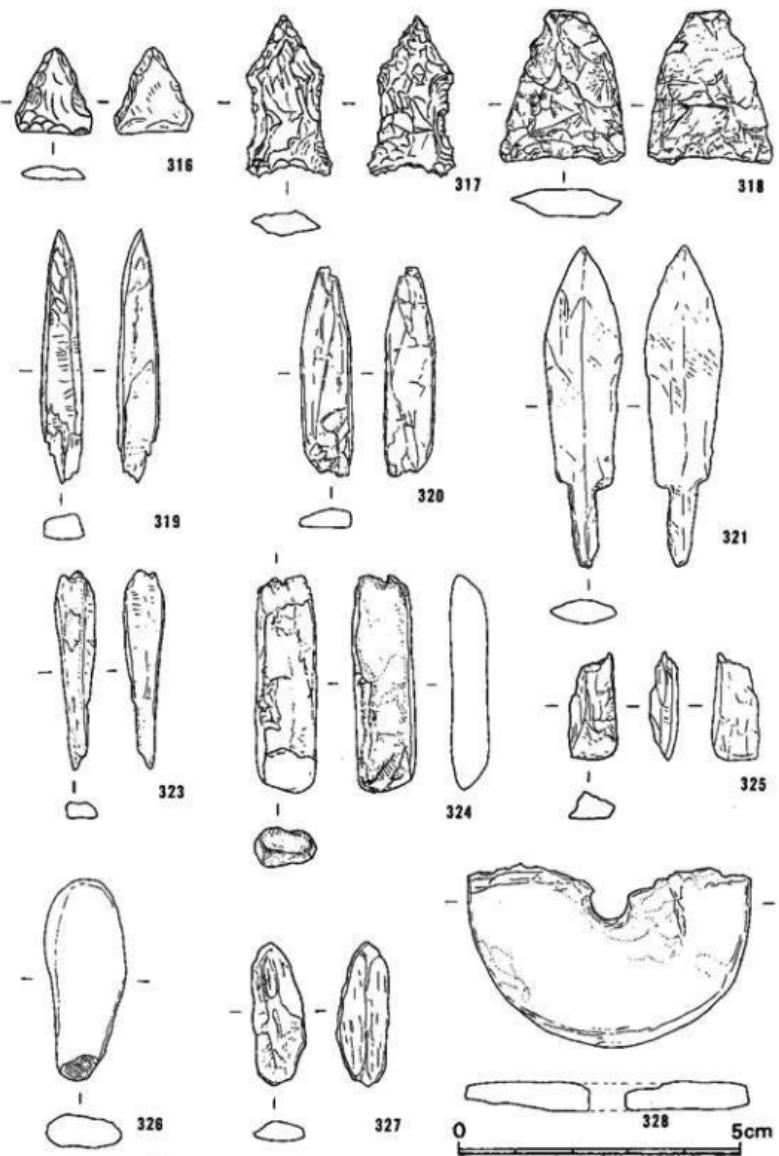


0 10cm

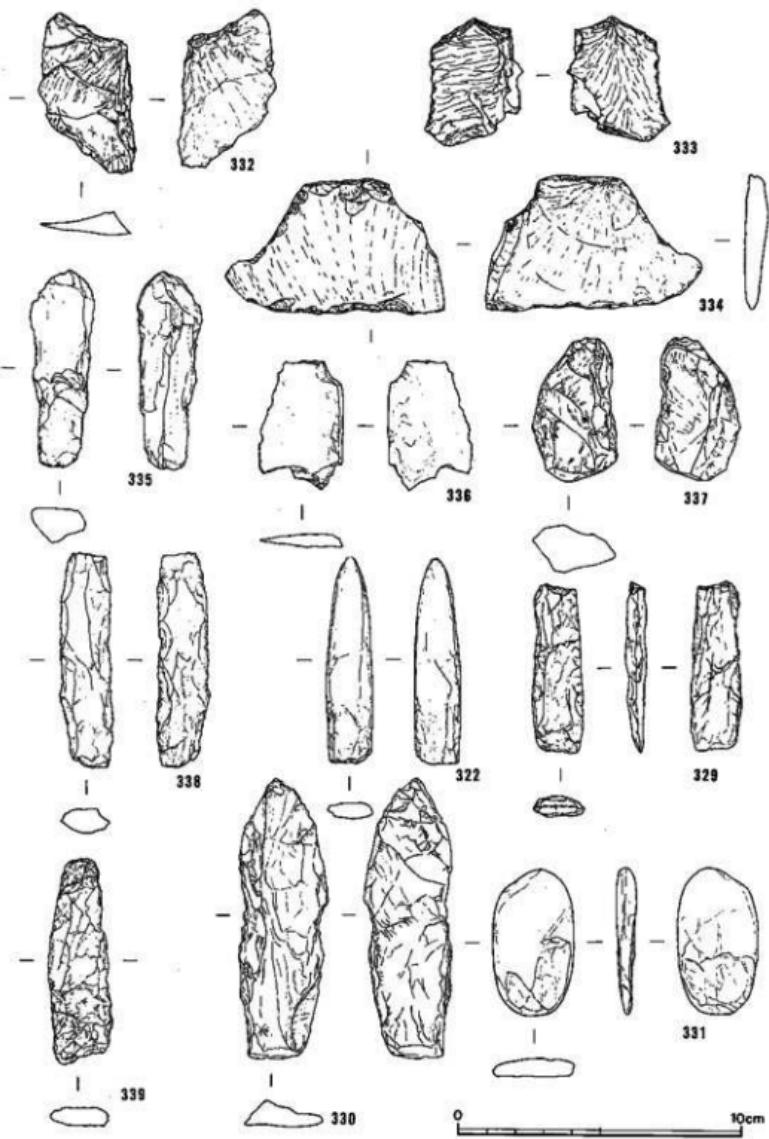
第120図 ST 2 + 5 + 7, P 4 出土遺物



第121図 SK 2・7・12・17、P 3出土遺物



第122図 ST 3~5、SK 18、SD 1、SX 1出土遺物



第123図 ST 5、SK 5・17出土遺物

**3. Loc. 15**

## Loc.15

### 1. 位置と調査経過

Loc.15は、田村遺跡群の南端部に位置しており、北にLoc.16、西にLoc.26が隣接している。南は、場外周道路部分を含み、場外地に接している。東は、Loc.13の南部にあたり、試掘調査を行ったが、遺構・遺物は、共に発見されていない。Loc.15の字名はフクダと呼ばれている。

調査は、4m幅の試掘トレンチ8本、A～Hを設定し、昭和56年12月に開始した。試掘調査の結果、遺構・遺物が検出されたので、全面発掘を行うことにした。全面発掘で検出された遺構は、弥生時代後期の溝1条、古墳時代の溝2条、古代から中世の溝4条および掘立柱建物址と土塹である。また、さらに下層には弥生時代前期の遺構が確認されたので、昭和57年10月から再度試掘トレンチ5本、I～Mを設定し、掘り下げたところ、北半部において土塹・溝・性格不明遺構を検出した。同時に、Loc.16の南端部にかかり検出されていたST1の南半部である市道下の部分についても調査を行い完掘した。調査は、上面を昭和56年12月～昭和57年3月にかけて行い、下面を昭和57年10～11月と昭和58年2～3月の2回に分けて行った。調査面積は上面・下面を合わせ、3725m<sup>2</sup>である。

### 2. 調査概要

弥生時代の検出遺構としては、下面の弥生前期の土塹1基、溝2条、性格不明遺構1基である。SD1は、Loc.25から始まり、市道の下を通り、南東方向へ延びているが、Loc.15の中央部で不明となる。SD2は、逆に北東から南西方向に延びており、やはり中央部で消滅する。SK1およびSX1は、溝より北に検出され、特にSX1は、Loc.16-ST1の南東約4mに位置している。検出面は、地表下0.5mの明褐色粘質土層上面であり、調査区の中央部から南へと急に低くなり、南端部の試掘トレンチでは、地表下1.32mほどになる。

出土遺物は、SD1を除き非常に少なく、包含層である黒褐色粘質土層からも、弥生時代前期前半の土器片が少量出土したのみである。SD1は、他の遺構に比べ多量の遺物が出土しており、埋土か砂層なので一時期に埋まったものであろう。

上面の弥生時代後期の溝、SD3は、調査区の北西から中央部を通り、南東へと延びており、遺物は、細片がわずかに出土したのみである。

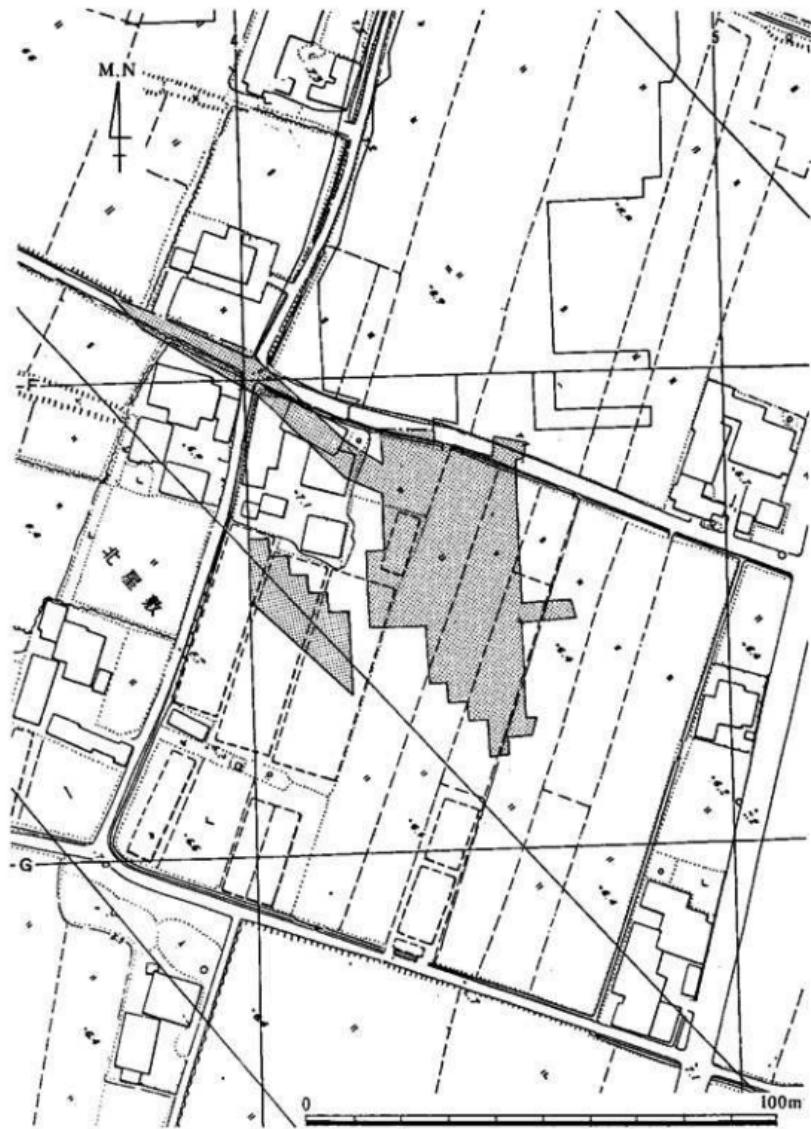
### 3. 層序と出土遺物

Loc.15の基本層序は次のとおりである。

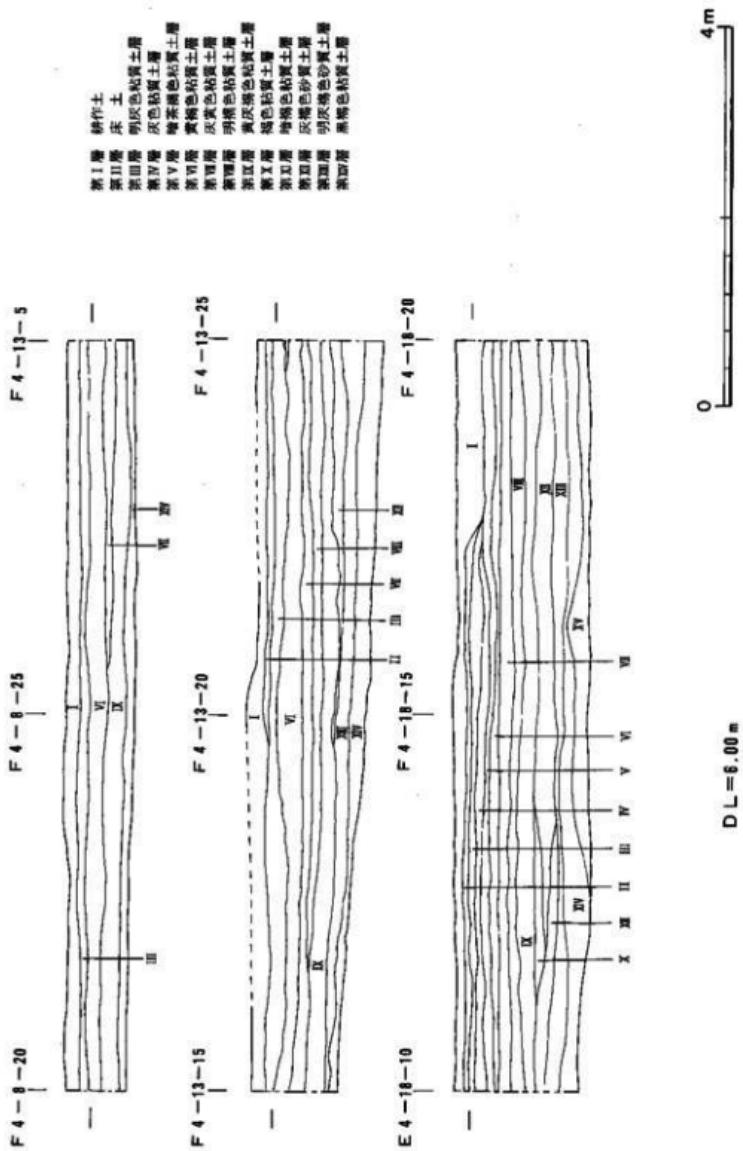
第I層 耕作土

第II層 床土

第III層 明灰色粘質土層



第124図 調査区設定図



第125図 調査区セクション

第IV層	灰色粘質土層
第V層	暗茶褐色粘質土層
第VI層	黄褐色粘質土層
第VII層	灰黄色粘質土層
第VIII層	明褐色粘質土層
第IX層	黄灰褐色粘質土層
第X層	褐色粘質土層
第XI層	暗褐色粘質土層
第XII層	灰褐色砂質土層
第XIII層	明灰褐色砂質土層
第XIV層	黑褐色粘質土層

弥生時代後期の溝および古代から中世の遺構は、第VI層を掘削し、第IX層黄灰褐色粘質土層上面において検出されている。弥生時代前期の遺構は、前期の包含層である第XIV層黒褐色粘質土層を掘削した面で発見されている。セクションからみれば、全体的な地形としては南へ強く傾斜しており、特に包含層である第XIV層は、南へ低くなっている。他には第I～III層中より土師質土器および近世、近代の陶磁器片がわずかに出土している。

出土遺物は、非常に少なく、前期の包含層である第XIV層黒褐色粘質土層からも細片を若干出土するのみであり、次第に低くなる中央部から南部では、皆無である。他には第I～III層中より土師質土器および近世、近代の陶磁器片がわずかに出土している。

#### 4. 遺構と遺物

##### 土塙

##### S K I

S K I は、調査区の中央部よりやや東寄りに位置し、東側に S D 2 が検出されており、第XIV層黒褐色粘質土を掘削した段階で検出された。

規模は  $1.2 \times 0.9$ m を測る楕円形であり、深さは 0.2m を測る。床面は平坦であり、断面形は浅い逆台形を呈し、長軸方向は N-40°-W である。埋土は、第XIV層と同じ黒褐色粘質土の單一層である。

出土遺物はみられないが、時期的には、埋土・検出面より前期 I と考えられる。

##### 溝

### S D 1

S D 1は、調査区の中央部から北西へ直線的に延びる溝であり、Loc.25の南端部へと続いている。検出面は第IV層黒褐色粘質土を掘削した面である。

規模は、検出長約19m、幅約1.5m、深さ0.4~0.5mを測る。方向はN-54°-Wを測り、断面形はU字形を呈するが、壁が垂直に立ち上がり、箱形をなす部分もみられる。底面は、ほぼ平坦であり、北西端部と南東端部の比高差は約0.5mを測る。埋土は、砂層であり、下部に一部粘質土がみられ、砂層は、細砂から粗砂と青灰色から赤褐色の色調により、5~6層に細分される。

遺物は、上面から底面までいずれの層位からも出土するが、特に下部から多く出土する傾向がみられる。出土量は多く、コンテナケースに10箱ほどである。甕は、(1~39)であり、口頸部に段をもつものと無段のものがみられる。上胴部の文様としては、重弧文が多くみられ、山形文も存在する。甕は、(40~103)であり、口縁下に突帯を貼付するものが最も多く、外反し開き、口唇部外面に効目を施すもの、如意形に開くものなどもみられる。他には鉢(104、105)、土器片軸用の紡錘車未成品(106)が出土した。石器は、少なく、砥石(108)、叩石(109、110)の3点のみである。

時期的には、出土遺物からみれば前期Iと考えられ。Loc.16・25の遺構群と同時期である。埋土は砂層であり、前期Iの遺物が一括して出土する状況からみても、洪水などにより一挙に埋没したものではないかと考えられる。また、S D 1以南では、前期I段階の遺構は検出されておらず、包含層である黒褐色粘質土層も傾斜を強め存在するが遺物は、皆無であり、S D 1が前期I段階の集落の南限を示す溝である可能性は大きい。

### S D 2

S D 2は、調査区の北西端より中央部へ延び、途中で消滅する溝である。検出面は第IV層黒褐色粘質土を掘削した面である。

規模は、検出長14.6m、幅0.8~0.9mを測り、深さは、北西部が浅く0.13m、中央部が最も深く0.4mを測る。方向は、N-37°-Eを示し、ほぼ直線的に延びるが若干蛇行する。断面形は、逆台形を呈し、底面は、ほぼ平坦であるが、全体的には南へと低く傾斜している。埋土は、第V層と同じ黒褐色粘質土の單一層である。

遺物は、ほとんどみられず、若干の細片が出土したのみである。時期的には、埋土・検出面からみれば前期のIと考えられ、遺物も細片であり断定できないが同時期のものと考えてよいであろう。また、S D 1がLoc.16・25の遺構群の南限を示すものとし、またS D 2も同じく南限から北へ延びると推定するならば、東限を示す可能性が考えられる。

### S D 3

S D 3 は、第Ⅸ層黄灰褐色粘質土層を検出面とする上面の調査区において、北西部から中央部を南東へと延びている。

規模は、検出長48m、幅1.2~1.8m、深さ0.9m前後を測る。方向は、南東へ約20m延びた後やや屈曲し、南へ再び20mほど延びて屈曲して南東へ向かっており、平均的にはN-32°-Wを示す。断面形は深い逆台形を呈し、壁は直線的にしっかりと立ち上がる。底面はほぼ平坦面をなし、埋土は砂層である。

遺物は、ほとんど出土せず、細片が若干みられるのみである。時期的には、細片の中に叩目をもつものがあり、後期Ⅲと考えられる。なお、Loc.26において溝の延長が検出されている。

#### 性格不明遺構

#### S X I

S X I は、調査区の北部、Loc.16の南端部で検出されたS T 1 の南4mに位置している。検出面は、他の遺構面と同じく、第Ⅹ層黒褐色粘質土を掘削した面である。

規模は4.0×3.4mを測り、平面形は、北壁と西壁は直線であり方形を呈するが、西壁と南壁は、乱れており、不整形である。特に、南壁の乱れは激しいが、本来は方形であったと思われる。深さは浅く、最も深い中央部でも12cmを測るのみである。底面は、平坦であるが、やや中央部が低い。壁高も6~8cmと低いがしっかりと立ち上がる。埋土は黒褐色粘質土の単一層である。長軸方向は、N-38°-Wを測り、西へ振っている。

ピットは、6個検出されており、その中で柱穴と考えられるのは、北東と南東のコーナーに位置するP 3・4の2個である。規模は、直径約50cm、深さ約40cmを測る。P 5・6は、直径10~20cmと小さく、深さも10cm前後と浅く、柱穴とは考えられない。P 1 は、南壁に接しており、直径約70cm、深さ約50cmを測り、東側に橢円形の深さ10cm前後の浅い平場と、北に直径30cm、深さ20cmのピットをともなっている。P 2 は、東壁の中央部に接し、直径80cmを測り、やや方形に近い平面形をもっている。深さは約10cmと浅く、皿形の断面形を呈している。

出土遺物は、非常に少なく、土器は細片が少量埋土中から出土したのみである。石器は、P 2から刃部のみを研磨した石斧(107)が1点出土している。また、床面上から直径30cmほどの自然礫が出土しているが、使用痕などは観察されなかった。

時期的には、出土遺物が少なく断定はできないが、埋土・検出面からみれば、前期Ⅰと考えられ、Loc.16・25の遺構群と同時期である。

#### 5. まとめ

Loc.15で検出された遺構は、土塗1基、溝3条、性格不明遺構1基である。この中で、弥生時代後期の溝(S D 3)を除き、他は、前期Ⅰに属すると考えられる。中でもS D 1は、多量

の遺物を出土しており、前期Ⅰの遺構であることを明確にしている。また、その位置はLoc.25の南端部から南東方向へ延びており、SD1の南では遺構、遺物ともに存在しないので、前期前半の集落の南限を示している。SD2においても、出土遺物はほとんどなかったが、同時期と考えられ、規模は小さいが、北東へ延びるとするならば、SD1同様に東限を示す可能性が考えられる。

SX1は、小堅穴状を呈しており、平面形は、一部乱れているが方形を呈していると考えられる。出土遺物はやはり少ないが、その規模から考えてなんらかの作業場ではないかと思われる。柱穴はP3・4の2個であり、P5・6の小さなビットも柱穴と考えたとしても、上部構造は簡易なものである。P1、さらにP2も浅いが工作用のビットではないだろうか。P2から1点ではあるが石斧が出土していることからも、積極的ではないが、工作用ビットと推定される。また、Loc.16のST1との距離は4mと近く、周辺部に接近する遺構の存在しないところをみれば、ST1とSX1との間には、住居と作業場という関係が成り立つ可能性がある。SK1については、同時期ではあるが、出土遺物もみられず、性格は不明である。

以上のように、Loc.15において検出された遺構は、SD3を除き前期Ⅰの時期であり、Loc.16・25で検出された集落の一部を構成し、かつ、その南限を示している。

第33表 土 塙 計 測 表

探査番号	遺構番号	平 面 形	規 模 (m)			長軸方向	断面形	備 考
			長 径	短 径	深 さ			
第126回	SK1	橢円形	1.20	0.90	0.20	N-40°-W	凸台形	

第34表 造構出土土器観察表

辨認番号	通説番号	器種	法量 (cm)	口径 最高 最低 底径	形態・文様	手法	備考
1	S D 1	壺	12.5 ( 2.0 ) — —	縦やかに外反し、口縫部は丸くおさめる。段階はみられない。	内外面とともにヘラ磨きがなされる。口縫部は、内外面とも横方向、頸部外面には縱方向の単位がみられる。		
2	#	#	18.0 ( 2.3 ) — —	強く外反し、口縫部は丸くおさめる。	内外面とともにナデ調整。外面口縫下には横方向のヘラ磨きの単位がみられる。	内面が磨耗する。	
3	#	#	21.2 ( 2.2 ) —	縦やかに外反し、口縫部は丸くおさめる。段階はみられない。	内外面とともにナデ調整に、横方向のヘラ磨きがみられる。	若干の砂粒を含み、やや磨耗する。	
4	#	#	17.4 ( 6.0 ) — —	直立する頸部から小さく外反する。口縫部は丸くおさめ、段階はみられない。	内外面とともに、横方向のナデ調整。	かなり磨耗しており器面が剥落する。	
5	#	#	22.5 ( 2.7 ) — —	縦やかに外反し、口縫部は面をなす。段階はみられない。	外面ナデ調整に横方向のヘラ磨き。内面も横方向のヘラ磨きがみられる。	口縫部から内面にかけて墨疵がみられる。	
6	#	#	19.6 ( 5.9 ) — —	頸部より大きく外反し、口縫部は面をなす。段階はみられない。	内面に、横方向のヘラ磨きがみられる。外面は磨耗のため不明。		
7	#	#	25.6 ( 3.5 ) — —	直線的に開く、縫部はやや外反し面をなす。有段階は不明。	内外面とともに、ナデ調整。外面には横方向のヘラ磨きがみられる。内面も横方向のヘラ磨きがなされるが、単位は不明。		
8	#	#	30.4 ( 3.5 ) — —	直線的に開き、頸部はさらに大きく開く。口縫部に有段階をなすと思われる。	内外面とともにナデ調整。ヘラ磨きがなされるが、磨耗のため単位は不明。		
9	#	#	12.0 ( 4.6 ) — —	直立する頸部から、小さく外反し開く。口縫間にから圧痕による不明瞭な有段階がみられる。口縫部は面をなす。	内外面とともにナデ調整。	内外面ともに磨耗する。	
10	#	#	10.6 ( 1.9 ) — —	小さく外反し、口縫部は丸くおさめる。口縫間に、きわめて低い有段階がみられる。	内外面とともに横方向のヘラ磨きがなされ、外面には縦方向のハケ目が残される。		
11	#	#	8.0 ( 4.0 ) — —	強く外反する頸部より小さく開く。口縫部には不明瞭な有段階、上縫部には強い沈粧による有段階がみられる。	口縫部内面には横方向、頸部外面には縦方向のヘラ磨きがみられる。頸部内面に接合痕を残す。		
12	#	#	15.4 ( 3.4 ) — —	強く外反し大きく開く。口縫部は丸くおさめ。口縫間に有段階がみられる。	内外面とともにヘラ磨きがなされるが磨耗のため単位は不明。		
13	#	#	11.5 ( 12.1 ) — —	口縫部は強く外反し、口縫部と上縫部に有段階がみられる。頸部は最大径で強く肩曲し段状をなす。	口縫部に 2 条、上縫部の有段上下に 4 条、屈曲部に 2 条のヘラ磨き跡を施す。上肩部の沈粧間にには 3 条の重墨疵とその間に 2 条の平行沈粧を配す。	頸部から、胸窓にかけて墨疵がみられる。	
14	#	#	13.4 ( 2.5 ) — —	直立して立ち上がり、強く外反する口縫部。縫部は面をなし、頸間に強い有段階がみられる。	内面に横方向のヘラ磨きが一部みられる。	全体に磨耗する。	
15	#	#	16.4 ( 2.4 ) — —	直立して立ち上がり強く屈曲し外反する。口縫部は面をなし、頸部に有段階がみられる。	内外面とともにヘラ磨きがなされるが、単位は不明。		

辨認番号	造模番号	器種	法量 (cm) 口縫器 頭径 頭径	形態・文様	手 法	備考
16	S D 1	森	13.6 ( 5.4) — —	頭部は緩やかに外反し、口縫部は縦外反し開く。口縫部には、口縫外面、貼付けによる有段部がみられる。	口縫部外面にナデ調整、頭部外面は斜め方向の、内面には横方向のヘラ磨きがみられる。口縫部内面は擦耗により不明。	
17.	#	#	15.9 ( 6.2) — —	直立気味にやや開く頭部より、口縫部は緩やかに外反する。頭部は面をなす。口縫間に口縫部外面、貼付けによる有段部がみられる。	内外面とともに横方向のていねいなヘラ磨きがなされる。	
18.	#	#	15.8 (11.0) — —	直立気味に大きく開く頭部に小さく強く屈曲する口縫部をもつ。頭部は丸くおきめ上唇部には有段部がみられ下部には2条のヘラ括沈線を施す。	内外面とともに、ナゲ調整にヘラ磨きがなされるが単位は不明。	能成良好。
19.	#	#	18.8 ( 6.7) — —	直立気味の頭部より、緩やかに外反する口縫部。通路はやや強く屈曲し、丸くおきめる。口縫間にはヘラ括き沈線による有段部がみられる。	頭部外面は横方向、口縫部外面および内面は横方向のヘラ磨きがみられる。	#
20.	#	#	18.8 ( 3.2) — —	強く外反し開く。口縫部は面をなし、口縫間にヘラ括き沈線による有段部がみられる。	内外面とともにナデ調整にヘラ磨きがなされるが単位は不明。	
21.	-#	#	21.7 ( 4.0) — —	直線的に開き、口縫部は面をなし、外面へ若干更進する。口縫部は口縫部外面、貼付けにより段部を形成。ヘラによる圧痕がみられる。	内外面とともに横方向のヘラ磨きがなされ、口縫部外面に擦耗がみられる。	
22.	#	#	24.0 ( 3.0) — —	短く屈曲し開く口縫部である。頭部は面をなす。口縫間に少巻きみの有段部がみられ、強い筋目を施す。頭部下端には1条のヘラ括沈線を配す。	内外面とともにナデ調整。	能成良好。
23.	#	#	19.2 (26.7) 32.2 —	強く側った頭部より直線的に立ち上がり緩やかに外反する。口縫間にヘラ括沈線による筋部をもち、上唇部にも低い筋部をもつ。	口縫部外面と筋部は横方向、頭部は横方向のヘラ磨きがなされ、口縫部内部にも横方向のヘラ磨きがみられる。	
24.	#	#	(30.2) ( 8.8) — —	直立する頭部により大きく外反し、開く。口縫間に複数により形成される強い有段部がみられる。	内外面とともにヘラ磨きがなされ口縫部前面には擦耗がみられる。	
25.	#	#	— ( 6.6) — —	段部を有する上唇部である。有段部の下には2条のヘラ括沈線と3本の墨流文を配す。	外面にヘラ磨きがなされるが単位は不明。内面は擦耗のため不明。	
26.	#	#	— ( 7.4) — —	段部を有する上唇部であり、頭部はやや側方に立ち上げる。有段部はヘラ括沈線により形成され、頭部下に同じく1条の沈線を配す。	内外面とともにヘラ磨きがなされるが単位は不明。内面には指頭部磨きを残す。	能成良好。
27.	#	#	— ( 3.9) — —	段部を有する上唇部である。有段部の下には2条のヘラ括沈線と3本の下弦の墨流文を配す。	内外面とともに擦耗により不明。	能成不良。擦耗する。
28.	#	#	— ( 5.8) — —	段部を有する上唇部であり、無文である。	#	
29.	#	#	— ( 2.8) — —	やや側帶気味の有段部に筋目を施し、その上下に各1条のヘラ括き沈線を配す。	磨耗にて不明。	
30.	#	#	— ( 2.5) — —	有段部にやや斜めの筋目を施し、その下に2条のヘラ括沈線を配す。	#	

辨別番号	遺構番号	器種	法量 （cm）	口 径 基 底 周 長 底 径	形態・文様	手 法	備 考
31	S D 1	壺	— ( 4.6) —	有段部に2条のヘラ括縁を施す。	内外面ともにヘラ磨きがなされるが、単位は不明。	砂輪はほとんどみられない。	
32	■	■	— ( 3.9) —	非常に低い、不明瞭な有段部。段部の上部に3条のヘラ括縁を配す。	外面はヘラ磨きがなされるが、単位は不明。内面は磨耗のため不明。	壁壁は厚く、0.5mm前後の厚さを含む。	
33	■	■	— ( 5.8) —	有段部の下部に3条1組のヘラ括縁を施し、その間に6本1組の山形文を配す。	内外面ともに磨耗のため不明。	有段部で欠損する。	
34	■	■	— ( 3.6) —	明瞭な有段部の上部に1条、下部に2条のヘラ括縁が施され、重複文の一部がみられる。	内面に指頭压痕を残す。		
35	■	■	— ( 4.2) — 8.0	やや上底氣味の底から小さなしゃくれをもち、直線的に開く。	外面には横方向と左上りのヘラ磨きがなされる。内面はナデ調整。		
36	■	■	— ( 7.2) — 7.2	平底より小さくしゃくれをもち、直線的に開き立ち上がる。	外面は左上りのヘラ磨きが、内面には横方向のヘラ磨きが一部みられる。	外面に黒斑がみられる。	
37	■	■	— ( 9.5) — 8.6	やや凹む平底から小さくしゃくれ、内底氣味に開きながら立ち上がる。	外面は縱方向のハケ調整に左上りのヘラ磨きがなされ、1部にハケ目を残す。内面はハケ調整にナデ調整がおこなわれる。		
38	■	■	— ( 5.5) — 9.9	平底から、しゃくれず立ち上がり、さらに弧曲して直線的に大きく開く。	外面に縱方向のハケ磨きがおこなわれる。内面はナデ調整。		
39	■	■	— ( 3.2) — 15.0	非常に厚い平底からしゃくれをもたず、直線的に立ち上がる。	内外面とともにナデ調整。		
40	■	壺	19.6 ( 6.8) —	ほぼ直立達字状をなし、口縁部上面は水平な面をなす。縁部にはヘラ状工具により効目を施し、下部には接合部に有段部がみられる。	内外面ともに縱方向のハケ調整がある。有段部は結合部により形成されたものを焼いナデ調整により仕上げている。	焼成良好。	
41	■	■	28.9 ( 5.7) — —	直線的に開き、大体外反する。口縁部上面は面をなし、下縫に上下に口縁括縁を配し、効目をもつ。口縁下端と突堤にはハケ状工具により効目を施す。	外面は縱方向、内面は横方向のハケ調整。口縁部はヨコナデ。		
42	■	■	22.4 ( 3.3) — —	ほぼ直立し、強く屈曲し水平に開く。口縁部は丸く、やや内側に開く。下部には有段部がみられる。	外面、口縫下に縱方向のハケ調整。口縁部はヨコナデ。効目はヘラ状工具による。		
43	■	■	20.6 ( 2.7) — —	直線的に開き、口縁部に断面三角形の貼付突起をもつ。突起には小さな効目を施す。	内外面ともにナデ調整。口縁部は強いヨコナデにより後をなす。		
44	■	■	21.6 ( 2.0) — —	やや強く外傾しつつ開く。口縁のやや下部に強い効目を施す。太い貼付突起をもつ。	口縁部は強いヨコナデにより、突起間は浅い辺縁状をなす。内外面ともにナデ調整。		
45	■	■	25.4 ( 4.6) — —	やや外傾しつつ開く。口縁のやや上端に断面三角形の貼付突起をもつ。口縁部上端と突起に小さな効目を施す。	口縁部はヨコナデにより、小さく外反する。内外面ともにナデ調整。		

辨認番号	通緝番号	器種	法量 (cm)	口縫部 最高 周径 底径	形態・文様	手 法	備 考
46	S D 1	唐	19.1 ( 3.8 ) — —	直立し口縫部は小さく外反する。口縫直下にやや幅広の貼付突審をもつ。突審には強い刃目を施す。	外面は縦および右下りのハケ調整。内面はナデ調整。口縫部は強いヨコナデにより突審間は浅い状態をなす。	造成良好。	
47	#	#	28.6 ( 4.0 ) — —	ほぼ直立し口縫部は小さく聞く。口縫直下には前面三角形の太い貼付突審をもつ。奥審には上方より強い刃目を施す。	口縫部はヨコナデ。内外面ともにナデ調整。		
48	#	#	19.0 ( 4.9 ) — —	直立し口縫部はやや外反する。口縫の下部に太い貼付突審をもち、割目を施す。	外面は縦方向のハケ調整。内面はナデ調整。口縫部および突審の上には強いヨコナデをおこなう。	造成良好。堅敏である。	
49	#	#	23.5 ( 6.3 ) — —	やや内側気味に聞く。口縫部は緩やかに外反する。口縫直下に貼付突審をもち下端に強い刃目を施す。	外面は右下りのハケ調整。内面はナデ調整。口縫部および突審はヨコナデをおこない、ハケ状工具により、刃目をつける。	造成良好。	
50	#	#	18.6 ( 2.4 ) — —	直線的に開く。口縫部底度に割目を施した貼付突審をもつ。	口縫部および突審をヨコナデし、上面部がやや後退をする。内外面は磨耗のため不明。		
51	#	#	18.2 ( 4.1 ) — —	直線的に外傾し聞く。口縫部底度に前面三角形の突審を貼付し刃目を施す。	口縫部および突審はヨコナデ。外面は磨耗のため不明。		
52	#	#	19.6 ( 2.8 ) — —	直線的に外傾し聞く。口縫部はやや屈曲して開く。口縫直下に前面三角形の突審を貼付しや下方より刃目を施す。	外面は縦方向、内面は横方向のハケ調整。	磨耗する。	
53	#	#	21.5 ( 12.7 ) — —	直立し、口縫部直下に突審を貼付し刃目を施す。口縫部上面はナデにより凹む。	外面は全面に縦方向のハケ調整。内面はナデ調整。	造成良好。内面に斜粒が多くみられる。	
54	#	#	19.5 ( 4.1 ) — —	やや内側気味に聞く。口縫部は緩く外反する。口縫直下に前面三角形の突審を貼付し刃目を施す。	外面とともに、ハケ調整をナデにより施す。口縫部および突審はヨコナデにより凹んだ面をなす。		
55	#	#	24.8 ( 3.5 ) — —	直立し、口縫部は近く外反する。口縫部外側に奥審を貼付し外傾する。奥審には小さな刃目を施す。	外面は縦方向のハケ調整。内面はナデ調整。		
56	#	#	20.3 ( 4.6 ) — —	直立する体部から口縫部は小さく聞く。口縫直下に丸みをおびた奥審を貼付し刃目を施す。	内外面とともにナデ調整。口縫部および、奥審はヨコナデにより上端はややとげ上がる。	磨耗が激しい。	
57	#	#	20.2 ( 2.0 ) — —	やや外反し、大きく聞く。口縫部はナデにより、突審をぎみに若干外傾し、ハケ状工具により刃目を施す。	口縫部は内外面ともに横方向のハケ調整。口縫直下外側は縦方向のハケ刃目がみられる。		
58	#	#	17.9 ( 5.2 ) — —	若干内寄し、直立する体部よりやや外反する口縫部。口縫部外側にナデにより、やや外張し刃目を施す。	外面は右下りのハケ調整。内面は磨耗により不明。口縫部はヨコナデ。		
59	#	#	22.6 ( 5.7 ) — —	内側気味に聞く。体部より口縫部はやや外反する。縫部外側にへらによる小さな刃目を施す。	外面は縦方向のハケ調整。内面はナデ調整。口縫部はヨコナデ。		
60	#	#	19.7 ( 12.3 ) — —	如意形に聞く。口縫部はやや外反する。縫部は外傾する面をなし、強く刃目を施す。	外面は縦方向のハケ調整。内面はハケ調整の後に丁寧なナデ調整。		

掉虫番号	遺精番号	器種	法量 (cm)	口器高 径(後 底後)	形態・文様	手 法	備 考
61	S D 1	斐	23.0 ( 3.2) — —	直立する体部より若干外反し開く。 口縫端部はヨコナデにより外傾する面をなし、やや底張。端部前面にハケ状工具により刻目を施す。	外面は表面が剥落し不明。内部もかなり磨耗するが、ナデ調整がみられる。	磨耗する。	
62	8	8	16.0 ( 3.8) — —	やや外反し直線的に開く。口縫端部はヨコナデにより外傾する面をなし、刻目を施す。内部はやや凹み上端は底をなす。	外面ともに磨耗し不明。		
63	8	8	22.5 ( 3.5) — —	直立する体部より口縫部は直線的にやや開く。口縫端部は外傾する面をなし、小さな刻目を施す。	外面は縱方向、内部は口縫部に横方向のハケ調整がみられる。	磨耗する。	
64	8	8	23.8 ( 3.5) — —	緩やかに外反する口縫部。端部はヨコナデにより、やや内済氣味に底張をなし、下端下端に深い刻目を施す。	外面は縱方向、内部は右上がりの横方向のハケ調整がみられる。		
65	8	8	19.5 ( 3.4) — —	直立し、若干外反する。口縫端部はヨコナデにより外傾する面をなしハケ状工具により、深い刻目を施す。	外面は縱方向のハケ調整。		
66	8	8	24.0 ( 5.6) — —	直立した体部より口縫部は小さく開く。端部はヨコナデにより外傾する面をなし、小さな刻目を施す。上端は底をなす。	外面は縱方向のハケ調整。内部は右下りの横方向のハケ調整。	全体的にやや磨耗する。	
67	8	8	17.9 ( 4.6) — —	直線的に開き、口縫部は緩やかに外反する。端部はヨコナデなどからおさめ、下端に深い刻目を施す。上端は底をなす。	外面は表面が剥げて表面剥落する。内部は横方向のハケ調整が薄くみられる。		
68	8	8	14.5 ( 3.4) — —	内済氣味に開き、口縫端部は小さく外方へ屈曲し、深い刻目を施す。	外面は縱方向のハケ調整。内部は右上りのヨコハケが若干みられる。		
69	8	8	18.0 ( 4.9) — —	直線的に内傾し、口縫部は小さく外反する。端部に小さな刻目を施す。	端部外面にやや新めのタテハケ調整。口縫部外面はヨコナデ。	器壁がやや薄い。	
70	8	8	22.8 ( 3.8) — —	直線的に外傾し頸部より口縫部はやや強く屈曲する。端部は丸くおさめ深い刻目を施す。	外面はタテハケをナデ調整し内部もナデ調整。	8	
71	8	8	18.3 ( 5.0) — —	直線的に内傾し、口縫部は小さく外反する。端部は丸くおさめ、やや上端に刻目を施す。	外面とともにナデ調整であるが、磨耗が激しい。		
72	8	8	18.8 ( 6.0) — —	やや内済氣味に大きく外傾する割より、口縫部はなどからに若干開く。端部は丸くおさめ、やや下端に刻目を施す。	外面は縱方向のハケ調整。内部はナデ調整。	口縫部外面に黒斑がみられる。	
73	8	8	— ( 1.4) — 5.9	やや上行底気味の平底であり、大きなしゃくれをもつ。	外面に横方向のナデ調整。		
74	8	8	— ( 3.1) — 5.9	平底でややしゃくれをもつ。	外面は縦方向のハケ調整。内部もハケ調整にナデ調整を行う。	底面から外部にかけて黒斑がみられる。	
75	8	8	— ( 4.0) — 5.4	上げ底気味の底部から、ややしゃくれをもら、内済しつ立ち上がる。	外面とともに丁寧なナデ調整。	他成良好、堅膜であるが内部に黒斑がみられる。	

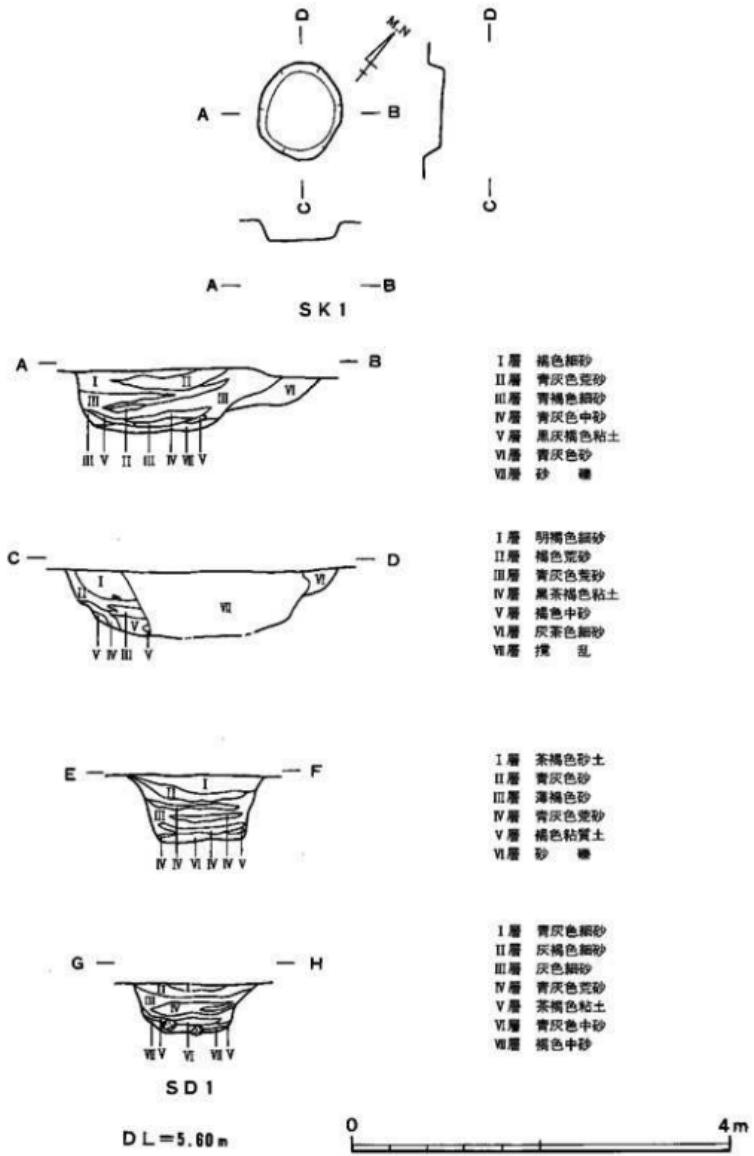
神田番号	遺構番号	断面	法量 (cm)	口径 器高 頭径 底径	形態・文様	手法	備考
76	S D 1	■	— ( 2.0 ) — 5.9	平底から、ほとんどしゃくれをもたず立ち上がる。	内外面ともに磨耗のため不明。		
77	#	#	— ( 2.2 ) — 7.4	平底から若干のしゃくれをもち、立ち上がる。	外面は縱方向のハケ調整。内面には指痕圧痕を残す。		
78	#	#	— ( 3.8 ) — 7.5	平底から、若干のしゃくれをもち内湾気味に立ち上がる。	外面は縱方向のハケ調整。内面は磨耗のため不明。		
79	#	#	— ( 3.4 ) — 8.6	平底から直立気味に立ち上がる。	外面は縱方向のハケ調整。内面はナデ調整。		
80	#	#	— ( 3.2 ) — 9.1	平底から直線的に開き立ち上がる。	#	断面に結合痕がみられる。	
81	#	#	— ( 3.2 ) — 8.3	やや厚い底部から、若干丸味をおび直線的に立ち上がる。	#	内面に墨斑がみられる。	
82	#	#	— ( 3.1 ) — 6.3	平底から、やや大きめに開き、立ち上がる。	外面に若干の縦方向のハケ目を残す。内面はナデ調整。		
83	#	#	— ( 3.7 ) — 8.5	平底から、やや丸味をおびて立ち上がる。	外面は縱方向のハケ調整。内面はナデ調整。		
84	#	#	— ( 3.7 ) — 8.7	平底から、やや外反気味に立ち上がる。	#		
85	#	#	— ( 3.2 ) — 8.2	中央部がやや膨らむ平底である。	#		
86	#	#	— ( 5.1 ) — 7.1	平底から突立し立ち上がり、内湾気味に開く。	外面は全面に縦方向のハケ目をよく残す。内面はナデ調整。		
87	#	#	— ( 4.5 ) — 8.7	平底から丸味をおびたしゃくれをもち、立ち上がる。内面も腰やかに内湾する。やや厚い底部である。	外面は縦方向のハケ調整。内面はナデ調整。		
88	#	#	— ( 3.5 ) — 7.4	平底から丸味をおび強くしゃくれて立ち上がる。	内外面ともに磨耗により不明。	外面に墨斑がみられる。	
89	#	#	— ( 3.9 ) — 8.8	平底からやしゃくれをもち、大きく開きながら立ち上がる。	外面は縦方向のハケ調整。内面には指痕圧痕を残す。		
90	#	#	— ( 4.3 ) — 9.4	平底から小さなしゃくれをもち直立気味に立ち上がる。	内外面ともに磨耗のため不明。		

辨認番号	道構番号	種類	法量 (cm) 器高径 底径	形態・文様	手 法	備考
91	S D 1	慶	— ( 3.2) — 8.1	平底から、ややしゃくれをもち立ち上がる厚い底部である。	外面は、細い縱方向のハケ調整。 内面には指頭圧痕を残す。	表面に接合痕 がみられる。
92	〃	〃	— ( 4.5) — 6.9	しっかりした平底から直立し立ち上り、開く。	外面は縱方向のハケ調整。 内面はナデ調整。	
93	〃	〃	— ( 3.5) — 8.9	平底からややしゃくれをもち立ち上がる。	外面にはやや粗い縱方向のハケ調整。 内面はナデ調整。	表面に粗痕が 2ヶ所みられる。
94	〃	〃	— ( 4.9) — 7.2	平底からやや先端おびたしゃくれをもち立ち上がる。	外面は縱方向のハケ調整。 内面はナデ調整。	
95	〃	〃	— ( 5.2) — 9.1	平底から小さいしゃくれをもち直立気味に立ち上がる。	内外面ともにナデ調整。	
96	〃	〃	— ( 4.6) — 9.3	平底から、強くしゃくれ、内湾しつつ立ち上がる。	外面は縱方向のハケ調整。 内面はナデ調整。	
97	〃	〃	— ( 4.2) — 9.5	中央部がやや凹む円板状の底部から、内湾気味に立ち上がる。	外面はやや斜めの縱方向のハケ調整。 内面はナデ調整にヘラ压痕が一部みられる。	
98	〃	〃	— ( 5.2) — 11.3	中央部が若干上げ底気味となる平底。ややしゃくれをもつ。	外面は若干粗い斜めの縱方向のハケ調整。 内面はナデ調整。	表面に接合痕 がみられる。
99	〃	〃	— ( 7.0) — 8.7	平底から直線的に開く。	外面は縱方向のハケ調整。 内面はナデ調整。	
100	〃	〃	— ( 6.0) — 11.4	外環部がやや凹む。平底から、なだらかに立ち上がる。	内外面ともにナデ調整。	
101	〃	〃	— ( 12.5) — 8.6	平底からややしゃくれをもち直線状に立ち上がり開く。	外面は脚部にかけて、細い縱方向のハケ調整。 内面はナデ調整に指頭圧痕を若干残す。	
102	〃	〃	— ( 8.4) — 8.7	平底からややしゃくれをもち、直線的に開く。	外面はやや斜めの縱方向のハケ調整。 内面はナデ調整。	
103	〃	〃	— ( 6.0) — 8.4	やや厚い平底から小さくしゃくれ直線的に開く。	外面は縦方向のハケ調整。 内面はナデ調整。	
104	〃	鉢	20.9 ( 4.0) — —	直立する口縁部であり、端部は水平な面をなす。	外面とともに縦方向のヘラ巻きがなされる。 内面は特に丁寧である。	
105	〃	〃	— ( 12.0) 23.5 —	割目を施す有段部をもつ全体であり、底部から上は直立し下部は内湾し終る。	外面は有段部の上に横方向、施は縦方向のハケ調整。 内面は指頭圧痕を残す。	1~3mmの砂粒を多く含む。 有段部をもつ際に重視する。

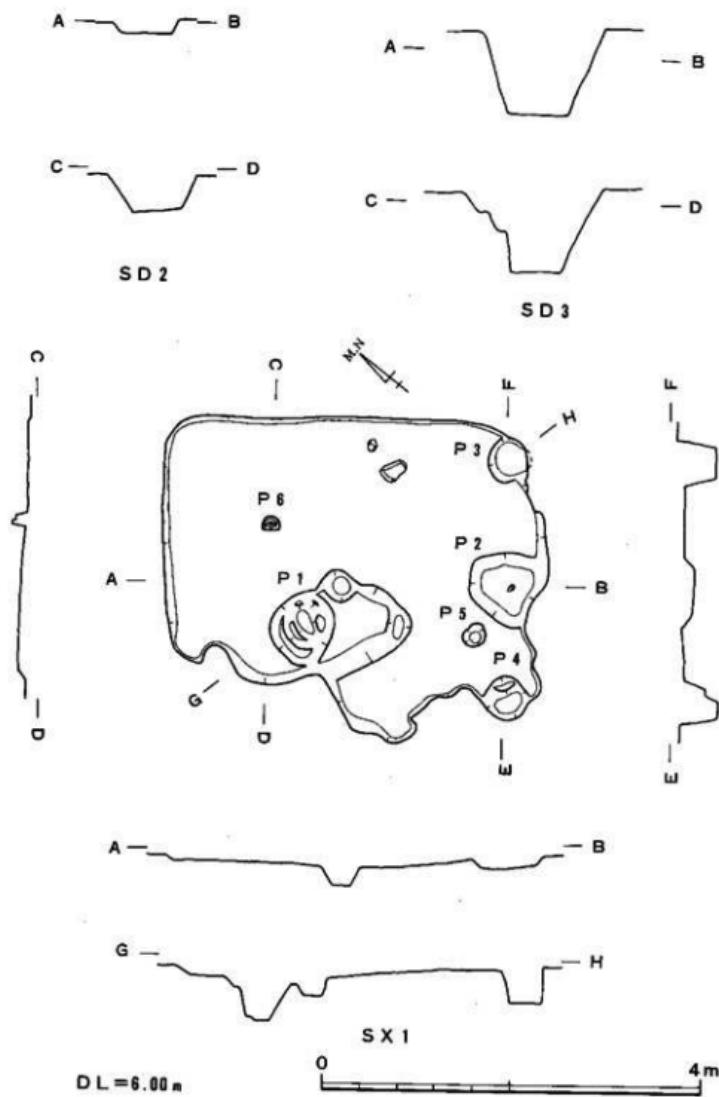
辨認番号	遺構番号	器種	法量 (cm)	口径 器高 底径	形態・文様	手 法	備考
106	S D 1	磨錐車	径 5.4 厚さ 1.1 重量(g) 17		磨片軸用であり、表面間に 2mmほどの穿孔がみられる。		結錐車の未成品である。

第35表 遺構出土石器観察表

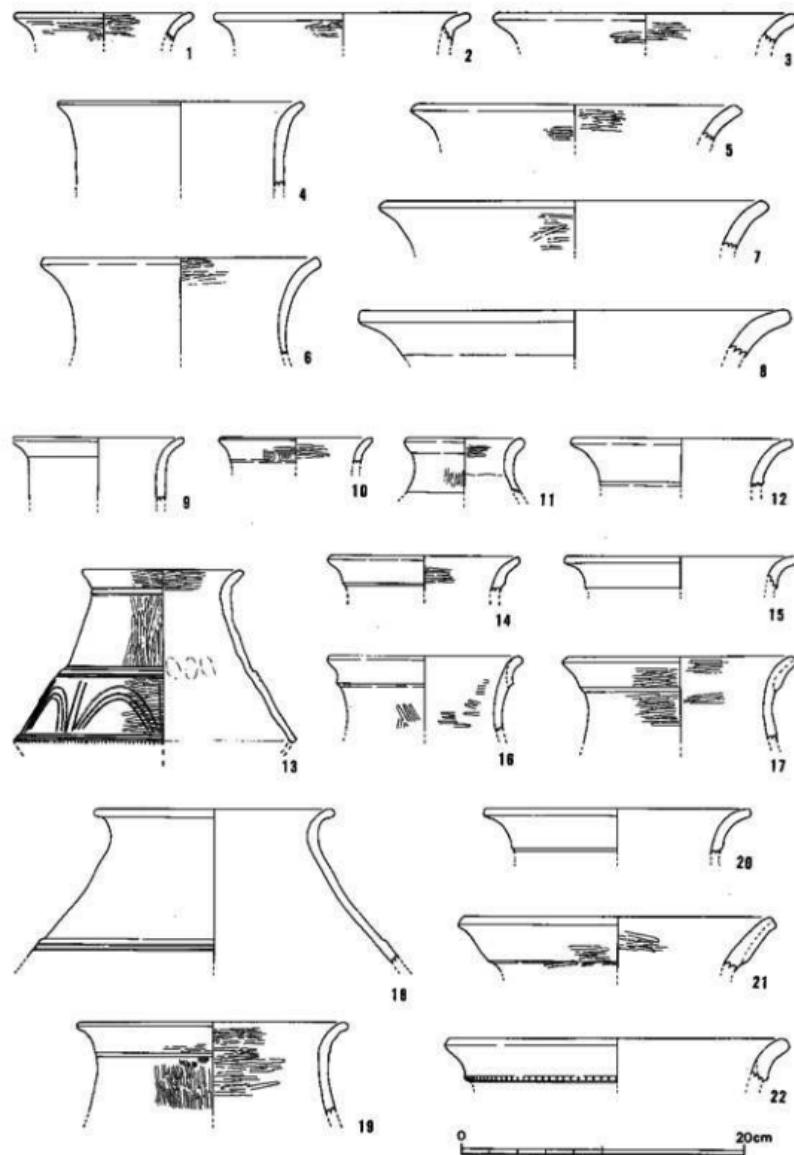
辨認番号	遺構番号	器種	計測値 (cm.g)	最大長 最大幅 最大厚 度	材質	特徴	備考
107	S X 1	石斧	8.1 3.5 1.6 60.0		砂質	自然石を利用し、端部を一部研磨し両刃の刃部を作り出す。	J-1より出土する。
108	S D 1	砾石	7.0 5.8 2.3 165.0		砂岩	表面および右側面の2面が砥面として使用され、よく研磨される。	
109	#	叩石	16.6 9.3 5.2 111.0		#	偏平な橢円形の自然礫を使用。上端部に、小剣突が数ヶ所みられ、下端部に敲打痕が認められる。	
110	#	#	25.4 8.7 6.8 281.0		緑色岩	柱状の自然礫を使用。下端部に若干の敲打痕がみられる。	



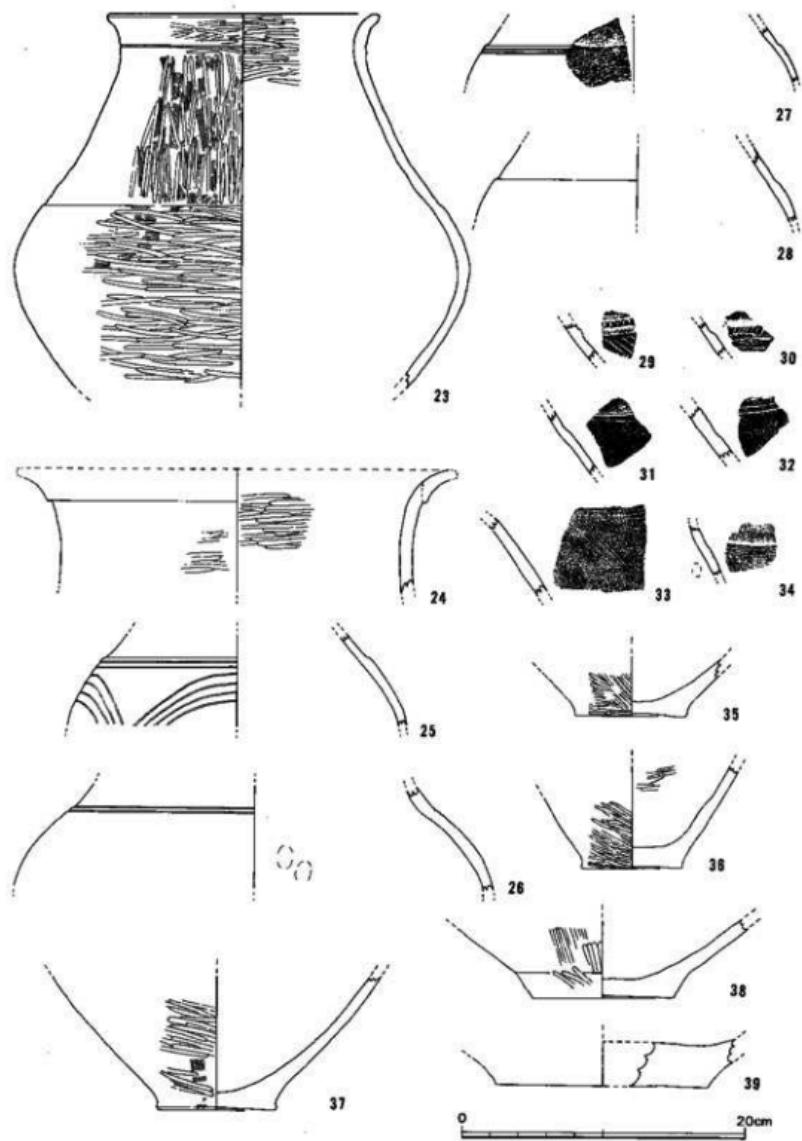
第126図 SK1、SD1セクション



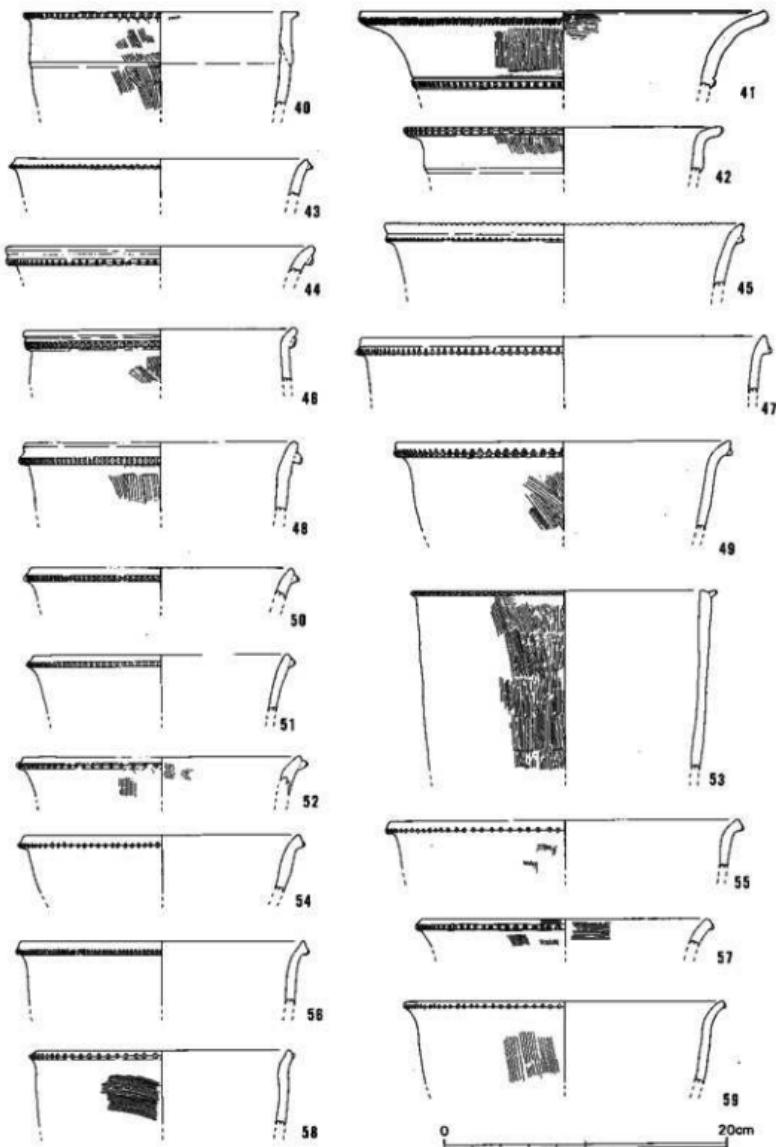
第127図 SD 2・3、SX 1



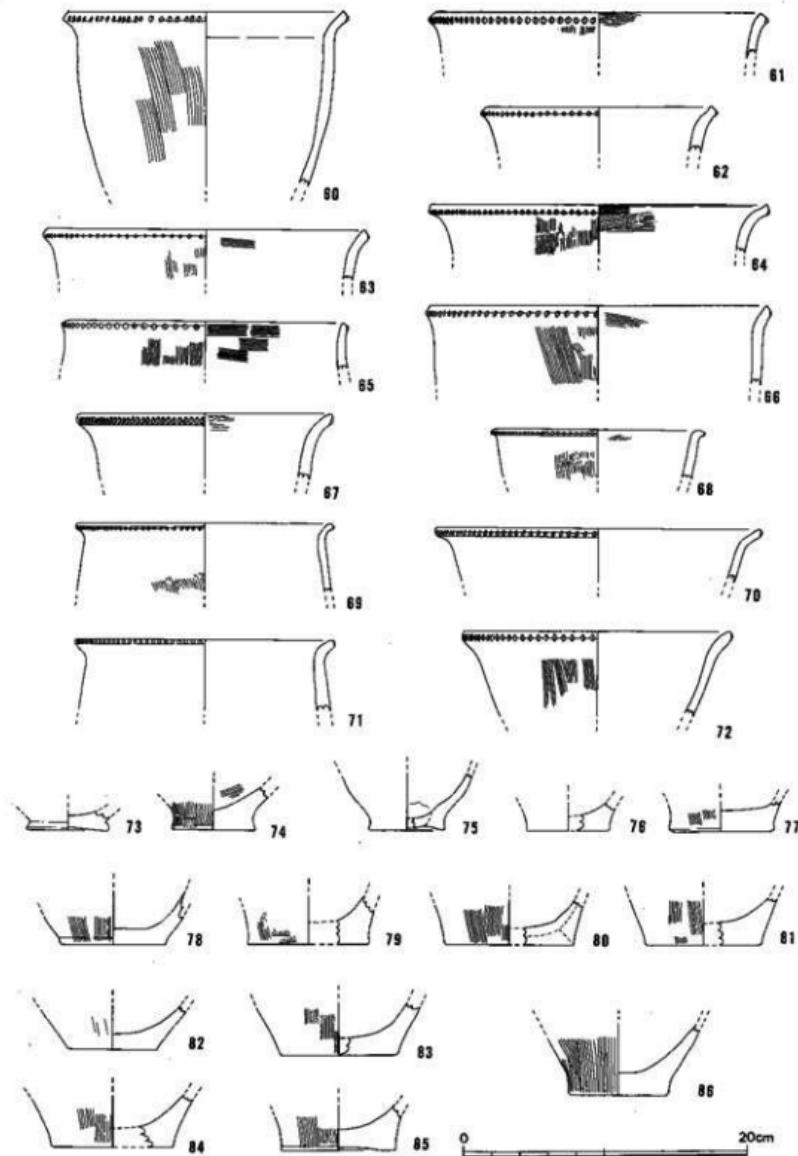
第128図 SD 1 出土遺物



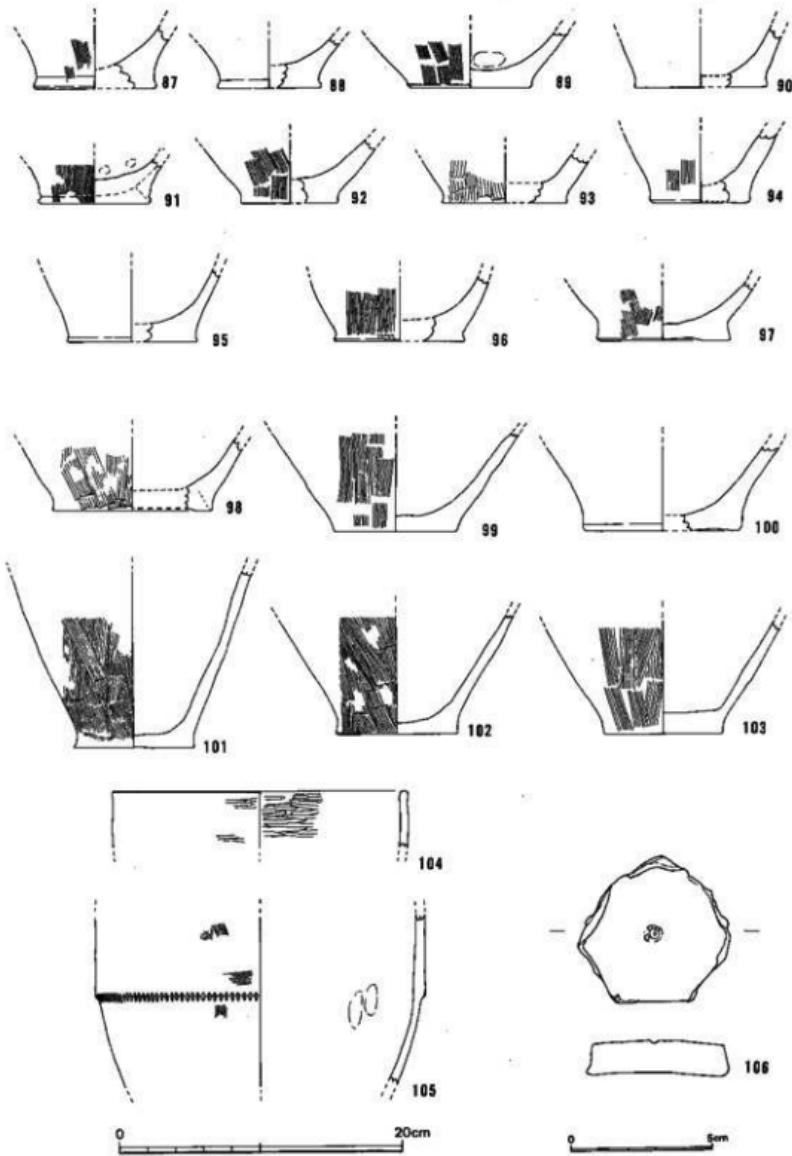
第128図 SD 1 出土遺物



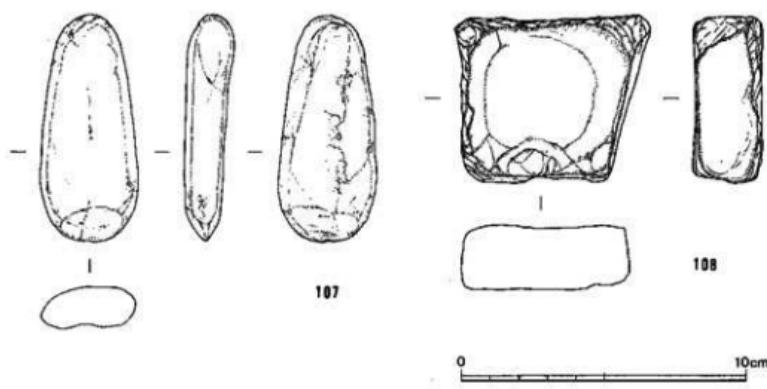
第130図 SD 1 出土遺物



第131図 SD 1 出土遺物



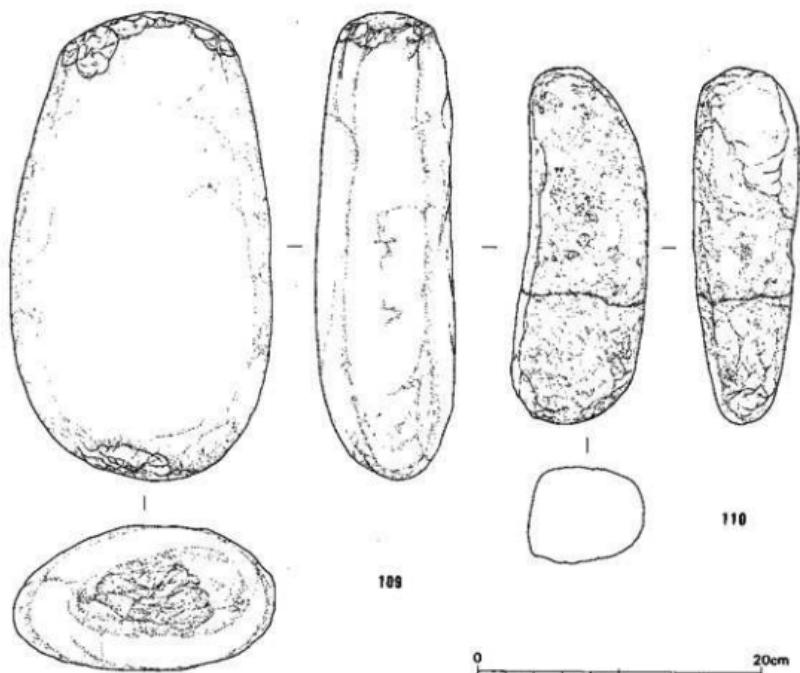
第132図 SD 1 出土遺物



107

108

0 10cm



109

110

0 20cm

第133図 SD 1, SX 1 出土遺物

**4. Loc. 17**

## Loc.17

### 1. 位置と調査経過

Loc.17は、田村遺跡群のはば中央部に位置し、小字スエン坊の南部にあたる調査区である。南には弥生前期Ⅰの集落址を検出したLoc.16・25が接しており、西には水田址を検出したLoc.23がある。

当調査区東部において、空港拡張に伴う県道工事が行われ、その仮道路敷設前に発掘調査が緊要となった。そこで、まず、緊急工事区域に5か所の試掘グリッドを設定し、調査したところ、多量の前期弥生土器の出土をみた。そのため、当調査区の東半部全面にわたって発掘調査を行い、土壙を中心とする遺構群を確認した。

後に、緊急工事区域外である西半部の調査も行い、遺構の検出に努め、最終的には第VI層直上まで掘り下げて、弥生時代前期を中心とする遺構群を確認した。

調査期間は昭和56年5月～11月の約7か月間である。

### 2. 調査概要

Loc.17は、道路工事との関係から全域を一挙に発掘することはできなかつたが、最終的には東西両区を合わせて2,202m<sup>2</sup>を発掘した。出土遺物の大半は前期弥生土器が占めており、その数も甚大である。上層においては土師質土器を中心とする中世の遺物も若干出土した。

検出遺構としては、竪穴状遺構1基、掘立柱建物址5棟、土塙31基、溝状遺構5条、柵列1が挙げられる。うち、出土遺物等から弥生時代前期のものと特定できるのは、竪穴状遺構と掘立柱建物址3棟、土塙18基及び溝状遺構2条である。

その他の遺構は、形状も曖昧なものが多く、時期不明であるが、埋土の状況等から中世のものも少なからず含まれているものと考えられる。特に、SB4・5は、検出状況から判断して、中世の建物とした方が合理的であるが、決め手となる資料がないため、便宜上、本編で扱うこととした。

### 3. 層序と出土遺物

本調査区における基本的な層序は、次の通りである。

第I層 耕作土

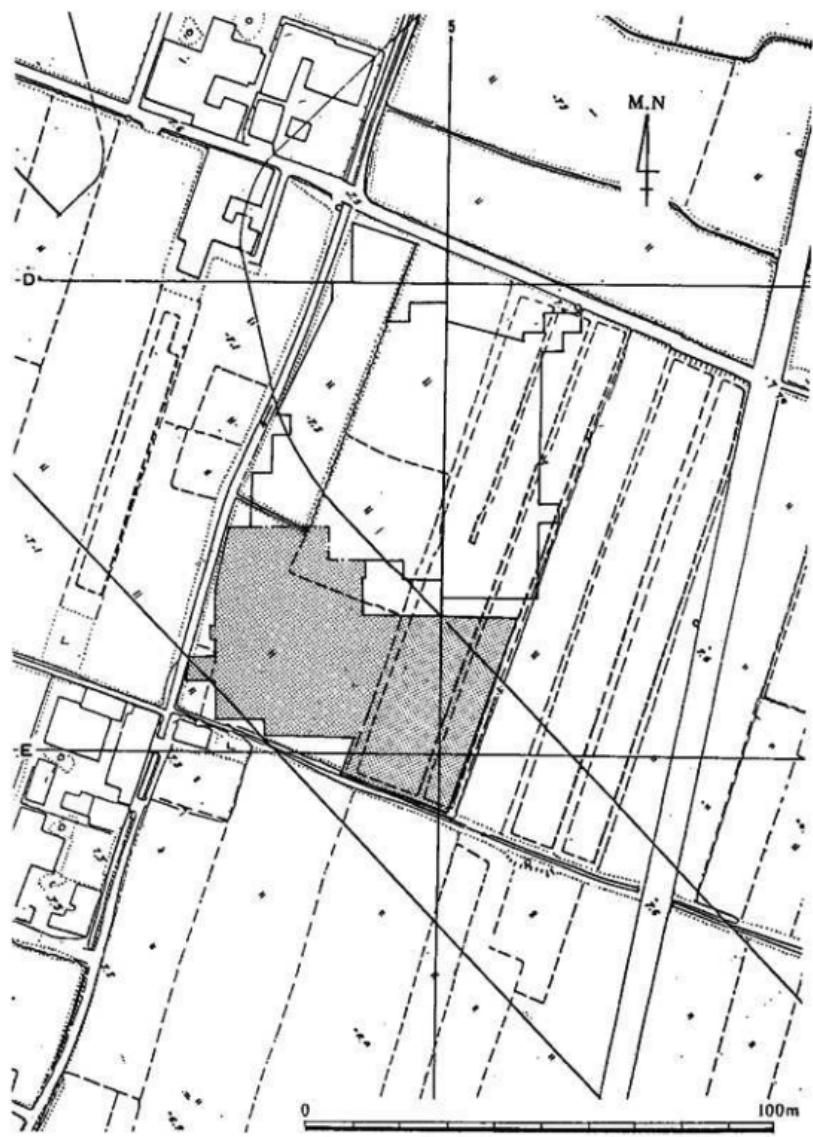
第II層 床土

第III層 灰黄褐色粘質土層

第IV層 灰黒褐色シルト層

第V層 黒褐色粘質土層

第VI層 黄褐色粘質土層



第134図 調査区設定図

主として中世遺構と考えられるものは第Ⅳ層以下を掘り込んでおり、弥生時代の遺構は第Ⅵ層を掘り込んでいた。但し、第Ⅴ層の堆積は北側および西側では薄くなってしまっており、第Ⅳ層を除去した段階でも一部の弥生遺構は確認できた。相対的に、第Ⅵ層上面は南側と東側では徐々に標高を減じており、原地形も北西部がやや高い状態であったと推定される。また、南部を中心として第Ⅵ層上面には大小の礫が面を出しており、当該期に河川の氾濫があった可能性もある。

遺物の出土は第Ⅲ～Ⅴ層中からみられた。第Ⅲ層は中世および弥生の遺物（1、2および3～8、145、150）を包含している。第Ⅳ層および第Ⅴ層は、いずれも黒褐色系を呈し、弥生前期の単純包含層であり、弥生時代の遺構の埋土とは同質である。両層とも、非常に多くの弥生前期Ⅰの土器が出土しており、なかに、わずかだが前期Ⅱのものが混入している状況である（9～76及び77～144）。石器の出土も若干みられた（146～149及び152～155）。

#### 4. 遺構と遺物

##### 竪穴住居址

###### S T 1

S T 1は、調査区の西部中央で検出された。第Ⅴ層除去の段階から土器片の出土が夥しく（52、64、79、83、141）、直径3.30m前後の不整円形の平面形をもって確認された。埋土は、黒褐色粘質土をベースとしており、中位にやや砂質を帯びた土砂がブロック状に混入していた。埋土中からも、多くの前期Ⅰの土器（156～166）が主として出土しており、有茎磨製石鋸も1点（331）出土している。

かかる状況に加えて、底面まで掘り下げた段階で北端部に横円状を呈する焼土を検出した。焼土には木炭も含まれており、当遺構が竪穴住居址である可能性が強くなった。しかし、底面には自然礫が食い込んでおり、柱穴も確認できず、また、壁の立ち上がりも不明瞭であるため、竪穴状遺構という表現の方がよいであろう。

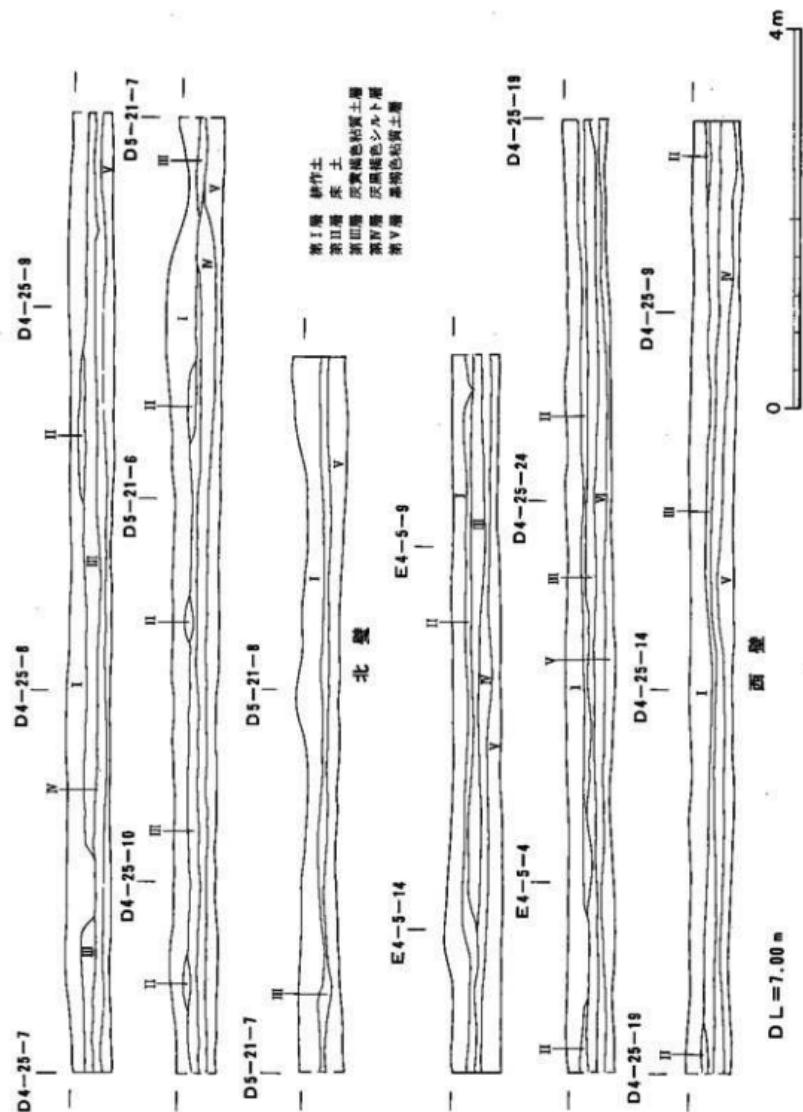
完掘時における底面のレベルは6.35mを測り、東南部はベッド状にやや高くなっていた。壁高は0.20m前後を測る。なお、北端にある浅い落ち込みは焼土を除去した部分である。

##### 据立柱建物址

###### S B 1

S B 1は、発掘区の北部中央において、第Ⅴ層発掘時に一部検出され、全体的には第Ⅴ層を完全に除去した段階で確認された。この建物に併行するように、東に同形態のS B 2が隣接している。

S B 1は、1×3間の南北棟であり、梁間1.68m、桁行5.40mを測る。棟方向はN-38°-



第135図 調査区セクション

Eを指し、桁行の柱間距離はほぼ均一に1.80mを測る。各柱穴の平面形は概ね直径約40cmの円形を呈し、確認できた柱底の直径は22cmである。深さは30cm前後でやや浅い。各柱穴の埋土はすべて黒褐色粘質土であり、埋土中より弥生土器片が数点出土したが、図示できるものはなかった。また、8個の柱穴のうち4個には切り合い関係が認められ、一度建て替えが行われた形跡がみられる。この建物の性格としては、その形状・規模からして高床式倉庫を考えられ、時期的には前期Iのものとも考えられるが、北東端の柱穴がSD4を切っており、前期IIに下がる可能性も強い。

### S B 2

S B 2は、S B 1の東側に位置し、第V層発掘時に一部検出され、全体的には第V層を完全に除去した段階で確認された。S B 1を東へ1間半、南へ1間平行移動させた場所に存在する。

S B 2も1×3間の南北棟であり、棟方向は、N-41°-Eを指し、S B 1よりわずかに東へ振っている。梁間1.72m、桁行5.52mを測り、桁行の柱間距離は1.80~1.96mを測り、ほぼ等間隔である。各柱穴の平面形は、円形あるいは不整円形を呈し、直径50cm前後を標準とする。深さは1個を除いて20cm前後と浅い。確認できた柱底の直径は30cmである。埋土は黒褐色粘質土であり、埋土中より弥生土器片が数点出土したが、図示できたのは底部破片1点(167)のみである。

この建物も、S B 1と同じく弥生前期の高床式倉庫と判断される。この2棟は、棟方向がほぼ等しく、また、形状・規模が酷似していることから、同時期に併存されていた可能性が強い。

なお、S B 2は南半部の4個の柱穴がSK8を切っているが、SK8からも前期Iの遺物が出土している。

### S B 3

S B 3も、第V層発掘時に調査区西部中央で一部が検出され、第V層を完全に除去した段階で確認された。S B 1の東南部に位置する。

S B 3は、4×6間の東西棟であり、梁間4.56m、桁行8.64mを測る。棟方向は、N-57°-Wを指し、S B 1・2とはほぼ直交する関係にある。S B 3の総面積(柱穴外周内)は、46.4m<sup>2</sup>に及び、S B 1・2の3倍強にある。この建物は柱間距離が短いのが特徴であり、平均柱間距離は、梁間で1.14m、桁行で1.44mとなっており、なかには1.00m未満の箇所もある。しかし、周縁に柱穴が多い割には、内部の柱穴は東寄りに1個確認されたのみである。

各柱穴は平面形が直径40cm前後の円形を呈し、確認できた柱底は直径20cmを測る。埋土は黒褐色粘質土で、深さは10~40cmと概して浅い。埋土中よりは弥生土器片が数点出土したが、図示できるものはなかった。

S B 3の性格としては、弥生前期の高床住居と考えた方が、その形状・規模からして最も妥当であるし、かつ、S B 1・2と併存していたと考えるのが自然である。また、後述するSK

6～8も、この建物と何らかの関連をもつのではないかと考えられる。

なお、SB2は西部でSD2と切り合っている。検出状況では柱穴が溝を切っていたが、両者とも埋土は黒褐色粘質土であり、溝がSB2に付属する施設であった可能性もある。

#### SB4

SB4は、調査区の南部中央において、第III層除去後に検出された。柱穴の配置がやや不規則ではあるが、一応、 $2 \times 2$ 間の東西棟である。すなわち、梁間（南北）3.72m、桁行（東西）4.20mを測るもの、東の柱間は西の柱間の2倍強となっており、西端の梁行には中間の柱穴がない。棟方向はN-68°-Wを指す。

各柱穴の平面形は直径25cm前後の円形を呈し、深さは10～32cmと差がみられ、概して浅い。埋土は灰黄色粘質土であり、埋土中より弥生土器の細片が若干出土した。

SB4は、柱穴より弥生土器が出土してはいるものの、検出状況からして弥生時代の建物とは考え難い。また、付近のピットおよび第III層より中世の土師質土器細片を出土していることから、この建物の時期も中世に下げた方がよいと思われる。

#### SB5

SB5は、SB4の南に接する位置で、第III層除去後に検出された。形状的にもSB4に類似した建物址である。梁間3.68m、桁行4.36mを測る東西棟であるが、梁間2間であるのに対して桁行は1間しかない。但し、中央部東寄りに柱穴が1個確認されている。棟方向はN-66°-Wを指す。

各柱穴は、直径30cm前後の円形の平面形を有し、深さは10～28cmと浅い。埋土は灰黄色粘質土であり、埋土中より弥生土器の細片が若干出土した。

SB5も、検出状況からして弥生時代の建物とすることはできず、形状及び棟方向からしてSB4と同時期の建物と考えられる。特に、棟方向が酷似していることは両棟が併存していたことを推定させる。

#### 土塙

#### SK1

SK1は、調査区の北西端部に位置し、第VI層上面において検出された。平面形は南北に長い不整方形であり、北端部及び東端部は中世のピットによって切られている。長径2.90m、短径0.70m、深さ0.26mを測り、長軸方向はN-38°-Eを指す。

底面の状況は、ほぼ平坦であるが、中央部北寄りにわずかの落ち込みがみられ、北側の立ち上がりは緩やかである。埋土は黒褐色粘質土であり、埋土中より弥生土器の出土をみた。図示

できたのは底部破片2点(168、169)のみであるが、前期Iの土塙である。性格は不明であるが、土塙墓の可能性も考えられる。

#### SK 2

SK 2は、発掘区の北端部に位置し、第VI層上面において検出された。平面形は、溝状に長い不整長方形を呈し、長径2.53m、短径0.35m、深さ0.10mを測る。長軸方向はN-69°-Wを指す。

底面はほぼ平坦であるが、中央部に礫が1つ食い込んでおり、東方上端にも径25cmの礫が乗っている。埋土は黒褐色粘質土であり、埋土中より弥生土器片が数点出土したが、図示できたのは底部破片1点(170)のみである。性格は不明であるが、前期Iに属する土塙である。

#### SK 3

SK 3は、SK 2のすぐ南に位置し、第III層を除去した段階で検出された。平面形は、不整長円形を呈し、長径0.90m、短径0.75m、深さ0.10mを測る。長軸方向はN-20°-Wを指す。

底面は平坦であり、壁の立ち上がりも滑らかである。埋土は灰黄色粘質土で、遺物の出土はみられなかった。検出状況からして、中世の土塙と考えられるが、深さも浅く、特別の機能を有していたものとは考えられない。

#### SK 4

SK 4は、調査区の北西部に位置し、第VI層上面において検出された。平面形は、東西に長い不整長方形を呈し、長径2.90m、短径0.65m、深さ0.18mを測る。長軸方向は、N-56°-Wを指し、北部にあたるSK 1とはほぼ直交する関係にある。

底面は、ほぼ平坦であるが、東西両端に浅い段を有し、南北の壁は直線的に立ち上がり、断面U字状を呈す。埋土は黒褐色粘質土であり、埋土中より多数の弥生土器の出土をみた。そのうち、図示できたのは(171~176)の6点である。いずれも前期Iの特徴を有しており、SK 4もSK 1と同じく、形状的に土塙墓の可能性が考えられる。

#### SK 5

SK 5は、調査区の中央西端にあり、SB 3の西方に位置する。第VI層上面において不整横円形の平面形をもって検出された。長径1.83m、短径0.83m、深さ0.13mを測り、長軸方向N-30°-Wを指す。

底面は、ほぼ平坦であるが、中央部のレベルがやや高くなっている。埋土は黒褐色粘質土であり、埋土中より若干の弥生土器の出土をみた。しかし、いずれも細片であり、図示できるものはなかった。

### SK 6

SK 6は、SK 5とSB 3の中間にあり、また、SD 1の延長上に位置している。平面形は、南北に長い不整長方形を呈し、北半部がやや狭くなっている。長径3.80m、平均短径1.20m、深さ0.20mを測る。長軸方向は、N-35°-Eを指し、SB 3にはほぼ直交する関係にある。

底面には、やや起伏があり、北半部では礫が食い込んでいる。また、東壁に比して西壁は緩やかに立ち上がっており、上面にもやや大き目の礫が乗っている。埋土は、2層に分かれ、第I層は灰黒褐色シルトで、第II層は黒褐色粘質土であった。

埋土中からは多量の弥生土器が出土した。特に、埋土第I層を除去した段階で遺物の出土が著しくなり、底面より5cm内外で浮いた状態の出土が大半であった。遺物はすべて前期Iに属する土器であり、図示できたのは(177~193)である。

SK 6は、SD 1の延長方向上に検出されたため、その時点では溝ではないかと考えられた。しかし、SD 1はその北で止まっており、発掘の結果、単独の土塙であることが明瞭となった。SK 6も、弥生前期Iに機能した土塙と考えられ、遺物の出土状況及び位置関係からみて、SB 3の付属施設である可能性をもっている。

### SK 7

SK 7は、SB 3の北側において、第VI層上面で検出された長大な土塙である。平面形は、東西に延びる長方形を呈し、長径9.44m、短径1.68m、深さ0.30mを測る。遺構図では2つの土塙が切り合っているようにみえるが、埋土の断面観察の結果では単一の土塙と判断された。長軸方向は、N-62°-Wを指し、SB 3と平行になっている。

底面の状況は、ほぼ平坦であるが、東端の壁際が深さ0.40mと一番深くなっている。それから西に向かって徐々にレベルを上げ、中央部を境に一度低くなり、西端の壁に向かって滑らかに立ち上がっている。東西両端付近では底面に礫が食い込んでいる。埋土は、2層に分層され、SK 6と同じく、第I層が灰黒褐色シルトで、第II層が黒褐色粘質土であった。

SK 7では、遺物の出土も極めて多く、そのうち、図示できた土器は(194~211)である。比較的底面よりやや浮いた状態での出土が目立った。また、砥石(320)と石鎌(332)も出土している。

既述の如く、SK 7は、SB 3に並行し、北接しており、また、SB 1・2とも極めて近接した位置にあり、弥生前期においても主要な生活舞台の一部であったと考えられる。加えて、かかる遺物の出土状況は、この土塙が工房的な性格を有していたことを窺わせる。

なお、SK 7は、その西北端部をピット(P 1)によって切られている。このピットからも同時期の遺物を出土している。

### SK8

SK8は、SB2の南部に重複して存在する土塁である。第V層発掘の時点から遺物の出土が多く、第V層を全面カットした段階で検出された。平面形は、不整形であり、土塁として扱うには極めて曖昧なプランであり、単なる地形の落ち込みとすべきかもしれないが、SB2に関連した土塁である可能性もあるので、ここでは土塁として記述することにする。

この土塁は、長径4.65m、短径1.80m、深さ0.26mを測り、長軸方向はN-20°-Eを指す。平面形は不整形であるが、底面は平坦である。SB2の直下に位置するためか、大量の弥生土器（212-218）が出土した。

SK8は、SB2の南北部の4個の柱穴によって切られているが、両者とも弥生前期Iの遺物を出土しており、前者が、後者に付属する施設としての機能を有していたものかもしれない。

### SK9

SK9は、調査区西端において、第VI層上面で検出された。平面形は方形を呈するが、南部をSD3によって切られており、全容は不明である。長径1.70m、残存部短径0.93m、深さは8cmを測り、長軸方向はN-65°-Wを指す。底面は平坦な面をなす。

埋土は黒褐色粘質土であり、弥生時代の遺構と考えられる。しかし、浅い土塁であるためか遺物の出土は皆無であった。

### SK10

SK10は、SK9の南部に位置し、第VI層上面において検出された。平面形は不整形であるが、埋土が灰黒褐色粘質土であり、弥生の遺構と考えられたので、調査区を西に1m拡張して発掘を試みた。

その結果、拡張区西端においてピット状の落ち込みが確認された。しかし、遺物の出土は皆無であり、その形状・性格は不明である。

### SK11

SK11は、調査区の南部西端拡張区において、第VI層上面において確認された。まず、調査予定区西端において灰黒褐色シルトの埋土を有する浅い土塁状の落ち込みが検出されたため、西方に徐々に拡張していくと、それに統いて平面形が長方形を呈するSK11が確認された。

SK11は、長径5.40m、短径1.00m、深さ0.32mを測る長大な土塁であり、長軸方向はN-70°-Eを指す。底面の状態は非常に平坦であり、壁は垂直に近く立ち上っている。埋土は、2層に分層され、第I層が暗褐色粘質土で、第II層が黒褐色粘質土である。

遺物は第II層を中心に大量の出土をみたが（219-223）、残存状態も比較的良好ではほぼ完形の甕（219）と小型手捏土器（223）が、底面より若干浮いた地点から出土した。また、注目す

べき出土遺物として碧玉製の管玉 1 点（333）が挙げられる。

S K11は、その形状および遺物出土状態からして、弥生前期 I の土塙墓と考えられる。貴重な資料であるため西端部も完全に発掘しようとしたが、用水路によつかり不可能であった。

#### S K12

S K12は、S B 3 の東部やや南寄りで、第 VI 層上面において検出された。平面形は、南側が広がる不整長円形で、長径4.32m、短径2.10m、深さ0.25mを測る。長軸方向は、N-42°-E を指し、S B 3 の短軸方向より若干東へ振っている。

底面には、やや起伏があり、自然碟が面を出していて、西部と東部の一部が段状を呈している。南端部にはピット状の小さな落ち込みがあり、この部分を中心に薄い焼土層が約0.50m 四方に広がっていた。埋土は黒褐色粘質土であり、多量の出土遺物をみた。図示できた土器だけでも（224～248）と圧倒的に多い。また、磨製石鎌の未製品と目される石器（321、322）も出土しており剝片類の出土もみた。かかる状況から判断して、S K12は、土器、石器類を製作する工房址の可能性が考えられる。

なお、S K12は南の一部を S D 3 によって切られている。

#### S K13

S K13は、調査区の中央部において、第 III 層を除去した段階で検出された。平面形は直径0.75 m 内外の円形を呈し、深さは0.13mを測る。底面は平坦であり、数個の自然碟が食い込んでいた。埋土は灰黄色粘質土であり、中世のものと推定されるが、遺物の出土は皆無であり、即断はできない。

なお、S K13は、L字状の横列 S A 1 の屈曲部内側に位置しており、同遺構との関連をもつていたものかもしれない。

#### S K14

S K14も、S K13の東方において、第 III 層除去後に検出された。平面形は径1.00m 内外の不整円形を呈し、深さは4 cm と極めて浅い。埋土は黄灰色粘質土であり、出土遺物は皆無であった。

#### S K15

S K15は、調査区の東北部において、第 IV 層上面で検出された。平面形は直径1.10m 内外の円形を呈し、深さは0.10mを測る。底面南部には直径0.40m の円状に焼土が若干盛り上がった状態で確認された。弥生土器の底部破片が出土したが、埋土は黄褐色粘質土であり、後世の土塙と考えられる。

#### S K16

S K16は、S K15の東側に位置し、第IV層上面において検出された。平面形はいびつな形状を呈しており、底面にも起伏がある。単なる地形の落ち込みとも考えられたが、まとまった遺物の出土がみられたため、ここでは土塙として扱った。埋土は灰黒褐色粘質土である。出土遺物のうち図示できたのは（249～252）である。

#### S K17

S K17は、S K16の南側に位置し、第VI層上面において検出された。平面形は直径0.93mの円形を呈し、深さは0.10mを測る。底面はほぼ平坦であり、西端に小さな袋状の浅いビットも確認された。埋土は灰黒褐色粘質土である。

遺物は2点（253、254）が底面よりもやや浮いた状態で出土した。

#### S K18

S K18は、S K17の南に位置し、第IV層上面において検出された。平面形は、不整長方形であり、長径1.00m、短径0.60m、深さ0.16mを測り、長軸方向はN-65°-Wを指す。底面の状態はほぼ平坦である。埋土は淡黄褐色シルトであり、埋土中より若干の弥生土器細片の出土をみたものの、検出状況からして、後世の土塙と考えられる。

#### S K19

S K19は、S K18の西南に位置する。S K18と同じく、第IV層上面において淡黄褐色シルトの埋土をもって検出された。平面形は、不整形であり、長径1.10m、短径0.60m、深さ0.15mを測る。埋土中より弥生土器片が若干出土したが、検出状況からして、後世の土塙と考えられる。

#### S K20

S K20は、調査区の南西部において、第VI層上面で検出された。平面形は、不整長方形を呈し、長径1.16m、短径0.60mを測る。深さは0.10mと浅く、特に、西側の壁の立ち上がりはわずかである。長軸方向はN-57°-Eを指す。埋土は黒褐色粘質土であり、埋土中より弥生土器片（255）が出土した。やはり前期Iの土塙と考えられる。

#### S K21

S K21は、S K20の南東において、第VI層上面で検出された。平面形は、溝状に細長く、両端がビット状に丸くなっている。この部分はビットによって切られているかとも思われたが、切り合い関係はなく、埋土も同一で、ただ底面に自然壁が1個置かれていた。埋土は黒褐色粘

質土であるが、遺物の出土はみられなかった。

#### S K22

S K22は、調査区南寄りに位置し、S B 4とS T 1の間にある東西に溝状に延びる長大な土塙であり、第VI層上面で検出された。長径は7.60mに及び、短径は0.75mを測る。長軸方向はN-63°-Wを指す。平面形が大きい割には、深さは0.30mと浅い。溝状遺構として扱った方が適当かもしれない。底面はやや起伏を有し、自然礫が乗っている。埋土も、黒褐色粘質土をベースとしているが、若干の砂礫を含んでいた。

S K22からは、大量の弥生土器の出土がみられた。そのうち図示できたのは(256~259)である。注目すべき遺物としては、變形土器片を転用したと考えられる筋鉢車(259)がある。

#### S K23

S K23は、S K22の東に接する位置にある。第V層発掘の時点から遺物の出土が目立ち、同層を除去した後に確認された。平面形は、大きい不整長円形であり、長径4.05m、短径1.90m、深さ0.23mを測る。長軸方向はN-20°-Eを指す。底面の状態は、ほぼ平坦であるが、中央部南寄りのレベルが若干上がっている。埋土は黒褐色粘質土で若干の自然礫を含んでおり、底面にも礫が散在する。

S K23からも多量の弥生土器の出土をみたが、図示できたのは底部破片(260~265)のみである。埋土中位より打製石鏃も1点(329)出土した。また、石器類の原材と考えるチャートも出土しており、この土塙も、工房的な役割を果たしていた可能性を考えられる。

#### S K24

S K24は、S K23の南に位置し、第VI層上面において検出された。平面形はいびつであり、また、深さも8cmと極めて浅く、単なる地形の窪みである可能性もある。埋土は黒褐色粘質土で、鉢形土器(266)が出土している。

#### S K25

S K25は、調査区の南東部に位置し、第VI層上面において検出された。いびつな形状を呈しており、東端をピットによって切られている。他のピット状の窪みはS K25を掘り下げた段階で確認されたものである。埋土は淡黒褐色粘質土であり、遺物の出土は皆無であった。

#### S K26

S K26は、調査区の南西部に位置し、第VI層上面において検出された。平面形は、不整三角形ともいうべき形状を呈し、長径3.90m、短径1.20mを測る。長軸方向は、N-57°-Wを指し、

深さは0.20mである。

底面には、やや起伏があり、大小の礫が食い込んでいる。埋土は黒褐色粘質土であるが、埋土中にも多くの礫を含んでいた。弥生土器片も東端部を中心に比較的多く出土したが、図示できたのは（267）のみである。また、磨製石斧の破碎片2点（323、324）も出土している。

なお、SK26の西側にピットが3個並んで検出されているが、これは埋土の状況からして後世のものと考えられる。

#### SK27

SK27は、調査区の南西部に位置し、第IV層上面において検出された。平面形は直径1.10mの円形を呈し、深さは0.20mを測る。遺物の出土は皆無であった。埋土は黄灰色粘質土であり、中世のものと推定される。

#### SK28

SK28は、調査区の東南部SK26の東側において、第VI層上面で検出された。平面形は、不整長円形であり、長径3.70m、短径1.23m、深さ0.15mを測る。底面はやや起伏がみられ、大小の礫も混入している。埋土は灰黄色粘質土であり、遺物の出土は皆無であった。検出状況からして後世の遺構と考えられる。

#### SK30

SK30は、SK29の東において、第VI層上面で検出された。平面形は、長方形を呈し、長径2.05m、短径0.50m、深さ0.23mを測る。長軸方向はN-55°-Wを指す。底面は、ほぼ平坦であり、若干の礫が食い込んでいる。埋土は、黒褐色粘質土であり、東半部には大小の礫が含まれていた。10数点の弥生土器片の出土をみたが、図示できたのは（270）のみである。形状的にみて前期Iの土塙墓である可能性をもつ。

#### SK31

SK31は、調査区の東南端において、第VI層上面で検出された。平面形は、南半が橢円状であるが、北半はいびつな不整形を呈しており、長径2.90m、短径1.30m、深さ0.23mを測る。底面の状態も、北半は起伏をもち、礫が乗っているが、南半はほぼ平坦である。

埋土は黒褐色粘質土であり、埋土中より多くの弥生土器片（271～275）の出土をみた。また、埋土中位より、石鎌（330）及び、その加工段階にある未製品3点（326、334、335）が出土しており、SK31は、前期Iにおいて、石器製作の工房的機能を有していたものと考えられる。

## 溝

### SD 1

SD 1は、調査区北西部に位置し、第IV層上面において検出された。幅0.80m、深さ0.25mの断面U字形を呈する溝であり、調査区北端から南西に向かって延び、SK 6の北で止まっている。埋土は灰黄色土である。

SD 1は、北のLoc.17より続く中世の溝と考えられるが、中世遺物の出土は僅少で、弥生土器片の出土が目立ったが、図示できるものはなかった。

### SD 2

SD 2は、調査区西部において、第VI層上面で検出された。幅0.30m、深さ0.10m、長さ5.60mの小溝である。埋土は黒褐色粘質土であり、埋土中より比較的多くの弥生土器片が出土した。図示できたのは(276)である。

SD 2は、北端と南部の一部をSB 3によって切られている。しかし、SD 2の方向はSB 3の棟方向とほぼ直交しており、切り合い関係は認められるものの、両者は併存していた可能性もある。とすれば、SD 2は、SB 3の排水溝的な機能を有していたものとも考えられる。

### SD 3

SD 3は、調査区の西部中央を直線的に東西に横走する細い溝である。第IV層上面で検出され、検出長は24mである。極めて浅く、埋土は黄黒灰色粘質土である。埋土中より弥生土器の細片が若干出土しており、また、石包丁(325)も出土した。しかし、SD 3は、SK 9及びSK 12を切っており、検出状況からして弥生時代の溝とは考え難く、古墳時代以降の溝と考えられる。

### SD 4

SD 4は、発掘区の北部中央を南北に縱走する、やや変則的な溝状遺構である。北部の支溝は幅1.00m内外であり、この溝と西部の支溝とを合わせた地点から南は1.60mと幅を広げ、南端において幅4.00mの池状を呈して終わる。深さは0.15m前後と浅く、最深部でも0.30mに満たない。平面形が長大である割には極めて浅い溝であり、単なる窪地の可能性もあるが、遺物が大量にまとまって出土しており、溝状遺構として扱った。

埋土は、黒褐色粘質土であり、上部は若干砂質を帯びている箇所もあった。埋土の中位から下位にかけては遺物の出土が顕著であった。出土遺物はすべて弥生時代前期Iに該当するものであり(277~312)、また、石器の未製品(327、328、336)も出土している。

SD 4は、Loc.17の遺構のうちでは最も多くの遺物を出土したが、特に、南端の池状部分と西

南の支構部分からの出土が目立った。この2つの部分は、それぞれ単独の遺構として把握も出来るが、溝との切り合い関係がまったくみられないために同一の遺構として取り扱った。但し、出土遺物については、池状部分を S D 4-S、支構部分を S D 4-Wとして、特に注記を付している。

#### S D 5

S D 5は、調査区の東北端において、第IV層上面で検出された。幅0.52m、深さ0.10m、長さ4.60mの小溝であり、調査区東端付近から北西方向に走っている。埋土は灰褐色粘質土で若干の小砂粒を含んでいた。遺物の出土はみられなかった。

#### 横列

#### S A 1

S A 1は、調査区のはば中央部において、第IV層上面で検出された、L字状の横列である。L字の屈折部の柱穴を基点として、南東に7個、北東へ4個の柱穴がそれぞれ直線上に延びている。柱穴は、直径28cm前後の円形の平面形を有し、深さは15cm前後を測る。柱間距離には若干の差異があるが、その平均は1.00mを測る。

埋土は黄灰褐色粘質土であり、埋土中より弥生土器細片の出土をわずかにみた。しかし、S A 1は、検出状況等からして、弥生時代の横列とは考えられない。

#### ピット

#### P 1

P 1は、SK 7の北西端部に位置し、第VI層上面において検出された。埋土は黒褐色粘質土でSK 7の埋土とはほぼ同じであるが、明らかにSK 7を切っていた。平面形は直径68cmの円形を呈し、深さ33cmを測る。出土遺物は(313、314)である。

#### P 2

P 2は、SK 11の南部に位置し、第VI層上面において検出された。埋土は黒褐色粘質土である。平面形は直径38cmの円形を呈し、深さは6cmと浅い。出土遺物は(315)である。

#### P 3

P 3は、SB 4の西部に位置し、第VI層上面において検出された。平面形は直径56cmの円形を呈し、深さは20cmである。埋土は黒褐色粘質土である。埋土中位では南側に礫が詰められて

いた。出土遺物は(316、317)である。

#### P 4

P 4は、SK 26の西部に位置し、第VI層上面において検出された。平面形は直径66cmの円形を呈し、深さは18cmを測る。西寄りに直径30cmの柱痕状の落ち込みを有す。埋土は黒褐色粘質土であり、埋土中位より弥生土器底部破片(318、319)を出土した。

#### 5.まとめ

Loc.17においては、当地方における弥生時代前期前半の多くの資料が発見された。

まず、第IV・V層から出土した遺物の大半は前期Iのものであり、当地方における前期前半の土器の編年的研究の上でも、多くの手がかりが与えられた。

第VI層上面で捉えられた遺構のうち、当時最も重要な意義をもっていたのは、高床住居とみられるSB 3であろう。同遺構は、位置的にみた場合、SB 1・2およびSK 6・7・12と併存していた可能性をもつ。しかし、これはあくまで可能性であり、柱穴からの出土遺物が限られているため断定はできない。また、SB 1の柱穴はSD 1を切っており、掘立柱建物の存続時期が一時期下がる可能性も無視できない。Loc.16・25の類例からしても、後者の線で把握すべきかもしれない。また、南部で検出されたSK 23・31も、遺物出土状況から推して、前期Iに石器製作の工房として重要な機能を果たしていたものでないかと考えられる。さらに、SK 1・4・11・30は、田村遺跡群で微少ない弥生前期の土塙墓ではないかと推考される。そのなかでSK 11は、出土遺物等からみて、世帯共同体内の中心的存在としての土塙墓として把握することも許されるのではなかろうか。しかし、これらについても、今後の検討に待たねばならないことは当然である。

第36表 穴住居址計測表

地図番号	遺構番号	平面形	規模(m)	主軸方向	柱穴	面積(m <sup>2</sup> )	施設	備考
第136図	S T 1	不整円形	3.30	—	—	8.5		

第37表 堀立柱建物址計測表

地図番号	遺構番号	規	模	様方向	面積(m <sup>2</sup> )	備考
		(梁(間)×桁(間))	梁×桁(m)			
第137図	S B 1	1×3	1.68×5.40	1.80	N-38°-E	9.07
#	S B 2	1×3	1.72×5.52	1.80~1.96	N-41°-E	9.49
第138図	S B 3	4×6	4.56×8.64	0.90~2.20	N-57°-W	39.40
#	S B 4	2×2	3.72×4.20	1.20~3.80	N-68°-W	15.62
第139図	S B 5	2×1	3.68×4.36	1.80~4.40	N-66°-W	16.04
						中世か?

第38表 土塙計測表

地図番号	遺構番号	平面形	規 模(m)			長軸方向	断面形	備考
			長径	短径	課さ			
第140図	S K 1	不整方形	2.90	0.70	0.26	N-38°-E	逆台形	
#	S K 2	不整長方形	2.53	0.30	0.10	N-69°-W	#	
#	S K 3	不整長四形	0.90	0.75	0.10	N-20°-W	#	
#	S K 4	不整長方形	2.90	0.65	0.18	N-56°-W	#	
#	S K 5	不整橢円形	1.83	0.83	0.13	N-30°-W	#	
#	S K 6	不整長方形	3.80	1.25	0.20	N-35°-E	皿状	
第141図	S K 7	長方形	9.44	1.68	0.40	N-62°-W	逆台形	
第142図	S K 8	不整形	4.65	1.80	0.26	N-20°-E	#	
#	S K 9	方形	1.70	(0.93)	0.08	N-65°-W	#	
#	S K 10	不整形	(4.20)	(0.85)	0.38	—	#	
第143図	S K 11	長方形	5.40	1.00	0.32	N-70°-E	#	
#	S K 12	不整長四形	4.32	2.10	0.25	N-42°-E	#	
第144図	S K 13	円形	0.75	—	0.13	—	#	
#	S K 14	不整円形	1.23	0.98	0.04	N-51°-W	#	
#	S K 15	円形	1.10	—	0.10	—	皿状	

特許番号	遺構番号	平面形	規 模(m)			長軸方向	断面形	備考
			長 座	短 径	深 さ			
第 144 図	S K 16	不整形	3.00	0.86	0.10	N-77°-W	逆台形	
#	S K 17	円 形	0.93	—	0.10	—	#	
#	S K 18	不整長方形	1.00	0.60	0.16	N-65°-W	#	
#	S K 19	不整形	1.10	0.60	0.15	N-25°-W	#	
#	S K 20	不整長方形	1.16	0.60	0.10	N-57°-E	#	
#	S K 21	不整形	2.40	0.16	0.10	N-46°-W	皿 状	
第 145 図	S K 22	#	7.60	0.75	0.30	N-63°-W	逆台形	
#	S K 23	#	4.05	1.90	0.23	N-20°-E	#	
#	S K 24	#	5.05	1.05	0.08	N-40°-E	#	
#	S K 25	#	2.80	0.45	0.20	—	#	
第 146 図	S K 26	#	3.90	1.05	0.20	N-57°-W	#	
#	S K 27	円 形	1.10	—	0.20	—	#	
#	S K 28	不整方形	2.75	1.35	0.28	N-58°-W	皿 状	
#	S K 29	不整長円形	3.70	1.23	0.15	N-30°-W	逆台形	
第 147 図	S K 30	長方形	2.05	0.50	0.23	N-55°-W	#	
#	S K 31	不整形	2.90	1.30	0.23	N-50°-W	皿 状	

第39表 包含層出土土器觀察表

標本番号	層位	器種	法量 (cm)	口径 高さ 底径	形態・文様	手法	備考
1	第Ⅲ層	土器質土器 皿	14.6 ( 2.9 ) — —	体部は内湾気味に立ち上がる。口縁部の壁厚が体部よりも薄くなっている。	口縁部内外面横ナナ調整。		
2	#	土器質土器 杯	14.6 3.9 — 8.0	口縁部は少し外反し、端部は丸くおさめる。	糸切り底。		
3	#	盃	( 2.9 ) — 9.2	しっかりとした平底である。	体部と底部の接合部に指圧痕有り。		
4	#	甕	18.6 ( 5.5 ) — —	口縁部は滑らかに外反。口唇部は内傾する面をなす。	口縁部外面及び口唇部に横方向のナナ調整。		
5	#	#	27.6 ( 15.0 ) — —	端部をつまみ出し、しっかりした肩部を配す。口唇部は凹み、上端は尖る。	口唇部に横方向の強いナナ調整。 肩部下に压痕。		
6	#	#	( 3.9 ) — 7.6	わずかに上げ底状の底部。断面凸形を呈す。	体部と底部の接合部に指圧痕有り。		
7	#	#	( 5.8 ) — 10.1	わずかに上げ底状の底部。	#		
8	#	#	( 3.2 ) — 7.4	上げ底状の底部で、部分的に外方に張り出す。	輪郭を作ってから粘土を充填したもの。		
9	基盤層	壺	11.3 ( 5.0 ) —	口縫間に弱い段部。	口縫部外面に弧曲の帯についたと考えられる指圧痕有り。		
10	#	#	15.4 ( 2.9 ) — —	口縁部は滑らかに外反し、口唇部は外傾する面をなす。口縫間に段部有り。その上に1条のヘラ彫沈線。	内外面ヘラ磨き。		
11	#	#	20.6 ( 4.0 ) — —	口縫間にしっかりした段部を有し、口縁部は丸く外反し、端部は部分的に肥厚。			
12	#	#	12.8 ( 4.5 ) — —	口縫間にしっかりした段部を有し、口縁部は滑らかに外反。端部は滑らかな面をなす。	内外面全面ヘラ磨き。		
13	#	#	27.0 ( 5.1 ) — —	腹部と底部の間に段部を有するやや大振りの壺。口縫部上面を強く外方に折り曲げている。	外面は全面にヘラ磨きが施されていたものと考えられる。		
14	#	#	16.4 ( 4.6 ) — —	腹部と底部の間にしっかりした段部を有す。口縁部は強く外反し、端部は尖り気味である。			
15	#	#	29.3 ( 7.4 ) — —	口縫間にしっかりした段部。	口縫部外側に板状工具による横方向のナナ調整。腹部以下縱方向のヘラ磨き。口縫部内面横方向のヘラ磨き。		

辨認番号	層位	器種	法量 (cm)	口頭 器高 測定 底辺	形態・文様	手法	備考
16	第2層	壺	19.6 (4.9) —	口頭間にしっかりした段部を有す。 口縁部は適らかに外反し、端部は丸くおさめる。	段部以下ハケ調整の下地の上にヘラ磨き。		
17	#	#	32.5 (4.8) —	頭部に断面三角形のしっかりした突起を有す。口縁部は強く外反し、端部は丸く外傾する面をなす。	突審及びその上下を横方向に強くナする。内外面横方向のヘラ磨き。		
18	#	#	20.4 (6.9) —	口頭間にしっかりした段部(粘土帯後合の面に生じた段部)。	内外全面横方向のヘラ磨き。		
19	#	#	44.1 (30.5) —	口頭間に弱い段部(結合によるものと考えられる)。口縁部は外傾する面をなす。	口縁部内外面横方向のヘラ磨き。 頭部以下底辺方向のヘラ磨き。		
20	#	#	16.4 24.3 20.4 7.4	口縁部は強く外反し、端部は丸くおさめる。前部半位に最大径を有す。	頭部内面に指頭圧痕が僅かにみられる。	下頭部の一部に黒斑あり。	
21	#	#	14.2 (9.5) —	球形に近い体幹に、外反する口頭部を有する唇頭部である。頭部に直径3mmの穿孔有り。口唇部は丸くおさめる。	内外全面に横方向のヘラ磨き。 成形後に研削している。	頭部に大きい黒斑有り。	
22	#	#	— (2.7) — 4.5	底部に2条のヘラ指捺跡を施す。 上げ底気味。			
23	#	#	— (4.0) — 10.0	わずかに上げ底状の底部。	体部と底部の接合部に指頭圧痕有り。		
24	#	#	— (4.5) — 7.1	しっかりした平底である。	円板貼付か。外底ヘラ磨き。		
25	#	#	— (3.2) — 7.1	やや上げ底状の底部。	円板貼付の形跡なし。		
26	#	#	— (3.6) — 8.2	上げ底状の底部。	外底ヘラ磨き。		
27	#	#	— (4.3) — 7.7	わずかに上げ底状の底部。	#		
28	#	#	— (4.5) — 9.6	やや上げ底状の底部。	体部と底部の接合部に指頭圧痕有り。		
29	#	#	— (4.7) — 7.6	*	外底ヘラ磨き。		
30	#	#	— (4.6) — 10.4	上げ底状の底部。	#		

辨認番号	層位	器種	口径 (cm) 器管 直径 底径	形態・文様	手法	備考
31	第IV層	壺	(5.6) — 9.0	しっかりとした平底。	外面へラ磨き。	頭部下位から 底部にかけて 底疣。
32	#	#	(5.8) — 8.0	やや上行底状の底部。	外表面方向のハケ調整、その上 をヘラ磨き。底部外輪を作り、そ の後輪上を充填したもの。	
33	#	#	(4.6) — 8.5	しっかりとした平底。	円錐動作ではない。外面へラ磨き (単位不明)。底部と体部の接合部 に底疣压痕有り。	
34	#	壺	(9.6) — 7.7	#	頭部内面下端横方向へのラ磨き。 その上方は鏡方向へのヘラ磨き。	外面は火を受 けた変色して おり、調理は 不明。
35	#	#	(14.0) — 9.5	#	外面へラ磨き。	
36	#	#	23.0 (10.0) —	内表面に立ち上がる。尖帯A。 口部は丸くおさめる。	山根部内外面横方向のナメ調整(内 面は下地に横方向のナメ調整)。体 部内面ナメ調整。体部外輪ハケ調 整。	外面は擗けて いる。
37	#	#	23.8 (9.3) —	口輪端部から下傾するような形で袋 帶を貼付し、その上に刻目を配す。	口輪端部横方向の強いナメ調整。那 目の下方は鏡方向のナメ調整。体 部内面鏡方向のハケ調整。	
38	#	#	25.4 (9.0) —	やや内側気味に立ち上がり、口輪 部に断続的三角形のしっかりした貼 付突起を有し、刻目を配す。	尖帯下及び口輪部内外面横方 向のナメ調整。体部外輪ハケ調整。	
39	#	#	27.6 (7.3) —	口輪端部直下にしっかりした突 起を有し、ハケ状突体で刻目を配す。	突起粘付部、口輪部を鏡方向に強 くナメる。突起下の圧痕は弱い。	外面は擗けて いる。
40	#	#	33.6 (11.6) —	やや内側気味に立ち上がり、頭部 に至る。頭頂よりやや下に貼付突 起を有し、ハケ状原体による刻目 を配す。	突起の上下、口輪部内外面を横方 向に強くナメる。	
41	#	#	16.2 (5.2) —	口輪端部に接して突起を貼付し、 刻目を配す。	突起下に圧痕有り。	
42	#	#	15.0 (7.0) —	口輪端部に突起を有す。これによ つて端部が外方に捻挫されたよう になり、外傾する面をなす。	飛行下に弱い底疣。口輪部内部に 底疣压痕。それより下には横方向 のハケ調整。外周鏡方向のハケ調 整。	突起は貼付か それとも引き 出しているの か不明。
43	#	#	19.8 (6.7) —	九く仕上げられた口輪端部の直下 にしっかりした突起を有し、ハケ 状突体で刻目を配す。	飛行下に圧痕有り。突起上面及び 口輪部内部を横方向に強くナメる。 体部外輪ハケ調整。	
44	#	#	25.3 (8.9) —	口輪端部を突厥状に外方ににつみ 出し、刻目を配す。	飛行の上下を飛行方向に強(ナメる)。 外翼の上上がりの弱いナメ調整。 内翼上部は横方向の軽いハケ調整。 下位は板状工具によるナメ痕を認 める。	
45	#	#	25.0 (15.5) —	口輪部を外方ににつみ出し、ハケ 状突体による刻目を配す。	口輪部内外面横方向の強いナメ調 整。体部は調整不明。	

辨認番号	層位	器種	法量 (cm)	口経 器高 底径 底径	形態・文様	手法	備考
46	第IV層	裏	30.8 (9.8) — —	口縫部は直線的に外方に立ち上がり、口縫端部に黏付突起有り。	口縫部内面及び突起上下は横方向に強くナメる。体部外側は行く手よりのハケ調整。体部内面はナメ調整で、推頸圧痕が残る。		
47	#	#	17.6 (19.7) — —	口縫部はやや内凹気味に立ち上がり、底部を斜め下に突き状に折り曲げてある。	体部外側は底方向のハケ調整が施され、上部はハケをナメ消している。内面は幅広の板状工具による横方向のナメ調整。	体部外側に黒斑を有す。	
48	#	#	— (3.0) — 4.1	やや上げ底状を呈す。			
49	#	#	— (3.9) — 5.8	断面舌形状を呈する底部。	底部接合部外側に指標圧痕有り。	内底部に黒斑を有す。	
50	#	#	— (5.0) — 8.4	上げ底状の底部。	外側ハケ調整。		
51	#	#	— (3.9) — 6.0	断面舌形状を呈する底部。			
52	#	#	— (4.0) — 6.6	やや上げ底氣味の底部。	外側ハケ調整。	S丁1上層包含層より出土。	
53	#	#	— (4.0) — 7.4	やや上げ底状を呈す。	#		
54	#	表	— (3.3) — 8.2	わずかに上げ底状を呈す。	円板貼付底ではない。		
55	#	体	— (6.4) — 6.6	しっかりととした平底。	内面ナメ調整。外側ハケ調整。		
56	#	裏	— (5.6) — 6.3	断面舌形状を呈する底部。	#	外面に黒斑を有す。	
57	#	#	— (4.7) — 7.0	底部は外方にしゃくれている。	円板貼付底ではない。		
58	#	#	— (6.1) — 9.4	しっかりととした平底。	内面ナメ調整。	体部から底部にかけて外面が傷付いている。	
59	#	#	— (7.4) — 8.4	わずかに上げ底状を呈す。	内面ナメ調整。外側ハケ調整。		
60	#	#	— (4.9) — 8.2	#	内面ナメ調整。外側ハケ調整。円板貼付底ではない。	外底に木葉の压痕有り。脚部下位に黒斑を有す。	

辨認番号	層 位	器 様	法量 (cm)	口径 部高 胸径 底径	形態・文様	手 法	備 考
61	第IV層	盞		(7.1) — 8.3	厚めの底部。	体部内面ナナフ調整。体部外面ハケ調整。	
62	#	#		(9.8) — 7.9	#	外面ハケ調整。円板貼付底ではない。	腹部の一部が焼けている。
63	#	#		(7.1) — 6.8	やや上げ底気味の底部。	外面ハケ調整。	腹部下端と底部の一部に黒斑有り。
64	#	#		(7.1) — 9.6	しっかりとした平底。	#	S.T.1上層包含層より出土。
65	#	#		(12.5) — 8.6	やや上げ底気味の底部。	外面縦方向のハケ調整。内面右下りのハケ調整。円板貼付底ではない。	
66	#	#		(7.5) — 8.3	かなり高い上げ底状の底部。	外面本理の非常に粗い原体によるハケ調査。	
67	#	#		(7.0) — 9.4	上げ底状の底部。	円板貼付底ではない。	
68	#	#		(11.4) — 8.6	断面舌形狀の底部。内湾気味に立ち上がる。	外面縦方向のハケ調整。内面ハケ及びナナフ調整。	底部外面がドーナツ状に焼けている。
69	#	#		(12.1) — 8.0	上げ底気味の底部。内湾気味に立ち上がる。	器表の荒れがひどく、外縁の剥落不明。内面はナナフ調整。底部と脚部の接合部に指痕圧痕有り。	腹部下端に黒斑有り。
70	#	#		(5.3) — 8.6	底部に穿孔。	木理の粗い原体によるハケ調査。発成後に穿孔。	何度も使用した後に穿孔したものか。
71	#	#		(13.1) — 8.0	底部は若干外方にしゃくれる。	器表が荒れていて調査は困難でないが、縦方向のハケ調査有り。	腹部は火を受けて変色している。
72	#	高杯		(4.4) — 6.0	杯底部と脚部上端、杯脚と脚部の接合部に2条の直筋。各突起に刻目を配す。	調査観察不能。	
73	#	鉢		12.0 6.7 6.0	底盤から直線的に外方へ立ち上がる。口縁部は丸くおさめる。	内面へラ磨き。	外面は火を受けて変色している。
74	#	#		20.6 (5.9) — —	口縫部は内湾気味に立ち上がる。口巻部は丸くおさめる。	外周全面にヘラ磨きが施されていたと考えられる。	口縫部と口縫内に焼け付着している。
75	#	盞		(3.3) — 元井指標5.9	裏の蓋の頭部か。		

検査番号	層位	器種	法量 (cm)	口径 部高 底径	形態・文様	手 法	備考
76	第Ⅳ層	結婚車	直徑 4.1 厚さ 0.7 重量(g)12.5		蝶形土器を転用。両面から穿っているが貫通せず。		
77	第V層	壺	10.7 (5.1) — —		口縁部はやや外反し、端部は丸くおさめる。		
78	#	#	14.6 (6.5) — —		口縁間にしっかりした段部を有す。	口縁部横方向、底部外周縦方向のヘラ磨き。	外周外造りの跡有り(焼成後)。
79	#	#	22.9 (10.5) — —		口縁間にへらを強く押しあてて、段部を作り出している(部分的に此形状をなす)。口縁部はさらに外反し、端部は丸くおさめる。	口縁部内面横方向のヘラ磨き。外周全表面ヘラ磨き(単位不明)。	S.T.I.上層包含層より出土。
80	#	#	16.6 (7.3) — —		しっかりした段部を有す(複数による段部)。口部は丸くおさめる。	口縁部内面横方向のヘラ磨き。外周外周縦方向のヘラ磨き。底部内面に指壓痕が残る。	口縁部外側に黒斑有り。
81	#	#	27.9 (9.1) — —		口縁間に明顯な段を有す。		
82	#	#	14.6 (11.1) — —		口縁部に弱い段を有す。底部上端に1条、中位に3条、下位に1条の沈線を認める。	口縁部内外横方向のヘラ磨き。底部外周縦方向のヘラ磨きの後にヘラ磨き。	
83	#	#	16.5 (18.8) — 8.0		腹部下半に最大径をもち、口縁部はわずかに内傾し立ち上がる。口縁部は小さく外反し、端部は円滑なす。	側面が強く拘絆は不明瞭であるが、全周にヘラ磨きが施されていたものと考えられる。	全面焼けている。S.T.I.上層包含層より出土。
84	#	#	— (7.9) — 6.5		側縫部間に沈線。その下に2条一封の縦方向の沈線。底部は断面台形状を呈す。	ヘラ状工具で施されている。	
85	#	#	— (8.3) 10.8 5.0		腹部中央に3条の下弦の重複文(ヘラ縫)を施し、その上に3条の縦方向のヘラ縫(1条目の沈線には、それに直交するように刻目を施す)。	外縁ヘラ磨き。	底部から下脚部にかけて、黒斑有り。
86	#	#	— (12.1) — 7.5		やや上げ底氣味の底部。	体部及び底部外縁ヘラ磨き。	
87	#	#	— (5.9) — 9.4		"	内外面ともに器表の荒れが激しく、調査観察不能。	
88	#	#	— (3.9) — 8.1		上げ底氣味の底部。	外縁ヘラ磨き。	
89	#	#	— (3.2) — 8.4		上げ底状の底部。		
90	#	#	— (5.7) — 7.0		やや小さな平底。	内外面ともに器表の荒れがひどく調査観察不能。	

検査番号	層 位	器 様	出量 (cm)	口唇 最高 最低 底径	形 态・文 様	手 法	備 考
91	第V層	糞	—	( 5.3 ) — 8.0	やや上げ底気味の底部。	外面横方向のヘラ磨き。	
92	#	#	—	( 3.0 ) — 8.4	#	体部及び底部外側へラ磨き。	
93	#	#	—	( 3.2 ) — 6.0	#	円板貼付底か。縦口線を観察できる。	底部から下側部にかけて黒斑を有す。
94	#	#	—	( 5.0 ) — 10.4	上げ底状の厚い底部。	円板貼付底ではない。外面横方向のヘラ磨き。内面ナダ調整。	
95	#	#	—	( 3.8 ) — 9.0	やや上げ底気味の底部。	内外混ともへラ磨き(外面の磨きは目が細かい)。	
96	#	#	—	( 3.6 ) — 8.3	#	底部外側へラ磨き。網膜下端横方向のナダ調整。	
97	#	#	—	( 6.8 ) — 6.2	#	内面へラ磨き。外面不明。	
98	#	#	—	( 5.6 ) — 10.2	上げ底状の底部。	円板貼付底ではない。外面板方向のハケの下端の上をへラ磨き。内面は剥離の為、不明。	
99	#	#	—	( 6.3 ) — 8.7	#		
100	#	#	—	( 4.7 ) — 8.4	しっかりとした平面。		
101	#	#	—	( 5.6 ) — 11.2	やや上げ底気味の底部。	外面ハケ調整。内面ナダ調整。	
102	#	#	—	( 6.5 ) — 9.8	#	円板貼付底。内外混ともへラ磨き。	
103	#	糞	—	10.3 ( 5.2 ) —	やや内側気味に立ち上がり、上端部で直立する。口唇部を横方向に伸張するように水平に突出する刻目突起を有す。	尖端下に隠し压痕が並ぶ。外面ハケ調整をかすかに認める。	
104	#	#	—	24.0 ( 4.7 ) —	尖端は口唇部より下垂するように行き、断面は三角形を呈す。	口縫部内外横方向のナダ調整。	
105	#	#	—	28.4 ( 6.7 ) —	縦やかに外反する口縫部。割目尖端(割目は細かい)。	口縫部の尖端は貼付か、つまり出しかば不明。尖端下に压痕がかかるに認められる。	

種因番号	層位	特徴	口縫 器構成 底径 (cm)	形態・文様	手法	備考
106	第V層	裏	30.0 (17.5) — —	口縫端部を外方に強くつまみ出し 刺目を配す。	刺目はハケ状原体による。口縫端 部横方向の強いナデ調整。	頭部に大きな 黒斑有り。
107	#	#	34.0 (12.6) 15.6 — —	頭部上位に最大径を有し、口縫部 に刺目密集を配し、突起下及び 内面に疣状。	疣状上下及び口縫部内面、横方向 のナデ調整。外唇木道の細いハケ 調整(頭部側面部で方向が変わる)。	頭部外面中位 に黒斑有り。
108	#	#	15.9 (12.0) — —	頭部が大きく張り出し、口縫部は 折り曲げ、漏斗に左上がりのしつ かりした刺目を配す。	疣状下横方向のナデ調整。内縫接 合の強が認められる。	下副眼が抜け ている。
109	#	#	14.8 (6.2) — —	口縫端部を外方に捻りさせて突 起状を生す。その上に刺目を有 す。	外表面とも調整不明。但し、口縫 部はナデ調整。	
110	#	#	20.2 (7.4) — —	山峰端部に微する形で断面三角形の 突起を貼付し、しっかりした刺目 を配す。	刺目はハケ状原体による。口縫部 及び突起下ナデ調整。頭部外面横 方向のハケ調整。	
111	#	#	19.3 (8.7) — —	口縫端部に接して、細い突起を貼 付し、刺目を配す。	口縫部を強く横方向にナデ。外 側右下がりのハケ調整。	
112	#	#	29.0 (7.3) — —	口縫部下端をつまみ出し、刺目上 端もつまみ上げ、細い刺目を配す。 底部に段を有す。	口縫部横方向の強いナデ調整。外表面 付近は横方向のハケ調整。他の 横方向のハケ調整。	
113	#	#	21.9 (4.6) — —	口縫端部を上下に拡張させ、下端 に刺目を配す。	口縫部及び突起直下に横方向の強 いナデ調整。	
114	#	#	38.2 (9.2) — —	口縫端部にハケ状原体による刺目 を配す。	口縫部及び突起直下に横方向のナデ 調整。頭部外面右下がりのハケ調 整。	頭部外面は僅 けている。
115	#	#	(2.3) — 6.9 — —	しゃくれた底部。		
116	#	#	(3.6) — 7.9 — —	しっかりとした平底。	粘土層接合部で破損。露口縫を観 察できる良好な資料。	
117	#	#	(4.2) — 7.9 — —	#	器表が荒れており、調整不明。	下副眼から底 部外面にかけ て、保ててい る。
118	#	#	(5.5) — 9.6 — —	#	外面ハケ調整。	#
119	#	#	(7.6) — 8.1 — —	上げ底気球の底盤。	#	
120	#	#	(5.5) — 9.2 — —	しっかりとした平底。	#	

神田番号	層位	器種	法量 (cm)	口徑 器高 胸径 底径	形態・文様	手法	備考
121	第V層	甕	—	(6.1) 8.0	しっかりとした平底。	外面ハケ調整。	内底より上が焼けている。
122	#	#	—	(9.7) 8.6	上げ底気味の底部。	#	
123	#	#	—	(10.6) 8.0	やや厚手。	円板貼付底ではない。外面冠方向のハケ調整。	
124	#	#	—	(4.5) 7.8	しっかりとした平底。		
125	#	#	—	(7.4) 8.6	やや上げ底気味の底部。底部外面に平行圧痕有り。	外面冠方向のハケ調整。内底外部は胸部との接合部の際指印圧痕をナメしている。	胸部から底部外面にかけて焼けている。脚部は火を受けて変色。
126	#	#	—	(12.4) 8.5	しっかりとした平底。	外面本理の細いハケ調整。内底部と体部との接合部に指印圧痕が多い。	脚部下端に黒斑を有す。
127	#	#	—	(5.0) 9.0	#	全面へラ磨きがあつたと考えられるが、表面の荒れがひどい。	
128	#	#	—	(7.4) 8.4	底部が異常に厚い。		
129	#	#	—	(8.1) 9.1	やや上げ底気味の底部。	円板貼付底ではない。外面ハケ調整。	
130	#	#	—	(3.6) 7.0	#	外面ハケ調整。掘口縁を観察できる。	脚部下端の一部に黒斑有り。
131	#	#	—	(3.6) 8.0	上げ底状の底部。		底部内面焼け、下脚部火を受けて変色。
132	#	#	—	(4.5) 7.9	やや上げ底気味の底部。	外面ハケ調整。	
133	#	#	—	(5.9) 8.0	平底であり、ややしゃくれをもつ。	#	
134	#	#	—	(5.4) 8.2	比較的厚い底部。底部外面に木製の圧痕が残る。		下脚部火を受けて変色。
135	#	#	—	(6.1) 7.7	やや上げ底気味の底部。	外面ハケ調整。	

掉回番号	着位	器種	法量(cm)	口径 器高 径底比	形態・文様	手法	備考
136	第V層	裏	(5.3) — 9.2	底部が非常に厚い腹。上げ底状を呈す。			
137	n	高杯	(4.2) 6.4	杯部底と脚部上邊、杯部と脚部の接合部に斜面三角形の貼付充満、その上に刻目。	外面部及び杯部内底へラ磨き。		
138	n	鉢	35.6 (10.0) —	上脚部で「く」の字軸に屈曲し舟及び外足して口縁部に至る。口唇部は外傾する変をなす。	口唇脚側方向の強いナチュラル彫刻。内面部へラ磨きがあつたものと考えられるが、内面部しか観察できない。		
139	n	n	21.7 (5.8) —	内面気泡に立ち上がる口縁部。端部は水平。	内外面へラ磨きと考えられるが、器表の磨耗が激しい。		
140	n	n	22.5 (7.5) —	直線的に外方に立ち上がる。	調整觀察不能。		
141	n	n	52.2 (26.0) —	口周間に段部を有する大型の鉢形土器。半球状の全体。	粘土接合によって段を生ずる。外周部方向のハケ痕堅強。椎方向のヘラ磨き。内面にもヘラ磨きが認められる。	S.T.I.上層包含層より出土。	
142	n	ニチユア	(2.06) — 2.1	上げ底気味の厚い底部。	内底に3つの爪の圧痕を残す。	蓋か。	
143	n	n	(6.9) — 5.9	しっかりした上げ底の底部を有する鉢。底部は直線的に外方に延びる。	脚部と脚部の接合部に開口縫が確認できる。ハケ跡堅強後に粘土を含めた内面アーティグレーブ。外周ハケ調整の後ナチュラル彫刻。	下端部に黒斑を有す。	
144	n	筋縫車	直径(5.5) 厚さ 1.5 重量(g)37.0	約半分が欠損する。	最初から筋縫車を查めて作ったもので、軸用ではない。		

第40表 包含層出土石器觀察表

地図番号	層位	種類	計測値 (cm, g) 最大長 最大幅 最大厚 度量	材質	特徴	備考
145	第1層	石片	14.4 5.8 4.1 705.0	縞斑片岩	最大幅は中位にあり、基部より刃部端が 狭い。両主翼刃部の一部にのみ研磨痕が見 られる。他は全面に調整の痕跡が残ってい る。	
146	第2層	#	(5.4) 2.2 0.8 16.0	頁岩	磨製石斧の刃部が間に破壊したものか。兩 平気孔円柱の自然縫を研磨して整形したも の。椎谷部より、刃部は両刃であったものと 考えられる。	
147	#	#	6.1 3.1 1.0 43.0	陶岩	全面優らかに研磨されている。兩半片刃石 斧である。最大厚は基盤部にあり、刃部に 近づくにつれて、厚みを減する。	
148	#	石繖	(4.4) 0.7 0.4 1.8	粘板岩	磨製石繖の基部を欠損したものの、研磨によ って前面大斜面の規則的な尖端部を作り出しえ ている。全面に擦耗が残る。	

辨団番号	層位	器種	計測値 (cm.s)	最大長 基底幅 最大厚 重量	材質	特徴	備考
149	無層	石器	6.1 0.9 0.3 2.6		粘板岩	有茎打製石器。基端部を2か所切っている。開は対称ではない。全面に擦痕が顕著である。	
150	第1層	石器	14.3 5.2 7.5 800.0		砂岩	2面の使用跡が確認できる。使用面は中央部が若干滑跡状に盛り上がっている。	
152	第2層	未製品	11.2 1.7 0.7 19.4		粘板岩	磨製石器の未製品か。全面に斜方向の擦痕が著しい。	
151	#	石器	(17.4) 17.0 4.3 1290.0		砂岩	扁平な大型の石器で、主として2面を使用しているが、側辺部にも使用痕が残る。	
153	#	未製品	14.3 5.8 2.0 170.0		9384ト	石核の類の未製品である可能性がある。	
154	#	石器	2.4 1.5 0.3 0.8		#	四面式の打製石器である。両面からの押圧制離によって整形されている。	
155	#	#	3.7 1.7 0.5 0.4		#	有茎の打製石器で、一方の基部を欠損している。側辺部は向面から押圧制離によって整形されている。側辺部下方にも挟りが見られる。	

第41表 造構出土土器観察表

辨団番号	造構番号	器種	法量 (cm)	口径 器高 側径 底径	形態・文様	手法	備考
156	S T 1	壺	15.0 (3.8) —	口縁部は強く外方に屈曲し、端部は丸くおさめる。	内外面へテ巻き。		
157	#	#	14.8 (4.9) —	口縁部は大きく外反。口唇部は外側する面をなす。頸部に2条の貼付跡目突起を有す。	口縁部上端をつまみ上げるようにして、横方向に強くナゲる。		
158	#	壺	20.4 (5.3) —	縦口縁で制離欠損。底部に粘土帶接着の際に生じた段を有す。口縁部外側に突帯を貼付、下端に封緘。	口縁部内外面横方向のナゲ調整、突帯はナゲ調整後貼付。底部に縦方向のハケ調整。		
159	#	#	25.2 (5.5) —	口縁部に突帯Bを配し、左方向から割目。	外面へケ調査の痕有り。口縁部内面は端部をつまみ出すようにして横方向にナゲる。		
160	#	#	25.2 (8.3) —	口縁部に突帯B。割目はハケ抜き全体によって左方向から施す。突帯下に压痕が明瞭。	口縁部内外面及び突帯上下を横方向に強くナゲる。外面磨耗(ハケ調整の痕有り)。		
161	#	壺	(2.3) 6.4	しっかりとした平底。	底部外面に指頭圧痕が強く残る。		

標番号	連携番号	器種	法基 (cm)	口径 高さ 副径 底径	形態・文様	手法	備考
162	S T 1	壺	— ( 5.1 ) — 8.2	断面台形状のしっかりした底部。			外底に黒斑有り、下脚部火を受けて変色。
163	#	壺	— ( 4.4 ) — 8.2	しっかりとした底部。	病害観察不能。		下脚部火を受けて変色。
164	#	#	— ( 7.7 ) — 4.2	底薄に穿孔痕有り(焼成後)、黄斑せず。	外周縁及び右下がりのハケ調整。		
165	#	杯	31.2 ( 6.1 ) — —	口縁部外反。端部は丸味を持つ。	外周横方向のヘラ磨き。		
166	#	#	17.0 ( 7.5 ) — —	牛頭形の体部を有し、口縁部は如意形に外反。	外周面へラ磨きを施すが、磨耗が激しく単位はつかめない。		
167	S B 2	甕	— ( 3.9 ) — 8.7	わずかに上げ底気味の底部。	外周ハケ調整。		
168	S K 1	#	— ( 8.4 ) — 8.0	断面台形を呈するしっかりした底部。	木理の組い原体によるハケ調整後、木理の擦かれた原体によるハケ調整を施している。		外底に根柢有り。
169	#	杯	— ( 7.7 ) — 7.2	断面台形状の厚い底部。	内面横方向のヘラ磨き。外面は器表が荒れている(ヘラ磨きか)。		
170	S K 2	壺	— ( 8.1 ) — 7.0	しっかりとした平底。	器面調整観察不能。		
171	S K 4	#	28.6 ( 9.0 ) — —	大型器。頂部に段を有す。口唇部は丸くおさめる。	内面横方向のヘラ磨きが顕著。		大型縫の可能性有り。
172	#	#	15.2 ( 5.8 ) — —	口縁部は僅かに外反し、端部は外傾した面をなす。口領間に段を有す。	口縁部内外面ヘラ磨き。		
173	#	#	20.7 ( 5.2 ) — —	口縁部は僅く外方に屈曲し、端部は丸くおさめる。底部に段階有り。	外面全面横方向のヘラ磨き。		
174	#	甕	32.8 ( 10.8 ) — —	内底気味に立ち上がり、口縁部は僅かに外反し、端部は丸くおさめる。底部に段階有り。	口縁部内外面横方向のヘラ磨き。外側段以下、右下がりのヘラ磨き。		大型縫の可能性有り。
175	#	#	— ( 8.6 ) — 8.4	しっかりとした平底。	外面ハケ調整。		
176	#	#	— ( 11.4 ) — 7.4	#	外面縦方向のハケ調整後、斜方角のハケ調整。底部内面には指頭圧痕が残っているが、ナナ字消していく。外底ヘラ削り。		脚部外面は火を受けて変色し、また焼けている。

持因番号	造営番号	器種	法量 (cm)	口径 高さ 底径 底径	形態・文様	手法	備考
177	S K 6	壺	15.4 ( 7.2 ) —	口縁間にしっかりした段を有す(粘土等後合によって生じたもの)。口縁部は外傾する面をなす。	内外面とともに器表の荒れがひどく、調整困難であるが、ヘラ磨きがあったようである。		
178	#	#	14.5 ( 3.2 ) —	口縁間にしっかりした段を有す。	内面横方向のヘラ磨き。外面横方向のハケ調整の後、横方向のヘラ磨き。		
179	#	#	9.0 ( 6.0 ) —	頭部はわずかに外反気味に立ち上がり、口縁部は近く外方に屈曲。縫合は丸くおさめらか。やや肥厚気味。	頭部内面下位に指頭圧痕。全面ヘラ磨きがあったものか。	砂粒を多く含む。	
180	#	#	37.6 ( 6.5 ) —	口縁間に段部を有し、口縁部は大きく外反。縫合は外傾する面をなす。	内面ハケ調整。外面観察不能。	口縫部内面、丹塗り。	
181	#	甕	18.6 ( 9.9 ) —	口縫端部に断面三角形の突帯、右方向から対目。	突帯上下及び内面に横方向のナデ調整。	外面は塗けている。	
182	#	#	24.6 ( 4.6 ) —	口縫部底面に刻目突帯(刻目は右方向からヘラ状工具による)。	突帯をつまむようにして、上下を横方向にナデする。口縫部内面横方向、頭部外表面横方向のハケ調整。		
183	#	#	18.0 ( 8.7 ) —	口縫部を外反させ、口縫部底面に断面三角形の貼付突帯。その上に右方向からの刻目を配す。	突帯をつまむようにして上下を横方向にナデする。外表面横方向のナデを右回りに施す。口縫部横方向のハケ調整。	外面は塗けている。	
184	#	#	38.4 ( 4.4 ) —	口縫部は遠らかに外反。口縫部は外傾する面をなし、下縫に細い刻目。口縫下に断面三角形の突帯を貼付し、右上がりの刻目を配す。	突帯貼付後横方向のナデ調整。外面横方向のヘラ調整(突帯の後縫ハケ)。内面上位は横方向、下位は右下がりのハケ調整。	2条突帯、黒土B且承。	
185	#	壺	( 3.1 ) — 7.2	断面台形状の底部。やや上げ底状。			
186	#	甕	( 5.1 ) — 10.0	しっかりとした平底。	内面右下がりのハケ調整。底部と頭部の後合部に指頭圧痕有り。外側ハケ調整。	底部外側に指頭圧痕有り。	
187	#	#	( 7.7 ) — 8.2	"			
188	#	壺	( 6.2 ) — 9.2	わずかに上げ底気味の底部。	内底部一定方向の指ナデを施す。		
189	#	甕	( 7.0 ) — 7.0	しっかりとした平底であり、施成後中央部に穿孔する。	底部内面側部との接合部に指頭圧痕、後に横方向に強くナデする。	外側は火を受けて変色。側部下端に墨斑有り。	
190	#	#	( 8.4 ) — 8.2	上げ底状の底部。		外側は横方向のハケ調整がわずかに観察できる。	
191	#	#	( 6.0 ) — 8.4	"			

押抜番号	造構番号	器種	法量 (cm)	口縫 筋高 底径	形態・文様	手 法	備 考
192	S K 6	鉢	32.3 ( 4.7 ) — —	内浦気味に立ち上がり、口縫部は極く外反。端部は丸くおさめる。	口縫部内外面横方向の強いナデ調整。底部内外面へラ磨き。底部外面に右下がりのハケ調整點。	内外面丹振り。	
193	#	盃	12.8 ( 4.2 ) — —	口縫間にしっかりとした段部を有す。端部は丸くおさめるが、やや肥厚。	内外面へラ磨き。		
194	S K 7	#	26.6 ( 7.1 ) — —	口縫部は滑らかに外反。端部がわずかに肥厚(粘土答合部と考えられる)。	口縫部内面横方向のへラ磨き。外面横方向のへラ磨き。		
195	#	#	23.0 ( 12.1 ) — —	端部は外反気味に立ち上がり。口縫部は外方に屈曲。端部はやや外側する面をなす。底部上端が肥厚(粘土答合部)。	口縫部内外面横方向のへラ磨き。底部外曲線方向のへラ磨き。		
196	#	#	33.3 ( 3.4 ) — —	口縫間にしっかりとした段部。口縫部外側に指壓圧痕有り。端部は外側する面をなす。	段は粘土帶の貼付によって生じる。滑直下に擬口縫を認める。		
197	#	#	37.8 ( 3.7 ) — —	粘土答合部に断面三角形の突唇。突唇に刻目。口縫部は丸くおさめる。	突唇をつまむようにして横に強くナズ。内外面へラ磨き。	擬口縫を観察できる。	
198	#	#	38.4 ( 5.5 ) — —	口縫部は直線的に外反。端部は丸くおさめる。口縫部の肥厚部が造り、その上下にへラ磨き段部が各1箇所。肥厚部には刻目。	内面横方向のへラ磨き。外面横方向の強いナデ調整。		
199	#	#	— ( 3.2 ) — 9.0	断面台形状を呈する底部。		底部外面に粗糲有り。	
200	#	#	— ( 3.5 ) — 9.5	"	底部外面及び脚部外面へラ磨き。		
201	#	#	— ( 4.3 ) — 8.4	しっかりとした平底。	外面へラ磨き。	下脚部内外面及び底部外面に黒斑有り。	
202	#	底	19.8 ( 3.9 ) — —	口縫部は滑らかに外反。端部は外側する面をなし、下端に刻目。口縫下に刻目突唇。刻目は右上がり。	刻目はへラ状工具による。調整不明。	2条突唇の土器。	
203	#	#	22.4 ( 4.3 ) — —	口縫直下に断面三角形の貼付突唇。右方向からの刻目。	突唇をつまむようにして、上下を横方向にナズ。口縫部内面横方向のナデ調整。	上脚部に黒斑有り。	
204	#	#	— ( 4.7 ) — 7.1	断面台形状の底部。			
205	#	#	— ( 3.0 ) — 8.0	しっかりとした平底。			
206	#	#	— ( 6.3 ) — 8.0	上げ底気味の底部。	内外面とも器表の荒れがひどく、調整観察不能。		

辨認番号	遺構番号	器種	法量 (cm)	口唇部高径 底径	形態・文様	手 法	備 考
207	S K 7	縦	— — ( 7.6 ) — 8.0		やや上げ底気味の底部。		底部外面の一部が焼けている。
208	#	#	— — ( 3.8 ) — 7.3		"		底部の一部と下唇部に黒斑有り。
209	#	#	— — ( 6.9 ) — 9.0		上げ底状の底部。	内面ナデ調整。外面ハケ調整。	
210	#	#	— — ( 4.8 ) — 8.8		しっかりとした平底。		底部外面の一部が焼けている。
211	#	縦	18.0 13.7 18.7 7.0		脣部中位で大きく内凹し、頭部に至る。口縁部は直線的に外反し、端部は丸くおさめる。	外面上脣部ハケ調整、下脣部横方向へのハラ巻き。口縫部内外面横方向への強いナデ調整。	下脣部と上脣部に黒斑有り。
212	S K 8	縦	— — ( 1.9 ) — 5.4		平底の底部。	調整観察不能。	唇口縫を残す。黒斑有り。
213	#	#	— — ( 1.8 ) — 7.6		"	"	
214	#	#	— — ( 3.1 ) — 8.0		やや上げ底気味の底部。		脣口縫を観察できる。
215	#	#	— — ( 4.4 ) — 6.0		しっかりとした平底。	調整観察不能。	
216	#	#	— — ( 2.3 ) — 7.1		"	底部内面ナデ調整。	
217	#	#	— — ( 4.2 ) — 8.4		断面台形状の底部。上げ底状を呈す。		
218	#	縦	20.2 ( 22.5 ) 21.0		底部から内側気味に立ち上がり。口縫部は弧状外反。端部はやや尖る。口縫下部前面三角形の突部。左上がりの刺目。	口縫部を縫につまみ出すようにして、内側面を強く縫にナデする。外側面も同様。接合部は内縫と外縫とが併存。	炎帯下に横方向のナデなし。撥入品。
219	S K 11	#	22.0 22.2 — 7.2		口縫部に割目炎帶。	炎帶上下横方向のナデ調整。外面縫方向のハケ調整。	
220	#	#	— — ( 3.6 ) — 7.3		やや上げ底気味の底部。		
221	#	#	— — ( 2.8 ) — 8.2		しっかりとした平底。		

特因番号	遺物番号	器種	法量 (cm)	口径 器底 銅徑 底径	形態・文様	手 法	備考
222	S K11	高杯	—	(5.7) 6.8 —	杯部下端に新面三角形の割目突唇。杯部内底へラ磨き。		頂部に縦口縁を観察できる。
223	#	小型土器	5.2 3.4 4.5 3.8	—	手捏土器。		
224	S K12	壺	18.9 (4.5)	—	口部間にしっかりした段部を有す。口縁部は底部近くで更に外反し、口唇部は外端する面をなし、1条の比縫がある。	沈棒は棒状工具による。内外面横方向のヘラ磨き。	外側外縁地り(荒成後か)。
225	#	#	18.3 (3.9)	—	口部間にしっかりした段部(粘土帶貼付による)。口縁部は滑らかに外反し、縫部は丸くおさめる。	内外面横方向のヘラ磨き。	
226	#	#	14.9 (7.9)	—	口部間にしっかりした段部を有す。	口縫部内外面横方向のヘラ磨き。頭部外側面方向のハケ調整の後、横方向のヘラ磨き。	
227	#	#	16.9 (10.6)	—	口部間にヘラ縫沈縫1条。口縁部は滑らかに外反し、縫部は丸くおさめるが、部分的に下方に肥厚。	口縫部内外面全面横方向のヘラ磨き。頭部内面に指痕圧痕。	内外面各所に舟通り痕有り(荒成後か)。
228	#	#	29.5 (20.5)	—	口部間にしっかりした段部(粘土帶接合による)。頭部間に1段部有り。	口縫部内面及び口縫部外側面横方向のヘラ磨き。頭部外側面方向のヘラ磨き(縫口縫にハケ調整を施した後に接合したことが観察できる)。	頭部内外面に黒斑有り。
229	#	#	9.4 (6.3)	—	口縫部は外反せず、直立気味に斜わり、縫部は丸くおさめる。	口縫部内面に指痕圧痕。外面へラ磨きが残るが単位不明。	口縫部から頭部にかけて、大きな黒斑有り。
230	#	#	— (3.7) — 8.4	—	しっかりとした平底。	内面は剥離しており不明。外面へラ磨き。	
231	#	#	(3.9) — 12.6	—	#		
232	#	壺	19.6 (6.0)	—	口縫部は割目突唇状。割目は右方向から(口縫部は粘付によるもののかつまみ出しから不明)。	口縫部をつまんで上下を横方向に強くナデる。口縫部内面も横方向のナデ調整。縫部はねじ縫方向のハケ調整。	外面は焼けている。
233	#	#	17.2 (5.9)	—	口縫部に割目突唇B。突唇下に指痕圧痕が観察。	突唇をつまんで横方向に強くナデる。頭部外側ハケ調整(縫目が横に並ぶ)。内面ナデ調整。	
234	#	#	19.2 (8.1)	—	口縫部に貼付突唇B。棒状工具による割目。	突唇をつまんで横方向に強くナデ、その後に割目。頭部板方向のハケ調整(縫目は横に並ばない)。	
235	#	#	18.6 (13.8) 20.0	—	口縫部に突唇B(新面三角形でやや上向きに付く)。割目はヘラ状工具で強く施す。	口縫部内外面及び突唇上下、横方向の強いナデ調整。外面板方向のハケ調整。	内頬融合。
236	#	#	20.0 (12.7)	—	口縫部は水平に近い面をなし、縫部を外方につまみ出し。突唇部を呈す。縫部にハケ原体による右方向からの割目。	口縫部内外面及び口縫部横方向の強いナデ調整。内面口縫下に横方向のハケ調整1番、それ以下はナデ調整。外面板方向のハケ調整。	

押出番号	造形番号	器種	法量 (cm)	口径 静高 底径	形態・文様	手法	備考
237	S K12	調	20.0 (18.0) — —	口唇部は水平に近い面をなし、端部を外方につまみ出し、突起状を呈す。底部にハケ原体による右方向からの羽目。	口唇部内外面及び口唇部周方向の強いナデ調整。内面口唇下に横方向のハケ調整1巻、それ以下はナデ調整。外面瓶方向のハケ調整。	236と同一個体か。	
238	#	#	— (3.2) — 6.2	上げ底氣味の底部。		下唇部外回火を受けて変色。	
239	#	#	— (4.4) — 7.2	#	外面ハケ調整。	調部外面は焼けている。	
240	#	#	— (4.0) — 8.0	#	#		
241	#	#	— (5.2) — 8.4	上げ底氣味の底部であり、焼成後中央に穿孔する。		下唇部外面は火を受けて変色。	
242	#	#	— (3.9) — 8.8	上げ底氣味の底部。	外面ハケ調整。底部内面ナデ調整。		
243	#	#	— (3.9) — 7.5	しっかりとした平底。			
244	#	#	— (5.4) — 9.0	#	外面ハケ調整。		
245	#	#	— (5.1) — 8.4	#			
246	#	#	— (6.5) — 9.7	上げ底状の底部。	円板貼付底ではない。	下唇部及び底部外面に黒斑有り。	
247	#	#	— (8.2) — 9.4	やや上げ底氣味の底部。		外面全面火を受けて変色剝離。	
248	#	#	— (10.4) — 8.3	しっかりとした平底。		調部外面火を受けて変色剝離。	
249	S K16	#	— (3.8) — 8.4	#		底部外面火を受けて変色。	
250	#	#	— (4.3) — 7.2	しっかりとした平底であり、焼成後内外面より穿孔する。			
251	#	杯	— (3.1) — 6.6	強く外にふんばった脚状の底部。	外面向下がりのヘラ磨き。		

辨認番号	造構番号	器種	法量 (cm)	口徑 静高 調査 底性	形態・文様	手 法	備 考
252	S K16	鉢	19.3 ( 8.7) —	半球形狀の明部。口縁部は強く外反し、内面は内傾する面をなす。端部は丸くおさめる。	内面は指標压痕が顯著。内面右下がりのヘラ磨き。外面も全面にヘラ磨きがあつたと思われる。		
253	S K17	壺	15.8 (10.4) —	口縁部にしっかりした段部(結合の際生じるもの)。口縁部は直線的に立ち上がり、底部近くで強く外方に傾斜。頭側間にヘラ接沈跡。	口縫部内外面に指標压痕。底部裏盤は不明であるが、底部内面二枚方向のヘラ磨きを観察できる。		
254	#	甕	— ( 3.5) 8.0	やや上行底氣味の底部。			瓶口縁を観察できる。
255	S K20	#	— ( 4.0) 7.2	断面台形状の厚い底部。	外面に指標压痕多し。		
256	S K22	壺	13.2 (15.6) —	方形の断面。内傾する底部から口縁部は緩く外反。底部は丸くおさめる。口縫部及び底部間に段部有り。	口縫部外面十字磨痕。底部外面直いヘラ磨き。頭部外面及び底部内面は大いにラフ磨き。底部内面には板刷工具による擦痕有り。		底部外面上黒斑有り。
257	#	甕	21.4 ( 6.7) —	直線的に立ち上がり。口縁部は丸くおさめる。口縫下にハケ原体による沿目突起有。	突起下に压痕。口縫部内外面後方側の強いナメ磨痕。外型横方向のハケ調整。内面横方向のハケ調整。		
258	#	#	— ( 3.1) 7.0	断面台形状のしっかりした底部。			
259	#	筋強草	直径(3.4) 厚さ 0.8 重量30.0	軽用筋強草。	外面にハケ調整が観察できる。		
260	S K23	壺	— ( 5.7) 7.3	やや上行底氣味の底部。	外面右下がりのヘラ磨き。底部内面ナメ磨痕。底部との接合部に指標压痕。		底部内面及び下網部内面に黒斑有り。
261	#	甕	— ( 8.0) 7.0	中央部がわずかに上行底状である。	器面調整不明。		外面火を受け変色。
262	#	#	— ( 5.4) 7.4	しっかりとした平底。			底部外面上黒斑有り。
263	#	#	— ( 3.9) 9.8	厚くしっかりした底部。			底部外面上黒斑有り。
264	#	#	— ( 6.9) 8.8	しっかりとした平底であり、焼成後中央部に穿孔する。			外面火を受け変色。
265	#	#	— ( 3.7) 7.0	しっかりとした平底。			
266	S K24	鉢	21.2 ( 9.5) —	口縁部は小さく外反し、緩やかな瓶状を呈す。	瓶方向および斜めのハケ調整。		

検証番号	選択番号	器種	法量 (cm)	口径 器高 底径	形態・文様	手 法	備 考
267	S K26	杯	— — ( 6.0 ) — 6.0	外方にしっかりふんばった上げ底の底部。	摹擬調整不明。		高杯となる可能性有り。
268	S K28	甕	— — ( 2.2 ) — 8.2		— — — — —	— — — — —	
269	#	訪姫甕	表径 (3.5) 厚さ 0.9 重量 10.2	転用彷彿草。	両面から穿孔している。		
270	S K30	甕	— — ( 4.5 ) — 7.8	しっかりとした平底。			
271	S K31	甕	— — ( 5.4 ) — 9.0	しっかりとした平底から大きく開く。	内外面剥離のため、調整観察不能。		
272	#	甕	21.5 (15.7) 22.4	口縁端部は外傾する面をなし、端部に前目。口縁部内面は外反し、弱い後をなす。	口唇部及び口縁部内外面横方向のナデ調整。胴部外側ハケ調整。端部つまみ出しが、貼付突起等は不明。		外面焼けており、胴部中位には黒斑有り。
273	#	#	25.0 ( 5.1 ) —	口縁部はわずかに外反。口唇部は外傾する面をなし、外端部に前目を配す。	口縁部内外面 横方向の強いナデ調整、外端を強くつまみ出してナデ調整。外腹左下がりのハケ調整。		
274	#	#	— — ( 3.3 ) — 7.4	上げ底底味の底部。	内面板状工具によるナデ調整。外面ハケ調整。		下腹部から底部外側にかけて焼けている。
275	#	#	— (17.0) — 8.0	底部に穿孔有り。	施成後穿孔。外腹縦方向のハケ目。内面板状工具による横方向の撇底がわずかに見られる。		
276	S D 2	甕	— ( 8.7 ) — 8.2	やや上げ底底味の底部。	外向横方向のヘラ磨き。		下腹部から底部外側にかけて黒斑有り。
277	S D 4	#	12.6 ( 5.3 ) — —	口縁間に段部を有す。口縁部は滑らかに外反し、端部は丸くおさめる。	内外面横方向の強いナデ調整。		S D 4 - S.
278	#	#	16.0 ( 4.6 ) — —	口縁間にしっかりした段部有り。段部は尖端状を呈す。口縁部は強く外反。	段部は粘土等接合時に生じたもの。内外面横方向のヘラ磨き。		S D 4 - S.
279	#	#	19.4 ( 4.5 ) — —	口縁間にしっかりした段部有り。口縁部は外反し。口唇部は丸くおさめる。	段部は粘土等貼付と接合時との両方で生じる。口縁部外側横方向の強いナデ調整。内面は横方向のヘラ磨き。頭部内面右下がりのヘラ磨き。頭部内面及び口縁部外側に指頭压痕。		
280	#	#	14.8 ( 12.8 ) — —	口縁間に尖端状のしっかりした段部有り。口縁部は強く外反し、端部は丸くおさめる。	外腹横方向のヘラ磨き。口縁部の接合度明瞭。		S D 4 - S.
281	#	#	— ( 2.6 ) — 6.6	しっかりとした平底。	底部内面に指頭压痕。外面ヘラ磨き。		S D 4 - W.

被団番号	遺構番号	器種	法量 (cm)	口徑 鉢高 鉢底 底径	形態・文様	手 法	備考
282	S D 4	縦	— — — ( 5.5 ) — 7.0	— — — — — —	上部底気味の底部。	外面へラ磨き。円板貼付底か。	
283	#	#	— — — ( 4.0 ) — 7.3	— — — — — —	#	器表の荒れが激しいが、内外面へラ磨きがあつたものと想われる。	S D 4 - W.
284	#	#	— — — ( 5.1 ) — 9.0	— — — — — —	#	背面調整観察不能。	S D 4 - S.
285	#	#	— — — ( 4.8 ) — 10.4	— — — — — —	#	外面へラ磨き。下端に横方向のハケ調査。	
286	#	#	— — — ( 9.4 ) — 8.8	— — — — — —	#	円板貼付底ではない。	下端部に黒斑有り。 S D 4 - S.
287	#	縦	17.4 ( 3.9 ) —	— — —	内溝気味に立ち上がり、断面三角形の割目突帯B(ヘラ状工具による)。	突帯上下、口縁部内外横横方向のハケ調査。内面に指痕压痕多し。	
288	#	#	18.2 ( 3.7 ) —	— — —	内溝気味に立ち上がる口縁部は、突帯とともに外傾する面をなす。突谷に割目。	外面右下がり及び横方向のハケ調査がわずかに見られる。	外面が焼けている。
289	#	#	16.8 ( 4.0 ) —	— — —	口縁部から下垂するような割目突帯C。	口縁部内外横横方向の強いハケ調査。外面横方向のハケ調査。	S D 4 - S.
290	#	#	22.6 ( 6.9 ) —	— — —	口縁部に貼付割目突帯。ヘラ状工具による右上がりの割目。	突帯をつまむように上下を横方向に強くナデする。内面も口縁部を内側につまみ出すように横方向にナデする。	内外面調査不能(ナデかから) S D 4 - W.
291	#	#	18.6 ( 9.2 ) 18.0 —	— — — —	口縁部に割目突帯B。	突帯の上下及口縁部内外面を横方向に強くナデする。外面載面不規則。	外面焼けている。 S D 4 - S.
292	#	#	27.2 ( 7.7 ) —	— — —	口縁部に割目突帯B。割目はハケ状突体で左右向から。突帯下に指痕压痕が認める。	突帯をつまんで、上下を横方向に強くナデする。口縁部内外面も横方向の強いハケ調査。外面縦方向のハケ調査。	S D 4 - W.
293	#	#	18.4 ( 18.2 ) 20.0 —	— — — —	口縁部に割目突帯A。口縁部は丸くおさめる。	外面縦方向のハケ調査。口縁部内外面及び胴部内面中位に指痕压痕。	外面が焼けている。 S D 4 - S.
294	#	#	27.2 ( 11.7 ) 28.3 —	— — — —	内溝気味に立ち上がり、口縁部は丸くおさめる。口縁部に割目突帯B。突帯はハケ状突体による。	外縦方向のハケ調査。突帯下に压痕を認める。	外面焼けている。 S D 4 - S.
295	#	#	32.8 ( 8.6 ) 30.8 —	— — — —	腹部にしっかりした段を有し、口縁部は滑らかに外反。過剰に外傾する面をなし、下端に割目。	口部及び口縁部内外面、横方向の強いハケ調査。外縦方向のハケ調査。頸部内面に指痕压痕。	外面焼けている。 S D 4 - W.
296	#	#	— — ( 2.9 ) — 5.6	— — — — —	断面凸形状の底部。		

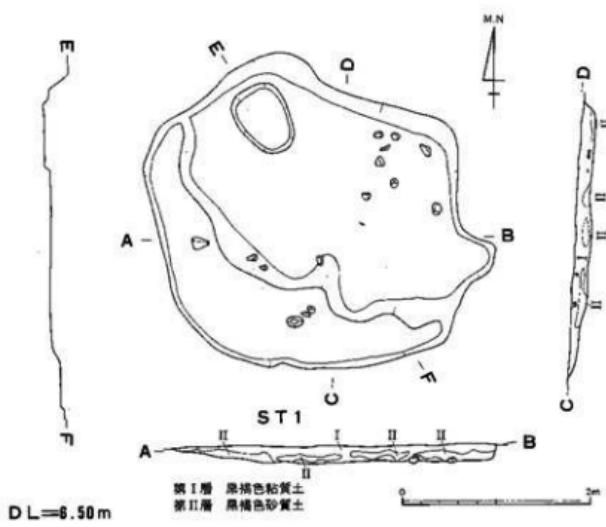
検査番号	送検番号	器種	法量 (cm)	口(舌 器底 網底 底深)	形態・文様	手 法	備 考
297	SD 4	鱈	— ( 3.7) — 7.5	上げ底気味の底部。	外側へラ磨き。		外側火を受け て黒色。
298	#	#	— ( 2.8) — 7.4	しっかりとした平底。			SD 4-W.
299	#	#	— ( 3.6) — 9.2	"			SD 4-S.
300	#	#	— ( 3.4) — 8.6	厚い底部。			SD 4-W.
301	#	#	— ( 7.3) — 6.8	断面台形状のしっかりした底部。	外側右下がりのハケ調整。		SD 4-S.
302	#	#	— ( 2.9) — 9.0	しっかりとした平底。			下網部から底 部外側にかけ て黒斑有り。
303	#	#	— ( 4.7) — 8.8	"	調整困難不能。		SD 4-S.
304	#	#	— ( 7.2) — 7.2	"	内面に左下がりのハケ調整がわざ かに見られる。外側の調整観察不 能。		SD 4-S.
305	#	#	— ( 4.4) — 7.0	"	内外面とも網底が粗しく、調整観 察不能。		
306	#	#	— ( 9.7) — 7.6	上げ底状の底部。	外側ハケ調整。		SD 4-S.
307	#	#	— ( 9.9) — 10.4	しっかりとした底部。	外側縦方向のハケ調整。		
308	#	鱈	36.0 ( 4.5) — — —	口縫端部を外方につまみ出して、 刻目を配し、突審法を呈している。	刻目の上下に横方向の強いナデ 調整、内面縦方向のハケ調整。 外 縦横方向のハケ調整がわざかに見 られる。		SD 4-W.
309	#	鱈	28.8 ( 7.2) — —	背部は端部においてやや外反気味。 端部は丸くおさめる。			SD 4-S.
310	#	鱈	16.2 13.1 — 7.0	やや内滑気味に立ち上がり、端部 は丸くおさめる。	外側全面右上がりのヘラ磨き、内 面左上がりのヘラ磨き。	上網部から下 網部にかけて 黒斑有り。 SD 4-W.	
311	#	#	6.4 ( 4.6) — —	やや底状を呈する口縫部。	内面縦方向に動かしたハケ状工具 の停止線が底状に残る。		

神認番号	遺構番号	器種	法量 (cm)	口徑 器高 柄径 底径	形態・文様	手法	備考
312	S D 4	小附土器	— — — 3.7	( 5.8 )	口縫部を強く内溝させる。 手握土器。		
313	P 1	壺	— — — —	12.2 ( 2.8 )	口縫部は外反し、端部は丸くおさめる。	外面横方向のナガ調整。内面横方向のハケ調整がわざかに観察できる。	
314	n	n	— — — 6.8	( 3.1 )	しっかりととした平底。	外面へラ崩き。	底部外面及び下側部に黒斑有り。
315	P 2	壺	— — — 8.0	( 4.7 )	"	外面木理の組いハケ調整を上から下へ右回りに施す。	調査内面に黒斑有り。
316	P 3	壺	— — — 7.8	( 3.3 )	上げ底状の底部。	内外面へラ崩き。	
317	n	壺	— — — 9.0	( 10.3 )	しっかりととした平底。		
318	P 4	壺	— — — 9.3	( 10.3 )	"	外面縦方向のハケ調整後、横及び右下がりのラ崩き。	下腹部外面に黒斑有り。
319	n	n	— — — 15.6	( 4.6 )	"	外面ハケ調整。縫口縫を観察できる。	

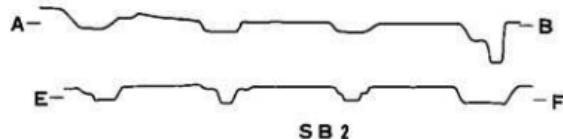
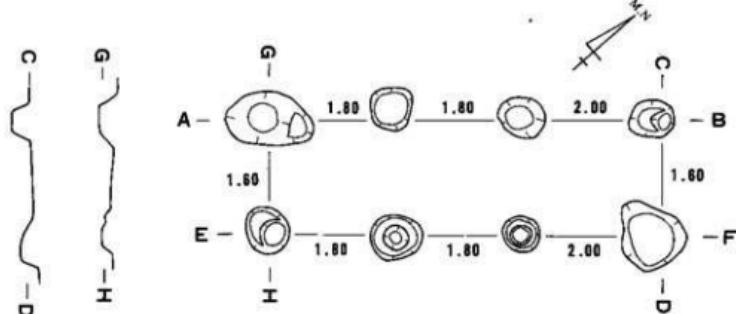
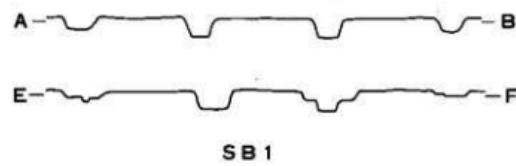
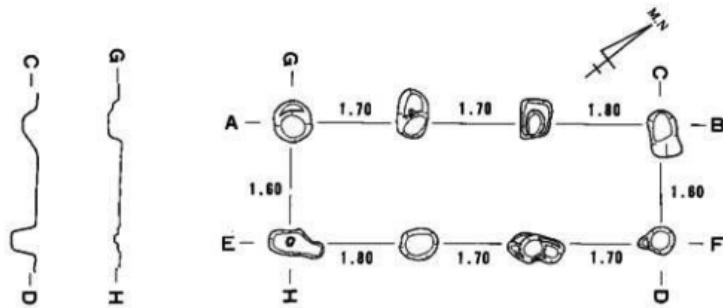
第42表 造構出土石器觀察表

標図番号	遺構番号	部 種	最大計測値 (cm. g.)	材 質	特 徹	備 考
320	S K 7	砾石	( 5.1 ) 3.3 1.5 42.5	砂 岩	4面を使用しており、使用面は凹状を呈す。	
321	S K12	未製品	7.6 1.3 0.7 10.0	頁 岩	磨製石器の未製品。部分的に研磨が見られ、一部に後も残している。	
322	#	#	5.8 0.9 0.3 4.0	#	磨製石器が既に削られたものか。破損面を研磨して、再利用している。	
323	S K26	石斧	11.5 5.0 ( 1.6 ) 135.0	泥 岩	磨製石斧の基部で、大半を欠損したものです。	
324	#	#	( 4.2 ) 6.6 ( 1.1 ) 35.0	綠色片岩	太型蛤刃石斧の刃部破片と考えられる。	

辨認番号	直標番号	器種	計測値 (cm, g)	最大長 幅 厚 重	材質	特徴	備考
325	S D 3	石包丁	( 7.8) 5.6 0.4 27.6	流紋岩質岩	手月形外彫刃石包丁である。半分以上を欠損しているが、1個の円孔を補助できることを窺うるものと考えられ、両側より穿孔している。		
326	S K31	未製品	9.2 1.5 0.7	頁岩	磨製石器の未製品か。片面には明顯な棱が見られるが、他面の棱は弱い。削磨面が各所に見られる。研磨されている部位には擦痕が残る。		
327	S D 4	#	6.7 2.8 0.8 11.5	粘板岩	荒削りの段階で磨耗したものか。		
328	#	#	4.5 1.5 0.6 7.0	頁岩	#		
329	S K23	石頭	3.7 2.0 0.5 2.5	サヌカイト	円弧式の打製石頭であり、基部の一端を欠く。両面押圧剥離によって整形されている。		
330	S K31	#	2.4 1.7 0.3 0.9	#	#		
331	S T 1	#	5.7 1.2 0.3 2.2	粘板岩	比較的長い形状の有茎磨製石頭である。表面中央部には明確な棱が確認できるが、裏面は先端部以外は鈍頭が著しい。研磨による擦痕が残る。		
332	S K 7	#	4.8 1.7 0.5 4.4	泥岩	有茎磨製石頭。先端部を一部欠損しているが、よく研磨されている。中央部に棱を有し、背面変形を呈す。長い茎面と斜先状の先端部を有し、鈍頭を残した石頭と考えられる。		
333	S K11	管玉	1.2 5.5 5.5 0.7	碧玉	丁寧に仕上げられた管玉であり、穿孔も精巧である。両端部のはば同位置が若干凹状に磨耗している。		
334	S K31	未製品	5.3 0.7 0.3 1.6	粘板岩	表裏両面に明瞭な棱が見られ、背面変形を呈す。全面よく研磨されており、斜方向の棱が著しい。鋭利な先端部を作り出しており、石頭の範囲に入るものかもしれない。		
335	#	#	6.3 1.3 0.6 9.0	頁岩	石頭の未製品か。研磨面はない。		
336	S D 4	#	2.9 1.7 0.3 2.5	#	剥片にリッヂを加えて、刃部を作り出すものと考えられる。		



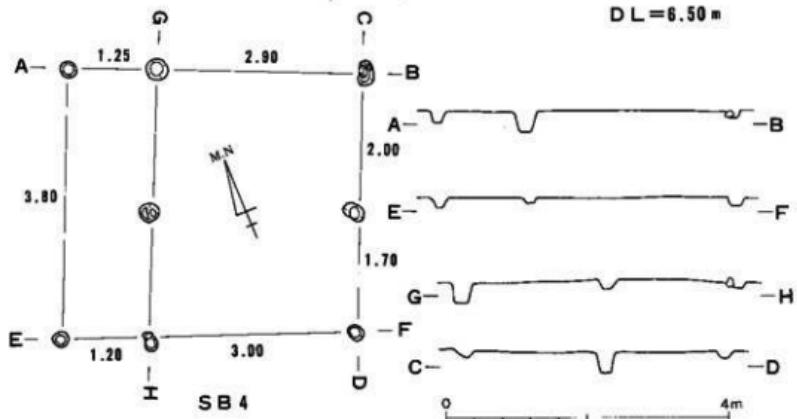
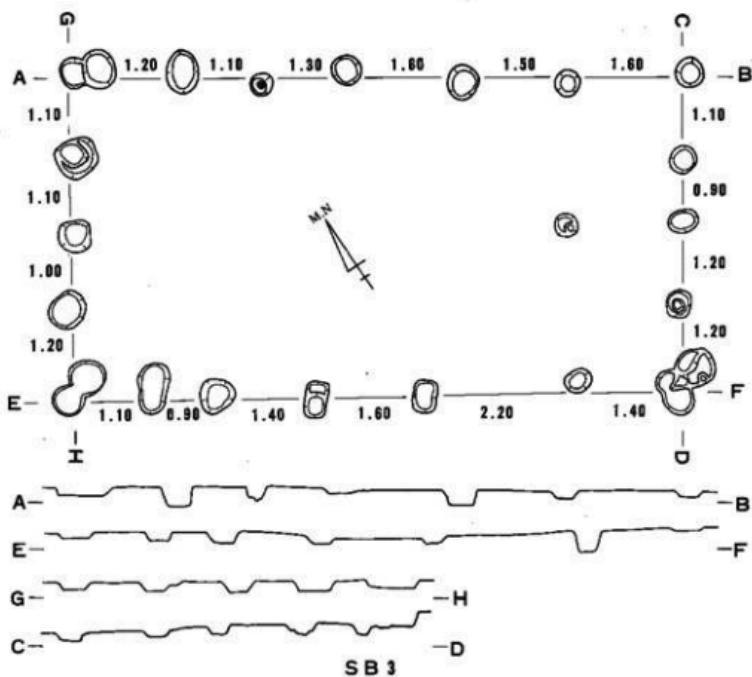
第136図 ST 1



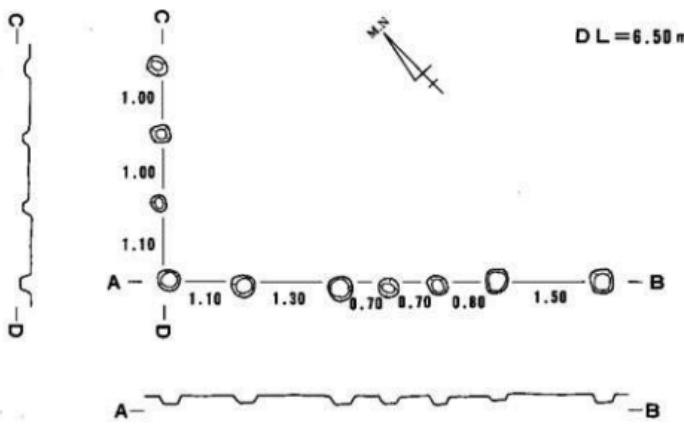
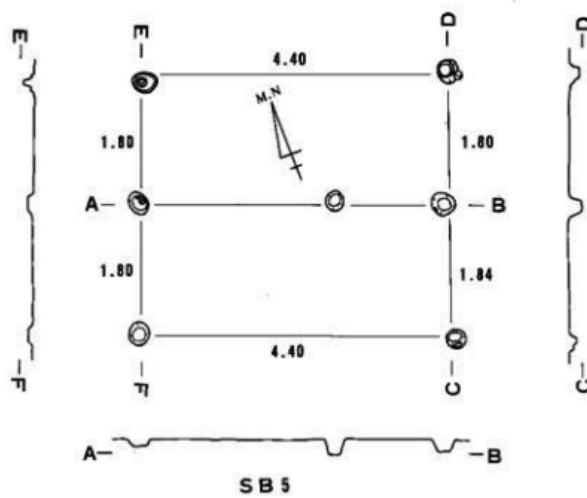
DL = 6.50 m



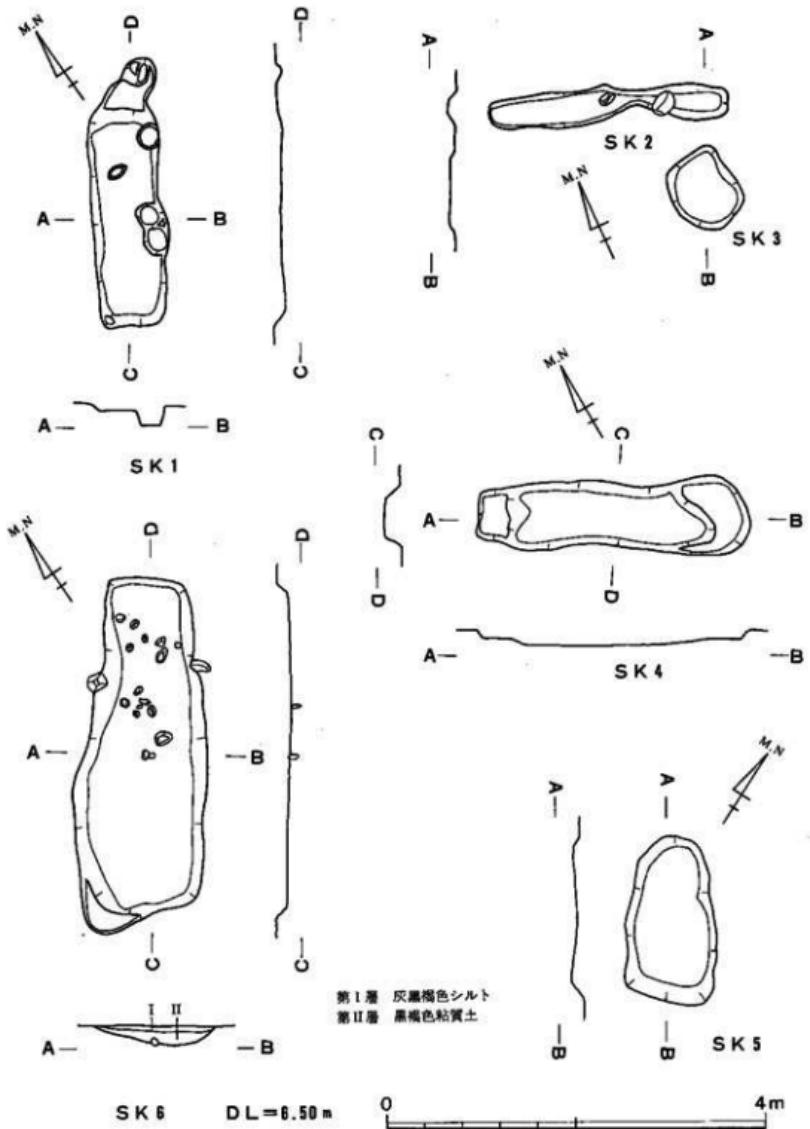
第137図 SB 1・2



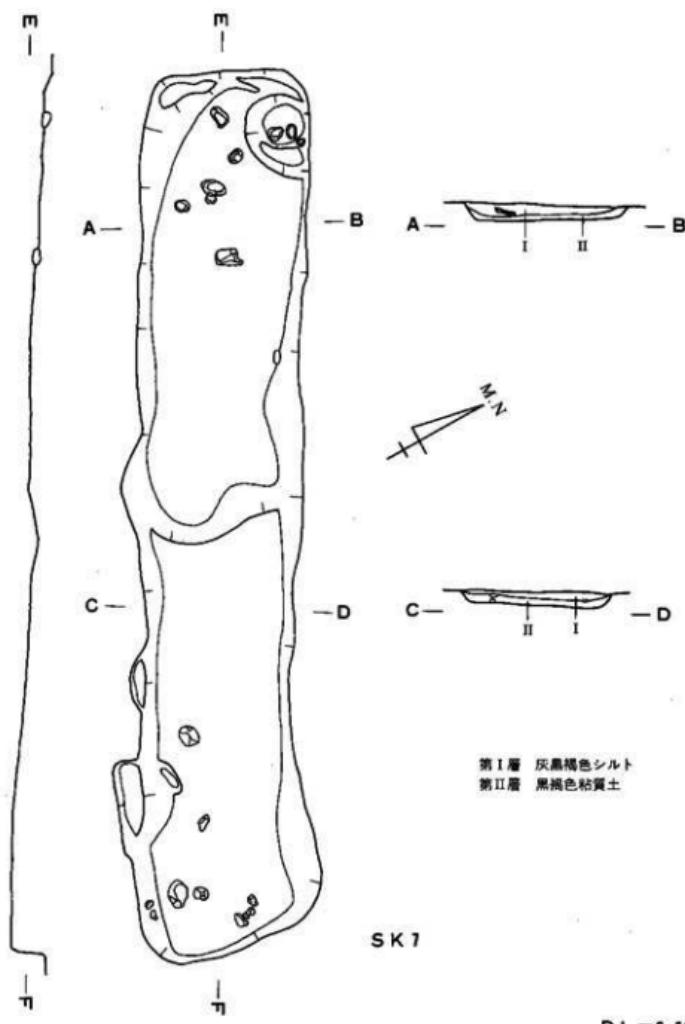
第138図 SB 3・4



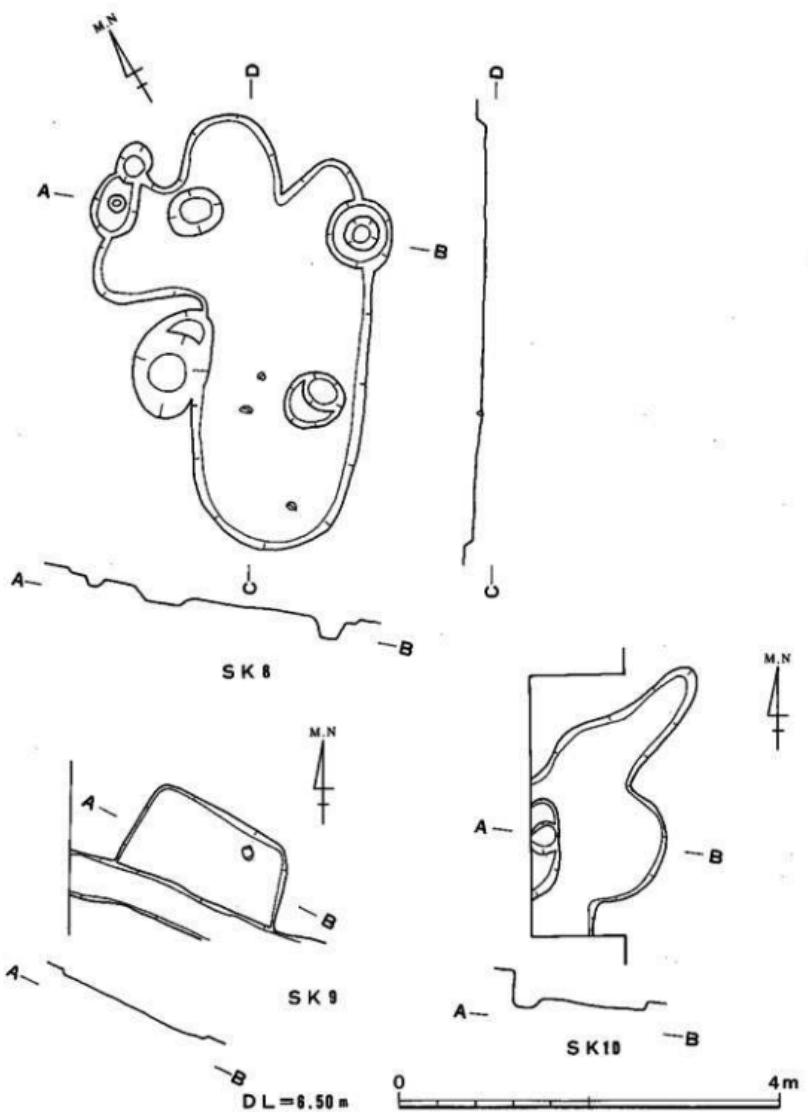
第139図 SB 5、SA 1



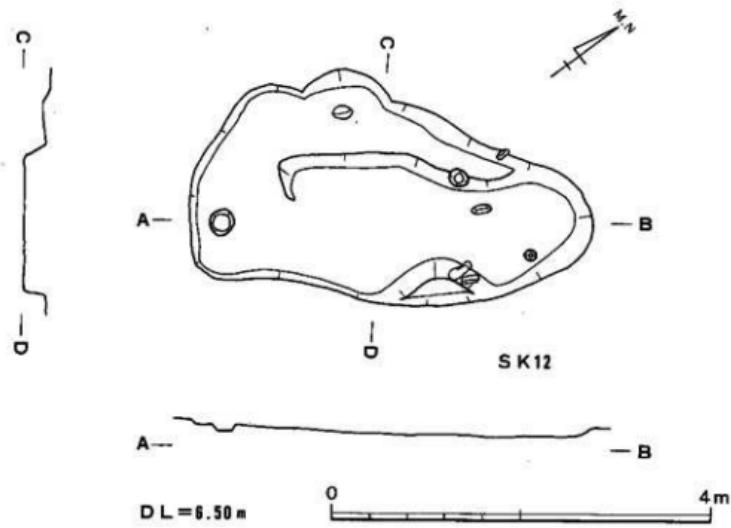
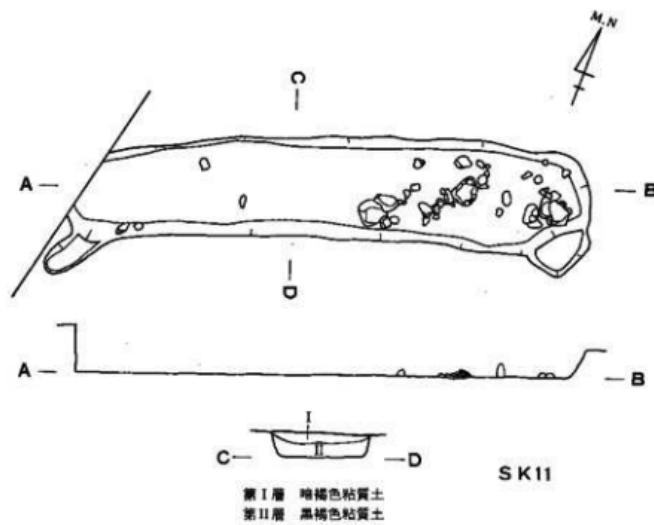
第140図 SK 1 ~ 6



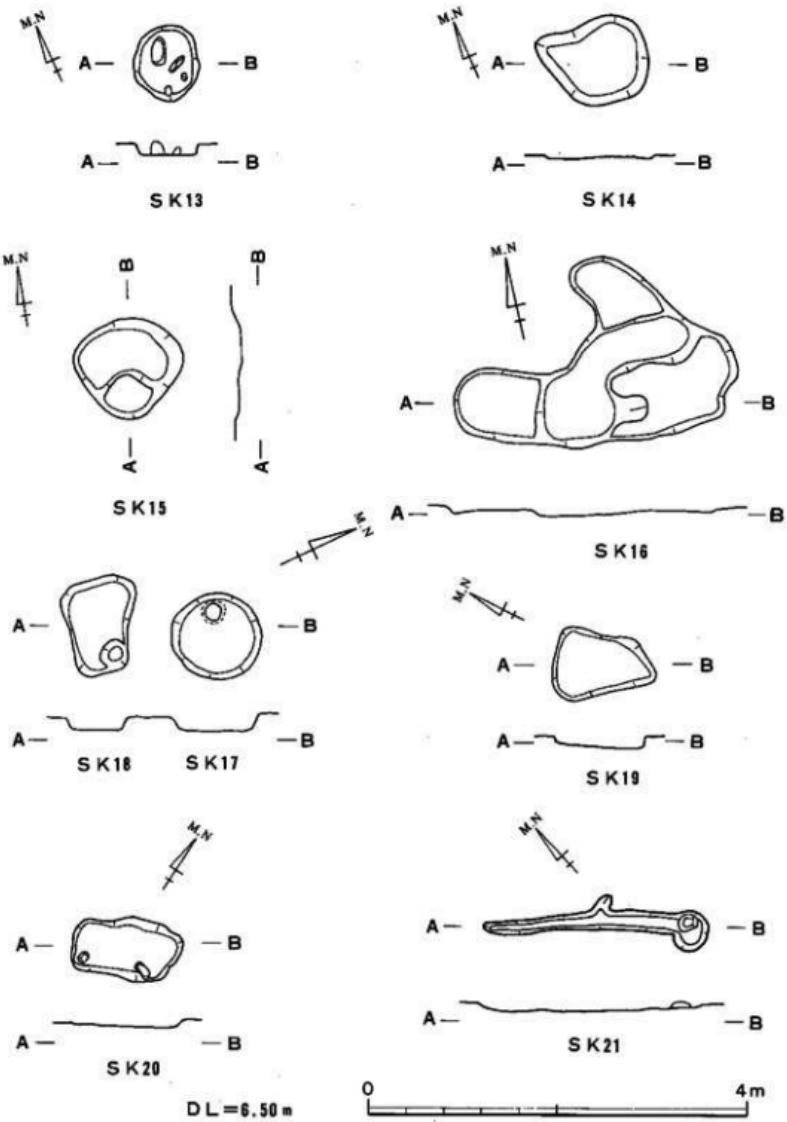
第141図 SK 7



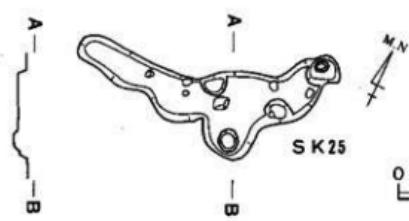
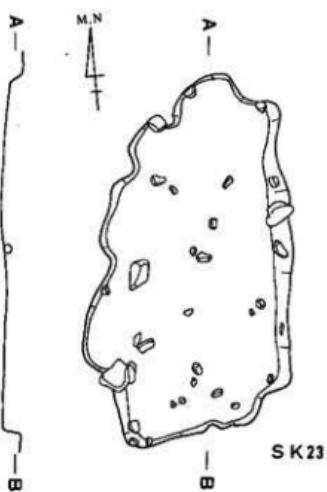
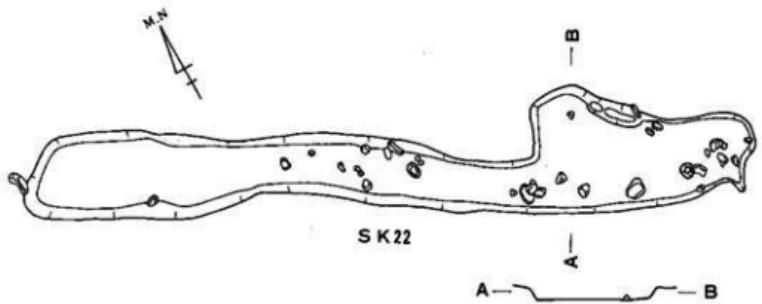
第142図 SK 8~10



第143図 SK11・12



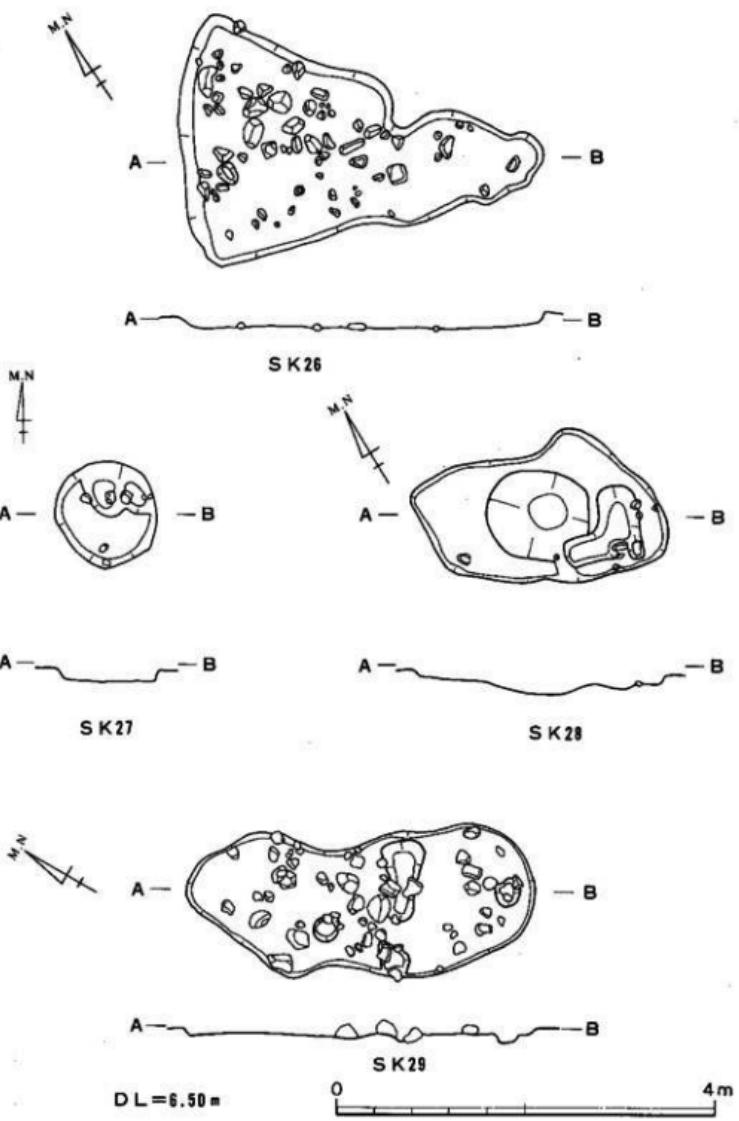
第144図 SK13~21



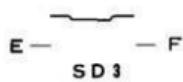
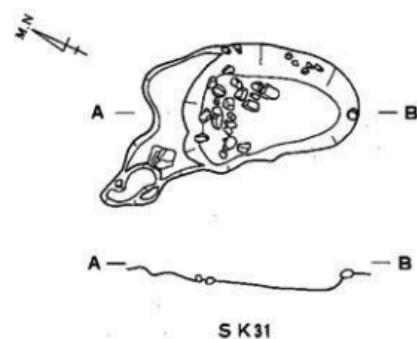
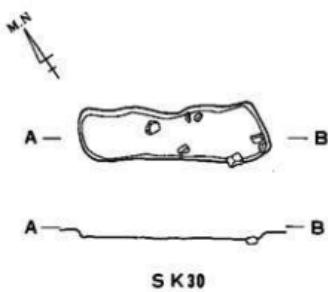
0 4m

DL = 6.50 m

第145図 SK 22~25



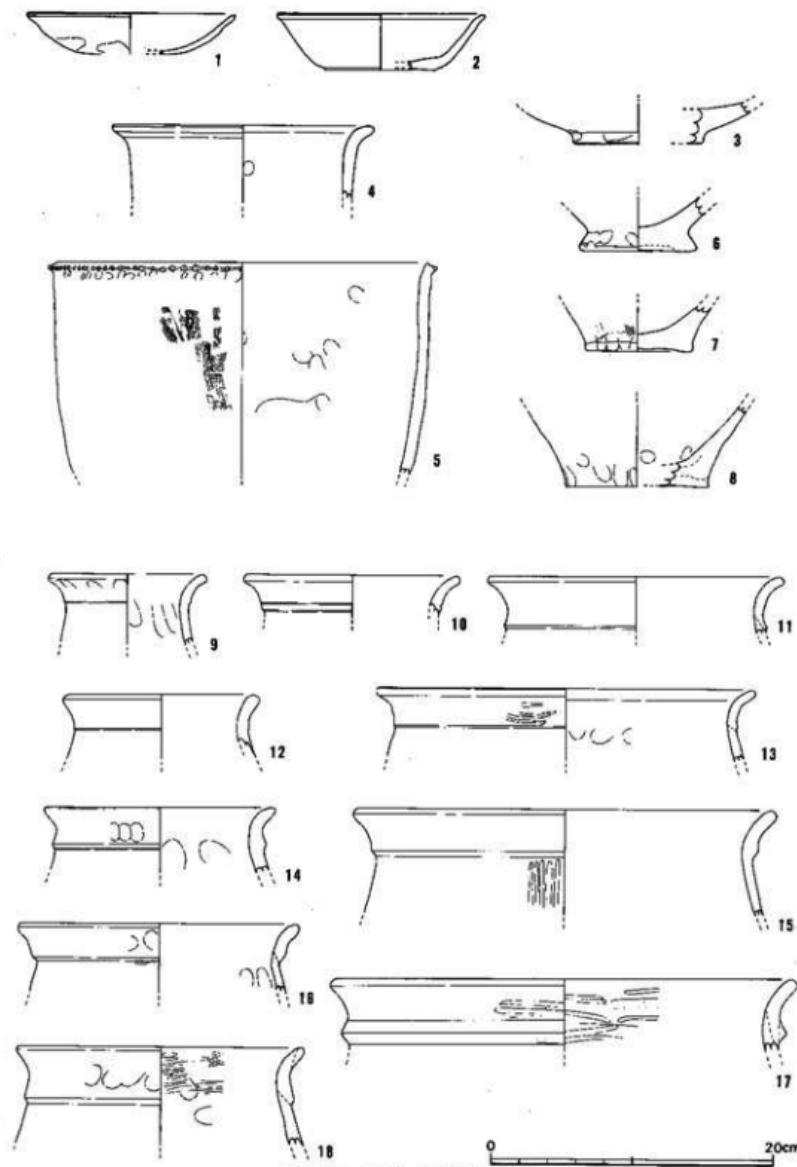
第148図 SK26~28



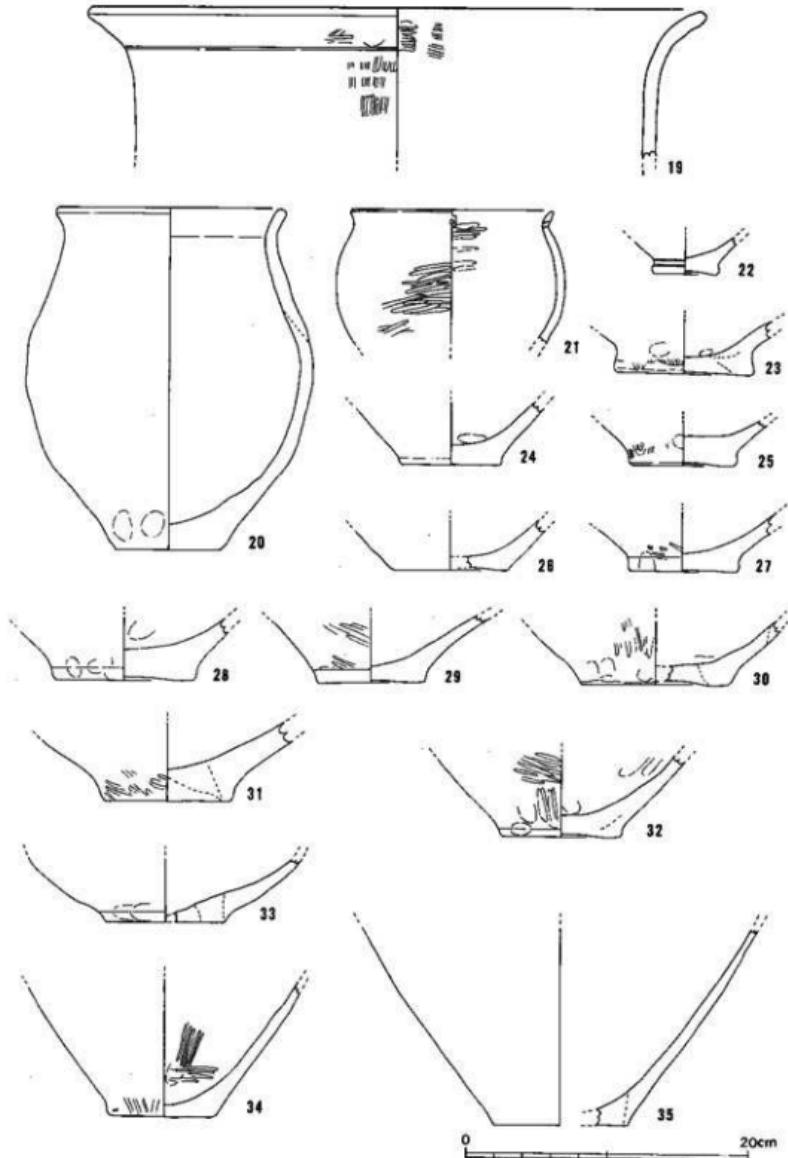
**D L = 6.50 m**



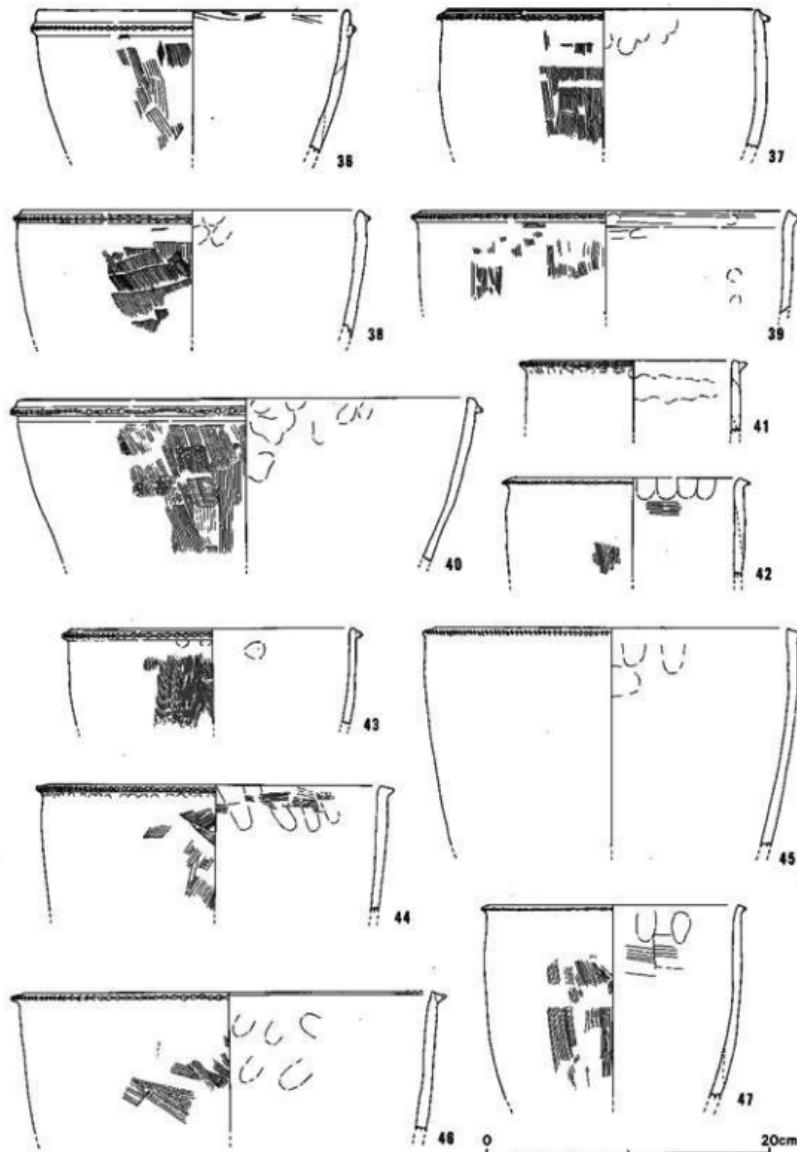
第147図 SK30・31、SD 1～5



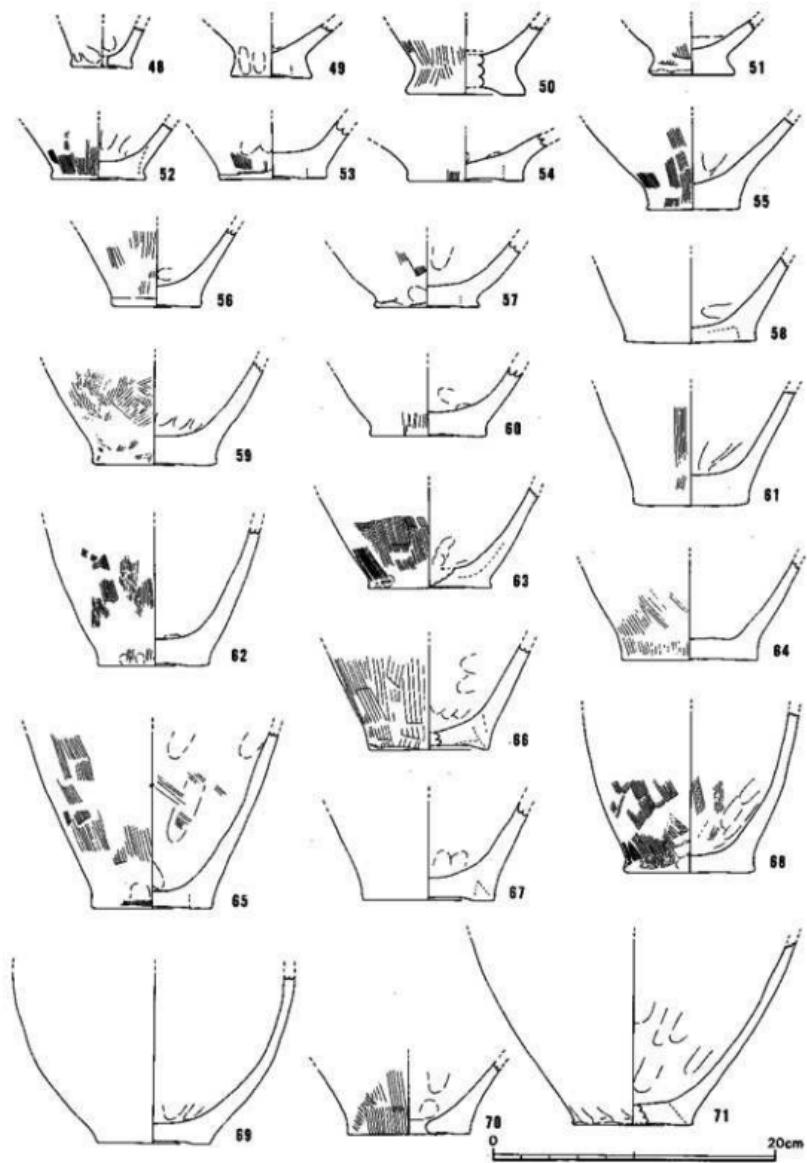
第148図 第III・IV層出土遺物



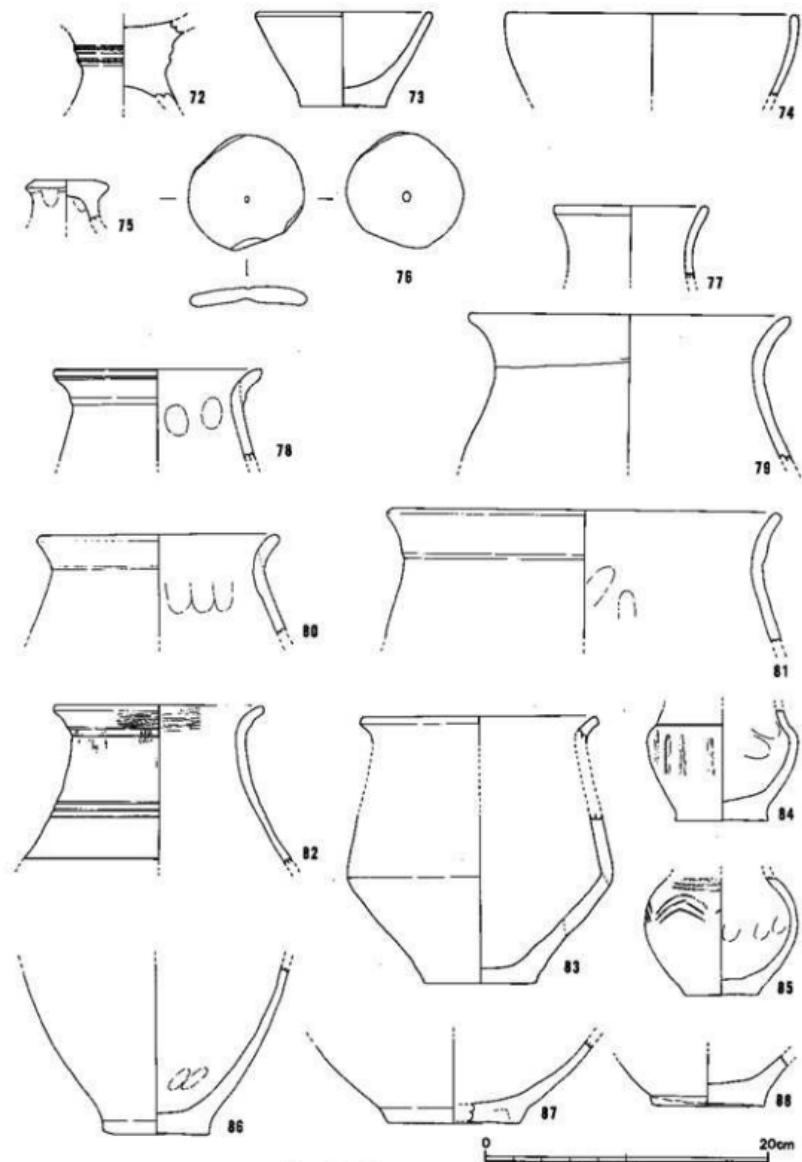
第148図 第IV層出土遺物



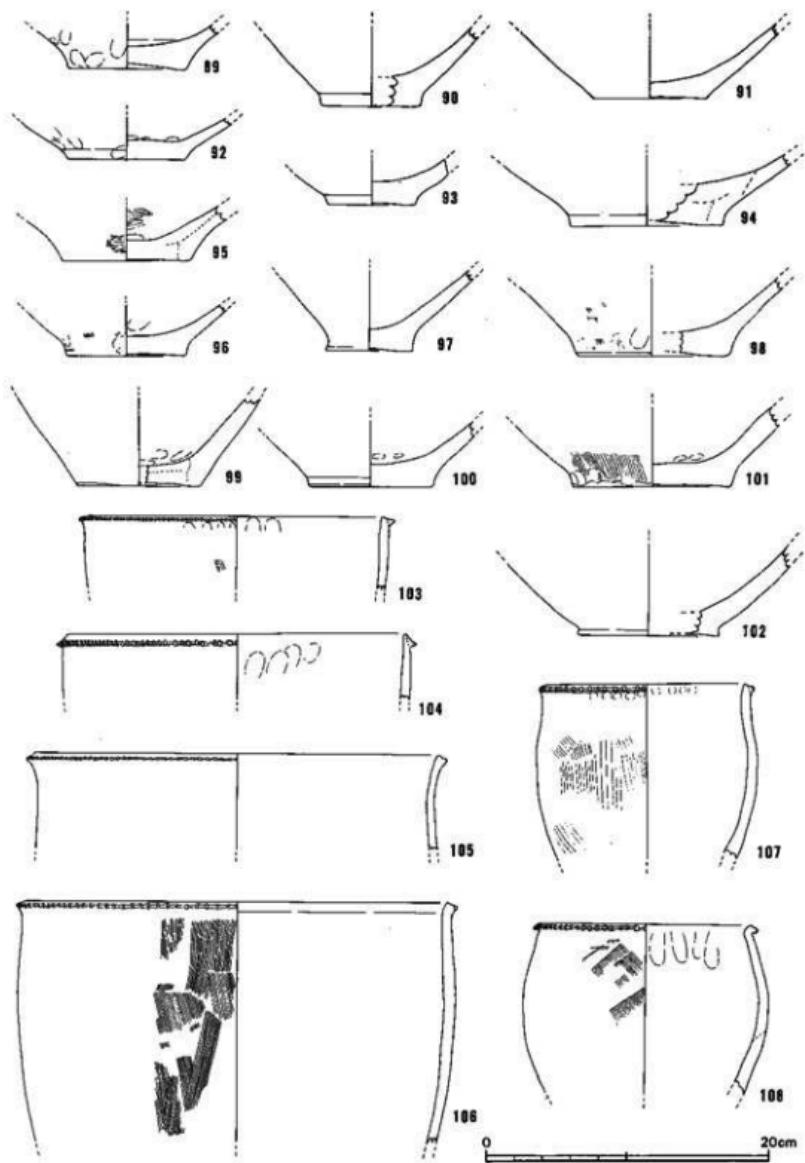
第150図 第IV層出土遺物



第151図 第IV層出土遺物



第152図 第IV・V層出土遺物



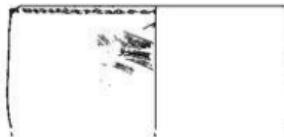
第153図 第V層出土遺物



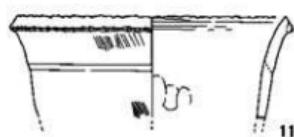
109



110



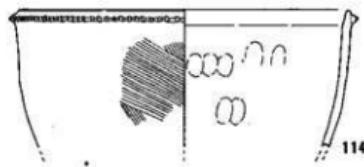
111



112



113



114



115



116



117



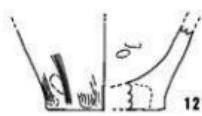
118



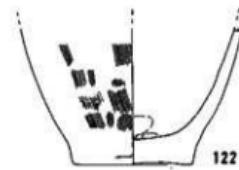
119



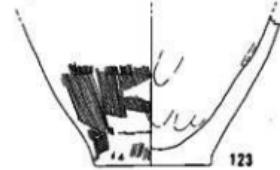
120



121



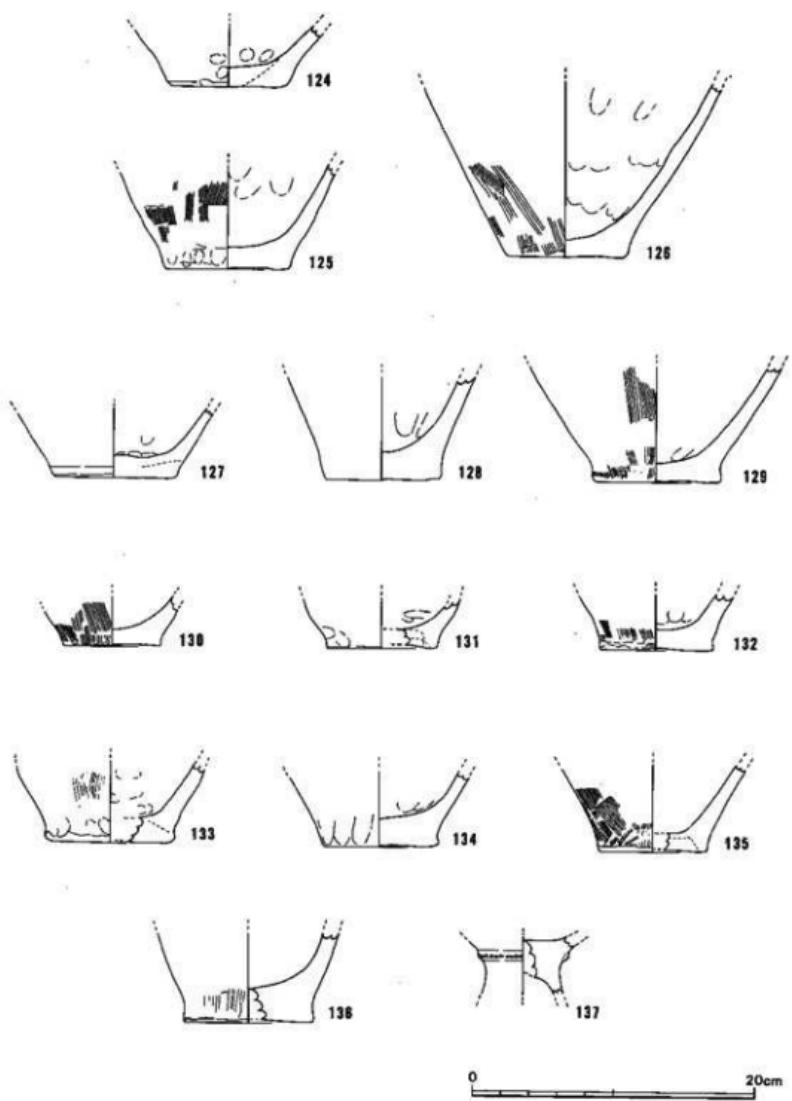
122



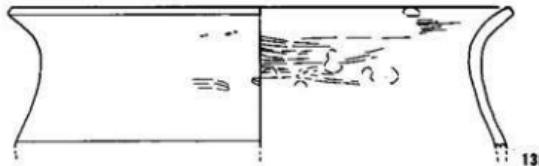
123



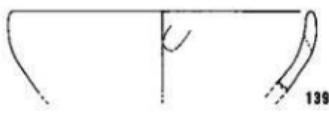
第154図 第V層出土遺物



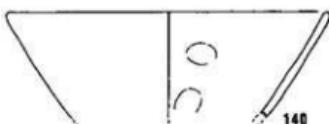
第155図 第V層出土遺物



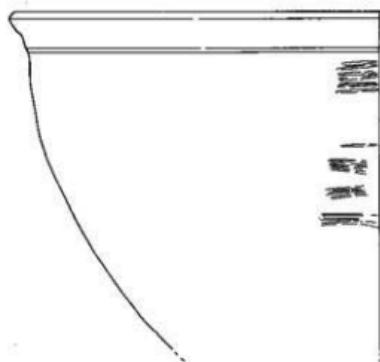
138



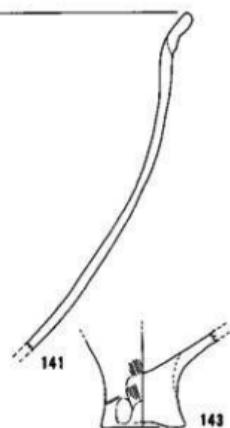
139



140

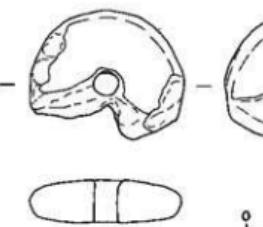


142



141

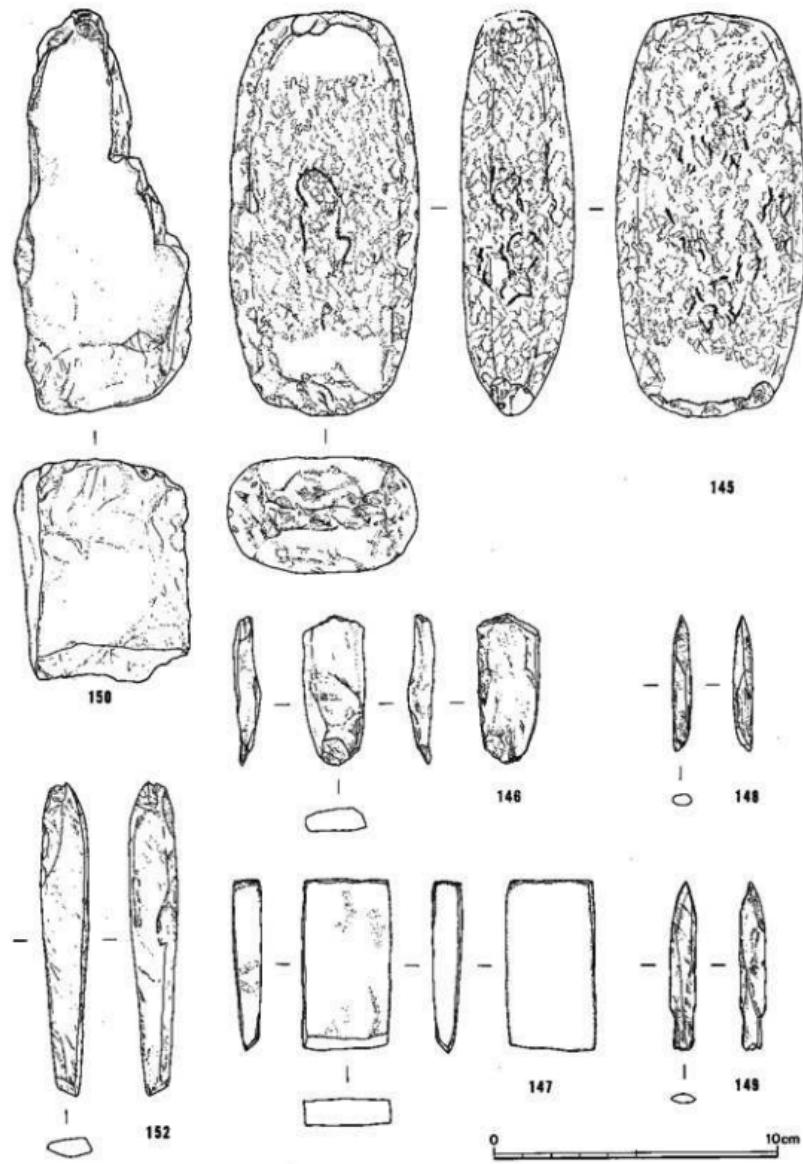
143



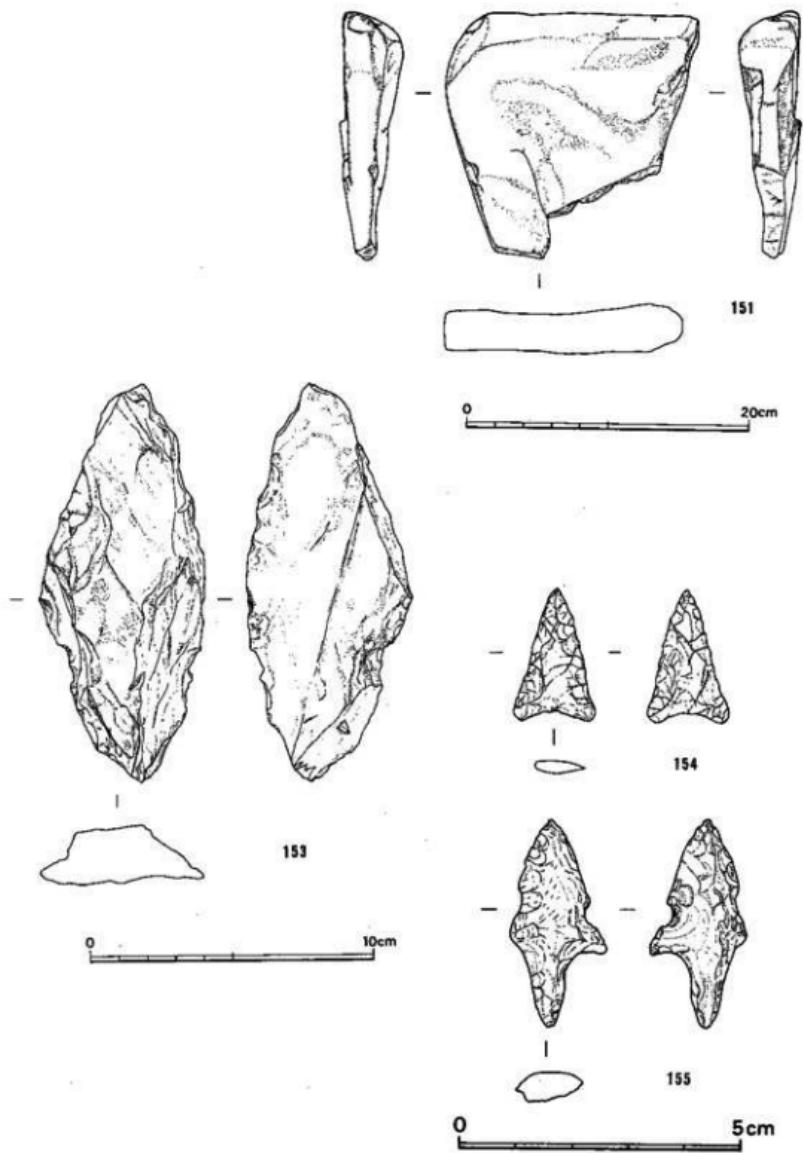
144



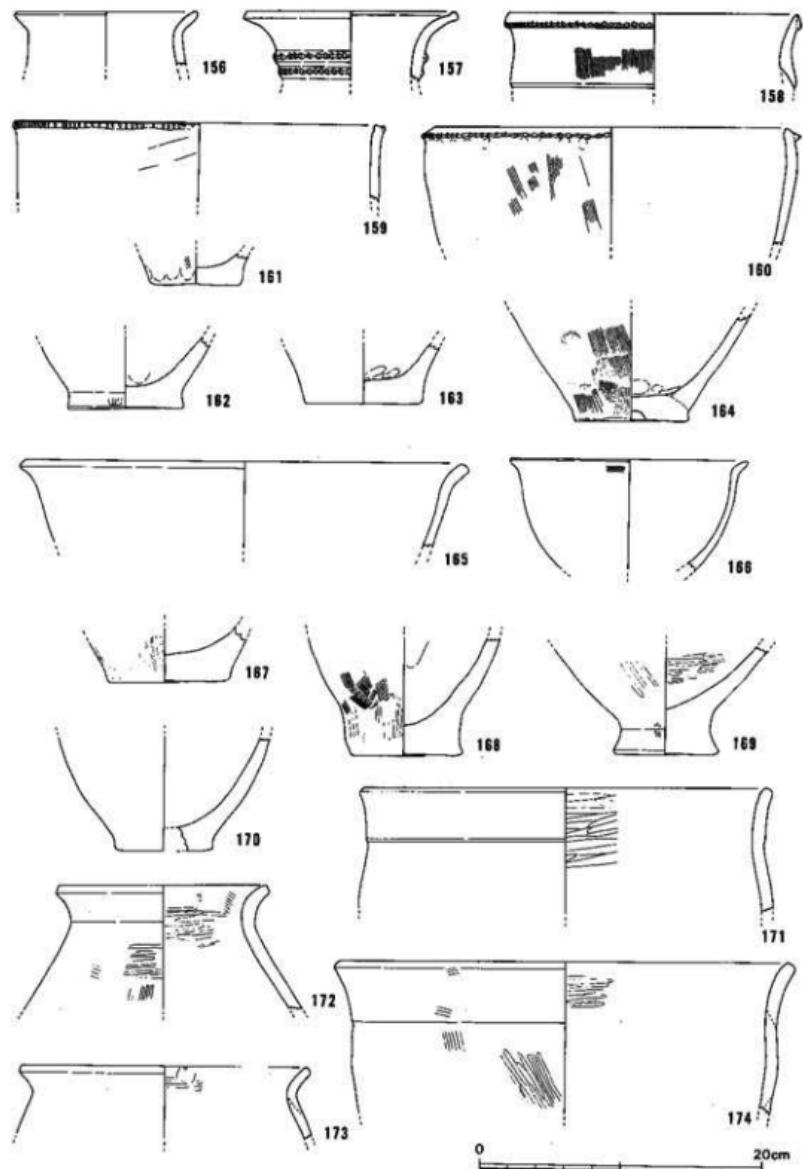
第156図 第V層出土遺物



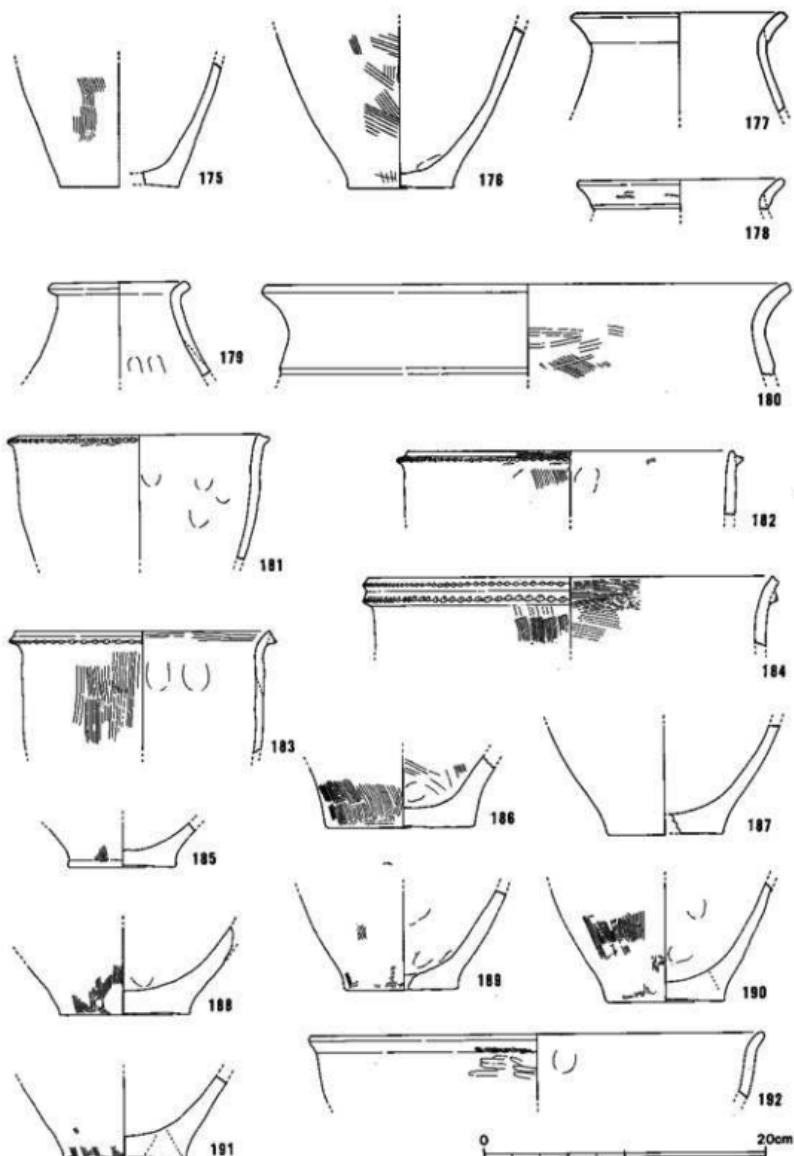
第157図 第III～V層出土遺物



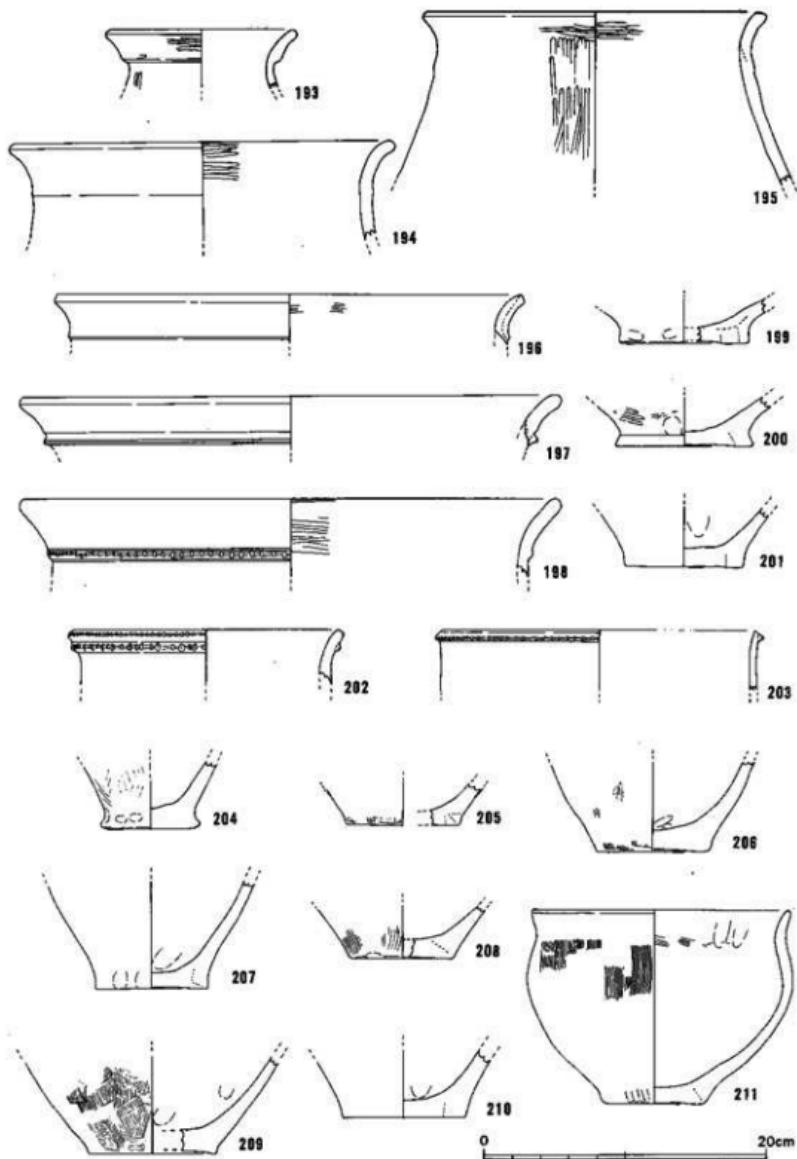
第158図 第V層出土遺物



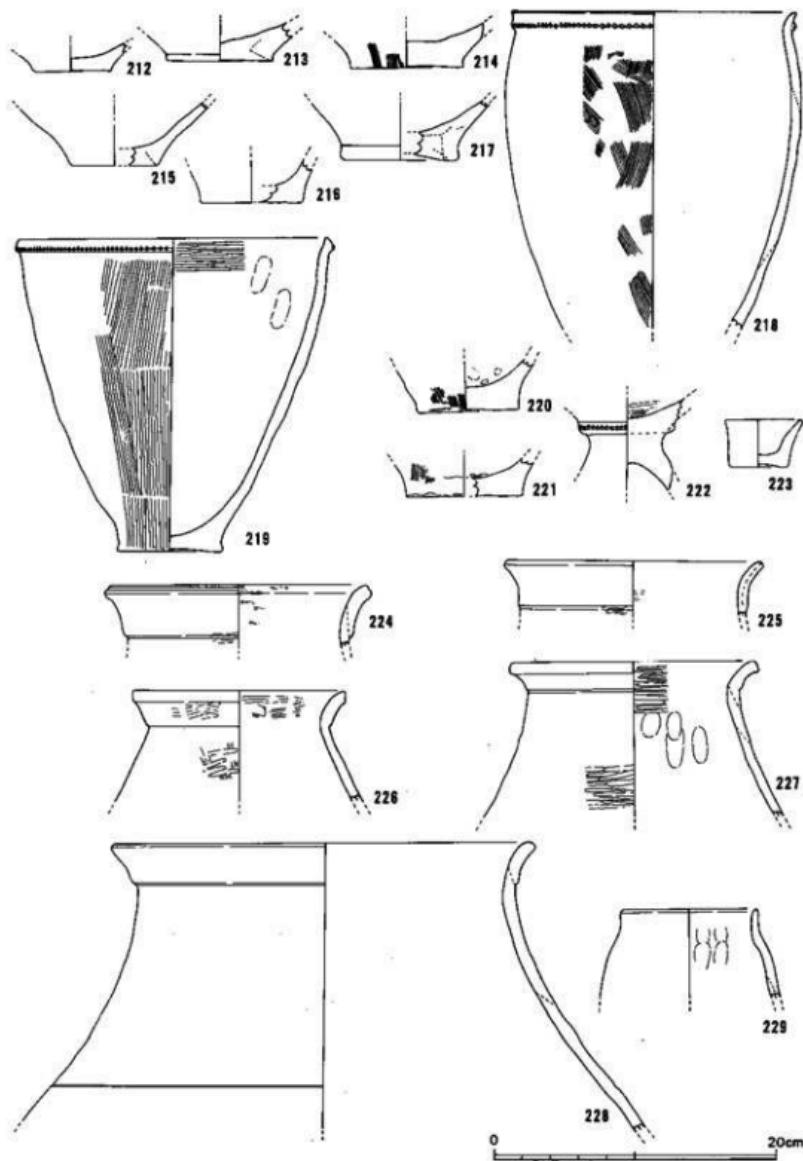
第159図 ST 1、SB 2、SK 1・2・4 出土遺物



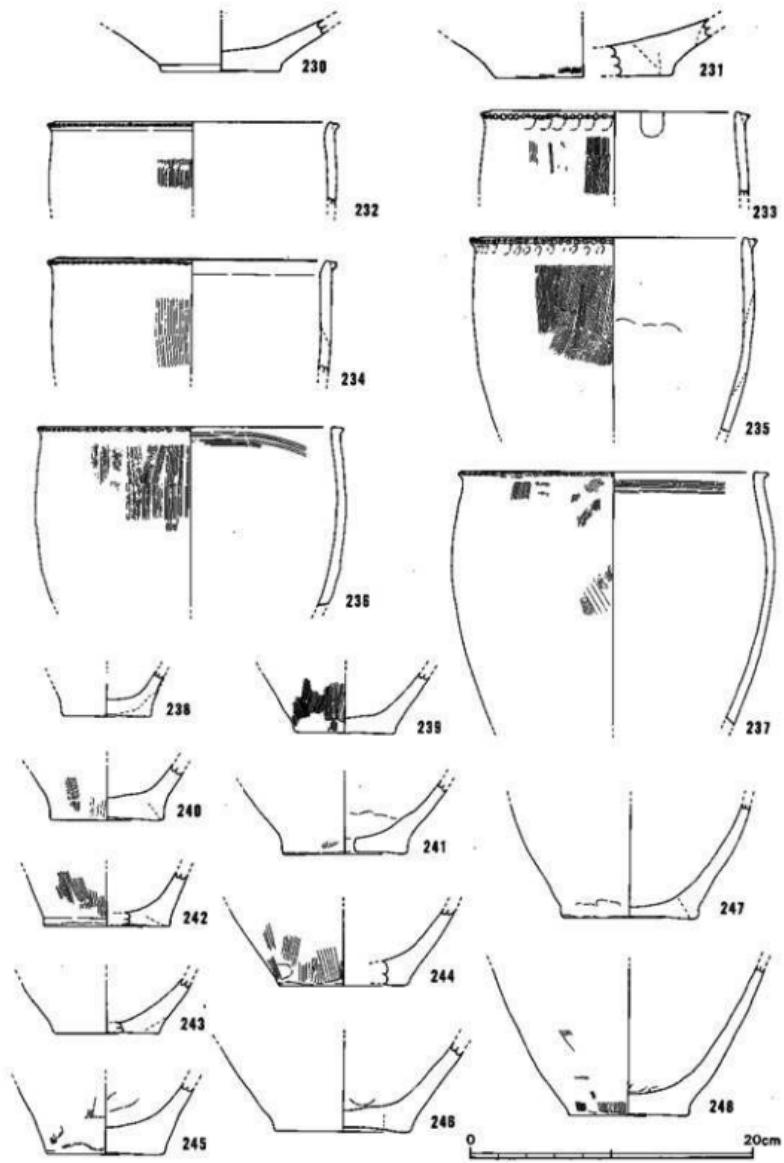
第160図 SK 4・6 出土遺物



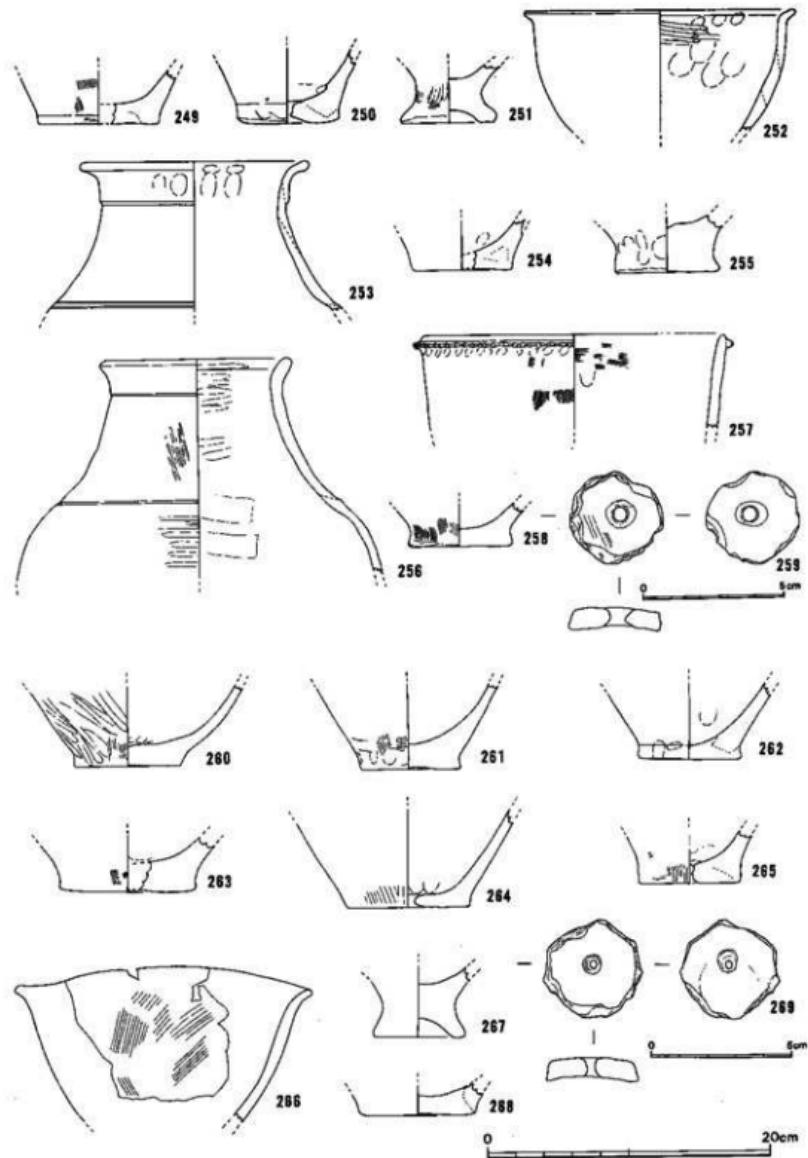
第181図 SK 6・7出土遺物



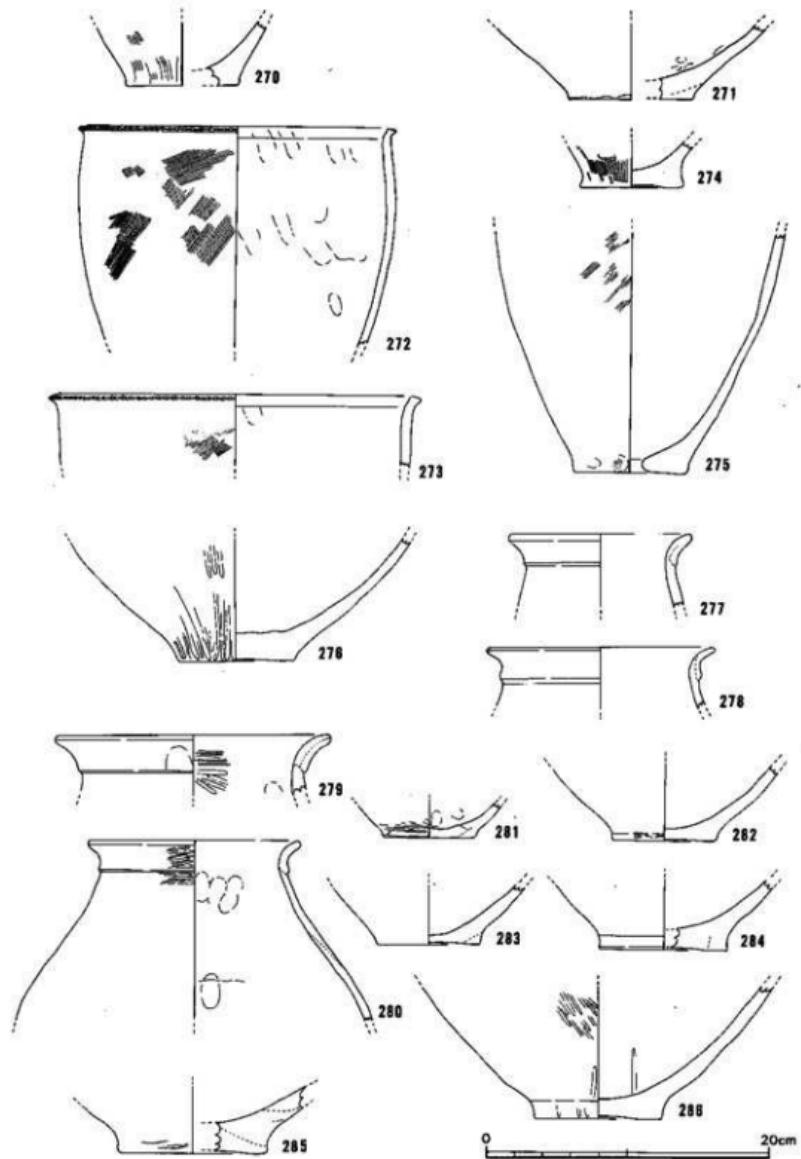
第182図 SK 8・11・12出土遺物



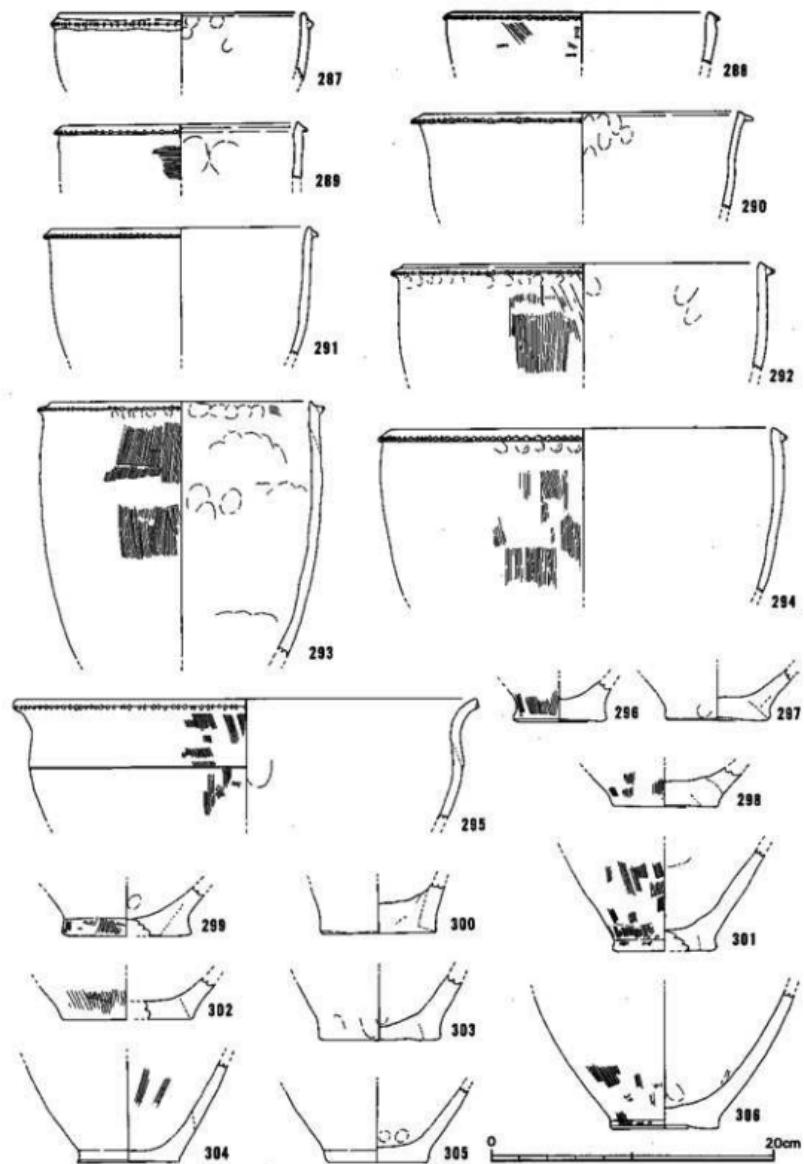
第163図 SK12出土遺物



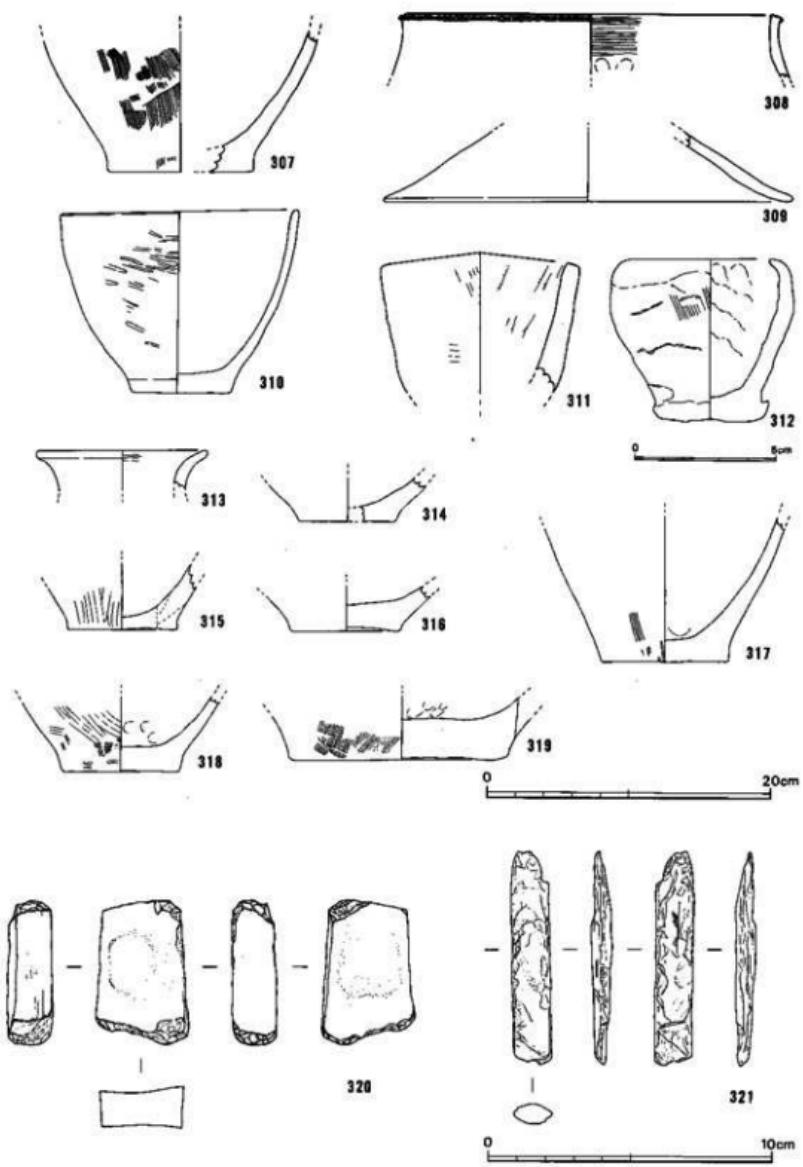
第164図 SK16・17・20・22～24・26・28出土遺物



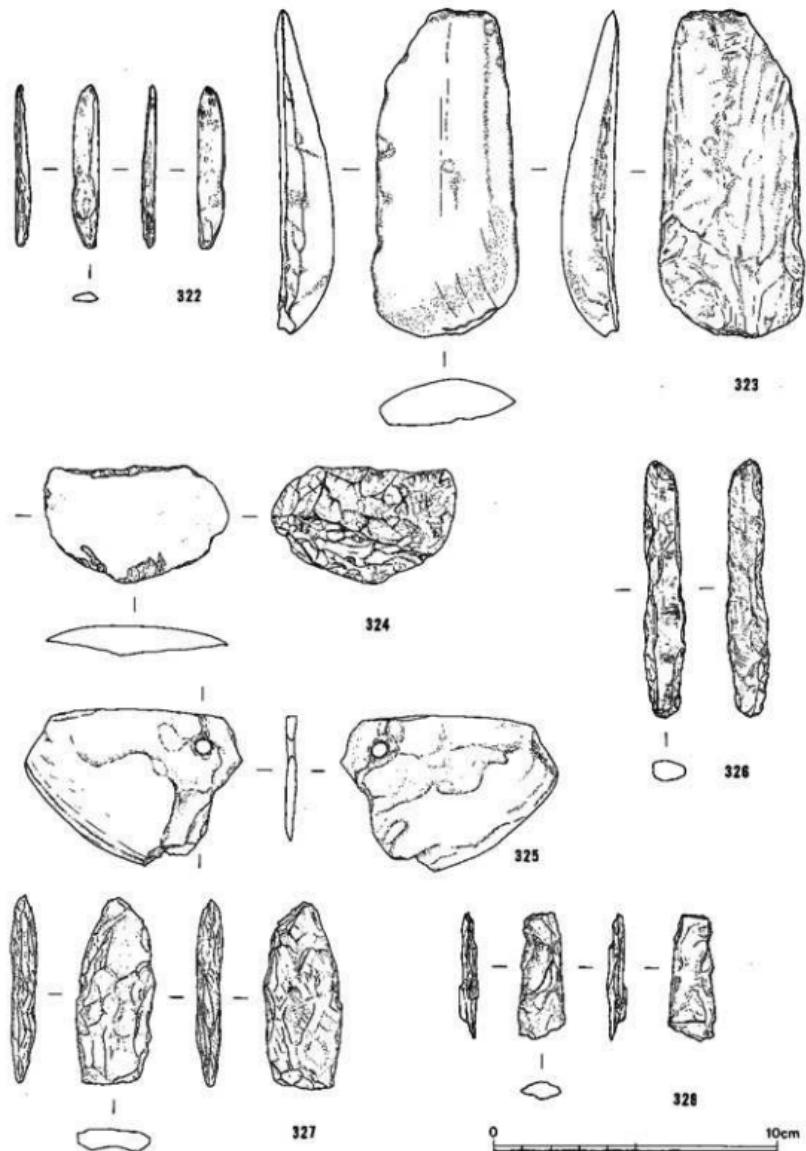
第165図 SK30・31、SD2・4出土遺物



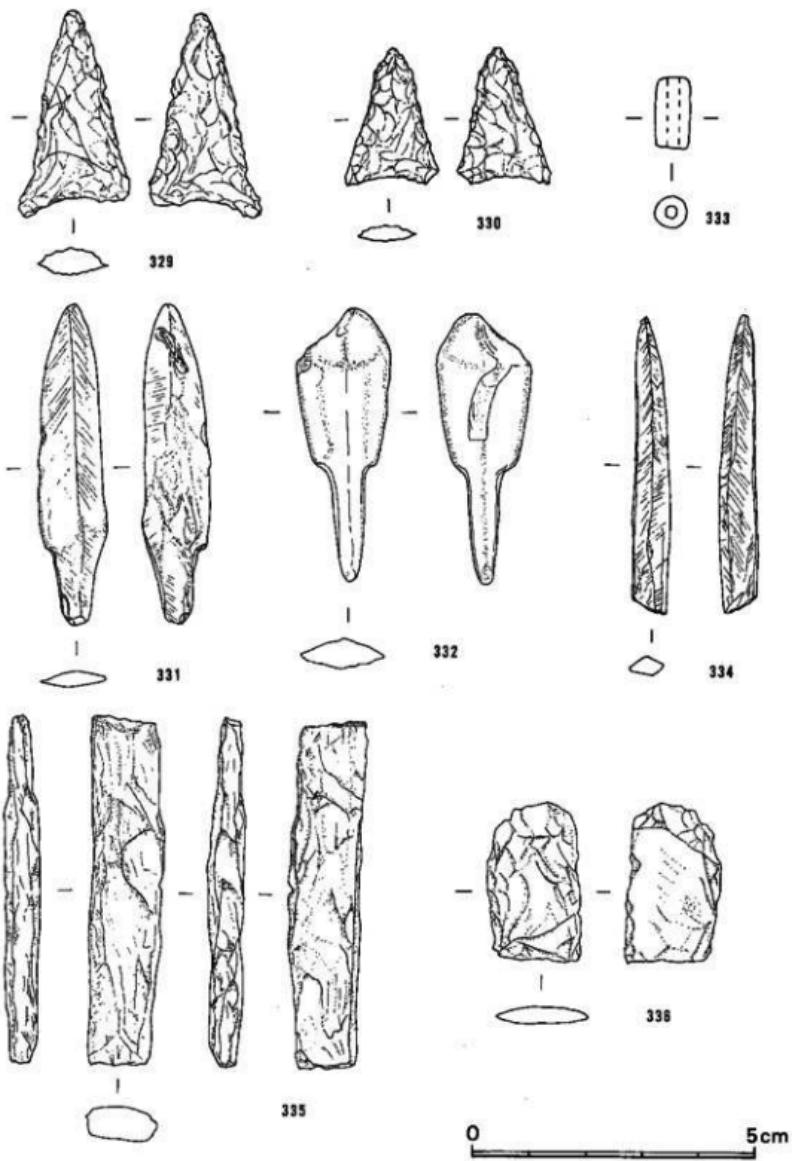
第166図 SD 4 出土遺物



第187図 SD 4、P 1~4、SK 7-12出土遺物



第168図 SK12-26-31、SD3-4出土遺物



第169図 ST 1、SK 7・11・23・31、SD 4 出土遺物

**5. Loc. 18**

## Loc. 18

### 1. 位置と調査経過

Loc.18は、田村遺跡群のほぼ中央部に位置し、字名をスエン坊と称す。調査区はその北半部であり、発掘前は標高約7.20mを測る水田であった。

調査は、中世以降の遺構の調査が終了してから実施した。その段階で、弥生の住居址とみられる遺構はすでに確認していたし、弥生期の包含層が南部に向けて広く展開している可能性が強かったため、試掘トレンチを格子目状に設定し、遺構の確認につとめた。試掘トレンチは、幅1mで、グリッドラインに沿って設けた。それはA～Pトレンチの16本であった。しかし、試掘トレンチ内からは新たな遺構を確認することはできなかった。

調査期間は、昭和56年8月から9月にかけての約1か月間であり、最終的な調査面積は1,304m<sup>2</sup>であった。

### 2. 調査概要

Loc.18の調査によって検出された遺構は、弥生前期の竪穴住居址2棟、土塁1基、ピット8個であった。出土遺物は総数約2,000点であるが、復元可能なものは約100点であった。この内、住居址より出土したものが約60%を占める。

この2棟の住居址はLoc.17で検出された遺構と密接な関連があるとみられる。

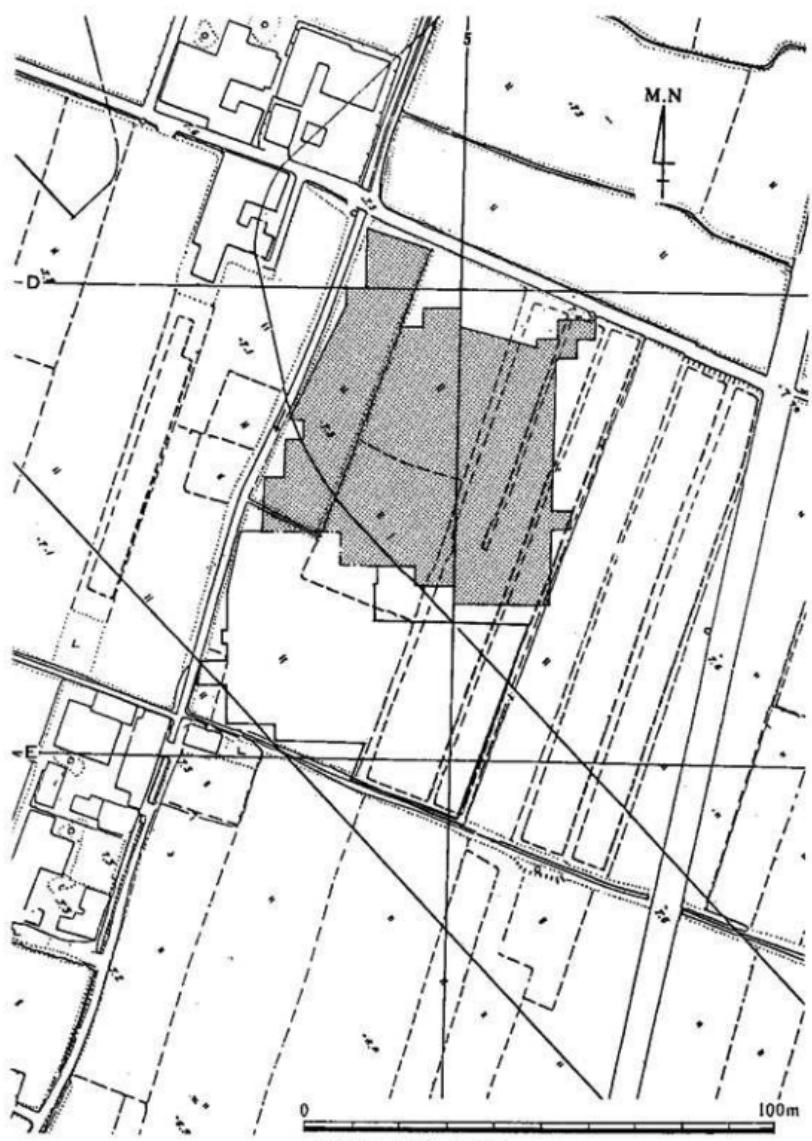
### 3. 層序と出土遺物

調査区において認められた基本層序は以下のとおりである。

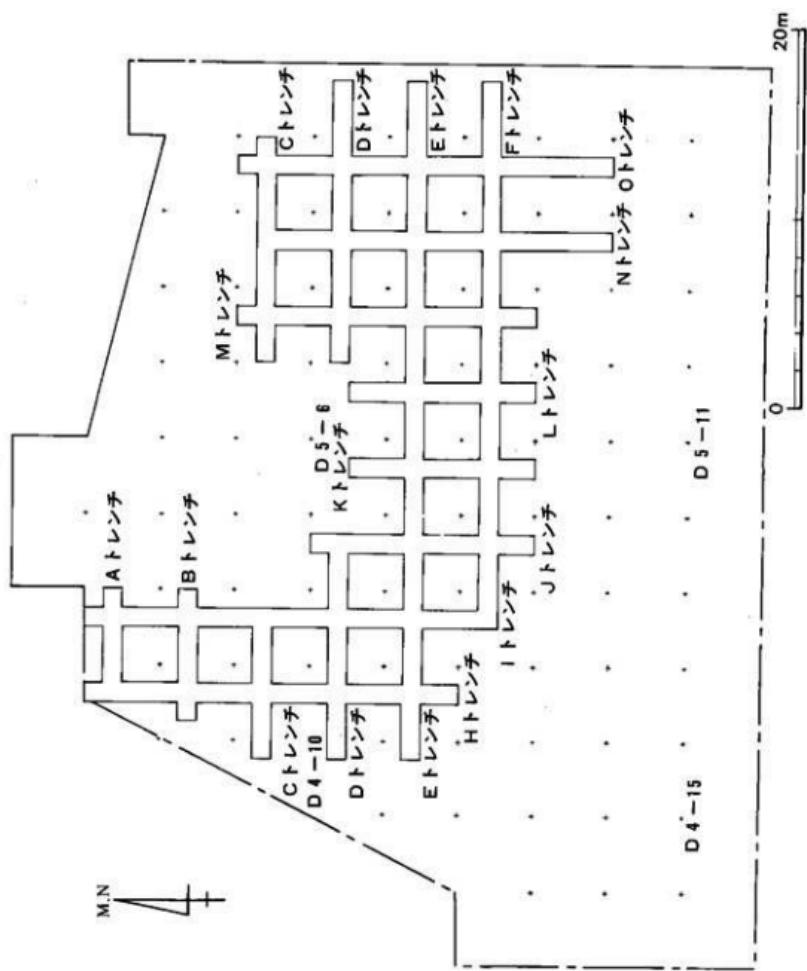
- 第Ⅰ層 耕作土
- 第Ⅱ層 黄色粘質土層
- 第Ⅲ層 茶褐色粘質土層
- 第Ⅳ層 黒褐色粘質土層
- 第Ⅴ層 灰褐色粘質土層

この内、中世の遺構が検出されたのは第Ⅲ・Ⅴ層上面で、弥生の遺構が検出されたのは第Ⅴ層上面であった。ただし、北部では、堆積層がかなり削平されたとみられ、弥生及び中世の遺構も第Ⅰ層を掘り下した段階で検出した。これは南部に向うにしたがい地形が下降していることを示している。このことは試掘トレンチのセクションでも確認され、北端と南端では第Ⅳ層黒褐色粘質土層の標高差が約50cmもあった。この傾斜度は中世より弥生の方が大きい。

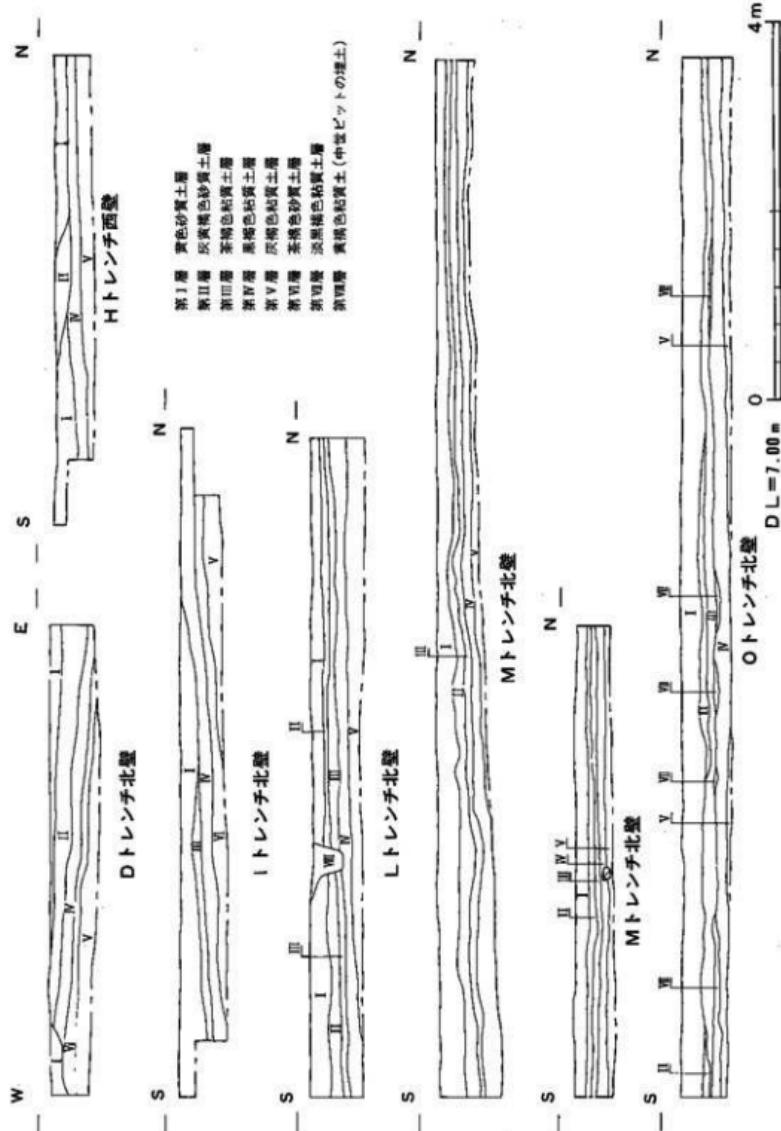
以上の堆積層の中で遺物包含層は、第Ⅰ～Ⅳ層であり、特に第Ⅲ・Ⅳ層が弥生遺物包含層である。実測し得た遺物は、第Ⅲ層出土のものに限られ、その総数31点であり、土器30点、石器1点となる。土器は、壺13点、甕14点（内1点は瓶である）高杯1点、鉢1点、紡錘車1点、



第170図 調査区設定図



第171図 試掘トレンチ設定図



第172図 調査区セクション

そして、石斧1点である。これらはすべて弥生時代前期前半に属するものである。

第IV層は、腐植土層であり、この層中のどこかに生活面があるとみられるが、平面的に検出することは不可能であった。出土遺物は土器片が少量あったに過ぎない。

以上の基本層序以外に試掘トレンチにおいていくつかの砂質土層が認められた。これらの層は、洪水等によって堆積したとみられるもので、ほとんど出土遺物は存しなかった。基本層序の第III・IV層が試掘トレンチセクションの第III・IV層に対応する。

#### 4. 遺構と遺物

##### 竪穴住居址

###### S T 1

S T 1は、調査区北端に位置し、第1層を掘り下した段階で検出した。検出面は中世の遺構と同一面であったため、多数の中世のピットに掘り込まれていた。

平面形は、ほぼ円形を呈し、直径約6.50mを測る。遺存状況は良好で、壁高約0.35mを測り、床面の標高は6.484～6.538mである。壁はほぼ平坦な床面から急角度で上がっている。埋土は、レンズ状に堆積しており、上層が砂質土、下層が黒褐色粘質土であった。このことは住居址が洪水等によって埋没したことを示唆していると考えられる。

付属施設としては、大小23個のピットと2基の炉跡を確認した。まず、主柱穴とみられるものはP 2～5で、それらの規模は、それぞれ直径35cm、28cm、30cm、50cm、深さ22cm、41cm、30cm、74cmを測る。柱間距離はP 2～3間3.30m、P 3～4間2.38m、P 4～5間2.00m、P 5～2間3.27mである。P 2～3間とP 5～2間をやや長く、P 3～4間、P 4～5間を短くし、菱形状に柱穴を配置したことがうかがえる。P 1は、中央ピットで、中期後半から後期の住居址では炉跡となっていることが多いが、この場合は、基底面から自然石を利用した大型の砾石(99)が出土していることから、作業用のピットと考えられる。また、ピット外縁には対象的に配置された小ピット(P 6・7)が存する。P 8・9は炉跡とみられ、號は火を受け赤く変色し、埋土中より赤く変化した石錘(106)が出土した。P 10・11からは炭化物と焼土が検出された。壁直下には、直径45～60cm、深さ5～10cmを測る浅いピット9個(P 12～20)が確認され、それらのピットに混ってフラスコ状に掘り込まれたP 21が検出された。P 21は貯蔵穴と考えられるが、P 12～20の性格は不明である。これら以外の付属施設は確認できなかった。

遺物は多量に出土し、32～74、89～96、98～106、108の59点が図示できた。この内の16点が石器である。付属遺構から出土したものは先に記したものだけで、他はすべて埋土中、特に、第IV層茶褐色粘質土と第V層黒褐色粘質土からの出土が目だった。これらの遺物はすべて前期Iのものとみられ、住居址もその時期に存続したと考えられる。なお、重複関係や建替えは認

められなかった。

## S T 2

S T 2は、調査区南部、S T 1より南西に約22mの地点に位置し、第IV層を掘り下した段階で検出した。

平面形は、ほぼ円形を呈し、直径約3.00mを測る。遺存状況は良好で、壁高0.25~0.28mを測り、床面の標高は6.310~6.475mである。壁は、いく分起伏した床面より急角度で上がる部分と、途中に後をもってやや緩やかな傾斜で上がる部分がみられる。埋土は、主に黒褐色粘質土であるが、上層に砂質土の混入が認められた。

付属施設とみられるものは、遺構内からは確認できなかったが、周辺部2~3m内外に柱穴とみられるピットが存在する。また、S T 2は規模的に小さなものであることから、住居址と考えるより工房址と考えた方が妥当である。

遺物のはほとんどは床面に散在した状態で出土したが、その大半は細片であり、図示できたものは(75~88、97、100)の16点であった。これらの遺物はすべて前期Iのものと考えられ、遺構もその時期に存続したものと考えられる。なお、重複関係や建替えは認められなかった。

## 土塙

### S K 1

S K 1は、調査区南部、S T 2の南西約3mに位置し、第IV層を掘り下した段階で検出した。

平面形は、隅丸方形を呈し、長径1.46m、短径1.34m、深さ0.12mを測る。長軸方向はN-5°-Eである。断面形はほぼ逆台形をなし、壁はほぼ平坦な底面より急角度で上がっている。埋土は黒褐色粘質土であった。付属遺構としては、3個のピットを検出した。出土遺物は皆無であった。

## 5.まとめ

Loc.18からは前期Iに属する1棟の住居址と1棟の工房址とみられるものを検出することができた。しかし、この地区ではこれ以外のこれらに付随する住居址等はほとんど確認できなかった。とするなら、S T 1だけが住居の形態を備えているにもかかわらず、集落から離れた位置に存在することになる。このLoc.18以南の地区では、ほぼ同時期の掘立柱建物址や堅穴住居址が集落の形態をとて検出されていることから考えると、この地区的住居址(S T 1)のあり方に不自然さを感じる。このS T 1には、炉跡、貯蔵穴、工房跡的要素のある中央ピットなど一応の施設を備えている。この時期の他の住居址には、住居内にこのような施設、特に炉跡や貯蔵穴を備えている例は少なく、S T 1は特異な例と考えることもできよう。この特異性を持つS T 1の集落内での役割については、広く同時期の田村遺跡群内の諸遺構を検討することによって解明されるのではなかろうか。これについては今後の検討に待ちたい。

第43表 穴穴住居址計測表

特因番号	遺構番号	平面形	規模 (m)	主軸方向	柱穴	面積 (m <sup>2</sup> )	施設	備考
第173図	S T 1	円形	6.5	—	主柱穴4個	33.2	中央ピット・カマド・貯藏穴	
第174図	S T 2	*	3.0	—	—	7.0	—	

第44表 土塙計測表

特因番号	遺構番号	平面形	規 模 (m)			長軸方向	断面形	備 考
			長 軸	短 軸	深 度			
第174図	S K 1	楕円形	1.46	1.34	0.12	N-5°-E	逆台形	3個の小ピットが掘りこまれる。

第45表 包含層出土土器観察表

特因番号	層位	器種	法量 (cm) 口徑 器高 側径 底径	形態・文様	手 法	備考
1	第1層	甌	17.6 (3.7)	大きく外反する口縁部。底部は緩やかに下るとみられる。口縁部には段を形成。	内面は器壁が剥離しているが、口縁部、内外面にヨコナテ。	
2	*	*	15.0 (9.3)	なめらかに外反する口縁部には、貼りつけによって段を形成する。上部縁部は緩やかに下る。	器面は磨耗しているが、口縁部内外面と外面にヘラ磨きを施す。	
3	*	*	30.0 (5.8)	なめらかに外反する口縁部。貼りつけにより、段を形成する。	口縁部、内外面にヘラ磨き。他はナテ調整。	
4	*	*	38.0 (6.1)	大型の甌で、口縁部はなめらかに外反する。底部は丸く仕上げる。有段部は、ヘラ磨きによって作出す。	全面、丁寧なヘラ磨きを施す。	
5	*	*	— (5.0)	緩やかに下る上部器。成形時に段を形成し、ヘラ状全体で刮削を施す。	外面はヘラ磨きが残存。内面はナテ。	上部の破片。
6	*	*	— (6.2)	緩やかに下る上部器。2条のヘラ括込線文、第1、3条のヘラ括込線文、意匠文。	内外面ともナテ調整を施す。	*
7	*	*	— (5.0)	丸味のある肩部。2条のヘラ括込線文、山形文、ヘラ括込線文。	外面は磨耗。内面は剥離していく、調整不明。	肩部の破片。
8	*	*	— (10.0)	緩やかに下る脚部。1条と2条のヘラ括込線文により、段を形成する。重底文。	外面はナテ調整のあと、ヘラ磨き。内面はナテ調整。	*
9	*	*	— (5.8)	あげ底気味の底部。	外面にはタテハケ。内面は不明。	
			7.8			

標本番号	層位	器種	口径 器高 側径 底径 (cm)	形態・文様	手法	備考
10	第Ⅱ層	壺	— (4.6) — 7.6	あげ底気味の底部。	外面はナゲ調整。内面は不明。	
11	#	#	— (6.4) — 11.2	あげ底気味の底部。肩部へは緩やかに上がる。	外面はヘラ磨き。内面はナゲ調整。	
12	#	#	— (7.0) — 17.0	大型の壺の底部で、あげ底気味。肩部へ緩やかに上がる。	外面はやや磨耗しているが、ナゲが残されていたとみられる。内面はナゲ調整。	
13	#	#	— (6.0) — 11.6	大型の壺の底部で、平底である。底部は約2cmほど立ち上がり、肩部は大きく開いている。	内面不明。外面ナゲ調整とハケ削り。	
14	#	甕	18.2 (4.4) —	上方へはほぼ直立ぐるびる口縁部。近づかれた口唇部に、へラ状全体で割目を施す。	口部、内外面ヨコナゲ。他はナゲ調整。	
15	#	#	23.0 (5.1) —	ほぼ直上にのびる上唇部から、口縁部は外傾し、端部下端に割目を施す。	口縁部、内外面ヨコナゲ。他はナゲ調整。	
16	#	#	16.0 (4.6) —	やや丸味のある上唇部から、口縁部は短く外傾する。端部下端にへラ状全体による割目。	口縁部、内外面ヨコナゲ。他はナゲ調整。	背面は、かなり磨耗している。灰白色。
17	#	#	18.2 (4.4) —	ほぼ直上にのびる上唇部から、口縁部は短く外傾し、丸く仕上げられた端部には、へラ状全体による割目。	口縁部、内外面ヨコナゲ。他はナゲ調整。端部外面には、やや幅広の斜め方向のハケ目。	
18	#	#	22.0 (15.4) —	丸味のある顎部から、口縁部は短く外傾し、丸く仕上げられた端部には、へラ状全体による割目。	口縁部、内外面ヨコナゲ。脣部外面には斜め方向のハケ目、内面にはナゲ調整。	
19	#	#	24.0 (13.1) —	丸味のある顎部から、口縁部は短く外傾し、端部両端にへラ状全体による割目。	口縁部、内外面ヨコナゲ。脣部外面には、ハケ目、内面にはナゲ調整。	口縫から脣部にかけて黒斑が残存。
20	#	#	— (9.8) —	上外方へ上がる肩部から、口縁部はなめらかに外反し、端部は丸く仕上げられ、割目が施される。	唇部は磨耗が著しく、調整不適。	成形時に段を形成する。
21	#	#	24.8 (19.5) —	上外方へ上がる肩部から、口縁部は短く外反し、丸く仕上げられた端部には、へラ状全体による割目。	口縁部、内外面ヨコナゲ。他はナゲ。部分的にハケ目が残存。	#
22	#	#	— (5.7) — 7.6	平底の壺部。	内面ナゲ調整。外面は磨耗している。	灰白色。
23	#	#	— (3.7) — 8.8	#	内外面ともナゲ調整。部分的に指頭压痕が残る。	#
24	#	#	— (7.1) — 9.2	あげ底気味の底部。	外面は磨耗しているが、部分的にハケ目が残存。内面ナゲ。	

検査番号	層位	器種	法量 (cm)	形態・文様	手法	備考
25	墓田層	盤	— (4.4) — 8.0	平底の底部。	器面は磨耗が著しいが、外面にはハケ貝が残存。	
26	#	#	— (10.6) — 9.0	あげ底の底部。腹部へは、やや丸味を持って上がる。	内外面ともナテ調整。	
27	#	盤	— (15.0) — 7.2	平底の底部の中央部、やや外寄りに内外面から円孔を穿つ。腹部は丸味を持って上がる。	外面はタテハケ。内面はナテ調整。 器面は磨耗したものとみられる。	
28	#	高杯	— (10.7) — 8.3	中実の底立する柱状部から、内湾気味に上がる杯部と下方へ下る瓣部、杯部との間に點突突部。	器面は磨耗していて、調整不明。	
29	#	鉢	— 18.8 12.7 — 7.0	あげ底気味の底部から、上方へ上がり、口縁部で底立する。瓣部は平面をなす。	外面はナテのあとハラ磨きを部分的に施す。内面はナテ調整。	底部から瓣部にかけて黒斑が残存。
30	#	筋縫車	直径 4.9 厚さ 1.5 重量(g)23.9	ほぼ円形を呈し、中央部には円孔を穿っている。	表面には指痕(汎用)が残る。	約1/2が残存、底がから初腰車としてつくられたもの。

第46表 包含層出土石器観察表

検査番号	層位	器種	計測値 (cm, g)	最大長 最大幅 最大厚 度	材質	特徴	備考
31	墓田層	石斧	— 10.9 5.6 3.4 271.0	— — — —	千枚岩	刀部が一部欠損しているが、ほぼ完形の両刃斧である。断面は横円形を呈す。刀部は外側し、ほぼ全周が鋸歯化されている。	

第47表 造構出土土器観察表

検査番号	造構番号	器種	法量 (cm)	口径 最高 削除 底径	形態・文様	手法	備考
32	S T 1	壺	— (2.8) — —	大きく外反する口縁部。	器面は磨耗していて、調整不明。	口縁部の成形。	
33	#	#	— (2.4) — —	口縁部はなめらかに外反し、端部を丸く仕上げる。	内外面ともヨコナゲ。		
34	#	#	16.0 (6.4) —	内傾してのびる頸部から、口縁部は、なめらかに外反し、端部は丸く仕上げる。	口縁部、内外面ヨコナゲ。内面は磨耗している。		
35	#	#	16.6 (6.0) —	やや内傾してのびる頸部から、口縁部は、なめらかに外反。脇りつけにより、段を形成する。	口縁部、内外面ヨコナゲ。他はナテ。内面には、ハケ日が残存。		

辨認番号	遺構番号	基 標	法量 (cm) 口徑 器高 胸深 底深	形 態・文 横	手 法	備 考
36	S T 1	盞	18.0 (11.6) —	内縫してのびる頸部から、口縫部は、なめらかに外反。或割時に段を形成する。	口縫部、内外面ヨコナデ。他はナデ。内面には、ハケ目が残存。	粘土結合法時に生じた高輪を段として残す。
37	n	n	17.6 (3.0) —	なめらかに外反する口縫部。頸部は丸く仕上げる。貼りつけにより段を形成する。	内縫部、内外面ヨコナデ。やや内面磨耗。	
38	n	n	22.8 (6.7) —	大型の窓の口縫部。真上に立ち上がる頸部から、口縫部は外傾する。貼りつけにより段を形成し、糸目とヘラ描沈線を施す。	内外面とも、ヘラ磨きを施す。	
39	n	n	— (15.4) 44.2 —	大型の窓の胸深で丸い。上頸部にヘラ描沈線により有段部をつくる。	内面ナデ調整。外裏ヘラ磨き。	
40	n	n	— (3.4) — 6.6	小型の盞の底部で平底である。	内外面とも、ナデ調整。	内面灰白色。
41	n	n	— (3.5) — 9.0	上げ底気味の底部。	外裏ナデ。内面不明。	n
42	n	n	— (3.2) — 6.3	上げ底気味の底部から、胴部は緩やかに上がる。	内外面ともナデ。底部外面に、ハケ目が残存。	下脚部から底面にかけて黒斑が残存。
43	n	n	— (7.1) — 8.8	上げ底気味の底部から、胴部は上方へ緩やかに上がる。	内外面とも磨耗。かつ亞壁が剥離している。	
44	n	n	— (6.2) — 8.2	上げ底気味の底部から、胴部は緩やかに上がる。	底部外面にヘラ磨きが残存。他は不明。	
45	n	n	— (8.4) — 8.6	平底の底部から、胴部は上方へのびる。下胸部外面にヘラ描の文様が残存。	内面ナデ。外裏はヘラ磨きが部分的に残存。	下脚部に黒斑が残存。
46	n	盞	19.6 (7.9) —	上方へ立上がる胴部から、口縫部は近く直立する。口唇部、外面直下に糸目突起を貼付する。	突起間辺のみヨコナデ。他はナデ調整。	
47	n	n	— (3.9) —	緩く外傾する口縫部。頸部下端にヘラ状原体による糸目。段は成形時に形成する。	口縫部ヨコナデ。外裏にハケ目残存。	
48	n	n	— (4.4) —	外傾する口縫部。喉部下端にヘラ状原体による糸目。	口唇部ヨコナデで、やや粗雑する。外裏には、ハケ目残存。内面はナデ。	
49	n	n	19.4 (6.7) —	真上にのびる胴部から、口縫部は緩く外傾する。やや凹凸をなす喉部には、その下端に糸目を施す。	口縫部、内外面ヨコナデ。他は磨耗している。	
50	n	n	19.6 (4.5) —	上方へのびる胴部から、口縫部は、そのまま直立する。抜強した口唇部両端にヘラ状原体による糸目。	口縫部両端をつまみ出す。口縫部内外面ヨコナデ。内面ナデ調整。外裏には、ハケ目が残存。	

検査番号	遺物番号	器種	底面 周長 (cm)	口縫部 周長 (底面)	形態・文様	手法	備考
51	S T 1	底	— — — ( 6.5 )	底上にのびる脚部から、口縫部は外傾し、端部下端に割目。成形時に段を形成する。	口縫部、内外面ヨコナデ。内面ナデ。外面にはハケ目が残存。		
52	#	#	— — — ( 5.0 )	やや外傾する口縫部。端部両端にヘラ状原体による割目。	口縫部をヨコナデで拡張する。外面はハケ調整のあとナデ。内面は磨耗している。		
53	#	#	— — — ( 2.3 )	やや内傾してのびる脚部から、口縫部は大きく外反し、端部にヘラ状原体による割目。	口縫部ヨコナデ。外面ナデ。内面は磨耗している。		
54	#	#	— — — ( 3.6 )	直立する脚部から、口縫部は大きく外反し、多く仕上げられた端部には割目を施す。	口縫部、内外面ヨコナデ。他はナデ調整を施す。		
55	#	#	— — — ( 3.5 )	#	#	外面口縫部と脚部の境にヘラ彫沈線を施す。	
56	#	#	— — — ( 6.8 )	やや外傾してのびる脚部から、口縫部は大きく外傾する。端部下端に割目。段は成形時に形成する。	口縫部ヨコナデ。外面ナデ。内面は不明。		
57	#	#	— — — ( 4.3 )	やや外反する低い口縫部。端部下端にヘラ状原体による割目。	口縫部ヨコナデ。外面ナデ。内面は不明。		
58	#	#	— — — ( 3.0 )	外傾する低い口縫部。多く仕上げられた端部下端にヘラ状原体による割目。	器面調整不明。		
59	#	#	— — — ( 5.3 )	外傾する低い口縫部。多く仕上げられた端部下端にヘラ状原体による割目。	口縫部ヨコナデ。他はナデ。		
60	#	#	— — — ( 6.7 )	内溝気味にのびる脚部から、強く外傾する口縫部。平らな端部下端にはヘラ状原体による割目。	口縫部ヨコナデ。外面ナデ。内面は不明。		
61	#	#	— — — ( 3.7 )	外傾する口縫部。端部下端にはヘラ状原体による割目。	口縫部ヨコナデ。外面ナデ。内面は不明。		
62	#	#	— — — ( 7.1 )	ほぼ直线上にのびる脚部から、口縫部は強く外傾する。端部下端にヘラ状原体による割目。	口縫部ヨコナデ。他はナデ調整。		
63	#	#	— — — ( 5.5 )	直線上にのびる脚部から、口縫部は強く外傾し、端部を丸く仕上げる。端部には割目。	口縫部ヨコナデ。他はハケ調整のあと、ナデを施す。		
64	#	#	— — — 17.6 ( 4.8 )	内溝気味に上がる脚部から、口縫部は強く外傾し、端部を丸く仕上げる。	口縫部ヨコナデ。他はナデ調整。部分的に擦痕压痕が残る。		
65	#	#	— — — ( 4.4 ) 6.0	半壺の底部で、脚部との境いから張り出す。	器面ナデ調整。		

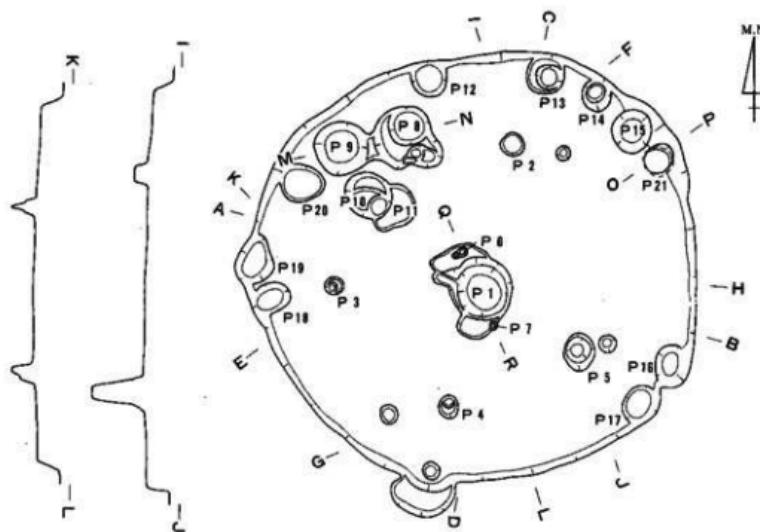
辨認番号	遺構番号	器種	法量 (cm) 口徑 器高 胸径 底径	形態・文様	手法	備考
66	S T 1	壺	— (4.7) — 7.4	平底の底部。肩部は上外方へのびる。	外面ナデ。内面不明。	
67	"	"	— (3.9) — 6.4	平底の底部。肩部は、そのまま上外方へのびる。	背面ナデ調整。底外部へラナダ。	下胸部から底部にかけて、墨跡残存。
68	"	"	— (5.3) — 8.0	あげ底気味の底部。	内面ナデ調整。他は不明。	
69	"	"	— (4.7) — 7.0	"	内面ナデ。外面はハケ調整のあとナデ。	
70	"	"	— (4.0) — 9.4	"	内面ナデ。外面ハケ調整。	
71	"	纺錘車	直径 6.0 厚さ 1.5 重量(g)29.5	ほぼ円形を呈し、中央部に直徑約0.5cmの円孔を穿つ。	指頭圧痕とヘラ磨きが残存。	
72	"	"	直径 5.4 厚さ 1.4 重量(g)43.2	ほぼ円形を呈し、中央部に直徑約0.4cmの円孔を穿つ。	ナデ調整。部分的に指頭圧痕が残る。	芯形品。
73	"	"	直径 2.3 厚さ 0.7 重量(g)3.3	ほぼ円形を呈し、中央部に基盤から、直徑約0.3cmの円孔を穿つ。	周辺部に削り底が残存。	土器からの転用。
74	"	"	直径 3.6 厚さ 0.6 重量(g)10.8	ほぼ円形を呈し、中央部に直徑約0.6cmの円孔を穿つ。	"	"
75	S T 2	壺	— (3.9) —	底部の破片。肩部をはさんで、上にヘラ抹拭線。下に輪広のヘラ抹拭線と3条のヘラ抹拭線。	調整不明。	
76	"	"	— (6.0) —	底部の破片。肩部をはさんで、上にヘラ抹拭線。下に輪広のヘラ抹拭線と2条のヘラ抹拭線。	内面ナデ。外面不明。	75と同一個体の可能性あり。
77	"	"	— (4.3) — 6.4	あげ底気味の底部。	背面ナデ調整。	外面灰白色。下胸部から底部にかけて墨斑あり。
78	"	"	— (4.8) — 7.4	平底の底部。肩部は、やや内湾気味に上がる。	"	
79	"	壺	— (2.5) —	上外方を向く口縁部。膨張された口唇部下端にヘラ状原体による割目。	口唇部下端をつまみ出したあと、ヨコナデ。他はナデ。	
80	"	"	— (2.5) —	やや外傾する口縁部。平らな端部下端にはヘラ状原体による割目。	口唇部を折り曲げて外側に拡張。口縁部ヨコナデ。外面にはハケ日残存。	

辨図番号	連携番号	器種	法量 (cm)	口径 部高 網底 底径	形態・文様	手法	備考
81	S T 2	瓶	( 2.5 ) — —	やや外張る口縁部。拉張した端部下端にヘラ状原体による剥離。	口唇部を上方と外方につまみ出す。 口縁部ヨコナギ。		
82	#	#	( 8.0 ) — —	ほぼ直上にのびる副部から、口縁部はやや外傾し、端部に刮目を施す。枝は成形時に形成する。	口縁部ヨコナデ。他は不明。		
83	#	#	( 7.0 ) — —	ほぼ直上にのびる副部から、口縁部はやや外傾し、端部に刮目を施す。枝は成形時に形成する。	"		粘土紐合時 に生じた高低 を段として残す。
84	#	#	( 2.9 ) 5.4	あげ底気味の底部。	器内ナナ糊物。		下脚部から底盤にかけて黒斑あり。
85	#	#	( 3.9 ) 6.4	平底の底部。	器内ナナ糊物。外面にハケ目残存。		
86	#	#	( 3.7 ) 7.4	あげ底気味の底部。	内面ナナ糊物。外面には、ハケ目残存。		
87	#	#	( 5.6 ) 7.1	平底の底部。	内面ナナ糊物。外面には、ハケ目が部分的に残存。		
88	#	#	( 3.0 ) 9.4	あげ底気味の底部。	外面ナナ糊物。内面不明。		

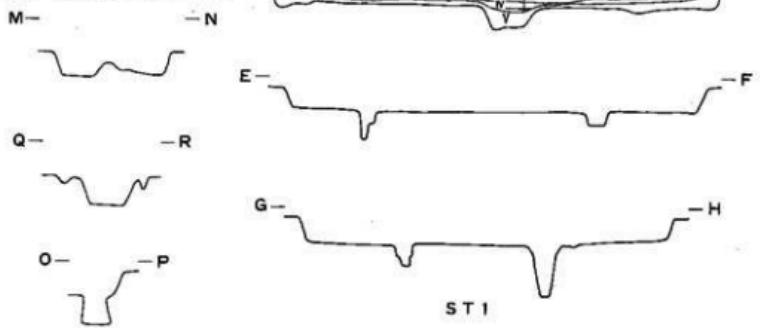
第48表 遺構出土石器觀察表

持試番号	道番号	器種	計測値 (cm, g)	最大長 最大幅 最大厚 度	材質	特徴	備考
89	S T 1	石斧	8.6 4.7 1.6 90.0		灰岩	両刃石斧であるが、片面は刃部のみ研磨、一方は全面が研磨されている。刃部は一方が厚りへっている。	
90	#	#	4.7 1.7 0.6 6.8		#	小型の石斧で両刃である。かなり使用されたとみられ、刃部は、いく分磨滅している。	
91	#	#	7.0 1.3 0.9 11.9		#	小型石斧の未製品とみられる。研磨された跡は残っていない。	
92	#	叩石	10.1 9.9 2.5 245.0		砂岩	所産扁平叩石で、両辺部に打痕が残る。表面は、自然石のまま残る。	
93	#	#	10.2 8.1 2.7 308.0		#	両半叩石で、一部欠損している。側面には剥離痕が残る。	

探査番号	遺構番号	器種	計画値 最大長 最大幅 (cm, g) 最大厚 度	材質	特徴	備考
94	S T 1	叩石	10.3 3.5 2.0 102.0	砂岩	棒状を呈し、先端部に打痕が残る。ほとんど自然石のまま使用されたとみられ、打痕以外に調整痕はない。	
95	#	砸石	( 9.0 ) 5.0 5.0 180.0	#	1面のみを使用していて、中央部がやや凹んでいる。一部欠損。	
96	#	#	5.1 5.6 1.9 93.0	#	2面を使用しているが、使用痕は少ない。一部欠損。	
97	S T 2	#	9.3 7.0 3.1 327.0	#	#	
98	#	#	7.5 9.9 5.4 475.0	#	4面を使用している。かなり使用したとみられ、凹んでいる。約1/3が欠損している。	
99	S T 1	#	24.3 13.5 6.5 2600.0	#	自然石を利用しており、3面を使用している。使用度が激しく、かなり凹んでいる。	中央ピット基底面より出土。
100	S T 2	石包丁	( 3.8 ) 4.6 0.6 9.6	サスカイト	打製の石包丁で、刃方が欠損。長方形の腰平なる形態を呈する。刃部には細かい刻離を加える。側面に抉りを作る。	
101	S T 1	石鏃	6.4 1.2 0.3 4.1	頁岩	磨製の石鏃で、完形である。先端部は概方向、中央部は斜方間に研磨されている。基部は、かなり鋭利につくられている。	
102	#	#	( 4.7 ) 0.9 0.4 1.6	#	磨製石鏃で、基部が欠損している。片側は斜方間に研磨されているが、一方は未調整である。	
103	#	#	5.4 0.8 0.5 2.5	#	未製品で、研磨されている部分はわずかである。	
104	#	#	8.5 1.3 0.7 7.4	#	未製品である。4回の大刻離を行っただけで、細かな加工は行われていない。	
105	#	#	10.3 1.9 9.0 17.6	#	未製品であるが、大型であるので石槍の可能性もある。3回の大刻離を行い、一部に調整刻離を加えただけである。	
106	#	石鏃	3.5 4.1 1.2 23.6	細粒砂岩	刃方が欠損している。全面に調整を加えて、両端に抉りを作ったとみられる。	が鉢より出土したため、表面は赤く染色している。

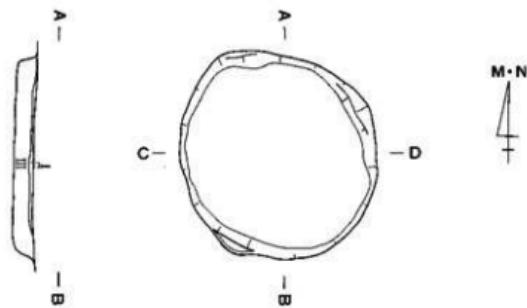


第Ⅰ層 黄色砂質土  
第Ⅱ層 灰黃色砂質土  
第Ⅲ層 灰茶褐色砂質土  
第Ⅳ層 茶褐色粘質土  
第Ⅴ層 黑褐色粘質土  
第Ⅵ層 灰褐色砂質土  
第Ⅶ層 灰茶色砂質土  
第Ⅷ層 黑褐色粘質土  
第Ⅸ層 黄褐色粘質土 (中世ピット)



D L = 7.00 m 0 4m

第173図 ST 1

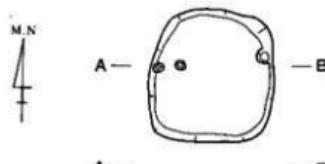


第Ⅰ層 茶褐色砂質土  
第Ⅱ層 黄褐色砂質土  
第Ⅲ層 黑褐色粘質土



S T 2

D L = 7.00 m 0 4m



A — — B

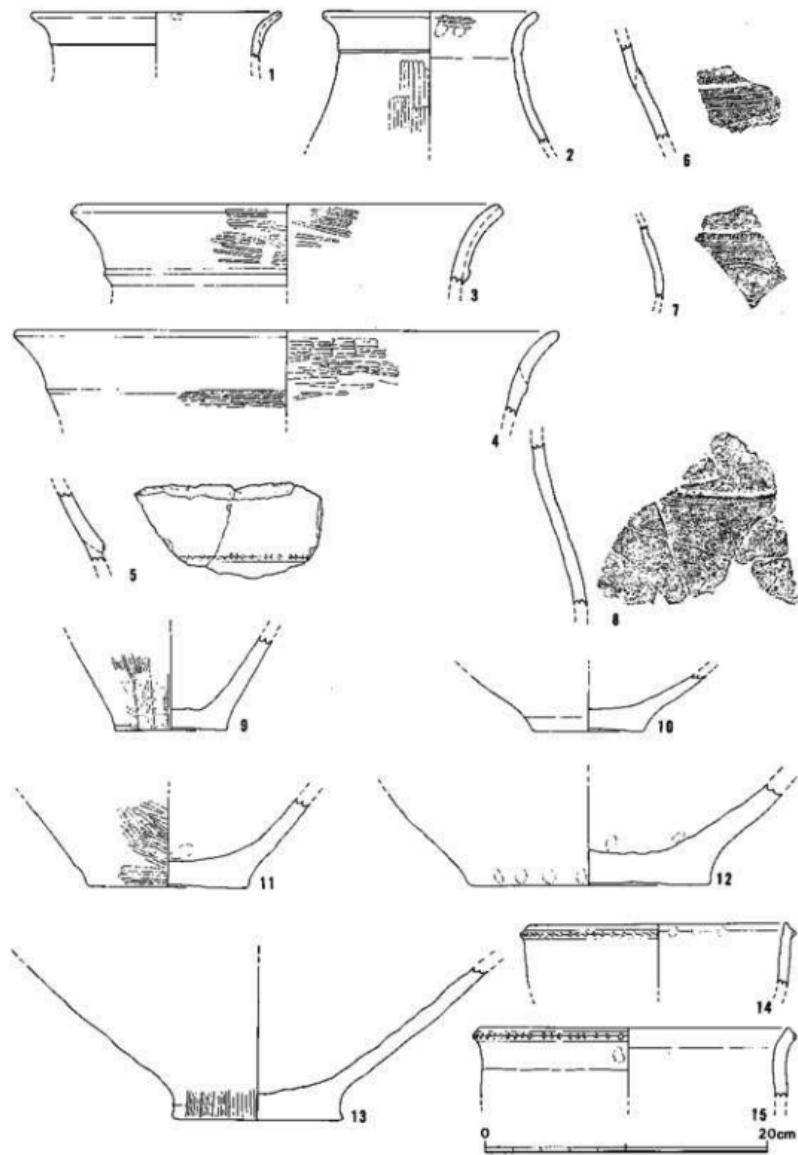


第Ⅰ層 黑褐色粘質土

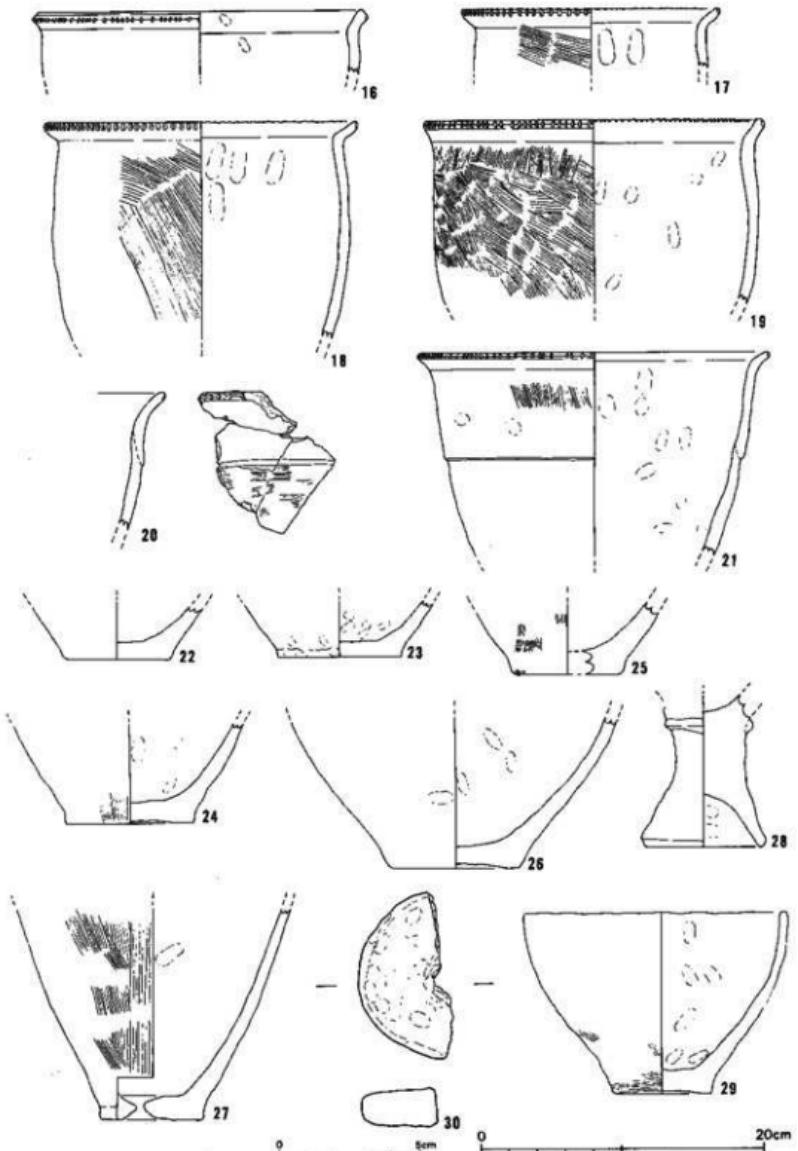
S K 1

D L = 7.00 m 0 4m

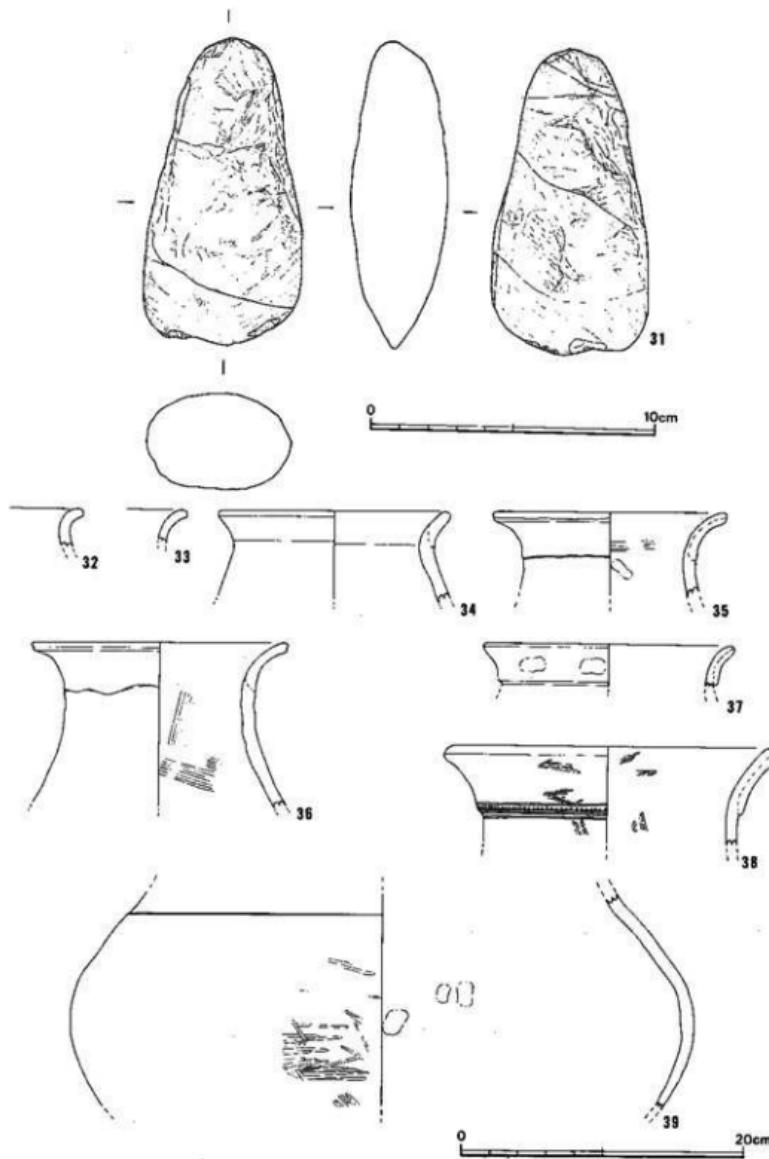
第174図 S T 2、S K 1



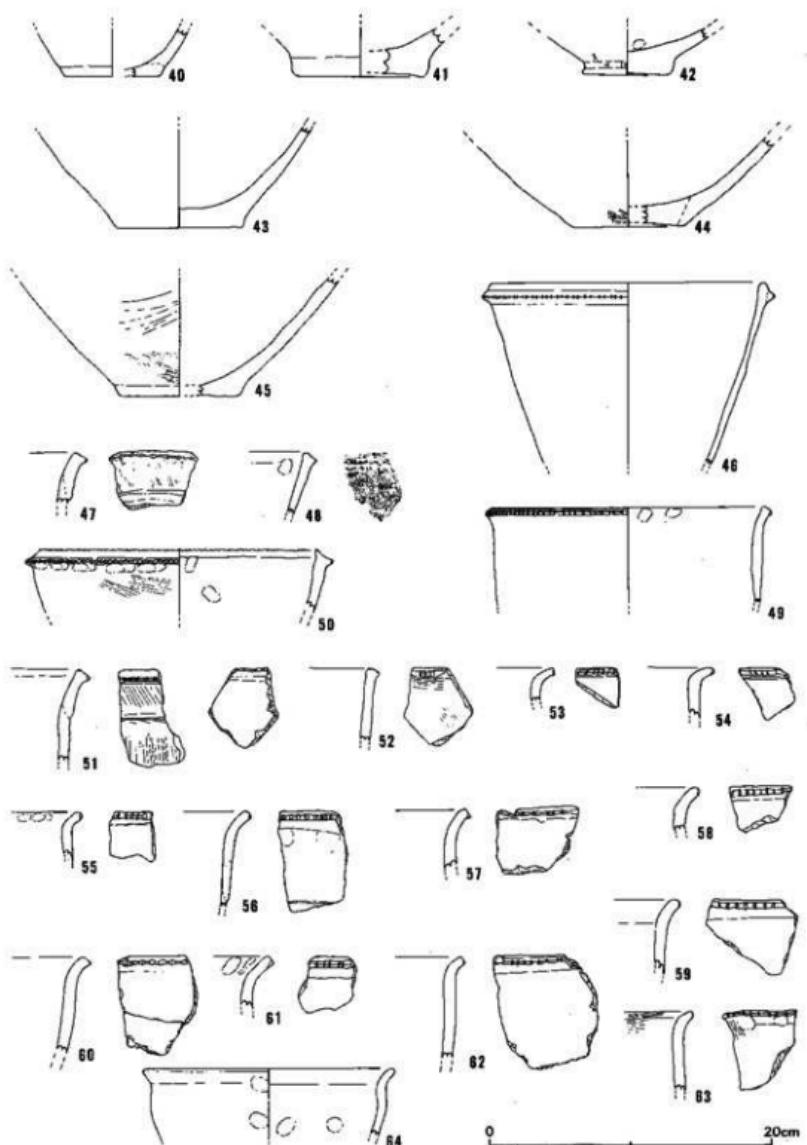
第175図 第III層出土遺物



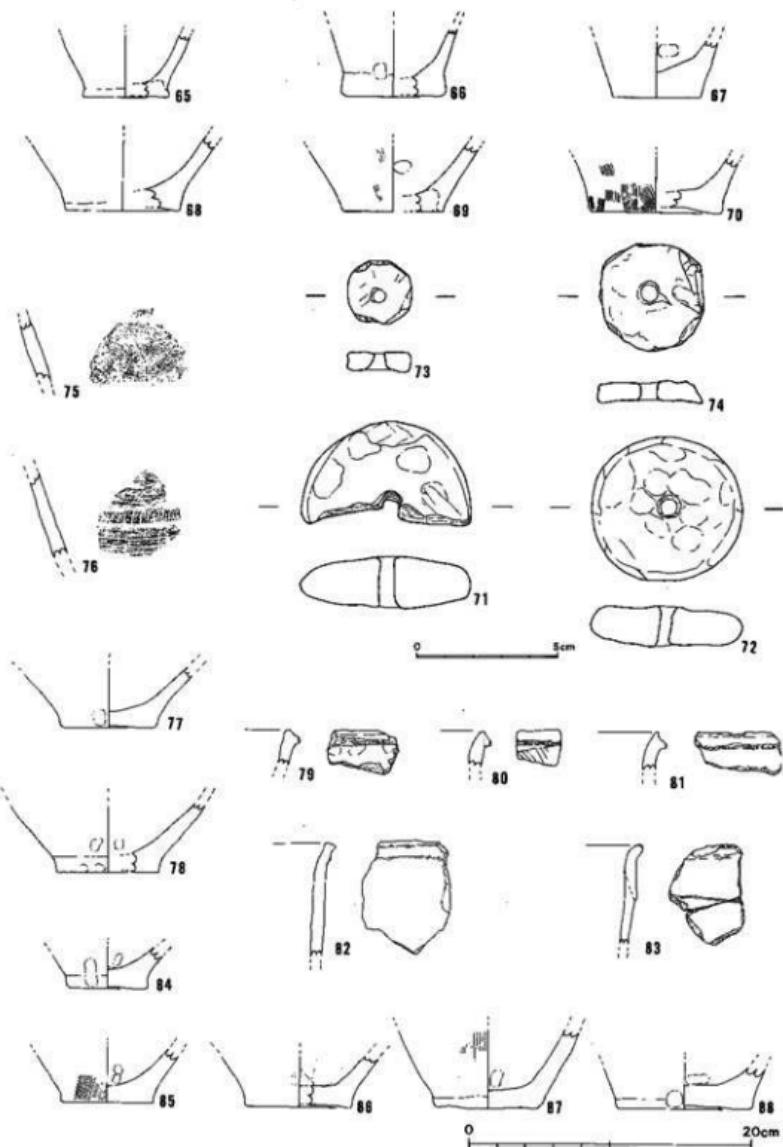
第176図 第III層出土遺物



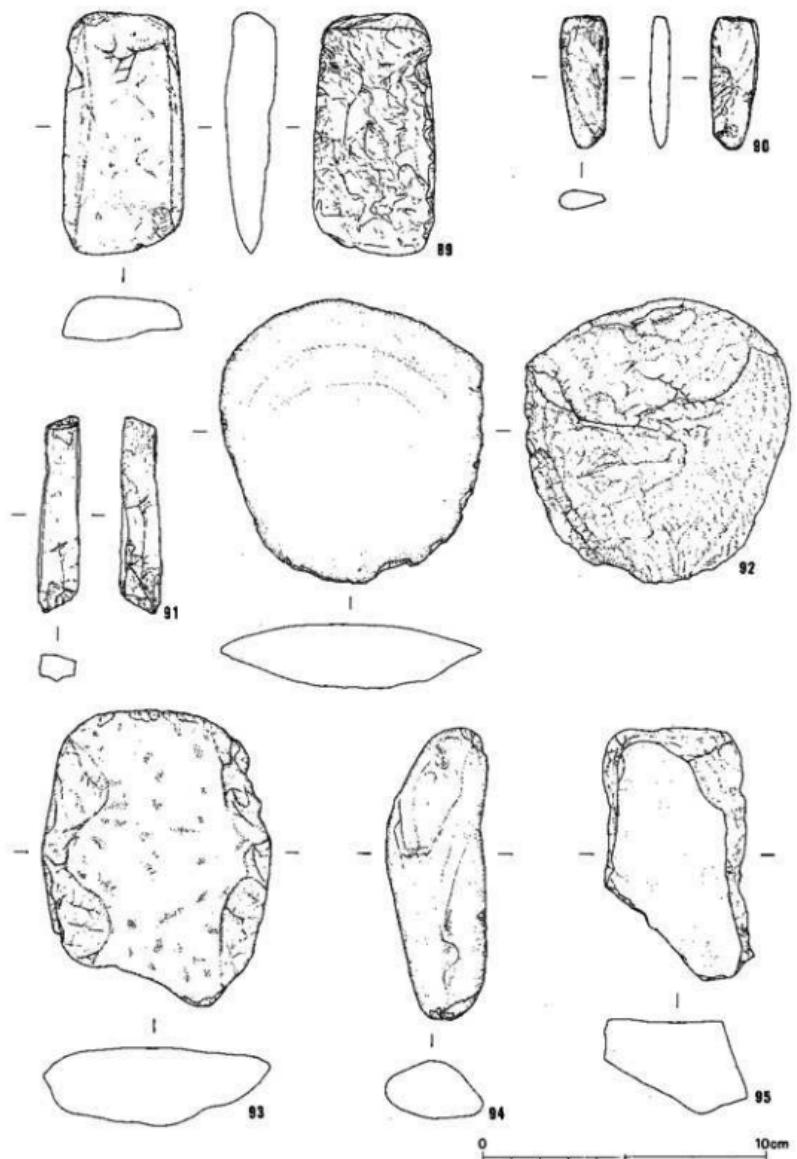
第177図 第III層、ST 1出土遺物



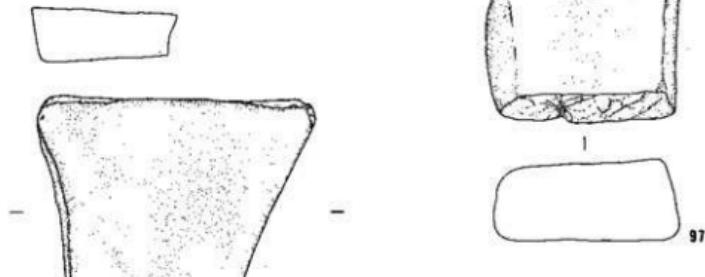
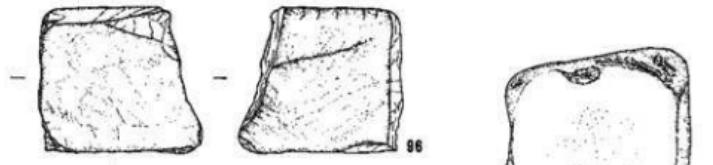
第178図 S T 1出土遺物



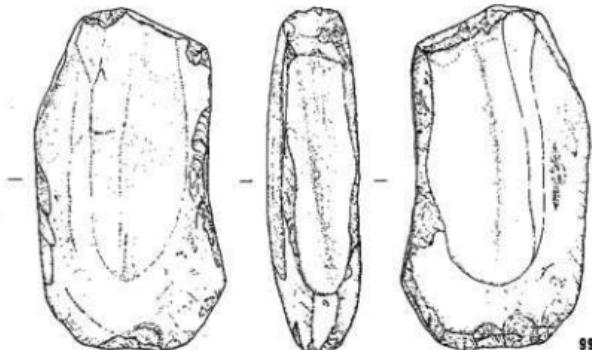
第179図 ST 1・2出土遺物



第180図 ST 1 出土遺物

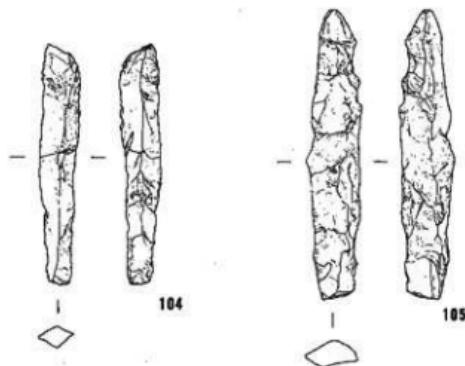
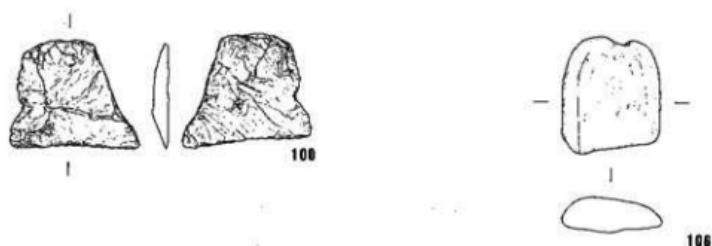
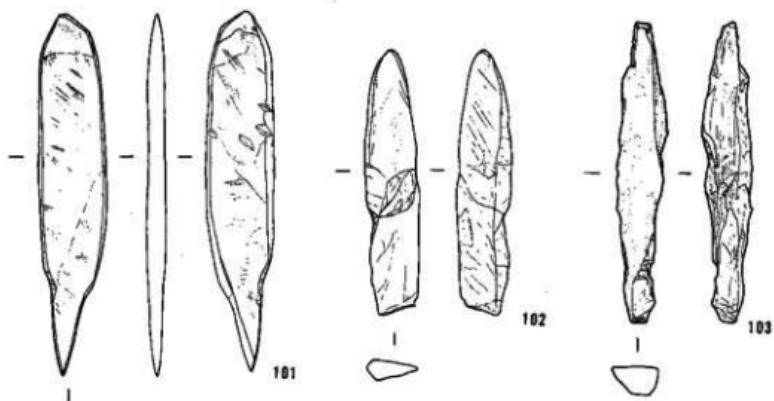


0 10cm



0 20cm

第181図 ST 1・2 出土遺物



第182図 ST1・2出土遺物

## **6. Loc. 12**

## Loc. 12

### 1. 位置と調査経過

Loc.12は、田村遺跡群の中央南部に位置し、小字名を東松木と呼ばれている水田の東北部にあたる調査区である。西には、弥生時代前期前半の集落址が検出されたLoc.16、北には同じく集落の一部であるLoc.17が隣接している。また、南には中世の遺構群が検出されたLoc.13が位置している。

調査は、 $4 \times 4$ mのグリッドによる試堀が行われた。まず、E 4-10-9、E 4-15-14の試堀を行ったところ、弥生前期土器が多量に出土した。この結果、Loc.12を全面発掘することとし、遺物の出土状況を知るために、E 4-20-12・22、E 4-25-4、E 5-6-15・18・21・25、E 5-7-17、E 5-11-13、E 5-16-5・15・21・23・25、E 5-17-7、E 5-22-2の試堀を行った。これらの試堀グリッドの中で、E 4-20-12・22、E 5-11-13、E 5-16-5・15・23・25からは、弥生前期の土器片が多量に出土したので、この範囲をLoc.12の調査区として、昭和55年10月から昭和56年3月までの6か月間、調査を行った。調査面積は1,904m<sup>2</sup>である。

### 2. 調査概要

Loc.12からの出土遺物は、弥生前期前半～前期Ⅰを中心であり、調査区の北西部に集中して出土した。しかしながら、第Ⅶ層黒褐色粘質土層まで掘り下げたが、同時期の遺構は検出されなかった。

また、調査区のほぼ中央部を北東から南西へ延びる近世の溝を境として、東側には、近世の柱穴群、土塙23基、溝状遺構8条が検出され、さらに、古墳時代の隅丸方形を呈する竪穴住居址が1棟検出された。上層部では、弥生土器及び土師器もほとんど出土せず、近世の遺物も非常に少なかった。近世の溝の西側では、弥生時代前期Ⅰの土器片が多量に集中出土しており、第Ⅶ層黄褐色砂質土層上面まで掘り下げたが、遺構は検出されなかった。

本編では、包含層出土の弥生時代前期Ⅰの遺物について述べ、次に古墳時代の竪穴住居址について触れることとする。中～近世の遺構、遺物については、中～近世編の分冊において詳述する。

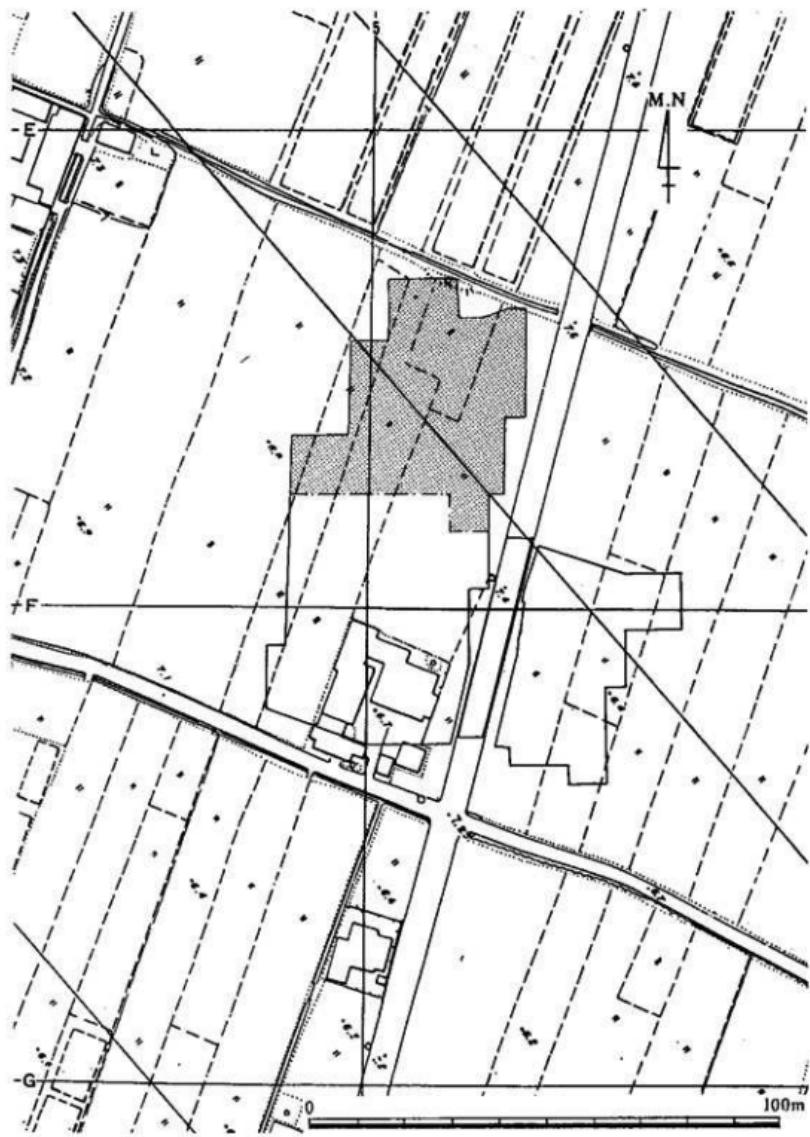
### 3. 層序と出土遺物

本調査区における基本的な層序は次の通りである。

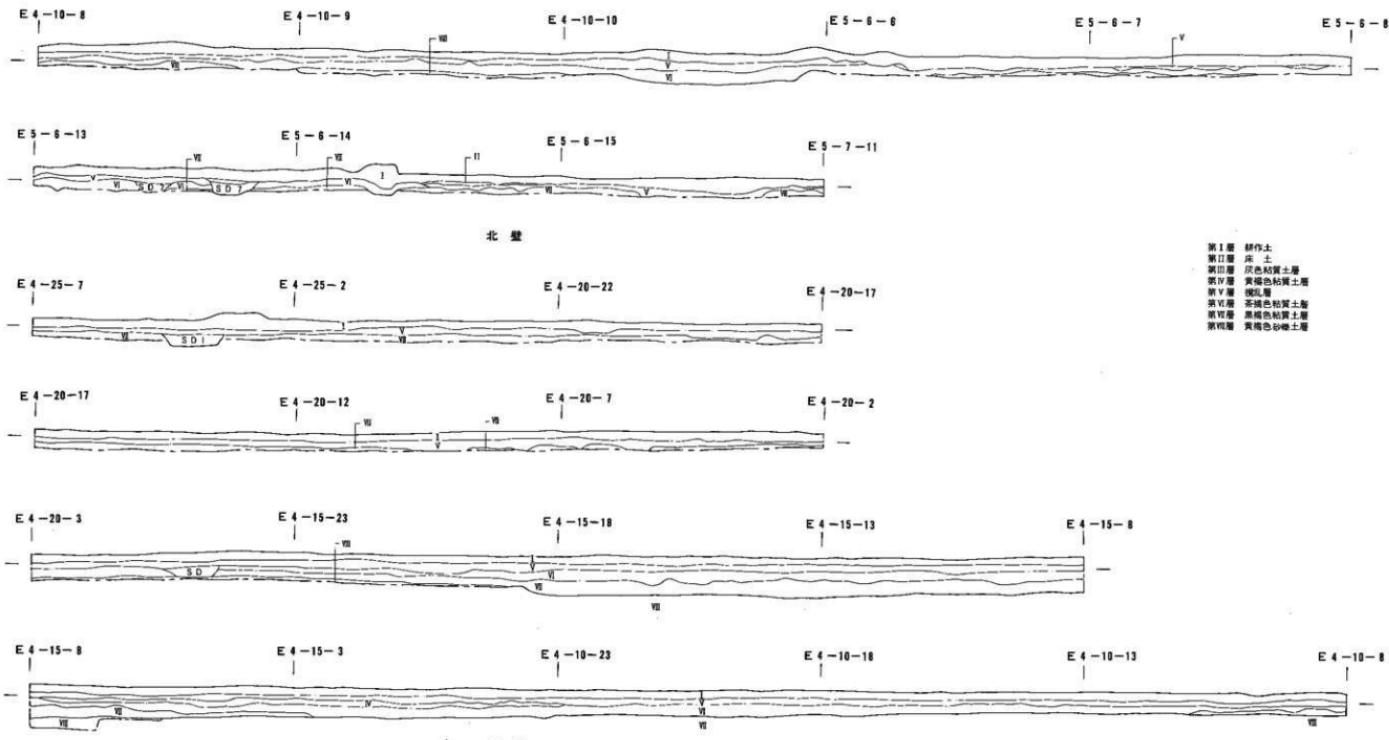
第Ⅰ層 耕作土

第Ⅱ層 床土

第Ⅲ層 灰色粘質土層



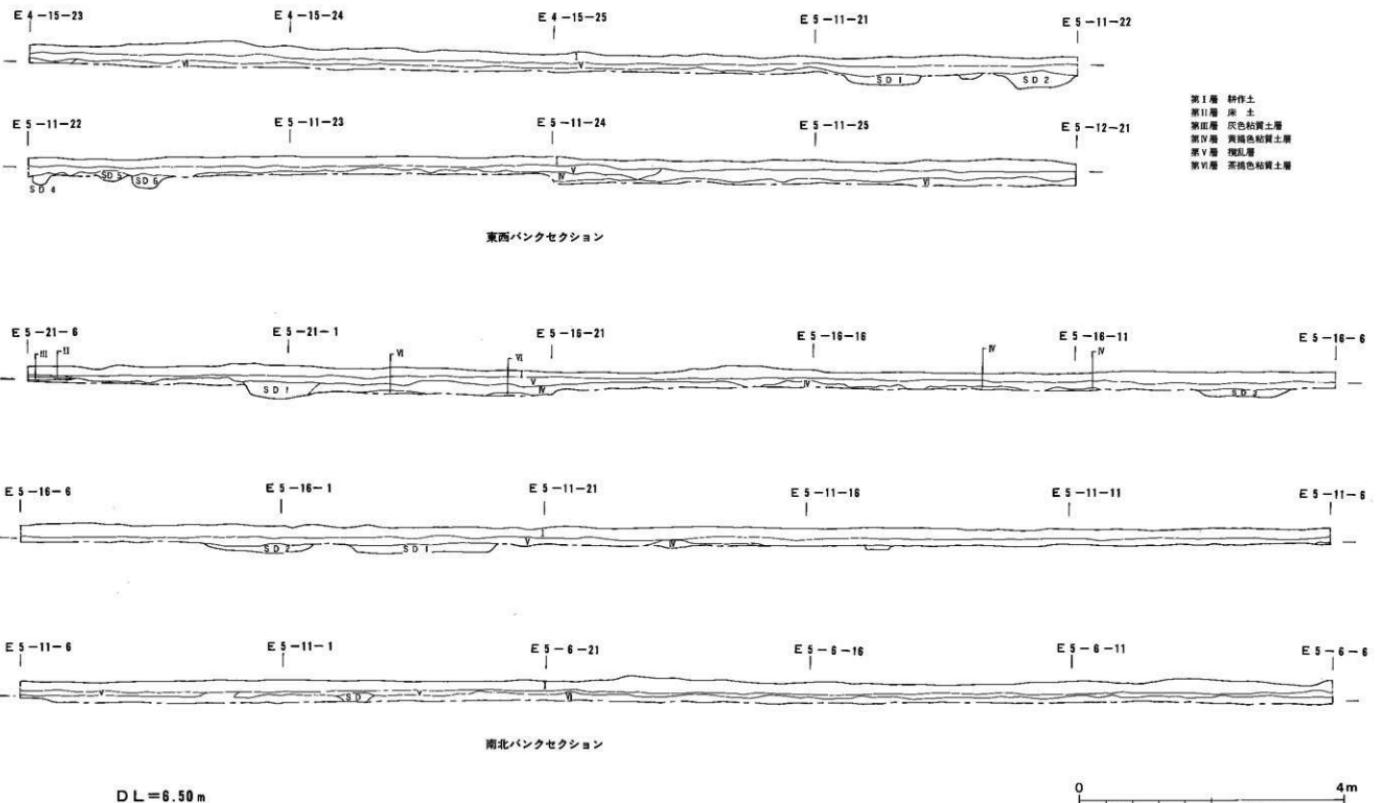
第183図 調査区設定図



D L = 6.50 m

0 4m

第184図 調査区セクション



第185図 調査区セクション

第IV層	黄褐色粘質土層
第V層	搅乱層
第VI層	茶褐色粘質土層
第VII層	黒褐色粘質土層
第VIII層	黄褐色粘質土層

近世の遺構が検出された層は、第IV層上面であり、遺構の埋土は、第III層の灰色粘質土層である。古墳時代の竪穴住居址は、近世の遺構が検出された面と同一面で検出されたが、埋土は暗灰褐色粘質土と灰黃褐色粘質土である。なお、弥生時代の遺構は検出されなかった。

第II層は、第I層耕作土に伴う床土であり、東端及び南端部に若干認められる。第III層は、中～近世の遺物包含層であり、南端部に一部認められるのみである。第IV層は、近世の溝を境として、東側にのみ存在する層であり、上面から近世の遺構を検出することができた。第V層は、灰色と黄褐色粘質土の混在する搅乱層であり、近世の遺物が若干出土した。第VI層は、弥生時代前期前半の遺物包含層である。北西部のレベルは、南東部に比べ高いので、第VI層は北部で厚く、南へ向かうに従い徐々に薄くなり、南端部ではみられなくなる。また、東へ向かっても薄くなり、やはり東端部ではみられない。第VII層も弥生時代前期前半の遺物包含層であり、北端部で帯状に出現し、中央部では厚くなっている。第VIII層に比べ、遺物の出土量は少ない。第VIII層は、基盤の層であり、無遺物層である。下部には、自然の河原石が多くみられた。

以上のことから、弥生時代には、南から北へやや傾斜をなし、近世以降には平坦になったものと考えられる。

遺物は、第VI・VII層中から、弥生時代前期Iの土器片が多量に出土しており、量的には少量ではあるが前期II及び前期IIIの土器片も出土している。形態で土器を大別すると、口頸間に段を有する壺（1～42、63、65）、口頸間に鉢による沈線を有する壺（43～45）、口頸間に段を有さない壺（46～62）、壺底部（68～114）、口縁部外面に一条の刻目突帯を有する甕（115～126、128～161）、如意形口縁の甕（127、162～269、273、277、354）、甕底部（278～353）、高杯（355～357）、鉢（66、67、358～360、362～384）、蓋（385～389）がみられる。甕の中で（341、349、354）の3点は、底部に穿孔がみられ、甕である。また、土製品としては、紡錘車（390、391）、石器としては、石包丁（392）、石鎌（393、394）、刃器（395～397）が出土している。

#### 4. 遺構と遺物

##### 竪穴住居址

##### S T 1

S T 1は、調査区の中央部東端に位置する。規模は、4.00×4.20mを測り、平面形は隅丸方形である。壁高は約0.30mを測るが、出入口と考えられる西壁は0.15mと低く、東へ向かうに從

い、徐々に高くなり、最高部は0.35mを測る。壁は垂直に近く立ち上がる。ST 1の堀り込み面は第IV層上面であり、埋土は3層に分層される。第I層は暗灰黄褐色粘質土、第II層は灰黃茶褐色粘質土(ブロック状の茶褐色粘質土を含む)、第III層は茶褐色粘質土(黒褐色粘質土と灰黃褐色粘質土をブロック状に含む)。床面は、黒褐色粘質土であり、ほぼ平坦である。

柱穴は、4個検出されており、各々四隅のコーナーから約1m内側に位置している。規模は、直径30cm前後、深さ45~55cmを測り、平面形は、円形または橢円形を呈している。埋土は、黄褐色粘質土であり、黄色が強いが、下部は灰色を帯び、粘性も強くなる。また、炉址と考えられる焼土が中央部にみられる。焼土の範囲は、35×50cmの橢円形であり、厚さは2~4cmと非常に薄い。

焼土を中心として、4個の柱穴に囲まれた範囲の中では、床面上とやや上面から、多量の土器片と炭化材が面をなし検出された。炭化材は、10×20cmほどの小片がほとんどであったが、最大のものは20×90cmの板状であり、土器片の上に被さるような状況で出土した。

出土遺物は、全面に叩目のみられる壺(398~401、404、405)、二重口縁をもつ壺(402、403)、全面に叩目のみられる甕(406~435)、小型の鉢(436~443)、球形の紡錘車(444)がみられ、投げ込まれた状態で検出された。

遺構検出面より上部では、土師器はまったくみられず、これは後世の削平によるためと考えられる。

## 5.まとめ

Loc.12において検出されたのは、弥生時代前期前半の包含層と古墳時代の竪穴住居址1棟である。包含層からは、E 4-10-1・2、E 4-15-1を中心として前期Iの土器が集中的に出土した。遺構を伴わないことから、一括して集中廃棄されたものと考えられる。また、これらの土器は、後述するように前期Iの段階でも古い様相を示すものであり、これらの点から、Loc.16・17・25を中心とする前期Iの集落の展開を考える上で、極めて貴重深い資料である。

古式土師器の段階の住居址は、田村遺跡群では唯一の存在であり、包含層さえもみられない。住居址の中央部からの一括出土土器は、甕が圧倒的に多く、かつ煤の付着などの使用した痕跡もほとんど認められない点は、出土状況とともに注目される。この時期に1棟単独で検出された事実と、遺物の出土状態、遺物の内容について、どのような関係にあるのか、田村遺跡群を考える上で今後の重要な課題である。

第49表 竪穴住居址計測表

辨認番号	遺構番号	平面形	規模(m)	主軸方向	柱穴	面積(m <sup>2</sup> )	施設	備考
第186号	ST 1	隅丸方形	4×4.2	N-19°-E	4	16.8		

第50表 包含層出土土器觀察表

辨認番号	層位	器種	法 量 (cm)	口 径 最 高 部 底 部	形 態 ・ 文 様	手 法	備 考
1	施瓦・Ⅳ層	壺	14.3 ( 2.5 ) —	口縁間に段部を有す。口縁部は一旦は直線的に立ち上がり、途中で強く外方に屈曲する。	外面、横方向のヘラ磨き。 内外面とも指輪圧痕あり。 段部は粘土帶接合の際に生じたもの。		
2	#	#	19.0 ( 3.6 ) —	口縁間に段部を有し、口縁部はゆるやかに外反する。口唇部は面をなす。	外面、横方向のヘラ磨き。 内面、指輪圧痕あり。		
3	#	#	20.0 ( 6.4 ) —	口縁間に段部を有し、口縁部は一旦直線的に立ち上った後に強く外方に屈曲する。	内面、口縁部は横方向のヘラ磨き。 頭部は縱方向のヘラ磨き。		
4	#	#	21.4 ( 2.5 ) —	#	外面、横方向のナデ調整。		
5	#	#	13.2 ( 7.3 ) —	口縁間に段部を有し、口縁部は一旦直線的に立ち上った後にゆるやかに外反する。口唇部は丸くおさめる。	内外面ともヘラ磨き。 段部は、粘土帶接合の際に生じたもの。		
6	#	#	21.4 ( 7.3 ) —	口縁間にしっかりと段部を有し、口縁部は一旦直線的に立ち上った後、ゆるやかに外反する。 口唇部は丸くおさめる。	内外面とも横方向のヘラ磨き。 段部は、粘土帶接合の際に生じたもの。		
7	#	#	25.0 ( 4.5 ) —	口縁間にあり強くない段部を有す。口縁部は直線的に伸び、端部近くで外反度を強める。口唇部は丸くおさめる。	内外面とも横方向のヘラ磨き。		
8	#	#	29.6 ( 4.7 ) —	口縁間に段部を有し、口縁部は直線的に伸び、端部近くで外反度を強める。	#		
9	#	#	16.4 ( 2.7 ) —	口縁間に段部を有し、段部上に斜目を施す。 口唇部は丸くおさめる。	外面、ヘラ磨き。		
10	#	#	17.2 ( 3.0 ) —	口縁間に段部を有し、口縁部はゆるやかに外反する。 段部上に斜目を施す。 1条の沈線を配す。	内面、ヘラ磨き。		
11	#	#	14.6 ( 11.6 ) 25.0 —	口縁間にしっかりと段部を有し、段部上に斜目を施す。 肩部に2条の沈線、その間に斜目を配す。 肩部から頭部にかけて整子文を配す。	内面、指輪圧痕あり。 外面、ヘラ磨き。 段部は粘土帶接合の際に生じたもの。		
12	#	#	22.4 ( 4.8 ) —	口縁間にしっかりと段部を有し、口縁部はゆるやかに外反する。 口唇部は丸くおさめる。	内面、ヘラ磨き。 口縁部外面、横方向のナデ調整。 段部は粘土帶接合の際に生じたもの。		
13	#	#	24.1 ( 4.5 ) —	口縁間にしっかりと段部を有し、口縁部はほぼ直線に近い感じで、ゆるやかに外反する。	内面、横方向のヘラ磨き。		
14	#	#	26.0 ( 3.5 ) —	口縁間に段部を有し、口縁部はゆるやかに外反する。 口唇部は丸くおさめず、ヘラによる沈線が入る。	内面、横方向のヘラ磨き。 外面、指輪圧痕残る。		
15	#	#	27.2 ( 3.6 ) —	口縁間にしっかりと段部を有し、口縁部が段部から直線的に立ち上った後、大きく外方に屈曲している。	内外面とも指輪圧痕残る。		

探査番号	層位	器種	口径 最高 最低 底径 (cm)	形態・文様	手法	備考
16	第Ⅱ・竪層	壺	28.0 ( 4.0) —	口縁間にしっかりした段部を有し、口縁部はゆるやかに外反する。口唇部は丸くおさめる。	内外面ともヘラ磨き。 段部は粘土帯を口縁部外面に貼付した際に生じたもの。	
17	〃	〃	27.4 ( 8.4) —	口縁間にしっかりした段部を有す。口唇部は丸くおさめ、ヘラによる沈線が入る。	内面、目の粗いハケによる横方向のナラ調整の後、ヘラ磨き。 外面、縱方向のハケ調整の後、横方向のヘラ磨き。	
18	〃	〃	27.6 ( 3.6) —	口縁間に段部を有し、口縁部はゆるやかに外反する。口唇部は平らな面をなす。	内面、目の粗いハケによる横方向のナラ調整。 外面、縱方向のハケ調整。	
19	〃	〃	28.8 ( 4.4) —	口縁間にしっかりした段部を有し、口縁部はゆるやかに外反する。		
20	〃	〃	19.0 ( 8.1) —	口縁間に深い段部を有し、口縁部はなめらかに外反する。口唇部は丸くおさめる。	内外面とも指頭圧痕あり。 外面、ヘラ磨き。 段部は粘土帯接合の際生じたもの。	
21	〃	〃	31.5 ( 7.0) —	口縁間に段部を有し、口縁部はゆるやかに外反する。口唇部は外傾する面をなす。		
22	〃	〃	25.0 ( 3.4) —	口縁間にしっかりした段部を有し、口縁部はゆるやかに外反する。口唇部はほぼ面をなし、ヘラによる沈線が入る。	内外面とも横方向のヘラ磨き。 外面、指頭圧痕あり。 段部は粘土帯接合の際生じたもの。	
23	〃	〃	31.8 ( 5.9) —	口縁間に弱い段部を有し、口縁部はなめらかに外反する。口唇部は平らな面を形成する。	内面、横方向のハケ調整の後ヘラ磨き。 外面、ヘラ磨き。	
24	〃	〃	23.6 ( 3.5) —	口縁間に段部を有す。口縁部はなめらかに外反する。口唇部は丸くおさめる。	内外面ともヘラ磨き。	
25	〃	〃	32.4 ( 4.5) —	口縁間にしっかりした段部を有す。口縁部はゆるやかに外反し、口唇部は丸くおさめる。	内外面ともヘラ磨き。 段部は粘土帯接合の際に生じたもの。	
26	〃	〃	20.8 ( 2.7) —	口縁間に段部を有し、口縁部は直線的に立ち上がる。口唇部は外傾する面をなす。	内外面とも横方向に丁寧なヘラ磨き。	
27	〃	〃	30.6 ( 3.9) —	口縁間にしっかりした段部を有し、口縁部はゆるやかに外反する。口唇部は外傾する面をなす。	内外面ともヘラ磨き。	
28	〃	〃	19.6 ( 5.0) —	口縁間に弱い段部を有す。口縁部はゆるやかに外反する。口唇部は丸くおさめる。	"	
29	〃	〃	35.0 ( 4.1) —	口縁間に弱い段部を有し、口縁部はゆるやかに外反す。口唇部は面をなす。	内外面とも横方向のヘラ磨き。	
30	〃	〃	15.0 ( 3.4) —	口縁間に段部を有す。口縁部はゆるやかに外反す。口唇部は面をなす。	内外面とも丁寧なヘラ磨き。 段部は粘土帯を口縁部外面に貼付した際に生じたもの。	

辨認番号	層位	器種	法量 最高 最低 (cm) 直徑 横徑 直徑	形態・文様	手法	備考
31	第百・百層	壺	35.6 ( 4.4 ) — —	口部間に段部を有し、口縁部はゆるやかに外反する。口唇部は丸くおさめる。	外面、ハケ調整の後ヘラ磨き。	
32	#	#	16.6 ( 2.6 ) — —	#	内外面ともヘラ磨き。	
33	#	#	35.0 ( 5.3 ) — —	口部間に段部を有し、口縁部はゆるやかに外反する。口唇部は平らな面をなす。		
34	#	#	16.2 ( 4.8 ) — —	口部間に弱い段部を有し、口縁部はゆるやかに外反する。口唇部は丸くおさめる。	内外面ともヘラ磨き。	
35	#	#	37.2 ( 3.5 ) — —	口部間にしっかりした段部を有し、口縁部はなめらかに外反する。口唇部は丸くおさめる。	外面と内側方向のヘラ磨き。 口唇部にも内側方向のヘラ磨き。 段部は粘土帶接合の際に生じたもの。	
36	#	#	15.8 ( 3.5 ) — —	口部間にしっかりした段部を有し、口縁部はゆるやかに外反する。口唇部は丸くおさめる。		
37	#	#	36.0 ( 5.8 ) — —	口部間に弱い段部を有し、口縁部はなめらかに外反する。口唇部は面をなす。		
38	#	#	15.6 ( 2.6 ) — —	口部間に段部を有し、口縁部はゆるやかに外反する。口唇部は丸くおさめる。	内外面ともヘラ磨き。	
39	#	#	24.0 ( 4.3 ) — —	口部間に段部を有し、口縁部は比較的直線に立ち上がる。口唇部は外傾する面をなす。	内外面とも丁寧なヘラ磨き。	
40	#	#	22.0 ( 3.6 ) — —	口部間にしっかりした段部を有し、口縁部は直線的に立ち上がる。口唇部は外傾する面をなす。	内外面とも直線方向の丁寧なヘラ磨き。 段部は粘土帶接合の際に生じたもの。	
41	#	#	20.8 ( 5.4 ) — —	口部間に段部を有し、口縁部は直線的に立ち上がる。口唇部は外傾する面をなす。	内外面とも直線方向の丁寧なヘラ磨き。 段部は粘土帶を口縁部外側に貼付した際に生じたもの。	
42	#	#	14.8 ( 5.5 ) — —	口部間に弱い段部を有し、口縁部はなめらかに外反する。	段部より下に横方向のハケ調整。	
43	#	#	19.0 ( 3.9 ) — —	口部間に弱い段部を有し、段部の下にヘラによる2条の沈線が入る。	口縁部に指觸印痕あり。	
44	#	#	9.4 ( 5.3 ) — —	底部に2条の沈線が入る。口縁部はゆるやかに外反し、口唇部は丸くおさめる。	外面、ヘラ磨き。	
45	#	#	12.8 ( 5.2 ) — —	口部間に3条のヘラ相撲模様が入る。口縁部は直線的に立ち上がり、口唇部は丸くおさめる。	底部外面、直線方向のヘラ磨き。 内曲、横方向のヘラ磨き。	

検査番号	場所	静 機	法量 (cm) 口縁部 脣側 底辺	形態・文様	手 法	備 考
46	唇部・脣唇	直	15.6 ( 3.5) — —	口縁部はゆるやかに外反する。 口唇部はわずかに丸みを帯びた面 をなす。	内面、ヘラ磨き。	
47	#	#	13.9 ( 2.8) — —	口縁部はゆるやかに外反し、口 唇部は丸くおさめる。	内外面ともヘラ磨き。	
48	#	#	16.8 ( 3.5) — —	#		
49	#	#	12.4 ( 6.0) — —	口縁部はゆるいカーブをもって、 ほぼ直線上に立ち上がる。口唇部は 丸くおさめる。		
50	#	#	16.0 ( 5.2) — —	口縁部はゆるやかに外反する。 口唇部は丸くおさめる。	口縁部 内外側とも横方向のヘラ 磨き。外面、縱方向のヘラ磨き。	
51	#	#	21.0 ( 4.0) — —	口縁部はゆるやかに外反する。 口唇部は外傾する面をなす。		
52	#	#	17.6 ( 8.1) — —	口縁部はなめらかに外反する。 口唇部はわずかに丸みを帯びた面 をなす。	顎部外面、丁寧な縱方向のヘラ磨 き。	
53	#	#	21.4 ( 7.4) — —	口縁部はなめらかに外反する。 口唇部は外傾する面をなし。前面 三角形状の工具による刻目を配す。	内面、横方向のハケ調整、指屈圧 痕あり。 外面、縱方向のハケ調整の後、横 方向のナブ調整。	
54	#	#	18.4 ( 6.4) — —	口縁部はほぼ直线上に、ゆるいカ ーブで立ちあがる。口唇部は丸く おさめる。	内外面ともヘラ磨き。	
55	#	#	26.0 ( 7.3) — —	口縁部と頬部の接合部が、やや肥 厚する。口唇部外傾する面をなす。	内面、横方向のヘラ磨き。	
56	#	#	20.0 ( 9.8) — —	口縁部はゆるやかに外反する。 口唇部は丸くおさめる。	内面、ヘラ磨き。	
57	#	#	27.8 ( 3.4) — —	口縁部は直線的に立ちあがる。口 唇部は外傾する面をなす。	内外面とも指屈圧痕あり。 (口縁部外面)にハケ調整。	
58	#	#	27.0 ( 4.1) — —	口縁部はゆるやかに外反する。 口唇部は丸くおさめる。	外面、指屈圧痕あり。	
59	#	#	35.8 ( 4.4) — —	口縁部は直線的に立ちあがる。口 唇部は外傾する面をなす。		
60	#	#	15.6 ( 6.0) — —	口縁部は直線的に立ちあがる。口 唇部は丸くおさめる。		

神経番号	層位	器種	口径 基部 法量 (cm) 前位 直位	形態・大様	手法	備考
61	第VI・VII層	茎	26.0 ( 5.0 ) —	口縫部は直線的に立ち上がる。口唇部は丸くおさめる。	外面、ヘラ磨き。	
62	#	#	26.4 ( 5.5 ) —	口縫部はなめらかに外反する。 口唇部は外傾する面をなす。	外面、横方向のヘラ磨き。	
63	#	#	22.8 ( 9.6 ) —	口脣間に段部を有し、口縫部はゆるやかに外反する。口唇部は丸くおさめる。		
64	#	#	12.0 ( 6.8 ) —	口脣間に弱い段部を有し、口縫部はゆるく外反する。口唇部は丸くおさめる。		
65	#	#	10.9 ( 3.8 ) —	口脣間に弱い段部を有し、口縫部はゆるやかに外反する。口唇部は丸くおさめる。		
66	#	#	29.0 ( 3.3 ) —	口縫部は比較的直線に立ち上がる。 口唇部は外傾する面をなし、内面口縫部付近に1条の沈線が入る。	内外面とも指頭圧痕あり。 内外面ともヘラ磨き。	
67	#	#	32.0 ( 2.3 ) —	口唇部は丸くおさめ、内面口縫部付近に2条の沈線が入る。	外面、指頭圧痕あり。	
68	#	#	( 1.9 ) — 5.0	上げ底気味を呈す。	外面、ヘラ磨き。	
69	#	#	( 1.6 ) — 4.6	平底を呈し、下脣部に2条のヘラ指沈線が入る。	#	
70	#	#	( 11.0 ) 12.0 5.0	平底を呈し、肩部に段部を有す。	内面、指頭圧痕あり。	
71	#	#	( 2.5 ) — 11.5	平底を呈す。一旦、1cm程度上に立ち上がり、ぐっと外反する。	下脣部外面、指頭圧痕あり。	
72	#	#	( 4.8 ) — 11.0	平底を呈す。	内外面とも指頭圧痕あり。	
73	#	#	( 4.7 ) — 10.9	平底を呈す。一旦、ゆるやかに立ち上がり1.5cmのところからぐっと外反する。	外面、横方向のヘラ磨き。 内面、ナブ調整。	
74	#	#	( 3.6 ) — 16.0	平底を呈す。	外面、指頭圧痕あり。	
75	#	#	( 4.0 ) — 13.8	#	外面、縦方向のハケ調整。	

井戸番号	層位	鉱種	口径 法量 (cm) 深さ 底径 底径 (cm)	形態・文様	手法	備考
76	第VI-VII層	磁	— ( 5.6 ) — 10.8	平底を呈す。		透鏡が強い。
77	#	#	— ( 2.4 ) — 8.8	平底を呈し、下側部端部に粘土の盛り上がりがみられる。	外面、縦方向のハケ調整。	
78	#	#	— ( 3.1 ) — 9.6	平底を呈す。	外面、ななめ方向のヘラ磨き。	底面にモミ痕。
79	#	#	— ( 10.2 ) — 3.5	上げ底気味。	外面、指透圧痕あり。 外面、縦方向のハケ調整。	
80	#	#	— ( 3.5 ) — 10.4	平底を呈す。	外面、丁寧な縦方向のハケ調整。	
81	#	#	— ( 2.7 ) — 6.8	上げ底を呈す。		
82	#	#	— ( 3.4 ) — 8.0	上げ底気味を呈す。	外面、板状原体による圧痕がみられる。	
83	#	#	— ( 4.0 ) — 6.2	平底を呈す。		
84	#	#	— ( 3.0 ) — 8.0	"	外面、下側部端部に指透圧痕あり。 外面、縦方向のハケ調整。	
85	#	#	— ( 3.3 ) — 8.2	"	内面、指透圧痕あり。 外面、縦方向のハケ調査。	
86	#	#	— ( 3.7 ) — 7.4	"	内面、指透圧痕あり。	
87	#	#	— ( 4.9 ) — 8.0	平底を呈す。 まっすぐに立ちあがり、1.5cmのところで外反する。		
88	#	#	— ( 3.4 ) — 8.4	平底を呈す。		
89	#	#	— ( 3.6 ) — 6.4	"	外面、ななめ方向のヘラ磨き。	
90	#	#	— ( 5.0 ) — 8.2	"	内面、指透圧痕あり。	

検査番号	層位	器種	法量 (cm)	口径 器高 羽径 直徑	形態・文様	手法	備考
91	第百・竪層	盃	— ( 5.3 ) — 6.0	上げ底気味の先を少し、縦面に立ち上がり、1cmのところで強く外反する。	外面、縦方向のハケ調整。		
92	#	#	— ( 6.6 ) — 6.2	平底を呈す。	内外面とも指頭圧痕あり。 外面、ハケの木口による圧痕あり。		
93	#	#	— ( 4.0 ) — 9.0	#	内面、指頭圧痕あり。		
94	#	#	— ( 3.8 ) — 7.4	わずかに上げ底状を呈す。	外面、縦方向のハケ調整の後、横方向の丁寧なへラ巻きを施す。 内面、指頭圧痕あり。		
95	#	#	— ( 6.0 ) — 7.2	平底を呈す。	内面、ナナ調整。		
96	#	#	— ( 4.9 ) — 8.8	わずかに上げ底状を呈す。			
97	#	#	— ( 4.0 ) — 8.8	上げ底を呈す。	外面、指頭圧痕あり。		
98	#	#	— ( 4.5 ) — 8.6	平底を呈し、一旦、わずかに内面に入り、1cmのところで強く外反する。	内面、指頭圧痕あり。		
99	#	#	— ( 4.4 ) — 7.0	わずかに上げ底状を呈す	内面、指頭圧痕あり。 外面、底端部に粒土の盛り上がりが見られる。		
100	#	#	— ( 3.8 ) — 7.0	#			
101	#	#	— ( 2.6 ) — 8.8	上げ底を呈す。			
102	#	#	— ( 3.2 ) — 10.0	#			
103	#	#	— ( 5.1 ) — 7.6	平底を呈す。	内面、指頭圧痕あり。 外曲、へラ巻き。		
104	#	#	— ( 5.4 ) — 7.4	#	外面、縦方向のハケ調整。		
105	#	#	— ( 5.2 ) — 7.8	上げ底を呈す。			

押出番号	層 位	器 種	法 量 (cm)	口 径 高 度 厚 度 (cm)	形 態 ・ 文 様	手 法	備 考
106	第Ⅱ・Ⅲ層	透	—	( 6.1) 8.8	平底を呈す。		
107	#	#	—	( 5.6) — 12.4	#		底面に2枚の モニ板あり。
108	#	#	—	( 5.0) — 6.4	上げ底を呈す。 — —	内外面とも指頭圧痕あり。 外面、縦方向のハケ調整。	
109	#	#	—	( 7.5) — 10.0	#		
110	#	#	—	( 4.0) — 13.0	平底を呈す。		
111	#	#	—	( 2.8) — 11.8	#		
112	#	#	—	( 3.5) — 11.8	#	外面、指頭圧痕あり。	
113	#	#	—	( 9.3) — 8.2	上げ底を呈す。	外面、縦方向のハケ調整。 内外面とも指頭圧痕あり。	
114	#	#	—	( 7.0) — 7.4	平底を呈す。	内外面とも指頭圧痕あり。	
115	#	康	—	20.4 ( 3.5) —	口縫部外面に1条の割目突唇を有し、口唇部は丸くおさめる。	内外面とも指頭圧痕あり。	
116	#	#	—	20.8 ( 3.7) —	口縫部外面に1条の割目突唇を有し、口唇部は丸くおさめる。 突唇下に压痕が残る。	外面、わずかに縦方向のハケ調整。 口縫部内外面とも横方向の強い ナゲ調整。	
117	#	#	—	23.0 ( 3.2) —	内面気泡に立ち上がり、口縫部外 面に1条の割目突唇を有す。 口唇部は丸くおさめる。	内外面とも指頭圧痕あり。	
118	#	#	—	12.8 ( 5.8) —	口縫部外面に1条の割目突唇を有 し、割目は断面三角形状の工具によ る。	内外面とも指頭圧痕あり。 外面、目の短い縦方向のハケ調整。	
119	#	#	—	23.8 ( 5.6) —	口縫部外面に1条の割目突唇を有 し、口唇部は丸くおさめる。	内外面とも指頭圧痕あり。 外面、縦方向のハケ調整。	
120	#	#	—	19.2 ( 6.0) —	口縫部は平坦面をなし、外方に つまみ出す。つまみ出した部分に割目を配す。	内外面とも指頭圧痕あり。	

持因番号	層位	器種	法量 (cm) 口徑 深径 底径	形態・文様	手法	備考
121	瓶身・口唇	甕	21.3 ( 6.3 ) — —	口縁部外側に1条の刻目突帯を有し、口唇部は丸くおさめる。	外面、縱方向のハケ調整。 口縁部内面に横方向のハケ調整。	
122	#	#	23.8 (11.0) — —	口縁部外側に1条の刻目突帯を有す。口唇部は尖っている。	外面、突帯の下に横方向のナナ調整。 頭部から頸部、縱方向のハケ調整。	
123	#	#	26.4 ( 5.2 ) — —	直線的に立ち上がり、口縁部外側に1条の刻目突帯を有す。口唇部は丸くおさめる。	内面裏及び口縁部内面に横方向のナナ調整。 突帯下は底状工具による横方向のナナ調整。	
124	#	#	20.4 ( 6.5 ) — —	口縁部外側に1条の刻目突帯を有し、口唇部は尖っている。	内外面とも指頭圧痕あり。 外面、縱方向のハケ調整。	
125	#	#	19.6 ( 6.0 ) — —	口縁部に接する1条の刻目突帯を有し、口唇部は尖っている。	内外面とも指頭圧痕あり。	輪づらの痕が外側に見られる。
126	#	#	20.8 ( 7.4 ) — —	直線的に立ち上がり、口縁部に接する刻目突帯を有す。	内面、指頭圧痕あり。 外面、縱方向のハケ調整。	口縁部内面付近にモミ痕が1粒みられる。
127	#	#	19.2 ( 8.7 ) — —	内面裏側に立ち上がり、口縁部は如意形に外反する。	内面、指頭圧痕あり。 口縁部内面に横方向のハケ調整。 突帯上面、横方向のナナ調整。	
128	#	#	24.2 ( 3.8 ) — —	口縁部に接する刻目突帯を有し、口唇部は丸くおさめる。	頭部外側右下がりのハケ調整。 突帯上面、横方向のナナ調整。	
129	#	#	23.4 ( 4.5 ) — —	口縁部に接する刻目突帯を有し、口唇部は尖っている。突帯は断面円形底原体による。	突帯上下、横方向のナナ調整。 頭部、縱方向のハケ調整。	
130	#	#	25.2 ( 8.4 ) — —	口縁部に接する刻目突帯を有し、口唇部は断面三角形状におさめる。	口縁部内外面ともナナ調整。 外面、縱方向のハケ調整。	
131	#	#	23.8 ( 6.1 ) — —	直線的に立ち上がり、口縁部に接する刻目突帯を有す。口唇部は断面三角形状におさめる。	内外面とも指頭圧痕あり。 外面、縱方向のハケ調整。	
132	#	#	24.4 ( 4.0 ) — —	直口して立ち上がり、口縁部に接する刻目突帯を有す。口唇部は尖っている。	突帯上面、ナナ調整。	
133	#	#	24.6 ( 5.5 ) — —	口縁部に接する刻目突帯を有し、口唇部は尖っている。	内外面とも指頭圧痕あり。 内外面とも横方向のナナ調整。	
134	#	#	26.0 ( 3.2 ) — —	口縁部に接する刻目突帯を有し、口唇部は尖っている。突帯は断面三角形状の原体による。	内面、縱方向のハケ調整。 外面、突帯下に横方向のナナ調整。	
135	#	#	25.0 ( 5.8 ) — —	直口して立ち上がり、口縁部に接する刻目突帯を有し、口唇部は丸くおさめる。	突帯上面、ナナ調整。	

押出番号	部位	器種	法量 (cm) 器高 削径 底径	形態・文様	手 法	備考
136	第VI・竪唇	甌	30.4 ( 6.1) — —	直口して立ち上がり、口縁端部に接する刻目突帯を有す。	内外面とも調整不明。	
137	#	#	28.9 ( 3.8) — —	直口して立ち上がり、口縁端部に接する刻目突帯を有す。 口唇部はやや尖る。	口縁部内面及び突帯は横方向の強いナゲ調整。その後に刻目を配す。 底部外面、横方向のハケ調整。突帯下、強い圧痕あり。	
138	#	#	17.6 ( 5.0) — —	口縁端部に接する刻目突帯を有し、 口唇部は尖る。	口縁部内外面とも横方向のナゲ調整。 外面ナゲ調整後に刻目を配す。 口縁部内面、指頭圧痕あり。	
139	#	#	17.8 ( 3.0) — —	口縁端部よりわざかに下に位置したところに刻目突帯を有し、 口唇部は丸くおさめる。刻目は棒状工具による。	口縁部内外面及び突帯の上・下に 横方向のナゲ調整。 外面横方向のハケ調整。その後の 横方向のナゲ調整によってナゲ消す。 突帯下、指頭圧痕あり。	
140	#	#	25.7 (13.7) — —	口縁端部よりわざかに下に位置したところに刻目突帯を有し、 口唇部は丸くおさめる。	口縁部内面及び突帯の上下に横方 向のナゲ調整。 縫づみの接合部に指頭圧痕あり。	
141	#	#	21.2 ( 6.0) — —	直口して立ち上がり、口縁端部に接する刻目突帯を有し、 口唇部は丸くおさめる。	外表面突帯下より縱方向のハケ 調整。突帯上面、ナゲ調整。	
142	#	#	18.4 ( 5.7) — —	直口して立ち上がり、口縁端部に接する刻目突帯を有す。 口唇部はやや尖る。	内面、ななめ方向のハケ調整。	
143	#	#	27.0 ( 4.0) — —	直線的に立ち上がり、口縁端部よりわざかに下に位置したところに はつきりした刻目突帯を有し、 口唇部は丸くおさめる。	外面、縱方向のハケ調整の後、突 帶下に横方向のナゲ調整。 内外面とも指頭圧痕あり。	
144	#	#	22.0 ( 4.2) — —	直線的に立ち上がり、口縁端部よりわざかに下に位置したところに 刻目突帯を有す。口唇部は尖る。	突帯上下に横方向のナゲ調整。 内面、指頭圧痕あり。	
145	#	#	21.4 ( 3.9) — —	#	口縁部内面、横方向のナゲ調整。	
146	#	#	28.4 ( 7.2) — —	口縁端部に接する刻目突帯を有し、 刻目は画面三角形状の板状工具によ る。口唇部は尖り気味、施文具の圧痕が上部に残る。	内面、輪つみ接合部に指頭圧痕あり。 調削外面、左下りのナゲ調整 (板状工具による)。	
147	#	#	17.2 ( 5.2) — —	口縁部は外反し、端部は丸く尖る。 口縁端部よりわざかに下に位置したところに刻目突帯を有す。	口縁部内外面、刻目突帯上下は横 方向の強いナゲ調整。口縁下、右 下がりのハケ調整。底部中位は縱 方向のハケ調整。	
148	#	#	17.4 ( 5.9) — —	口縁部は外反し、端部は丸くおさ める。口縁端部に接する刻目突帯 を有す。	底部外面、縦方向の丁寧なハケ調 整。	
149	#	#	20.6 ( 6.2) — —	口縁部は外反し、端部は尖る。口 縁端部よりわざかに下に位置したところに刻目突帯を有す。	突帯の上下、口縁部内外面、横方 向の強いナゲ調整。内面屈曲部に 指頭圧痕あり。	
150	#	#	26.0 ( 6.3) — —	口縁部は外反し、端部は尖る。口 縁端部に接する刻目突帯を有す。	口縁部内外面、横方向のナゲ調整。	

辨認番号	層位	器種	法量 (cm)	口徑 器高 底径	形態・文様	手法	備考
151	瓶口・瓶肩	甕	18.8 (7.2) —	口縫部は強く外反し、口唇部は丸くおさめ。口縫端部に後下からしわがありした下垂気味の刻目突帯を有す。	口縫部外裏、突帯部にナデ調整。 上斜部裏に方向のハケ調整。 胴部半位に腹方向のハケ調整。		
152	#	#	27.6 (5.0) —	口縫部は外反し、口唇部は尖り、口縫端部に後する刻目突帯を有し、下向きにつく。			
153	#	#	18.4 (2.7) —	口縫部は外反し、口唇部は尖り気味、口縫端部よりわずか下に位置したところに刻目突帯を有す。 刻目は「へ」による。	口縫部外裏、突帯を横方向のナデ調整。 上斜部外裏、腹方向のハケ調整。		
154	#	#	23.7 (10.8) —	口縫端部よりわずか下に位置したところに刻目突帯を有し、口唇部は平底窓をなす。	口縫部外裏、突帯に横方向のナデ調整。 刻目は上下ともハケ調整後には下がる。外面、縁及び右下がりのハケ調整。		
155	#	#	23.6 (13.2) —		口縫部外裏、突帯に横方向の強いナデ調整。 外面、縁方向及び右下がりのハケ調整。		
156	#	#	22.0 (4.3) —	口唇部 上下縦に刻目、下端は突帯でなく、つまみ出したもの。	口縫部内外裏とも横方向のナデ調整。		
157	#	#	28.0 (4.5) —	口縫端部に接する刻目突帯を有す。口唇部は水平な面をもち、刻目を失す。	胴部外裏、右下がりのハケ調整。 突帯上、横方向のナデ調整。		
158	#	#	30.0 (5.7) —	口縫部はなめらかに外反し、端部にへらによる弱い刻目を配す。口縫端部よりわずか下に位置したところに、断面三角の刻目突帯を有す。	口縫部内外裏及び突帯上下に横方向のナデ調整。		
159	#	#	28.8 (5.0) —	口縫部はなめらかに外反し、端部に刻目を配す。口縫端部より下に位置したところに断面三角の刻目突帯を有す。	口縫部内裏、横方向のハケ調整。 外面、縁方向のハケ調整。		
160	#	#	30.4 (6.0) —	口縫部はなめらかに外反し、端部下端にへらによる刻目を配す。口縫端部よりわずか下に位置したところに刻目突帯を有す。	口縫部内外裏及び突帯上下、横方向の強いナデ調整。		
161	#	#	36.0 (4.5) —	口縫端部よりわずか下に位置したところに断面三角の刻目突帯を有す。口縫部は弱く外反し、内面に強い棱ができる。口唇部は平坦面なし、外縫に刻目を配す。	口縫部内外裏及び突帯上下、横方向のナデ調整。	擬口縫がみられる。	
162	#	#	18.8 (3.8) —	口縫部は如意形に外反する。口唇部は溝をなし、下端に刻目を配す。	口縫部内外裏とも横方向のナデ調整。		
163	#	#	18.4 (4.0) —	口縫部は如意形に外反する。口唇部は外側する溝をなし、下端にへらによる刻目を配す。	内外裏とも挫削圧あり。 口縫部内外裏、横方向のハケ調整。 口縫部外裏、横方向のナデ調整。		
164	#	#	20.2 (8.4) —	口縫部は如意形に外反する。口唇部は外側する溝をなし、下端にへらによる刻目を配す。	胴部に縦方向のハケ調整。		
165	#	#	22.6 (8.4) —	口縫部は如意形に外反する。口唇部は外側する溝をなし、下端に刻目を配す。	口縫部外裏、横方向のナデ調整。 胴部外裏、右下がりのハケ調整。		

神田番号	層位	器種	法量 (cm)	口器 高さ (mm) 制径 底径	形態・文様	手 法	備考
166	第五・直層	腹	23.7 (8.3) —	口縫部は如意形に外反する。口唇部は外傾する面をなし、下端に刻目を配す。	口縫部内面、横方向のハケ調整。内面、指頭圧痕あり。脣部外張、縱方向及び右下がりのハケ調整。		
167	#	#	24.2 (7.7) —	口縫部は如意形に外反する。口唇部は外傾する面をなし、下端にヘラによる刻目を配す。	口縫部内面、横方向のハケ調整。内面、指頭圧痕あり。脣部外張、右下がりのハケ調整。		
168	#	#	25.6 (21.0) 26.8 —	口縫部は如意形に外反し、内面に縦がかかる。口唇部は外傾する面をなし、下端に刻目を配す。	口縫部内面ととも横方向のナデ調整。輪づみの軸上接合部に指頭圧痕あり。脣部外張、横方向及び右下がりのハケ調整。		
169	#	#	24.9 (11.0) —	口縫部は如意形に外反し、口唇部は外傾する面をなし、下端にヘラによる刻目を配す。	口縫部内面、横方向のハケ調整。脣部外面、右下がり及び横方向のハケ調整。		
170	#	#	27.0 (11.5) —	口縫部は如意形に外反し、口唇部は外傾する面をなし、下端に刻目を配す。	口縫部外面、指頭圧痕あり。外面脣部、目の組いハケ調整。		
171	#	#	22.2 (8.3) —	口縫部は如意形に外反し、口唇部は外傾する面をなし、下端にハケによる刻目を配す。	口縫部外面、横方向のナデ調整。脣部外張、縦方向及び右下がりのハケ調整。		
172	#	#	27.6 (10.5) —	口縫部は如意形に外反し、口唇部は外傾する面をなし、下端に刻目を配す。	口縫部内面、横方向のハケ調整。内面、指頭圧痕あり。		
173	#	#	23.0 (8.3) 22.4 —	口縫部は如意形に外反し、口唇部は外傾する面をなし、下端にヘラによる刻目を配す。	口縫部内外面とも横方向のハケ調整。脣部外面、右下がりのハケ調整。		
174	#	#	25.8 (3.9) —	口縫部は如意形に外反し、内面に縦がかかる。口唇部は外傾する面をなし、下端にヘラによる刻目を配す。	口縫部内外面とも横方向のナデ調整。内面、指頭圧痕あり。		
175	#	#	27.0 (15.0) 25.4 —	直線的に立ち上がる脣部から、口縫部は如意形に外反し、口唇部は外傾する面をなし、下端にヘラによる刻目を配す。	口縫部内面、横方向のハケ調整。内面、輪づみの接合部に指頭圧痕あり。脣部外面、右下がりのハケ調整。		
176	#	#	28.8 (11.3) —	口縫部は如意形にやや外反し、口唇部は外傾する面をなし、下端にヘラによる刻目を配す。	口縫部外面、横方向のナデ調整。脣部、右下がりのハケ調整。中脣部、横方向のハケ調整。		
177	#	#	31.0 (10.4) —	口縫部は如意形に外反し、口唇部は外傾する面をなし、下端にヘラによる刻目を配す。	口縫部外面、横方向のナデ調整。脣部外面、縦方向及び右下がりのハケ調整。		
178	#	#	17.6 (7.6) —	口縫部は如意形に外反し、口唇部は外傾する面をなし、全端に刻目を配す。	上脣部外面、横方向のハケ調整。口縫部外面、ナデ調整。		
179	#	#	15.0 (8.0) 13.2 —	口縫部は如意形に外反し、口唇部は外傾する面をなし、全端にヘラによる刻目を配す。	口縫部内面、横ナデ調整により縦ができる。口縫部外面、横方向のナデ調整。脣部外面、縦方向のハケ調整。		
180	#	#	16.4 (9.0) —	口縫部は如意形に外反し、口唇部は外傾する面をなし、全端に刻目を配す。	内面とも指頭圧痕あり。脣部外面、右下がりのハケ調整。	脣部外面、縦状炭化物付着。	

辨別番号	層位	部位	法量 (cm) 口唇部 脣部 底径	形態・文様	手 法	備考
181	底部・底唇	裏	19.0 (4.2) —	口縁部は如意形に外反する。 口唇部は外傾する面をなし、ヘラによる刻目を全面に配す。	口縁部内面、横方向のハケ調整。 外側、縱方向のハケ調整。	
182	#	#	19.8 (3.0) —	#	内外面とも指頭圧痕あり。口縁部外面、横方向のナサ調整。	
183	#	#	21.0 (5.0) —	口縁部は如意形に外反する。 口唇部は丸くおさめ、ヘラによる刻目を全面に配す。	口縁部内面、横方向のナサ調整。	外面、磨耗が激しい。
184	#	#	20.2 (4.0) —	口縁部は如意形に外反する。 口唇部は外傾する面をなし、ハケによる刻目を全面に配す。	口縁部内面、横方向のハケ調整。 脣部外側、縱方向のハケ調整。	
185	#	#	17.4 (5.5) —	口縁部は如意形に外反する。 口唇部は丸くおさめ、伸による刻目を全面に配す。	内外面とも指頭圧痕あり。 脣部外側、右下がりのハケ調整。	
186	#	#	20.8 (3.9) —	口縁部は如意形に外反する。 口唇部は外傾する面をなし、全面にヘラによる刻目を配す。	内外面とも指頭圧痕あり。 口縁部内面とも横方向のナサ調整。	
187	#	#	26.2 (15.5) —	直線的に立ち上がる脣部から、口縁部は如意形に外反する。口唇部は外傾する面をなし、ハケによる刻目を全面に配す。	口縫部内外面とも横方向のナサ調整。 脣部外側、縱方向及び右下がりのハケ調整。	
188	#	#	21.4 (13.1) —	口縁部は如意形に外反する。 口唇部は外傾する面をなし、部分的に外方に大きく下垂している。 下端部にヘラによる刻目を配す。	内面、指頭圧痕あり。 脣部外側、縱方向のハケ調整。	
189	#	#	25.4 (13.3) —	直線的に立ち上がる脣部から、口縫部は如意形に外反する。口唇部は外傾する面をなし、下半に刻目を配す。	口縫部内外面とも横方向のナサ調整。 脣部外側、右下がりのハケ調整。	
190	#	#	29.0 (22.1) 29.4 —	やや内凹気味に立ち上がる脣部から、口縫部は如意形に外反する。 口唇部は外傾する面をなし、全面にヘラによる刻目を配す。	口縫部内面、横方向のハケ調整。 脣部は指頭圧痕あり。 外側、口唇部から脣部に右下がりのハケ調整を1窄に施す。	
191	#	#	21.0 (3.6) —	口縫部はやや外反し、口唇部は外傾する面をなし、全面にハケによる刻目を配す。	口縫部外側、横方向のナサ調整。	
192	#	#	25.6 (5.4) —	口縫部は如意形に外反する。 口唇部は外傾する面をなし、全面にハケによる刻目を配す。	口縫部外側、横方向のナサ調整。 脣部に縱方向のハケ調整。	
193	#	#	18.4 (8.5) —	直線的に立ち上がる脣部から、口縫部は如意形に外反する。口唇部は外傾する面をなし、下半にヘラによる刻目を配す。	口縫部内面に接ができる。 口縫部外側に横方向のナサ調整。 脣部外側に右下がりのハケ調整。	
194	#	#	21.4 (5.2) —	直線的に立ち上がる脣部から、口縫部は短く外反する。口唇部は丸くおさめ、下端に刻目を配す。	口縫部外側、横方向のナサ調整。 口縫部内面、横方向のハケ調整。 脣部外側、右下がりのハケ調整。	
195	#	#	23.6 (15.0) 22.8 —	口縫部は如意形に外反し、口唇部は外傾する面をなし。下半に伸により刻目を配す。	脣部内面、指頭圧痕あり。	外面、磨耗が激しい。

特許番号	層位	器種	法量 (cm) 口径 基部 直径 底径	形態・文様	手法	備考
196	蒸気・唯用	廣	26.0 (4.8) —	口縫部は如意形に外反する。 口唇部は外傾する面をなし、下半 にへラによる割目を配す。	口縫部 内外面とも横方向のナジ 調整。口縫部内面、横方向のハケ 調整。内外面とも指頭圧痕あり。	
197	#	#	21.6 (4.2) —	口縫部は如意形に外反する。 口唇部は丸くおさめ、全面にへラ による割目を配す。	口縫部 内外面とも横方向のナジ調整。 縫部外面、縫方向のハケ調整。	
198	#	#	27.0 (18.3) 25.0 —	やや内側気味に立ち上がる縫部から、 口縫部は如意形に外反する。口 唇部は丸くおさめ、全面にハケ による割目を配す。	口縫部外面、縫方向のナジ調整。 縫部外面、縫方向のハケ調整。	
199	#	#	22.0 (13.3) —	*	縫部外面、縫方向のハケ調整。	
200	#	#	26.6 (8.3) —	直線的に立ち上がる縫部から、 口縫部は如意形に外反する。口唇部は 水平な面をなし、下端にハケによ る割目を配す。	口縫部内面 に接ができる。 縫部外面、右下がりのハケ調整。	
201	#	#	26.4 (20.0) 25.4 —	やや内側気味に立ち上がる縫部から、 口縫部は如意形に外反する。口唇部は 外傾する面をなし、下端にへラ による割目を配す。	口縫部内面、横方向のハケ調整。 縫部は指頭圧痕あり。 縫部外面、縫方向のハケ調整。	
202	#	#	25.7 (4.5) —	口縫部は如意形に外反する。口唇 部は丸くおさめ、下端に割目を配 す。	口縫部内面、縫方向のハケ調整。 縫部、右下がりのハケ調整。	
203	#	#	26.6 (7.4) —	口縫部は如意形に外反する。口唇 部はやや回状を呈し、下端に割 目を配す。	口縫部 内外面とも横方向のナジ 調整。縫部外面、縫方向のハケ調整。	
204	#	#	17.0 (4.4) —	*		
205	#	#	19.6 (4.5) —	口縫部はわずかに外反し、口唇部 は四凹を呈す。下端に割目を配す。	口縫部内面、横方向のハケ調整。 口縫部外面、横方向のナジ調整。 縫部外面、縫方向のハケ調整。	
206	#	#	21.2 (8.0) —	口縫部はなめらかに外反する。口 唇部は西状を呈し、下端に割目を 配す。	*	
207	#	#	23.4 (6.2) —	直線的に立ち上がる縫部から、 口縫部は短く外反する。口唇部は やや回状を呈し、下端にへラによ る割目を配す。	口縫部 内外面とも横方向のナジ調整。 内面には後壁ができる。 縫部外面、右下がりのハケ調整。	
208	#	#	31.0 (9.0) —	口縫部は如意形に外反する。口唇 部はやや回状を呈し、下端にへラ による割目を配す。	口縫部内面、横方向のハケ調整。 口縫部外面、横方向のナジ調整。 口縫部外面、指頭圧痕あり。 縫部外面、縫方向のハケ調整。	
209	#	#	19.0 (10.1) —	直線的に立ち上がる縫部から、 口縫部は急に外反する。口唇部は丸く おさめ、下半にへラによる割目を 配す。	口縫部外面、縫方向のナジ調整。 縫部外面、縫方向のハケ調整。 内面、指頭圧痕あり。	
210	#	#	23.6 (9.7) —	口縫部は如意形に外反する。口唇 部は水平な面をなし、上端・下端 に割目を配す。	口縫部外面、横方向のナジ調整。 口縫部内面、横方向のハケ調整。 縫部内面、右下がりのハケ調整。 縫部外面、縫方向及び右下がりのハ ケ調整。	

辨図番号	層 位	器 様	法量 (cm) 口唇部 脣周 底径	形 異・文 横	手 法	備 考
211	第V-VI層	脣	19.4 ( 3.5) —	口縫部は如意形に外反する。口唇部は凹状を呈し、下端にハケによる刻目を配す。	口縫部内面、横方向のハケ調整。 脣部外面、縦方向のハケ調整。	
212	#	#	24.0 ( 3.5) —	口縫部は如意形に外反する。口唇部は外傾した面をなし、下端がやや下落し、その部分に刻目を配す。	制部外面、縦方向のハケ調整。	
213	#	#	29.6 ( 7.3) —	口縫部は如意形に外反する。口唇部は凹状を呈し、下端は下傾する。口唇部上端と下端に力強い凹月を配す。	口縫部内面、横方向のハケ調整。 口縫部外面、横方向のナデ調整。 脣部外面、縦方向のハケ調整。	
214	#	#	25.6 ( 5.9) —	直線的に立ち上がる脣部から、口縫部は如意形に外反する。口唇部は凹状を呈し、下半に強いハケによる刻目を配す。	口縫部外面、横方向のナデ調整。 脣部外面、右下がりのハケ調整。	
215	#	#	15.2 ( 6.3) —	口縫部は如意形に外反する。口唇部は丸くおさめ、下端に刻目を配す。	脣部外面、右下がりのハケ調整。	
216	#	#	18.2 ( 4.0) —	は脣部は強く外反する。口縫部は水平な面をなし、下半にへラによる刻目を配す。	脣部外面に指頭押圧の後、横方向のナデ調整を施す。 脣部は縦方向のハケ調整。	
217	#	#	27.4 (10.6) —	口縫部は如意形に外反する。口唇部は凹状を呈し、下端にハケによる刻目を配す。	口縫部内面、横方向のナデ調整。 脣部外面、右下がりのハケ調整。	
218	#	#	22.6 ( 7.8) —	口縫部は如意形に外反する。口唇部は水平な面を呈し、全面にへラによる刻目を配す。		
219	#	#	28.6 ( 5.6) —	口縫部は丸くおさめ、全面にハケによる刻目を配す。口縫部内面に棱ができる。	口縫部内面、横方向のナデ調整。 脣部外面、縦方向のハケ調整。	
220	#	#	27.4 (10.0) —	口縫部は如意形に外反する。口唇部は丸くおさめ、下半にへラによる刻目を配す。	山根部内面、横方向のナデ調整。 脣部外面、右下がりのハケ調整。	
221	#	#	23.0 (14.2) 22.1 —	直線的に立ち上がる脣部から、口縫部はやや外反する。口唇部は丸くおさめ、下端にへラによる刻目を配す。	脣部内面、指頭に棱あり。 口縫部内面とも横方向のナデ調整。	
222	#	#	27.2 ( 6.2) —	口縫部は如意形に外反する。口唇部は丸くおさめ、下端に刻目を配す。	口縫部内面、横方向のハケ調整。 脣部外面、縦方向のハケ調整。	
223	#	#	21.5 ( 3.7) —	口縫部はわずかに外反する。口唇部は丸くおさめ、全面にハケによる刻目を配す。	口縫部内面、横方向のハケ調整。 口縫部外面、横方向のナデ調整。 脣部外面、縦方向のハケ調整。	
224	#	#	27.8 ( 3.0) —	口縫部はわずかに外反する。口唇部は外傾した面をなし、下端に刻目を配す。	口縫部内面、横方向のハケ調整。 口縫部外面、横方向のナデ調整。	
225	#	#	24.2 ( 4.7) —	口縫部はややわざかに外反する。口唇部は丸くおさめる。全面に刻目を配す。	口縫部内面、横方向のハケ調整。 脣部外面、縦方向のハケ調整。	

辨認番号	層位	基種	法量 (cm) 口唇 筋高 筋厚 筋径	形態・文様	手 法	備考
226	第Ⅱ・耳唇	庚	18.0 ( 4.0 ) —	口唇部は如意形に外反する。口唇部は丸くおさめ、全面にハケによる筋目を配す。	口唇部内外面とも横方向のナデ調整。	
227	#	#	17.0 ( 3.5 ) —	口唇部はわずかに外反する。口唇部は丸くおさめ、全面にハケによる筋目を配す。	口唇部内外面とも横方向のナデ調整。 口唇部外面にハケの木口による圧痕がみられる。	
228	#	#	15.4 ( 2.6 ) —	口唇部は如意形に外反する。口唇部は丸くおさめ、全面に力強いヘラによる筋目を配す。		
229	#	#	17.6 ( 2.5 ) —	口唇部は如意形に外反する。口唇部は丸くおさめ、全面にハケによる筋目を配す。	口唇部内外面とも横方向のナデ調整。	
230	#	#	20.0 ( 3.0 ) —	口唇部は如意形に外反する。口唇部は丸くおさめ、全面に力強く伸による筋目を配す。	口唇部内面、横方向のハケ調整。 口唇部外面、横方向のナデ調整。 脣部外面、右下がりのハケ調整。	
231	#	#	18.0 ( 7.2 ) —	直線的に立ち上がる脣部から、口唇部はわずかに外反する。口唇部は丸くおさめ、全面にヘラによる筋目を配す。		
232	#	#	20.8 ( 3.3 ) —	口唇部は如意形に外反する。口唇部は丸くおさめ、全面にハケによる筋目を配す。		
233	#	#	20.4 ( 7.2 ) —	直線的に立ち上がる脣部から、口唇部は丸くおさめ、全面にハケによる筋目を配す。	外面、右下がりのハケ調整。	内面、肌荒れが激しい。
234	#	#	25.0 ( 4.0 ) —	口唇部は如意形に外反する。口唇部は丸くおさめ、全面にハケによる筋目を配す。		
235	#	#	21.8 ( 6.0 ) —	直線的に立ち上がる脣部から、口唇部はなめらかに外反する。口唇部は丸くおさめ、全面にハケによる筋目を配す。	口唇部外面、横方向のナデ調整。 脣部外面、横方向のハケ調整。	
236	#	#	24.0 ( 6.5 ) —	口唇部は如意形に外反する。口唇部は丸くおさめ、全面にヘラによる筋目を配す。	口唇部外面にハケの木口による圧痕がみられる。脣部、右下がりのハケ調整。	
237	#	#	25.9 ( 4.5 ) —	口唇部はわずかに外反する。口唇部は丸くおさめ、全面にハケによる筋目を配す。	外面、右下がりのハケ調整。	内面、肌荒れが激しい。
238	#	#	22.8 ( 4.5 ) —	口唇部はわずかに外反する。口唇部は丸くおさめ、全面にヘラによる力強い筋目を配す。	口唇部内外面とも横方向のナデ調整。	
239	#	#	28.2 ( 5.1 ) —	口唇部は如意形に外反する。口唇部は丸くおさめ、全面に断面三角形のヘラによる筋目を配す。	口唇部内面、横方向のナデ調整。	
240	#	#	26.8 ( 7.8 ) —	直線的に立ち上がる脣部から、口唇部は如意形に外反する。口唇部は丸くおさめ、全面に伸による筋目を配す。	口唇部内面、横方向のハケ調整。 脣部外面、横方向のハケ調整。	

神田番号	層位	器種	法量 (cm)	口唇部 最高 底径	形態・文様	手 法	備 考
241	筋質・直腸	裏	18.1 (14.0) —	直線的に立ち上がる唇部から、口唇部はかすかに外反する。口唇部は丸くおさめ、全面にへらによる割目を配す。	口縁部外面、横方向のナデ調整。唇部、縱方向のハケ調整。内外面とも側頭圧痕あり。		
242	#	#	28.0 ( 4.0) —	口縁部は如意形に外反する。口唇部は丸くおさめ、全面に割目による二角形のへらによる割目を配す。	網部外面、左下がりのハケ調整。		
243	#	#	26.0 ( 5.6) —	口縁部は如意形に外反する。口唇部は外傾する面をなし、全面にハケによる割目を配す。	口縁部外圓、横方向のナデ調整。		
244	#	#	27.9 ( 5.6) —	口縁部はなめらかに外反する。口唇部は丸くおさめ、全面に割目を配す。	口縁部内面、横方向のハケ調整。口縁部外面、横方向のナデ調整。網部外面、縱方向のハケ調整。		
245	#	#	18.6 25.0 19.5 7.9	平底を呈し、下脚部から中脚部にかけては底筋的に立ち上がり、上脚部で内窓丸座になり、口縁部はかすかに外反する。	口唇部は丸くおさめ、全面に割目を配す。口縁部外圓、横方向のナデ調整。網部外面、縱方向のハケ調整。		内面、横頭圧痕が全体に残る。
246	#	#	31.2 ( 5.6) —	口縁部は如意形に外反する。口唇部は丸くおさめ、全面に伸による割目を配す。	口縁部 内外面とも横方向のナデ調整。網部外面、右下がりのハケ調整。		
247	#	#	23.1 ( 2.6) —	口縁部は如意形に外反する。口唇部は丸くおさめ、全面にへらによる割目を配す。	口縁部内面とも横方向のナデ調整。		
248	#	#	17.8 ( 2.1) —	口縁部は強く外反する。口唇部は丸くおさめ、下年にハケによる割目を配す。	口縁部内面、横方向のナデ調整。		
249	#	#	26.4 (18.3) —	内湾して立ち上がる唇部から、口縁部はゆるやかに外反する。口唇部は丸くおさめ、下年にへらによる割目を配す。	口縁部内面、横方向のハケ調整。網部内面、側頭圧痕が全側に残る。上脚部に割目を施す際についたヘラの压痕がみられる。		
250	#	#	19.8 ( 3.0) —	口縁部は如意形に外反する。口唇部は丸くおさめ、下年にへらによる割目を配す。			
251	#	#	21.2 ( 3.4) —	口縁部は、ほぼ直口して終わる。口唇部は丸くおさめ、下端に割目を配す。	口縁部内面とも横方向のナデ調整。網部外面、縦方向のハケ調整。		
252	#	#	21.6 ( 3.7) —	口縁部は如意形に外反する。口唇部は丸くおさめ、下年に割目を配す。			
253	#	#	39.6 ( 6.3) —	直線的に立ち上がる唇部から、口縁部は強く外反する。口唇部は丸くおさめ、下年に割目を配す。	口縁部内面、横方向のハケ調整。		
254	#	#	26.4 ( 9.2) —	口縁部は直口して終わり、口縁部をやや外方につまみ出す。口唇部は丸くおさめ、下年に割目を配す。	内外面ともハケ調整を乱雑に施す。		
255	#	#	21.3 (11.0) 20.4 —	口縁部は如意形に外反する。口唇部は外傾する面をなし、全面に割目を配す。	口縁部内面、横方向のハケ調整。網部外面、縦方向のハケ調整。		

押抜番号	層	位	器種	法量 径 部 前 後 直 径 (cm)	形態・文様	手 法	備 考
256	第5・6層	腹		28.6 (8.8) — —	直線的に立ち上った唇部から、口縁部はゆるやかに外反する。口唇部は丸くおさめ。下半にヘラによる割目を配す。	口縁部内外面とも横方向のナメ調整。 上唇部外面、横方向のハケ調整。 唇部、横方向のハケ調整。	
257	#	#		18.8 (4.0) — —	口縁部は直口して熱わり。口唇部はえくおさめ。上半に割目を配す。	口縁部内外面とも横方向のナメ調整。 上唇部内面、横方向のハケ調整。 外面、横方向のハケ調整。	
258	#	#		26.4 (12.8) 25.0 —	口縁部は如意形に外反する。口唇部は丸くおさめ。上下端にヘラによる割目を配す。		
259	#	#		30.0 (5.0) — —	口縁部は如意形に外反する。口唇部は丸くおさめ。上下端に割目を配す。	唇部外側、横方向のハケ調整。	
260	#	#		19.0 25.5 19.8 8.0 —	平底を呈す。ゆるやかに立ち上った唇部から、口縁部はわざかに外反する。口唇部は丸くおさめる。		
261	#	#		30.4 (2.5) — —	口縁部は如意形に外反する。口唇部は丸くおさめ。上半に伴による割目を配す。		
262	#	#		22.7 (15.0) 22.0 —	直線的に立ち上った唇部から、口縁部は如意形に外反する。口唇部は丸くおさめる。	唇部内面、指鉗圧痕あり。 下唇部、ハケ調査。 口縁部内面、横方向のハケ調整。	
263	#	#		18.0 (5.9) — —	口縁部は如意形に外反する。上唇部に比較的長い段部を有す。口唇部はえくおさめ。下端にハケによる割目を配す。	外面、左下がりのハケ調整。	内面、肌荒れが激しい。
264	#	#		23.8 (8.8) — —	口縁部は如意形に外反する。上唇部に比較的長い段部を有す。口唇部は丸くおさめ。下半に割目を配す。	口縁部外面、横方向のナメ調整。	
265	#	#		28.0 (9.6) — —	口縁部は如意形に外反し、上唇部に比較的長い段部を有す。口唇部は丸くおさめ。下端にハケによる割目を配す。		
266	#	#		38.6 (12.5) 18.9 —	口縁部は如意形に外反し、上唇部に比較的長い段部を有す。口唇部は丸くおさめ。下端にハケによる割目を配す。	唇部外面、横方向及び右下がりのハケ調整。	内面、発赤が激しい。
267	#	#		28.8 (5.2) — —	口縁部は如意形に外反する。上唇部に比較的短い段部を有す。口唇部を配す。口唇部は外傾する箇をなし、全面にハケによる割目を配す。	内面、指鉗圧痕あり。	
268	#	#		22.4 (9.7) — —	口縁部は如意形に外反し、上唇部に比較的短い段部を有す。口唇部は丸くおさめ。全面にハケによる割目を配す。	口縁部外側から段部に横方向のナメ調整。	
269	#	#		15.2 11.9 13.8 5.1 —	平底を呈す。底から直線的に立ち上がり、口縁部は、やや外反する。口唇部は丸くおさめる。	口縁部内外面とも横方向のナメ調整。	
270	#	#		28.8 (7.8) — —	口縁部はやや外反して、直線的に終わる。口唇部は唇状をなし、下端に割目を配す。	口縁部内面、横方向のハケ調整。 内面、指鉗圧痕あり。外面、横方向のハケ調整。	

検査番号	層位	器種	法量 (cm) 口唇 筋膜 胸筋 胸筋	形態・文様	手法	備考
271	第Ⅱ・亘層	蟹	18.4 ( 5.5 ) —	口縫部はわずかに外反し、亜口して終わる。口唇部は外側の面をなし、下端に刺目を配す。	口縫部 内外側とも横方向のナデ調整。側部外側、縱方向のハケ調整。	
272	〃	〃	31.0 ( 6.5 ) —	口縫部はなめらかに外反する。口唇部は丸くおさめ、全面にハケによる刺目を配す。		
273	〃	〃	21.8 ( 15.6 ) 20.8 —	内側気味に立ち上がる頭部から、口縫部は適し字形に外反する。口唇部は水平な面をなし、全面に刺目を配す。		
274	〃	〃	24.0 ( 8.6 ) —	口縫部は如意形に外反する。口唇部は丸くおさめ、下端に刺目を配す。	口縫部外面から5cm程、縱方向のナデ調整。それより下に横方向のハケ調整。	
275	〃	〃	22.8 ( 7.0 ) —	〃	〃	
276	〃	〃	— ( 19.7 ) 7.6	平底を呈す。	側部外面、ハケ調整。下側部外面及び内面全体に指頭圧痕あり。	
277	〃	〃	33.6 ( 7.8 ) —	口縫部にしっかりした段部を有す。口縫部は直線的に立ち上り、端部近くで強く外反する。口唇部は水平な面をなし、下端に刺目を配す。段部上部に刺目を配す。	口縫部内面、横方向のハケ調整。	
278	〃	〃	— ( 3.8 ) 7.0	平底を呈し、直線的に立ち上がる。	外面、縱方向のハケ調整。 内面、指頭圧痕あり。	
279	〃	〃	— ( 3.9 ) 5.6	平底を呈す。	外面、丁寧なハケ調整。	
280	〃	〃	— ( 2.6 ) 6.0	〃	下脣基外面 墓部に指頭圧痕あり。	
281	〃	〃	— ( 3.5 ) 7.0	平底を呈す。底部が厚くつくられる。	内外面とも指頭圧痕あり。	
282	〃	〃	— ( 4.3 ) 3.8	平底を呈す。下脣部端部は、指で内外面からしめつけ、力強くふんばる。		
283	〃	〃	— ( 3.5 ) 6.4	平底を呈す。直線的に立ち上がる。	内面、指頭圧痕あり。 外面、縱方向のハケ調整。	
284	〃	〃	— ( 4.4 ) 6.0	〃	外面、縱方向のハケ調整。	
285	〃	〃	— ( 4.3 ) 7.8	平底を呈す。	内外面とも指頭圧痕あり。	

検査番号	層位	器種	法量 (cm) 口徑 基部 底径	形態・文様	手 法	備 考
286	第1・直腸	廐	— ( 5.1 ) — 6.4	平底を呈し、下腹部外間に指頭押圧により力強い底部をつくる。		
287	#	#	— ( 3.8 ) — 7.4	平底を呈し、直線的に立ち上がる。	外面、丁寧なハケ調整。 内面、ナラ調整。	
288	#	#	— ( 4.1 ) — 8.4	平底を呈す。	外面、縱方向のハケ調整。	
289	#	#	— ( 3.7 ) — 7.4	"	外面及び底面、縱方向のハケ調整。	
290	#	#	— ( 4.5 ) — 7.4	"	下腹部外間に指頭圧痕あり。	
291	#	#	— ( 4.0 ) — 6.6	平底を呈し、直線的に立ち上がる。		表面にモミ痕あり。
292	#	#	— ( 4.0 ) — 8.0	平底を呈す。	背面、縱方向のハケ調整。 内面、指頭圧痕あり。	
293	#	#	— ( 5.1 ) — 7.8	"	外面、右下がりのハケ調整。 内面、指頭圧痕あり。	
294	#	#	— ( 4.3 ) — 7.4	平底を呈し、下腹部外間に指頭押圧により力強い底部をつくる。		
295	#	#	— ( 3.8 ) — 10.4	上げ底気味の底を呈し、直線的に立ち上がる。	外面、縱方向のハケ調整。	
296	#	#	— ( 4.4 ) — 8.2	平底を呈す。	"	
297	#	#	— ( 5.4 ) — 6.0	平底を呈し、やや外反しながら直線的に立ち上がる。	外面、縱方向に目の粗いハケ調整。	
298	#	#	— ( 3.8 ) — 6.8	平底を呈し、下腹部端部に粘土の盛り上がりが見られる。	外面、丁寧な縱方向のハケ調整。	
299	#	#	— ( 4.2 ) — 7.8	平底を呈し、直線的に立ち上がる。	外面、縱方向のハケ調整。	
300	#	#	— ( 4.7 ) — 8.0	平底を呈す。	外面、縱方向のハケ調整。 内面、縦いハケで部分的に押さえ付けるように施す。	

検査番号	層位	器種	口径 法量 (cm) 器高 制径 底径	形態・文様	手法	備考
301	黒口・唯層	甕	— ( 4.9 ) — 8.6	上げ底を呈す。	内外面とも指領圧痕あり。	
302	#	#	— ( 3.7 ) — 7.8	平底を呈す。	内面、指領圧痕あり。	
303	#	#	— ( 4.1 ) — 7.2	平底を呈し、直線的に立ち上がる。	内面、目の細いハケによってナデ調整。内外面とも指領圧痕あり。外側、縱方向のハケ調整。	
304	#	#	— ( 4.8 ) — 8.0	平底を呈し、やや外反しながら直線的に立ち上がる。	内外面とも指領圧痕あり。	
305	#	#	— ( 4.7 ) — 8.8	平底を呈す。	内面、指領圧痕あり。 外側、縱方向のハケ調整。	
306	#	#	— ( 4.8 ) — 8.6	平底を呈し、直線的に立ち上がる。	#	
307	#	#	— ( 5.4 ) — 7.8	#	外面、丁寧な縱方向のハケ調整。	
308	#	#	— ( 6.0 ) — 8.5	平底を呈す。	外面、目の細い縱方向のハケ調整。 内面、ナデ調整。	
309	#	#	— ( 7.2 ) — 7.6	上げ底気味の底を呈す。	外面、縱方向のハケ調整。	
310	#	#	— ( 5.3 ) — 8.0	直線的に立ち上がる下腹部。	外面、縱方向のナデ調整。	
311	#	#	— ( 7.7 ) — 7.0	平底を呈す。	外面、縱方向のハケ調整。	
312	#	#	— ( 7.0 ) — 8.2	#		内面、炭化物付着。
313	#	#	— ( 9.0 ) — 7.3	平底を呈し、下腹部はゆるやかに外反し、立ち上がる。	外面、縱方向のハケ調整。	
314	#	#	— ( 9.1 ) — 8.6	平底を呈し、ほぼ直線的に立ち上がる。	下腹部内外面とも指領圧痕あり。	
315	#	#	— ( 8.3 ) — 9.2	平底を呈す。	外面、縱方向のナデ調整及びハケ調整。 内面、指領圧痕あり。	

押抜番号	層位	器種	法量 (cm)	口径 筋高 筋径 筋底	形態・文様	手 法	備考
316	第Ⅳ・Ⅴ層	罐	— ( 2.4 ) — 6.5	平底を呈す。	下脚部外周端部に指頭圧痕あり。 外面、縱方向のハケ調整。		
317	#	#	— ( 3.8 ) — 6.6	平底を呈し、直線的に立ち上がる。	内外面とも指頭圧痕あり。		
318	#	#	— ( 3.5 ) — 7.6	平底を呈す。	外面、左下がりのハケ調整。 内部、指頭圧痕あり。		
319	#	#	— ( 5.0 ) — 9.2	"	外面、丁寧な縱方向のハケ調整。		
320	#	#	— ( 3.2 ) — 8.8	平底を呈し、直線的に立ち上がる。	外面、縱方向のハケ調整。		
321	#	#	— ( 4.5 ) — 8.0	平底を呈す。	外面、縱方向のハケ調整。 内外面とも指頭圧痕あり。		
322	#	#	— ( 4.7 ) — 9.1	"	"		
323	#	#	— ( 4.2 ) — 9.0	"	外面、縱方向のハケ調整。		
324	#	#	— ( 4.3 ) — 7.0	平底を呈し、やや内湾気味に立ち上がる。	内面、指頭圧痕あり。		
325	#	#	— ( 4.2 ) — 8.0	平底を呈し、ほぼ直線的に立ち上がる。	外面、丁寧な縱方向のハケ調整。		
326	#	#	— ( 6.9 ) — 8.3	平底を呈す。	外面、縱方向のナデ調整。		
327	#	#	— ( 2.6 ) — 6.6	上げ底気味の底を呈す。	内外面とも指頭圧痕あり。		
328	#	#	— ( 2.3 ) — 7.6	"			
329	#	#	— ( 3.4 ) — 6.6	"	外面、丁寧な縱方向のハケ調整。		
330	#	#	— ( 4.4 ) — 7.4	若干、あげ底を呈し、直線的に立ち上がる。	外面、縱方向のハケ調整。		

辨認番号	場 位	器 性	法 量 (cm)	口徑 器高 頭徑 底径	形 態 ・文 様	手 法	備 考
331	第VI-VII層	対	— ( 4.7 ) — 7.9	—	上げ底気味の底を呈す。		外圓、磨耗する。
332	#	#	— ( 3.5 ) — 7.6	—	ほぼ平底を呈す。	外圓、縱方向のハケ調整。	
333	#	#	— ( 3.5 ) — 7.2	—	若干、上げ底を呈す。	外圓、縱方向のハケ調整。 内圓、指頭圧痕あり。	
334	#	#	— ( 3.1 ) — 8.0	—	若干、上げ底を呈し、直線的に立ち上がる。	内外面ともハケ調整。	
335	#	#	— ( 3.8 ) — 8.4	—	若干、上げ底を呈し、直線的に立ち上がる。下脚部端部に粘土の盛り上がりがみられる。	内圓、ナゲ調整。 外圓、縱方向のハケ調整。	
336	#	#	— ( 5.0 ) — 8.2	—	若干、上げ底を呈し、直線的に立ち上がる。	内圓、ナゲ調整。 ハケの木口による圧痕がみられる。 下脚部外側、指頭圧痕により、若干強めに出している。	
337	#	#	— ( 2.5 ) — 9.8	—	上げ底気味の底を呈す。		
338	#	#	— ( 3.7 ) — 9.1	—	若干、上げ底を呈す。	外圓、縱方向のハケ調整。	
339	#	#	— ( 4.9 ) — 6.6	—	若干、上げ底を呈し、直線的に立ち上がる。下脚部端部には、粘土の盛り上がりがみられる。	外圓、縱方向のハケ調整。 内圓、指頭圧痕あり。	
340	#	#	— ( 4.0 ) — 8.4	—	平底を呈す。	外圓、右下がりのハケ調整。 下脚部端部に指頭圧痕あり。	
341	#	#	— ( 7.2 ) — 7.6	—	平底を呈す。ほぼ中央部に横円形の穿孔あり。	外圓、縱方向のハケ調整。 下脚部外側端部に指頭圧痕あり。 内圓、指頭圧痕あり。	瓶である。
342	#	#	— ( 3.8 ) — 9.0	—	上げ底を呈す。		内外面とも磨耗する。
343	#	#	— ( 4.2 ) — 7.6	—	"	下脚部外側端部に指頭圧痕あり。	
344	#	#	— ( 4.1 ) — 7.6	—	上げ底気味の底部を呈し、1cm程、まっすぐに立ち上がり反する。	"	
345	#	#	— ( 5.0 ) — 8.0	—	ほぼ平底を呈す。		磨耗が激しい。

持込番号	層 位	基 標	法量 (cm)	口徑 器高 底径	形 狽・文 様	手 法	備 考
346	第Ⅳ・耳層	裏	— ( 4.2 ) — 8.2	—	上げ底気味の底を呈す。	外面、縦方向のハケ調整。 内面、指頭圧痕あり。	
347	#	#	— ( 4.9 ) — 8.6	—	上げ底気味の底を呈し、直線的に立ち上がる。	#	
348	#	#	— ( 4.6 ) — 8.4	—	上げ底を呈す。		
349	#	#	— ( 5.9 ) — 12.0	—	上げ底気味の底を呈す。ほぼ中央部に円形の穿孔あり。	外面、縦方向のハケ調整。 瓶である。	
350	#	#	— ( 7.4 ) — 7.0	—	上げ底気味の底を呈し、力強く立った底部から、内面気味に立ち上がる。	外面、丁寧な縦方向のハケ調整。	
351	#	#	— ( 6.3 ) — 7.9	—	上げ底気味の底を呈し、直線的に立ち上がる。	外面、縦方向のハケ調整。	
352	#	#	— ( 6.4 ) — 7.8	—	若干、上げ底を呈す。	内面、指頭圧痕あり。	外面、磨耗。
353	#	#	— ( 6.2 ) — 9.2	—	#	外面、縦方向のハケ調整。	
354	#	#	20.1 23.6 20.2 7.4	—	平底を呈し、口縁部は如意形に外反する。口縁部は外傾する面をなし、下部に筋目を配す。底部中央部に穿孔あり。	脚部、縦方向のハケ調整。 口縁部外面、横ナブ調整。 内面、指頭圧痕あり。	瓶である。
355	#	高杯	— ( 16.3 ) — 15.0	—	脚部は柱状部から直線的に開き、縫合部で強く外反する。縫合部は丸くおさめる。	外因、砂粒が多く露出している。 指頭圧痕あり。	
356	#	#	— ( 7.3 ) 5.5 —	—	脚部、杯部とともに大きく直線的に開く。	杯部外面、ヘラ磨き。 脚部内外面とも指頭圧痕あり。	丹能り。
357	#	#	— ( 9.1 ) 5.3 12.2	—	脚部は柱状部から直線的に開き、縫合部でやや外反する。縫合部は丸くおさめる。	柱状部外面、指頭圧痕あり。 脚部内面、指頭圧痕あり。	
358	#	鉢	— ( 5.3 ) — 6.4	—	高台状の上げ底を呈す。	外面、縦方向の丁寧なハケ調整。 内面、ヘラ磨き。	
359	#	#	— ( 4.6 ) — 8.0	—	しっかりした上げ底を呈す。	#	
360	#	#	— ( 4.3 ) — 5.2	—	上げ底を呈し、強く外反して立ち上がる。	外面、縦方向のハケ調整。 内面、指頭圧痕あり。	

辨認番号	層位	器種	法量 (cm)	口径 器高 深径 底径	形態・文様	手法	備考
361	新石・旧石	甕	— ( 9.4 ) — —	やや内湾気味に立ち上がる。	外面、縦方向のハケ調整。 内面、ナガ調整。 底部に指輪圧痕あり。	底面、破損。	
362	#	鉢	25.0 ( 7.0 ) —	大型の鉢形土器で、口縁部がなめらかに外反する。口唇部は丸くおさめる。	口縁部内面、横方向のヘラ磨き。		
363	#	#	25.0 ( 6.2 ) —	大型の鉢形土器で、口縁部がなめらかに外反する。口唇部は外側する面をなす。			透光が悪い。
364	#	#	33.4 27.2 33.4 9.4 —	口縁部が大きく張り出し、口縁部はなめらかに外反する。口唇部は外側する面をなす。平底を呈す。	口縁部 内外面ともヘラ磨き。 底部外面、ヘラ磨き。内面、指輪圧痕あり。		
365	#	#	16.2 ( 11.6 ) 17.4 —	口縁部が内湾して終わる。口唇部は水平な面をなす。	内面、ヘラ磨き。	外周、磨耗が悪い。	
366	#	#	17.4 ( 4.4 ) — —	口縁部が、やや内湾して終わる。口唇部は水平な面をなす。	内外面ともヘラ磨き。		
367	#	#	17.2 ( 3.0 ) — —	口縁部が直口して終わる。口唇部は丸くおさめる。	内外面ともハケ調整。 口唇部、横方向のナガ調整。		
368	#	#	21.8 ( 4.8 ) —	口縁部が直口して終わる。口唇部は丸くおさめる。	内外面ともヘラ磨き。 内面、指輪圧痕あり。		
369	#	浅鉢	22.1 ( 7.8 ) — —	口縁部で強く屈曲し、内傾して口縁部は大きく外反する。器体部外面 上下に 2 本ずつのヘラ延沈痕、周辺部に弱い刻目あり。 口唇部は直面をなす。	外周、ヘラ磨き。		
370	#	鉢	28.4 ( 6.2 ) —	上縁部で、まっすぐに立ち上がり、口縁部は、やや外反する。口唇部は外側する面をなす。			
371	#	#	30.4 ( 5.0 ) — —	"	内外面とも丁寧なヘラ磨き。		
372	#	#	19.6 ( 3.0 ) — —	口縁部が直口して終わる。口唇部は外側する面をなす。	"		
373	#	#	10.6 ( 2.9 ) — —	口縁部が直口して終わる。口唇部は丸くおさめる。			
374	#	#	17.2 ( 3.2 ) — —	口縁部は直線的に外方に立ち上がる。小型のもので、口唇部は丸くおさめる。	口縁部 内面、横方向のナガ調整。		
375	#	#	20.0 ( 4.1 ) — —	底盤から直線的に外方に立ち上がる。小型のもので、口唇部は丸くおさめる。	内面、横方向のナガ調整。	外周、磨耗が悪い。	

特徴番号	部位	器種	法量 [cm] は径 高さ 周辺 底径	形態・文様	手 法	備 考
376	脛羽・垂直	鉢	17.4 ( 5.0) — —	口縁部が直口して終わり、口唇部が外傾する面をなす。		
377	—	—	24.2 ( 7.8) — —	—		磨耗が激しい。
378	—	—	25.1 ( 5.3) — —	口縁部が直口して終わり、口唇部は丸くおさめる。	内外面とも指頭圧痕あり。 口縁部 内外面とも横方向のナデ調整。	
379	—	—	18.8 ( 4.2) — —	口縁部が直口して終わり、口唇部は内傾する面をなす。	内外面とも横方向のナデ調整。	
380	—	—	17.0 ( 5.0) — —	胸部から内方に、ややそりながら立ち上がる。口唇部は外傾する面をなし、下端に前刃を加す。	口縁部内面、横方向のハケ調整。	
381	—	—	24.0 ( 5.8) — —	—	外面、横方向のハケ調整。 口縁部内面、横方向のハケ調整。	
382	—	—	25.0 ( 4.1) — —	—		
383	—	—	19.8 ( 4.5) — —	口縁部は如意形に外反し、口唇部は丸くおさめる。	口縁部内面、横方向のナデ調整により、棱ができる。 内外面ともへう焼き。	
384	—	—	22.8 ( 3.5) — —	—	—	
385	—	盞	— ( 6.0) — 5.2	天井部は粘土を持ち上げ、つまみをつくり、上げ底風にする。	外面、ハケ調整。 内面、指頭圧痕あり。	
386	—	—	20.8 ( 3.0) — —	口縁部はなめらかに外反し、口唇部は丸くおさめる。		
387	—	—	21.6 ( 4.0) — —	口縁部は直線的に外方から立ち上がる。口唇部は外傾する面をなす。		
388	—	—	13.0 ( 4.8) — —	口縁部はなめらかに外反し、口唇部は丸くおさめる。	外面、へう焼き。	
389	—	—	23.4 ( 2.8) — —	口縁部は直線的に外方から立ち上がる。口唇部は丸くおさめる。	外面、ハケ調整。	
390	—	粉錆甌	底径(5.0) 厚さ 0.7 重量(g)19.0	土器の破片を利用する。		

辨認番号	層位	器種	法量 (cm)	口径 高さ 厚さ 重さ(g)	形態・文様	手法	備考
391	第3・4層 防護壁	石器	直径 5.5 厚さ 0.6 重さ(g) 18.6	土器の破片を利用する。			

第51表 包含層出土石器観察表

辨認番号	層位	器種	最大長 計測値 (cm.)	最大幅 最大厚 重さ	材質	特徴	備考
392	第3・4層 石包丁		(8.4) 4.0 0.9 40.0		千枚岩	刃部の形態は不明。2個の円孔。孔の周囲を両面から敲打し、その後、両面から穿孔。	
393	#	石鏡	2.0 1.9 0.3 0.5		サヌカイト	四角形の打製石鏡である。ほぼ正三角形を呈し、基部が両方に盛り出す。一端は欠損、両面とも剥離面を残す。	
394	#	#	(3.0) (2.4) 0.3 1.6		#	四角形の打製石鏡である。片方が先端部から基部にかけて欠損。	
395	#	刀器	5.7 4.5 1.0 25.7		#	打製の刀器。両面とも剥離面を残す。	
396	#	#	10.7 7.5 1.7 170.0		#	両面とも剥離面を残す。	
397	#	#	9.8 4.0 1.0 40.0		#	打製の刀器。両面とも剥離面を残し、片面を刀部として使用。	

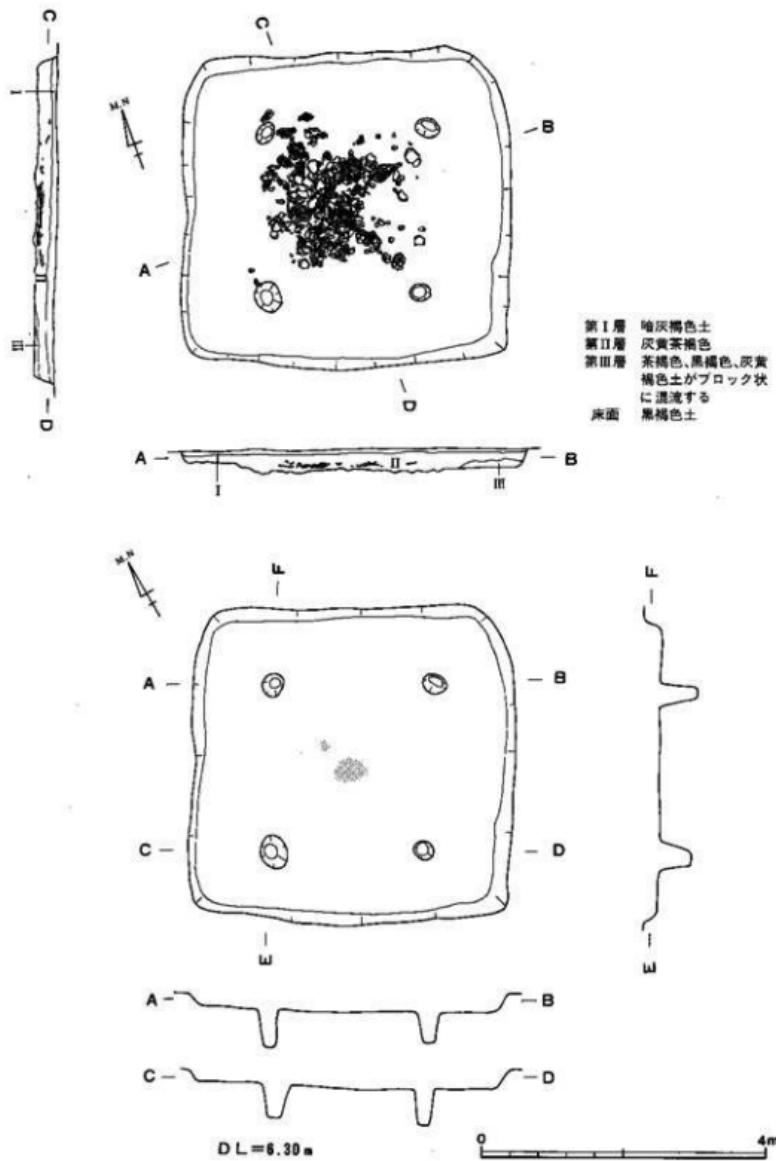
第52表 造構出土土器観察表

辨認番号	造構番号	器種	法量 (cm)	口径 高さ 厚さ 重さ	形態・文様	手法	備考
398	S T 1	壺	11.8 31.6 24.2 4.4	口部部はやや外反し、直線的に立ち上がり、口唇部は丸くさめる。底は平底を呈す。	口部部外側に右下がりのハケ調査。腹部全体に凹凸があり、下腹部に縦方向のハケ調査。内面に指跡压痕残り、底にハケ調査。		
399	#	#	14.9 27.5 21.8 4.9	頭部面部が「く」の字形を呈し、口唇部をつまみ、握りしている。内面に縦を形成し、腹部は強く張り出る。底はやや丸底。	口部部外側に右下がりのハケ調査。腹部全体に凹凸があり、下腹部に縦方向のハケ調査。口部部内面に横方向のハケ調査。下脚部、底部のナデ痕残。		
400	#	#	12.4 32.8 24.5 4.0	頭部面部が「く」の字形を呈し、口唇部は外傾する面をなす。内面に縦を形成する。腹部は強く張り出る。底はやや丸底。	口部部内外面とも右下がりのハケ調査。内面、中脚部から底、底方面にハケ調査。内面、腹部、頭部全体に凹凸があり、下腹部に縦方向のハケ調査。		
401	#	#	13.0 33.1 24.0 4.7	頭部面部が「く」の字形を呈し、強く外反している。口唇部は外傾する面をなす。底はやや丸底。	口部部外側、腹方向のハケ調査。腹部全体に凹凸があり、下腹部に縦方向のハケ調査。口部部内面にハケ調査と指跡压痕残り。頭部全体にヘラ削り。		

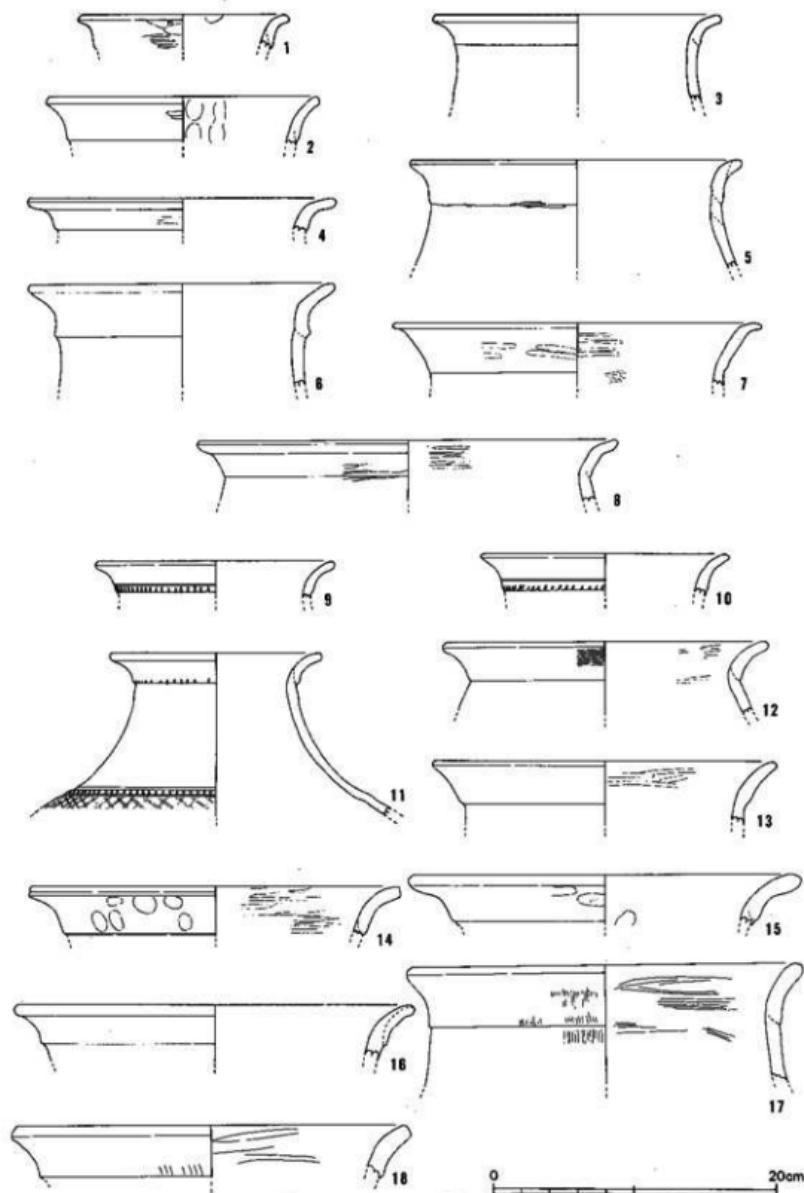
辨認番号	造模番号	器種	法量 (cm)	口唇部 脣厚 脣径 底径	形態・文様	手 法	備 考
402	S T 1	齒	16.8 (4.5) —	二重口唇の走である。 一浅外反した口縁部は、内側せずそのまま成立する。			内外面とも遮断する。
403	#	#	19.3 (2.6) —	#			#
404	#	#	11.8 33.1 24.3 4.5	口縁部はやや外反し、直線的に立ち上から、口唇部は外傾する面をなす。舌子下垂している。脣部は丸底を呈し、脣部は強く張り出す。	口縫部内外面とも右下がりのハケ調整。内面全体に凹面方向のハケ調整。内面全体に口唇部底径部、脣部全体に口唇部底径部、脣部全体にハケ調整により、下顎を削る。		
405	#	#	(30.5) 26.2 5.3	口縁部は直線的に立ち上かり、口唇部は外傾している。脣部は球形を呈し、底は平底である。	口縫部外周、縦方向のハケ調整。脣部外周全体に印目底。そのうち全体にハケ調整。内面、上脣部にハケ調整。下脣部ハケ調整。		
406	#	蝶	9.9 24.0 15.5 3.9	脣部の屈折はゆるやかであり、口唇部は丸底を呈する。脣部は強く張り出す。底部は丸底を呈す。	外面、脣部も含め、全体に印目底があり、そのうち、口縫部と下脣部にハケ調整を施す。内面、中脣部から下脣部へハケ削り。上脣部には脂肪圧縮が残る。		
407	#	#	12.5 21.4 14.9 2.7	脣部の屈折はゆるやかであり、口唇部は外傾する面をなす。脣部はやや張り出し、底部は丸底を呈す。	外面、口縫部も含め、全体に印目底があり、そのうち、口縫部と下脣部にハケ調整を施す。内面、中脣部から下脣部へハケ削り。上脣部には脂肪圧縮が残る。		
408	#	#	12.0 23.6 15.6 2.8	脣部の屈折はゆるやかであり、口唇部は外傾する面をなす。脣部はやや張り出し、底部は平底を呈す。	外面全体に印目底あり。口縫部はナゲ調整により、印目が消える。中脣部から底まで縦方向のハケ調整。内面、脣部はハラ削りのちハケ調整。上脣部には脂肪圧縮が残り、口縫部はハケ調整。		
409	#	#	14.0 24.1 16.4 3.2	脣部曲折部は「く」の字形を呈するが、ややゆるやかである。口唇部は凹状を呈す。脣部はやや張り出し、底は丸底を呈す。	外面全体に印目底あり。口縫部は右下がりのハケ調整により、印目がほとんど消され、下脣部には縦方向のハケ調整を施す。内面、口縫部及び上脣部にハケ調整。		
410	#	#	13.0 25.3 17.2 2.6	脣部の屈折は「く」の字形を呈するが、ややゆるやかである。口唇部は外傾する面をなす。脣部は張り出し、底は平底を呈す。	外面全体に印目底あり。口縫部は右下がりのハケ調整。下脣部には縦方向のハケ調整。内面口縫部及び下脣部にハケ調整。脣部にハラ削り。		
411	#	#	— (9.9) — 2.9	#底を呈す。	外面全体に印目底を施したのち、下脣部に縦方向のハケ調整。		
412	#	#	13.6 26.2 17.9 2.5	脣部の屈折は「く」の字形を呈するが、ゆるやかである。口唇部は外傾する面をなす。脣部は張り出し、底は丸底を呈す。口唇部は凹状を呈す。	外面、口縫部を含め全体に印目底あり。口縫部はハケ調整。下脣部には縦方向のハケ調整。内面口縫部及び下脣部にハケ調整。脣部にハラ削り。		
413	#	#	15.0 26.7 20.8 3.5	脣部の屈折は「く」の字形。内面に後枝を形成する。脣部は強く張り出し、底は丸底を呈す。口唇部は凹状を呈す。	外面、口縫部を含め全体に印目底あり。口縫部はハケ調整。脣部に縦方向のハケ調整。内面口縫部及び下脣部にハケ調整。脣部にハラ削り。		
414	#	#	16.0 28.2 22.2 3.2	脣部の屈折は「く」の字形。内面に後枝を形成する。脣部は強く張り出し、底は丸底を呈す。口唇部は外傾する面をなす。	脣部外周に印目底あり。下脣部、縦方向のハケ調整。脣部内面、ハラ削り。	外面部に筋状化物付着。	
415	#	#	24.4 (25.5) 25.8	脣部の屈折はゆるやかである。口唇部は外傾する面をなし、内面に後枝を形成する。脣部はあまり張らない。	外面、口縫部を含め全体に印目底あり。口縫部、口縫部にハケ調整。脣部に縦方向のハケ調整。内面全体にハケ調整。		
416	#	#	11.0 (19.7) 15.0	口縫部はゆるやかに外反し、口唇部は外傾する面をなし、脣部をつまみ厚くする。脣部はやや張り出す。	外面、口縫部を含め全体に印目底あり。口縫部、口縫部にハケ調整。脣部に縦方向のハケ調整。上脣部内面に脂肪圧縮が残り、口縫部、下脣部にハケ調整。		

辨認番号	識別番号	器種	平均 最高 駆逐 距離 (cm)	形態・文様	手法	備考
417	S T 1	蝶	13.6 27.1 18.4 3.0	頭部の屈折は「く」の字形。内面に複数形成し、口唇部は外傾する面をなす。頭部は張り出し、翅は平底を呈す。	外側、口唇部も含め全体に叩目痕あり。前部、下脚部にハケ調整。口縫部内面にはハケ調整。口縫部・上脚部に指頭圧痕残る。	頭部外面に傷状風化物付着。
418	#	#	13.9 (18.8) 19.2	頭部の屈折は「く」の字形。内面に複数形成し、口唇部はつまみ厚くし、外傾する面をなす。	外側全体に叩目痕あり。下脚部にハケ調整。口縫部内面、右下「け」のハケ調整。脚部、ところどころにハケ調整。指頭圧痕残る。	
419	#	#	16.8 28.7 20.9 3.1	頭部の屈折は、しっかりした「く」の字形を呈し、内面にもしっかりした筋が形成される。口唇部は水平な面をなし、頭部は強く張り出す。翅は平底。	脚部外側に叩目痕あり。口縫部、下脚部にハケ調整。内面全体に指頭圧痕残る。	頭部外面に傷状風化物付着。
420	#	#	— (11.5) 15.5 2.6	平底を呈す。	下脚部のみ、叩目ののち、ハケ調整が残る。	全体に磨耗が激しい。
421	#	#	13.5 27.0 18.0 3.0	頭部の屈折は「く」の字形を呈するが、ゆるやかである。口唇部をつまみ厚くし、外傾する面をなす。頭部はやや張り出し、翅は平底を呈す。	外側全体に叩目痕。内面全体にハケ調整。口縫部外側、若干のハケ調整。	
422	#	#	14.7 (16.1) 22.0	頭部の屈折は「く」の字形を呈し、口縫部はゆるやかに外反する。口唇部は外傾する面をなす。	外側に叩目痕。口縫部内外側ともハケ調整。	
423	#	#	15.4 (13.7) 20.8	LJ縫部はゆるやかに外反し、口唇部は外傾する面をなす。頭部は張り出す。	外側に叩目痕。口縫部から上脚部、ハケ調整。口縫部内面に横方向のハケ調整。脚部にヘラ削り。上脚部、指頭圧痕残る。	
424	#	#	— (15.0) 20.8 3.4	平底を呈す。	外側に叩目痕。下脚部に縱方向のハケ調整。内面、粘土の接合部に指頭圧痕残る。	
425	#	#	— (8.3) 3.4	#		磨耗が激しい。
426	#	#	15.0 (14.0) 19.7	頭部の屈折はゆるやかであり、口唇部は外傾する面をなす。	外側に叩目痕あり。口縫部にハケ調整を施し、ほとんど叩目が消している。内面、口縫部・上脚部にハケ調整。	
427	#	#	— (13.5) 21.7 2.0	丸底を呈す。	外側に叩目痕あり。下脚部、ハケ調整。内面、指頭圧痕残る。	
428	#	#	— (14.0) 19.2 4.4	平底を呈す。	脚部、縱方向のハケ調整により、ほとんど叩目が消される。	
429	#	#	14.6 (8.3) —	頭部の屈折は、ゆるやかな「く」の字形を呈し、口唇部は外傾する面をなす。	外側、叩目痕あり。口縫部は右下「け」のハケ調整により、叩目を消す。口縫部内面、縦方向のハケ調整。内面、指頭圧痕残る。	
430	#	#	14.2 (6.5) —	頭部の屈折は「く」の字形を呈す。口唇部は外傾する面をなす。		磨耗が激しい。
431	#	#	— (25.0) 24.7 4.5	平底を呈す。	外側全体に叩目痕あり。下脚部、縦方向にハケ調整。内面、ヘラ削り。	

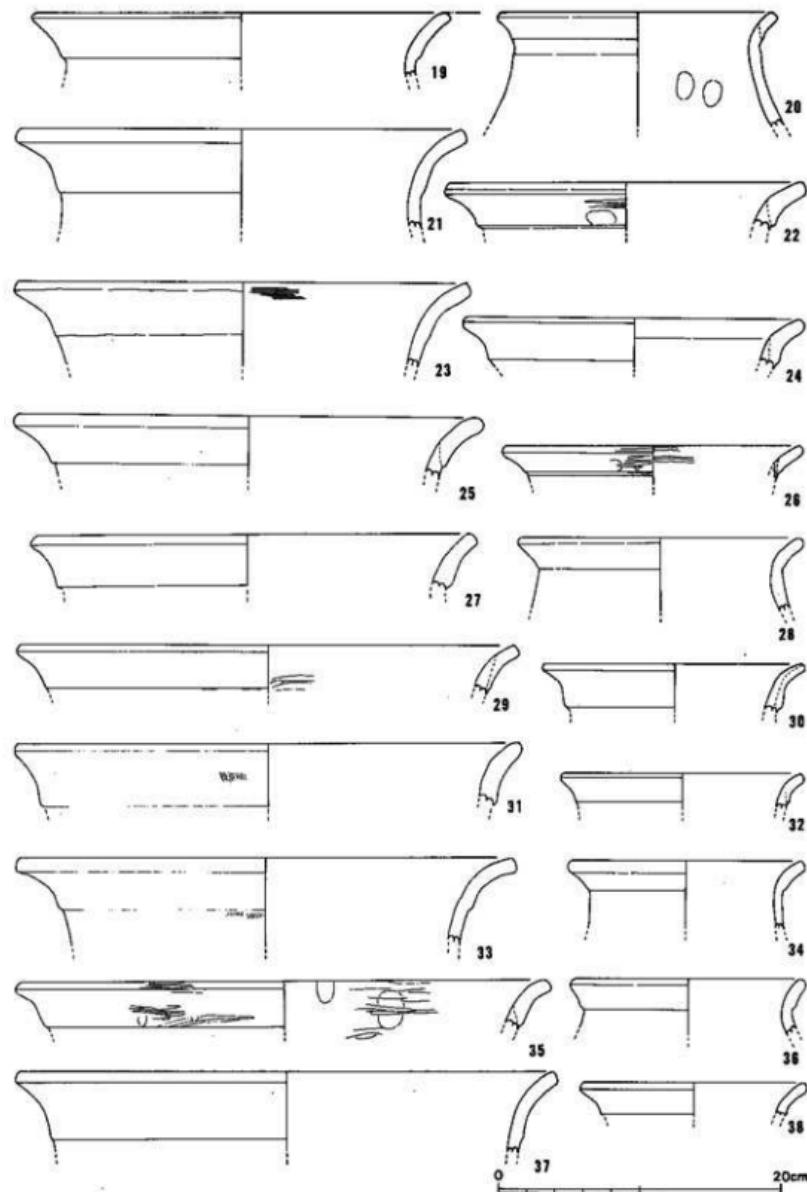
押抜番号	造模番号	器種	法量 (cm)	口径 最高 最低 底径	形態・文様	手 法	備考
432	S T 1	甌	— (23.0) 16.4 3.0	ほぼ平底を呈し、肩部はやや張り出す。	外周全体に印目痕あり。中脚部から底まで輻方向のハケ調整。脚部内面に丁寧なハケ調整。		
433	#	#	— (6.9) — 3.0	平底を呈す。	外周、印目ののち、輻方向のハケ調整。内面、指頭圧痕残る。		
434	#	#	— (12.1) 16.4 2.7	#	外周、印目ののち、輻方向のハケ調整。内面、経方向のハケ調整。指頭圧痕残る。		
435	#	#	— (17.0) 17.5 3.1	ほぼ平底を呈す。	外周、印目痕あり。下脚部、輻方向のハケ調整。内面、脚部にはヘラ削り、底には指頭圧痕残る。		
436	#	甌	14.4 6.2 — 2.0	丸底に近い小さな平底を呈す。口唇部は凹状をなす。	内面、指頭圧痕残る。		
437	#	#	9.2 4.7 — 1.8	平底を呈す。口唇部は外傾する面をなす。	外周、下脚部にハケ調整。内面、ヘラ削り。		
438	#	#	15.0 6.3 — 5.0	丸底を呈す。口唇部は外傾する面をなす。	内面、右下がりのハケ調整。	内面にモミ痕あり。	
439	#	#	14.0 6.1 — 1.4	小さな平底を呈す。口唇部をつまみ出して、外傾する面をなす。	外周、印目痕あり。下脚部にハケ調整。内面、放射線状に細かいハケ原体によるハケ調整。		
440	#	#	15.9 6.2 — 3.0	平底を呈す。口唇部は外傾する面をなす。	内面、放射線状にハケ調整。底に指頭圧痕残る。		
441	#	#	15.2 8.4 — —	丸底を呈す。口唇部は水平な面をなす。	外周、全体に印目ののち、ナデ調整。内面、右下がりのハケ調整。		
442	#	#	17.8 6.6 — —	丸底を呈す。口唇部は外傾する面をなす。	内面、指頭圧痕が残る。右下がりのハケ調整。		
443	#	#	19.6 6.4 — 4.0	平底を呈す。口唇部は外傾する面をなす。	内面、放射線状にハケ調整。		
444	#	彷彿甌	直徑 (6.8) 重量(g)32.0	蝶形をなし、中央に神を刺し込む穴を形成。			



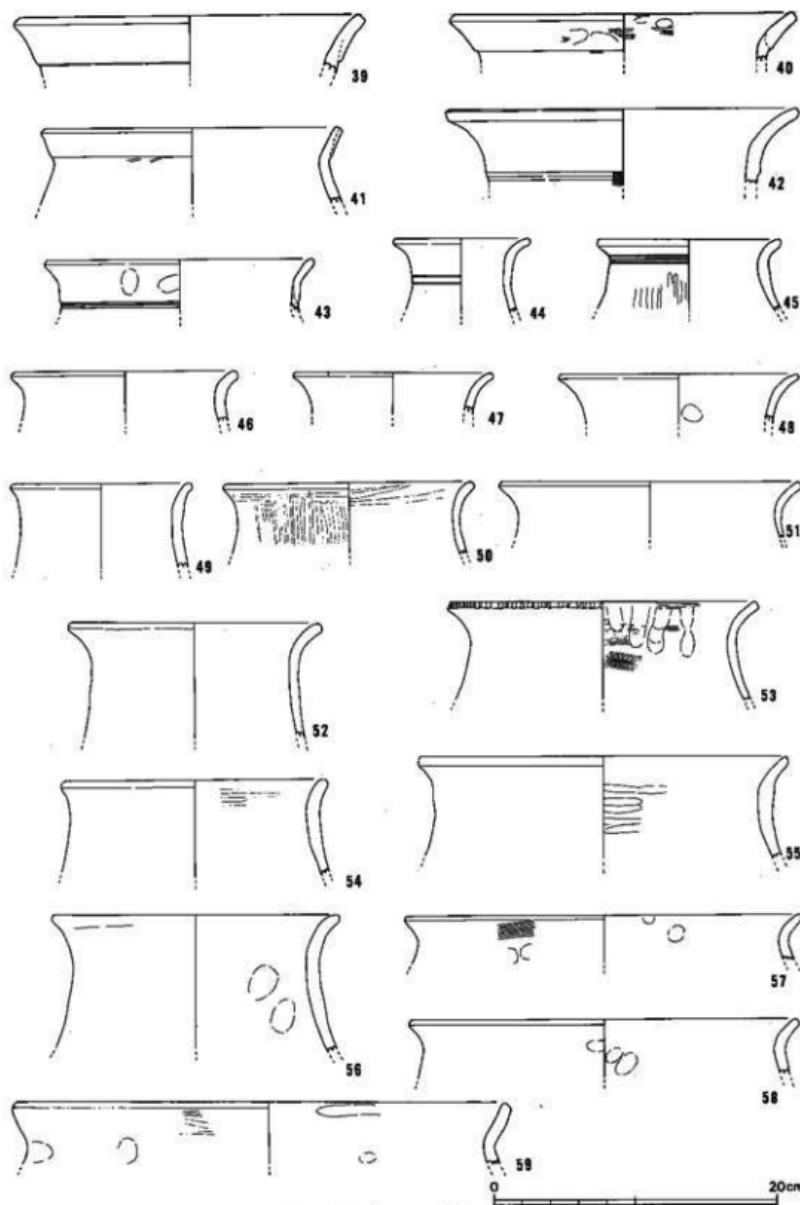
第186図 ST 1



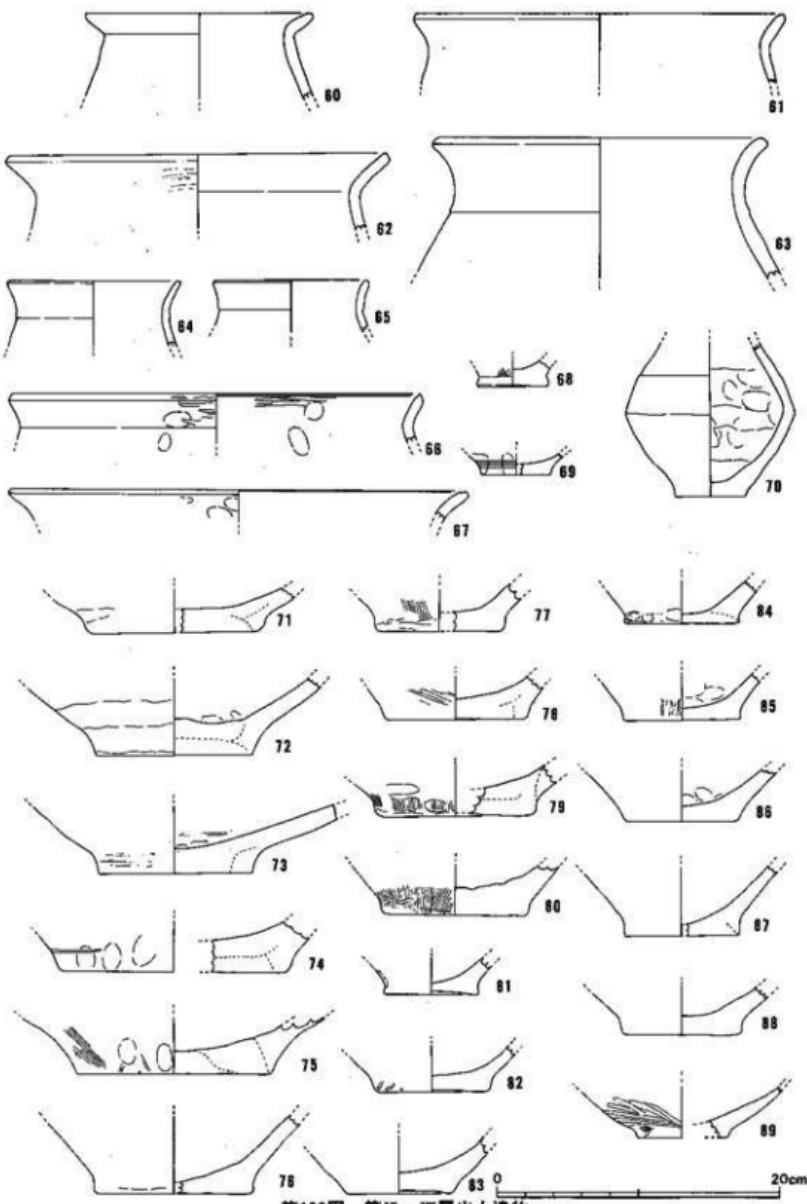
第187図 第VI・VII層出土遺物



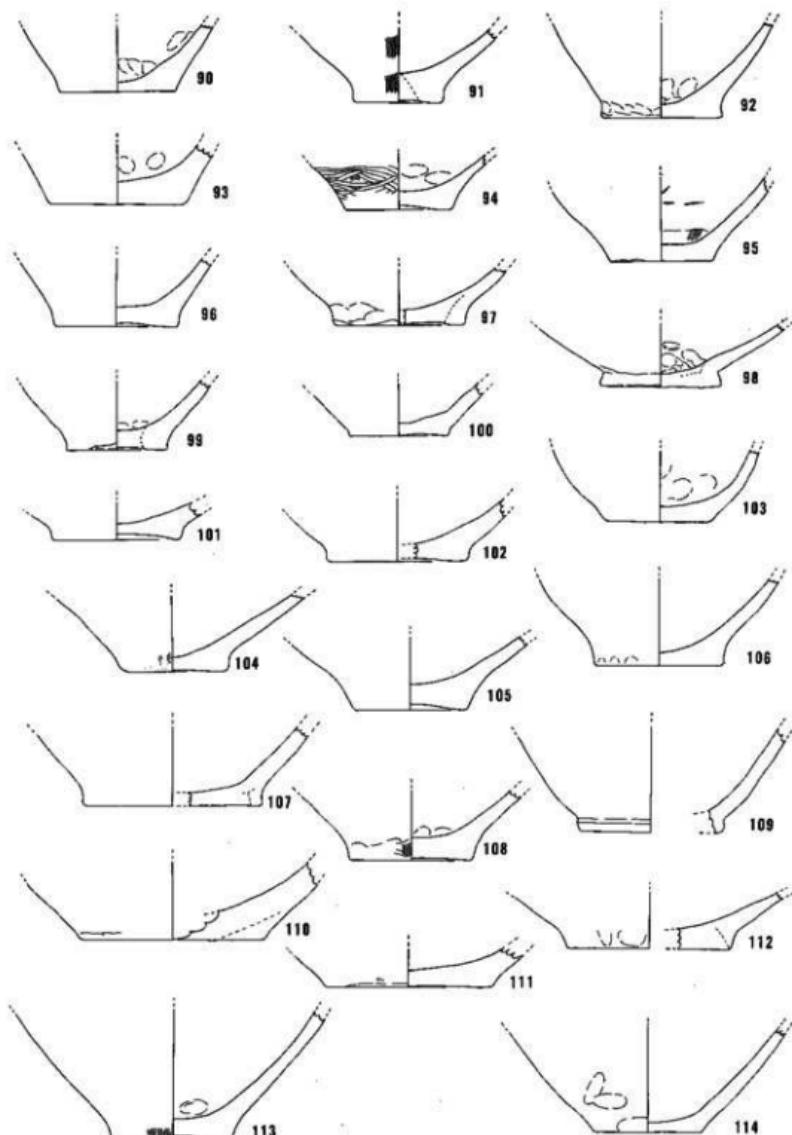
第188図 第VI・VII層出土遺物



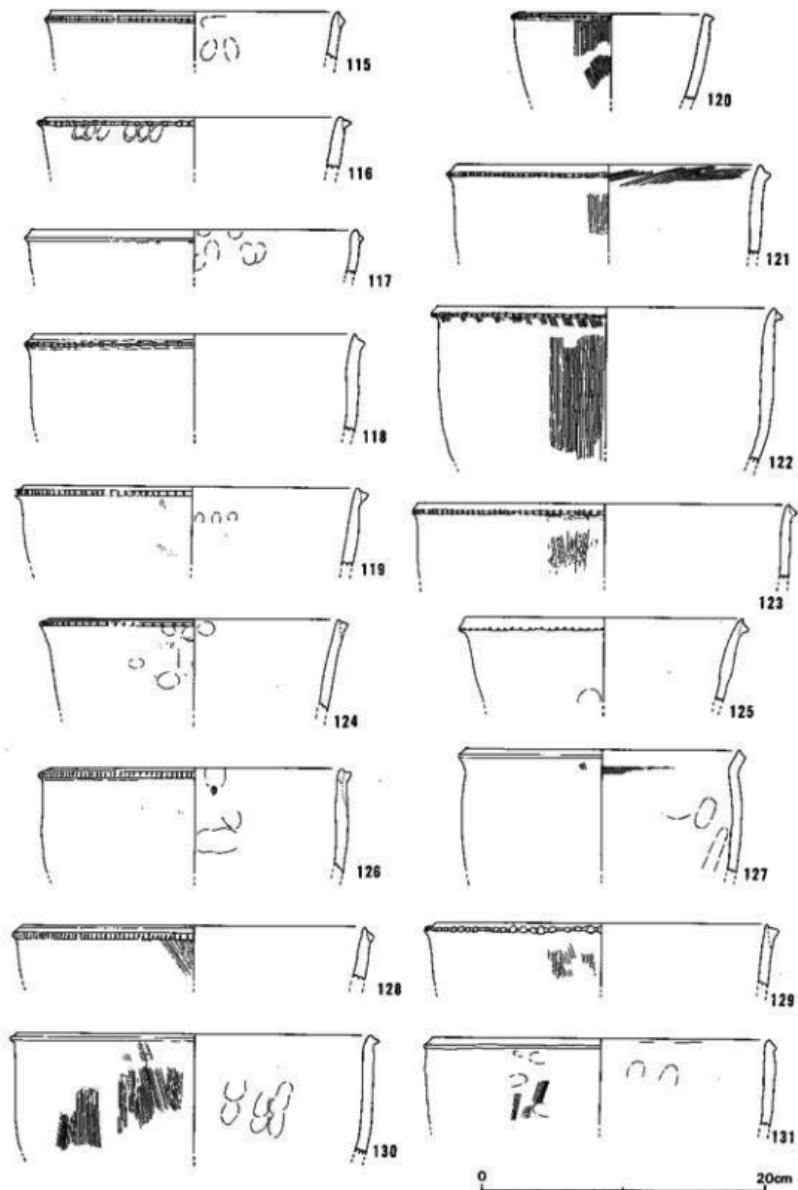
第189図 第VI・VII層出土遺物



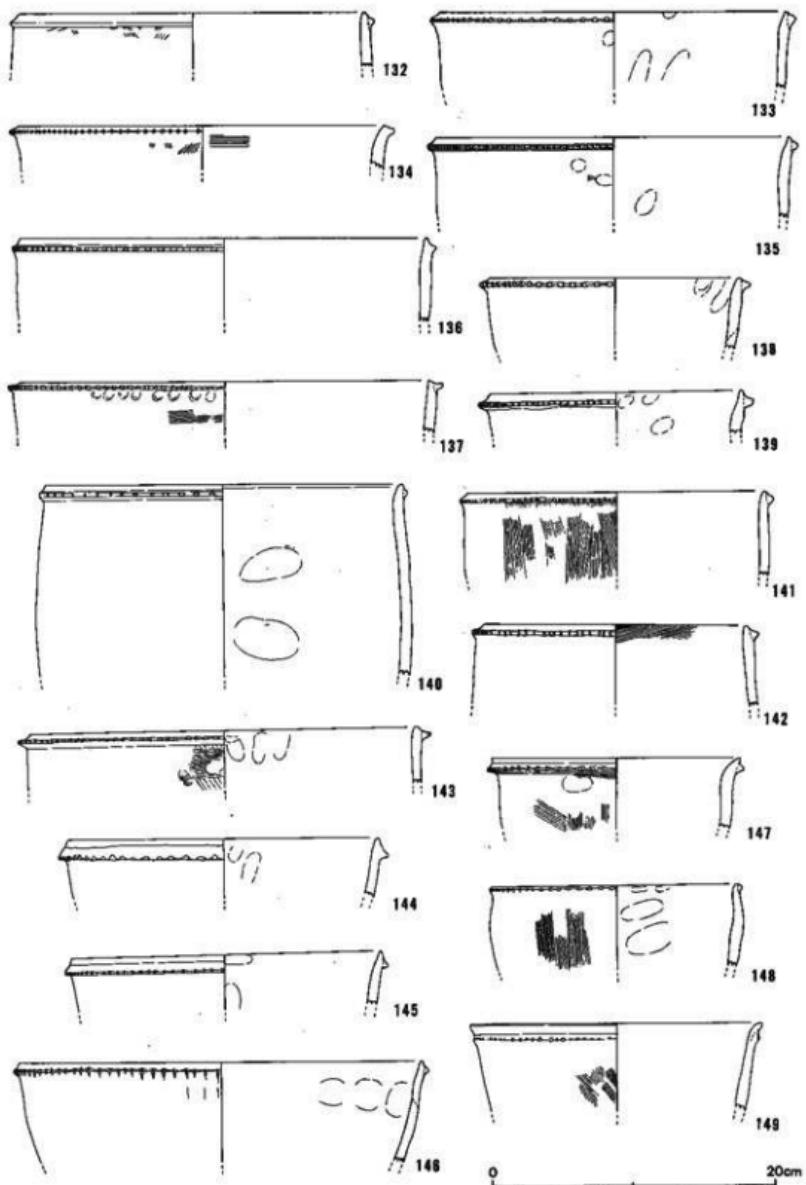
第190図 第VI・VII層出土遺物



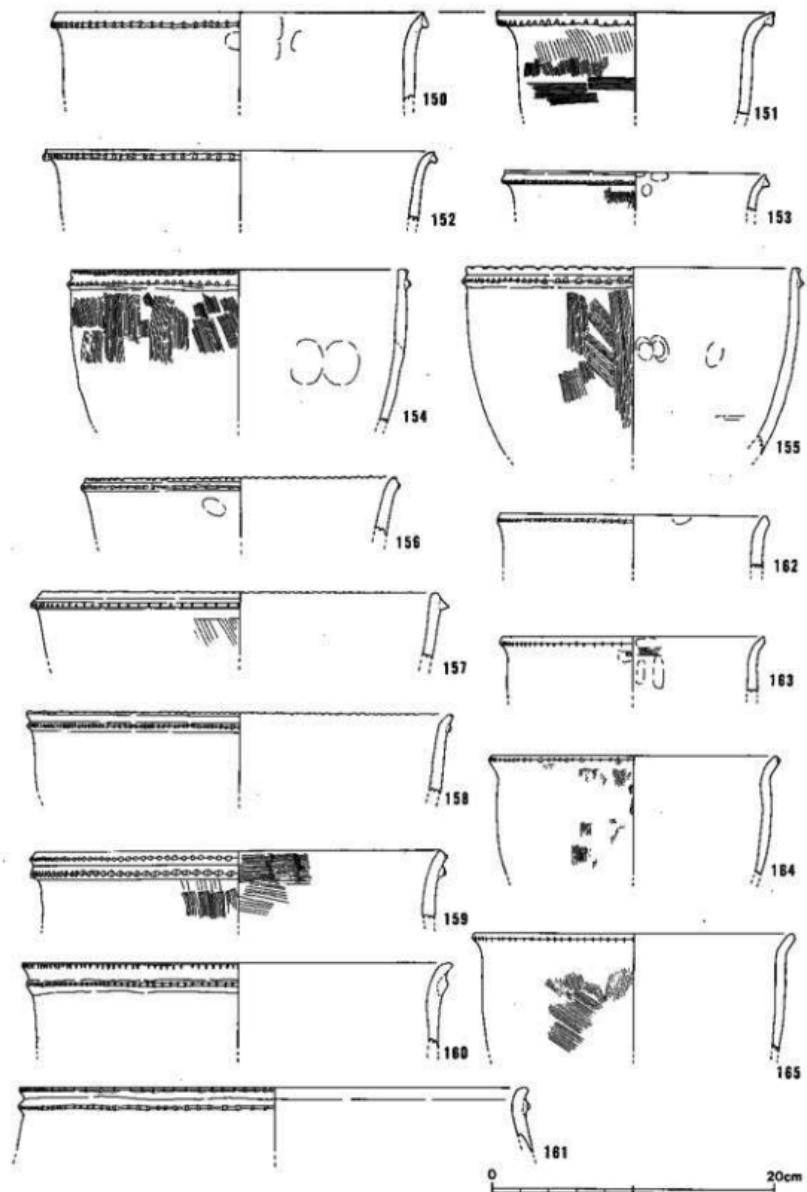
第181図 第VI・VII層出土遺物



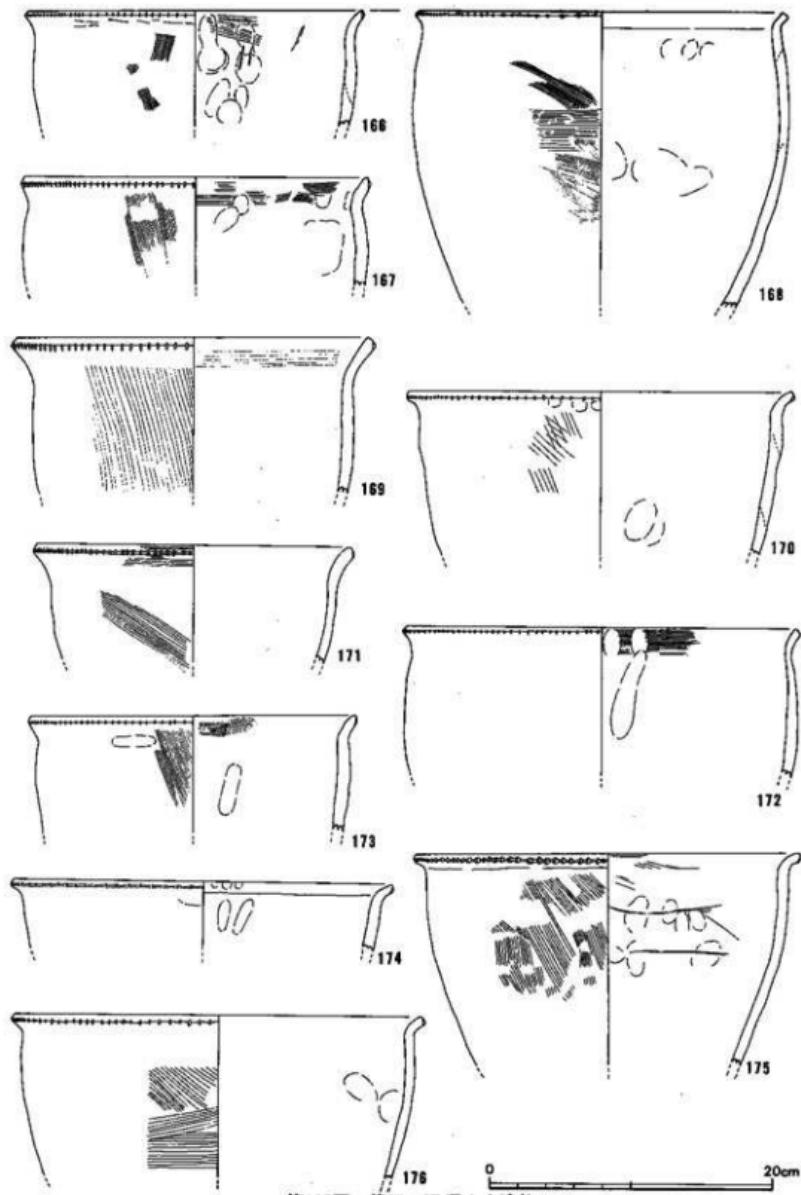
第192図 第VI・VII層出土遺物



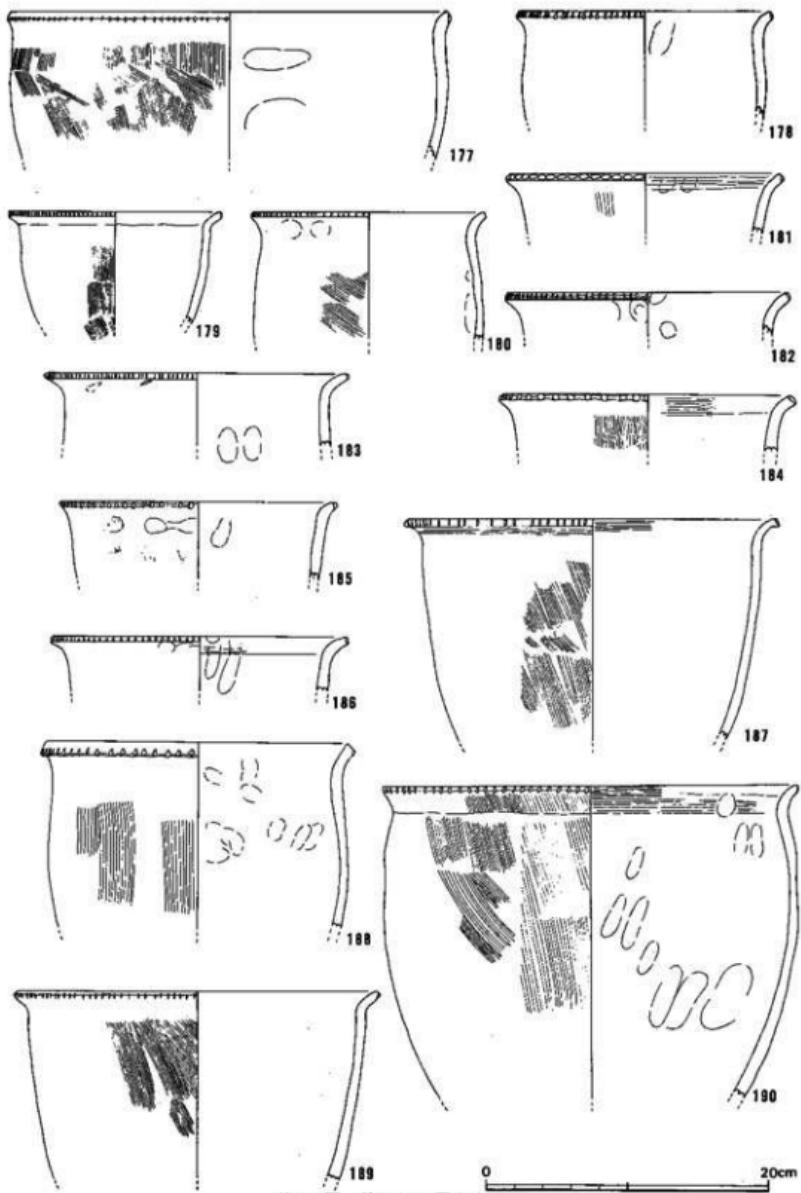
第183図 第VI・VII層出土遺物



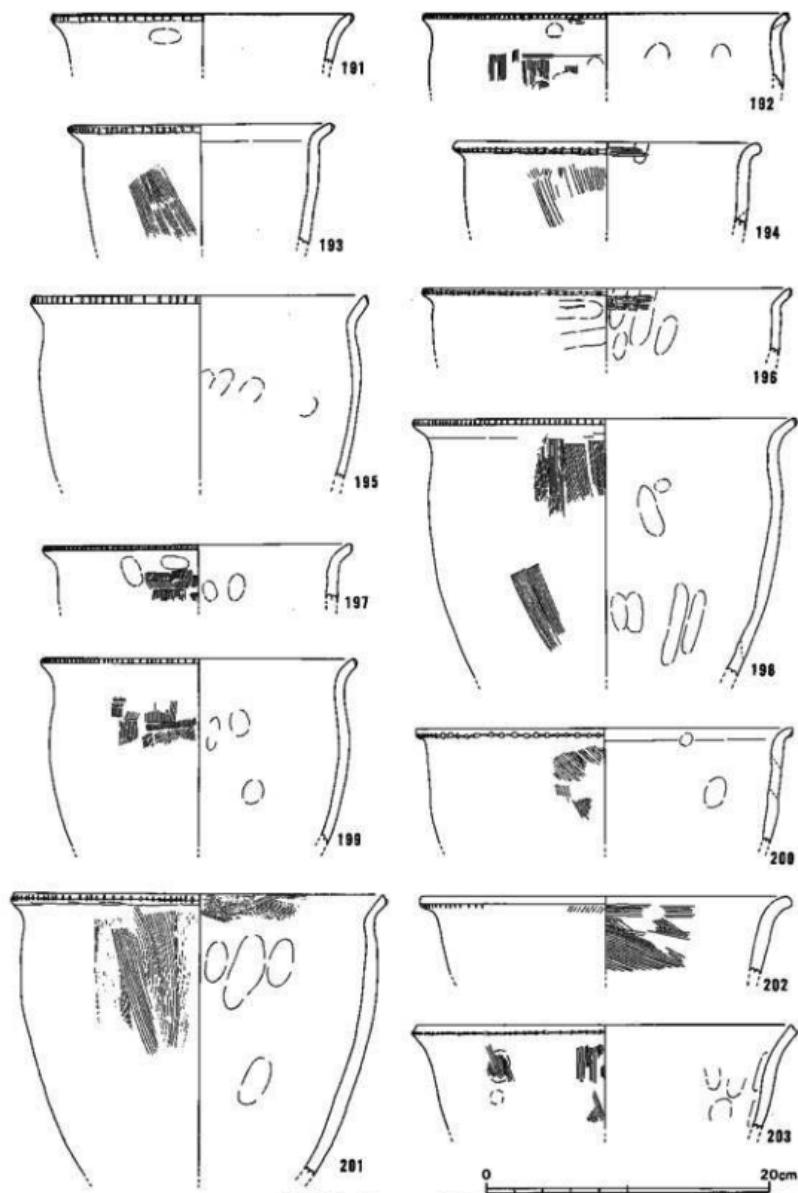
第194図 第VI・VII層出土遺物



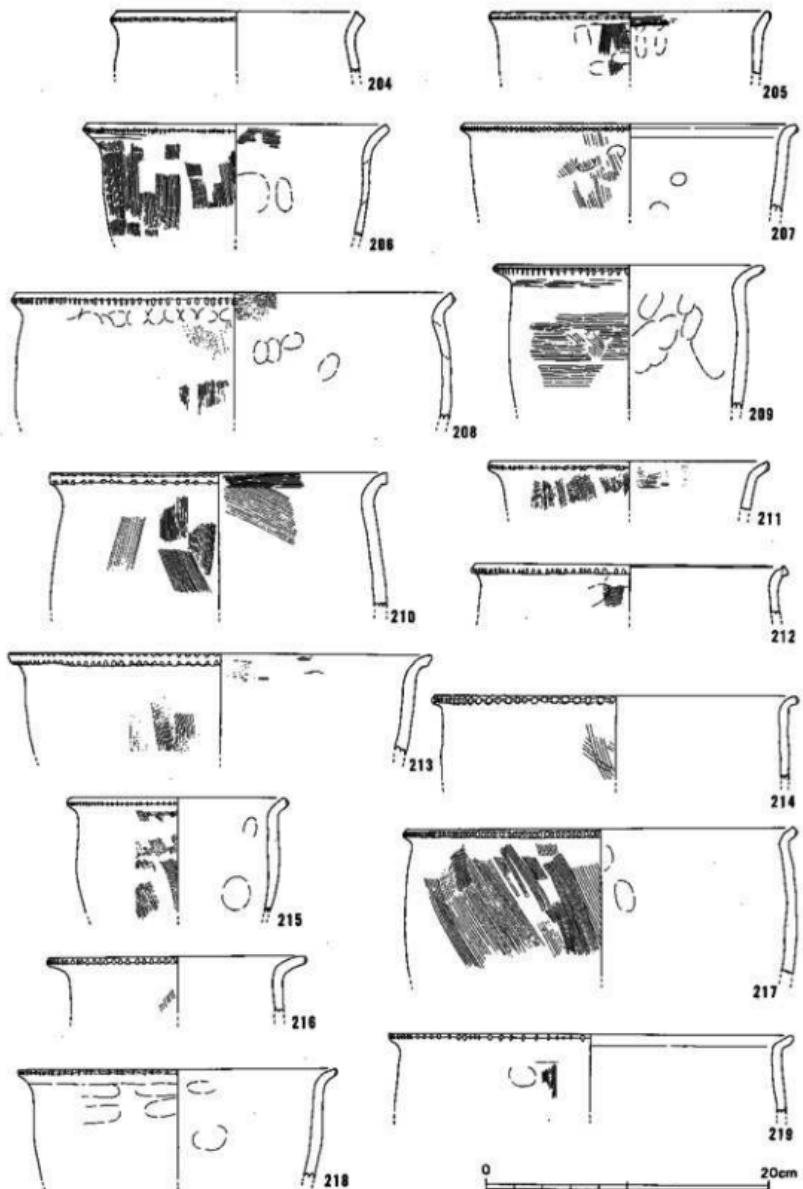
第195図 第VI・VII層出土遺物



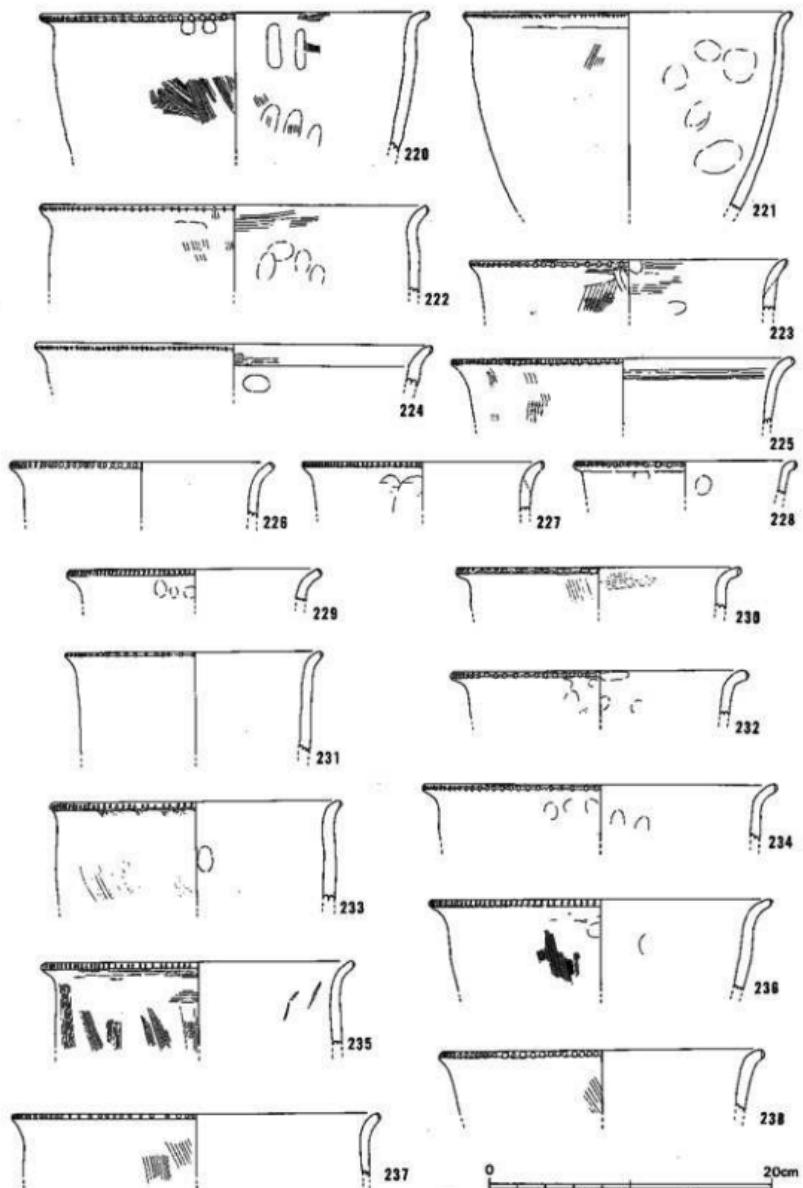
第196図 第VI・VII層出土遺物



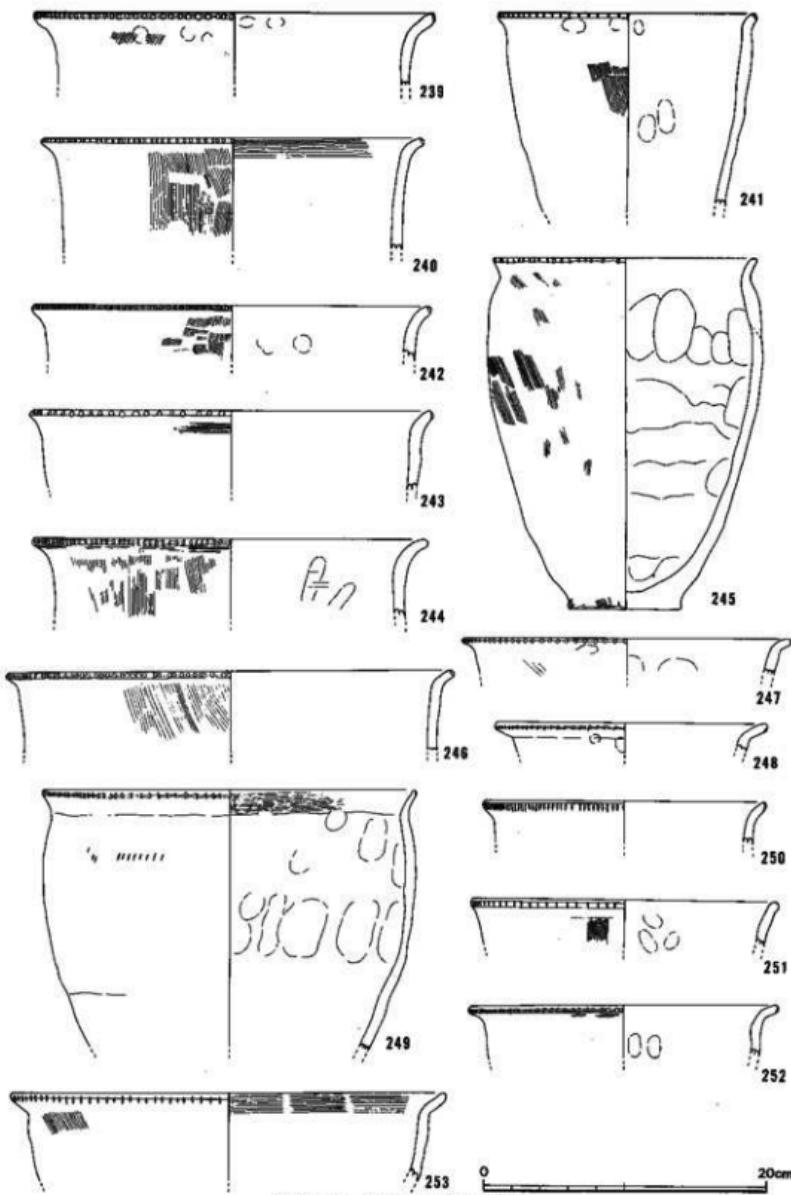
第197図 第VI・VII層出土遺物



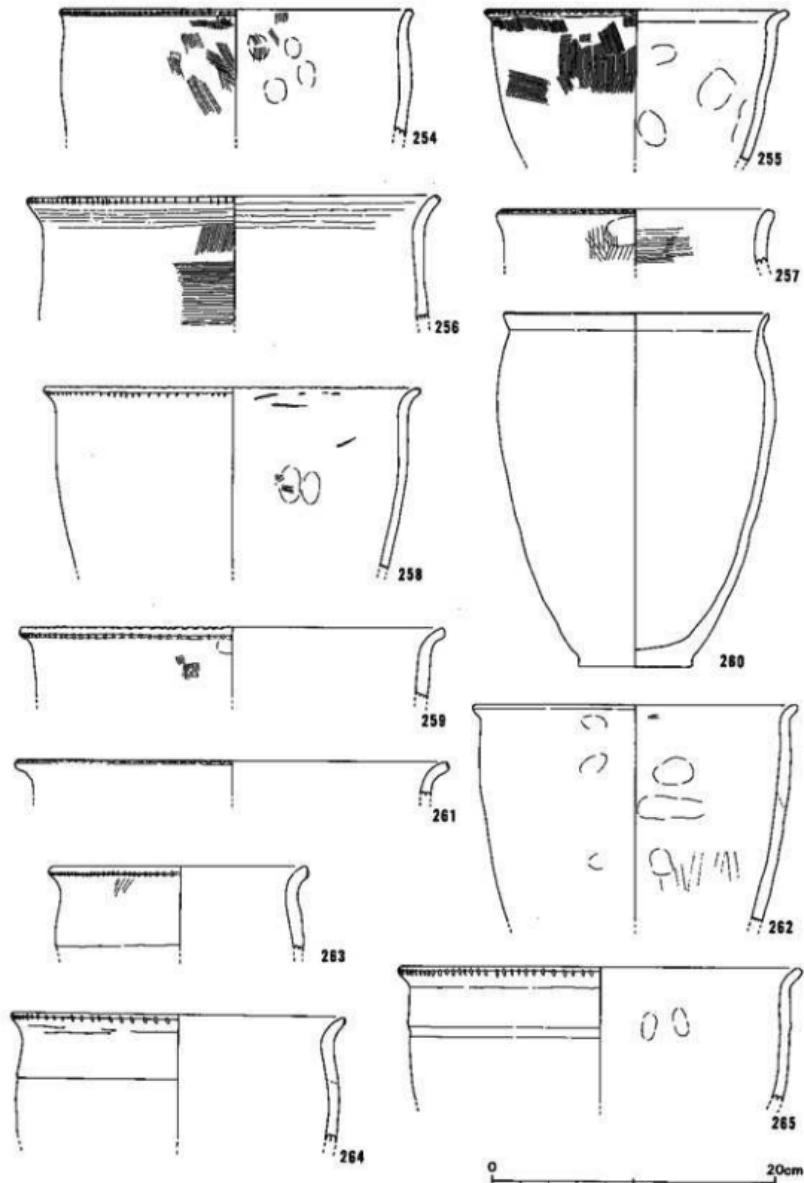
第198図 第VI・VII層出土遺物



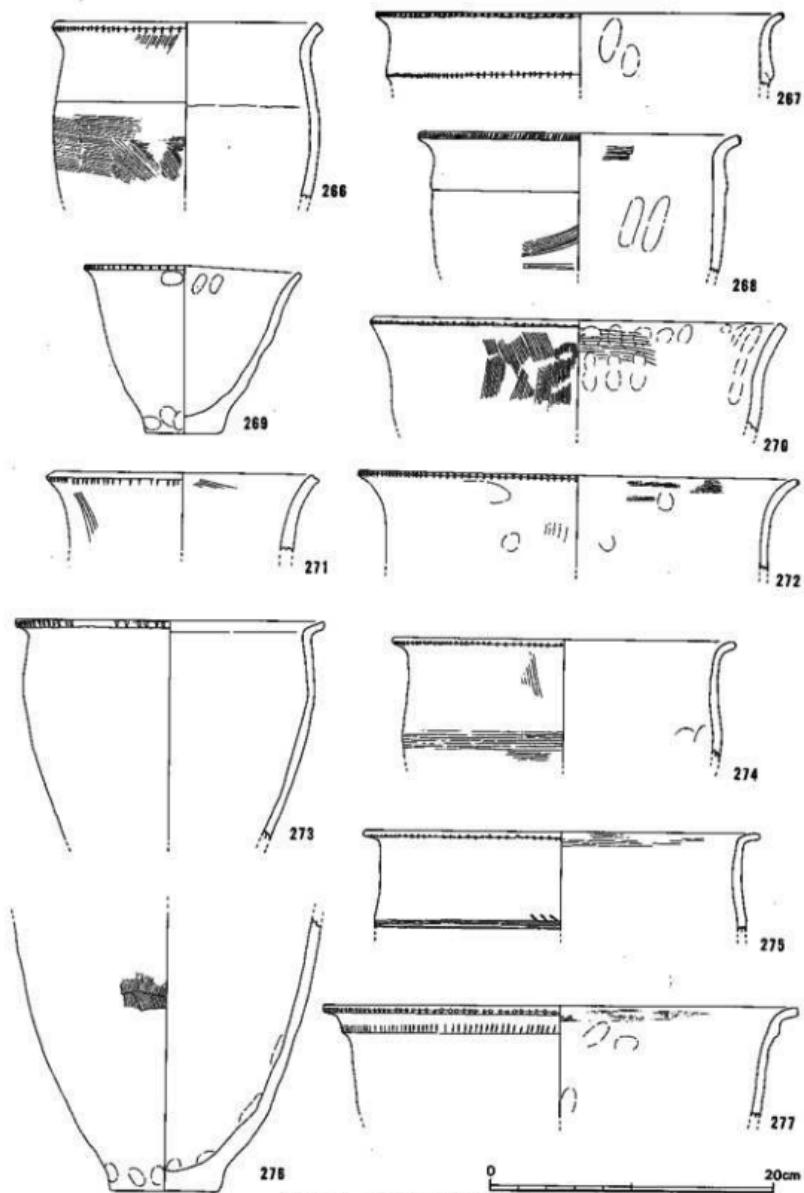
第199図 第VI・VII層出土遺物



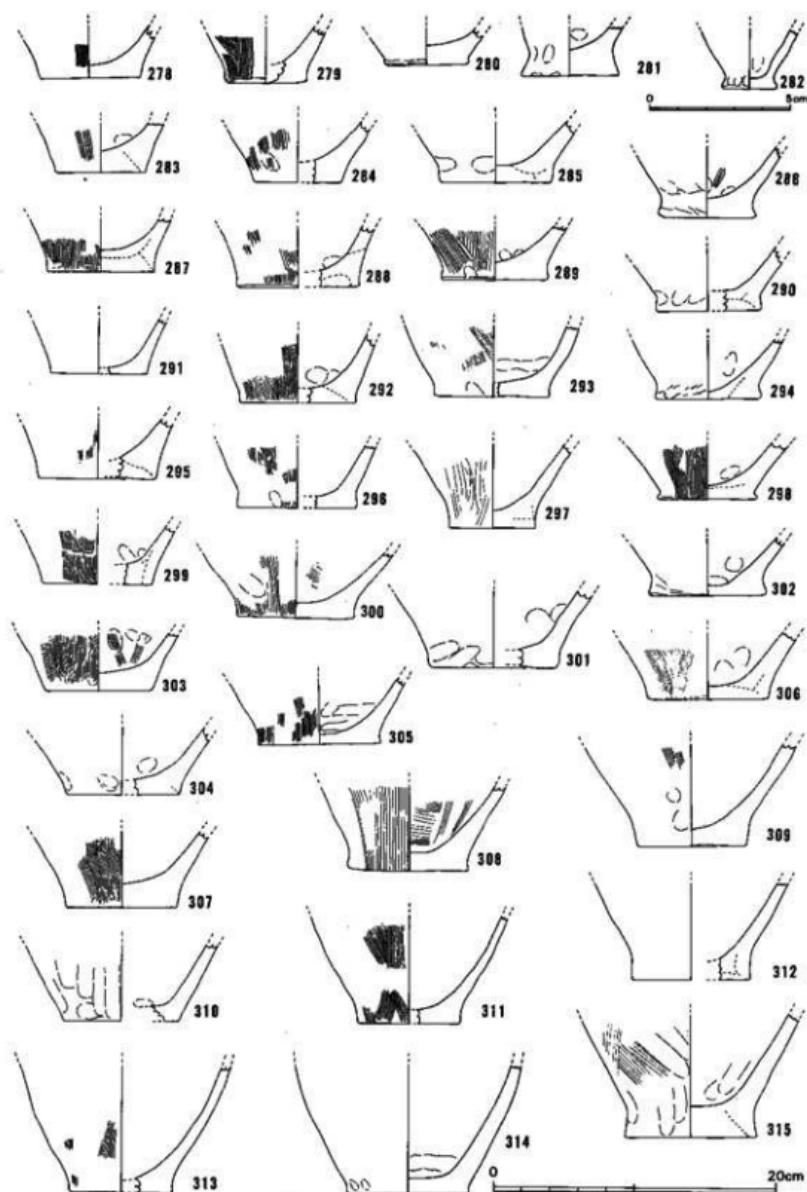
第200図 第VI・VII層出土遺物



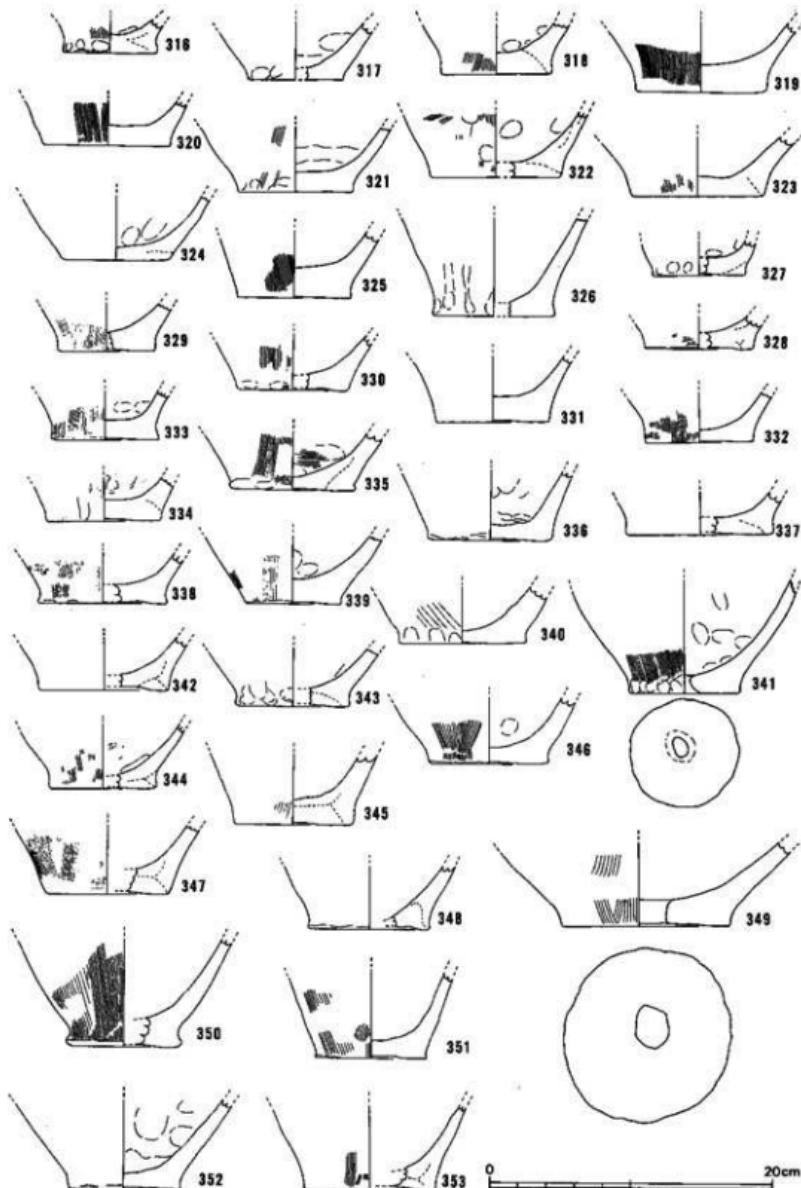
第201図 第VI・VII層出土遺物



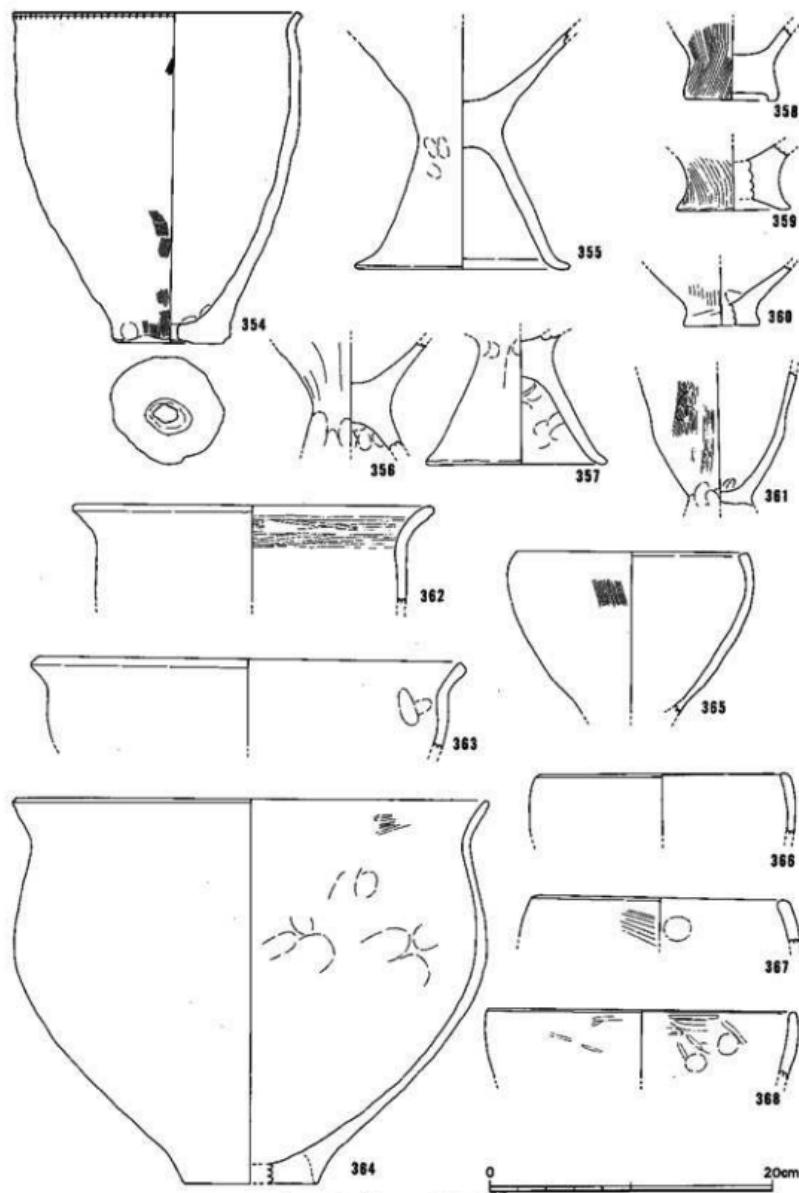
第202図 第VI・VII層出土遺物



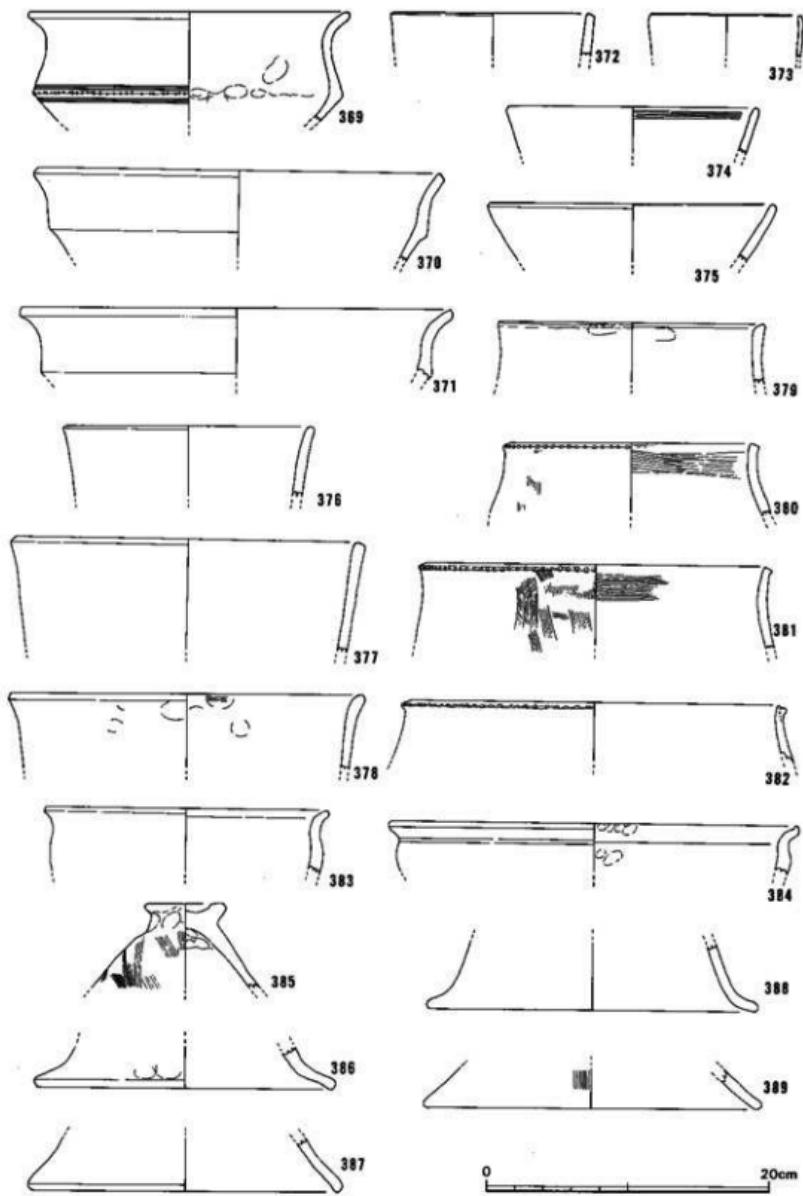
第203図 第VI・VII層出土遺物



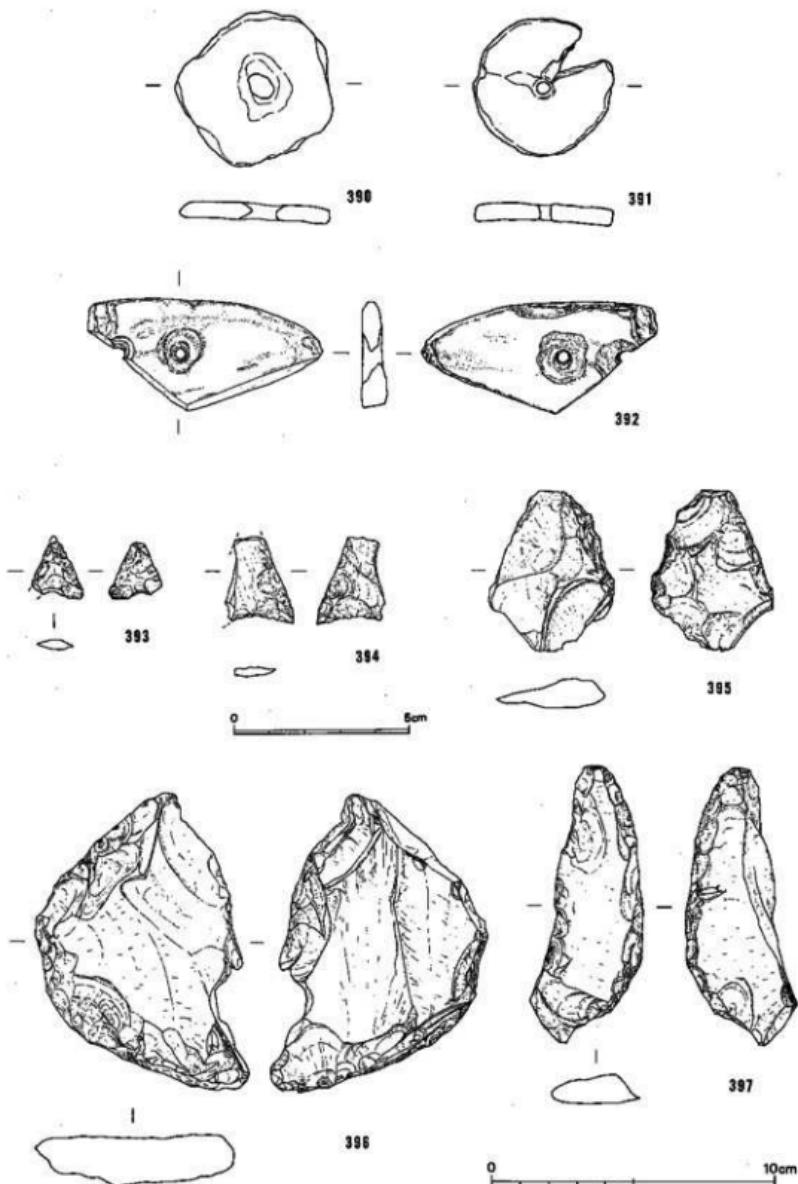
第204図 第VI・VII層出土遺物



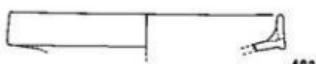
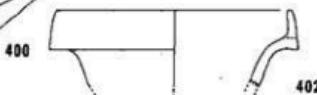
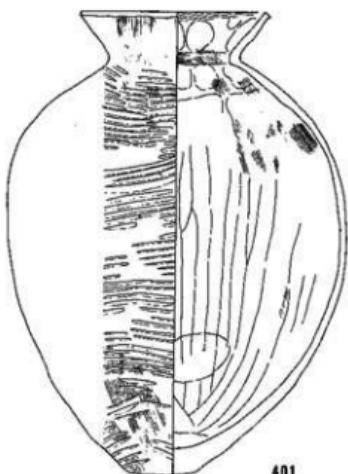
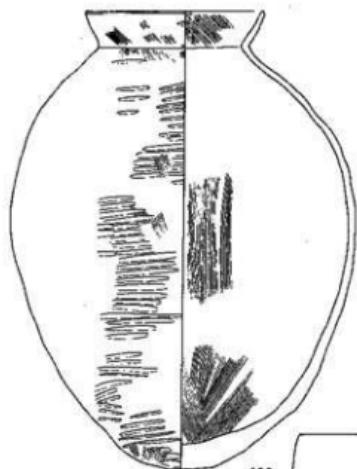
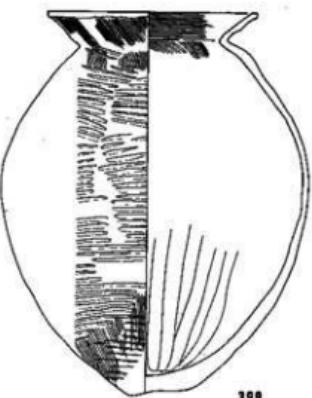
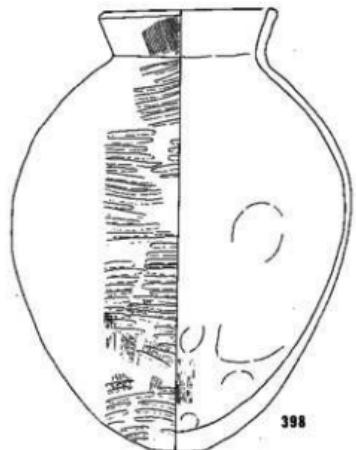
第205図 第VI・VII層出土遺物



第206図 第VI・VII層出土遺物

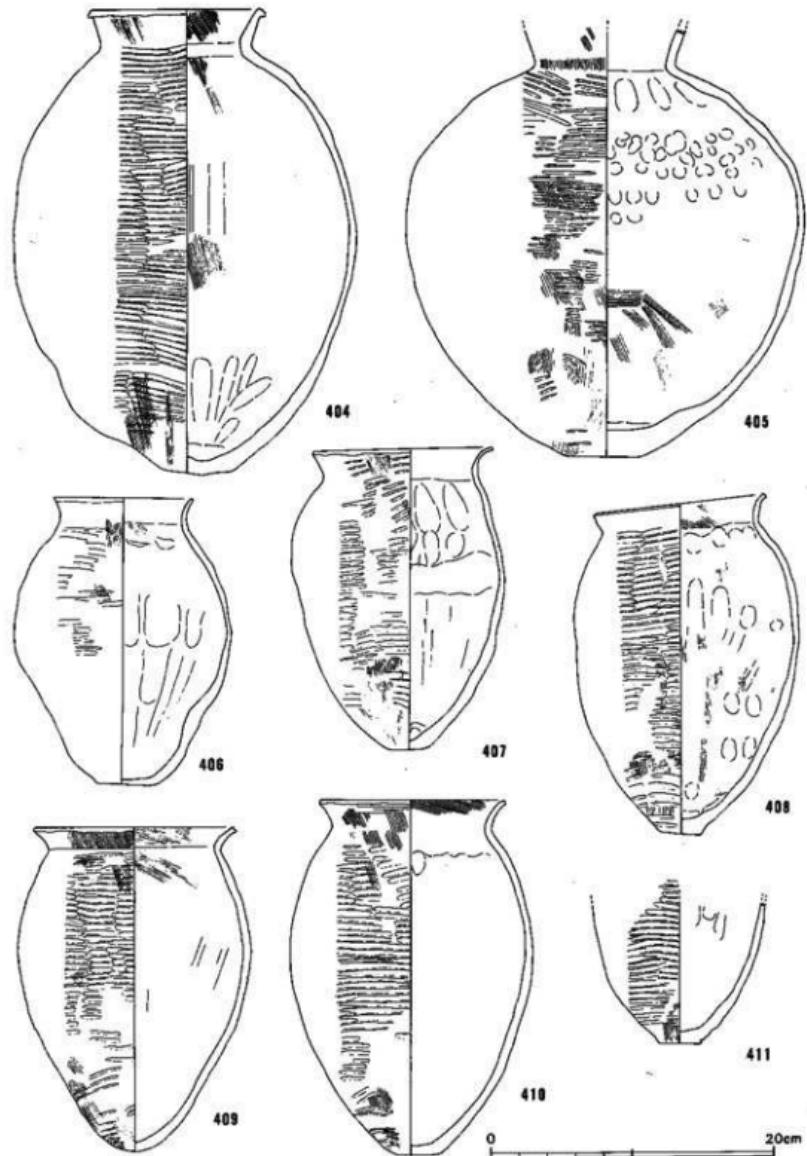


第207圖 第VI・VII層出土遺物

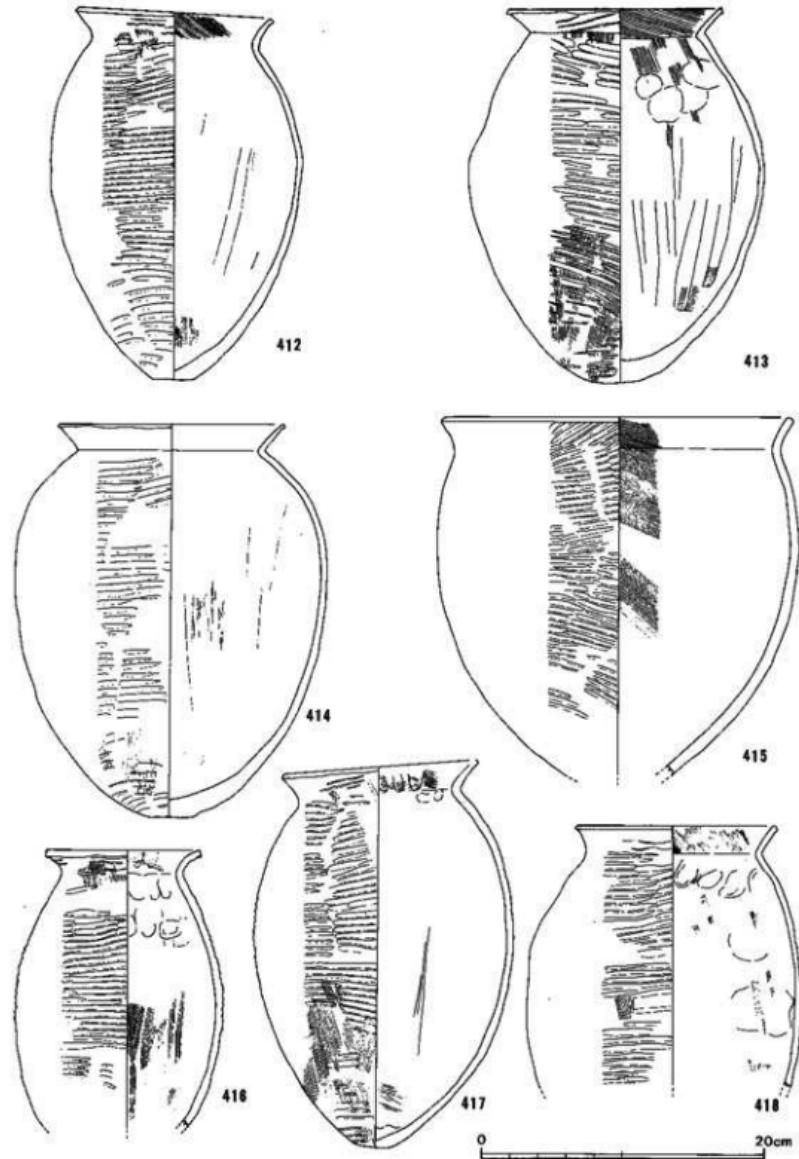


0 20cm

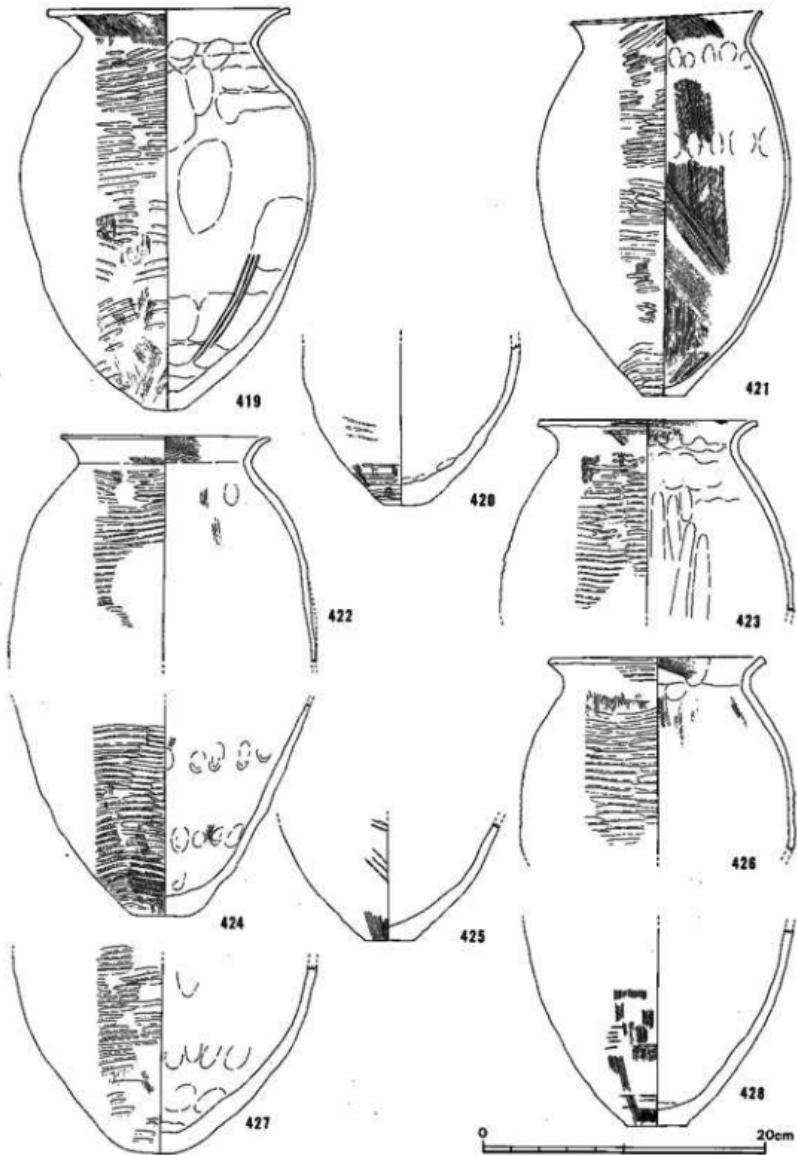
第208図 ST 1 出土遺物



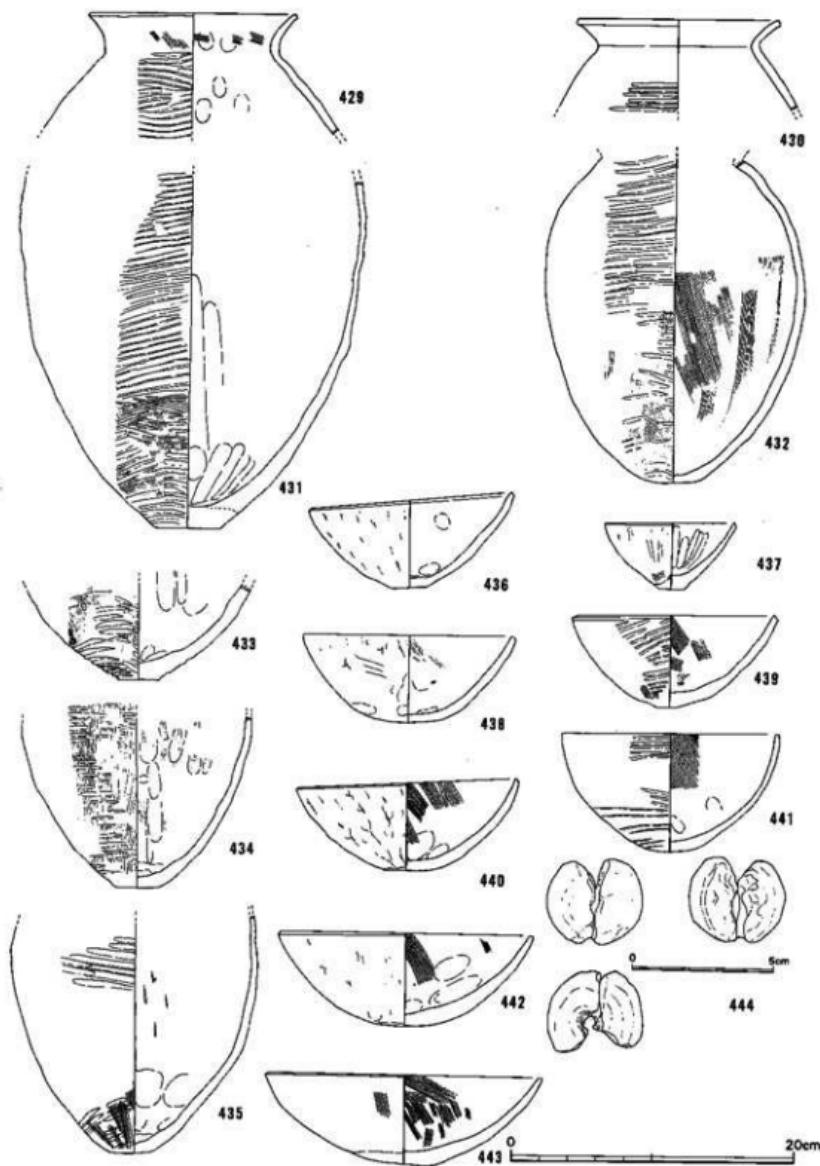
第209図 ST 1 出土遺物



第210図 ST 1出土遺物



第211図 ST 1 出土遺物



第212図 ST 1 出土遺物

### 執筆分担

1. Loc. 16 森田
2. Loc. 25 出原
3. Loc. 15 森田
4. Loc. 17 下村
5. Loc. 18 廣田
6. Loc. 12 島崎富規（調査補助員）  
下村

高知空港拡張整備事業に伴う  
埋蔵文化財発掘調査報告書

田村遺跡群 第2分冊

本文II

1986年3月31日

編集・発行 高知県教育委員会

印 刷 中央印刷株式会社